

掲示板の記事全件表示

## 「小さき声」 掲示板

[Reload](#)

[武蔵野の四季](#)(写真撮影 ガラクタ箱さん)



松本馨さんからのメッセージ

[「小さき声」\(復刻版\)](#) (読書会資料)

Link

[東條耿一著作集](#) : [詩集\(pdf\)](#) [晩年の手記\(pdf\)](#)

[プロセス日誌](#) [桃李歌壇](#) [しゅうさんHP](#) [高田さんHP](#)  
[晴読雨読](#) [エリカさんHP](#) [アバ音楽の森](#) [図書館友の会](#)

投稿者

メール

題名

内容   <IMG>タグが利用可能です。(詳細)

URL

[ [ケータイで使う](#) ] [ [BBSティッカー](#) ] [ [書き込み通知](#) ] [ [teacup.コミュニティ](#) ]

投稿募集! スレッド一覧

[スレッド作成](#) [他のスレッドを探す](#)

[1](#) | 《[前のページ](#) | [次のページ](#)》

**百首歌集「花ほととぎす」をWEB出版しました** 投稿者: [田中 裕](#) 投稿日: 2004年12月20日  
 (月)22時12分10秒

[返信・引用](#)

百首歌集 6100-6200  
 「花ほととぎす」をWEB出版しましたのでどうかご覧下さい。

[花ほととぎす html版](#)

または

[花ほととぎすpdf版\(縦書き\)](#)

をご覧下さい。表題は れん様 の巻頭歌から戴きました。

[編集済](#)

**田中さん、ご指導をお願い致します。** 投稿者: [昭子](#) 投稿日: 2004年12月24日(金)10時26分30秒

[返信・引用](#)

田中さん、ご無沙汰いたしました。寒くなりましたね。  
 昨日のわたしのHPの「日記」に、昨日偶然に撮れた「冬の虹」の写真と共に、久しぶりに俳句をつけました。実はわたしの病氣中にメールで毎日詩を送り続けて下さった友人がいます。以前からこの友人の詩の感性との共有部分が多くて、ともに歎き合うことはありました。この俳句は「窓」を通して彼は外からの視線、わたしは内からの視線で「同じ風景」を書いたという作品があり、「奇跡」のような出来事を歎き、それを俳句にしたものです。「冬の虹」の季語はその歎きを託したつもりです。

前書きが長くなりました。この句の「せしや」という言葉使いに自信がもてないのです。いかがでしょうか？

**句の感想です** 投稿者：田中 裕 投稿日：2004年12月24日(金)12時33分38秒

[返信・引用](#)

詩的センスに乏しい私如きに、指導などとてもできませんが、傍目八目ということがありますから、句の感想を申し述べます。高田さんの日記から写真をお借りします。



玻璃ごしにくちづけせしや冬の虹

という例句ですが、「くちづけせしや」は「くちづけをしたのか」の意味になります。文法上は問題ないのですが、「せし」の「し」は連体形なので、その動作の主体が、直後にある「冬の虹」であるかのような感触があります。

「冬の虹」が口づけをするというのでは、やはりピントこない。かといって、「冬の虹」に感動した作者が、その虹にガラス越しにくちづけをするというのも、どうも直截すぎて感心しません。虹はむしろ何ものかの口づけの跡、祝福のしるし、ととるべきでしょうね。

「冬の虹」を見た率直な驚き、室外に出ることのかなわぬ作者が、何ものか、人間の意志をこえる大いなるものの祝福を感じ、その「彼」と「ガラス越し」に「くちづけ」を交わしたということが句の趣意だと思いました。

[編集済](#)

**ありがとうございました。** 投稿者：昭子 投稿日：2004年12月24日(金)17時23分50秒

[返信・引用](#)

田中さん、俳句を作る時に現代詩を主体に書いているわたしが一番不安なのは「せしや」などという言葉を使う時です。575におさめるためには、そのような言葉をあえて使うことになりますね。詩として表現しようとすれば……

「窓の外にいる彼」と「窓の内にいるわたし」はガラス窓越しにくちづけをしました。  
 美しい冬の虹よ。

……ということになるのですが、これでよろしいのですか？

声枯れやアダムのりんごなき身にて

これは、清水昶さんから「声が出なくても書けるだろう。」と脅迫（笑）されて書きました。

[編集済](#)

**おはようございます** 投稿者：田中 裕 投稿日：2004年12月25日(土)13時03分8秒

[返信・引用](#)

昨夜は深夜ミサがあったのですが、どうも風邪がぶり返して声が出ませんので、大事をとって欠席、家で静かな聖夜を迎えました。





[編集済](#)

**12月の画帳** 投稿者：とうなす 投稿日：2004年12月26日(日)14時43分39秒

[返信・引用](#)

田中さん、お風邪は如何ですか。私も風邪で家に籠っています。  
 こういう時こそ俳句と、12月の画帳の兼題、大根を何とか詠んでみました。  
 拙句ですが、あの、干し大根の画像は、印象の強い作品でしたので。

- |                |    |
|----------------|----|
| ・茶柱の立ちて佳き日や干大根 | 文枝 |
| ・治癒力の腹の底から干大根  | 文枝 |
| ・久々の便りは喪中大根煮る  | 文枝 |
| ・大根に主の貫禄直売所    | 文枝 |
| ・赤ん坊をあやす仕草や土大根 | 文枝 |

皆様様も、作品投稿してくださいませ。

**Re: 12月の画帳** 投稿者：田中 裕 投稿日：2004年12月26日(日)16時35分34秒

[返信・引用](#)

とうなすさんから、[12月の画帳「大根」](#)に寄せて俳句を投稿していただきました。皆様も  
 どうか、俳句・短歌・五行歌・詩など自由にお寄せ下さい。

[編集済](#)

**12月の画帳** 投稿者：田中 裕 投稿日：2004年12月26日(日)21時08分15秒

[返信・引用](#)

れんさん

俳句六句、有り難うございました。早速、[12月の画帳「大根」](#)に掲載しました。

「蕪」は俳句では、一字で「かぶら」と読ませるのが普通ですが、れんさんの句は、何となく  
 「蕪ら」のほうが良い様な気がしたので、その儘にしました。

[編集済](#)

**まだ風邪被害なしです** 投稿者：真奈 投稿日：2004年12月26日(日)22時35分49秒

[返信・引用](#)

こんばんは

とうなすさん、れんさんの句につられて、習作のようなものですが・・・。

切干しや北関東の風の音  
 海沿ひの小屋にちりちり干し大根  
 大根を拝む手つきや桂剥き  
 風呂吹に味噌を仕立てて仲直り

そのむかし白腕（しろただむき）と歌はれし  
 乙女の大根（おほね）枕きて寝ぬるや

「寝ぬるや」は文法的におかしいでしょうか？

大根料理はなんでも好きなので、葉の部分の切落して売られているのは残念です。

サグラダ・ファミリア教会もとてもいい写真ですね。

シャロム

挨拶を交はす吾も汝も聖家族  
真青なる空透きとほる風

**1 2月の画帳 充実してきましたね** 投稿者: [田中 裕](#) 投稿日: 2004年12月27日(月)00時25分39秒

[返信](#)・[引用](#)

真奈さん

投稿有り難うございます。早速、[1 2月の画帳](#):「[大根](#)」に掲載しました。これで、短歌一首、俳句一六句となりました。投稿があり次第、追加掲載しますので、他の皆様もどうかよろしく。

>そのむかし白腕（しろただむき）と歌はれし  
乙女の大根（おほね）枕きて寝ぬるや

> 「寝ぬるや」は文法的におかしいでしょうか？

念のために古語辞典（三省堂）で確認してみました。疑問、反語、詠嘆をあらわす「や」は、原則としては、終止形・已然形に付くが、中世以後は活用語の連体形に付く例もあるとのこと。したがって文法上は問題なしです。

あとは声調として、どちらが良いかということですね。私が記憶している事例は、皆、已然形についていました。まったく個人的な感触なのですが、已然形+や のほうが、詠嘆の気持ちがよりよく表現できる様に思います。

たとえば、草田男の俳句

勇氣こそ地の塩なれや梅真白

この場合は、「地の塩なるや」では、詠嘆よりも散文的な疑問形に聞こえます。

また、建礼門院右京太夫の歌に

うらやまし戀に耐へたる星なれや年に一夜と契る心は

などがありますが、これも「星なるや」よりも「星なれや」のほうが良いと感じました。

ただ、真奈さんの歌の場合は、「寝ぬるや」のほうが、歌の末尾ということもあるし、大根のどっしりとした重量感が出て、連体形の儘でよい様な気がします。

**投稿 7句** 投稿者: [花](#) 投稿日: 2004年12月27日(月)05時40分32秒

[返信](#)・[引用](#)

俳句を命懸けに習っていた数年間がありました。爾来俳句は性に合わぬように思い捨てました。捨ててからはストンと気持ちが楽になったから不思議ですね。人様に読んでいただくようなシロモノではありませんが未明に俳句のようなものが出てきましたので投稿いたします。

ガラクタ箱さんの画像はいつもシャープで楽しみに拝見しています。

大根の首を刻んでさみしさよ  
大根と豚のバラ肉買うてこい

風呂吹や山から小僧が飛んでくる

裏山という山ひとつ大根干す

己が皺をつくづく眺め干大根

はらからの遠くにありて蕪汁

大根を食べ尽くしたら死んでもいい

**どうもありがとうございました** 投稿者: [真奈](#) 投稿日: 2004年12月27日(月)12時10分6秒

[返信](#)・[引用](#)

「寝ぬるや」でよろしいとのことではっきりとしました。「寝ぬれや」ではなにか間延びして聞こえます。

大根の句いろいろ出て素晴らしいですね。

大根＝ダイコンという語感としてはダイナミックですが、やまとことばの「おほね」というのも生命感がおおらかに感じられてなかなかいいと思います。

「切干」になると寒い冬の保存食をつくる生活感が滲み出てくるようですね。

東條耿一の「一碗の大根おろし」は彼の詩のなかで、最高だと思います。

日夜 病菌の裡に住まへど  
かくいのちの在るは嬉しからずや  
貧しき一碗の大根おろしを愛ずるは幸ひならずや

もう一つ、建礼門院右京大夫の歌でお伺いしたいのですが・・

うらやまし戀に耐へたる星なれや年に一夜と契る心は

私の手元の岩波文庫では

浦やまし恋に堪へたる星なれやとしに一夜と契る心は

となっていて、何故「浦」やまшинаのかと首をひねっています。七夕の連吟になっているので、天の川と関係あるのかな・・とも。

**年の瀬** 投稿者：[田中 裕](#) 投稿日：2004年12月27日(月)17時36分53秒

[返信・引用](#)

年の瀬や白妙の房千本より



photo by ガラクタ箱さん

>花さん

俳句7句、投稿頂き有り難うございます。[12月の画帳「大根」](#)に早速、掲載しました。

>真奈さん

「一碗の大根おろし」は、全生詩話会の詩人達にも、とくに強い印象を与えた様で、戦後になってから、東條耿一の詩のことを回想される方が、代表作として言及しています。皆様も、もし、東條耿一詩集のアンソロジーを編むとすれば、どれを選ばれるのか、教えて頂ければと思っています。

>私の手元の岩波文庫では

> 浦やまし恋に堪へたる星なれやとしに一夜と契る心は

>となっていて、何故「浦」やまшинаのかと首をひねっています。七夕の連吟になっているので、天の川と関係あるのかな・・とも。

「うらやまし」の「うら」を「浦」と書くのは、掛詞ですね。おっしゃるように天の川も水辺で縁がありますが、それだけでなく「壇の浦」の「浦」を掛けているのでしょうか。建礼門院右京大夫集の歌は、壇の浦でなくなった平資盛への戀が背景にありますから。

似た様な掛詞として、大蔵卿匡房の歌に（詞花卷10雑下）「うらやましくもいづる月かな」の「うらやましくも」をわざわざ「うら山しくも」と書いて、月の出る「山」に掛けた事例があります。

[編集済](#)

**「疎句付け」について** 投稿者：[田中 裕](#) 投稿日：2004年12月28日(火)12時38分22秒

[返信・引用](#)

寺山修司の短歌に、

マッチするつかの間海に霧ふかし身捨つるほどの祖国はありや

というのがありますが、この短歌は三句切れで、上の句（575）と下の句（77）が意味的に独立しています。上の句

マッチするつかの間海に霧ふかし

は叙景の句で、北国の夜の海を感じさせます。マッチをする動作、瞬時の光りの中に浮ぶ霧の

海岸、作者の外に広がっている情景の一瞬の有様を写生したものです。「霧」という季語を含み、575で纏まっていますから、このまま俳句であるという人もいるかも知れません。（このままでは句の中に「切れ」がないので、良い俳句ではありませんが）

一般に、三句切れの短歌の場合、下の句77の内容が、上の句につきすぎると、短歌は俳句（五七五の長句）でもいえることを、単に引き延ばした様な冗漫な感じになります。

寺山の短歌の下の句  
身捨つるほどの祖国はありや

は、作者の外部に広がっている情景ではなく、作者の内なる心の表現です。この「や」は反語です。身を捨てる様な祖国日本はありはしない、という意味ですから、単独に77だけを取り出せば、上の句とは意味的に独立している様に見えます。

しかし、上の句と下の句をあわせて、一つの短歌として読んでみますと、上の句だけでも、下の句だけでも表現されなかった、新しい意味が、上の句と下の句の対比のなかに、創造されていることに気が付きます。

敗戦後の若者の心情、お国のために身を捨てることを正義として教育されてきた少年達の心が、上の句の身体的動作と、外なる自然の情景を借りることによって、具体化されて見事に表現されています。それと同時に、上の句も又、単なる自然詠ではなくなり、作者の心の象徴的な表現に変貌します。戦前の愛国心の本になっていた大義名分が敗戦によって否定され、価値観の転倒によって、何が善であり何が悪であるかが見えなくなり、これからさき如何に生きるべきか、将来の展望がなくなった戦中派の若者の暗澹たる心が、読者に切々と伝わってきます。

このように、短歌の上の句と下の句が、それぞれ意味的には独立した一章を構成しているにもかかわらず、二つの句を統合するときに、それぞれが深いところで響き合い、歌の世界に新たな意味が形作られるときに、上の句と下の句の繋がりを「疎句付け」といいます。

「疎句付け」という言葉自体は、伝統的な歌論・連歌論の用語です。新古今集の時代に、三句切れの和歌が多く詠まれる様になりますが、そういう和歌の場合は上の句と下の句が「疎句付け」の関係になければならないということが自覚されました。この疎句付けの和歌の上の句575と下の句77を別の人が詠んで、鎖の様に歌を連ねていくことから連歌が生まれましたので、「ささめごと」という連歌論書を表した室町時代の歌人、心敬は「親句は教、疎句は禪」といって、「疎句付け」こそが連歌の長句と短句の附合の極意であると述べています。

ところで、連歌のなかでも、特に発句は、ただの575（平句＝平板な一章立ての句）とは区別され、五七五のなかに切れを持ち、疎句表現を内包させることが要求される様になります。発句は一句で、五七五十七七の附合の二句分に匹敵する「丈の高さ」が要求され、そこから、一句だけで独立して鑑賞される「俳句」が生まれました。

前に引用した草田男の俳句

勇氣こそ地の塩なれや梅真白

の場合は、「勇氣こそ地の塩なれや」と「梅真白」の関係が疎句付けです。

[編集法](#)

**一年を感謝して。** 投稿者：しゅう 投稿日：2004年12月28日(火)16時05分38秒

[返信・引用](#)

2004年もあと、数え日となりました。  
今年ほど感銘深い年はありません。東條耿一詩集では、田中さんと共同編集という栄に恵まれ、ありがとうございます。まだまだ「東風吹かば」落ち着きませんが、ずっと落ち着くことはないかも知れません・・・、しかし、緊張感があってそれも良しと言うことで、それを逆に楽しんでおります。  
ほんとうに、田中さん、いろいろ一年間、ご教授ありがとうございました。  
2004年の一年間の、私の作句を30句にまとめてみました。  
田中さん、皆様、ご意見を、どんな意見でも、東風で吹き落とされるのは慣れておりますので、こんなの俳句か？とそんなご意見でも頂けたらうれしく思います。

ドキュメント オレンジゼリー的湯冷め  
透けてゆくことが抵抗白菜煮る

アネモネや消えしアンネのまあるい瞳

きらきらとしたり泣いたり二月尽

旅先のさっとハンカチうすずみに

春愁のやわらかい穴探しおり

試供品を顔に置いている毛虫かな

出会いからやつとここまで白躑躅  
停止線さつとアジアの天然水  
とうがらし好きそうな人煙りをり  
地面ふわりくしゃみの出そう竹の子  
たんぽぽの絮日輪の飛沫飛ぶ  
粽食みクスクス戦ぐ日本人  
五月雨をあいつと呼ぼうマラソンランナー  
香を焚くようこんこんとシャワー浴ぶ  
遠滝や変らない写真懐に  
河骨や二階の人へ往復す  
わたくしはいいえわたくし蛍袋  
大文字草老人は遊び學である  
夏カラス吟遊詩人のしゃくりです  
草稿を塩漬けにして花氷  
考えるヒントが欲しい糸瓜棚  
コスモスの溶け出すような地面なり  
浜茄子や戦争をしてとんでもない  
黄落踏むきつねの国の夕まぐれ  
あげはちょうここにいるってふしぎです  
十月はカラカラヒイヒイと肩が鳴る  
海峡のにぶき光りよ咳の人  
楯の火や村山織を袋にす  
景品は猫のみやげに年の暮れ

**年用意** 投稿者：[田中 裕](#) 投稿日：2004年12月29日(水)11時11分22秒

[返信・引用](#)

今日は、年用意で皆様忙しいところでしょうね。私も、漸く大掃除を終え、今は乱雑なる吾が周辺のもの片づけている最中です。年賀状書きはそれからです。

>しゅうさん

今年の俳句作品を読ませて頂き、有り難うございました。最も印象的だったのは

わたくしはいいえわたくし蛍袋

でした。これはユニークな俳句ですね。「蛍袋」からは、ひかえめな、それでいて、口ごもりつつも、しっかりと自己を主張できる古き時代の日本女性を連想しましたが、この句で面白いのは、助詞「は」の微妙な働きと、語り手と対象との関係です。

「わたくしは」と言ってしまうと、助詞「は」の働きによって、語り手の「私」と対象である蛍袋のあいだに距離感が生まれます。「(他の人はともかく)私は蛍袋が好きだ」とか「私は自分が蛍袋の様な気がする」とか、その意味をどう解釈するにしても、とにかく、他との区別や、あるいは対象との一定の距離感を前提とした上で、作者は蛍袋なるものを表現することになります。ところが「わたくしはいいえ」でそういう私のあり方が否定される。そして「いいえわたくし」で、作者は突如として「蛍袋」に変身し、「蛍袋」として語り始める。そういう語り手の変身(メタモルホーゼ)ないし転換による対象との一体感が面白いと思いました。

あげはちょうここにいるってふしぎです

この句の場合も、揚羽蝶を思いも寄らない場所でみかけたという意味ならば、作者と蝶々の間に距離がありますが、同時に、作者自身が揚羽蝶に変身して、揚羽蝶になって語るという趣向がみられます。今此処に存在することの不思議さを、作者と、作者と出会った揚羽蝶が共有し

ている、その瞬間を捉えた句です。  
もうひとつ、これはしゅうさんの句だなあ、と感心したのが

地面ふわりくしゃみの出そう竹の子

記憶は朧なのですが、ガラクタ箱さんが今年の春に撮られた竹の子の写真の思い出しました。



photo by ガラクタ箱さん  
(クリックすると大きくなります)

[編集済](#)

---

**寒紅梅** 投稿者: [田中 裕](#) 投稿日: 2004年12月29日(水)10時47分50秒

[返信・引用](#)

>ガラクタ箱さん

旧年中はお世話になりました。  
寒紅梅の写真、良いですねえ。正月に実物のほうも拝見します。



ひととせを感謝の祈り寒紅梅

[編集済](#)

---

**ありがとうございました。** 投稿者: [しゅう](#) 投稿日: 2004年12月29日(水)12時04分5秒

[返信・引用](#)

田中さん、3句を取り上げて、丁寧に鑑賞をして頂きありがとうございました。  
お礼かたがた、一句だけ、自解をさせていただきます。

あげはちょうここにいるってふしぎです

この句は、池の面を見ながら、ふと自分がここにいるのはどうしてなのだろう？、なんでこんなところで俳句を作って居るんだろうという思いが湧いてきました。「ここにいるってふしぎです」という中下ができて、さて、どんな季語か言葉を上に置いたら、自分のあの感覚が出るのだろうかといういろいろ考えて、「あげはちょう」になりました。

存在の揺らぎ、高揚感と共に揺らぐそんな感じが、句の中から感じてもらえるとうれしいというのが作者の勝手な弁です。

蛍袋も、あげはちょうも、強いて言えばアニミズム、同一感なのだろうと思っています。  
私の自解は、田中さんが、鑑賞をしてくださった感じからすると、がっかりさせてしまうかも知れません。

でも、ほんとうに、鑑賞をありがとうございました。

よいお年を。来る年もよろしくお願いたします。

### しゅうさんの俳句 1 投稿者：とうなす 投稿日：2004年12月29日(水)12時24分10秒

[返信・引用](#)

しゅうさんへ  
今年の30句読ませていただきました。  
そこで、文学的鑑賞は出来ませんが、私なりに、曾って句会で経験した、自由鑑賞式で一言メッセージを付けさせていただきます。  
俳句は作家の手を離れたら、様々な人間模様へと、展開しますので、見当違いが沢山あるかと思いますが、東條歌一詩集編集への感謝を込めて送ります。

- ・ドキュメント オレンジゼリーの湯冷め  
オレンジゼリーの湯冷めに、しゅうさんの発見と混沌があります。  
どんな、ドキュメントだったのかなと想像力を膨らめます。
- ・透けてゆくことが抵抗白菜煮る  
鍋でしょうか、それでも、白菜を次々足していくのです。  
透けていくことに、己を重ねているような気がします。
- ・アネモネや消えしアンネのまあるい瞳  
一句にアネモネあれば、とにかく採ってしまう、アネモネ好き。  
アンネの円らな瞳との取り合わせがいい。アネモネにはイスラエルの原風景があります。
- ・きらきらとしたり泣いたり二月尽  
この頃になると、若者は新しい進路に向かって旅立ちます。  
必ずしも、自分の希望が叶わない者もあるでしょう。それぞれの旅立ちを、教師として、暖かく見守り、祝福しているのでしょうか。とて気持ちの良い俳句です。
- ・旅先のさつとハンカチうすずみに  
本人でなければ、わからない俳句ではないでしょうか。凡人なので
- ・春愁のやわらかい穴探しおり  
好きな俳句です。私もこんな穴があったらいいのになあ。
- ・試供品を顔に置いている毛虫かな  
分からない俳句、大体、毛虫は嫌いです。
- ・出会いからやつとここまで白躑躅  
BBSの出会いも、ここまでくるのに月日がかかります。白躑躅がいい。  
いろいろありました。しかし、「天の下の全ては、時にかなって美しい」です。
- ・停止線さつとアジアの天然水  
どうして、アジアなのかしら。海外旅行のときかな？  
さつとで、瞬間を捉えて上手い俳句です。
- ・とうがらし好きそうな人煙りをり  
煙をりがわからない。タバコ、そう葉巻ですか。これも海外？
- ・地面ふわりくしゃみの出そう竹の子  
好きな句です。これが海程の個性でしょうか。単語として字余り、字足らずですが、  
全体として足りている。不思議な句。  
私でしたら、「竹の子の地面ふうわりくしゃみかな」と作ると思いますが、力が足りません。
- ・たんぼぼの絮日輪の飛沫飛ぶ  
たんぼぼと日輪とのコントラストが優しくあたたかい。メルヘンの世界。
- ・粽食みクスクス戦ぐ日本人  
分からない俳句。戦ぐの表現が理解できません。文法に弱い私です。
- ・五月雨をあいつと呼ぼうマラソンランナー  
五月雨を「あいつ」と捕らえたところが、ランナーの気持ちを代弁しています。  
どこかのマラソン大会に参加しての出来事でしょうか。

投稿データが大きすぎの、エラーが出たので、2回に分けてみます。

[編集済](#)

### しゅうさんの俳句 2 投稿者：とうなす 投稿日：2004年12月29日(水)12時31分38秒

[返信・引用](#)

しゅうさんへ 俳句鑑賞 続き

- ・ 香を焚くようこんこんとシャワー浴ぶ  
こういう発想が、しゅうさんらしいと思いますが、兜太先生が喜びそうな俳句です。
- ・ 遠瀧や変らない写真懐に  
平凡だけれど、好きです。
- ・ 河骨や二階の人へ往復す  
頼りない、河骨の花も好きな花です。  
二階に風邪引きさんでもいるのでしょうか、本当に何回も往復していると、腰が碎けて  
しまいそうです。
- ・ わたくしはいいえわたくし蛭袋  
田中さんが、微に入り鑑賞されたので、パスします。
- ・ 大文字草老人は遊び學である  
大文字草と、生き字引のような老人との取り合わせが、いいです。
- ・ 夏カラス吟遊詩人のしゃくりです  
なるほど、そうですか
- ・ 草稿を塩漬けにして花氷  
この原稿、いつになったら蘇るの。塩漬けにしたり、氷で冷やしたり。  
賞味期限にも限度があります。
- ・ 考えるヒントが欲しい糸瓜棚  
いつか、ガラクタ箱さんの掲示板で、しゅうさんの、糸瓜の見事な写真拝見しましたが、  
心に残るものがあります。  
「困った時の神棚」でなくて。「糸瓜棚」ですね。子規もからみますか
- ・ コスモスの溶け出すような地面なり  
溶け出したら嫌ですね。コスモスって、花だけみていると、何とも癒し系ですが、  
茎を伝わって、地面に近づくにつれてだんだん、弱弱しく、支えてやりたくなります。  
蛇足ですが、毎年、地域のコスモスが終わると、欲しいだけ摘むことができます。
- ・ 浜茄子や戦争をしてとんでもない  
浜茄子は北海道の道花、戦火は海の向こうに今も広がっています。  
[とんでもない] に作者の祈りがあります。
- ・ 黄落踏むきつねの国の夕まぐれ  
きつねの国、ここも北海道でしょうか。人馴れした、キタキツネの姿が、影絵の世界  
へ案内してくれます。
- ・ あげはちょうここにいるってふしぎです  
大好きな俳句です。万物に云えることですが、羽がある、アゲハチョウが止まった  
瞬間は、やはり不思議、一期一会に通じます。
- ・ 十月はカラカラヒイヒイと肩が鳴る  
しゅうさんは、擬声語を使うのが上手いけれど、何故十月なのか、分かりません。  
カラカラヒイヒイは、擬声語が重なりこんがらがってホイです。
- ・ 海峡のにぶき光りよ咳の人  
これも、北海道かな、海の向こうにはいつもドラマがあります。  
海岸に一人、佇んでいる詩人が見えます。
- ・ 楯の火や村山織を袋にす  
家庭科の先生のしゅうさん、織物もするのかな。流行の裂き織りでしょうか。  
楯の火で、昔話の世界へ導かれます。
- ・ 景品は猫のみやげに年の暮れ  
掲示板で、福引に当たりのことが書き込まれていたような気がします。  
俳句をしていると、こうした思いがけない出来事を、5. 7. 5に残すことが出来、  
よかったと思います。この句、勿論好きです。

以上、拙い鑑賞ですが、こんな読者もいるのだと、受け止めてください。  
それから、大根の句、まだ間に合います。期待しています。

[編集済](#)

**東條耿一詩集アンソロジー** 投稿者：とうなす 投稿日：2004年12月29日(水)14時01分12秒

[返信・引用](#)

田中さま いろいろありがとうございました。  
東條耿一詩集のアンソロジー 改めて読み直し、選んでみました。  
作品としての優劣は別にして、私の心を捉え、かすかにでも、脳裏に残っている詩です。

東條耿一詩集 アンソロジー

東條 環名の作品より

- ・雪達磨（童謡）
- ・子供
- ・花言葉
- ・散歩

東條 耿一名の作品より

- ・ゆふぐれ
- ・晩秋
- ・白鳥
- ・微笑の詩
- ・一碗の大根おろし
- ・木魚三題
- ・療養日記 爪を剪る
- ・閑雅な食欲 療養日記その三
- ・天路讃仰
- ・癩者の父
- ・枯れ木のある風景
- ・遺稿 訪問者

どれを一番と云えませんが、東條のいと小さい者への視線をこれらの作品に感じました。又、「訪問者」に代表する、キリスト者としての、内面の叫びを読み取りました。

それから、「疎句付け」について を拝読いたしました。  
専門的に学ぶ機会がなかったので、とても、よかったです。  
中でも、中村草田男の「勇氣こそ地の塩なれや梅真白」の引用を感謝します。

**どうぞ良いお年を！ いろいろ有難うございました。** 投稿者：真奈 投稿日：2004年12月29

[返信・引用](#)

日(水)15時18分0秒

年の瀬とはいい言葉ですね。しかし最後まで災害に見舞われた年の瀬、乗り切っていくのも大変ですが。

今年は東條耿一という詩人に出会え印象深い年でした。  
東條が活動した昭和8年～17年間の詩やエッセイを中心軸として、北條民雄や三好達治、萩原朔太郎、明石海人といった詩人・歌人の作品が次々ネットに紹介され、とても参考になりました。ほんとうにハードな作業のことを考えると感謝にたえません。

東條耿一という一人の詩人の発展を追っていくことと、この時代の潮流がファシズムに押し流されていった背景と丁度重なり合っていて、この特異な時代に生きた（生きざるを得なかった）若い群像の苦悩が行間からひしひしと伝わってくるものがありました。またそれは、今日の日本にも通奏低音のように流れているもののように思えます。

東條耿一詩集のアンソロジーを編むとすれば・・・  
先に「一碗の大根おろし」が最高と言いましたのは、この詩が東條の大きな転回点になっているのではないかと思われるからです。この詩にはあらゆる虚飾を脱ぎ去った生身の東條がいる、悲哀も喜びもユーモアもアイロニーもすべて血の通った言葉となって伝わってきます。「大根おろし」と渾然と一体化したわたし、このわたしのパトスを日常の言葉で言い切ること、これが詩の「思想」と言えるものではないでしょうか。これも詩作の上での意匠というならば、意匠を思想として獲得した、血肉化した、ということでしょうか。この思想は東條の場合はカトリック信仰に裏付けられ、なんとも言えないある種の「向日性」となって朔太郎にはなかった力強さを感じさせます。

「樹々ら悩みぬ」には明らかに朔太郎の「竹とその哀傷」の語調と似通ったものがあり、朔太郎の「慷慨調」はその激しさと共に東條にも影響を与えていたのでしょうか、やがて、達治や朔太郎からも離れて彼独自の詩境に達していったと思います。それは「閑雅な食欲」や「伴侶」で、彼らの意匠をまといつつも、東條自身の現実を彼自身の言葉で歌っていることでも明らかです。この彼の現実の「場所」に立つということがあるはじまりであった、これは過去の北條との交流で学んだ社会主義思想やアナキズムが根底にあったことも考えられると思います。

昭和12年に発表された朔太郎の痛恨の一篇と言われる「南京陥落の日に」や達治の17年の「捷報至る」といった詩を彼はどう読んだでしょうか？聖戦遂行の大合唱のなかで、まして療養所内の教化政策のしめつけの中でどんな詩を書けばいいのか・・・  
詩集は昭和16年の「山桜」2月号の『枯れ木のある風景』で終わっています。ここから17年11月の遺稿である『訪問者』まで、どんな詩を書き溜めていたか。私の想像ですから間違っているかもしれませんが、ひょっとして発表できない非戦的な詩かそれとも発表したくない戦争賛歌か・・・いずれにしても彼にとって燃やされなければならないもの、そして神に捧げられひとときの暖に供せられるべきものであった。時流に迎合できないならば、沈黙するほかないとき、詩を書かないことが消極的抵抗であったとき、そのような時代の重さを『訪問者』から感じます。

代表作というならばこの『訪問者』になるかもしれないのですが、私は「大根おろし」の詩が好きなのです。

うまくまとまらなくてすみません。また考えてみます。

掛詞についてのご説明、よく納得が이었습니다。  
〈松〉と〈待つ〉とかは気がつくのですが、「壇ノ浦」の浦やましには思い至りませんでした。歌意は、年に一度しか逢えぬ恋によくもまあ堪えられるものよ、ということでしょうか。死してなお資盛への思いの強さが伝わってきます。

しゅうさん  
俳句30句、どれもユニークでセンスに溢れていて面白いです。選句は下手なのですが、〈わたしの選ぶ5句〉を・・

透けてゆくことが抵抗白菜煮る	(抵抗という硬い言葉と柔らかい白菜との対比)
春愁のやわらかい穴探しおり	(ややあやうい情感だけど・・)
出会いからやつとここまで白躑躅	(やつとここまで、が利いていて「白」に納得)
○わたくしはいいえわたくし蛭袋	(いいえ、と俯き加減の蛭袋が一寸眼をあげて)
◎大文字草老人は遊び學である	(漢詩みたいで雄渾、こうありがたい！)

以上、俳句素人ですので何卒ご容赦を～。

**しゅうさんの俳句** 投稿者：[E三](#) 投稿日：2004年12月29日(水)18時23分55秒

[返信・引用](#)

・ど素人の独断で、大好き=◎、かなり好き=○、好き=△ でいかせてください。

◎わたくしはいいえわたくし蛭袋  
「わたくしは」といにかけて「いいえ」の否定辞で〈わたくし〉を消去し、再び「わたくし」といったときには蛭袋との交通が成り立ち、いつの間にか“わたくし”と“蛭袋”が融通無碍であるようなところにいる。「わたくしは」の「は」で軽く切れ、その間から、即疾に一体化することへの躊躇い、あるいは含羞のような感覚が伝わってくる。

◎あげはちょうここにいるってふしぎです  
ありとある生命の連鎖の末端に、“わたくし”がいまここにいる。それって、ほんとうに不思議です。蝶はスピリチュアルなもの。だから、「たましいがここにいるってふしぎです」。

○大文字草老人は遊び學である  
[老人は遊び學である大文字草 (『海程』2004年11月号)]  
この句は改稿されて「大文字草」の位置を変更されていますね。「大文字草」を初めにもってきたことで、句におおらかさがでたのかな。私は餓鬼んちよのままで年をとりそうだけど、こういうふうな老人はいい! なりたい!

○河骨や二階の人へ往復す  
河骨の漢名は、萍蓬草。漢方では、その根茎を川骨(せんこつ)とって、健胃・強壯、止血剤として産前産後などに用いるそうだ。今ではもう自宅で出産するなんてことはないだろうけど、二階に産前産後の妊婦さん(若い妻)が寝ていて、家人(経験のない若い夫)があたふたと二階へ往復、のほほえましい図が浮かんできました。(誤読でしょうけど。)

△地面ふわりくしゃみの出そう竹の子  
[○地面ふわっくしゃみのように竹の子 (『海程』2004年8-9月号)]  
竹の赤ん坊が「ふわり」と地面をもちあげて顔を出している。ぬくい地中から寒い新鮮な外氣中に顔を出したので、おもわず「くしゃみの出そう」なのだろう。「くしゃみのように」だと、竹の赤ん坊が生まれると同時にくしゃみをして、その拍子に地面がもちあがったという感じかしら、シンクロニズムの面白さがあって、改稿前の句の「ふわっ」の語感も好きです。

△黄落踏むきつねの国の夕まぐれ  
この「きつねの国」は、太郎に見えて次郎に見えぬ国ではないかしら。黄落のなかに黄色いきつねが遊んでいる黄昏時、ふと、化かされることもありそうな、それでいて懐かしい、童話の世界が広がってくるようです。

まだまだ好きな句がありますが、この辺で勘弁してもらって；  
しゅうさんの2004年「今年のまとめ30句」には、海程神奈川合同句集第3集2004『碧』の30句から13句採られていますね。しゅうさんの「まとめ30句」選からもれたもので好きな2句：  
○置き去りにされたるころ山椒魚  
○眼疾のひっそりしたる白式部

**きつねの国のきつねは何色?** 投稿者：[E三](#) 投稿日：2004年12月29日(水)22時33分5秒

[返信・引用](#)

黄落踏むきつねの国の夕まぐれ (しゅう)

のきつねを、↓投稿では、“黄色いきつね”と書いてしまったのだけれど、それは「黄落」「夕まぐれ」の語の醸す色調に合わせてイメージしてしまったからですね。日本の説話系ではだいたい「白狐」、稲荷神社のお狐様も“白”。そこで、白でもいいような気がしてきて、狐の色について、辞書にはどう載っているか、日常使用しているちょい古い小学館『国語大辞典』を引いてみました。

「毛色はふつう橙褐色だが、赤、黒、銀、十字の四色相がある。」  
 (狐の毛色の橙褐色は、“狐色”という最も適切な表現があったのでしたね。)  
 しかし、“黒”というのはあまり馴染みがないし、“十字”となるとよくわからない。いずれにしても、狐は夜行性だから、夕暮れの間が深くなっていくにつれますます活発に遊びだすんだろう。夕闇にまぐれて遊ぶきつねならば、黒狐でもいいかもしれないが、黒狐だとやや不気味か? 「夕まぐれ」の色合いを、黄昏時のまだやや明るさが残っている色合いとみると、狐色のきつねが相応しいだろうか。白狐のほうがより童話的な趣を濃くするか。  
 【十字狐】キツネで体色が全体にくすんだ褐色をし、肩に十字形の黒い斑紋のあるもの。寒冷な地方に多くみられる。《季・冬》(前掲書より)

しゅうさんがどのような色相のきつねを想定されて詠まれたのか、ご教示くださると嬉しいな。

**山茶花** 投稿者: **ガタクタ箱** 投稿日: 2004年12月29日(水)23時36分50秒

[返信・引用](#)



カトリック教会の前の山茶花です。  
 今朝は冷え込みましたね、シャッターを押す指がかじかみました。

**感謝の言葉がありません。** 投稿者: **しゅう** 投稿日: 2004年12月30日(木)07時17分40秒

[返信・引用](#)

私の句にこんなに感想を頂いたことないので、うれしい悲鳴ををあげています。ありがとうございました。

とうなずさん、真奈さん、エミさん、れんさん。  
 とうなずさんの全句への感想、とうなずさんの積んできておられるものに並々なぬものを感じました。とうなずさんの感想は、私にも勉強になりました。いくつか分からないというものに、折角ですから、作者としての作意をすこし書かせていただきます。

- ・旅先のさっとハンカチうすずみに  
 旅先で故人を思い出した、「ハンカチ」でいかがかと。
- ・試供品を顔に置いている毛虫かな  
 ずっとファンデーションをつけない出来たんだか、ここへきて、つけるようになった。  
 「毛虫」でいかがか。
- ・とうがらし好きそうな人煙りをり  
 若者は煙っていないかなあ。
- ・粽食みクスクス戦ぐ日本人  
 「戦ぐ・そよぐ」日本人感。
- ・考えるヒントが欲しい糸瓜棚  
 がらくた箱さんと貼った糸瓜棚です。あのなかは不思議な空間でした。どんな感覚と言っ  
 ていいか説明できない、ふしぎな空間だった。
- ・櫓の火や村山織を袋にす  
 全生園のある東村山、というか、村山には、古くからの伝統工芸として「村山紬」村山織  
 があります。ずっと着物の仕立てをしてこられた方が、東條の追っかけをしている私に、その  
 端切れで袋を作ってくれました。いま、私の大切な愛用品です。

そのほか、真奈さん、れんさんが取り上げて下さった

- ・透けてゆくことが抵抗白菜煮  
 「透ける」ということは、「抵抗」と言うより「順応」と言えるものだと思います。でも、最近、「透ける」ということこそ、「抵抗」といえるものかなと思うところがありました。

エミさんの感想は、文献やら、状況調査が入って、それは面白いんだかつまらなくしているんだか、分からないんだけれど、私は楽しく拝読しました。

- ・黄落踏むきつねの国の夕まぐれ  
 このきつねが何色か? この句で言えば、私なので、自分には見えても自分自身は見えないので何色が分からないんだが・・・、強いて言えば、東條の好んだであろう、「銀いろ」で如何でしょうか。横浜の、関内の、日本大通りはすばらしい銀杏並木です。あの日、講演会の後、黄色の絨毯を蹴散らして、家路を急いだんだ。

**村山織の袋です。** 投稿者: **しゅう** 投稿日: 2004年12月30日(木)10時28分22秒

[返信・引用](#)



私の、村山織の袋です。

れんさん

「日本大通り」はちょうどいいサイトの画像がありませんが、下のところの一番下の画像が真っ黄色に黄葉して落葉したと想像して下さい。

[http://homepage3.nifty.com/hira\\_chan/outdoor/etc/yokohama/yamashitapark/yamashitapark.htm](http://homepage3.nifty.com/hira_chan/outdoor/etc/yokohama/yamashitapark/yamashitapark.htm)

**雪の朝です** 投稿者：[田中 裕](#) 投稿日：2004年12月30日(木)21時52分1秒

[返信・引用](#)

>ガラクタ箱さん

[山茶花の写真](#)、良いですねえ！ なんとなく昨日から歳末の句会という雰囲気になってきたので、私も触発されて駄句三句。

雪凍てし朝に聖母をひめ椿  
 迸るや雪の山茶花笠のうへ

氷踏み抜く稲妻の茶梅かな

>しゅうさん

村山織の袋！ イメージが具体的になってきました。この袋を戴いたのですね。しかし

楢の火や村山織を袋にす

を読むと、どうみてもしゅうさん御自身が袋を作っているようですよ。あ、作者が囲炉裏端でその袋を作っている「お婆さん(?)」に変身したのですね。

>エミさん

来年は、私も五行歌というものにチャレンジしてみたいと思っています。こちらにもどうか作品を投稿して下さい。

>とうなずさん

詳細な選評、興味深く拝読しました。こういう感想を述べ合うのが俳句の句会の醍醐味ですね。東條耿一アンソロジー、編んで下さり有り難うございます。私の場合は、實は、どれを選ぶか、まだ決めていません。これからあらためて読み直していく内に、新たなる発見もあると思います。しかし、予感のようなものはあって、たぶん、「母愁の秋」、「帰航(母への手紙)」のような母なるものを主題とした初期の詩群、「袖子の實」「望郷臺」など故郷への思いを詠んだ詩群、「樹々ら悩みぬ」など北條民雄との交流から生まれた作品群、「一椀の大根おろし」など、療養中の自己の現実をユーモラスに受容しつつも、それを内的に越えるものを感じさせる詩群、そして、「告白録ないし讚美録」ともいうべき晩年の手記を選ぶだろうと思います。

>真奈さん

昭和十六年以降の「山桜」は、軍国主義の風潮に染まった詩や短歌に充ち満ちています。それがその当時の日本の支配的な言説であったといえればそれまでですが、東條に影響を与えた朔太郎や達治のような詩人ですら、そこから自由でなかったということは考えさせられますね。しかし、その時期に、東條は時局に迎合する詩を全く書いていません。これは、東條が師事していたコッサール神父が、フランス人であったためにスパイの嫌疑が掛けられ、殆ど拘禁状態にあったことと無関係ではないと思います。

[編集済](#)

**よいお年をお迎えください。** 投稿者：[昭子](#) 投稿日：2004年12月30日(木)13時40分21秒

[返信・引用](#)

田中さん、みなさま、拙詩一編をご挨拶代わりに。

朝

たとえどのような朝であっても  
 それは微細な奇跡なのでしょう。  
 あなたのたくさんの朝が  
 うつくしい奇跡でありますように。

**「銀いろ」で** 投稿者：[エミ](#) 投稿日：2004年12月31日(金)23時21分59秒

[返信・引用](#)

・ほい、納得です。銀狐となったしゅうさんが、銀杏の落葉の絨毯を蹴散らして、イングランドの白い狼みたいに颯爽と(一なぜか、私は“イングランドの白い狼”は気位高く颯爽としてい

ると思ひ込んでいます)、家路を急いでいる図が見えてまいりました。  
しゅうさんの句に表現されている身体感覚は独特ですね。①変身自在、②ある空間またはモノ  
あるいは生きものにまるごと同化、または異化、③動的。しゅうさんの句の読み方の入口が、  
ほんのちょこっと見えてきたような……とはいえ、まだまだ私には難解でござるが。

**謹賀新年** 投稿者: [田中 裕](#) 投稿日: 2005年 1月 1日(土)01時03分21秒

[返信](#)・[引用](#)



皆様、あけましておめでとうございます。

岩城 宏之さんのベートーベン交響曲全曲演奏、東京文化会館からのスカイTV生中継、最後の第九を聞いているところです。午後3時半から、實に6時間半の連続演奏だそうです。第三、五、七、八のさわりをきいて、今丁度第九の三楽章です。ベートーベンの交響曲、一番から九番まで全曲を、大晦日にやるというのは世界でも初めてでしょう。日本的といえば日本的ですが、なんとなく、井原西鶴の住吉神社での俳諧興行、一日二万三千五百句の独吟を思い出しました。西鶴の場合と同じく、岩木さんの場合も、楽屋裏に医師が控えているでしょうね。

[編集済](#)

**新年おめでとうございます** 投稿者: [E三](#) 投稿日: 2005年 1月 1日(土)03時23分15秒

[返信](#)・[引用](#)

・明けましておめでとうございます!

・誰だったか、だいたい1時間半の指揮で約1kg痩せる、と言っていた指揮者がいたとおもう。ベートーベンの交響曲を6時間半連続指揮ともなれば、岩城宏之さん、きっとかなり痩せましたね。奏者も聴衆も、ヘロヘロになりそうな演奏会ですね。もっとも、ワグナーの楽劇でも5時間かかるとか、日本の江戸時代の歌舞伎なんかは、朝早くから丸一日興行なんてことだったらしいし、能五番と間狂言全て観るとしたら、6時間以上かかりますね。精神力・身体力を絞り機にかけてギリギリと絞るような感じかしら。苦行みたいな演奏会ですね。

・田中さんの五行歌、楽しみにしています。  
私はまだ五行歌をかじりはじめで、まったくの無手勝流です。全生園で知り合ったトラ千代さんから勧められて全生園歌会を覗いたのがきっかけで、本当に偶々という感じで始めまして…、何もわからない状態で1年半経ってしまいました。それというのも、取り組みがまだ真剣でないからで、ときどき反省はするのですが、根が半端なやつなので、なかなかです。  
五行歌の会HP URL  
<http://www.5gyohka.gr.jp/>  
の[五行歌リンク]のなかに、寺本一川さんのHP「くちづける風」や、藤内明子さんのHP「abyss」などがありますので、もしよろしければご覧になってみてください。  
寺本さんは書をなさる方です。(藤内さんはこのところ更新されていないようでしたけれど。)  
「ふれあい」HPの五行歌投稿欄がなくなってやや寂しくおもっておりましたところなので、大いに期待しています。どうぞよろしく願いいたします。

**遅ればせながら…** 投稿者: [昭子](#) 投稿日: 2005年 1月 1日(土)20時24分35秒

[返信](#)・[引用](#)

あけましておめでとうございます。

昨年は5時間の文楽を観ましたが、さすがに疲れました。途中で少し居眠りをしたような(笑)。  
今年もよろしく願いいたします。

**聖母の井戸** 投稿者: [田中 裕](#) 投稿日: 2005年 1月 2日(日)22時18分13秒

[返信](#)・[引用](#)

今日はカトリック教会では「公現」の主日です。私は、全生園の愛徳会聖堂のミサに与り、昨年、朗読会の時にお世話になった方々のお宅にお年始をすませて、先ほど帰宅しました。公現の主日には、東方の三博士が、馬小屋にいるキリストのもとに礼拝に来たという物語(マタイ2-2)が朗読されました。  
この日は、クリスマス以後、聖家族の主日の後に祝われます。今年は暦の関係で、少し早い気がします。新年礼拝と重なりました。この主日に、昔、私は、どこかで次の様な説教を聞いた記憶があります。

その昔、ベツレヘムの生誕教会の後陣に聖母が水を汲んだといわれる井戸がありました。空の星が博士達を導き、幼子イエスをあがめさせた後で、その井戸の中に消えてしまったそうです。信仰篤きものの目には、井戸の底にすむ星影がみえるという伝承があったとのこと。

星一つ流れ聖母の井戸の底

ところで、昨年末の句会桃李でも「大根」の題詠を出しました。その結果を、[画廊桃李](#)に掲載しましたのでご覧下さい。

>エミさん

五行歌のリンクの紹介有り難うございます。文藝のひとつのジャンルを創始するというのは興味がありますね。短歌もある意味では五行歌とも言えそうですが、どうやら、日本の詩歌の伝統に棹さしつつ、短歌に限定されぬ新しい歌を試みようと言うことのようなのです。私の場合は、「連歌」を現代に蘇らせ、そして現代を「連歌の世界」に詠むことを考えて桃李歌壇を8年前に始めましたので、こういう試みには共感するところがあります。なお、「ふれあいHP」が閉鎖された様なので、ご紹介頂いた五行歌の頁を、この掲示板の下方にリンクしました。

>あきこさん

文楽といえば、昨年、ゼミの学生達と一緒に、曾根崎心中を見ました。あれも、現在の脚色ではかなり近松の原文を書き換えているのが気になりましたね。一度、原作通りの台本で見てみたいと思っています。また、冒頭の「観音霊場巡り」も是非再現して貰いたいと思っています。

>れんさん

雲混じりの雪がやんで、除夜の鐘のときの月をご覧になったとのこと。私は、東京郊外にいますが、うっかりしていました。どなたか、れんさんのほかに、年明けの月の雲間よりでのをごらんになったかたはいらっしゃるでしょうか。

おさが こそ  
御降りや去年の名残の月を見ず

[編集済](#)

**新年おめでとうございます** 投稿者：とうなす 投稿日：2005年 1月 2日(日)21時05分49秒

[返信・引用](#)

皆々様、今年もよろしくお願いたします。それにしても、今日の寒さは格別でした。私は1時間の道のりを歩いて、初礼拝に臨みました。プロテスタントでも、今日は公言日ですが、私のところはあまり教会暦に拘っていません。灰の水曜日あたりから、急にそれらしくなります。

ところで、ベツレヘムの生誕教会に連なる、聖母の井戸の話、興味深く読ませて頂きました。星一つ流れ聖母の井戸の底とてもよく理解できました。井戸の底が見えてまいります。曾って私は、生涯の旅であった、聖地旅行で、ベツレヘムの生誕教会にもまいりました。その途中で、ヤコブの井戸を見学、今もこんこんと湧いている、水を飲んできました。聖母の井戸とヤコブの井戸とは別のものでしょうか、聖書に記されている井戸には、キリストの無限の愛と許しの福音があり、ここに登場する、罪許された、マグダラのマリヤと自分を重ねております。

画廊桃李の大根の句、好きな句がいくつもありますので、そのうちに選句いたします。

[編集済](#)

**明けましておめでとうございます！** 投稿者：真奈 投稿日：2005年 1月 6日(木)16時06分2秒

[返信・引用](#)

お正月いかがお過ごしでしたか？  
実は2日にPCダウン、目下修理中なのでケータイからメールしています。  
今年もどうぞよろしく！

**ケータイからの投稿** 投稿者：田中 裕 投稿日：2005年 1月 6日(木)20時49分37秒

[返信・引用](#)

真奈さんの携帯からの投稿、うまく行きましたね！

あらかじめ私の方に携帯のアドレスを連絡して頂ければ、ここに携帯で投稿できるようになります。ただし、クッキーが使えないので、その都度、パスワードtojoを入力しなければならないのが一寸面倒ですが。画像は閲覧できませんが、文字情報は見られます。

ところで、桃李歌壇の[和歌連作の部屋](#)は、携帯に対応していないので、こちらに現在の状況の中継しましょう。（間に合えば、私の方から、代理投稿しますし、間に合わなくとも、こちらにパラレルワールドで、連作和歌が出来ますね）

6228番からです。

6227 > ふくろふと貌向き合ひし屋下がり突とひらめく絵文字の心（文枝）  
6226 > ふくふくとあまたの夢に膨らみし翼たたみて眠るふくろふ（かわせみ）  
6225 > 天色の蜜滴れる今朝の空ガラスの鼻は羽をたたみて（花）

**パラレルワールドに・・・** 投稿者：真奈 投稿日：2005年 1月 7日(金)01時35分29秒

[返信・引用](#)

ケータイから投稿できるとは嬉しいですね！早速ですが・・・  
6228 星ばかり喰ふて痩せしふくろふに優しき古歌の森に流るる 真奈  
よろしくお願い致します。

**遅ればせながら** 投稿者：花 投稿日：2005年 1月 7日(金)08時47分22秒

[返信・引用](#)

出遅れましたが・・・あけましておめでとうございます。  
今年もどうぞよろしくお願いいたします。ほそぼそと皆さんの後についてゆきます。  
真奈さん、★を食べる鼻の出現、ステキですね。  
状況はゆるやかに解けあけぼのの星を喰らいて友よ生き抜け 花  
お粗末でした。

**和歌連作の部屋の状況です** 投稿者：田中 裕 投稿日：2005年 1月 7日(金)23時00分0秒

[返信・引用](#)

真奈さん、花さん、投稿有り難うございます。  
幸い、パラレルワールドにならずにすみしました。現在、[和歌連作](#)は6231番(海月さん)まで進んでいますね。  
6231 > 幾万のほたる舞ひ飛ぶ海底に六〇年の生をこそ生く (海月)  
6230 > 幾万の紋白蝶の羽のやう二千五年のあけぼのの雪 (たまご)  
6229 > 状況はゆるやかに解けあけぼのの星を喰らいて友よ生き抜け (花)  
6228 > 星ばかり喰ふて痩せしふくろふに優しき古歌の森に流るる (真奈)

[編集済](#)

**この画面から・・・** 投稿者：真奈 投稿日：2005年 1月 8日(土)00時15分21秒

[返信・引用](#)

和歌連作が光っていたのでクリックしたら、和歌連作の部屋につながり直接投稿できました。  
どうして？とびっくりしています！  
花さん、ありがとう。目のほうはその後いかがですか？

**残念！閲覧だけでした・・・？** 投稿者：真奈 投稿日：2005年 1月 8日(土)00時37分12秒

[返信・引用](#)

もう一度確認したら、送ったと思った6232載っていませんでした。でもこの画面から閲覧ができて助かります。  
6232 耳許に「僕です」の声聞えしか残る蛍のきらきらとして  
よろしく願いいたします。

**真奈さんへ** 投稿者：田中 裕 投稿日：2005年 1月 8日(土)06時53分32秒

[返信・引用](#)

携帯からの投稿ですが、[和歌連作](#)の部屋を見てみましたら  
6232 > 耳許に「僕です」の声聞えしか残る蛍のきらきらとして(真奈) (1月8日 00時00分)  
で丁度00時00分に投稿されていますね。きちんと送られているようですよ。

[編集済](#)

**あらら・・・** 投稿者：真奈 投稿日：2005年 1月 8日(土)09時59分52秒

[返信・引用](#)

今開けてみて本当に投稿されているので再びびっくり。よかった！  
でも接続はこの画面からですね。

**テストです** 投稿者：花 投稿日：2005年 1月10日(月)16時52分0秒

[返信・引用](#)



**真奈さんへ** 投稿者：花 投稿日：2005年 1月10日(月)17時14分8秒

[返信・引用](#)

画像の貼り付けはなんとかクリアしたようです。  
室内で鉢植えの風信子と鼻を撮ってみました。

真奈さん、お気遣いくださってありがとう。  
目の施術後の経過は順調ですが視力はまだ安定しません。もうすこしで私の目にも春がやってくるようです。

皆さん、智恵の鳥ふくろうはお好きですか？

**花さんへ** 投稿者：真奈 投稿日：2005年 1月10日(月)17時36分29秒

[返信・引用](#)

早く視力が回復されるといいですね。  
風信子の画像は見れないのが残念です。  
もう咲いたのですね！  
柿の木さんへ  
和歌連作6238がダブってしまったようですみません。画面は6237までアップされているのですが…

**(無題)** 投稿者：[田中 裕](#) 投稿日：2005年 1月11日(火)00時09分51秒

[返信・引用](#)

>真奈さん

[和歌連作の部屋](#)は6 2 4 3まで行きましたね。

6243 > 「叩けボンゴ・踊れサンバ」とまねすればカキクケキャットのつぶら目と合ふ（たまこ）（1月10日 23時47分）  
6242 > ノックして物語またはじまってドレミファソラシド雪の舞ふ夜（真奈）（1月10日 23時47分）  
6241 > キッチンを覗く雀と目が合ひぬパピペポットの湯は滾りたち（かわせみ）（1月10日 12時23分）  
6240 > 膨らんでおながが土を擦りさうな寒の雀が落ち実つひばむ（たまこ）（1月10日 10時04分）  
6239 > 木伝いに鳥影のぼる束の間は飲食のこと忘れいるべし（花）（1月10日 09時03分）

>花さん

画像と投稿有り難うございます。どうかお大事に。ミネルバの鼻、なんとも愛敬がありますね。

ふくろふの夢物語ヒヤシンス

[編集済](#)

**いつも有難うございます** 投稿者：真奈 投稿日：2005年 1月11日(火)08時01分47秒

[返信・引用](#)

お早うございます。北陸・信越はかなりの大雪のようです。

ふくろうの夢物語ヒヤシンス  
荒星ひとつ冬の鉄路に 真奈

**大根の句より** 投稿者：とうなす 投稿日：2005年 1月11日(火)11時51分42秒

[返信・引用](#)

こんにちは。今日のはのんびりしています。  
暇に任せて12月の大根の句、独断と偏見で好きな句を選びました。  
選ばなかった句の中に、優れた作品が隠されていることは否めませんがお許しを。

画廊 大根の好きな句  
☆たつぷりと峡の日抱かせ大根干す  
美味しい干し大根が待ち遠しい気がします。  
☆花嫁も大根踊りの群れの中 東彦  
句の中に、リズムがあり、ふくよかな花嫁が見えて来ます。  
☆一本の大根誠実な重み 硝子  
誠実な重みにまいりました。  
☆大根干す朝の武蔵野鎮まりぬ 柿木  
いつもの散歩道でしょうか。癒しがあります。  
☆大根を食べ尽くしたら死んでもいい 花  
少しオーバーな気もしますが、素直な心境に打たれました。

花さん 和歌連作の部屋ではお世話になっております。  
私は無類のふくろう好きです。玄関を開ければ、誰もが、この家は変だと思うでしょう。  
・人の世に棲み鼻の直ぐ眠り 文枝（旧作）

---

**写真のコメントに俳句を** 投稿者：[ガラクタ箱](#) 投稿日：2005年 1月11日(火)16時43分1秒

[返信・引用](#)

ふれあい福祉協会写真集を作るので写真募集していますので、応募しようと思います。つきましては写真のコメントに俳句をつかわせて戴けないでしょうか、ご都合の悪い方はメール連絡ください。

[編集済](#)

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fwww11.plala.or.jp%2Fockqge%2Fkeiji%2Fsha.html>

---

**とうなすさんへ** 投稿者：[花](#) 投稿日：2005年 1月11日(火)22時12分2秒

[返信・引用](#)

はじめまして・・・  
ふくろう好きよ、この指と一まれ！ですね。

人の世に棲み鼻の直ぐ眠り  
猛禽舎にふる寒の月光 花

---

**白梅** 投稿者：[花](#) 投稿日：2005年 1月12日(水)16時47分5秒

[返信・引用](#)

春風の吹くことはげし朝ぼらけ梅のつぼみは大きかりけり 齋藤茂吉

---

**写真集！** 投稿者：[田中 裕](#) 投稿日：2005年 1月14日(金)06時04分34秒

[返信・引用](#)

>ガラクタ箱さん

[ふれあい福祉教会の写真集](#)コメントに俳句があると面白いですね。皆様、是非とも新作の俳句をお寄せ下さい。

[編集済](#)

---

**写真集のコメント俳句** 投稿者：[ガラクタ箱](#) 投稿日：2005年 1月14日(金)11時06分6秒

[返信・引用](#)

13日にふれあい福祉協会に立ち寄ると方に直接、コメント俳句と写真をこすけました。この写真集は3月末に発刊予定との事なので、できました時にお知らせします。

---

**画帳「武蔵野の四季」一月** 投稿者：[田中 裕](#) 投稿日：2005年 1月16日(日)22時32分17秒

[返信・引用](#)

ガラクタ箱さんのHPには蠟梅の素晴らしい写真が沢山ありますね！画帳「武蔵野の四季」の1月の題詠は「蠟梅」です。俳句、短歌、五行歌、詩など、皆様の作品をお寄せ下さい。

私は、今回は、五行歌に挑戦してみようと思いましたが、どうも勝手が分からないので、歌ではなく、自由な五行散文詩ということで投稿します。

子供達へ

僕は蠟梅  
君たちは樹の側を歩く  
誰が植えたかは知らなくともよい  
ただその香りに包まれて  
君たちが生き、そして僕も生きる

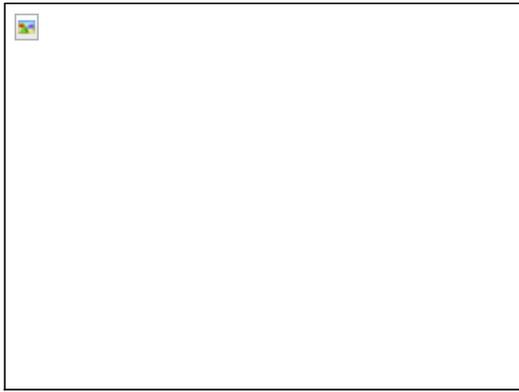


photo by ガラクタ箱さん

[編集済](#)

**克 様へ** 投稿者: [田中 裕](#) 投稿日: 2005年 1月16日(日)07時46分52秒

[返信・引用](#)

最初で最後と言わずに、どうかもうすこし投稿を続けて下さい。

ご発言の趣旨が良く分かりませんので。

「ガラクタ箱さんにお目に掛って了解を得ました」という発言は、私の言葉でしょうか。この掲示板で、そういう発言をしたことはないのですが。「何の了解」ですか。

> {おまんこ}騒動のとき、田中さんはなにをしていましたか。退散したではないですか。自らのフリー掲示板に誘導しようという努力もしなかった。

この掲示板の過去ログを転載します。その当時の記録です。

=====

京都から戻って 投稿者: 田中 裕 投稿日: 12月14日(火)15時04分38秒

京都フォーラムという会議に出席するために金曜日の夜から月曜日まで、京都に行っていました。朝9時から夜6時まで、連続して行いましたので、そうとうハードなスケジュール。漸く終えて、月曜日に京都から東京へ出勤、昨晚帰宅しました。

金曜日に、また、ガラクタ箱さんの掲示板が荒らされていたので気になっていましたが、帰京後、そこを閲覧してみましたら、現在は、HPから切り離された状態ですね。ガラクタ箱さんの苦渋が思われ、暗鬱な気分になりました。

また、しゅうさんの「東風ふかば」もあまりの無法状態に一時閉鎖されたようで、心配しましたが、また復帰された様で、安堵しました。掲示板を設置した目的とはかけ離れた投稿で埋め尽くされ、東條さんにも風見さんにも無関係な人が勝手な投稿をやっていますね。

以前、ここにも書きましたが、「釜茹で」とか「お構いなく」とか様々なHNに隠れて、他者の実名や勤務先まで明示して誹謗中傷の投稿をあちらこちらに貼り付けている梵氏は、そういう投稿を、管理者が削除したり、アクセス制限をしたりすると、「抹殺門削除」とか「人殺し」をしたとか言い出して、そのこと自体を非常な犯罪であるかの様に言いふらし、それをタネにして脅迫を続けます。

しかし、これは実にナンセンスなレトリック、あるいはトリックです。ですが、ぼこさんなどは、すっかりそれを額面通りに信じ込んでしまっているようですね。

梵氏は自分専用の掲示板をもっており、そこで自由に発言できるのですから、わざわざ、他人の掲示板を荒らして、そこを自分の掲示板の植民地のようにしてしまう権利などここにもないのです。

談話室としてネットの掲示板を開設している人の意見を無視して、余所の掲示板の無断転載を大量に含む投稿で、そういう談話室の場を暴力的に踏みにじりながら、そのことの反省はまったくない。こういう暴力的な言論に対して、その理不尽さを説明したり、そこに含まれる事実誤認をきちんと誠実に指摘するには時間がかかりますし、多くの場合、梵氏は他者の反論などはろくに読まずに、自分の先入主だけで作り上げた虚像を標的にして、いつまでも同じような誹謗中傷を反復投稿します。

こういう無法な投稿者をアクセス禁止にすることは、「掲示板荒らし」に対処する管理人の防衛策として当然の措置であると考えます。

ただし、私が新設した「新白描掲示板」等では、いかなるアクセス禁止措置もせず、また投稿

削除もしないという方針で続けていきます。これは、梵氏や北風氏との対話の通路を閉ざさないと言うためでもありますし、暴力的な言論にたいするもう一つの選択肢として、どこまでも言論に対しては言論をもって答えたいという気持ちもありますので。

=====再掲 終わり=====

今日は日曜日なので、午前中、私は全生園の教会に出掛けます。ガラクタ箱さんのご都合が宜しければ、その後で、お宅にも伺って、写真集応募のことなど、近況をお伺いしたいと思います。

克 さんとも、機会があれば、お目にかかり、直接にお話ししたいですね。

**言葉足らず** 投稿者： [克](#) 投稿日：2005年 1月16日(日)11時50分38秒

[返信・引用](#)

田中さん

読みかえしてみて、いかにも、言葉足らず、でした。  
いつか、きちんと書きます。  
最初の書き込みは削除しました。失礼しました。

**写真集のことなど** 投稿者： [田中 裕](#) 投稿日：2005年 1月16日(日)15時57分54秒

[返信・引用](#)

先ほどまで、ガラクタ箱さんのお宅にいました。いつもは私の家の WindowsPCで この画面を見ているのですが、ガラクタ箱さんのMACでみると、文字も画像も遙かに綺麗に表示されるのに驚きました。アート系ならMACとはよくいったものですね。画像をサムネイル（縮小画像）にして、それをクリックすると拡大できる様にするやり方を聞かれましたので、その秘伝（笑）をお教えしました。タグを文字入力する必要があるのも、こういう場合は、私の様なMSDOSの時代からのWindows Userのほうが得意です。

ところで「ふれあい福祉協会」の写真集への応募はもう済ませられたとのこと。幾つかの写真に、この柿の木BBSの俳句が添えられています。以前、ここで確認しました様に、皆様の俳句作品を使用させて頂きまして、ガラクタ箱さんとともに感謝致します。

この福祉協会の写真集とは別に、ここでの交わりを通じて、画帳「武蔵野の四季」の編集作業は、リアルタイムでこれからも続けたいと思っています。どうか、皆様の作品をお寄せ下さいますよう、お願い致します。こちらのほうは、東條歌一詩集とおなじように、まずPDFでWEB出版したいと思っています。将来的には製本して出版する可能性も考慮していますが。

>克 さんへ

昨夜の克さんの書き込みが、御自身によって削除されていたので、外の方には分かりにくくなっていますが、昨年12月のときのような「掲示板アラシ」に遭遇した場合に、どう対応するのが最善であるのか、皆様と共に、あらためて考えるべき機会を戴いたと思っております。私の考えは、12月14日付けの投稿に書いたとおりです。

[編集済](#)

**募集要項** 投稿者： [田中 裕](#) 投稿日：2005年 1月16日(日)16時49分10秒

[返信・引用](#)

「ふれあい福祉協会」の写真募集のポスターをガラクタ箱さんより頂いたので、それをサムネイル表示します。



[編集済](#)

**1月の画帳「蠟梅」** 投稿者： [田中 裕](#) 投稿日：2005年 1月16日(日)22時31分14秒

[返信・引用](#)

「武蔵野の四季」の1月の画帳、「[蠟梅](#)」を作成しました。皆様も、どうか作品をお寄せ下さい。リアルタイムで更新します。

[編集済](#)**投稿3首** 投稿者：花 投稿日：2005年 1月16日(日)22時51分10秒[返信・引用](#)

蠟梅は繊細であえかなうえにも玲瓏な花ですね。  
さらにたぐい稀な香気がして毎年、待ち焦がれている花です。

- ①ぬか雨に咲き満つ古木の蠟梅よ命清らに減らさねばならぬ
- ②いつ盛りともなく咲きて蠟梅の木下幼き子等が行き交う
- ③寒しぐれ雪とならむか息吐けばほろと零れて唐梅の花

**蠟梅の句** 投稿者：真奈 投稿日：2005年 1月17日(月)06時43分53秒[返信・引用](#)

土曜・日曜とお正月連句会が続いたところで今日からはやっとのんびりできます。

蠟梅の句は、前にガラクタ箱さんのHPでの折々の写真を思いだしつつ作ってみました。

蠟梅やきらりと雫こぼしけり  
チェンバロや蠟梅いよよ透きとほり  
一輪の蠟梅ことに凜と見ゆ  
蠟梅の触れれば透ける女身かな  
蠟梅や米寿迎へしモガの笑み  
よろしく願いいたします。

**投稿有り難うございます** 投稿者：[田中 裕](#) 投稿日：2005年 1月17日(月)08時46分33秒[返信・引用](#)

しゅうさん、花さん、真奈さんより「蠟梅」に寄せた作品を投稿して頂きました。  
[1月の画帳「蠟梅」](#)に掲載しましたので、ご覧下さい。

**遅い新年会ですが。** 投稿者：[昭子](#) 投稿日：2005年 1月18日(火)09時59分27秒[返信・引用](#)

30日午後5時より、例によって吉祥寺「中清」にて新年会を行います。  
一応わたしが幹事ですが、目的も句会にありませんし、清水祖さん中心の会というわけでもありません。この場をみなさんの「意見交換」の場にして頂くことは幸甚です。田中さん、克さん、みなさんいらっしゃいませんか？

[編集済](#)**(無題)** 投稿者：[昭子](#) 投稿日：2005年 1月18日(火)03時22分39秒[返信・引用](#)

あ、メールアドレスを間違えました。こちらが正確です。

**1月の画帳** 投稿者：[とうなす](#) 投稿日：2005年 1月19日(水)21時41分59秒[返信・引用](#)

おはようございます。  
毎年、長瀬の宝登山の蠟梅園に行くのが楽しみの一つです。しかし、蠟梅はわたしにとって格別な花であり、それだけに、歌や句に詠むのはとても難しいです。大体は独り善がり、感性に磨きをかける機会もないので、恥ずかしながらの投稿です。  
ガラクタ箱さんの、蠟梅の写真は、私が皆々様に会うチャンスを下さいました。しかし、それと、作品は別で、写真の万分の一も詠めないのが現状です。

短歌	蠟梅の光に見ゆ光の子坂本九の歌に歩めよ	文枝
	幾千の御霊に捧ぐ灯の点り蠟梅園の時は満ちたり	文枝
俳句	蠟梅の一輪はるか震災忌	文枝
	蠟梅の構図一気に点と線	文枝
	蠟梅の蕾こつこつ傍に主	文枝
	老いらくの恋の階蠟梅香	文枝

ままごとの皿に唐梅教師の子 文枝

[編集済](#)

**画帳「武蔵野の四季」一月** 投稿者：[田中 裕](#) 投稿日：2005年 1月19日(水)09時20分37秒

[返信・引用](#)

蠟梅に寄せたとうなすさんの作品、1月の画帳に掲載しました。蠟梅の写真はたくさんありますので、さらに追加できます。リアルタイムで更新しますので、どうかよろしく。

>昭子さん

忘年会の連絡有り難うございました。今日と明日の会議で月末の予定が決まりますので、その後で連絡します。

**うふふ。** 投稿者：[昭子](#) 投稿日：2005年 1月19日(水)15時08分43秒

[返信・引用](#)

田中さん、「新年会」です。

[編集済](#)

**あ、新年会でしたね** 投稿者：[田中 裕](#) 投稿日：2005年 1月19日(水)19時59分51秒

[返信・引用](#)

>昭子さん

なんと、一月だというのに忘年会と書いていました。どうも惚けていたようです。

しかし、なんでこんなミスをしたのかとおもいましたら、僕の職場は、いまが年度末みたいなものだったのだと気づいた次第。卒論・修論審査に入学試験準備、そして今日は、学部再編の会議がいままであって、そのついでに、3月で退職する人の挨拶など聴いたりしましたので、なんとなく、気分は忘年会なのです。

>れんさん

帰宅しましたら、早速、投稿頂いた俳句を、一月の画帳に掲載します。蠟梅の写真も、もう一枚入れる予定です。

**HN変更** 投稿者：[文枝](#) 投稿日：2005年 1月19日(水)21時49分11秒

[返信・引用](#)

田中さま 只今1月の画帳に行ってみましたら、俳号が、とうなすになっていたの、お手数ですが、文枝に変更してください。私が、俳号を入れなかったの失礼しました。ついでながら、こちら関係の投稿は、一般投稿も文枝にたくよろしく願いいたします。

**蠟梅の写真 もう一枚追加しました** 投稿者：[田中 裕](#) 投稿日：2005年 1月19日(水)23時58分46秒

[返信・引用](#)

先ほど帰宅。とうなすさんの俳句の雅号を文枝さんに直し、新たに投稿されたれんさんの俳句を二句掲載しました。1月の画帳、作品が増えましたので、ガラクタ箱さんの蠟梅写真集から新しく、次の写真を追加しました。



[編集済](#)

**ジラフについて** 投稿者：[花](#) 投稿日：2005年 1月20日(木)17時08分34秒

[返信・引用](#)

昨日、東京都庭園美術館に行ってきました。「田原桂一光の彫刻」展を観ての帰りに庭園におりてみるとジラフの彫像に出会いました。ジラフは中国で古代、聖人が現れて良い政治が行われるときのしるしとしてこの世にあらわれる想像上の獣だそうです。と、いうことは後で知ったのですが…。すらりとして朝光のなかに立っていたこのジラフになにかしらとても心惹かれています。少しピンが甘いのですがご覧ください。



悠久の天を突くがに狼の額を掲げてジラフは立てり 花

**ジラフの彫像** 投稿者：文枝 投稿日：2005年 1月21日(金)13時49分7秒

[返信・引用](#)

花さん、ジラフの彫像の写真拝見しました。  
中国からの言い伝え存じませんでした。  
本当に政治でなくても、自身が清められるような気がします。  
近くに動物園があり、必ず麒麟に会って帰ります。  
花さんは、写真の狙いどころがいいですね。白梅もはっとさせられました。

**文枝さんへ** 投稿者：花 投稿日：2005年 1月22日(土)07時18分2秒

[返信・引用](#)

ジラフの画像をみてくださってありがとう。  
うれしく思いました。いつか多摩動物公園の  
白ふくろうを撮りに行こうと考えています。  
猛禽舎のなかにいるので撮るのはとてもむずかしいような  
気がするのですが・・・。そろそろ節分草がさくかしら。  
鉢植えの福寿草は二輪ほど悴みながらも咲いてくれました。  
文枝さん、節分草はお好きですか？

**節分草** 投稿者：文枝 投稿日：2005年 1月22日(土)21時03分1秒

[返信・引用](#)

花さん お心にかけてくださいありがとうございます。  
節分草は勿論すきです。節分草は秩父の宿の庭に群生していたこと思い出しました。  
ガラクタ箱さんのリンク、「季節の花 300」でかなりきれいな画像を観ることができま  
す。  
それから、ふくろうですが、「富士国際花園」でも沢山のふくろうに会うことができます。  
よろしかったら。検索でごらんになってください。

**おはようございます** 投稿者：[田中 裕](#) 投稿日：2005年 1月25日(火)09時43分56秒

[返信・引用](#)

>れんさん

ヴィーゲランの彫刻ですか。写真でしか見たことはないのですが、腕白小僧の「おこりんぼ  
う」とかいう像が面白かったのを記憶しています。公園の中に野ざらしの儘、沢山の彫刻があ  
るところ、唐突かもしれませんが、日本で言えば喜多院の五百羅漢などおなじような印象を  
受けました。



>花さん、文枝さん

麒麟の彫像によせて、遅ればせながら私も。

春暁やジラフの初心永遠に

[編集済](#)

**五行歌について** 投稿者：[田中 裕](#) 投稿日：2005年 1月26日(水)09時46分20秒

[返信・引用](#)

>エミさん

ガラクタ箱さんの掲示板に五行歌

魂冷える  
臘梅の  
香のなかにて  
春待つ  
こころ

を拝見しましたので、1月の画帳「臘梅」に追加掲載致しました。五行歌はたしかに短歌とは  
違うようですね。高柳重信の多行俳句を思い出しました。彼は、三行俳句、四行俳句、五行俳  
句など様々な試みを昭和二〇年代にしています。作品を紹介しますと

身をそらす虹の  
絶巔

日が  
落ちて

明日は  
胸に咲く

処刑台

山脈といふ  
言葉かな血の華の  
よひどれし  
蕾かな

このなかでは、最初のものが一番印象的です。とくに「処刑台」が別行になっていて、空白の部分があるのが面白い。これは俳句的。二番目は、縦書きにすると効果的です（横書きでは駄目）。これも俳句的。三番目が、エミさんの詠まれる五行歌の世界に近い。短歌と同じく五つの部分から成立するので、「五行歌」と呼ばれているのかも知れませんが、行を改めることで生じる効果は、俳句の「切れ」に近いので、一息に歌う調べをもっていない。私には多行俳句というほうが身近に感じます。

[編集済](#)

**もともとは** 投稿者：[エミ](#) 投稿日：2005年 1月28日(金)20時11分30秒

[返信・引用](#)

田中さん、1月の画帳に掲載してくださって、ありがとうございます。

五行歌の提唱者・草壁焔太さんは、もともとは短歌を詠まれていて、五行歌運動は、口語短歌として始められたようです。そして日本語で書かれた詩歌を歴史的に遡って見直し、現代の日本語で詠まれるウタとして五行に分ち書きする歌がもっとも自然な形であると考えた。（この場合の“行”というのは従来の詩歌でいう“句”にあたります。五行歌五則の変遷については、「ガラクタ箱」さん掲示板に引用しておきましたのでよろしければ、そちらのほうにもお目通しいただければと存じます。）

ですから、昭和初期の頃の自由律口語短歌の試みや、三行～七行くらいまでの分ち書き短歌、多行俳句の試みなどの経時的推移などもさらいながら、「短歌」や「俳句」という定型の概念にとらわれずに現代日本語で“おもい”を自由に表現する“ウタ＝詩歌”として、「五行歌」を提唱しているように思います。

田中さんの仰るように、五行歌には（作品の傾向にもよりますが、ものによって）「多行俳句」といってもいい側面もあると思います。草壁焔太さんも、「五行歌は、五句を基本には五行に表す詩歌であって、『五句歌』と言ってもよいもの」と言っています。五行歌に初めて接したとき、人によっては“五行句”といっているものにとらえ、また人によっては“五行詩”といっているものにとらえる—そこにはその人が日頃親しんでいる詩歌観がおのずと表われるようで、現代詩のほうから入られた方と、短歌あるいは俳句のほうから入られた方とは、五行歌の捉え方が異なることもあるようです。私はどちらもズブ素人、まったくの初心で、まだ自分の五行歌観というものとはっきりしないのですが。

[編集済](#)

**PC復旧しました！** 投稿者：[真奈](#) 投稿日：2005年 1月29日(土)00時29分37秒

[返信・引用](#)

柿の木さん

さっそくアドレスを送っていただき有難うございました。ケータイでは画像が出ないし、やっとな大きな画面で見ることができ感激ひとしおです。ケータイの利便性はどこからでも送信できることですが、なんといっても打つスピードが・・・親指族は神業みたいですね。

定型律か自由律かはまだ自分でもはっきりしないのですが、連句の一卷のなかに句跨りの句を入れると新鮮な印象と緊張感があっていいなと思います。高柳重信の多行句もかなり破壊的な面白さがあっていいとおもいますが・・・

エミさん

**エミさん** 投稿者：[真奈](#) 投稿日：2005年 1月29日(土)09時55分43秒

[返信・引用](#)

高柳の多行句は、視覚効果によって作者の意が伝わってくるのですが、五行歌でもそういうことですか？私はどうしても音律というか諳んずるときのある心地よさが「歌」というように感じますが・・・

**(無題)** 投稿者：[田中 裕](#) 投稿日：2005年 1月29日(土)16時17分39秒

[返信・引用](#)

&gt;エミさん

五行歌の説明、有り難うございました。ところで、ガラクタ箱さんの掲示板に、また「釜茹で」梵さんが出没はじめましたね。どうやら「旅人」さんを私と勘違いしているようです。この「旅人」と私は、ガラクタ箱さんの掲示板で俳句についてやりとりしたことがあるのですが、それを梵さんは、何故か私の自問自答であると勘違いされた。ところが同じやりとりを読まれた志毛多さんは、この「旅人」さんが、北風さんと同一人物なのだから注意するよう

にという趣旨の発言を私の公開掲示板でしていました。

梵さんも志毛多さんも妄想にとらわれて、他者が見えなくなっている。二人とも、自分一人の世界に閉じこもったまま、独善的な発言を繰り返しているのですが、間違えられた旅人さんご本人にとっては、災難続きで、お気の毒です。

**五型説のことなど** 投稿者：[田中 裕](#) 投稿日：2005年 1月29日(土)16時21分32秒

[返信・引用](#)

上智では漸く卒論の審査と面接が終わりました。これから、修論審査と入学試験準備がありますので、まだまだ歳末(?)状態が続きそうです。

>エミさん

五行歌の五に何か意味を与えられるかを考えてみました。漢詩だと起承転結で四つの部分からなる絶句というのがありますが、和歌は五七五七七の五つの部分からなるので、古来、篇序題曲流の五型説というのが伝えられています。

これは、三五記(定家に擬せられた歌論書)に由来しますが、心敬によって連歌の付句のありかたと関連させて論じられるようになりました。心敬の説明は、用件のある来客が案内を請い、用件を果たし、訪問先を辞するまでの五段階になぞらえて、和歌の五型を次の様に説明しています。

篇：「人を尋ねるに、いまだたらずみたるさま也」  
 序：「申次など尋ね侍る程の事也」  
 題：「この事、いひに来るなどのさま也」  
 曲：「その意趣をあらはすべし」  
 流：「暇を乞ひ、出づるさまなど也」

こういう歌学の伝統に従って、五行歌を位置づける可能性があることに気づきました。

>れんさん

鉢の梅の句の代わりに、雪の蠟梅の写真の側に

宵闇を白雪降りぬ花となる

の御句を画帳に追加しました。

>真奈さん

PC復旧良かったですね。携帯から和歌連作の部屋に沢山投稿頂きまして有り難うございました。

ところで、今日の24時が句会桃李の選句の締め切りです。いま管理者の頁を開いてみたら、みなさまのご存じの方が抜群の高得点でした。乞御期待！

[編集済](#)

**文枝さん、おめでとうございます** 投稿者：[真奈](#) 投稿日：2005年 1月31日(月)11時55分46秒

[返信・引用](#)

真中に百歳の席鏡餅

ダントツの高点句で素晴らしいですね！おめでとうございます。  
 揺ぎなくどっしりとしたこれ以上の鏡餅はあり得ない・・・大家族の景が眼に浮かびます。

かつての鏡餅はお座布団のようにどっしりと大きくて、また硬くかちかちになった鏡餅を毀して油で揚げてもらうのも楽しみでした。こういう季節の生活感を感じさせることも残念ながらすっかり薄れてしまいました。

**句会桃李 感謝** 投稿者：[文枝](#) 投稿日：2005年 1月31日(月)16時29分17秒

[返信・引用](#)

真奈さん  
 ありがとうございます。自分でも驚いています。  
 家族、これは私の属する小さな教会の家族の一コマから詠みました。  
 礼拝はもちろんですが、イベントの度に、存在感をどっしりと感じてます。

田中さん  
 お世話になりました。長いブランクがあったので、兎に角投句してみようと挑戦でした。

**ミュージカル 「チバリヨ」 のことなど** 投稿者：[田中 裕](#) 投稿日：2005年 2月 1日(火)12時

[返信・引用](#)

28分49秒

>トラ千代さん

「ミュージカル チバリヨ」講演のこと拝見しました。森元さんには朗読会の時に来て頂き、いろいろとお話を伺いました。目をご不自由なのですが、それを全く感じさせないほど精力的に活動されていますね。昨年末に図書館から、

証言・日本人の過ち：ハンセン病を生きて－森元美代治・美恵子は語る 人間と歴史社 1996  
という本を借りました。この本の

第3章「森元美代治は語る」チバリヨ・ミヨジ！（負けんじゃねえぞ、美代治）  
第4章「森元美恵子は語る」スムア・ピサ・ジャディ（やれば、何でもできる）

でのお二人のお話が印象的でした。

>文枝さん

句会でどの句が「天」になるかは、作者自身にもわからないというところが面白いですね。まさに天のなされるわざのような気がします。

[編集済](#)

**ミュージカル 「チバリヨ」** 投稿者：[文枝](#) 投稿日：2005年 2月 1日(火)20時49分46秒

[返信・引用](#)

こんばんは トラ千代さんから、ミュージカル 「チバリヨ」の公演のことをお聞きし、会場が川越市民会館と知り、宣伝を買って出ました。これで私の穴倉も知れてしまいましたが。作曲者の高橋如安さん、じきじきにチラシを持ってきてくださり、恐縮でしたが、どこも、いい反応で、教育委員会、生涯教育課では、プリントして、市内9ヶ所の公民館にチラシを置いてくださるとのことです。大口は社会福祉協議会、中央図書館、保健所で、勤労婦人ホームなどで、他は個人的関係団体や教会に協力をお願いしました。森本さん、朗読会の時にいらしていたのですね。ミュージカル 「チバリヨ」の成功を心から祈ります。皆様も是非いらしてくださいね。

**ミュージカル「チバリヨ」** 投稿者：[トラ千代](#) 投稿日：2005年 2月 1日(火)22時22分1秒

[返信・引用](#)

田中さん、こんばんは。  
初めて、書き込ませていただきます。

森元さんは 本当に活動的な方ですね。  
お人柄の誠実さと前向きの姿勢に いつも頭が下がるおもいでいます。  
彼の話をお聞きするたびに、「勇氣」を頂いて、明るい気持ちになります。  
ミュージカルも見たいし、ミニ講演会も聞きたいのですが、  
11日は 前から予定が入ってしまい 参加できなくて すごく 残念です。

文枝さん！宣伝をありがとうございます！！  
あの情報はアリスさんから頼まれて 書き込んだのですが、  
文江さんがこんなにも精力的に動いてくださり、感激しています。  
今はアフリカに行っていらっしゃる森元さんがお聞きしたら、どんなにか喜ばれることでしょうか。  
高橋如安さんも 強力な応援団長が現れて、感激されたことでしょう！  
人と人とは こんなふうにつながっていただけるのですね！  
ミュージカル、皆さんの力で 成功させたいですね。

**「チバリヨ・ミヨジ！」のその後書きから** 投稿者：[田中 裕](#) 投稿日：2005年 2月 2日(水)11時21分0秒

[返信・引用](#)

>トラ千代さん

投稿有り難うございます。

前に言及しました本  
「証言・日本人の過ち：ハンセン病を生きて－森元美代治・美恵子は語る 人間と歴史社 1996」  
の後書きを紹介します。

編集者の八重樫絢子さんは、この本を編集された動機を次の様に書かれていました。

「私自身（八重樫さん）のことをいえば、五二歳の主婦、十一年前に乳ガンの手術をして、同じ病気で親しい人たちをなくしています。ほんの紙一重の幸運に私は恵まれました。術後十年たったころから、私が生きていることの意味を考える様になっていました。そんなときにこの

本の話があったのです」

八重樫さんは、予防法廃止の頃に森元夫妻の体験を聞き取り取材され、この本を纏められたのですが、ご夫妻との交流を通じて、次の様に感じられたとのこと

「二人の体験談を間近で聞いているうちに、二人が実名で語ろうと決断した勇気を、私は真摯に受けとめなければならぬ、協力できるか、できないかではなく、私がやらなきゃいけないんだ、と思う様になりました。これは二人の個人史であるだけでなく、多くのハンセン病の患者さん達の記録でもあり、のこさなければいけない、と実感したのです。この記録は、出来るだけ多くのひとに読んで頂ける様にしたい。そのために、森元さん夫婦の気持ちになって、原稿にする。分からないことは聞く。正確なデータを集める。作業の中盤にさしかかってやっと、私の目標が定まりました。」

八重樫さんは、国会図書館に出掛けて、森元美恵子さんのお母様のエフィーさんの話に出てくる北スラウェシの地図まで調べられたとのこと。

結語から引用しますと

「森元夫妻の人生を支えてきた言葉「チバリヨ・ミヨジ!」「スムア・ビサ・ジャディ」それは「どんな厳しい環境にあっても、自分を信じて生き抜く」といういみじやあないかと私は理解しました。森元夫妻と知り合い、家族でつきあえる友達になって、はじめて、ハンセン病に対する偏見から、やっと抜けだすことができました」

**初めて書き込みします** 投稿者: [高橋如安](#) 投稿日: 2005年 2月 2日(水)14時58分39秒

[返信](#)・[引用](#)

ミュージカル「チバリヨ」を主催しますNPO法人「アバ音楽の森」代表の高橋如安です。このたびは、まだ見ぬ皆様のご協力を心から感謝申し上げます。こちらのNPOは音楽や絵画演劇をはじめ文芸者が集い、またその才能を次世代に生かしたく、そして心身ハンディナーとの交流を目的に作られました。宣伝になりますが、埼玉県大里郡岡部町のはずれに（岡部チサン・カントリークラブと日大の所有地の間にあります）ひっそりと400坪に6棟の宿泊施設を要しています。ここでは合宿をしたりキャンプをしたり、また色々な目的で利用していただいております。さて、このミュージカルの構想は20年前にさかのぼり、やっと実現することができました。ハンセン病は誤解され、病者は言われなき隔離と差別を法的にも受け、我々が想像すらできない苦しみの中にいるのだと思います。これは国や医師だけの責任ではなく、国民の責任だと思います。次世代を担う子どもたちに、差別や偏見。そして人の下に人を作らない、そんなことをこのミュージカルで表現したく、スタッフ一同願っております。かなしいかな、宣伝方法をまったく知らない素人が運営していますので、なかなか思うようにはなりません。そんな中、皆様のご協力はありがたいことです。新しい情報としては、このテーマとなりますハンセン病。楽しいミュージカルなら子供を連れて見に行きたいが思い話では・・・そんな見方をするのが大方の意見のようです。これは、僕らは想像すらしなかったことで、多くの善良な市民はそう思っていることです。これをバネに、それこそ「チバリヨ」負けるんじゃない! です。新作の作品は、セリフの暗記から歌まで、すべて覚えるわけで大変な労力と情熱を必要とします。子どもたちに見せてやりたい、感じてもらいたい、ただただその一念であります。とりいそぎ、お礼まで  
如安

**「アバ音楽の森」 拝見しました** 投稿者: [田中 裕](#) 投稿日: 2005年 2月 2日(水)19時45分41秒

[返信](#)・[引用](#)

>高橋如安 様

公演前のお忙しいところ書き込み頂き有り難うございました。[アバ音楽の森](#)のHP拝見しました。アヌイ神父の追悼ミサのときに、全生園で森元さんと知り合われたということ伺いました。20年の間あたたためておられた着想が作品として結実されたとの由、是非とも聴かせて頂きたいと思っています。

**高橋如安 様** 投稿者: [文枝](#) 投稿日: 2005年 2月 2日(水)21時40分31秒

[返信](#)・[引用](#)

ただいま帰宅して、同士たちのHPをクリックしましたら、高橋如安様のご丁寧な書き込みがあり、お忙しいのにと驚いています。私はガラクタ箱さんでは、「とうなす」こちらでは、俳句や短歌の投稿をさせていただいておりますので、「文枝」です。まぎらわしくてすみません。高橋如安様には、本名をお知らせしましたので、掲示板の記事は判読してくださいませ。みなさま、心の底から応援しております。成功をお祈りいたします。

**うれ** 投稿者: [高橋如安](#) 投稿日: 2005年 2月 4日(金)11時06分6秒

[返信](#)・[引用](#)

ありがとうございます  
 あと7日で公演を迎えます。  
 短期間で脚本、作曲、演奏者を決め、演者はそれを覚えるわけですから。照明音響から舞台の裏方まで、すべて人と人の輪で作ります。  
 みなさんそれぞれがその道で生活しているわけで、お金ではないこの公演とは言え、プロとしてのほこりで決して手を抜くものではありません。その姿には感動を覚えます。  
 みなさん、スケジュールを調節しながらですので、その間に入る人もこれまた大変な心労です。  
 そろそろ円形脱毛症になりかける状況の中、とてもうれしく感動的なことがありました。  
 HPをごらんの方から、現金書留が届けられました。  
 知らぬ方から不思議を覚え開封しますと「ハンセン病文学を読み深い感銘を受けています・・・」と直筆で書かれていました。  
 ほんとうにありがたいことです。  
 ネットでは、誹謗中傷に悩まされますが、心ある人がいるのも事実です。  
 みなさまには感謝申し上げます。  
 この公演はスタート・ラインに立つだけで、この後は、多くの子どもたちに見てもらいたいと思っております。  
 うれしい話のおすそわけ  
 如安

チラシです

[『チラシ』](#)

プリントできますし、地図も見られます。  
 川崎市近隣の方にぜひお知らせください。

**2月の題詠のことなど** 投稿者：[田中 裕](#) 投稿日：2005年 2月 4日(金)23時09分2秒

[返信・引用](#)

>高橋如安 様

[ミュージカル「チバリヨ」の公演のパンフレット](#)をこの掲示板と[桃李談話室](#)にリンク致しました。「人と人の輪」というところ共感します。私もささやかながら、それを大事にして継続して活動できればと思っています。2月11日は、勤務先で入学試験日なのですが、とくに呼び出しがかからぬ限り、出掛けようと思っています。

>文枝さん、皆さん

[句会桃李](#)の2月定例句会の兼題（三つ）を考えています。ひとつは、画帳「武蔵野の四季」と共通にして、ガラクタ箱さんの写真集から花鳥諷詠題を戴く予定です。また、その他の二つの兼題を考えています。これはいつも句会桃李で高点句をとられたかたから知恵を拝借しています。良いアイデアがありましたら、どうかお教え下さい。参考までに過去の事例をあげますと

平成16年2月	兼題1：「下萌」	平成13年2月	「鶴」
	兼題2：「埋れ木」		「ビル」
	兼題3：「夕陽」（不言題）		「宇宙」（不言題）
平成15年2月	兼題1：「冴返る」	平成12年2月	「節分」
	兼題2：「梅」		「薄氷（うすらひ）」
	兼題3：「白魚」		「待ち遠しい」（不言題）
平成14年2月	兼題1：「雪解」	平成11年2月	「風邪」
	兼題2：「五輪」		「試験」
	兼題3：「恋猫」（不言題）		「バレンタイン」（不言題）

ここで、不言題とはその言葉を使わないで心を詠む兼題です。たとえば、「夕陽」の不言題ですと、

赤々と親子を染めて春の土手 素人

のような句が詠まれます。（2月12日くらいまでにお教え戴けると幸甚です）

[編集済](#)

**田中さん、ありがとうございます** 投稿者：[トラ千代](#) 投稿日：2005年 2月 5日(土)00時19分7秒

[返信・引用](#)

「チバリヨ」の宣伝、ありがとうございます！！  
 高橋如安さん、心温まるお話をありがとうございました。  
 田中さんも観にいかれるのですね。  
 エミさんのお友達も誘い合わせていかれるとか。  
 人の輪がだんだん繋がっていくのを感じます。  
 高橋さん、よかったですね！

[返信・引用](#)

**お知らせをよろしく!** 投稿者: **トラ千代** 投稿日: 2005年 2月 5日(土)00時25分32秒

全生園の入所者の方で、入園以来、60年近く詩、俳句、そして五行歌を作り続け、昨年、歌集「望郷の丘」を出版された伊藤赤人さんが、テレビ出演されます。

2月 8日(火)NHK総合 首都圏ネットワーク (午後6時10分から7時)

時間は5分程度なのですが、療養所での生活、望郷の想い、詩作により支えられた精神、五行歌への思い入れなどが語られているのではないのでしょうか。

首都圏にお住まいの方、是非、ご覧になってくださいね。

<伊藤さんの五行歌>

空見る	残酷で
自由と	惨めで
考える	貧しかった
自由	青春が
それが隔離	背骨になっている

**なんという「自由」**・・・投稿者: **真奈** 投稿日: 2005年 2月 5日(土)17時22分35秒

[返信・引用](#)

伊藤赤人さんの五行歌

空見る  
自由と  
考える  
自由  
それが隔離

ずしんと来る歌でした。  
ささやかですが、私も60年代の希望退職(既婚女性と40歳以上の女性を対象)という指名解雇に直面して一年間完全に仕事を干された苦しい時期がありました。ひと言でも愚痴をこぼせば自分が瓦解するような気がして自ら隔離していたのかも知れませんが・・・  
8日のTV、是非見るつもりです。

11日のミュージカル「チバリヨ」、チケットは当日でもよろしいのでしょうか?

**チバリヨに関連して** 投稿者: **文枝** 投稿日: 2005年 2月 5日(土)18時38分55秒

[返信・引用](#)

田中さん  
「チバリヨ」公演チラシ、リンクありがとうございます。  
今日も100枚引き受けてくださる団体がありました。当日も迫ってきておりますが、スタッフ一同がんばっておられます。祈りのうちに覚え、エールをお願いいたします。  
2月の句会桃李の席題、少し時間をください。

トラ千代さん  
「チバリヨ」公演のお知らせ本当にありがとうございます。宅から、事務所まで自転車で10分です。できることをお手伝いさせていただくつもりです。  
それと、2月8日(火)NHK総合 首都圏ネットワーク、お知らせくださりありがとうございます。カレンダーに書き込みました。

真奈さん  
「チバリヨ」はシルバーは無料です。川越市民会館は広いので、座れないことはないと思いますが、お早めにお出かけくださいませ。駅から離れておりますので、バスを利用いたします。リンクの地図をご覧くださいませ。

**(無題)** 投稿者: **トラ千代** 投稿日: 2005年 2月 6日(日)22時18分27秒

[返信・引用](#)

文枝さん  
温かく、力強いお言葉をありがとうございます。  
「チバリヨ」の公演のことを知らせてくださったのは、アリスさんなのです。  
アリスさんから「掲示板に書き込んでいただけないから」と依頼されて私が書き込みました。  
アリスさんの提案が元になり、皆さんが動かれて、こんなにも広がりを持つことが出来たのですね。  
彼女に、文枝さんのお言葉をお伝えしますね。

それにしても 100枚のチラシを引き受けてくださる団体があったの  
ですか！  
文枝さんの日ごろの交流の成果がこういうときに発揮されるのでしょうか。  
すごい力だと思います。

首都圏ネットワーク 私も楽しみにしています。忘れないようにしなくては。

真奈さん  
ご自身の辛い経験を話してくださり、ありがとうございます。  
私も 伊藤さんの歌の 重いテーマにずしんときたり、  
しなやかな感性にはっとさせられることが多いです。

園に来られる機会がありましたら、伊藤さんとお話できるといいですね。  
伊藤さんは 俳句を長い間 作っておられますから。

[編集済](#)

**BBA「東風吹かば」再開のお知らせ。** 投稿者：[しゅう](#) 投稿日：2005年 2月 6日(日)16時11分21

[返信・引用](#)

秒

また、よろしくお願ひします。

「不在の街」  
<http://www.din.or.jp/~aki28/>

「東風吹かば」  
<http://www.aiisai.org/cgi/syuu/bbs/light.cgi>

**しゅうさん、再開よかったですね！** 投稿者：真奈 投稿日：2005年 2月 7日(月)22時28分22秒

[返信・引用](#)

パソコンの修理が終わって戻ったとき、しゅうさんのページがないので心配しておりました。  
「東風吹かば」にはちょっと辟易しましたが、「不在の街」は内容が豊富で充実した編集でしたので消えてしまうのは残念・・・と思っておりました。  
今後もしゅうさんらしいページで楽しませていただけますよう・・・期待しております。

**いよいよ明日ですね** 投稿者：トラ千代 投稿日：2005年 2月10日(木)21時56分46秒

[返信・引用](#)

ミュージカル「チバリヨ」  
いよいよ 明日ですね。  
皆さんの情熱が一つになって、爆発するようなミュージカルになりますように！  
文枝さんのパワー、きっと通じますよ。

高橋如安さん、成功を確信しています！！

田中さんはじめ HPで繋がった何人かの方々が駆けつけるそうですね。  
たくさん 楽しんでくださいね。

**ミュージカル「チバリヨ」** 投稿者：[高橋如安](#) 投稿日：2005年 2月10日(木)23時08分55秒

[返信・引用](#)

ついに明日になりました。  
裏方の仕事は、まだまだ明日の開場まで続きます。  
千葉県、神奈川県からもお手伝いに来ます。  
いま、21：25に会場での準備が終わりました。舞台監督、美術、照明、音響など10人ほどがギリギリまで作業が続きました。  
よくまあ、これだけこだわるものだと。何のために、もうその辺で妥協をしては？  
そんな光景を見ていて、何か、多くの人に悪いことをしているようで心が痛みます。  
ぼくの勝手な思いで、多くの人を巻き込んでいるような不安をもちます。  
遅くまで、プログラム折り。舞台裏の準備などなど。みんな無償の行為です。子どもが熱で母親を待っていたり、あまりにも犠牲が多すぎますね。それまでして、無理を押し付けるべきものか。  
舞台は最高の出来となります。彼らの技術は賞賛に値します。  
ソリストもナレーターも充分。あとはお客さんがどれほどか？ 子どもたちに見てもらいたいし、テーマのイメージから舞台が想像できますが、それを払拭する舞台となります。この技術はさすがです。  
おいでくださったお客さんはこう言うでしょう。  
こんな素晴らしい音楽劇が一回で終わるなんて。もっと宣伝できなかったものか、と。  
線香花火のようですが、この舞台スタッフでの上演は今後もできないでしょう。  
つかれました。

みなさんありがとうございます。  
如安

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fplaza.rakuten.co.jp%2Fabbamusica%2F>

**チバリヨの公演、成功を祈ります** 投稿者: [田中 裕](#) 投稿日: 2005年 2月11日(金)13時07分28秒

[返信・引用](#)

新聞でも報道されましたが、上智では、連日、入試問題に出題ミスがあり、裏方はピリピリしています。その余波を受けたわけではありませんが、私も、昨日から発熱、ついにダウンしてしまいました。そんなわけで、残念ながら、「チバリヨ」には出掛けられませんが、私の代わりに、妻と末娘が行きます。ちょうど開場の時間ですね。公演の成功を祈ります。

**チバリヨ** 投稿者: [文枝](#) 投稿日: 2005年 2月11日(金)18時53分35秒

[返信・引用](#)

皆々様 チバリヨ公演 無事にフィナーレの幕を下ろしました。  
心からなる声援と、ご来場ありがとうございました。  
ガラクタ箱さん、アリスさんとお友達、真奈さん、遠路はるばるありがとうございました。  
田中さま、奥様とお嬢さん おいでくださったのですね。もしかして、お嬢様は、茶系のコートをお召しでしたか。素敵な母娘らしい方がいらしたのですが、他の方が対応しておりましたので、失礼いたしました。  
私は本番はロビーにいたので、中の様子はわからなかったのですが、素晴らしい舞台であったことは間違いなしです。  
おいでになられた皆々様、感想聞かせてくださいね。

[編集済](#)

**チバリヨ** 投稿者: [真奈](#) 投稿日: 2005年 2月11日(金)22時06分8秒

[返信・引用](#)

今日は風は強かったけれど良い天気で、公演も無事終わり、皆さまほっとされておられることと存じます。清潔な好感の持てる舞台でした。これからの活躍を期待しております。森元さんのお話が、ご家族との葛藤のこととか南アフリカ連邦の実状などとても印象的でした。「今日ここにいて、ほんとに生きてよかったと思う」と心から実感されて話されておられました。とても励まされたような感じです。

最初、受付でなんとなく予感がして声をかけてみましたら、やはりと文枝さんでした。それからガラクタ箱さん、アリスさん、はっしーさん・・・お目にかかれてよかったです。田中さまの奥様は残念ながらご挨拶できず失礼致しました。

帰りは、蔵通りから喜多院へまわり、ちょうどお餅つきなどやっていて「からみ餅」など振舞ってもらったりしながら、川越駅まで何キロかかなり歩きましたが、古い街並みを楽しみながらのよきハイキングでした。

**チバリヨ公演写真集** 投稿者: [ガラクタ箱](#) 投稿日: 2005年 2月11日(金)23時15分28秒

[返信・引用](#)

今日川越市民会館で行われた、チバリヨ公演写真集をアップしました

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fwww11.plala.or.jp%2Fockqge%2F>

**写真集拝見しました!** 投稿者: [田中 裕](#) 投稿日: 2005年 2月12日(土)10時34分13秒

[返信・引用](#)

いやあ、早業ですね。ガラクタ箱さんの御陰で、会場の雰囲気が手に取る様に分かりました。有り難うございます。高橋さんがミュージカルの構想をもたれたのが20年前、アヌイ神父の追悼ミサであったということ、東條歌一詩集の朗読会でお世話になった森元さんのお話しなどが思い出され、人々の輪の繋がりを感じました。

[編集済](#)

**伊東柱の詩と東條の詩** 投稿者: [しゅう](#) 投稿日: 2005年 2月12日(土)21時32分43秒

[返信・引用](#)

田中さん、お加減は如何でしょうか? お大事にされてください。  
チバリヨには、参加いたしません、如安さん、文枝さん、皆様にはたいへん失礼をいたしました。

私は、東條耿一とほぼ同じ時代に生き、同じように、30歳前後に夭折した詩人、詩の方も大変共通するものがある、関心をもっていましたので、尹東柱（ユントングジュ）という韓国の、日本にゆかりのある詩人の没後60年、記念シンポジウムに出させていただきます。  
 尹東柱を紹介しがてら、村井メモに書きましたものを、貼らせて頂きます。  
<http://orange.ap.teacup.com/aki28/>

#### 尹東柱の詩

##### 白い影

たそがれが濃くなる街角で  
 ひもすがら萎えた耳をそばだてていれば  
 夕闇うごめく足音、

足音を聞き分けられるほど  
 私は聡明であったのだろうか。

いま愚かにもすべてを悟ったあと  
 長らく心の奥底で  
 悩んできた多くの私を

ひとつ、ふたつと己の在所に送り返せば  
 街角の暗がりの中へ  
 音もなく消えてゆく 白い影、

白い影たち  
 いつまでも思い切れない白い影たち、

私のすべてを送り返した あと  
 とりとめもなく裏通りをめぐり  
 たそがれが染み入ったような自分の部屋に帰りついたら  
 信念ぶかく 従容とした羊のように  
 ひがな一日 わずらうことなく草でも食もうか。

(1942, 4, 14)

尹東柱詩集 金時鐘訳 もず工房 2004年より引用

#### 東條耿一の詩

##### 葬列のあるくれがた

武蔵野 東條環

くれがた廃墟のやうなこの村にも  
 蜜柑色の灯が点(とも)ると  
 風のやうに流れ出す葬列がある

銀の刺繍(ぬいとり)の送り人(て)、銀の牽牛、真中に取囲れた銀の棺、何もかも銀色の長い葬列に聲音もなく、声も無く、暁時(おもかげ)の正月を迎へた松飾りの村を霧のやうにひっそりと覗いて行く

遊び呆(つか)れて母の膝に寝(ねむ)る子供等の夢に  
 新たな年に幸多かれと祈る年寄達の想念(おもひ)に  
 働き疲れた若者等にせめてもの夜の絆を結ぶ  
 娘等(おとめら)の肉体の底に  
 なほこれら哀しい葬列は影のごとく練り歩く  
 のであろうか

私は道端にとろとろ枯柴を焚いて葬列を見送った。しかしそれはいつまで見送っても断(き)れることがなかつた  
 憂愁(かなしみ)に疼く私の胸に遠くふるさとから寄せる潮風がおもたい  
 ああ私はいつの頃からこの哀美(うつく)しい葬列を見るようになったのであらう…  
 くれがた焙絵(あぶりだし)のやうに浮ぶ銀色の葬列はひっそりと聲音もなく、声も無し  
 私の心の村にいつまでも続く…

昭和十一年(1936)「蠟人形」二月号

東條と、伊東柱は、ほぼ同じ時代を生きた詩人です。作品を読んで思うが、ふたりは性格がかなり違っているように思う。ただ、この詩を書いた年齢が、多分同年齢ぐらいでしょう。私は、違う人格であるのに、詩の作品に、私は共通するものを感じている。ことばの質、表現の硬質、そんなものかも知れないが、人として生きる「個」への拘りのようなものかもしれない。個を、しっかりと、紛れることなく、見つめようとする視線が共通しているのかも知れない。伊東柱の詩は、読み始めたばかりですが、清明で、すばらしい詩だと思います。もうすこし、作品を読み込んで、二人の関連を考えてみたいと思う。

伊東柱の年表を少し紹介しておきます。

- 1917, 12, 30 北間島明東村（中国と朝鮮の国境あたり）に生まれる。  
親は、敬虔なカトリックで、教師。その長男。
- 1938年 ソウルの専門学校へ入学。
- 1942年 同、延専を卒業し、日本の立教大学へ入学。
- 1943年 立教から同志社へ移籍。
- 1943年7月 独立運動をしたという罪名で、被検。（伊東柱はハングルで詩を書いた。）
- 1945年2月16日 福岡刑務所で獄死。享年29歳。

**ミュージカル「チバリヨ」ご報告まで** 投稿者： [高橋如安](#) 投稿日：2005年 2月13日(日)09時23分8秒

[返信](#)・[引用](#)

ありがとうございます  
以下のHPにてご報告させていただきます。  
<http://plaza.rakuten.co.jp/abbamusica/>  
ミュージカルは楽しいもの。子どもだけでは観覧できない。親の同伴が必要。地域の街づくりに積極的な地元の青年会議所ら協力が得られない。川越の土地柄などなど難しい問題の山積での公演でした。  
新聞は読売は残念でしたが、朝日新聞を筆頭に、毎日新聞、東京新聞、さいたま新聞、タウン誌2社。NHK・FMやさいたまTV、川越ケーブルTVなどもご協力いただきました。  
如安

**今日明日と** 投稿者： [田中 裕](#) 投稿日：2005年 2月14日(月)19時13分42秒

[返信](#)・[引用](#)

まだ学務が目白押しですが、漸く一段落して、掲示板を開く余裕が出来ました。私の風邪はだいぶ良くなりましたが、今度は妻がやられて寝込んでしまいました。皆様もご用心を！

>高橋如安様

ホームページの記事を拝見。これからのご活躍を祈ります。私は日本人の作詞・作曲・演出したミュージカル（オペラ）に関心があります。実は、私の長男も声楽家志望なので、よく話すのですが、日本人の作曲したミュージカルを発表できる場が少なすぎるように思っています。宗教音楽だと高田三郎さんの曲を定期的に発表する企画などがありますが、とにかく発表の機会が数多く恵まれなければ、良い作品が生まれませんので。

>しゅうさん

伊東柱の詩、拝見。たしかに東條の初期の詩と似た様な印象を受けますね。この類似性がどこから来るのか、私にはまだつかめませんが。この韓国の詩人についても研究して下さいを期待しています。

[編集済](#)

**アバ音楽の森HP** 投稿者： [トラ千代](#) 投稿日：2005年 2月14日(月)20時48分2秒

[返信](#)・[引用](#)

高橋如安さん、ミュージカル公演、お疲れ様でした！  
私は 参加できなかったのですが、何人かの知り合いが見に行きました。  
「素晴らしいミュージカルだった」という感想が聞かれました。

ガラクタ箱さんの写真からもミュージカルの雰囲気伝わってきました。  
「お金がない」「時間がない」「人手がない」なかで それぞれの方々のご自分の役割を精一杯に果たされたその成果が出ているのですね。

なによりも HPで高橋さんが 舞台にかける情熱や 悩みや 課題を非常に率直にご自分の言葉で 書かれていることに 感銘を受けました。  
奇麗事で終わらせず、課題を正面から見つめる姿勢に 厳しさと熱い想いを感じました。

文枝さん、縁の下の力持ち お疲れ様でした！

今度、上演の機会がありましたら、私も 何らかのお手伝いをしたいと思います。

**ありがとうございます** 投稿者: [高橋如安](#) 投稿日: 2005年 2月15日(火)01時40分34秒

[返信・引用](#)

ありがとうございます。  
「素晴らしいミュージカル」だったとあり、感謝しております。  
この「チバリヨ」は、ミュージカルと言う音楽用語は適切ではなく「音楽劇」でしょう。人の受けを考えて小さな音楽劇をミュージカルとただで、適切ではないと思っております。そんな軽い作品ではないですから。  
「金、時間、人手」がない中での公演で、すべて専門家のボランティアとプロ意識から生まれた結果でした。精一杯という以上のものです。ハンセン病を子どもたちに知らせたい、の一言でした。僕は現場にいましたので、彼らソリスト・裏方の人たちを見てきました。とにかく、プロとはこんなもの、まざまざと見ました。  
普通はあるところで妥協？しますが、その妥協と言うか納得の時点が違うんですね。

僕は作曲家ですので、この「チバリヨ」の今後の発展に多くを費やすことはできません。また、短期間に作られた作品ですので改定は必要となります。この作品は、できたら小学生から高校生らに見てもらえるように改定することになりますし、それを上演する場を求めなければなりません。それには、多くの人の力を借りなければならないでしょう。それが問題となります。  
多くの方はこの作品と主旨を認め賛辞の言葉を述べるでしょう。それだけでは「チバリヨ」は動き出さないので、それが問題となります。

日本人の宗教音楽が生まれないのは悲しいことです。  
僕は宗教音楽の作曲を専門としています。僕の恩師菅原明朗先生も93歳で帰天するまでに一度として宗教作品が教会で上演されませんでした。恩師は僕にいつも言っていました。宗教音楽を書くのなら教会から離れ神と対話するのみと。  
悲しい現実があります。  
恩師の作品は膨大です。歴史に残る名作が眠っています。

この「チバリヨ」には多くのグレゴリオ聖歌と教会旋法が織り込んでありますが、誰も気がつきません（分かるはずはないですよ、音大で学ばないのですから）。  
これが現実です。  
僕は思うんです。主役の美代治彼の希望と信頼と愛は、現在の旋法（音律）では表現できないことを。結局は教会旋法にしてそれらしく表現できることを。僕の技量では満足な表現ができませんでした。

ベートーヴェンは第九を書くときに教会旋法に苦しみました。  
僕はプロローグを書くにあたり、教会旋法を熟知しているバッハとその前の時代を模倣し習作して書いた作品を用いました。通常のミュージカルでは考えられない用方をしましたが、回数を重ねることで、その意味を理解してくれる聴衆が現われることを期待しています。  
すみません。長くなりました。  
みなさまに感謝してます。また、この「チバリヨ」に息吹を吹き込んでいただきたいものです。  
感謝と希望をもって  
如安

**教会旋法のことなど** 投稿者: [田中 裕](#) 投稿日: 2005年 2月15日(火)07時49分6秒

[返信・引用](#)

高橋如安様

>僕はプロローグを書くにあたり、教会旋法を熟知しているバッハとその前の時代を模倣し  
>習作して書いた作品を用いました。通常のミュージカルでは考えられない用方をしまし  
>たが、回数を重ねることで、その意味を理解してくれる聴衆が現われることを期待してい  
>ます。

私は東久留米にある「聖グレゴリオの家」の近くに住んでいますので、昔、ゲレオン・ゴールドマン神父がグレゴリオ聖歌の研究所を創設された頃、よく聴きました。五線譜ではない独特の表記をしますね。天台声明などにちかい宗教音楽で、近代のヨーロッパ音楽以上に日本人の耳にはなじむものという印象を持っています。それをとりいれて新しく日本の歌として蘇らせるという試み、非常に興味を覚えます。  
ところで、チバリヨの録音テープの様なものはあるのでしょうか。また、歌詞は公開されているようですが、楽譜なども公開される予定はあるのでしょうか。

[編集済](#)

**「チバリヨ」** 投稿者: [高橋如安](#) 投稿日: 2005年 2月15日(火)14時18分57秒

[返信・引用](#)

田中裕さま  
グレゴリオの家の橋本さんに聞けばすぐ僕のことは分かります。

橋本さんが作られてすぐからのお付き合いですし、多分、夏の講習会や祝日御ミサでお会いしているかもしれませんね。

★園児に言わせると「調子っぱずれ」なグレゴリオ聖歌と日本の5音階との融合はなかなか難しいですね。日本技法には制約がありすぎ書く側から見ると興味が薄れるところです。

★ビデオとDVD制作中です。楽譜は練習用には配布する程度です。それにデッサン譜のピアノ伴奏なものですから。これからもピアノ譜にするかどうかは未定です。

**「チバリヨ」写真集** 投稿者：[高橋如安](#) 投稿日：2005年 2月16日(水)07時41分12秒

[返信・引用](#)

「チバリヨ」の写真集です。  
まだチェックしていない順次入力作業中ですが、いそぎご覧いただきたく。  
<http://www47.tok2.com/home/kawagoe-saitama/chibariyo/gazou.html>

**聖グレゴリオの家のことなど** 投稿者：[田中 裕](#) 投稿日：2005年 2月16日(水)12時00分34秒

[返信・引用](#)

チバリヨ写真集拝見。当日の雰囲気伝わってきました。私の同僚がSAPAという音楽集団を主宰して、長男もメンバーなものですから、僕も打ち上げ後の懇親会兼反省会にはよく出ます。なんだか、そのときの雰囲気を思い出しました。ところで、[聖グレゴリオの家のホームページ](#)があることに気づきました。僕の家はここから歩いて5分くらいですね。ここは、東條歌一の詩の朗読会の時に録音やCD制作でお世話になった川島さんもいらしていたそうです。

現在、FEB Onlineという放送局で、橋本さんの[グレゴリオ聖歌解説](#)を放送中ですね。ラジオでも聴けますが、最新の放送分はインターネットでいつでも聴けるようです。

ところでこの掲示板の下部のリンクの欄に、高橋様の[アバ音楽の森](#)のHPを掲載させて頂きました。

[編集法](#)

**2月の画帳の題は「氷」と「白梅」です** 投稿者：[田中 裕](#) 投稿日：2005年 2月16日(水)20時23分24秒

[返信・引用](#)



2月の武蔵野の画帳のテーマは「氷」と「白梅」です。  
(photo by ガラクタ箱さん)  
このうち「氷」は[画廊桃李](#)と共通です。  
詩・俳句・短歌・五行歌など、作品をお寄せください。

[編集法](#)

**百合舎の白梅** 投稿者：[ガラクタ箱](#) 投稿日：2005年 2月16日(水)17時12分58秒

[返信・引用](#)



**風邪が治られてよかったですね** 投稿者：[真奈](#) 投稿日：2005年 2月16日(水)17時19分4秒

[返信・引用](#)

グレゴリオ聖歌についてのページのご紹介有難うございます。  
早速聴いてみました。「天台声明」は知らないのですが、確かに日本古来の旋律に似ていて、ヨーロッパ音楽に馴れた耳にはむしろエキゾチックに聴こえます。なにか肉声で唱える祈り、歌の始まりというかほんらい歌とはこういうものだったのかな、とも思われました。

如安さまが「教会技法」について書かれておられますが、初めての語で実際の演奏の時にはまったくわかりませんでした。教会技法もネットで試聴してみたのですが、ひたすら驚くばかり・・・、聖歌を聴き続けるうちに少しでも聴き取ることもできるようになればいいのですが。

SAPAの同人名簿によると、ご子息さまはテノール・ヴァイオリンでいらっしゃるのですね。コンサートの際にはぜひご案内下さいませ。

**グレゴリオ** 投稿者：[高橋如安](#) 投稿日：2005年 2月16日(水)19時41分39秒

[返信・引用](#)

真奈さま

グレゴリオ聖歌 (G) は作曲の基で旋律の宝庫ですね。  
本来は 12 種類 (30 数種にも分けられるが) の旋法があり、現在はその内の 2 つになったのが長調と短調です。人間の耳がそれだけ衰えたということでしょうか。  
僕の恩師菅原明朗先生は聞き分けることが出来ましたが、僕ら程度では分かるはずがありません。これでも 30 年近くやっているのですがね。  
和声の呪縛から抜け出せないで旋法と取り組むのが作曲者の宿命かもしれません。

**チバリヨ写真集** 投稿者: **文枝** 投稿日: 2005年 2月16日(水)20時50分47秒

[返信・引用](#)

如安さま チバリヨ写真集拝見しました。画面から、スタッフの方々の熱気が伝わってまいります。ありがとうございます。そして本当にお疲れ様でした。  
私は音楽に関して、専門的知識もなくお恥ずかしいかぎりですが、「心に太陽、唇に歌を」と自分自身に言い聞かせ生きておりますので、以来  
「チバリヨ さあ がんばろう♪ チバリヨ さあ がんばろう♪ ・・」  
「幸せってなんですか、しあわせて 何ですか♪ ・・」と口ずさみながら暮らしております。  
如安さんの希望の上に、神様の大きな祝福を心よりお祈りいたします。  
また、柿の木 BBS に多くのコメントありがとうございました。

**「氷」と「白梅」** 投稿者: **真奈** 投稿日: 2005年 2月16日(水)23時43分8秒

[返信・引用](#)

「白梅」

バロックの窓に流るる梅真白  
梅白く成層圏まで透きとほり  
白梅や少女の耳朶のふくらみて  
佇ちどまるをんな坂なり梅の中  
旅立ちの日の揺れやまず白き梅

「氷」

薄氷のまたたき見たり朝の庭  
氷張る片手ぶくろで小走りに  
氷片や朝おごそかに発光す  
風の色映して青き薄氷  
待つところ薄氷のごと震えをり

俳句はほんとに苦手で、連句でも発句が一番辛い思いをしています。いつも駄句・凡句で恥ずかしいのですが・・。

**二月の画帳** 投稿者: **田中 裕** 投稿日: 2005年 2月17日(木)08時24分5秒

[返信・引用](#)

真奈さん、投稿有り難うございます。  
二月の画帳 [「氷」](#)と[「白梅」](#)をアップしましたのでご覧下さい。リアルタイムで更新します。

[編集済](#)

**梅と桜** 投稿者: **しゅう** 投稿日: 2005年 2月17日(木)20時37分47秒

[返信・引用](#)

田中さん

画帳に拙句を入れて頂きありがとうございました。  
文枝さん、エミさん、昭子さん、どうぞ、皆様、つづいてください。

私の母の命日が、3月3日、父が4月4日、そんなわけで毎年、梅が咲くと母を、桜が咲くと父を、勝手に結びつけて、開花が待たれます。

**季語のこと** 投稿者: **真奈** 投稿日: 2005年 2月17日(木)22時11分44秒

[返信・引用](#)

今回の題は「氷」ということでしたが、「氷」は晩冬なので、当季の初春の季語である「薄氷」を三句にしてみたのですが、指定のない場合はどちらでも構わないのでしょうか？

**「氷」について** 投稿者: **田中 裕** 投稿日: 2005年 2月17日(木)22時29分9秒

[返信・引用](#)

氷だけだと晩冬になりますが、仰る様に「薄氷」とか「流水」とか「氷解く」のように初春にしても構いません。

[返信・引用](#)

**ご無沙汰いたしました。** 投稿者：[昭子](#) 投稿日：2005年 2月18日(金)22時12分34秒

田中さん、HPの「日記」にも書きましたが、映画「シルヴィア」を観て以来、わたしのなかでは、あらためて小さな「シルヴィア・プラス・ブーム」が起きています。翻訳の比較も面白いものです。わたしは、かつての恩師であり、今は亡き詩人吉原幸子の翻訳したものを読んでいます。シルヴィアは三十歳で自殺という壮絶な生涯でしたが、生年はシルヴィアと吉原さんは同じです。近日中に「アンソロジー・愛の詩」にシルヴィアの「婚礼を飾る花輪」を掲載するつもりです。

しゅうさん、ご両親さまはよい季節に逝かれたのですね。わたしの父は真夏に、母と三歳上の姉は真冬に逝きました。夫の父は木苺、母は柿の実る季節に逝きました。四季ごとに死者と出会うことになります。

では、久しぶりに俳句に参加させていただきます。間違いがありましたらご指摘ください。

うすごおり遠回りして逢いにゆく  
真鯉の背痒し痒しと氷解く

梅真白真顔で耐へよ雨小雨  
梅真白「うめ」を「ゆめ」てふ童いて

[編集済](#)

**春の雪** 投稿者：[田中 裕](#) 投稿日：2005年 2月19日(土)10時03分4秒

[返信・引用](#)

今朝の東京は雪。昨夜帰宅したときはその気配もなかったので吃驚しました。寒さは感じませんね。

いのちあれ我が足下の春の雪

>昭子さん

武蔵野の画帳への投稿、有り難うございました。早速、更新しました。仮名遣いですが、このままにしたほうがよいでしょうか、それとも旧仮名に統一しましょうか。（旧仮名に統一した方を一応アップしましたが、作者の好みに従います）

統一すると以下の様になります。

うすごおり遠回りして逢いにゆく → うすごほり遠回りして逢ひにゆく  
梅真白「うめ」を「ゆめ」てふ童いて → 梅真白「うめ」を「ゆめ」てふ童みて

**すみません。** 投稿者：[昭子](#) 投稿日：2005年 2月19日(土)14時14分6秒

[返信・引用](#)

田中さん、やはり誤まりがありましたね（笑）。田中さんがアップしてくださったままで、お願いいたします。ありがとうございました。

深夜に雪を見ましたが、朝は雨でした。今は受験の季節でもありますね。息子の受験当日は雪が降り、電車が遅れて心配したことも懐かしい思い出になってしまいました。

**今朝の百合舎の写真！** 投稿者：[田中 裕](#) 投稿日：2005年 2月19日(土)15時42分38秒

[返信・引用](#)



今朝の雪景色を背景にしてガラクタ箱さんが撮影された今朝の百合舎の白梅の写真が非常に印象的でしたので、早速、武蔵野の二月の画帳、「[白梅](#)」に掲載させて頂きました。雨に濡れた白梅に雪景色の中の白梅が続いて、左の様な感じですが、あと、晴天の満開の時の白梅が揃うと良い

感じになりますね！  
皆様の投稿をお待ちしています。

[編集済](#)

**晴天の白梅をアップ** 投稿者：[ガラクタ箱](#) 投稿日：2005年 2月19日(土)18時18分13秒

[返信・引用](#)

数日まえに百合舎の梅を撮ったけど、どうも順光ということと、構図がすこし気になりましたがアップしました、晴天、みぞれ、雪が揃うとそれはそれでいいかもしれませんね。

[編集済](#)**二月の画帳** 投稿者：文枝 投稿日：2005年 2月20日(日)15時55分47秒[返信・引用](#)

こんにちは。それにしても寒いです。  
田中さん、お風邪はいかがですか。どうぞご自愛くださいませ。  
ガラクタ箱さんの、白梅の写真に、見とれており、なかなか俳句になりませんが、なんとか駄句にまとめました。

白梅 白梅や此を在所として愛す

普段着で急ぐシスター梅の道

介護士の前に後ろに梅日和

白梅のいよよ幽けし春の雪

季重りですが、ガラクタ箱さんの写真があんまりすばらしいので。

氷 池氷無心に向けしカメラアイ

氷解け底ひに揺るる生けるもの

灌ぎ物凍り二の足踏みてをり

この場合、氷ではなく、凍りのほうが落ち着きますので、勝手しました。

以上よろしく願いいたします。

**追悼コンサートにて** 投稿者：田中 裕 投稿日：2005年 2月20日(日)23時48分2秒[返信・引用](#)

ガラクタ箱さんの「晴天の白梅」の写真、文枝さんから戴いた俳句6句、早速、画帳掲載させて頂きました。有り難うございました。

今日は、これから私の同僚のご子息 大橋暁君の一周忌追悼コンサートに出掛けるところです。

—暁君の遺作に寄せて—  
「雪」の譜に如月の花黙しをり

つてごと ぶも  
春暁の伝言聴けり父母の歌

追記

先ほど（夜10時頃）帰宅しました。たいへんに感動的なコンサートでした。暁君のところは音楽一家で、お母様は一昨年に、作曲賞を受賞された音楽家、今晚はそのお母様の作曲された曲も歌われました。暁君本人も一年前急逝される直前に Snow という曲を作曲されたとのこと、その楽譜を拝見しました。今日のプログラムは、最初は、暁君の友人達の奏でるブラスバンド、ジャズ—これも高校のコンクールで優勝したそうです—、父母とその友人達の合唱、締めくくりはフォーレのレクイエムでした。

[編集済](#)**晴天の白梅** 投稿者：昭子 投稿日：2005年 2月21日(月)17時36分45秒[返信・引用](#)

ガラクタ箱さんの梅の写真が追加されましたようで、また下手な俳句を。

梅咲きぬ旧き軒端を横切りて あずき

**Re:晴天の白梅** 投稿者：田中 裕 投稿日：2005年 2月21日(月)21時33分59秒[返信・引用](#)

梅咲きぬ旧き軒端を横切りて

を追加掲載しました。ところで、作者名は「昭子」で統一したほうがよいですか。それとも、この句だけ「あずき」にしますか？

---

**またまた、すみません。** 投稿者：[昭子](#) 投稿日：2005年 2月22日(火)10時38分30秒

[返信・引用](#)

田中さん、おはようございます。快晴のあたたかい日ですね。せっかく「俳号」があるのですから「あずき」で統一したいと思います。よろしくお願い致します。お手数をかけて申し訳ありません。

---

**ブログ事始め** 投稿者：[田中 裕](#) 投稿日：2005年 2月23日(水)23時29分18秒

[返信・引用](#)

最近、日記と掲示板とHPの三つの機能を融合した「ブログ」というシステムが活用されているようです。しゅうさんも「村井メモ」で使っていますね。

試みに22日から[プロセス日誌](#)というブログのページを作ってみました。たしかに便利ですね。誰でも無料で開設できると、相互にリンクしたり、コメントを寄せたりできます。まだ全ての機能を試しているわけではありませんが、画像もリンクできるようです。

[編集済](#)

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

---

**プロセス日誌** 投稿者：[しゅう](#) 投稿日：2005年 2月23日(水)22時58分35秒

[返信・引用](#)

拝見しました～。  
すてきですね～ 落ち着いていて、とてもイメージの膨らむ色だと思いました。  
専門の学問的な内容と、日記的なもの、バラエティーに富んでいて、魅力のあるブログですね。  
これから、毎日、拝読するのを楽しみにしています。

---

**掲示板の模様替えなど** 投稿者：[田中 裕](#) 投稿日：2005年 2月24日(木)13時58分4秒

[返信・引用](#)

TeaCup掲示板はシステムの変更があったようで、パスワードtojo をあらためて入力しないと入れなかったですね。あたらしくPCの画像をアップロードする機能が付いたようです。249件の過去ログの閲覧がやりやすくなりましたが、250件を越えると消えてしまうので、とりあえず、2004年10月17日から現在までの過去ログは別途に保存しておきました。これでしばらくは大丈夫でしょう。

>しゅうさん

ブログはたしかに良いメディアであると思いました。各記事を個別にリンクできること、書き直しや下書きの機能があることなどおおいに気に入りました。色々な場所からアクセスできて、原稿が書けるのが便利ですね。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

---

**3月1日の検証会議のことなど** 投稿者：[田中 裕](#) 投稿日：2005年 2月24日(木)15時21分23秒

[返信・引用](#)

この日は、私は、午後二時から上智で卒業生対象の学務がありますので、会議そのものには出られそうにありません。ただ、四谷と永田町は近いので、会議の前に、星陵会館に立ち寄り、傍聴者に配付される資料等入手できるのであれば、そうしようと思っています。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

---

**素的なプロセス日誌！** 投稿者：[真奈](#) 投稿日：2005年 2月24日(木)22時31分43秒

[返信・引用](#)

ゴッホの絵かと思ったほどすばらしい絵が目に飛び込んできました。暁さんという若くして逝かれた方のものと知り、ご両親様のお悲しみを思うと言葉もありません。でもこうして追悼のコンサートをなされ、音楽によって慰められることに少しほっとしております。

フォーレのレクイエムはかなり以前に合唱で歌った記憶がありますが、うっすらながら、リベラモルテ（？）・・ではじまるアルトの詠唱の旋律の素晴らしかったこと思い出しました。

プロセス日誌のなかの「連歌の美学」は桃李百韻に加えていただいて以来連歌に関心を持って来ましたので、今後の展開を楽しみにしております。「自然ということ」の2・3の方はかなり難しく時間がかかりそうですが・・。

3月1日の会議、最後の検証会議なんですね。  
この日は12時から私のやっている小さなグループの会があってサボル訳にいかないのに参加できませんが、皆さま張り切ってらして心強いですね！何にもお役に立たず申し訳ありません。

また寒さが厳しくなりました。  
風邪をひかないようご自愛を！

**プロセス日誌のブログの記事から** 投稿者：[田中 裕](#) 投稿日：2005年 2月25日(金)21時26分0秒 [返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

ブログ「プロセス日誌」の実践倫理のカテゴリーに[ハンセン病問題の検証ということ](#)という記事を投稿しました。不十分なものですが、現在の私の考え方を纏めてみました。

ブログでもコメントなど頂けますが、書き込みやすい様式ではないので、感想など、この掲示板にいただければ幸甚です。

また、出版と書評のカテゴリーに[桃李歌壇と柿の木のWEB出版の目録](#)を掲載しました。

東條耿一詩集の第二版、初期の詩編を追加した上で、しゅうさんと相談した上で、適当な時期にWEB出版したいと思っています。今後ともどうかよろしくお願いします。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**目標を9月4日に Re: プロセス日誌のブログの記事から** 投稿者：しゅう 投稿日：2005年 2月26日(土)22時14分51秒 [返信](#)・[引用](#)

TEACUPの掲示板は、いろいろ使いやすい機能が付いたのですね！

レスが出来るのは、便利ですね～。

「東風吹かば」は奇十さんこと、神谷宏さんがサポートで作って頂きました。

その機能のほとんどが、こちらに、付いています！

神谷さんのお知り合いが、私に、shuu.orgという独自のサーバーを持つように手続きをしてくださいました。

明日、お伺いして、いろいろ接続のことを教わってきたいと思っています。

手続きができますと、プロバイダーを通さない独自のサーバー上にHP「不在の街」が載ります。アドレスや、メールも変更するようになると思います。

その時は、また連絡をしますので、お面倒を掛けますが、変更よろしくお願いいたします。

> ブログ「プロセス日誌」の実践倫理のカテゴリーに[ハンセン病問題の検証ということ](#)という記事を投稿しました。不十分なものですが、現在の私の考え方を纏めてみました。

>

拝読しました。

私は、キリスト教信者ではないので、違う立場から、今までも東條に関していろいろ書かせて頂きました、これからも、続けて対話して、東條について認識を深めてゆけたら大変にうれしく思います。

よろしくお願いいたします。

> ブログでもコメントなど頂けますが、書き込みやすい様式ではないので、感想など、この掲示板にいただければ幸甚です。

>

> また、出版と書評のカテゴリーに[桃李歌壇と柿の木のWEB出版の目録](#)を掲載しました。

>

> 東條耿一詩集の第二版、初期の詩編を追加した上で、しゅうさんと相談した上で、適当な時期にWEB出版したいと思っています。今後ともどうかよろしくお願いします。

第一版が、今になると、あまりに不完全で気になりますね。

ただ、私の都合を申し上げると、私の、非常勤講師の仕事が、この3月で終了することにしました。今勤務の学校に、その、雇用がなくなったこともあって、新しい学校への斡旋は、いろいろ家庭科の場合実習が多いので新学校は環境になれるのが大変ですし、この機会に、退職す

ることに決めました。いろいろ、教育現場が窮屈になっていることも、続ける気持ちになれなかったです。  
 それですので、すこし時間が取れますので、東條の「詩人時代」への投稿などもうすこしよく調べてみたいと思います。  
 東條の命日、9月4日までには、第2版が出来るようにするという、目標では如何でしょうか。

**ゆっくり急がずにやりましょう Re: 目標を9月4日に** 投稿者: [田中 裕](#) 投稿日: 2005年

[返信](#)・[引用](#)

2月27日(日)20時22分12秒

しゅうさん:

> 「東風吹かば」は奇十さんこと、神谷宏さんがサポートで作って頂きました。  
 > その機能のほとんどが、こちらに、付いています!

引用できるということはオプションになっていましたので早速利用した次第です。

> 神谷さんのお知り合いが、私に、shuu.orgという独自のサーバーを持つように手続きをしてくださいました。  
 > 明日、お伺いして、いろいろ接続のことを教わってきたいと思っています。  
 > 手続きができますと、プロバイダーを通さない独自のサーバー上にHP「不在の街」が載ります。アドレスや、メールも変更するようになると思います。

それは良いですね。独自のサーバーだと、かなり自由になりますね。  
 じつは今日、がらくた箱さんにもお話ししたのですが、私の利用しているGooのブログのほうも有料オプション(月額300円未満)を選ぶと、過去ログを全部ダウンロードできて、しかも1テラバイト(1000GB)まで利用できるとのことでした。将来は、ビデオ画像なども配信できるかも知れませんか。

> それですので、すこし時間が取れますので、東條の「詩人時代」への投稿などもうすこしよく調べてみたいと思います。  
 > 東條の命日、9月4日までには、第2版が出来るようにするという、目標では如何でしょうか。

賛成です。ゆっくりと急がずに時間をかけて、校正もしっかりとおこない、遺漏のない様にして第二版を出しましょう。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2Ffeigenwille%2F>

**早速、武蔵野の画帳「白梅」に掲載しました Re: 梅によせ4首** 投稿者: [田中 裕](#) 投稿

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

日: 2005年 2月27日(日)20時25分5秒

れんさん:

> ・白梅のこころ泣きして滴する花もしとどに雨のむらやま  
 >  
 > ・薄墨の梅の付け下げ銀の帯われの片身ぞ離るるこち  
 >  
 > ・紅梅の咲き競ひたり幹の雪つもりし白さ凍れるごとく  
 >  
 > ・やすまらぬ思ひちりぢり夜の更けて白梅いかに雪灯りみる

投稿有り難うございました。雪に寄せられた短歌も含めて、武蔵野の画帳「白梅」に掲載致しました。写真のイメージと調和して素晴らしいですね!

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2Ffeigenwille%2F>

**菅野淳さんのことなど** 投稿者: [田中 裕](#) 投稿日: 2005年 2月27日(日)20時27分4秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

photo by [ガラクタ箱さん](#)



白梅の御堂や風は何処から

昨年(2004年)の9月4日に全生園の愛徳会聖堂で東條歌一詩集の朗読会を開催してからもう半年近く経過した。その後、晩年の東條の晩年の手記を戦前の雑誌「聲」で発見したこと、



また昭和9年代の詩誌に投稿した東條の詩群が幾つか見出されたので、村井澄枝さんとともに彼の作品集をあらためて編纂中。遺漏のない様に校正の作業を充分にしたあとで、今年の9月までには何とか編集を終えたいと思っています。

今日は愛徳会のミサのあとで、おもいもかけず東條耿一の妹の渡辺立子さんとご縁のあった菅野淳さんの消息を伺いました。渡辺立子さんのエッセイにはF神父とあるので気が付きませんでした。菅野さんは典礼聖歌の作詞者の一人です。菅野淳とはペンネームですし、しかも典礼聖歌の楽譜には作詞者KJと書かれているだけなので、私はその名前を全く存じ上げませんでした。

現在全生園の資料館に展示されている北條民雄日記（昭和12年度）は、菅野さんから寄贈されたものです。これは、もともと自筆本が検閲によって没収されることを危惧した東條耿一が保管していたものでした。東條の数少ない遺品でしたが、それが渡辺立子さんを通じて菅野さんのもとに送られていたという事情があります。東條耿一詩集朗読会の時にもお話し頂いた新井さんが、その自筆本に基づいて復刻本を出されたのが昨年とのことでした。

菅野さんの書かれた文章は、東條耿一の義弟の渡辺清二郎さんの遺稿集でも読ませて頂きましたが、戦後間もない頃の全生園のこと、信仰と人権の狭間で苦しまれた司祭のこころの偲ばれるものでした。そのご菅野さん御自身は還俗されましたが、菅野さんの作詞された「[風はどこから](#)」（作曲高田三郎(MIDI)）や「[ごらんよ空の鳥](#)」は、いまま教会でよく歌われています。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2Ffeigenwille%2F>

**風はどこからとステキな写真** 投稿者：真奈 投稿日：2005年 2月27日(日)20時36分10秒

[返信](#)・[引用](#)

こんばんは  
今日はとても寒かったけれど、空はこの写真のように澄んできれいでした。  
さっそく写真を大きくコピーして詩を貼り付け、メロディを聞きました。ちょっと楽譜がないとうまく詩と一致しないのが残念です。

白梅の御堂や風は何処（いずこ）から  
水のいのちの匂ふ雪解け

「水のいのち」は高田三郎作曲でよくコーラスで歌われている曲なので・・・。

**訂正しました Re: 画帳にありがとうございました** 投稿者：田中 裕 投稿日：2005年 2月27日(日)22時11分45秒

[返信](#)・[引用](#)

れんさん：  
> 画帳の 紅梅の---幹の雪---雪が落ち、積もりし----> つもりし---と  
> 高台の---雪の中---で切れて--を-----> をかれし---と  
> お願いいたします。

をかれし → 招かれし  
ですね。

高台の白き一木雪の中  
をかれし身をぞ貫きとめる

と訂正しました。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2Ffeigenwille%2F>

**以下の様に校正しました** 投稿者：田中 裕 投稿日：2005年 2月27日(日)23時38分39秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

photo by ガラクタ箱さん



れんさんの紅梅の短歌と雪に寄せられた短歌を以下の様に校正しました。

紅梅の咲き競ひたり幹の雪  
つもりし白さ凍れるごとく れん



高台の白き一木雪の中  
をかれし身をぞ貫きとめる れん

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2F2Feigenwille%2F>

**いよいよ明日** 投稿者：真奈 投稿日：2005年 2月28日(月)09時26分55秒

[返信・引用](#)

上の写真変わって、春らしく明るくなりましたね。  
ご主人のオベ後のことを詠まれたれんさんの短歌に、今後の順調なご快復をお祈りしております。

昨日友人から電話があり、「赤旗」紙がハンセン病問題を見開きで大々的に取り上げ、3/1検証会議のことも載っているとのことでした。記事は郵送してもらう予定。マスコミも取り上げるとは思うのですが、どういう形、どういう内容かが問題です。

東條耿一詩集第二版、9月4日をめざして出版されるとのこと、楽しみにしております。

しゅうさん、学校を退職されるとのこと、ほんとうにお疲れさまでした。  
今、中高一貫校の教科書問題での集まりに現役の高校の先生も何人が見え、かなり主管制度の導入などで厳しい状況になっている現状を聞きました。やはり、君が代・日の丸が踏絵になっているのは無惨な感じがします。

全集の北条民雄の日記収録の巻、今月はじめに近くの図書館に行ったのですが、借り出されていて3月9日まで待ちなんです。購入は無理でも読まれてはいるのだなア〜と残念ですが嬉しい気持ちです。自筆の日記が全生園資料館にあるとのこと、いつかぜひ拝見させていただきたいと思います。ささやかな紹介ですが、連句の同人誌『れぎおん』（春号）掲載の連句作品に付ける留書として、東條耿一と北條民雄のことを書いた短文を入稿したところです。

**二月 尽 Re: いよいよ明日** 投稿者：しゅう 投稿日：2005年 2月28日(月)22時47分47秒

[返信・引用](#)

真奈さん

> しゅうさん、学校を退職されるとのこと、ほんとうにお疲れさまでした。

あ、ありがとうございます。  
こんな風に言ってくると、すこし、終わりなんだと、実感がしてきます。

> 今、中高一貫校の教科書問題での集まりに現役の高校の先生も何人が見え、かなり主管制度の導入などで厳しい状況になっている現状を聞きました。やはり、君が代・日の丸が踏絵になっているのは無惨な感じがします。

シラバスが生徒のためと言うより、外向けにうまく説明しやすいものでないとやれないというのは、如何なものかと思えます。

>  
> 全集の北条民雄の日記収録の巻、今月はじめに近くの図書館に行ったのですが、借り出されていて3月9日まで待ちなんです。購入は無理でも読まれてはいるのだなア〜と残念ですが嬉しい気持ちです。自筆の日記が全生園資料館にあるとのこと、いつかぜひ拝見させていただきたいと思います。

記録・随筆の第4巻ですね、北條の日記だけでなく、明石海人の日記、東條の妹、津田せつ子の随筆など、興味深いものが載っています。  
北條の自筆の日記は、一般の人が閲覧できるのでしょうか？  
資料館の方にあまり行かないので知らないのですが・・・私も見てみたいです。

> ささやかな紹介ですが、連句の同人誌『れぎおん』（春号）掲載の連句作品に付ける留書として、東條耿一と北條民雄のことを書いた短文を入稿したところです。

そうですか！

それは、ぜひ拝読させて下さい。  
こちらへ、出来ましたら、投稿下さい。よろしく。

**戻ってきた「北條民雄日記」** 投稿者：真奈 投稿日：2005年 3月 1日(火)00時13分11秒

[返信・引用](#)

しゅうさん

第四巻には明石海人も入っているのではかなり内容も豊富のようですね。北條民雄自筆の日記は所在が一時不明だったものが、菅野淳さんという元神父さんが保管されていて幸運にもまた渡辺立子さんのところに戻ってきたという経緯が書き込まれていました。全昌園資料館に展示されているそうですから、この伝説的に貴重な資料、いつかぜひ見せていただきたいですね。

下記は『れぎおん』掲載予定文、スペースの関係でごく短いものです。

=====

呪縛の檻を越えて  
—昭和十年代の埋もれた詩人の像—

くれがた廃墟のやうなこの村にも  
蜜柑色の灯が点ると  
風のやうに流れ出す葬列がある

・  
・

ああ私はいつの頃からこの哀美（うつく）しい葬列を  
見るやうになったのであらう・  
くれがたの焙絵（あぶりだし）のやうに浮ぶ銀色の葬列は  
ひっそりと跫音もなく、声も無し  
私の心の村にいつまでも続く・  
（昭和11年2月号『蠟人形』誌掲載）

武蔵野の一郭にある「この村」には戦前から多摩全昌園というハンセン病患者を収容していた施設がある。この詩「葬列のあるくれがた」の作者は東條耿一、十五歳で発病し昭和十七年三十歳でこの園で亡くなっている。

「いのちの初夜」の作者・北條民雄は彼の終生の友であり先輩であった。民雄の臨終を看取り、小指ほどの遺骨と民雄の日記を亡くなるまで隠し持っていたという。日記には、当時のファシズムと天皇制への批判が赤裸々に書かれており、園内の検閲を免れることは到底できなかったからである。幸いにも日記は耿一の妹が保管し神父らの手を経て今日、陽の目を見ることができた。

当時の絶対隔離政策は単なる医学的理由ではなかったであろう。逃亡させないための園内だけの金券使用や実質的な監房への拘束や断種の督励など、神国日本の「民族浄化」主義、いわば棄民政策であった。

知られない詩人・耿一の少年時代の写真は澄んで凜々しい。その詩は稚拙さはあっても純一な真情に貫かれていて印象的である。しかし十六年以降彼は詩を発表していない。そしてカトリック信仰の中に沈潜していく。

彼のわずか十年の詩作の時期とはまさに昭和史の語られざる巨大な空白の期間と重なり合う。文学者の戦争責任ひとつをとってみても論争の結論は今なお出ていない。

これが戦後六十年の現実である。

=====

『れぎおん』誌は私が同人に入っている雑誌なのですが、発行部数は1000部くらい。ほとんどの俳句結社、出版社、大学研究室などに送られているようです。まだ掲載前なのであまりおおっぴらにはできませんが・。

**早速にありがとう。 Re: 戻ってきた「北條民雄日記」** 投稿者：しゅう 投稿日：2005年 3月 1日(火)06時10分57秒

[返信・引用](#)

真奈さん

>  
> 下記は『れぎおん』掲載予定文、スペースの関係でごく短いものです。

寄稿に東條を取り上げてくださったのですね～  
拝読、ありがとうございます。  
「葬列のあるくれがた」は私も好きです。

>  
>  
>  
>  
>  
>

=====

呪縛の檻を越えて  
—昭和十年代の埋もれた詩人の像—

>  
>  
> くれがた廃墟のやうなこの村にも  
> 蜜柑色の灯が点ると  
> 風のやうに流れ出す葬列がある  
>  
> .  
> ああ私はいつの頃からこの哀美（うつく）しい葬列を  
> 見るやうになったのであらう・・  
> くれがたの焙絵（あぶりだし）のやうに浮ぶ銀色の葬列は  
> ひっそりと登音もなく、声も無し  
> 私の心の村にいつまでも続く・・  
> （昭和11年2月号『蠟人形』誌掲載）  
>  
> 武蔵野の一郭にある「この村」には戦前から多摩全昌園というハンセン病患者を収容して  
いた施設がある。

全昌園は全生園ではないかしら？  
これだけ、気が付きましたが・・・

この詩「葬列のあるくれがた」の作者は東條耿一、十五歳で発病し昭和十七年三十歳でこの園で亡くなっている。  
> 「いのちの初夜」の作者・北條民雄は彼の終生の友であり先輩であった。民雄の臨終を看取り、小指ほどの遺骨と民雄の日記を亡くなるまで隠し持っていたという。日記には、当時のファシズムと天皇制への批判が赤裸々に書かれており、園内の検閲を免れることは到底できなかったからである。幸いにも日記は耿一の妹が保管し神父らの手を経て今日、陽の目を見ることができた。

北條の日記のその部分を、時間があるとき、書き出してみましよう。  
戦前の時代ですから、天皇制について触れること自体が、非国民と言われる時代、今の時代で読むのとは違うのだらうと思っています。

ありがとうございます。

**全生園になっていました** 投稿者：真奈 投稿日：2005年 3月 1日(火)10時01分40秒

[返信](#)・[引用](#)

おはようございます。  
このページに打ち直したときに何か勘違いしたらしいです。すみませーん。入稿のほうは「全生園」になっていました。この詩を選んだのは、東條の生きた時間と場所が特定できるのでいいかな・・と思ったのでした。

また書きます。よろしく～

**昨日の検証会議** 投稿者：田中 裕 投稿日：2005年 3月 2日(水)19時09分51秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

昨日の検証会議、私は午前11時に、森元美代治さん、エミさん、虎千代さん、アリスさん、ガラクタ箱さん達と待ち合わせ、星陵会館で共に昼食をとりました。

会議が始まる前に時間がありましたので、森元さんの海外視察のときのお写真を拝見しながら近況など伺いました。その後で、会場に行きましたが、すでに北風さんが来ていたので、隣席に座り、皓星社より刊行計画中の光岡良二著作集や小笠原登著作集の話など致しました。これについては私もできるだけ協力するつもりでいます。会議が始まる前に、文枝さんもいらっしやいましたね。私は二時から上智で卒業生・留年生の世話をする仕事があり、会議は最初の部分だけ傍聴して中座したので、しゅうさんとは入れ違いになりました。

幸い、最終報告書の全文を収録したCDは受領しましたので、現在それを読んでいます。

2004年の4月に配布されたこの検証会議の（中間）報告書は342頁でしたが、今回の最終報告書はPDFファイルで902頁あり、そのほかに別冊として、「ハンセン病問題に関する被害実態調査報告」が507頁、「胎児等標本調査報告」が40頁あり、なかなか読み応えがあります。（当日は、100頁の要約版も配布されました）  
この報告書についても、時間が出来たときにブログでコメントしたいと思います。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2Ffeigenwille%2F>

**伊東柱の詩** 投稿者：文枝 投稿日：2005年 3月 2日(水)21時11分44秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

しゅうさん 遅ればせながら、尹東柱の詩のことで書き込みます。  
 貸し出していた、尹東柱関連の本2冊やっと戻ってきましたので、しゅうさんが、アップした詩を探してみました。ずいぶんと訳がちがいますので、参考になれば幸いです。  
 私の手元にあるのは、  
 「死ぬ日まで天を仰ぎ キリスト者詩人 尹東柱」日本基督教団出版局編  
 で、詩の訳は森田進です。

白い影

黄昏が深まる街角で  
 一日元気がなくなった耳をそうっと傾ければ  
 夕闇が迫ってくる足取りの音、

足取りの音が聞けるぐらい  
 私は聡明だったのか。

まぬけなことに今になってすべてが分かり  
 長い間心の底で  
 心を痛めてきたたくさんの私を  
 ひとつ、ふたつとわたしのふるさとに戻してやれば  
 街角の闇の中へ  
 音もなく消え去る白い影、

白い影たち  
 胸しめつけられる白い影たち、

私のすべてを戻したあと  
 満たされないまま裏通りを巡って  
 黄昏のように染まってくる部屋に戻れば

信念があって温厚な羊のように  
 一日中わずらわすことなく草でもむしろ。

一九四十年四月十四日

.....  
 しゅうさんが紹介して下さった、白い影

尹東柱の詩

白い影

たそがれが濃くなる街角で  
 ひもすがら萎えた耳をそばだてていれば  
 夕闇うごめく足音、

足音を聞き分けられるほど  
 私は聡明であったのだろうか。

いま愚かにもすべてを悟ったあと  
 長らく心の奥底で  
 悩んできた多くの私を

ひとつ、ふたつと己の在所に送り返せば  
 街角の暗がりの中へ  
 音もなく消えてゆく 白い影、

白い影たち  
 いつまでも思い切れない白い影たち、

私のすべてを送り返した あと  
 とりとめもなく裏通りをめぐり  
 たそがれが染み入ったような自分の部屋に帰りついたら  
 信念ぶかく 従容とした羊のように  
 ひがな一日 わずらうことなく草でも食もうか。

(1942, 4, 14)  
 尹東柱詩集 金時鐘訳 もず工房 2004年より引用

**風邪で体調がイマイチ。** 投稿者：しゅう 投稿日：2005年 3月 3日(木)09時05分40秒

[返信・引用](#)

田中さん、

検証報告会では、あいにくお会いできませんでしたね。残念でした。

あの日も風邪で熱っぽかったのですが、昨日は卒業式、ゆっくりしたいとおもっても、できません。  
田中さんも先月お風邪でしたね、今度は、私がダウンです。  
しかし、7日にある期末試験問題を作らなければならず、きょうは、それだけ、頑張りたいと思います。

文枝さん、

尹東柱の違う翻訳の紹介ありがとうございます。  
元気になりましたら、考えてみます。  
ありがとう。

**東條耿一作品集の編集と解説** 投稿者: [田中 裕](#) 投稿日: 2005年 3月 4日(金)09時37分24秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

私のブログ「プロセス日誌」に[東條耿一作品集の編集と解説](#)というカテゴリを設けました。  
東條耿一の作品集を編集しながら、その作品についてコメントしていくという作業を、ブログの中で続けていきたいと思っています。しゅうさんも、ブログ「村井メモ」を開設されているので、関連する記事は相互参照（これをトラックバックというようです）するようにしましょう。

東條耿一作品集、昨年6月より編集を初めて現在も続行中です。詩集の第二版のWEB出版は前にも書きました様に今年の9月4日をめどにします。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2Ffeigenwille%2F>

**大雪ですね！** 投稿者: [田中 裕](#) 投稿日: 2005年 3月 4日(金)13時29分3秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

photo by ガラクタ箱さん



今日は季節はずれの大雪です。ガラクタ箱さんの最新の写真を拝見したので、早速、使わせて頂きました。お風邪のほうは大丈夫ですか？

実は、駿河療養所で開催されている「共生と創造」というイベント、今週末に見学に行くつもりでしたが、この大雪なので、今日は避けて、土曜日まで様子を見ます。

森元さんのおかげで菅野淳さんとも連絡が取れましたので、東條耿一詩集の朗読会のCDとテキストを贈呈する予定です。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2Ffeigenwille%2F>

**Re: 東條耿一作品集の編集と解説** 投稿者: [しゅう](#) 投稿日: 2005年 3月 4日(金)17時49分44秒

[返信](#)・[引用](#)

> 私のブログ「プロセス日誌」に[東條耿一作品集の編集と解説](#)というカテゴリを設けました。東條耿一の作品集を編集しながら、その作品についてコメントしていくという作業を、ブログの中で続けていきたいと思っています。しゅうさんも、ブログ「村井メモ」を開設されているので、関連する記事は相互参照（これをトラックバックというようです）するようにしましょう。

「プロセス日誌」が、どんどん充実し膨らんでいっておられますね～  
トラックバックというのは、よく分からないのですが、「村井メモ」にリンクを付けておきました。

>  
> 東條耿一作品集、昨年6月より編集を初めて現在も続行中です。詩集の第二版のWEB出版は前にも書きました様に今年の9月4日をめどにします。

**Re.切られた木** 投稿者: [克](#) 投稿日: 2005年 3月 5日(土)21時10分34秒

[返信](#)・[引用](#)

・サクラサクラヤヨイノソラハミワタスカギリナニモナイデス  
都合ってももあるんだろうけど、なんか、いつも「都合」なんだよな。  
ガラクタ箱さんのところだけ、アクセスできない。原因がわからない。

**ガラクタ箱掲示板について** 投稿者：ガラクタ箱 投稿日：2005年 3月 5日(土)22時14分14秒

[返信・引用](#)

或る特定の人をアクセス禁止に設定してありますが、もしかしてその設定が原因で克さんがアクセスできないのかもしれませんが、いまその設定を解除しましたので試されたらどうかな。

**戻ってきた「北條民雄日記」** 投稿者：しゅう 投稿日：2005年 3月 5日(土)22時19分40秒

[返信・引用](#)

真奈さんへ

遅くなりまして、失礼しました。

> 北條の日記のその部分を、時間があるとき、書き出してみましよう。  
> 戦前の時代ですから、天皇制について触れること自体が、非国民と言われる時代、今の時代で読むのとは違うのだらうと思っています。  
>

東條が、北條の日記を自分の手元に取り上げて、それを、書き写して一応問題の無いようにして、川端康成へ、妻文子の父に託したのには、2カ所気がかりだったのではないかと思います。その部分を書き出します。

1月28日

民衆から（天皇）を奪つたら後に何が残るか。何にも残りはしないのだ。彼等はこの言葉の中に自己の心のあり場所を求めやうとしてある。それは何千年かの間に築かれた（偶像）であるにしろ、しかし彼等はこの（偶像）によつて心の安定を得てゐるのだ。それは国家そのものに対する態度である。現在の彼等にとつてはこれのみが残された唯一の（偶像）なのだ。重要なのはこの点だ。

3月28日

しかし（事務員共）よ、（汝等）は余にこれだけの侮辱を与えてそれで楽しいのか？  
しかしこんなことを云つたとて分かる奴等ではない。  
彼等の頭は不死身なのだ。低俗なる頭には全く手のつけやうもない。  
（内田守人）の文章を読むと、（林院長）は癩文学を保護してゐるさうだ。笑はせやがる。  
（内田守人）には二度会つたことがあるが、愚劣極まる男だ。私も十二年癩文学のために努力してきましたよ、と何度もくり返して平然としてゐられる男だ。誠にもつて（癩療養所の医者）にはろくな人間がをらぬ。

**Re: 尹東柱の詩** 投稿者：しゅう 投稿日：2005年 3月 5日(土)22時48分22秒

[返信・引用](#)

> 「死ぬ日まで天を仰ぎ キリスト者詩人 尹東柱」日本基督教団出版局編  
> で、詩の訳は森田進です。

文枝さんは、どちらの訳がお好きですか？  
わたしは、金時鐘訳の訳が、硬質な感じのところが好きです。言葉の切れも金時鐘の方が良いように思う・・・詩の文体の好みなのでしょうが・・・  
制作年も違っていますが、尹東柱が日本に来たのが、1942年のようなお話でしたが、シンポジウムでは、  
まだまだ不明な処があるんでしょうね？ 独立扇動罪？だったか、ハングルで書かれた詩を残すことが難しい戦時下でしたから、戦争が終わるまで、大事に封印されて土中に埋めて、遺つたらしいですね。

>  
> 白い影  
>  
> 黄昏が深まる街角で  
> 一日元気がなくなった耳をそうと傾ければ  
> 夕闇が迫ってくる足取りの音、  
>  
> 足取りの音が聞けるぐらい  
> 私は聰明だったのか。  
>  
> まぬけなことに今になってすべてが分かり  
> 長い間心の底で  
> 心を痛めてきたたくさんの私を

> ひとつ、ふたつとわたしのふるさとに戻してやれば  
 > 街角の闇の中へ  
 > 音もなく消え去る白い影、  
 >  
 > 白い影たち  
 > 胸しめつけられる白い影たち、  
 >  
 > 私のすべてを戻したあと  
 > 満たされないまま裏通りを巡って  
 > 黄昏のように染まってくる部屋に戻れば  
 >  
 > 信念があつて温厚な羊のように  
 > 一日中わずらわすことなく草でもむしろ。

>  
 > 一九四十年四月十四日  
 > .....

> しゅうさんが紹介して下さった、白い影  
 >  
 > 伊東柱の詩  
 >  
 > 白い影  
 >  
 > たそがれが濃くなる街角で  
 > ひもすがら萎えた耳をそばだてていれば  
 > 夕闇うごめく足音、  
 >  
 > 足音を聞き分けられるほど  
 > 私は聡明であったのだろうか。

>  
 > いま愚かにもすべてを悟ったあと  
 > 長らく心の奥底で  
 > 悩んできた多くの私を  
 >  
 > ひとつ、ふたつと己の在所に送り帰せば (返→帰、訂正)  
 > 街角の暗がりの中へ  
 > 音もなく消えてゆく 白い影、  
 >  
 > 白い影たち  
 > いつまでも思い切れない白い影たち、  
 >  
 > 私のすべてを送り返した あと (こちらの返すはこのまま)  
 > とりとめもなく裏通りをめぐり  
 > たそがれが染み入ったような自分の部屋に帰りついたら  
 > 信念ぶかく 従容とした羊のように  
 > ひがな一日 わずらうことなく草でも食もうか。  
 > (1942, 4, 14)  
 > 伊東柱詩集 金時鐘訳 もず工房 2004年より引用

「共生と創造」展の感想です 投稿者：田中 投稿日：2005年 3月 6日(日)07時59分41秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

御殿場で開催されたイベント「共生と創造」展を見てきました。このイベント、「国立駿河療養所・入所者自治会」主催ですが、「ハンセン病をもっと知って下さい」という啓蒙活動の一環ですが、作品展の中で、「共生と創造」をテーマにした次の展示がとくに印象的でした。



右側の写真の枯れ蓮が活けてある花器の奥のパネルに書かれた詩を拡大したものが左側の写真です。

「共に生きる」ということ、これは人と人だけでなく、人と生きとし生けるものすべてにも及びます。一茎の枯蓮にも、悠久の時の流れの中で生かされてきた履歴があります。それは、私達に沈黙の声で語っています。その声に耳を澄ませ、応答するときに、人は過去と未来のすべての存在と「共に生きている」というメッセージを受け取る—この展示からそんなことを感じ

ました。

=====

>しゅうさん

御殿場の展示会のあと、神山復生病院へも立ち寄りしました。  
シスター小島康子さんにもおめにかかり、資料館に、東條耿一の手記と朗読会のテキストにCDを付けたものを贈呈しました。

>れんさん

昨日はお世話になりました。上に書いたものの他にも  
「窓を開ける」少女と部屋の中で眠っている少女を同時に描かれた作品、オフエリアの写真等、まざまざと記憶に残っています。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2Fc%2F17f742e16d09b9be416fb04fe7868fc7>

**ありがとうございます** 投稿者：[克](#) 投稿日：2005年 3月 6日(日)11時17分49秒

[返信](#)・[引用](#)

無事、投稿できました。  
ガラクタ箱さん、ありがとうございます。

**お疲れ様です。** 投稿者：[しゅう](#) 投稿日：2005年 3月 6日(日)11時40分45秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

駿河と、神山の二つを訪ねるのはなかなか、強行軍でしたでしょうか？  
お疲れ様でした。  
神山の資料館の中はご覧になられましたか？  
お時間がなかったでしょうか？  
私も、詩集と、朗読会のCDはお送りしました。  
資料館立ち上げの功労者、藤井さんが、神父さんやシスターさんや井深さんなど施設側の人の展示に、入園者だった東條さんの展示が加わって厚みが増したと喜んでくれました。  
手記や、朗読会のテキストが加わって、よかったです。

追加

れんさん、ほんとうは私も田中さんにご一緒できればよかったのですが、風邪で体調を崩してまして、お伺いできませんでした。残念でした。  
れんさんの、「平和」のこれはマウス画ですか？ 印象的な絵ですね、色調も、モチーフもすばらしいと思います。  
また、ときどき、拝見させてくださいね。

**伊東柱の詩** 投稿者：[文枝](#) 投稿日：2005年 3月 6日(日)15時17分29秒

[返信](#)・[引用](#)

しゅうさん 元気になりましたか。くれぐれもお大事にしてください。  
さて、伊東柱の詩、「白い影」ですが、やはり、私も金時鐘訳のほうが、言葉が滑らかですし、咀嚼されていて、詩としてふさわしい訳だと思えます。

代表作の詩

死ぬ日まで天を仰ぎ  
の訳も、『伊東柱 青春の詩人』の伊吹卿訳によると  
死ぬまで空を仰ぎ  
となり、だいぶ感覚的に違ってきます。

私はネットの長い文章は読むのが苦手なので、伊東柱に関する対話は、手元の2冊の本を通してということになります。今のところ積読が、増え、今日は図書館にリクエストしていた、ハンセン病文学全集6も、借り受けてきましたので、頭の中はぐっしやぐっしやです。確定申告はしなければならぬし、少し昼寝でもして頭を切り替えます。

**全生園＝人権の森 の樹木を守ろう** 投稿者：[田中](#) 投稿日：2005年 3月 8日(火)00時02分45秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

ガラクタ箱さんの掲示板で、全生園＝人権の森の樹木を守ろうという呼びかけをしましたところ、多数のみなさまから賛成をして頂きました。

とりあえず、ハンセン病資料館の増築工事にもなう樹木伐採に抗議する次の様なメールを、工事担当者である、国土交通省関東地方整備局宮繕部宛てに送りましたので連絡致します。

国土交通省関東地方整備局営繕部 御中

多磨全生園 ハンセン病資料館の増築の担当責任者の方にメールを致します。

先週末に、ハンセン病資料館前のバス停の側の樺の木が伐採されているのを目撃致しました。  
(この下に写真を貼付しました)

これは、昭和15年に植樹された樺ですから樹齢65年、全生園の歴史をみつめてきた樹木です。ご承知かと思いますが、全生園の樹木は、療養所の緑化委員のかたがたによって植樹されたものです。1979年に刊行された多磨全生園患者自治会篇の「倶会一処」によりますと、これらの樹木は、

「地域住民から、有形、無形の援助を受けてきたその感謝のしるしに、開発によって緑の少なくなった東村山市に森を残しておく。1971年より、11万坪の敷地に植樹を始めた。私たちが地上をさるとき、センターと森が残るであろう。」

とあります。現在、療養者は平均年齢が約80歳といわれていますが、私どもは、多磨全生園を「人権の森」として残すことを考えられた入園者の方のご意志を尊重すべきであると考えております。

資料館の増築ということも大切な事業とは思いますが、増築にさいして、全生園の歴史と深い関わりのある樹木を、工事の便宜のために簡単に伐採しないことを切に求めます。

もちろん、営繕部の担当のかたも、樹木の移植等のことなどについては相応のご配慮はされたと思いますが、停留場のそばの樺の木を伐採する必然性があったのでしょうか。

樹木もまた、それを植えた人々と「共に生きてきた」歴史があります。伐採することは簡単ですが、一本の木を育てるには半世紀を要します。今後、増築工事をされる際に樹木の「いのち」を大切に配慮されて行われることを切に希望致します。

全生園＝人権の森 の樹木のために一

田中 裕

(今回は、速やかな対応が必要なので、署名は、私のみとしましたが、この文の趣旨に賛成して下さる方が、多く集まりました時点で、そのかたがたの署名を併記して、あらためて追伸として送るつもりであります)

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2Fc%2F17f742e16d09b9be416fb04fe7868fc7>

---

**「消えゆく並木」ビデオ** 投稿者：ガラクタ箱 投稿日：2005年 3月 8日(火)10時17分48秒

[返信・引用](#)

ゆうべ「消えゆく並木」ビデオを掲載したところ、或るウインドウズユーザーから見ることが出来ないと云われたんだけど、他の皆さんはどうですか。見れますか。

---

**Re: 「消えゆく並木」ビデオ** 投稿者：田中 投稿日：2005年 3月 8日(火)10時46分49秒

[返信・引用](#)

：「消えゆく並木」ビデオ、是非、皆さんに見て頂きたいと思っています。発言されているのは緑化委員長のTさんで、全生園では長老格の方です。

私はWindows ユーザーですが、ちゃんと再生できました。  
再生できない方は、クイックタイムという再生ソフトを無料でダウンロードすれば見られます。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fwww.apple.com%2Fip%2Fquicktime%2Fdownload%2F>

にアクセスして、Windows のバージョンに応じてダウンロードすれば大丈夫です。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2Fc%2F17f742e16d09b9be416fb04fe7868fc7>

---

**消えゆく並木** 投稿者：真奈 投稿日：2005年 3月 8日(火)14時21分32秒

[返信・引用](#)

“最初は出なかったのですが、下にご紹介のあったクイックタイムをダウンロードしましたら、グリーンリースの曲とTさんのお話が聞こえてきました。

“園内に並木として移植するには3年かかる、都としては切るのが安上がりであろうが、五千人の霊の眠る鎮魂の森として、ただ光化学スモッグ対策とかいうのではなく残していきたい・・・”

もう決定というのはなされたのでしょうか？最後に残念なことですなえ・・・と仰られたので、もしや？と思いました。今からでも撤回が可能なら是非檜の並木、樺の並木として残していただきたいと思います。

私の住んでいるところは住宅公団が理想的な公園団地として設計したものの、駅前から100米はあるでしょうか立派な檜の並木が続き、横の桜の並木と交差しています。桜も華麗で美しいのですが、樺はすっきりと丈が高く若葉から初夏にかけての頃は実に素晴らしい・・・。いかにも青年の樹という感じで、駅前に降りると空気が爽やかでほっとします。切り倒された樺の跡の写真は痛ましい・・・樹木にもいのちがあることを分っていただきたいと思います。

しゅうさん

北條民雄の書き込み有難うございました。  
エミさんから荒井裕樹『真筆版 北條民雄日記 昭和12年 柗の垣にかこまれて』のコピーを送って下さるといのでつき合わせて読んでみます。

たまたま本屋で高山文彦『火花—北條民雄の生涯』（角川文庫）を立ち読みしたら、よさそうだったので買ってきて読みました。もう皆さまは読まれていらっしゃると思いますが、川端康成との交流がよくわかり、また、当時の全生園の生活がリアルに書かれていてノンフィクションとしてはいい本ですね。

亡くなった民雄を霊安所に川端と創元社の小林茂が訪れ、そこで東條耿一や光岡良二ら民雄の友人に会った印象を、川端は「精神の飢えを訴えるような、また精神の苦しみで斬りかかって来るような感じを私は受けた」と書き、「この青年達は、文学というものの一つの象徴ではないかと思われて来た。いばらの冠をかぶった文学である。癪の業苦を背負っているだけに、それに追いつめられて、生死の根本問題に迫って行かずにはいられない。文学は癪の悩みを知る道であると同時に慰める道であって、ここでは宗教の苦行に近いものだろう」と書いています。

病苦はあったけれど北條はよき友人に恵まれていたと思います。お互いに反発していながら、光岡良二の「どんなに苦しくなって、どんな大きな、現在とは全然別なようになっても、そこにはきっと抜路があると思う。そして自分が変わっていくたびに、きっとそこには新しい世界があるはずだ」という言葉に北條は打たれています。それは二週間の放浪から戻ったとき、苦しい経験で判ったものは、実に、生きたい自分の意志だけであつたといい、「人間は、なんにも出来ない状態に置かれてさえも、ただ生きているという事実だけで貴いものだ」と、ここに転生をはっきり自覚したと思われる。

彼にいま少しの生命の火が燃やしつづけられたならきっと、癪をのり超えた文学的境地を切り拓いていったであろうと思うと残念でなりません。

**消えゆく並木」ビデオ** 投稿者：文枝 投稿日：2005年 3月 8日(火)17時36分43秒

[返信・引用](#)

ガラクタ箱さん 「消えゆく並木」ビデオ 掲載ありがとうございます。  
少し音声割れた感じがしますが、何度もリピートすると、順々に内容を理解することができます。ありがとうございました。  
私の住む地域には雑木林が幾つもありましたが、今ではすっかり整地されて、スーパーや住宅団地に変身してしまいました。  
雑木林を失って初めて、人々は自然と共生していた頃を懐かしがっていますが、もう戻ってきません。そのうちに団栗も椎の実も凶鑑でしか見れなくなるかもしれませんね。

**全生園＝人権の森 樹木を守ろう 2** 投稿者：[田中](#) 投稿日：2005年 3月 8日(火)22時29分14秒

[返信・引用](#) [編集済](#)

全生園では、資料館の増設に伴う樺の木の伐採の他に、もうひとつ所沢街道に沿う檜の並木を伐採する計画が進められています。こちらは、道路の側の歩道と自転車道を拡張することが理由になっています。歩道を拡張することは、お年寄りや車椅子を使うかたの爲になることで、それ自身は歓迎すべき事ですが、檜の並木を伐採せずに問題を解決する方法を講ずるべきであったのではないのでしょうか。

関係者からの情報によると、檜の並木の内側に仮歩道をつくり、檜木を移植するオプションも検討されていたようです。そのためには、全生園の敷地の一部を東京都に譲渡しなければならず、また樹木の移植ということ自体繁雑な作業であるので、もっとも簡便な道として、檜の並木を伐採することが決定されたとのこと。

しかしながら、敷地の一部を東京都の管理下に置き、檜の並木を残しつつ、その内側を歩道に解放するというプランは、もういちど検討する価値があると考えます。

そうすることによって、全生園を「人權の森」として残そうとされた1970年代からの療養者たちの願いにもっともよく答えることが出来るのではないのでしょうか。ここで、全生園で緑化委員として長きにわたって、植樹や樹木の世話をされてきた方のご発言をビデオインタビューとして記録したものがありますので、是非ともお聞き下さい。

ガラクタ箱さんの制作されたビデオインタビュー [消えゆく並木](#)です。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2Fc%2F17f742e16d09b9be416fb04fe7868fc7>

尹東柱「十字架」の訳 投稿者：[E3](#) 投稿日：2005年 3月 9日(水)03時20分9秒

[返信](#)・[引用](#)

十字架 (金時鐘訳)

ついてきていた日射しだったのに  
いま 教会堂の尖(さき)の端しの  
十字架にひっかかりました。

尖塔があのようにも高いのに  
どうすれば登っていけるのですか。

鐘の音も聞こえてはこないのに  
口笛でも吹きつつほつつき歩いてて

苛(さいな)まれた男、  
祝福されたイエス・キリストへの  
ように  
十字架が許されるならば

首を垂れ  
花のように咲きだす血を  
暮れゆく空の下  
しずかに垂らしています。 (1941. 5. 31)

(『空と風と星と詩』尹東柱詩集 金時鐘訳、もず書房、2004年6月10日発行より)  
・シンポジウムで、金時鐘さんは、「暮れゆく空の下」の「暮れゆく」を、聖書の言葉に沿って「暗くなってゆく」とすべきであった、と仰っておられました。

十字架 (愛沢革訳)

追って来た日の光  
いま教会の塔のさき  
十字架にかかっている

それはあんなにも高いのに  
どうやって昇れるのか

鐘の音も聞こえては来ないのに  
口笛など吹きながらうろつくうちに

苦悩した男、  
幸福なイエス・キリストのように  
十字架が許されるなら

首を垂れて  
花のように咲き出でる血を流すだろう  
暗い空の下  
しずかに流すだろう

尹東柱「序詩」の訳 投稿者：[E3](#) 投稿日：2005年 3月 9日(水)03時33分34秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

序詩 (金時鐘訳、前掲書より)

死ぬ日まで天を仰ぎ  
一点の恥じ入ることもないことを  
葉あいにおきる風にすら  
私は思いわずらった。  
星を歌う心で  
すべての絶え入るものをいとおしまねば

そして私に与えられた道を  
歩いていかねば。

今夜も星が 風にかすれて泣いている。 (1941. 11. 20)

.....

序詩

死ぬ日まで空を仰ぎ  
一点の恥辱なきことを、  
葉あいにそよぐ風にも  
私は心痛んだ  
星をうたう心で  
すべての死にゆくものを  
愛さねば  
そして私に与えられた  
道を歩みゆかねば。  
今宵も星が風に吹き晒らされる

(こちらは、“空と風と星と” という名の韓国料理レストランの広告ページに掲載されていたもので、訳者名が記載されていませんでした。)

いろいろな訳 投稿者：しゅう 投稿日：2005年 3月 9日(水)14時55分13秒

[返信](#)・[引用](#)

伊東柱の詩の訳は、いろいろ出ているのですね～  
愛沢革さんは、シンポジウムで司会をされた方ですね。ご自身も、訳されておられるんだね。  
あの日、朗読も、日本語とハングルと両方でしたね～ ハングルで朗読された方は、日本人だ  
そうで、韓国ファンで、ハングルの勉強し、チマチョゴリはご自身で仕立てられたと二次会で  
聞きました。

> 序詩

>  
> 死ぬ日まで空を仰ぎ  
> 一点の恥辱なきことを、  
> 葉あいにそよぐ風にも  
> 私は心痛んだ  
> 星をうたう心で  
> すべての死にゆくものを  
> 愛さねば  
> そして私に与えられた  
> 道を歩みゆかねば。  
> 今宵も星が風に吹き晒らされる

> (こちらは、“空と風と星と” という名の韓国料理レストランの広告ページに掲載されていた  
もので、訳者名が記載されていませんでした。)

こちらは、筑摩書房の教科書に入った詩の訳に似ていますね。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fhomepage2.nifty.com%2Ftaejeon%2FDongju%2FChikuma.htm>

伊吹郷訳は、言葉の前後のつながりなど自然で、とても分かりやすい詩になっていると思いま  
した。

ところで、金時鐘さんの講話は、訥々として、そしてとてもお話が丁寧で、味わい深いお話で  
したね～  
この方のお話は、また聴く機会があったら、聴きたいと私、思いました。

伊東柱の詩を読む 投稿者：田中 投稿日：2005年 3月 9日(水)17時54分15秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

序詩

죽는 날까지 하늘을 우러러  
한 점 부끄럼이 없기를,  
잎새에 이는 바람에도  
나는 괴로와했다.  
별을 노래하는 마음으로  
모든 죽어가는 것을 사랑해야지  
그리고 나한테 주어진 길을  
걸어가야겠다.

死ぬ日まで空を仰ぎ  
一点の恥辱なきことを、  
葉あいにそよぐ風にも  
わたしは心痛んだ。  
星をうたう心で  
生きとし生けるものをいとおしまねば  
そしてわたしに与えられた道を  
歩みゆかねば。

오늘밤에도 별이 바람에 스치운다.

今宵も星が風に吹き晒られる。(伊吹郷訳)

死ぬ日まで空を仰ぎ  
一点の恥辱なきことを、

二行目の読点「、」は、ハングルのテキストにはっきりと表記されているから、重要な意味があると思う。

一点の恥辱なきことを(誓う・願う・祈る)

というように動詞が省略された祈願文、宣誓文のようであるが、それだけではなく、作者には、そのような理想を宣言するだけでは尽くされない思いがあって、それが、読点「、」に込められている。

死ぬ日まで空を仰ぎ  
一点の恥辱なきことを、  
葉あいにもそよぐ風にも  
私は心痛んだ。

のように、「私は心痛んだ」まで続く思いがある。つまり

死ぬ日まで空を仰ぎ  
一点の恥辱なきことを(誓う私ではあるが、そうではあっても)  
葉あいにもそよぐ風にも  
私は心痛んだ。

「空」は「天」とも訳されているが、超越的なものの象徴である。韓国語のHaneulは「神」の意にも用いるというし、中国では、キリスト教は「天主教」と訳されていた。「天にたいして恥じる場所がない生涯」とか「天が知る、地が知る、我が知る、秘密に悪を行うことは出来ない」というような言葉は、東洋の古くからの格言である。これに対して、「風」は、相対的な関係性のなかに生きる現実の困難さを象徴しているようだ。

この詩を、作者はいつ書いたのだろうか。

[茨のり子さんの解説](#)によると、日本に留学する前の作らしい。しかし、この詩は、彼のその後の運命を予言しているような響きを感じる。彼自身の中に自分の将来歩むべき道への予感の様なものがあつたのではないか。

私は韓国語のことは良く分からないが、伊吹郷さんが「生きとし生けるもの」と訳した行は、直訳すれば「死に行くものすべてを」という意味だということ。ここは両義的なのだ。生きることと、死すべき定めにあることは同じ事なのだから。そして、それだけではなく、もうひとつ「死ぬことのできるもの」あるいは、「いつでも、死を選らぶことのできるもの」という意味もあると思う。そうであるがゆえに、死の定めにある人間には、「生きとし生けるものすべて」を、掛け替えのない「いのち」として「いとおしまねば」という思いが生まれてくるのではないか。

「私に与えられた道を歩みゆかねば」というとき、その道がどんなものであるのか、神ならぬ我々には分からない。しかし、作者が、その道を、自己の死への予感と共に、すべての生あるものをいつくしみながら、また自己の弱さを見つめながら、「義の道を歩み行かねばならない」といっていることに間違いはないと思う。

(ハングルテキストの写真は[てじょんHP](#)からの転写です)

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2Fc%2F17f742e16d09b9be416fb04fe7868fc7>

**ご教示、感謝!** 投稿者: [E三](#) 投稿日: 2005年 3月10日(木)10時40分47秒

[返信・引用](#)

>二行目の読点「、」は、ハングルのテキストにはっきりと表記されているから、重要な意味があると思う。

一点の恥辱なきことを(誓う・願う・祈る)

>というように動詞が省略された祈願文、宣誓文のようであるが、それだけではなく、作者には、そのような理想を宣言するだけでは尽くされない思いがあって、それが、読点「、」に込められている。(田中さん)

二行目、行末の読点にこめられた言い尽くせぬ思い、ご教示くださってありがとうございます。

一点の恥辱なきことを(誓う私ではあるが、そうではあっても)

田中さんのように、( )内に示されたような気持ちで読むと、ずっと胸におちてきますね。

「序詩」は、金時鐘訳に(1941. 11. 20)とありますから、ソウルの延禧専門学校文科時代(1938～1942年)、日本留学以前に書かれたもの。

・しゅうさん、金時鐘さんは喋りはうまくないけど、直に届いてくるものがあるんですね、私も好きです。

**尹東柱の詩** 投稿者：文枝 投稿日：2005年 3月10日(木)22時42分14秒

[返信](#)・[引用](#)

田中さん 尹東柱の詩の行間に秘められているであろう、深い意味を教えてくださいありがとうございます。  
 手元にある、『尹東柱』青春の詩人 宋友恵著 伊吹郷訳によりますと、序詩は1941年11月20日に書かれ、この序詩が書かれた18日後の、12月8日に太平洋戦争が勃発したと記されています。  
 この序詩は他の18篇の詩とともに、処女詩集として出版すべく用意され、その詩集の巻頭におく「序詩」として生まれたものでした。  
 しかし、諸般の事情で出版にはいたらなかったようです。

私はこの詩、「死ぬまで天を仰ぎ」の訳の方を、色紙に書いてマイルームに掲げています。

**尹東柱の「序詩」** 投稿者：真奈 投稿日：2005年 3月10日(木)23時37分37秒

[返信](#)・[引用](#)

死ぬ日まで空を仰ぎ  
 一点の恥辱なきことを、

片時も忘れまいと誓うようなこの激しい詞と

葉あいにそよぐ風にも  
 わたしは心痛んだ

この震えるような繊細な心。この読点（、）には無言であることで尽くされぬ思いがある・・・ほんとうにそうですね！

そして「風」は相対的な関係性のなかに生きる現実の困難を象徴している・・・ここは「風」が「おきる」とか「立つ」という訳もあるようですが、「そよぐ」には周囲の人々の優しい善意や思いやりすら、或る時、振り切っても「義の道」をいかになくてはならない自分とのあいだの微妙な感じがよく現れているような気がします。

「生きとし生けるもの」のところは、私は「すべての死にゆくものを」の訳のほうがいいような気がするのですが。それは、「死ぬことのできるもの」「死を選ぶことのできるもの」・・・このような困難な道を行くものを愛するのだ、という強い緊張感がこの訳のほうが表現されるように思われるのです。でも星をうたう心で・・・というところに青年らしさを感じられます。

ご紹介のあった「てじょんHP」を少しづつ読んでおります。

**鎮魂の森を守ろう** 投稿者：[田中](#) 投稿日：2005年 3月11日(金)14時33分0秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

全生園の樹木を守るべきことを訴えて、嘆願書を提出した国土交通省関東地方整備局は増築工事の責任者ですが、実際の工事が始まるのは秋以降のようです。現在は、周辺住民に対する公聴会などをひらき増築に関する了解を取り付けている段階とのこと。担当者のかたからは、

「関東地方整備局では厚生労働省からの委任を受け今年の秋頃からハンセン病資料館の増築工事に着手します。その際には樹木の扱いにつきまして十分に配慮したいと考えております。」

との回答がありましたが、問題の樺の木伐採のことは、良く分からないので、資料館の敷地整備等のことを担当している厚生労働省健康局疾病対策課に問い合わせさせてくれ、という回答がありましたので、そちらのほうの担当者にも連絡を取り、さらに調査を続けています。

森元さんにも電話連絡をしましたところ、資料館の樺や所沢街道の樫の並木を伐採するなど、信じられない決定だと仰っていました。ただ、問題は、自治会がそれを昨年末に既に了承してしまった、ということですね。一度、伐採にOKした自治会決定を覆すのはきわめて困難です。自治会執行部の面子をつぶさないように活動すると言うことが難しい。

自治会は今生活している療養者の人権を守ることで精一杯であって、とても樹木の保全のこと、将来の人権の森のありかたのことまで手が回らないということなのかもしれません。

“園内に並木として移植するには3年かかる、都としては切るのが安上がりであろうが、五千人の霊の眠る鎮魂の森として、ただ光化学スモッグ対策とかいうのではなく残していきたい・・・”

ビデオインタビュー「[消えゆく並木](#)」のなかでもっとも心を撃たれたのは、「鎮魂の森」とい

う言葉でした。全生園の森は「人権の森」であるだけではなく「鎮魂の森」であり、納骨堂に眠る5000人近い方々が、故郷の森として植樹されたもの、そのかたたちの魂の安息を祈る場であるということに気づかされました。

「人権の森」の「人権」は、今生活している人を中心とすべき事は勿論ですが、嘗て療養所で、故郷を偲びつつ植樹され、現在納骨堂でも眠っている5000人に近い方々の権利も含むのではないのでしょうか。そのかたがたの思いを後世に伝えることが課題です。人権の森は「鎮魂の森」でもあるという言葉に、目を覚まさせられた思いです。

この問題をさらに深く考えるための視点として大事なのは、明治三十九年の政府の神社合祀令による鎮守の森の樹木伐採という事件です。たとえば、熊野古道にゆかりの六つの王子社（野中、近露、小広、中川、比曾原、湯川王子）をはじめ、十三社が廃止され、新たに「近野神社」を設けてご神体を移したとのこと。廃止した神社の巨木はことごとく伐採されました。

この神社合祀令にもとづく森林破壊に抗議したのが博物学者でエコロジストの先駆者ともいえる南方熊楠でした。地域の歴史の象徴であり、貴重な動植物の宝庫となる神社林を伐採すること反対した彼の考え方をもういちど思い起こしたい。ハンセン病療養所も、入所者の数の減少と共に、その整理統合ということが問題となってきます。その場合、療養所の納骨堂に眠るかたがたの権利を守るという視点、「鎮魂の森」を守るという視点が必要です。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2Fc%2F17f742e16d09b9be416fb04fe7868fc7>

「鎮魂の森」 投稿者： [E三](#) 投稿日：2005年 3月12日(土)01時22分2秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

鎮魂の森 伊藤赤人(1986年『多磨』8月号)

私がいる病棟の窓から  
「徒然」の御歌碑のある  
森の一隅が見える  
其処は いま晩年の  
安らぎを得た入所者の  
静かな散策の場となっている

新緑をつけた  
楓 銀杏 樺 松などが  
初夏の太陽を浴び 風に揺れ  
幻想的な——  
光りのさざめきをつくっている  
そんな自然の織り成す  
光のさまをじっと見ていると  
その映(まばゆ)い光景の向こうに  
——伝説のように  
時の彼方に過ぎ去った  
消えることのない記憶の中の  
暗い一つの森が浮んでくる

かつて その森には厳しい掟があり  
入った者は森から出ることを  
許されなかった  
そんな掟の中で——彼等は  
望郷の思いに自らを燃やし  
その炎を掻き立てながら  
ひたすら命の日々を生きつづけた  
それは自由を奪われた者が 呵責な病と  
不条理に耐えながら  
なお人間として  
生きようとする——  
修羅のような  
闘いの日々であった  
——そんな中で  
多くの者たちは  
火蛾のように燃えつき  
倒れていた

——あれから  
いくたびか雪が降り  
木枯が吹き 月が照り  
森の上を霧のように  
歳月が流れていった

いま森には——

何事も無かったように  
季節の太陽が――  
燦々と降りそそいでいる

そして生き残った者たちは  
失った永い時間を思いながらも  
ようやく得た  
小さな「自由」と倖せの中で  
僅かに残された  
時を惜むかのように  
森に植えた緑の苗木を  
自分たちの命の芽のように  
育んでいる

やがてその苗木が大木となり  
生き残った者たちも  
みな森の地に還り  
新しい緑の森に生まれ変わったとき  
この森に生き  
ハンセン病と闘い  
時代の波に翻弄されながら  
歴史の襲いの中に消えていった  
人間たちのいたことも  
いつか伝説となり  
森の由来を知らない  
二十一世紀の市民たちの  
楽しい憩いの森となっていることだろう

病棟の窓から見える  
梅雨入り前の六月の森は明るく  
真向いの躑躅が真紅の花を  
いっぱいにつけて一際美しい  
森の近くに巣があるらしく  
鳩笛のような声をひびかせて  
郭公が啼いている

窓を開けると  
グラウンドで野球をしている  
若者たちの白い影が  
木の間隠れに躍り交っているのが見える

緑の木々に溢れた光りが  
今は亡き療友たちの  
鎮魂の曲を奏でるかのように  
さざめきながら  
若草の上に降りそそいでいる

「鎮魂」ということの意味 投稿者：田中 投稿日：2005年 3月12日(土)16時49分2秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

前の投稿で「鎮魂の森を守ろう」と書いたが、そこでいう「鎮魂」の意味を更に考えてみたい。そのために、島比呂志氏が、1989年に書かれた「納骨堂のゆくえ」という文を手引きとしよう。(ハンセン病と真宗一隔離から解放へ Shinshu Booklet)

私は春秋の彼岸とお盆には、納骨堂詣りに出かけるのが習慣のようになっているのだが、最近ふと、患者のすべてが死に絶えたとき誰がお詣りするのだろうか、また納骨堂は、そのままそこに、いつまでも存在していられるのだろうかなどと、不安な思いに駆られることがある。それは私自身が70才を越えて、やがて死を迎えなければならぬということと同時に、療養所自体も確実に終焉を迎えようとしているからだろう。・・・私が納骨堂に不安を感じたのは、そこに療養所の歴史が集約されており、最も端的に終焉を物語る存在だからである。・・・それは悲惨を極めた「隔離撲滅の記念碑」に他ならない。言葉を換えて言えば、生前何の抵抗もできなかった患者が、生命を代償として打ち建てた「抵抗の碑」とも呼べるだろう。いざれにしても、その存在は尊く重いものだが、それが将来もそこに在り続けられるかどうか、私達には何の保証もないのである。・・・

生存患者がいなくなり、施設が新しい目的に使用されるようになったときに、はたして納骨堂が安泰であるかどうか、誰にも分からないというのが実情である。そこで国に対して、納骨堂とその周辺を公園化して、永久保存の確約をさせることが急務ではないかと思うのだが、老人の取り越し苦労であろうか。・・・

この文は15年前に書かれたものだが、島氏はそこで、療養所の納骨堂が「滅亡の種族のシンボル」であり「隔離撲滅の記念碑」に他ならないと言う過酷な歴史的事実を率直に見つめつつ、それを「生前何の抵抗もできなかった患者が、生命を代償として打ち建てた抵抗の碑」として捉えている。そして、この納骨堂が将来どうなるかという点について、国家は何の保証も与えていない事実を指摘し、そこを、差別と人権剥奪の歴史を思い起こすための「国立歴史公園」として残すことを提案している。

この文は、鳥氏が予防法廃止の政治運動に挺身する前のものであるが、彼は、その人権回復運動の精神を、小説「海の沙」の主人公の口を借りて、次の様な「全霊協宣言」なるものによって表現している。それは、療養所の自治会を横断する組織である「全患協」が、予防法廃止よりも、予防法のもとでの療養所の待遇改善運動を重視していたことへの批判として書かれたものであるが、生者の団体である「全患協」を補完するものとして、納骨堂に眠る死者達の霊が語る「全霊協」の宣言文である。

全国国立癩療養所納骨堂ニ在籍スル諸氏ノ賛同ヲ得テ、ココニ全霊協発足を宣言スル。全霊協の目的ハ、生前、癩患者ナルガ故ニ奪ワレテイ人格ノ回復デアリ、ソレハ現存スル患者諸氏の人格回復ニヨッテ達セラレル。

この宣言で、鳥氏は、はっきりと納骨堂で眠る嘗ての仲間達の人格回復を訴えている。そして、全患協が「人間ノ尊厳」よりも金品や処遇の安定を求める運動のみに専念していることを批判し、今生きているものの「人格の回復」は、納骨堂で眠る過去の世代の「人格の回復」と不可分であることを宣言している。

鳥氏のこの宣言は、「鎮魂」ということの意味を改めて我々に反省させる。それは、死者達をいわば神棚に祭り上げ、単にその「霊を慰める」ということではない。それは、その人々の人格の回復、権利の回復を行うことなのである。なぜならば、生者の人格の回復は、死者の人格の回復と不可分であり、我々の内にあって生きている死者達への責任なのであるから。

私は前の投稿で「鎮魂の森を守ろう」と書いたが、そのときの鎮魂も、このような意味で理解しなければなるまい。それと同時に、全生園は今でこそ緑豊かな森に囲まれているが、これは決して自然林だけではないという事も記憶する必要がある。「俱会一処」によれば、全生園の森は戦争中に燃料としてあるいは防空壕建設のために伐採され、戦後しばらくの間は「丸裸同然」であったという。今の緑豊かな森の木々の多くは、ここを植林して「鎮魂の森」あるいは「人権の森」として後世に残そうという療養者達の努力の所産なのである。その森の木々には、その世話をした過去の世代の思いが込められていることも忘れてはなるまい。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2Fc%2F17f742e16d09b9be416fb04fe7868fc7>

**伊藤赤人さんの俳句** 投稿者： **田中** 投稿日：2005年 3月12日(土)18時50分51秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

>エミさん

伊藤さんの詩「鎮魂の森」、タイムリーに転載して頂き有り難うございました。たまたま、森元美代治さんの編集された「いずみ」（愛徳会60周年記念誌）のなかに伊藤さんの俳句を見つけましたので紹介します。

===== 風の音 1991年5月 =====

朝風に触れて野葶咲きにけり	銃声に貫かれけり冬木立
何処よりきしや雪虫雪恋ひて	枯草にかがめばかさと風の音
行き処なき如く蝸牛（ででむし）這へにけり	花ひいらぎ暮れ初む方へ人帰る
ふと人の真顔を見たり虎落笛	枯野ゆくざん梅のごとく夕焼けて
手の平に落ちて淡雪消えにけり	煌々と聖夜をともし神と在り

=====

>れんさん

戴いた長句に短句をつけてみました

露のいのち真夜を徹りてよみがへる	れん
ゆくすゑ昏き吾が身懼れず	柿の木

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2Fc%2F17f742e16d09b9be416fb04fe7868fc7>

**村越化石「閻浄土」** 投稿者： **エミ** 投稿日：2005年 3月12日(土)22時35分24秒

[返信](#)・[引用](#)

寒餅や最後の癩の詩(うた)つよかれ

ふと覚めし雪夜一生見えにけり

闇浄土万の虫の音鏤(ちりば)めぬ

山眠り火種のごとく妻が居り

**「鎮魂の森」** 投稿者：真奈 投稿日：2005年 3月13日(日)09時58分58秒

[返信・引用](#)

>・・・この文は15年前に書かれたものだが、島氏はそこで、療養所の納骨堂が「滅亡の種族のシンボル」であり「隔離撲滅の記念碑」に他ならないと言う過酷な歴史的事実を率直に見つめつつ、それを「生前何の抵抗もできなかった患者が、生命を代償として打ち建てた抵抗の碑」として捉えている。そして、この納骨堂が将来どうなるかという点について、国家は何の保証も与えていない事実を指摘し、そこを、差別と人権剥奪の歴史を思い起こすための「国立歴史公園」として残すことを提案している。<

納骨堂にはこのような激しい抵抗と祈りがこめられていたことを知り、けっして此処が安住の場所ではなかったことを鮮明に意志表示することでむしろ、私たちに「何があったか」を逆照明して教えているように思います。

絶対隔離の事実を知らなかった、ということに黙認してきた過去の歴史を考えれば、「汚辱の森」、「贖罪の森」であるわけですが、ここで亡くなって方を偲び、「生と再生」を願って一本一本植樹されていった気持はやはり、業苦からのがれて「安かれ」という祈りのお気持ちだったと思います。「鎮魂の森」として残したい・・・Tさんのような内におられる方のお気持ちを共有して大切にしていきたい。

調査中ということでまだ請願行動が可能ならば、いろいろ方法はあるようには思います。

**全生園の森のこと一経過報告です** 投稿者：田中 投稿日：2005年 3月13日(日)21時42分52秒

[返信・引用](#) [編集済](#)

今日、自転車で全生園まで行きましたら、例の切倒された樺の切株は既に掘起されてしましました。もうしばらくすれば、そこに樺の大木があったという痕跡も消えてしまうでしょう。遅きに失しましたが、なぜこの樹木が伐採されたかということもわかりました。

要するに新資料館の入り口前までバスが乗り入れ可能になるようにするためであり、この伐採も、正門前の樺の並木の伐採も、すべて自治会の承諾済みということでした。厚生労働省、国土建設省の担当のかたも共に、自治会の承諾なしでは何事も行わないと言うことを、しきりに強調していましたので。

そうすると、今度は、どうして自治会が、樹木を伐採することを決めてしまったのか、そして、そのことを緑化委員長の所さんにさえ事前に連絡せずに事後承諾の様な形を取ったのか、また、この樹木伐採にかかわる事柄を入園者の多くの方の知らないうちに内密に決定したのか一この辺がまだ不明朗ですし、なかなか分かりにくいところですね。

もともと全生園の森を「人権の森」と呼んだのは自治会です。現自治会長の平沢さんは、「いのちの森を守る」という御著書も出されていますし、昨年8月には、資料館で「知ろう・歩こう・全生園のみどりーこうして『人権の森』構想は生まれた」という題で講演もされています。

愛徳会のミサの後でガラクタ箱さんと一緒に所さんのお宅に伺っていろいろとお話を聞きました。ビデオインタビューのことなど、私の公開HP(ブログ)で触れましたので、そのことへの了解を得る必要がありますが、この点については、療養所の内部のものが自治会の決定に反する様な活動をするのはいろいろと差し障りがあるが、外部にいる私のようなものが一般的な視点から発言することはいっこうに構わないという趣旨のお言葉を戴きました。(ただし、この柿の木BBSのような非公開の場は別として、不特定多数の人の目に曝されるブログでは、固有名詞は避ける様にします)

所さんによれば、平沢さんも、最初は、なんとか樺の並木を残したいと仰っていたようですが、自治会決定がなされた昨年末の時点では、御自身が体調を崩され入院されていて、伐採を許可すべしという多数派に抗しきれなかったとのこと。

所さんは「俺の知らない内に樺木を切り倒す、なんてことがないように、せめてその事は事前に連絡してくれ」と自治会長に確約して貰ったそうです。要するに、現自治会の多数派のお考えになっている「人権の森構想」は、「人権」がメインであって、「森の保全」は付け足してはないかという印象をうける。いわんや、所さんの言われる「鎮魂の森を守る」というような発想は希薄のようです。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2Fc%2F17f742e16d09b9be416fb04fe7868fc7>

**ビデオ消えゆく並木 惜別の歌** 投稿者：ガラクタ箱 投稿日：2005年 3月13日(日)22時53分59秒 [返信・引用](#) [編集済](#)

れんさんはOS9だとおもわれますので、ぼくも同じ環境にして、OS9を立ち上げてみましたが、見ることが出来ました、この動画は11MというQuickTimeファイルの重たいものなので、「消えゆく並木」をクリックしましたら2～3分待ってみてください。ネットの通信速度が遅い場合はもうすこし時間がかかるかな。

<http://>

**ありがとうございます** 投稿者：克 投稿日：2005年 3月13日(日)23時26分40秒 [返信・引用](#) [編集済](#)

>所さんは「俺の知らない内に樫木を切り倒す、なんてことがないように、せめてその事は事前に連絡してくれ」と自治会長に確約して貰ったそうです。要するに、現自治会の多数派のお考えになっている「人権の森構想」には、所さんの言われる「鎮魂の森を守る」というような発想は希薄のようです。

ここが、隔靴搔痒というか、分からない。

>「鎮魂の森を守る」というような発想は希薄のようです。

希薄なわけではない。なんか、行政の云う利便性（共生ですね、シェアするという）という論理と、長時間の会議疲れってのがあったんじゃないか……。

ぼくは63歳で、戦後の下町しか知らないものですが、子どもの頃は縁日というものがとても盛んでした。植木の露店がたくさんありました。家なんてあるのは贅沢でしたから、植えるところなんかいいわけです。

でも、みんなが買うから市が成り立つわけで、おかずを何日か削ったのが、学校や幼稚園、空き地に植わったわけです。アパートの空き地なんかに。

谷中や山谷の家の軒先、道端に置いてある植木などは、戦前からの、その名残です。木というものは、そういうものです。あるものです。消えていくものでもありますが。

自治会の世代の交代というのもあろうかと思えます（まったく知らないことなのですが）。

遅きに失したのかもしれませんが、知らなかったことは何の恥でもないと思っています。花さん、しゅうさん、田中さん、北風さんのおかげで、知ることができた。これからできることもあろうかと思う。

なにがガラクタ箱さんたちにとって良いことなのか。それだけが問題です。

まずは体調を調えます。

**音声版 ビデオ消えゆく並木** 投稿者：ガラクタ箱 投稿日：2005年 3月13日(日)23時34分32秒 [返信・引用](#)

動画が見ることが出来ない場合は表紙-ビデオ-ビデオ消えゆく並木のサムネール画像クリックMP3の音声ファイルで約3Mありますので重たいです。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fwww11.plala.or.jp%2Fockqge%2Fvideo%2Fkasi.html>

**できることをしましょう。** 投稿者：しゅう 投稿日：2005年 3月14日(月)08時49分29秒 [返信・引用](#)

田中さん

今、拝読しました。

昨日は、いろいろ調査ありがとうございました。

がらくた箱さんを縁として、広がっている我々ですが、とりあえず、私たちにできるところのことをみんなで考えましょう。

田中さんが、中心になって下さるとうれしいです。

がらくた箱さんとは、いつでも気持ちは一緒にやってみましょう。

がらくた箱さんは、園にお住まいなので、何かあれば一番お迷惑がかかりますから。

**経過報告** 投稿者：田中 投稿日：2005年 3月15日(火)18時15分5秒 [返信・引用](#) [編集済](#)

3月14日、永田町の都道府県会館まで行って、厚生労働省の担当者と直接会って話しましたが、なにぶんにも担当者は、「第一回ハンセン病問題にかんするシンポジウム」の準備で忙殺されている最中なので、ゆっくりとお話しする時間はなく、まだまだ隔靴搔痒の感です。

厚生労働省健康局のかたとの連絡もさらに続けて行くつもりなので、14日は、私もさほど時間に余裕のある身ではありませんでしたが、当日、都道府県会館で開催された、その第一回の「ハンセン病に関する（政府主催の）シンポジウム」なるものにも出席しました。

これを「官製シンポジウム」と評された方がいましたが、顔ぶれを見ればそういうことも言えるでしょう。ただし、私は、出席者が公務員であれ、民間人であれ、どんなひとでも、一人の個人として、普遍的な視点から対話したいと考えています。組織に属すると言うことは、当然、自由でラディカルな発言はありませんでしたが、それでも与えられた条件の中で、何が最善かを考えることは出来るでしょう。

国賠法訴訟が終わり、検証会議がその役割をひとまず終え、そのあと政府が主催する最初のシンポジウム。時間の制約もあり、斬新な提言などはありませんが、地道にこれからもこのような活動を続けられることを望みました。

ところで、当日は、会場に、「人権の森」構想のパンフレットが置いてあり、「ハンセン病記念公園 人権の森対策委員会」あての寄付も出来る様になっていました。

私に関係者に聞いた話では、秋から資料館の増設が本格化し、しばらく資料館も休館になるとのこと。これまで、毎年約万人くらいの方が資料館に来られたそうですが、これからも啓発活動を続けて、更に大勢の人、とくに団体客にも来館して貰うための便宜をはかることを優先することが、「人権の森」構想委員会の意向のようです。樺の木を伐採したり、檜の並木を伐採することを承諾したことから判断すると、メインはあくまでも「人権」であって、「森の保護」は二次的である様な印象をうけます。この構想委員会が、山吹舎（男子独身寮）の復元のあとで、どのような活動をされているのか、これからお聞きしたいと思っています。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**「菅野淳」さんに会いました** 投稿者: [田中](#) 投稿日: 2005年 3月15日(火)18時28分50秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

典礼聖歌の「ご覧よ空の鳥」「風はどこから」などの作詞者であり、北條民雄日記を渡辺立子さんから預かり、資料館に寄贈された「菅野淳」こと古田泰人さんに東條耿一詩集の朗読会のCDと、朗読テキストと晩年の手記を組み合わせた文集を差し上げました。

古田さんは、高田三郎さんの典礼聖歌を歌う混声合唱のグループのメンバーなのですが、第二と第四月曜日の夜7時から、秋津カトリック教会の信徒会館でおこなわれる練習に来られると言うことだったので、昨夜面会した次第です。古田さんは、現在は、詩吟の会の事務局を通じて、日中の交流の仕事もされています。

日本語の詩の朗読にも関心を持っていらっしゃるのので、今年の9月を予定している東條耿一詩集の完全版ができましたら、朗詠をお願いできるかも知れません。4月2日に、古田さんとコーラスグループの皆様は、全生園で花見をされる予定とのことでしたので、そのときに合流してまたお話を伺うつもりです。この4月2日、皆様のご予定は如何でしょうか？

昨夜は、コーラスグループの練習にも特別参加しましたが、少々冷や汗もの。音痴の声混ざって皆さんの邪魔にならぬ様に苦労しました。それでも、「風はどこから」を混声合唱で歌うと、實に名曲であることが良く分かり、これは得難い経験でした。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2Fc%2F17f742e16d09b9be416fb04fe7868fc7>

**Re: 「菅野淳」さんに会いました** 投稿者: [しゅう](#) 投稿日: 2005年 3月16日(水)07時02分32秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

> 典礼聖歌の「ご覧よ空の鳥」「風はどこから」などの作詞者であり、北條民雄日記を渡辺立子さんから預かり、資料館に寄贈された「菅野淳」こと古田泰人さんに東條耿一詩集の朗読会のCDと、朗読テキストと晩年の手記を組み合わせた文集を差し上げました。

>

> 古田さんは、高田三郎さんの典礼聖歌を歌う混声合唱のグループのメンバーなのですが、第二と第四月曜日の夜7時から、秋津カトリック教会の信徒会館でおこなわれる練習に来られると言うことだったので、昨夜面会した次第です。古田さんは、現在は、詩吟の会の事務局を通じて、日中の交流の仕事もされています。

>

> 日本語の詩の朗読にも関心を持っていらっしゃるのので、今年の9月を予定している東條耿一詩集の完全版ができましたら、朗詠をお願いできるかも知れません。4月2日に、古田さんとコーラスグループの皆様は、全生園で花見をされる予定とのことでしたので、そのときに合流してまたお話を伺うつもりです。この4月2日、皆様のご予定は如何でしょうか？

この古田さんは、渡辺たつ子さんが、随筆に「疲れました」と置き手紙を書かれて行方知れずになられたと、書かれている当時若い神父さまですね？  
 「典礼聖歌を歌う混声合唱のグループのメンバー」ということですが、いまま聖職に就いておられるのでしょうか？  
 私は、是非にもお目にかかりたいと思います。  
 4月2日の、花見にご一緒させて下さい。

**私もぜひ！** 投稿者：真奈 投稿日：2005年 3月16日(水)10時54分24秒

[返信・引用](#)

伝説の「菅野淳」こと古田泰人さんにお目にかかりたいです。4月は2日も3日も空いておりますので、お花見その他よろしくお誘い下さいませ。

「風がどこから」をまた聞いてみましたが、どうも詩と旋律がうまく合いません。楽譜がございましたら、コピーをいただけると嬉しいのですが。典礼聖歌というのは、ここでも書込みのありました「教会旋法」で作曲されるのですか？「風がどこから」もちょっと不思議な旋律のように感じます。

やっと暖かくなりました。開花の時期は毎年気のもめることですが、今年はどうなりますか・・・(?)

**Re: 私もぜひ！** 投稿者：[高橋如安](#) 投稿日：2005年 3月16日(水)12時50分15秒

[返信・引用](#)

真奈さま

> 「風がどこから」をまた聞いてみましたが、どうも詩と旋律がうまく合いません。楽譜がございましたら、コピーをいただけると嬉しいのですが。典礼聖歌というのは、ここでも書込みのありました「教会旋法」で作曲されるのですか？「風がどこから」もちょっと不思議な旋律のように感じます。

>> 「詩と旋律がうまく合いません」「不思議な旋律」はまどが得てると思います。それは楽譜をみればご理解できると思います。

>> 「典礼聖歌」の386番に（神のいぶき・聖霊）に載っています。カトリック教会にありますのでコピーできるかと思えます。

>> 「教会旋法」とは関係あるのでしょうか？ どうも僕には分かりません。この曲が教会旋法によるのだとしたら、どの旋法で書かれているのか教えていただきたいものです。

>> 個人的な意見としては、真奈さまの感想と一緒に。

関係ないことですが、この「典礼聖歌」が神に捧げられた神を賛美する曲集であるのなら、どうして作曲家や作詞家の名前が公表されるのでしょうか。神に捧げられた讃美歌はすべての人から捧げられたものだと思うのですが、それとも「著作権」が派生するのでしょうか。  
 如安

**典礼聖歌の作詞者・作曲者について** 投稿者：[田中裕](#) 投稿日：2005年 3月16日(水)13時55分3秒

[返信・引用](#) [編集済](#)

高橋様：

> 関係ないことですが、この「典礼聖歌」が神に捧げられた神を賛美する曲集であるのなら、どうして作曲家や作詞家の名前が公表されるのでしょうか。神に捧げられた讃美歌はすべての人から捧げられたものだと思うのですが、それとも「著作権」が派生するのでしょうか。

> 如安

カトリック典礼聖歌（一般用）では、作詞・作曲者名は、楽譜や歌詞が出ている本文中ではイニシャルだけですが、巻末にその名前を公開しています。たとえば

TK：高野喜久雄 KJ：菅野淳 TS：高田三郎 は、個人の作詞家・作曲者名  
 CL：典礼聖歌編集部 は、編集部全体の共同制作であることを示します。

「風がどこから」は、本文では作詞KJ 作曲 TS となっていますので、菅野淳作詞、高田三郎作曲 ということが分かる。

典礼聖歌の著作権が誰にあるのか、法律上の問題は僕は知りませんが、作詞者も作曲者も無私の奉仕の精神で書いているので、それを自分の所有物であると主張することはないでしょう。

ただ、すべての信者のために、無私の精神で書かれた作品といえども、創作の場に於いては、その作品は、「一人の個人を通じて創造される」ものですから、その作詞者、作曲者の名前を伏せる必要はないと思います。「その一人の人を通じて、普遍的なものが制作された」のだという事実を尊重したい。

私達が普段使っている言葉で書かれた歌詞に、その歌詞の内容をよく理解できる人が作曲して、はじめて良い作品が出来る。バッハやモーツァルトの典礼音楽もそのようにして作曲されたと思う。もちろん、日本語の典礼聖歌だからといって、日本人でなければならないなどは考えませんが。現に、JR（R・ジャンルー）、MJ（J・メルオー）という外国人も作詞・作曲者名簿に名前を連ねていますから。

それから「菅野淳」というのはペンネームです。おそらくご本人は、自分の本名が知られ典礼聖歌の作詞者として宣伝されることは、本意ではないでしょう。嘗てはイエズス会の神父職を勤められていましたが、複雑な事情があって、還俗され、いまは一人の信徒です。

このBBSは会員制なので、ご本名を出しましたが、不特定多数の方が見る掲示板では、私は、「菅野淳」さんのご本名は明示しない様になっています。

追伸

高田三郎の作曲した「典礼聖歌（混声合唱用）」を集めたCDが販売されています。  
「風はどこから」が入っているのは

賛歌（HYMNI ET CANTICA）  
作曲・指揮 高田三郎 合唱 典礼聖歌研究会 オルガン 綾部玲子  
監修 土屋吉正  
fontec EFCD4003

四谷の中央出版にたしか置いてありました。

楽譜は、カトリック典礼聖歌集（一般用）の386番（456-7頁）にありますね。  
コーラスグループは、高田三郎さんの典礼聖歌を集めた「混声合唱のための典礼聖歌」（カワイ出版）をコピーして使っていました。

>しゅうさん、真奈さん

4月2日（土）に全生園の花見に行きましょう。詳しい時間や、待ち合わせ場所は、またあとで連絡します。

**Re: 典礼聖歌の作詞者・作曲者について** 投稿者：[高橋如安](#) 投稿日：2005年 3月16日(水)16時24

[返信](#)・[引用](#)

分52秒

田中さま  
ありがとうございます  
著作権（JASR）についてですが、最近の主権文はジャスラックに入っているように記憶しているのですが。記憶違いだとよいのですが。  
ついでに言いますと、以前の主権文は典礼聖歌によるとCL（典礼聖歌編集部）となっていますが、現行の主権文は高田三郎となっているのではないのでしょうか。前の「天にまします」も現在の「天にまします」も同一作品であること。言い換えると、前の「天にまします」が聖霊に満たされ書いたものであれば、新しい「天にまします」も同じように書かれるべきですが。歌詩が変わったのですから当然旋律も変わるべきだと思いますが。  
なにか不思議を感じます。  
如安

**「風はどこから」**・・ 投稿者：[真奈](#) 投稿日：2005年 3月16日(水)21時33分45秒

[返信](#)・[引用](#)

「風はどこから」が入っているのは

>賛歌（HYMNI ET CANTICA）  
作曲・指揮 高田三郎 合唱 典礼聖歌研究会 オルガン 綾部玲子  
監修 土屋吉正  
fontec EFCD4003<

>楽譜は、カトリック典礼聖歌集（一般用）の386番（456-7頁）にありますね。  
コーラスグループは、高田三郎さんの典礼聖歌を集めた「混声合唱のための典礼聖歌」（カワイ出版）をコピーして使っていました。<

田中さま、如安さま、詳しい情報をどうもありがとうございました。CDも探してみます。  
（中央出版）

如安さまがこの不思議な旋律は楽譜を見るとわかります、と仰るのでちょっと楽しみにしております。

2日のお花見、今日のニュースでは3日ほど早まって27日頃開花とのことで、やはり気のもめることです。

**「風はどこから」の譜面です** 投稿者：[田中裕](#) 投稿日：2005年 3月16日(水)23時00分5秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

典礼聖歌 386 「風はどこから」 菅野淳作詞 高田三郎作曲



(クリックすると拡大表示します)

日本の典礼聖歌のなかで、あなたはどの曲が最も好きですか、と問われたなら、私は躊躇することなくこの曲をあげることにしている。なぜ好きなのか、と聞かれても、とどのつまりは、好きだから好きだ、ということに尽きるのかも知れないが、あえて理由を言えば、詩（詞というより詩といたい）の内容に惹かれると共に、曲がその内容にじつにマッチしているからだ、とでも答えようか。

私は、どういうわけか、「ハレルヤ」とか「グロリア」のような派手な曲にこころから感銘を受けたことがない。たとえば、ヘンデルのメサイアの「ハレルヤ」で、国王が起立したから、聴衆もそうするのだなどという話を聞くと、もうそれだけで「何と低俗なことか」と思ってしまふ。これは、音楽鑑賞としては偏見に満ちているのかも知れない。歌詞など気にしないで音楽だけ聴けば名曲であるとは思うのだから。同じ理由から、第九交響曲の「歓喜の歌」だって、シラーの書いた歌詞の内容にどうも押しつけがましいものを感じるから、こころから共感できない。これもベートーベンの音楽だから我慢して聞けるのであるが。どんな曲に感動するかと言えば、もっと控えめな曲、ロコモる様な、沈黙の音が響き渡る様なものが好きなのだ。カトリック聖歌では、たとえば、受難週間で歌われる「茨の冠」。これは、バッハのマタイ受難曲でも歌われる古い曲であるが、こういう曲には無条件で惹かれるものがある。なによりも、言葉の響きと、その意味内容と、曲とが調和していなければならないのだ。

「風がどこから」は、ヨハネ福音書 3-8 を典拠としている。いまそれを引用すれば、

風は思いのままに吹く。あなたはその音を聞いても、それがどこから来て、どこへ行くかを知らない。霊から生まれた者も皆そのとおりである

霊とかspiritとかいうと抽象的に感じるだろうが、風といえば、それは、自然の息吹であり、まざまざとしたリアリティをもっている。実はギリシャ語の原文では、「風」と「霊」はまさに同じ言葉（πνεύμα プネウマ）である。しかし、それが同じ言葉ではない日本語や英語であっても、この一節は不思議に心を捉える。そして、菅野淳の詩は、このヨハネ伝の一節を私達が普段使っている言葉で敷衍し、高田三郎が、それを私達の歌にしてくれたのだ。

1. 風がどこから吹いてくるのか  
人は誰も知らない  
愛を呼び覚まし心を潤し  
いつの間にかわたしの中を吹き抜けてゆく  
それは気高いキリストの想い  
どこへ風は吹いてゆくのか誰も知らない
2. 炎がどうして燃え上がるのか  
人は誰も尋ねない  
闇をなめ尽くし腐敗を貫き  
深く高く全てのものを清め続ける  
それはみなぎるキリストの力  
なぜか炎は燃えているのに誰も尋ねない
3. 時が今しも過ぎてゆくのに  
人は誰も気づかない  
道を先駆けて恵みを携え  
遠く遥か一人一人を守り導く  
それは密かなキリストの祈り  
なおも時は過ぎてゆくのに誰も気づかない

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**「風がどこから」の譜面ありがとうございます。** 投稿者：真奈 投稿日：2005年 3月17日(木)[返信・引用](#)

23時16分35秒

さっそく譜面を載せて下さり有難うございました。なんとかソプラノのメロディは覚えられました。ほんとに忘れがたい旋律ですね。

この歌の詩は

風がどこから吹いてくるのか ・ ・ 人は誰も知らない  
 炎がどうして燃え上がるのか ・ ・ 人は誰も尋ねない  
 時が今しも過ぎてゆくのに ・ ・ 人は誰も気づかない

とりフレインになっていて、なにか否定的な問いかけ、独り言、つぶやきのように思われるのですが、かえてここに内省的な思索の誠実さを感じられます。未だ及ばないけれど絶対的なものの存在を信じていこうとするプロセスといったら変でしょうか？

メロディも少し行きつ戻りつしながら、自分に問いかけているような不思議な旋律です。清冽で雅趣のある旋律なのでアカペラで歌うととてもしみ通ってくると思いますが、合唱でボリュームが出るとかなり感じが変わることでしょうね。

マタイ受難曲もかなり根気がいりそうですが、なんとか通して聴いてみようと思っているところです。

**ありがとう！** 投稿者：田中裕 投稿日：2005年 3月18日(金)13時56分16秒[返信・引用](#) [編集済](#)

>れんさん、

素晴らしい詩をお寄せ頂き有り難うございます。  
 樹木のことの問題になっている最中でもあり  
 次の詩にとっても勇気づけられました。

木を植えよう  
 人間という木を植えよう  
 雨にも 風にも 雪にも  
 なんにでも 負けない木  
 立ち枯れることもなく  
 人をやすませ  
 泉のように 水をわかせ  
 寒さには 炎となり  
 孤独にあるひとには友となり  
 飢えにも 渇きにも  
 惜しみなく与えられる  
 そんな 木を植えよう

2005・3・17

**教会旋法のことなど** 投稿者：田中裕 投稿日：2005年 3月18日(金)22時42分29秒[返信・引用](#) [編集済](#)

真奈さん：

> 「風がどこから」をまた聞いてみましたが、どうも詩と旋律がうまく合いません。楽譜がございましたら、コピーをいただけると嬉しいのですが。典礼聖歌というのは、ここでも書込みのありました「教会旋法」で作曲されるのですか？「風がどこから」もちょっと不思議な旋律のように感じます。

>

僕は素人なので、かなり当てずっぽうに言うのですが、「風がどこから」だけは他の多くの日本の典礼聖歌とは違ってきますね。教会旋法というのはドレミファソラシドの長調やラシドレミファソラの短調が確立する前のものですが、そのうちの一つのフリギア旋法というのは、ミファソラシドレミを基準とするものようです。全く自信がありませんが、バッハのマタイ受難曲の「受難のコラール」のなかでフリギア旋法で歌われる部分と何となく感じが似ているので、それが使われているのではないかと感じました。教会旋法が使われているとすると、この「風がどこから」の旋律のもつ不思議な感触は、一つには、そこに由来するのかも知れません。

同じ菅野淳作詞・高田三郎作曲でも「ご覧よそらの鳥」は明朗なへ長調。これも名曲ですが、曲から受ける印象は「風がどこから」とはかなり違います。「風がどこから」は、それとは違

って、どこか近代合理主義が忘れ去ったものを思い出させるような不思議な魅力を秘めているようです。

**ネコヤナギとハチ** 投稿者：ガラクタ箱 投稿日：2005年 3月20日(日)13時19分13秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

この写真はお隣の庭です



<http://>

**凧揚げ** 投稿者：ガラクタ箱 投稿日：2005年 3月20日(日)13時22分32秒

[返信](#)・[引用](#)

これは園の野球場での凧揚げです。



**武蔵野の画帳 3月の題は「凧」「猫柳」です。** 投稿者：[田中裕](#) 投稿日：2005年 3月20日 (日)14時24分31秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

先ほど、全生園から戻りました。今日は復活祭前の枝の主日ということで、大勢の方が参列されました。緑化委員長の所さん、また昨年度の朗読会でオルガンを弾いて下さった岩瀬さんもお見えでした。ミサのなかで、物故された園の方のための祈りがありましたが、そのなかで一昨年の三月になくなられた渡辺立子さんのお名前も読み上げられました。

そのあと、ガラクタ箱のお宅にお邪魔して、現在編集中のDVDー全生園の写真と、皆様からお寄せ頂いた俳句などの作品と所さんのお話しをアレンジしたDVDーを見ました。園の風景が急速に変わりつつあるときでもあり、古い園の面影の残る貴重な映像集です。

武蔵野の画帳、三月の題は、下の写真を使わせて頂きます。  
「凧」と「猫柳」です。俳句、短歌、五行歌、詩、何でも作品をお寄せ下さい！

---

**かっこいいですね!** 投稿者: 真奈 投稿日: 2005年 3月20日(日)14時47分19秒

[返信](#)・[引用](#)

下の凧はまっすぐ天空に向い一点に止る・・・かっこいいですね。蕪村の句の  
几巾（いかのぼり）きのふの空のありどころ

を思い出しました。いかのぼりは「紙鳶」とも書くようです。

教会旋法による「風がどこから」・・・

フリギア旋法（ミファソラシドレミ）の解説を読みますと、「天と地の間に浮かびながら停止する旋法」と言われ、「甘美、神聖、恍惚、永遠といったイメージを持ち、浮遊感のあるグレゴリオ聖歌らしい旋法」とあります。たしかに「風がどこから」は「ミ」とか「ファ」の半音のところで浮遊するような旋律があり、この旋法で作曲されたのでは・・・？という説になるほどと思いました。

「フリギア」はギリシャ語のようですが、原義になにかそのような意味があるのでしょうか？

---

**凧揚げ** 投稿者: ガラクタ箱 投稿日: 2005年 3月20日(日)22時29分30秒

[返信](#)・[引用](#)

この凧はバイオカイトと言いまして200mくらい揚がります。



---

**れんさん アニメgif** 投稿者: ガラクタ箱 投稿日: 2005年 3月21日(月)12時09分39秒

[返信](#)・[引用](#)

画像はjpgしか掲載出来ないかと思ってたら、アニメgifも表示されるんだね。  
いま知人の富士通のノートからアクセスしてみたらスピーカーアニメ表示されたけど。

---

**画帳「武蔵野の四季」3月です** 投稿者: [田中 裕](#) 投稿日: 2005年 3月21日(月)12時56分54秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

>れんさん

画帳「武蔵野の四季」3月、「[風](#)」と「[猫柳](#)」に短歌を投稿して頂き有り難うございました。  
早速、掲載致しました。

---

**バイオカイト** 投稿者: 文枝 投稿日: 2005年 3月21日(月)17時28分2秒

[返信](#)・[引用](#)

こんにちは バイオカイトの画像雄大ですね。初めて見ました。  
家を離れていても、ガラクタ箱さんのリンクから、あちこちのサイトを拝見できるのですが、この「柿の木BBS」は、検索では出てこないですね。  
やっぱり、URLをメモしていかないと、ちょっと見ぬ間に進化していて驚いています。  
今日はまたぽかぽか陽気で、あちこちで辛夷の蕾を発見しました。  
画帳「武蔵野の四季」3月のお題は、画像が素晴らしすぎて、とても難しい。  
れんさん、の湧き出るような歌心にぜひあやかりたく、詩や短歌ゆっくり読ませていただきませう

---

**4月2日 の時程です** 投稿者: [田中 裕](#) 投稿日: 2005年 3月22日(火)09時41分11秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

4月2日に、森元美代治さん、古田泰人（菅野淳）さんたちを中心に「地球市民アジアの友」というグループとともに資料館の見学、納骨堂への献花そして、桜がまだ咲いていれば、そのあとでお花見をかねて簡単な食事をします。もしお時間の都合が宜しければ、皆さんも一緒にしませんか？

古田さんから4月2日の時程について次のような連絡を頂きました。

- ◇ と き : 4月2日(土) 12時30分～16時30分 雨天決行
- ◇ と ころ : 東京都東村山市・国立療養所多磨全生園の森
- ◇ 集 合 : 西武池袋線清瀬駅改札 12時30分(新宿線東村山駅から資料館集合も可)
- ◇ 持ち物 : お弁当ほかお得意料理歓迎 / 飲み物
- ◇ 会 費 : 献花代(納骨堂に捧げます) 500円
- ◇ 参加予定 : I D E A (ハンセン病等人権問題にかかわる啓蒙運動NPO法人)  
(敬称略) 代表: 森元美代治・美恵子夫妻  
アジアの友会員数名  
古田泰人(菅野淳)・多美子夫妻  
田中裕・しゅうさん・真奈さん  
他 13～14名?
- ◇ タイムテーブル
  - : 12:30 清瀬駅改札 集合
  - : 12:40 バスでハンセン病資料館(開館時間13:00～16:00)へ  
(西武バス資料館前下車)
  - : 12:50 資料館入り口で 自己紹介
  - : 13:00 森元様ご夫妻の案内で資料館見学
  - : 14:30 全生園 納骨堂前で追悼 その後お花見会食、園内歴史勉強
  - : 16:30 お別れ
  - : 17:00 清瀬駅で解散

**梅は咲いたか、桜は・・・** 投稿者: しゅう 投稿日: 2005年 3月22日(火)21時35分26秒

[返信・引用](#)

田中さん  
4月2日 の時程、お知らせ下さってありがとうございます。  
私は、車にするか、電車かまだ決めておりません。  
電車にしますと、新秋津駅から全生園に行きますので、資料館の前でお会いできればと思います。

お花見でまた、がらくた箱さん、エミさん、皆様に、お会いできるのを楽しみにしています。

**4月2日・・・** 投稿者: 真奈 投稿日: 2005年 3月23日(水)23時36分36秒

[返信・引用](#)

こんばんは  
4月2日のご案内有難うございます。

JRでまず新秋津に行きますが、迷子になりそうなので集合場所の西武線の清瀬駅に行くことにいたします。皆さまにお会いできるのが楽しみ・・・お天気になるといいですね！

21・22日と鎌倉に行ってきましたが、緋寒桜・紅梅・椿・木蓮などなどとても美しく、暖かかったせいか21日の祭日は大変な人出でした。連句は半歌仙一巻だけ巻きましたが、ほんとに申し訳程度です。

**けいさんへ** 投稿者: しゅう 投稿日: 2005年 3月26日(土)09時05分49秒

[返信・引用](#)

お尋ねします。  
かつて、小泉雅二の詩集  
詩集「枯葉の童話」長島詩話会(1959)、  
「白い内部で」(裸形の会1962)、  
「小泉雅二詩集」(現代詩工房1971)  
について、長島愛生園の何方かを訪ねるとよいというお話を伺ったことがありますが、その過去ログが出てきません。  
もう一度、教えて頂けませんか。  
30日、31日に岡山できょうだい会をすることになりましたので、岡山まで出かけることになりました。  
時間の都合が付くか調整しないくはなりません、一度ご挨拶だけでもして帰ろうかと思いません。  
小泉雅二についても一度、情報を下さい。

[返信・引用](#)

**ありがとう。 Re: 今めーるにて** 投稿者：しゅう 投稿日：2005年 3月26日(土)11時36分39秒

> だしました。  
> 前のもメールだとおもいます、

けいさん、メール拝受。  
いろいろ、補足して情報ありがとう。

> しゅうさんは岡山産だったのですか??岡山はローカルであっても文化は高いとかねがね聴いていたものです。私も、岡山は忘れられない恩師もいます、岡山はまた、いいですね。

>  
> それと、序でに岡山県立図書館の蔵書に、既に他界されている田村史郎さんの歌集でしたかあり、おどろいてます。いつだか、東風がガラクタ箱さんだかで、田村史郎さんの事が北さんにより取り上げられていた事思い出しつつに、付記しておきます。

田村史郎さん?  
どんな話題だったか?思い出せないのだけれど・・・  
高校の同級生に、田村史江っていう人がいたことを思い出しました。  
ただ、同じ字が多いうえに言うだけのことなんですけど・・・、ふと彼女の顔が蘇りました。

**ご無沙汰してます** 投稿者：[E三](#) 投稿日：2005年 3月27日(日)02時48分39秒

[返信・引用](#)

れんさん、お風邪長引いているよう、お大事にしてくださいね。

・正仮名遣いを確認したい場合ですが、国語辞典で大方はわかると思います。  
例えば、「なおす」という語を引きますと；  
一【なお・す】なほす【直す・治す】一のように、現代仮名遣い表記の次に正仮名遣い表記が載っています。

・田中裕さん、しゅうさん、真奈さんへ：  
4月2日：私を含め数名(人数はまだ未確定)は、11:00にガラクタ箱さん宅集合の予定です。  
資料館見学以降に合流させていただくことになると思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

**teacupがあんまり重たいので** 投稿者：ガラクタ箱 投稿日：2005年 3月30日(水)00時03分26秒

[返信・引用](#)

teacup掲示板は夜になると重たくて開くまでかなり時間がかかり  
使い難いので引っ越しました。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fwww11.plala.or.jp%2Fcgi-bin%2Flight%2Flight.cgi%2Fockqge%2Fkeijiban>

**正仮名遣い = 旧仮名遣い** 投稿者：[E三](#) 投稿日：2005年 3月30日(水)11時42分26秒

[返信・引用](#) [編集済](#)

・れんさんへ：レスが遅くなってすみません。

正仮名遣い⇔現代仮名遣い：“旧仮名遣い⇔新仮名遣い”と言ったほうがよかったかしら。  
「文語」は、文章を書くときに使う“書きことば”で、“話しことば”である「口語」に対する語。(一とくに明治以降に標準化された口語に対するもの一だそうです。)文語⇔口語文、  
文語体⇔口語体。

**旧仮名遣い** 投稿者：真奈 投稿日：2005年 3月30日(水)12時02分25秒

[返信・引用](#)

れんさん、E三さん

私も連歌は勿論なのですが、現代連句でも和歌連作でもいちおうは旧仮名遣いを使っているのですが、間違いも多いし、時々チャンポンになってしまいます。例えば  
山のむこう(向こう) → 山のむかう

が正解なのですが、「むかふ」と間違っ使っていました。こういう「ウ音便」は難しいですね。「戦ひて」→「戦うて」など・・・それと、

彼はきっとやってくるだろう → 彼はきつとやつてくるだらう

これも「きつとやってくるだらう」と使う人の方が多いのではないのでしょうか?私もこれにな

るとむしろ意識してチャンポンにしていることが多いです。意味が取れなくなる場合もあるので止む無くですが・・・。

**IAHRの国際会議のことなど** 投稿者: **田中 裕** 投稿日: 2005年 3月31日(木)18時08分3秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

2月24日より30日まで、[IAHR](#)という会議に参加したため、しばらくブログにも掲示板にも投稿できませんでした。この会議のことは、いずれブログにも書く予定です。グローバルズの時代に於ける諸宗教の共存、イスラム教国家とキリスト教国家との間の宗教的寛容の問題、生命倫理、環境倫理の諸問題への取り組みなど、様々な問題が討議されましたが、29日のプログラム、「東アジアの宗教状況と社会正義－日韓の無教会キリスト教を中心に」は、なかなか興味深いものでした。

これは、京都大学大学院文学研究科のスタッフが中心となって推進しているCOE研究プロジェクト「多元的世界における寛容性についての研究」に参加された日本と韓国の研究者4名の発表です。

そのなかで、韓国から参加された金文吉氏（釜山外国語大学日本語学科）の「金教臣の無教会キリスト教と社会正義」が、小鹿島（ソロクト）のハンセン病療養所での無教会主義キリスト教の伝道に触れていたため、それを「[プロセス日誌](#)」の[生命・医療・環境の倫理のブログ](#)で紹介しました。

追伸

4月2日、丁度、桜が咲き始めるころとなるでしょうか、オフ会で、皆様にお目にかかるのを楽しみにしています。

先週の日曜日に愛徳会のミサで、森元さんにお会いしました。なんだか、花見の時間を11時からと間違えて伝えたので、その点、エミさん達によるしくと仰っていました。僕はそのあと直ぐに、品川の会議に行きましたので、連絡が遅れましたが、資料館見学以後、エミさん達と合流ということで了解ですね。>エミさん

TEACUP掲示板は時間帯によって混雑して重くなるようですね。新しい掲示板の開設、おめでとうございます。>ガラクタ箱さん

沢山の歌と画像をお寄せ頂き有り難うございました。>れんさん

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**(無題)** 投稿者: **文枝** 投稿日: 2005年 3月31日(木)20時24分12秒

[返信](#)・[引用](#)

田中さま プロセス日記 「金教臣の無教会キリスト教と社会正義」拝読しました。大体、こうした論文は苦手なのですが、>朝鮮に於いても日本と同じくハンセン病の医療機関はキリスト教の宣教師達によるものでした。最初の医療事業は現在釜山外国語大学がある勘蜆洞で、そこに、内村鑑三の弟子であった金教臣と咸錫憲（ハム・ソク・ホン）達による無教会雑誌「聖書朝鮮」による伝道が開始されたとのこと。

に登場の、咸錫憲著作集 『死ぬまでこの歩みで』小杉尅次 監訳 新教出版社 が手元にありましたので、引っ張り出し、目次を見ましたら、無教会のタイトルがあり、内村鑑三とのあいから、同志六人で「聖書朝鮮」という雑誌を発行し、夏休みには伝道講演会を開いたことなど記されていました。咸錫憲著作集は全10巻で、1991年に初版ですが、私の関係者で、咸錫憲の名を挙げたのは監訳の小杉先生と、今回、田中先生だけです。久しぶりで、咸錫憲にであい、とても嬉しく書き込んでしまいました。

私は、今年のお花見、のっぴきならぬ事情が発生し、不参加です。全て祝されますよう祈ります。

**旧仮名** 投稿者: **真奈** 投稿日: 2005年 4月 1日(金)00時27分41秒

[返信](#)・[引用](#)

れんさん

佳い歌をいつも楽しませていただいています。見習わなくては・・・と思いつつなかなか作品にまでなりません。

「ありがとう」ですが、「ありがたう」でいいようです。電子辞書の広辞苑によれば「ありがたく」の音便とのこと。

僭越ながら気がついたので・・・お歌のなかで一ヶ所、「ちいさく」は「ちひさく」となるようです。

2日、ほころびかける頃の桜もいいものですが、どうでしょう？

---

**了解です** 投稿者：[エミ](#) 投稿日：2005年 4月 1日(金)22時59分50秒

[返信](#)・[引用](#)

・資料館見学以後合流の件、了解です。  
ただ、体調不良の方もいらっしゃるようですので、自由参加ということにしてあります。  
よろしく願いいたします。

---

**花見のことなど** 投稿者：[田中 裕](#) 投稿日：2005年 4月 3日(日)18時20分45秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

昨日、土曜日は天気は良かったのですが、桜はまだ蕾状態でした。西武線清瀬駅改札前で、真奈さん、古田さんご夫妻と、小学生のお嬢さん、アジアの友の会の皆さんと合流、予定より少し遅れて資料館へ。そこでしゅうさんと合流、森元さんの解説で、資料館を見学後、花見でした。エミさん、トラ千代さん、アリスさん、橋本さんたちもおめにかかりオフ会も兼ねました。資料館の中では、森元さんに「語り部」として解説を頂きました。花見の宴には、あとから皓星社の藤巻氏も参加、「アジアの友」のかたの尺八に合わせて、森元さんと古田さんが共に「少年老いやすく学成りがたし」の詩吟を朗詠するなど、和気藹々とした楽しい集いでした。花見の後で、ガラクタ箱さんのお宅で、新しく制作されたDVDビデオ、「全生園の四季―私の好きな散歩道」を鑑賞。皆様の俳句もところどころに挿入された映像詩です。そのあとで、「消えゆく並木」のビデオも大きな画面で見ましたが、同席して居られた伊藤赤人さんも、「鎮魂の森」に言及されたところ、まったく同感であると仰っていました。

>れんさん、文枝さん

ここの掲示板、それほど重くはならないので、是非、画像はそのまま残しておいて下さい。夜になって消えてしまうのは残念です。それから、ブログの記事を読んで頂き有り難うございました。「聖書朝鮮」のこと、咸錫憲のこと、内村鑑三と朝鮮の無教会信者のことなど、これからも、韓国の研究者との交流を通じて調べてみたいと思っています。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

---

**楽しいお花見でした！** 投稿者：[真奈](#) 投稿日：2005年 4月 3日(日)23時19分34秒

[返信](#)・[引用](#)

昨日はとても充実した一日でした。  
お目にかかりたかった古田さんご夫妻や伊藤赤人さん、少し怖かった北風さん、お元気なトラ千代さんにはじめてお会いできてとても感激でした。また、古田さんのお嬢さんが東京少女合唱隊（草創の頃に私もご縁がありました）で今歌っていらっしゃるということも聞きびっくり・・・です。  
「語り部」森元さんのご説明で資料館もはじめて見学。北條民雄のご真筆の日記は借り出されていて残念ながら見ることはできませんでしたが、ダミアン神父のことなど印象的でした。葉の花満開のそばのまだ蕾の桜の下でのお花見は、尺八や琵琶の演奏、詩吟などなど、こんなに贅沢なお花見ははじめてでした。  
お花見のあとガラクタ箱さんのお宅で、「私の好きな散歩道」の美しい映像に音楽もステキ、画帳からの私たちの俳句も入れてきれいなDVDにして下さり（！）・・・ガラクタ箱さん、ほんとうに有難うございます。

田中さん、しゅうさん、皆さま、お世話になりました。

---

**いい花見だった。** 投稿者：[しゅう](#) 投稿日：2005年 4月 4日(月)06時28分29秒

[返信](#)・[引用](#)

田中さん、

古田さんのアジアの会の皆様と一緒にお花見できるプランを作っておいて下さってありがとうございます。  
すてきなお花見でした！こんなに和やかで豊かな気持ちになるお花見はあまり経験がありません。ありがとうございました。  
古田さんとまた何か一緒できる機会があることを願っています。

森元さんの資料館のご案内伺うこと出来たり、がらくた箱さんのお宅で、伊藤赤人さんも交えて、皆さんで、「人権の森」か、「鎮魂の森」か、熱い意見も出てとても話が盛り上がりましたね。

がらくた箱さん、  
「私の好きな散歩道」！、美しい映像に見とれてしまいました。

美しい四季を、これからも撮り続けて下さい。  
 こんなすてきなDVDになるって、拙い俳句ですが、投句をするのが楽しみになります。みんなで  
 投句頑張りましょう。

真奈さん、  
 「れぎおん」ありがとう。  
 レベルの高い連句誌ですね～ 環奈という捌き者のお名前は、真奈さんですか？ ゆっくり拝  
 読します。  
 東條のことを取り上げて、書いて下さってありがとう。うれしく拝読しました。



**環奈とは・・・** 投稿者：真奈 投稿日：2005年 4月 4日(月)10時57分30秒

[返信・引用](#)

しゅうさん

「れぎおん」を読んで下さってありがとうございます。俳句人も載っているので、ご存知の方  
 もいらっしゃると思います。海程、寒雷、鷹、銀化、絵硝子などの同人の方々が多いう  
 です。「東條歌一」の文ももう少しスペースがあればよかったのですが・・・。

「環奈」というのは私のことなのですが、或るネット俳句の会で「カンナ」と名乗っていたの  
 を漢字にしたものです。連句実作とそれぞれが好きなテーマでレポートを発表していく小さな  
 会をはじめたので、取りあえず「環奈の会」とか「俳諧環奈座」とか称しています。連句は初  
 めて・・・の人も混じっているのかえって発想がユニークで面白い作品になり、これからは楽  
 しみです。

今日から3日ほど旅行で出ますので、帰りましたらまたゆっくりと・・・。  
 写真・・・わっ、写ってしまった！・・・ようですがお酒のせいでいささか眠そう？  
 では又～

**きょうあたり五分咲かしら？ Re: 俳句もどき？** 投稿者：しゅう 投稿日：2005年 4月 6日

[返信・引用](#)

(水)17時15分15秒

> さくらを初花とだいたい言う聞き、しゅうさんのに刺激され

今年初めて咲く桜を、初花とか、初桜って言いますね。  
 2日は、まさに、初花、咲いているのを見つけて喜びました。

>

> ・初花のつぼみ赤きに白衣映え

紅と白の、色の配色が、やさしいですね。

> ・初花にふとかさねたる五十年

桜の寿命は50年と言いますが、それは単なる偶然でしょうか。  
 桜は、不思議と、見ていると、来し方を思います。  
 「初花」に、大変だったでしょうが、救われるような感じがします。

> ・置き忘れ探す薬やホクナリン

喘息のお薬ですか？ ご自愛ください。  
 「ホクナリン」って、発音が面白いけれど、知らない人も多いように思います。私も検索で調

べました。季語が入ると句が広がるかも知れません。

楓でしょうか？赤い新芽がかわいいです。 ↓



**オリエンテーション・キャンプ** 投稿者：[田中 裕](#) 投稿日：2005年 4月 7日(木)19時04分51秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

明日から富士山麓の「東山荘」というところで、新入生のためのオリエンテーション・キャンプに出掛けます。桜が丁度見頃かも知れません。日曜日に帰宅の予定です。

<http://111.teacup.com/mejoro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**キリスト教雑誌「信徒の友」の短歌欄より** 投稿者：[田中 裕](#) 投稿日：2005年 4月 7日(木)21時24分1秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

文枝さんが、桃李の和歌連作の部屋に投稿された短歌

被災地の窓に灯りの点り初め空に響ける第九の祈り

が、『信徒の友』四月号で二席に入選しました。選者は、キリスト教作家三浦綾子さんの夫君の三浦光世氏で、

「上句の把握が素晴らしい。第九はいうまでもなくベートーベンの交響曲。「第九番二短調の通称」と、辞典にある。上句と下句が対応して、これまた間然とするとところがない」

との選評です。この短歌、去年のクリスマスの短歌連作にありました。まだ整理していない過去ログを見てみましたら

6208 夜を彫(え)りてオリオン光る寒の空ひそみて生くる深きの在りし (れん)

6209 被災地の窓に灯りの点り初め空に響ける第九の祈り (文枝)

6210 降誕祭前夜のミサに額づけりまだ希望あるこの世なるべし (千種)

の連作の中ででてきた歌でした。この三首の連なりそのものが、まさに第九の祈りのようですね。あらためて、文枝さんにお祝いを申し上げます。

<http://111.teacup.com/mejoro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**恐縮です** 投稿者：[文枝](#) 投稿日：2005年 4月 7日(木)22時04分53秒

[返信](#)・[引用](#)

田中さま 拙い歌をご紹介くださり、恐縮です。掲載の短歌、実は別の短歌を友人への賀状に添え書きしましたら、「信徒の友」に投稿するよう勧められ、和歌連作の句とともに投稿しました。そうしましたら、肝心の友人推薦の句は没

になったわけです。  
今日は桜の花が一気に満開、明日は小学校の入学式、この辺で一句ものにしたいのですが。

**文枝さん、おめでとう！** 投稿者：真奈 投稿日：2005年 4月 7日(木)23時48分46秒

[返信・引用](#)

この度『信徒の友』短歌欄に、二席で入選されたとのことおめでとうございます。  
文枝さんの短歌も俳句もとても大きくて伸びやかな感じが致します。またこの三人の方の歌がとても調和していて、まさしく交響曲のように響き合っていて素晴らしいと思いました。千種さんはよく連句で一緒している方です。

こちらの桜並木も満開で、買物の帰り夜桜の下を少しばかり優艶な気分を味わいつつ歩いてきました。

**文枝さん、おめでとう！！！！** 投稿者：しゅう 投稿日：2005年 4月 8日(金)20時22分7秒

[返信・引用](#)

被災地の窓に灯りの点り初め空に響ける第九の祈り

きょうは、テレビでローマ法王の葬儀を中継してました。  
まさに、祈りの日ですね。おめでとうございます。

きょうは、国会図書館へ行き、調べものをしてきました。  
帰りに、千鳥ヶ淵まで足を延ばしました。



いまごろは、さぞ賑やかに、夜桜の花見の宴で盛り上がっていることでしょう。

**れんさん** 投稿者：しゅう 投稿日：2005年 4月 9日(土)17時47分24秒

[返信・引用](#)

ご主人の、ご退院、よかったですね。  
ご自愛してもらってね。

下の画像、素晴らしいですね～  
れんさんの、色彩感覚のすばらしさに、驚嘆します。  
消さないでください。  
私の画像でよろしかったら、これからも自由に使って下さい。

**全生大師堂付近の花梨** 投稿者：ガラクタ箱 投稿日：2005年 4月10日(日)17時16分16秒

[返信・引用](#)

昨日見たときはまだつぼみでしたが、きょう午前中には  
この一輪だけ綻んでいました。そいえば急いで歩くと  
汗ばむような陽気でしたね、今日は大勢の花見客が全生園を訪れていました。



**東山荘** 投稿者: [田中 裕](#) 投稿日: 2005年 4月13日(水)17時04分16秒

[返信](#)・[引用](#)

れんさん

東山荘の桜は先週の金曜・土曜日の段階ではまだ蕾でした。やはり東京より数日遅れのようなので、今日あたり満開でしょうね。新入生のオリキャンの時は曇りだったので、今年は、残念ながら富士山は見えませんでした。運が良ければ、両方見られます。

**4月の画帳「花見」** 投稿者: [田中 裕](#) 投稿日: 2005年 4月14日(木)22時36分54秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

photo by ガラクタ箱さん



4月の画帳の題は「[花見](#)」とします。

俳句、短歌、五行歌、詩、

何でも投稿して下さい。

<http://111.teacup.com/mejuro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**ご無沙汰いたしました。** 投稿者: [昭子](#) 投稿日: 2005年 4月16日(土)00時56分39秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

久しぶりに下手な俳句で参加させていただきまーす。

ちちははの天の花見や地には影      あずき

集い来て散り散りとなる花見かな      あずき



**「お花見」の句** 投稿者：真奈 投稿日：2005年 4月16日(土)09時40分0秒

[返信・引用](#)

昭子さん、お久しぶりです！お元気ですか？

全生園のお花見にて（2005・4・2）

乗り合ひてガラクタ箱や花見舟（ガラクタは我楽多に通じます）  
 花見来て奇しき縁（えにし）に出会ひたり  
 笑み合ふて一味同心花の下  
 半眼に花眺めをり昭和の子  
 花一枝挿頭せば万葉乙女さび  
 琵琶奏で軍記語るや花の下  
 還暦の少年たちの花見かな（四捨五入しました・・・ごめんなさい）

よろしくお願い致します。遠くに菜の花も見えるので、同じ場所のようですね。

**真宗さんの姫りんごと枝垂れ桜** 投稿者：ガラクタ箱 投稿日：2005年 4月16日(土)23時36分31秒

[返信・引用](#)

全生園並木道のさくらは終わりましたが、真宗会館の庭には  
 姫りんごと枝垂れ桜



**四月の画帳 「花見」** 投稿者：文枝 投稿日：2005年 4月17日(日)20時23分25秒

[返信・引用](#)

今晩は 今年は全生園の花見に参加できませんでしたが、ガラクタ箱さんの画像や、掲示板から連想して、拙句ですが投稿します。

乾杯をすれば旧知や花の宴	文枝
心根の絆深まり花の下	文枝
全生園の花見三々五々燦燦	文枝
煩いを手から離して花の雲	文枝
満開の桜眩しき戦中派	文枝

**パスワード入力画面のこと** 投稿者：[田中 裕](#) 投稿日：2005年 4月18日(月)09時23分57秒

[返信・引用](#)

先日から、閲覧パスワードの入力画面が、繰り返し出るようになりました。煩わしいことになりましたので、現在、TEACUPに、原因を問い合わせ中です。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2F2Feigenwille%2F>

**東條耿一の随筆 補遺 その1 「草平庵雑筆」(昭和17年「山桜」3月号所 返信・引用 編集済)**

**収)** 投稿者: [田中 裕](#) 投稿日: 2005年 4月19日(火)10時50分47秒

東條耿一作品集のWEB第二版には、第一版では未収録の詩や随筆を収録する予定です。先日、村井澄枝さんから、山下道輔さんのところでコピーされた未収録作品を送って頂いたので、そのなかから、「草平庵雑筆」という随筆を電子テキストにしてみました。この随筆には「舊作」というサブタイトルがありますが、書かれた時期は、ほぼ一年くらい前、昭和16年に東條耿一が「聲」に連載した一群の随筆とほぼ同じ頃ではないかと推察しています。

=====

## 草平庵雑筆

—舊作—

東條耿一

雨戸を繰ると窓下の菖蒲がぷんと匂ふ、この頃の朝の眼覚めは四季を通じて最も心たのしい。楓のやはらかな緑、燕子花の花のむらさき、ホワイトやそれらは臙な私の眼をも充分たのませてくれる。恙なく昨日も在り、かくしてまた今日を眼覚め、今日を迎える。この恵み、この幸、しみじみ有難いと思はずには居られない。

朝の祈りをすませて、番茶を愉しんでゐる耳に垣外の雲雀の聲が流れて来る。雲雀はなかなか稼ぎ者だ。この頃では四時と云ふともうさかんに鳴揚る。床の中でうつらうつらし乍ら彼の啼りを聞いてゐる時位、季節と云ふものを深く感じる事はない。

今朝は珍しく横手の林で三光鳥が鳴いてゐる。縁側で萬年青の葉を洗ひ乍ら、私はしみじみこの鳥の鳴聲に耳を傾けた。

月日星と鳴くのさうだが、私には何だかよくわからない。野鳩やヒタキも鳴いてゐる。瑠璃鳥の聲もする。彼等の鳴聲を聞いてゐると、如何にも喜びに溢れてゐる様だ。おのづからなるいのちの膨らみに歌はずにはゐられないのであらう。それらは彼等の朝毎の希望の合圖なのだ。さうしてそれはまた彼等林の音楽師が捧げる神への讃歌である。水筆に水を含ませ萬年青の葉を丹念に洗ひ乍ら、何時か私の心も彼等の歌に合せておほどかな呼吸を始める。彼等の歌に溢れるもの、私の心にとゆとふもの、それは等しく今日を息づく者の喜びである。不具であれ、病身であれ、今日を斯く生かされて在り、生きてゐるのは、理窟をぬぎにして有難い事である。

私は癩になって二十年のこん日、どうやらこの大いなる恵みを思ひ生きる事の愉しさを思ふ。少年の頃は家の貧しさを嘆いた。飲んだくれの父を憎んで慰さまなかつた。癩の宣告を受けた時には、如何なれば膝ありて承けしや、如何なれば乳房ありて我を養ひしや、と父母を呪ひ生を憎んだ。それからの数年は生をもて余し、酒と女と享樂に憑かれて暮した。常に死を思ひ、また幾度となく自らの生命を断たうとした。癩院に来てからも依然生をうとみ、囚人の心で自棄に生きた。眼が悪くなった時にはワナに掛つた鼠の様に足掻き續けた。

然し、これらの人生嫌悪や生を呪ふ心は、所詮、自己中心に憑きすぎた傲慢の所産であつた事に氣付く。人生の日蔭を歩む者のひがみに過ぎなかつた。神を知らず、自然を忘れ、自己を世の眞ん中に据ゑて、あれこれと慾望の糸を手繰つてゐる間は到底、人生の意義は解せず、まして生の喜びなど判らう筈もない。唯物の念を棄たす時、人は始めて神を知り、自己の無力を意識する時信仰が生れる。

私は自分を最も卑しいもの、貧しい存在と知つた時、始めて心の黎明を感じ、喜びの心を知つた。自分の意志でこの世に生れて来たのではない以上、その存在も自分一個の意志で勝手に是非する事は出来ない。と言ふ事を知つた時、私は被造物の責務を思つた。私は道を知つた。道を行くことの力強さと歓喜を知つた。生と言ふものが此の世の外にも在る事が、私をして無限至愛の御者の、攝理の妙を感得させた。癩と云ふ悲惨な疾患が、私にとって愛の示現となつたのもそれからであつた。

疫くづれる肉體をもつてゐる私は現在、週三回五グラムの大風子油注射をしなければ保つてゆかない。而もこれは私の生ある間續くのである。その他疵の手當、不治の疾患もある。間もなく杖もつかねばならぬだらう。咽を抉る様になるかも知れない。その他有形無形の苦痛が走馬燈の様に私を包んでめぐらう。然し、どんなにくづれても腐つても、與へられた境遇に従つて生きるは貴い心であり、無上の喜びであると思ふ。この心には癩もなければ健康もない。在るものは生かす者の心であり、生かされる者の感謝である。

私は萬年青の鉢を火鉢の縁にのせ、また番茶を啜る。葉を洗ってもらってさつぱりしたのか、じっと見てみると、何か物言ひたげな萬年青の風情である。微風にたゆとふ菖蒲の匂ひがまた一頻り鼻をうつ。明日のいのちを私は知らない。否一時間先、一分先のいのちを知らない。然し、私の人生途上二度とは相見る事のない、この朝、この時を、かく在り、かく生きてみると云ふ事はしみじみ有難く尊いと思ふ。

(昭和17年山桜3月号)

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**こんばんは。** 投稿者：昭子 投稿日：2005年 4月21日(木)19時56分22秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

数日前の近所の八重桜です。  
田中さん、ありがとうございました。  
ガラクタ箱さん、真奈さん、ご無沙汰致しております。  
機会がありましたら、またお目にかかりたいですね。



**タイトルの画像** 投稿者：田中 裕 投稿日：2005年 4月21日(木)23時06分31秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

を、ガラクタ箱さんがここに投稿して下さった花梨の写真に変更しました。  
そういえば、昨年につくられた花梨酒が良い味になっているでしょうね。

>昭子さん

新しいパソコンの調子は如何ですか。私のところでは1995年に買ったパソコンがまだ現役です！ Windows3.1 の時代から使っているのが自慢で、何とN88Basic が未だに動きます。(といっても新しいユーザーの方はご存じないでしょうが・・・)

>れんさん

ブログを見て頂いて有り難うございます。今月末からコミュニティカレッジで、連歌の話をしますので、ただいま、頭を連歌モードに切り換え中です。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**連歌など。** 投稿者：昭子 投稿日：2005年 4月22日(金)11時28分19秒

[返信](#)・[引用](#)

>田中さん。  
わたしは1998年にWINDOWS98のノートを購入し、1年前に初期化しましたが、やはり調子が悪くて、WINDOWSXPのデスクトップを購入しました。回線も変えましたので、速さと画面の大きさで環境は大分改善されました。田中さんのおっしゃる機種はわかりません(笑)。

田中さんのブログの「連歌」に、わたしのブログからトラックバックさせていただきました。連詩をやってみたいので、参考にさせていただきます。実現は未定ですが・・・。

**掲示板の事** 投稿者：ガラクタ箱 投稿日：2005年 4月23日(土)10時00分41秒

[返信](#)・[引用](#)

現在teacupに掲示板URLも変更してくれるようにメールを送ってるんだけど、もう一週間になるけど返信がないので現在の<http://6527.teacup.com/4800/bbs>が変更になるかもしれないけどteacupも一時アクセスしても1分もかかることがあったけどかなり改善されたので使い易くなりよかった。閲覧パスワードは次期アップルの0S10.4にちなんで10.4にしました。園内をデジカメ散歩で撮った気楽な写真など載せていこうかなと考えています。

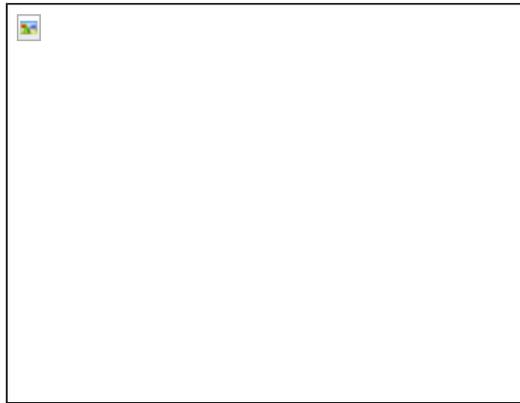
**青梅に寄せて** 投稿者: [田中 裕](#) 投稿日: 2005年 4月26日(火)21時29分10秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

>れんさん

画像と短歌・俳句投稿有り難うございます。僕も大いに刺激されて、一句詠んでみました。

(photo by ガラクタ箱さん)



この頃の朝の目覚めや梅實る

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**「花の美学」その1を読んで・・・** 投稿者: [真奈](#) 投稿日: 2005年 4月26日(火)23時56分4秒

[返信](#)・[引用](#)

毎年、亀戸天神に「俳諧の連歌」を奉納する正式俳諧というのを執り行なっており、昨日無事に終わってほっとしております。藤も池の水面近くまで垂れていると美しいのですが、今年はまだ少し早かったようです。亀たちがのんびりと泳いでいました。

プロセス日誌に新しく「花の美学」の掲載がはじまり、興味深く読んでおります。

飛花落葉の無常はまた、常住不滅の栄をなし

“「無常即常住」は「永遠なるものの瞬間における現成」である。”・・・“生は死によってあり、死は生に依ってあること、ゆえに生死一如の現実の生成流転のただ中にこそ「永遠の美」を現成すべし、という教えである。それは、時間と存在に関する独特の新しい見方であり、生死の根本問題に対して答える大乘仏教の空観一矛盾的相即の論理一を我々の美的構想力の情意の地平に射影し、観想と言語行為、身体的な芸術表現として現成せしめた物なのである。”

「花の美学」の究極とはまさに生と死との相即にあり・・・でしょうか。美しき矛盾というか・・・これをまた究極の身体的表現として「能」に現成させた世阿弥。世阿弥の生涯は「花」を能のなかに究め続けた道と思いますが、

“花と、面白きと、珍しきと、これ三つは、同じ心なり。いづれの花か散らで残るべき。散る故によりて、咲く比（ころ）あれば、珍しきなり。”（「花伝第七」別紙口伝）

に比較して、この「拾玉得花」（しゅうぎよくとつか）は成立は1428年、世阿弥65歳ぐらいでしょうか、「花」論の展開にもかなり禅宗の影響が入ってきているように思えます。能の「序破急」は連歌論にも取り入れられており、相通ずるものも多いようですが、能と連歌は同時代性という共通項がありますね？

**Re: 青梅の画像よこの字** 投稿者: [田中 裕](#) 投稿日: 2005年 4月27日(水)11時39分48秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

れんさん

カインとアベルの物語の読み方については、時間のあるときにブログに書きます。  
今は、画像の右側に俳句を縦書き表示する秘伝(?)をお教えします。  
(縦書き表示そのものは、Enterキーをつかって行を変えるだけです)

- > 縦書きは如何してできるのですか? 試みたけどできませんでした。前に
- > それにフォントもかえて。しりたいです?
- > 青梅の句は、解説して下さると勉強になるのですが、よろしかったら。

画像の右隣に縦書き文字を入れるときは(カギ括弧< と >を半角に直して入れて下さい)

```
<font face="HG正楷書体-PRO" size=4>
```

この頃の朝の目覚めや梅實る  
</font>

---

**能楽堂にて** 投稿者: [田中 裕](#) 投稿日: 2005年 4月28日(木)08時09分54秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

昨夜は、私のゼミの卒業生のS君と共に水道橋の宝生能楽堂で、「百万」と「盛久」を見ました。S君は昨年上智の大学院を修了、現在、某高等学校で教鞭をとっていますが、彼の生徒で芸術系の大学を志望している高校生二人も一緒でした。

春夜の能楽堂永遠に帰りゆく初心



<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

---

**お願い。** 投稿者: [しゅう](#) 投稿日: 2005年 4月28日(木)09時31分55秒

[返信](#)・[引用](#)

春夜の能楽堂永遠に帰りゆく初心

これは、どなたの言葉でしょうか?

とても良い言葉ですね。

私は、雅と現実について、俳句を作る上で考えてしまうことがあります。

リアルであろうとするところ、強くそれを打ち据えたものを作りたいと心がけていますが、文学は、それだけでは伝わりません。

美しいものに、そして、日本人の精神の象徴になっているものにこそ、学ばなければならないと思っています。

リアルと、日本人の雅感、そのバランスが大切なのだらうと思います。

ところで、ハンセン病図書館が閉鎖されることが、はっきりと自治会の方針として打ち出されて、山下さんに通知がありました。

それについて、東風吹かばで、いろいろ意見が出ています。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fwww.shuu.org%2Fcgi%2Fbbs%2Flight.cgi>

田中さんの、お考えと、そして、ご支援をお願いしたいのですが。

---

**Re: お願い。** 投稿者: [田中 裕](#) 投稿日: 2005年 4月28日(木)10時31分52秒

[返信](#)・[引用](#)

しゅうさん

- > 春夜の能楽堂永遠に帰りゆく初心

というのは、俳句に見えなかったかもしれませんが、私の俳句もどきです。

- > ところで、ハンセン病図書館が閉鎖されることが、はっきりと自治会の方針として打ち出されて、山下さんに通知がありました。
- > それについて、東風吹かばで、いろいろ意見が出ています。
- > 田中さんの、お考えと、そして、ご支援をお願いしたいのですが。

この件ですが、山下さんご自身のお考えを伺ってから、判断したいと思います。しばらくお待ち下さい。

**Re: お願い。** 投稿者：しゅう 投稿日：2005年 4月28日(木)11時17分49秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

- > しゅうさん
- >
- > 春夜の能楽堂永遠に帰りゆく初心
- >
- > というのは、俳句に見えなかったかもしれませんが、私の俳句もどきです。

私は、田中さんの、こういう句を以前に読ませて頂いたことがあります。こういう句に、つよく惹かれます。

- >
- >
- >> ところで、ハンセン病図書館が閉鎖されることが、はっきりと自治会の方針として打ち出されて、山下さんに通知がありました。
- >> それについて、東風吹かばで、いろいろ意見が出ています。
- >> 田中さんの、お考えと、そして、ご支援をお願いしたいのですが。
- >
- > この件ですが、山下さんご自身のお考えを伺ってから、判断したいと思います。
- > しばらくお待ち下さい。

ありがとうございます。  
私は、お電話で、ご意向を聞いておりますが、田中さんご自身でもどうか山下さんに直接聞いて、ご判断頂きたいと思います。  
よろしく願いいたします。

**連歌風に** 投稿者：田中裕 投稿日：2005年 4月29日(金)22時06分2秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

松かさに「似たる」ということですから、直接に「松かさ」を詠んでいるわけでないで、季重なりではありません。ただ、五七五で終わってしまう俳句では、たとえ譬喩であっても、「松かさ」と「石楠花」の二つの異なる季感を持つイメージが重なると、焦点が定まらぬような気がします。

れんさんの句は、なんとなく和歌の上の句という印象なので、下の句を付けて短連歌にしてみました。ご笑覧下さい。



秘  
す  
れ  
  
ば  
花  
の  
身  
を  
鎧  
ひ  
け  
り

**お久しぶりです！** 投稿者：アリス 投稿日：2005年 4月29日(金)22時40分17秒

[返信](#)・[引用](#)

桜は散ってしまいましたが。

生命の蕾  
膨らみ  
たましい  
弾けて  
桜咲く

**ハンセン病図書館のこと** 投稿者: **田中 裕** 投稿日: 2005年 5月 1日(日)17時33分21秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

今日、ガラクタ箱さんとともにハンセン病図書館に行き、山下道輔さんから図書館閉鎖のことなど、詳しい事情を直接に伺ってきました。

現在ある高松宮記念ハンセン病資料館の増築工事が終了し、新たに開館する平成19年に、旧秩父舎（北條民雄が執筆した寮舎）跡に建てられたハンセン病図書館を閉鎖し、新資料館に統合するという決定が、自治会によって為されたということです。

ハンセン病図書館が、どのような経緯で設置されたか、それを知る資料として「俱会一処」一患者が綴る全生園の七〇年 多磨全生園患者自治会編（一光社1979年）という本の発刊の言葉を、ここであらためて引用してみます。

====俱会一処 「発刊のことば」 1979年 全生園自治会会長（当時） 松本馨====

多磨全生園患者自治会は、こうした現実（療養者の高齢化とともにハンセン氏病が終焉に向かっているという現実）をふまえ、終わりの日に備えて、次の事業を起こした。

一、多磨全生園のセンター化を進めて、最後の一人に至るまで医療の責任を負って貰う。世界には、一千万を超える患者が十分な治療を受けることが出来ず苦しんでいるが、センターは、国際社会の一員としての責任を果たさなければならない。

二、地域住民から、有形、無形の援助を受けてきた。その感謝のしるしに、開発によって緑の少なくなった東村山市に森を残しておく。一九七一年より、十一万坪の敷地に植樹を始めた。私たちが地上を去る時、センターと森が残るであろう。

三、ハンセン氏病関係の文献を収集しておく。『いのちの初夜』の著者、北条民雄が創作活動をした寮の跡に、資料館を建て、現在収集中である。

四、患者の手で、多磨全生園史を編纂し発刊する。『俱会一処』は、こうした事業の一環として、創立七十周年記念に刊行するものである。

（中略）

本書は、多磨全生園・七十年の歴史であるが、らいと完全隔離という重圧の限界状況の中で、いかにして対応し、生き、変革していったか、人間の実験記録である。医療と福祉は、いつの時代にも今日的問題であるが、私たちが経験した偏見と差別、終身隔離撲滅が、医療と福祉の名において二度と繰り返されることがないように、心からの願いをこめて本書を世に送るものである。

=====

この「前がき」の三にある「資料館」というのは、一九九三年に作られた「高松宮記念ハンセン病資料館」ではなくて、今回、閉鎖が決定されたハンセン病図書館のことです。「東風ふかば」掲示板で北風さんが引用していた瓜谷修治さんの文にあるように、山下さんは、藤楓協会の設置した新しい施設に、ハンセン病図書館が吸収合併されることを潔しとしなかったようです。もちろん、山下さんは、高松宮記念資料館が作られたときには、その図書整備にも協力され、貴重な図書もそちらに移されたのですが、ともかく、新資料館への協力とハンセン病図書館の管理の両方をするには体力的に難しかったので、図書館の管理に専念したとのこと。そして、ご自分の仕事を引き継ぐ職員を手配して欲しいと云うことを再三、自治会に要請されましたが、実現せず、新資料館に完全に統合されることが今回自治会によって決定されたことと云うことのようにです。

我々として何を為すべきか、「ハンセン病図書館友の会」なるものが、北風さんを中心として発足し、五月四日に、会合があるということ、ガラクタ箱さんより伺いました。この日は、私は、先約（私が編集長をしている哲学会の委員会）があつて出られませんが、皆様とともに「俱会一処」に松本馨さんや光岡良二さんが書かれた志を尊重し、後世の人々に伝えるための手助けをしたいと考えています。

具体的なアイデアとしては、現在の「ハンセン病図書館」は、北條民雄にゆかりの秩父舎跡地に建っているのですから、そこを新資料館の倉庫などにするのではなく、そのまま「北條民雄文庫」とでも名前を変えて、全生園の史跡の一つとして、引き続き存続させるように、自治会に働きかけることなどが考えられますが、如何でしょうか。

ハンセン病図書館には、光岡良二さんがなくなられたときに残された蔵書や遺稿など、未整理

の龐大な資料が段ボール箱に入ったままですので、これらを整理する仕事など、残された期間中に、我々の方で協力できることは沢山あると思います。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**Re: ハンセン病図書館のこと** 投稿者：しゅう 投稿日：2005年 5月 1日(日)23時20分28秒

[返信・引用](#)

> 今日、ガラクタ箱さんとともにハンセン病図書館に行き、山下道輔さんから図書館閉鎖のことなど、詳しい事情を直接に伺ってきました。

日曜礼拝の後に、山下さんのところへ寄ってくださったのでしょうか？ ありがとうございます。がらくた箱さんもご苦労様でした。

>  
> この「前がき」の三にある「資料館」というのは、一九九三年に作られた「高松宮記念ハンセン病資料館」ではなくて、今回、閉鎖が決定されたハンセン病図書館のことです。「東風ふかば」掲示板で北風さんが引用していた瓜谷修治さんの文にあるように、山下さんは、藤楓協会の設置した新しい施設に、ハンセン病図書館が吸収合併されることを潔しとしなかったようです。もちろん、山下さんは、高松宮記念資料館が作られたときには、その図書整備にも協力され、貴重な図書もそちらに移されたのですが、ともかく、新資料館への協力とハンセン病図書館の管理の両方をするのは体力的に難しかったので、図書館の管理に専念したとのこと。そして、ご自分の仕事を引き継ぐ職員を手配して欲しいと云うことを再三、自治会に要請されましたが、実現せず、新資料館に完全に統合されることが今回自治会によって決定されたとうことのようにです。

>  
> 我々として何を為すべきか、「ハンセン病図書館友の会」なるものが、北風さんを中心として発足し、五月四日に、会合があるということ、ガラクタ箱さんより伺いました。この日は、私は、先約（私が編集長をしている哲学会の委員会）があつて出られませんが、皆様とともに「俱会一処」に松本馨さんや光岡良二さんが書かれた志を尊重し、後世の人々に伝えるための手助けをしたいと考えています。

>  
> 具体的なアイデアとしては、現在の「ハンセン病図書館」は、北條民雄にゆかりの秩父舎跡地に建っているのですから、そこを新資料館の倉庫などにするのではなく、そのまま「北條民雄文庫」とでも名前を変えて、全生園の史跡の一つとして、引き続き存続させるように、自治会に働きかけることなどが考えられますが、如何でしょうか。

>  
> ハンセン病図書館には、光岡良二さんがなくなれたときに残された蔵書や遺稿など、未整理の龐大な資料が段ボール箱に入ったままですので、これらを整理する仕事など、残された期間中に、我々の方で協力できることは沢山あると思います。

北風さんも、同じ構想を持っておられるようですね。

東風に吹かばの、今朝の書き込みを拝読すると。

ハンセン病図書館の図書並びに資料を、園の山下さんと利用者が、一緒になって残してゆこうとするもの、それは、とてもすばらしい構想だと思います。

その構想で、自治会のご理解が頂けるとういんですね～

私は、個人的な事情により、「友の会」の活動はそれほど出来ないかも知れませんが、私の出来るところで、精一杯、支援させていただきます。

よろしく願いいたします。

**牡丹と通草の短歌** 投稿者：田中 裕 投稿日：2005年 5月 2日(月)21時11分14秒

[返信・引用](#) [編集済](#)

れんさん

投稿和歌、三首、有り難うございます。

尖りもつ牡丹花のつぼみ凜として真夜の雨なる珠を宿せり

漲りし朝の牡丹の蕾はも首うなだるる灰色の午後

道の端の崖の茂りに咲きあるは蔓たしかなる通草の花ぞ

「尖り持つ牡丹花の蕾・・・凜として」や、「蔓たしかなる」いう写実表現が、實に印象的でした。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**東條耿一詩集 補遺 について** 投稿者: [田中 裕](#) 投稿日: 2005年 5月 2日(月)21時12分56秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

昭和16年「山桜」三月号に掲載された東條耿一の詩「落葉林にて」を東條耿一詩集補遺として電子テキストにしました。プロセス日記のブログから[落葉林にて](#)をご覧ください。また、この詩に触発され、晩年の東條に於ける父なるものの意味について考えてみました。「[落葉林にて](#)」と「[訪問者](#)」[第二編における父なるもの](#)です。意を尽くせぬ考察ですが、皆様のご感想などお聴かせ頂ければ幸いです。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**れんさんへ** 投稿者: [文枝](#) 投稿日: 2005年 5月 3日(火)07時39分49秒

[返信](#)・[引用](#)

れんさん、藤の句、写真も句もすっきりと、修飾語もなく、まとまり、いい句ですね。今日は、私も日常から開放されて、藤の花を見にいきます。いいタイミングでした。

あけびの花も短歌もすきです。しかし、画像の横か下かどこかに、別にタイプして下さると、感想などは書きやすいですよ。最近打つのも億劫になってきているのでね。

**5月4日の会合** 投稿者: [田中 裕](#) 投稿日: 2005年 5月 6日(金)14時11分59秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

どなたか、5月4日の「ハンセン病図書館友の会」の会合に出られた方がいましたら、どんなことが話し合われたか、教えて頂けますか。この日は、私は、先約があって出られませんでしたので。この掲示板でも、メールでもどちらでも結構です。(ここ以外の掲示板で公開していたメールアドレス宛にダイレクトメールが夥しく来るようになりましたので、私宛の個人的な連絡は、今後はyutaka\_tanaka@jcom.home.ne.jp 宛に下さるようお願い致します)

ところで、明日の土曜日は京都大学のCOE研究会「多元的世界における寛容性の研究」に出席して、日曜日の夜に帰京します。韓国の釜山外国語大の金文吉さんもうらっしゃるので、韓国無教会キリスト者金教臣の活動とソロクト療養所とのかかわりについても詳しいお話を伺う予定です。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**昨夜帰りました** 投稿者: [田中 裕](#) 投稿日: 2005年 5月 9日(月)08時28分18秒

[返信](#)・[引用](#)

ハンセン病図書館の支援の件、皆様からメールで色々教えて頂き、内容が分かりました。7日、8日は京大のCOEの研究会で、韓国の無教会主義キリスト教の中心であった金教臣と小鹿島の療養所との関わりについて、釜山外大の金文吉さんの話を伺いました。まだ調べなければならぬことが多くありますが、いずれブログで金教臣と内村鑑三についても書くつもりです。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**天龍寺にて** 投稿者: [田中 裕](#) 投稿日: 2005年 5月10日(火)22時26分24秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

5月8日、京都での研究会の後で、天龍寺の法堂の雲龍図を見ました。加山又三の描いた「八方睨み」の雲龍とのこと。どこからみてもこの雲龍が自分を見つめているように見えます。クザーヌスの「神を観ることについて (de visione dei)」のなかで言及されている「神のアイコン」の画像を思い出した。幸い好天に恵まれ、臯月に全山が燃えるような天龍寺の庭園を見た後、渡月橋を渡り嵐山を散策してから帰京。

天龍の寺に紅吐く臯月かな



<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**平成万句奉納の次第** 投稿者：真奈 投稿日：2005年 5月12日(木)11時55分51秒

[返信・引用](#)

連休も最後の8日(日)に名古屋市熱田区にある熱田神宮において、「平成万句 俳諧之連歌」奉納の正式俳諧興行が行われました。

熱田神宮は大神として「草薙剣」を祀っているのですが、「古事記」の伝えるところによれば、無事東国を平定して尾張国まで戻った日本武尊が伊吹山の邪神の毒気に当たって死を迎えます。草薙剣を携えていかなかった為の無念の死を悲しんだ妻の宮簀姫(みやすひめ)が尾張一族の祭場だった熱田の地に社を建て剣を祀ったといわれています。(「草薙剣」については諸説ありますが)そして日本武尊と火ともしの翁との問答(かがなべて・・・)が「筑波の道」と言われ、俳諧連歌の祖として奉納の祭神とされてきました。

熱田神宮には、今から約370年前の寛永13年(1636)、寛永14年に奉納された万句作品が神宮宝として保存されています。これは連歌から俳諧を独立させた松永貞徳の一門の人々が奉納したもので、その後は芭蕉の蕉風俳諧においても万句奉納の例はなく、今回の平成万句の奉納は実に「寛永熱田万句」の伝統を蘇らせようという一大イベントとして実現されたものでした。

今年は愛知県で「愛地球博」と称して万国博覧会が開催され、この「万」にちなんでの平成万句は、都心連句会と湘南吟社からの呼びかけで全国から60余結社、作者総数1058名、百韻の数106巻に達しました。私も一卷、連衆7人で巻いた「千年の樟」を奉納させていただきました。

当日は5時起きして熱田神宮まで。快晴の空に千年の大楠の若葉が光輝いていました。この大樹のうろ(洞)には神の蛇が棲んでいるとか・・・古式(本式)百韻による正式俳諧興行は境内にある龍影閣で行われました。

知司の発声に始まる席入から諸々の所作事が続きます。主役の執筆は一番厄介な文台捌き・端作り・吟声・文台返しといった所作を奏楽(越天楽)をまじえながらこなしていきます。古式百韻というのは今回はじめて経験しました。賦古何古式百韻「宮の清和」の巻がそのタイトルですが、式目はかなり緩やかなものです。

古式(本式)百韻の構成：

初折表十句、名残裏六句

各折表裏に月・花 (但し名残裏は花のみ) → 八花七月になります。

初折表には神祇・釈教・恋・無常を嫌わず名所(などころ)を必ず詠むことになっています。今回、「須磨の茶室」が入っています。

賦物について：

句中に詠み込むべき語・文字などをあらかじめ設定し、句作の条件とする。

今回は表十句に「古」のつく言葉を詠みこむ。

発句	奉納の万句の宮の清和かな
脇	賓客揃い薫風の池

発句は「古宮」を、脇句は「古池」というように「古」を詠み込み、「賦古何」という訳で、このような句作りを「下賦」(したぶし)というのだそうです。

奉納は神官の玉串奉奠とともに、全国からの106巻も懐紙4枚それぞれ水引を掛けて桐の大箱に納められ奉納されました。

実作会場にずらりと並んだ資料の中から、「寛永十三年熱田万句」を購入してきました。なかなか面白いものです。私たちの俳諧之連歌も何百年かのちに読んでもらえるのかな・・・と感慨無量になりました。

**万句興行** 投稿者： [田中 裕](#) 投稿日：2005年 5月13日(金)23時51分17秒

[返信](#)・[引用](#)

真奈さん

熱田神宮に奉納する俳諧興行の記事、有り難うございました。興味深く拝読しました。「平成万句 俳諧之連歌」という言い方も、いかにも貞門の俳諧を思わせませぬ。式目を緩くして、八花七月と賑やかなところも、ジャンルとして独立して間もないころのおおらかな俳諧の気分を伺わせます。もっとも「万句」奉納というのは、なんとなく質より量で勝負という気がしないでもありませんが、愛知「万博」にかけたところが良い。

発句 奉納の万句の宮の清和かな  
脇 賓客揃い薫風の池

「清和」の発句、旧暦の四月一日を待っての奉納興行ですから、祝祭性があって良いですね。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**五月の画帳 「筍」** 投稿者： [田中 裕](#) 投稿日：2005年 5月15日(日)15時22分27秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

photo by がらくた箱さん



五月の画帳の題を「筍（竹の子）」にしました。  
俳句、短歌、五行歌、詩など、ジャンルを問わず  
皆様の作品をお待ちします！！

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**筍** 投稿者： [昭子](#) 投稿日：2005年 5月17日(火)12時49分43秒

[返信](#)・[引用](#)

これはむずかしいですねえ。  
HPの「詩日記」の方には「竹の花」という終末的な（笑）詩を書いておりますが。

筍の舌刺す味や時めぐる                      あずき

**竹の子 投句** 投稿者： [しゅう](#) 投稿日：2005年 5月19日(木)17時36分45秒

[返信](#)・[引用](#)

鮮血は朝日竹の子一刀に  
竹の子の大地は甚句響かせて  
竹の子へ叔父の一刀酒臭き  
筍や応急手当に糠要りぬ  
筍の皮剥ぐや旅先の駅

**昨夜は** 投稿者： [田中 裕](#) 投稿日：2005年 5月20日(金)08時49分34秒

[返信](#)・[引用](#)

コミュニティカレッジのあとで、真奈さんから、熱田万句の平成版と寛永13年版を見せて頂きました。奉納のための連歌や俳諧の興行ということの意味をしばし考えました。

5月の画帳への投稿、早速、掲載させて頂きました。れんさんの筍の詩、作者の息づかい、生命の鼓動が直接に読者に響いてきます。これは良いですね。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**連歌・その時代を映して** 投稿者：真奈 投稿日：2005年 5月21日(土)22時05分12秒

[返信・引用](#)

一昨日のコミュニティ・カレッジに持参しました平成万句と寛永万句、教室の皆さんはほとんど俳句の方なのですが、かなり興味を持たれたようでしたね。

一句に心血を注いで言葉と格闘される俳句の方からすると、7～9時間くらいで百句をつくるということに驚かれていたようでした。俳句の575だけでは複雑化した現代を読み込むことはだんだん難しくなっていますが、その点、構成力に優れた連句は森羅万象・世態人情を詠いこめるので可能性が広がると思います。

コミカレで取り上げられた愛宕百韻、寛永万句、平成万句はそれぞれ、戦国時代、江戸時代、21世紀現代とその時代を反映して歴史史料として意味あるものと思います。奉納する意味とは、歴史の中にその時代時代に生きた人間の生活や感情を連歌一巻を通して後世に伝えていくことだと思いました。寺社というのは中世においては、公界寺のように無縁の場であったことを思うと、堂上連歌がまったく廃れた今日、寺社連歌が「法楽連歌」の場として生き続けている根拠になっているのではないのでしょうか。

愛宕百韻には、戦国時代の武将であり、第一級の教養人であった明智光秀の本能寺の変の4日前の百韻という緊張感と思いの深さがうかがわれ、先生の言われるように「歴史に名を残したい」という光秀の強い衝動が感じられます。寛永熱田万句には豊かな庶民生活の一端が自由に卑俗に表現され（連衆に女性の参加が多いのに驚きました）、平成万句にはグローバルな世界情勢や現代風俗や時事句などが多彩にダイナミックに読み込まれているようです。愛宕百韻は素晴らしい一巻ですね。正式には、『賦何人連歌』。どんな人か・・・「天が下しる」人、天下人という訳ですね。（連歌の題名はややこしいので困ります）

はかなきも頼みかけたる夢語り  
おもひに永き夜は明石がた  
昌叱  
光秀  
光秀の謀反という大事を執行する前の夜の心境・短句ながら運命的なものを感じさせる秀句とのご説明にこれは光秀の辞世の句でもあったのだ、との思いを深くしました。歴史上敗北していく人間は勝者より語るべき多くのものを持っているのですね。この連歌より半月ほどで光秀は討死。しかし、この一巻によって光秀という人物の内面的な苦闘の跡を後世の人々が迎えることをきっと願っていたことと思います。

連歌の美学とは・・・？特に武門の連歌の美学とは、生と死の激しく鋭い交響として謳いあげられますが、それでも寄合とか本歌取りとか技巧を凝らしている・・・その表現の魔力とは何か、を考えています。

**「筍」の句・・・まだいいでしょうか** 投稿者：真奈 投稿日：2005年 5月21日(土)22時13分38秒

[返信・引用](#)

このところ、作品集の作成にかかりきりで忙しく遅くなってしまいました。れんさん、あきこさん、しゅうさんの後で蛇足みたいなものですが・・・

筍や成層圏まで真っ直ぐに  
信じきる朝明の竹のひかりかな  
筍の今・此処にある存在感  
磨ぎ汁にぶかり竹の子顔を出し  
たかんなはなにおらぶるやおらぶるや

よろしくお願い致します。

**訂正** 投稿者：真奈 投稿日：2005年 5月21日(土)22時57分37秒

[返信・引用](#)

「竹」だけでは季語にならないようですので・・・

信じきる朝明の竹のひかりかな → 竹の子のうぶ毛の光る朝明かな

に訂正願います。

**5月の画帳「筍」** 投稿者：[田中 裕](#) 投稿日：2005年 5月22日(日)08時50分3秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

真奈さん、しゅうさん、れんさん、投稿有り難うございます。5月の画帳、「筍」に掲載しました。掲載は、いつでもリアルタイムでしますので、よろしくお願ひします。

今日は、これから、日本哲学会に出席するために、一橋大学に出かけますので、全生園には行きません。ハンセン病図書館支援の件、なにか新しい情報がありましたら、お知らせ下さい。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**5月の画帳 筍** 投稿者：[文枝](#) 投稿日：2005年 5月24日(火)20時56分34秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

ご無沙汰しております。  
桃李句会 投句 すっかり忘れておりました。遅ればせながら、筍の句、投稿します。

筍を捌く主の喉仏

たかななや竹馬の友は先に逝き

ぼんと音弾き筍堀る当てる

竹の子にまだ木漏れ日の温みあり

追伸 22日 急に思い立って、全生園の秋津教会の礼拝に出席しました。帰り、カトリック教会の前に立ち止まったのですが、とても静かでもう、皆様お帰りだったのでしょうか。

**れんさんの薔薇短歌** 投稿者：[文枝](#) 投稿日：2005年 5月28日(土)08時21分0秒

[返信](#)・[引用](#)

れんさんへ 短歌に画像に精進していらっしゃるんですね。  
箱根薔薇は箱根山椒薔薇ともいわれるのですか。たしかに葉は山椒に似ています。  
こうした目立たないものに目を注ぐのが、れんさんらしいです。  
一番好きな作品は最後のうたです。私は野茨が好きです。

☆・箱根薔薇うつむき咲けるつかの間を棘もつ身にし午後は散りゆく れん

**Re ありました 野茨** 投稿者：[文枝](#) 投稿日：2005年 5月29日(日)21時16分25秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

れんさん 野茨の歌掲載恐縮です。  
富士山の大きな景と小さな野茨のミスマッチが、かえって、お互いの存在を強調して、なかなか面白い歌ですね。

**こんばんは** 投稿者：[真奈](#) 投稿日：2005年 5月30日(月)23時52分32秒

[返信](#)・[引用](#)

肌寒い一日でした・・・朝はちょっとストーブつけたりしました。

ところで柿の木さんが桃李歌壇の談話室に、句会の選句のことを書き込んでおられたので、トライしてみようと思ったのですが、93句から3句を選ぶのは大変！ですねエー  
俳句も短歌も経験まだ2年ぐらいで、選句も恥ずかしいことですが、私の選んだ3句を書いてみます。

甲斐駒を水底に置き鯉幟  
武田の騎馬武者のときの声が水底から湧き起こってきそうで・・・

父の眸に力戻りし祭笛  
夏祭の宵の活気に満ちた町の光景と生き活きとした父を見る子の嬉しさ。

ある朝筍すくと我に立つ  
すくと我に立つ・・・という表現がユニーク。

皆さまはいかががでしょうか？

**句会桃李のこと** 投稿者：[田中 裕](#) 投稿日：2005年 5月31日(火)06時35分1秒

[返信](#)・[引用](#)

真奈さん、句会桃李の感想有り難うございます。  
句会の連絡には従来MLを使っていたのですが、最近ではダイレクトメールが多く来るようになって煩わしくなりましたので、[桃李歌壇談話室](#)を使うことにしました。こちらもご覧下さい。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

歌仙「冬の日」 投稿者：真奈 投稿日：2005年 6月 3日(金)17時58分16秒

[返信](#)・[引用](#)

コミュニティ・カレッジ前回の「愛宕百韻」では伝統的な和歌、あるいは和歌的なものを基底に詠われた連歌の粋として鑑賞しましたが、今回の、芭蕉の代表的歌仙「冬の日」では、連句（当時は俳諧と称しましたが）における構想力（イマジネーション）の最高峰の作品ということで、田中先生の解説に拠りながら一巻鑑賞しました。一番印象的だったところは次の表三句です。

狂句こがらしの身は竹斎に似たる哉	芭蕉
たそやとぼしるかさの山茶花	野水
有明の主水に酒屋つくらせて	荷兮

野水は名古屋の富裕な商人で当日の主人格、荷兮は尾張一統を率いる長という訳でこの三人の応酬は息づまるようなハイテンションですね。

狂句こがらし → たそやとぼしる このK音とT音の置みかけるような切迫感も素晴らしいけれど、こがらしには「木枯らし」と「身を焦がす」という恋の含意もあって、「たそや」の問いかけが活きてくる・・・そしてこの「たそや」と「とぼしる」から「進む水」→ 有明の「主水」に。この転じの勢いの良さ。

この展開にあるような言葉の意味の重層性と多義性こそが連句の特徴でありいのちであると、先生は解説されたおられましたが、まさに連句の醍醐味としかいいようがありません。その醍醐味、面白さの典型がこの荷兮の第三でした。

この第三には古来さまざまな解釈がされてきたようですが、今回の「有明の主水」は「主水星」すなわち「水星」のことである・・・というのは初めてでした。この年、貞享元年に新しい暦が採用され（よく調べたものですね!）、その暦を作った安井算哲の天文書から・・・ということですが、解釈としては「有明の月の残る黎明、主水星のみえるころに、酒の仕込みをはじめ」。 「有明の主水」は「有明に」というの時（月が残っている）をあらはす、しかし、前句に「たそや」とあるから「有明の主水」という人名にも取れるような工夫がされている！本当に人名であれば発句の竹斎と打越してしまいますものね。

私は多くの解説にしたがってこれまで、この「主水」は役職名、幕府御用の大工頭・中井主水と読んできました。野水は岡田氏として彼の屋敷の大和町宅は大工頭・中井大和屋敷・・・という説です。中井大和はまた名古屋城の造営の責任者でもあったことから、発句で自ら風狂の竹斎と挨拶した芭蕉に名古屋衆を代表して応答している図であるという訳です。ほかにも「有明」は京都・堀河の有名な銘酒の醸造元という説もあるとか・・・。

荷兮は狷介な人物とか言われますが、たしかにこの芝居がかった仕込みをやるのは大変な力量だと感心してしまいます。これだけの趣向をこらして、一巻巻き終わったら、「まずは一献」という大仰なご挨拶ですね。

それにしてもこの「冬の日」、どこを取っても趣向があり気が抜けません。それだけにこの尾張の地で蕉風俳諧を打ちたてようとした芭蕉の渾身の傑作だと思います。

先生、どうも有難うございました。

追伸

「冬の日」のアニメは二回ほど観ました。制作の川本喜八郎氏の講演によれば、次回アニメとしては、折口信夫の「死者の書」の予定ということでした。

れんさんの蓮田の歌 投稿者：田中裕 投稿日：2005年 6月11日(土)15時56分59秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

れんさんの蓮田の連作和歌から、

かなしみも希望も蓮(はちす)の田のなかにめぐる摂理の水にうつろふ

の「摂理の水にうつろふ」という言葉にひかれました。  
「うつろふ」は「映ろふ」と「移ろふ」の両方の意味がありますね。「悲しみ」も「希望」も、そのときどきの情念の移りゆきを、次々に映し出す蓮田の「水」を「摂理の水」と捉えるところ、素晴らしい歌だと思いました。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**六月の画帳「青梅」** 投稿者：田中 裕 投稿日：2005年 6月14日(火)20時06分6秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

photo by ガラクタ箱さん



六月の画帳の題を「青梅」にしました。

俳句、短歌、五行歌、詩など、ジャンルを問わず  
皆様の作品をお待ちします。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**京都への出張** 投稿者：田中 裕 投稿日：2005年 6月23日(木)22時26分36秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

明日の金曜から来週の月曜まで、「京都フォーラム」という会議に出席するために、しばらく留守にします。東大の駒場で「公共哲学シリーズ」として出版されている研究プロジェクトの一環ですが、今回は、宮本久雄さんとともに「物語論」というテーマで話をする予定です。火曜日に京都から四谷キャンパスに直行する予定です。

しばらく留守にしますが、ここには自由に投稿して下さい。

ところで、れんさんの、山紫陽花の写真と短歌、實に素晴らしいので、上の方にアップ致します。

れんさん、どうか遠慮せずに、画像をアップして下さい



<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**やっと声が出るようになりました** 投稿者：真奈 投稿日：2005年 6月28日(火)21時49分30秒

[返信](#)・[引用](#)

風邪をこじらせてしまい、声が突然出なくなりましたが、26・27日の仙台での連句会から帰ってのんびりしたせいか、直りかけてきました。

「青梅」・・・れんさんのお元気につられて。

青梅や六月の鬱とぢこめて  
 梅干しになる気なぞなし青き梅  
 青っぽさ青梅互ひに讃えをり  
 少年の掌の青梅の硬きかな青の時代のひそかな発光  
 落ちさうなあやふさの位置青き梅ころの内の澄みて悲しき

仙台の連句大会には浅野県知事も挨拶に現れました。浅野知事は東京時代、立川駅そばの居酒屋「石川屋善兵衛」で巻いていた「車座連句」の常連だったとこの会の画家さんにして酒豪の元締から聞いておりました。知事さんは挨拶でも「恋句が一番得意」と胸張ってました（！？）。

**Re : ひとさまは、みな、うまいね!** 投稿者: **文枝** 投稿日: 2005年 6月30日(木)17時11分28秒

[返信・引用](#)

れんさん 紫陽花いい色していますね。紫陽花の句、推敲したようですが、原句は確か、紫陽花の花 となっていたような気がします、**「花」**をとって、すっきりしましたね。画像の紫陽花は額紫陽花、または、額の花ともいいますので、更に推敲すると素敵な句になると思います。失礼しました。

**降る雨や濡れてひかりぬ額の花** 投稿者: **文枝** 投稿日: 2005年 7月 1日(金)21時02分46秒

[返信・引用](#)

れんさん 額の花の句、すっきりして、素敵なくです。私、直し（添削）しませんよー。れんさんが、ご自分で推敲なさっただけ。今度はわたしから、下の紫陽花、梅花紫陽花と呼ぶのですか。色が珍しい品種ですね。

**チバリヨ公演について** 投稿者: **文枝** 投稿日: 2005年 7月 6日(水)21時42分0秒

[返信・引用](#)

今晚は、「アバ音楽の森」主催の青少年向け、ミュージカルドラマ チバリヨの公演が、さいたま芸術劇場で7月22日に下記のように決まりました。皆々様のご来場とご声援を心よりお願いいたします。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fwww.geocities.jp%2Fkazesasouhana%2Findex.html>

**額の花に寄せて** 投稿者: **田中 裕** 投稿日: 2005年 7月 6日(水)23時15分31秒

[返信・引用](#)

れんさん

紫陽花の写真と和歌の連作、有り難うございます。とくに十字架の形に散っている額の花の写真と和歌が印象に残りました。

額の花十字に散りぬ汝（なれ）が家 丹仙

文枝さん

チバリヨ公演のおしらせ、どうも有り難うございました。3日の日曜日午後に、四谷のイグナチオ教会で、菅野さんのアンサンブル・シャロームの皆様他、幾つかの合唱団が、高田三郎さんの典礼聖歌を歌いました。「風はどこから」もアカペラで聴きましたが、なかなか印象的でした。そのとき、森元さんご夫妻もいらしていました。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2Ffeigenwille%2F>

**藤房空木** 投稿者: **文枝** 投稿日: 2005年 7月 9日(土)19時52分19秒

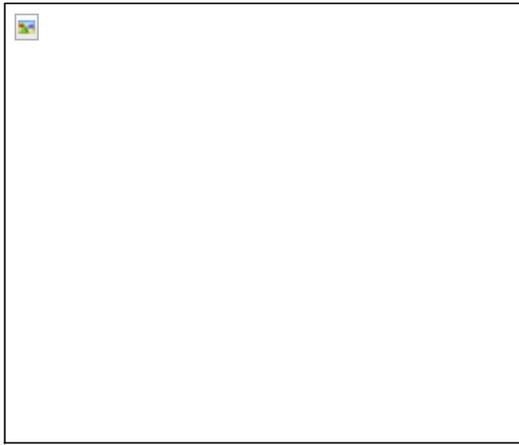
[返信・引用](#) [編集済](#)

れんさん、お花の名前はなかなか難しいですね。私も、画像で見たときは、一瞬、虎の尾だと思いました。山野草は殊々に似ている品種が多く、歌に詠むのは直感でいいのでは・・海紅豆の歌、れんさんのお気持ちが伝わってきます。

**7月の画帳は「昼顔」です** 投稿者: **田中 裕** 投稿日: 2005年 7月14日(木)21時38分50秒

[返信・引用](#) [編集済](#)

photo by ガラクタ箱さん



7月19日より25日まで、京都と石川県に学会出張します。帰京しましてから、武蔵野の画帳の編集に取りかかりますので、それまで、どうかよろしくお願ひします。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

---

**短歌投稿 昼顔に寄せて** 投稿者：真奈 投稿日：2005年 7月24日(日)06時28分9秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

カトリーヌ・ドヌーブのやうな昼顔に夢は朧や夏蝶の午後  
暁ればまた蝶の声囁きてあの世この世に昼顔の咲く  
昼顔の甘やかな胸母の座よつむれつむれと蝶天に向く  
わたしたち神に見られてゐるかしらひるがほに蝶うつとりと訊き  
一瞬は永遠なりき至福なる昼顔に蝶顔を埋めて

---

**昼顔** 投稿者：昭子 投稿日：2005年 7月25日(月)13時42分2秒

[返信](#)・[引用](#)

昼顔や神の一日のたなごころ      あずき  
昼顔の咲きのぼりゆく天の端      あずき

今、友人と二人で試行錯誤しながら「連詩」をやっています。  
三回目の挑戦にあたり、さきの二回の行き詰まりの原因を考えました。  
結果、「連句」のルールを取り入れてみようかと考えました。  
まだメールで非公開でやっています。いずれ公開できればいいのですが。。。

---

**ガラクタ箱さんへ** 投稿者：昭子 投稿日：2005年 7月25日(月)13時45分37秒

[返信](#)・[引用](#)

この昼顔の画像を、わたしのブログにも使わせていただけられるでしょうか？

---

**昼顔の写真** 投稿者：ガラクタ箱 投稿日：2005年 7月27日(水)23時53分7秒

[返信](#)・[引用](#)

このところ、チバリヨ写真CDつくりやプリンターが故障してしまい、新たに買い設定したりばたばたして返事が遅くなりました。  
昭子さん、昼顔写真自由に使ってね。

---

**Re: 昼顔の写真** 投稿者：高橋如安 投稿日：2005年 7月28日(木)09時57分10秒

[返信](#)・[引用](#)

> このところ、チバリヨ写真CDつくりやプリンターが故障してしまい、新たに買い設定したりばたばたして返事が遅くなりました。

>>チバリヨでは本当にご苦労様ですね。ガラクタ箱さんでないとできないことですので。そうは言っても、申し訳ありません。  
チバリヨのおかげで、新しいジャンルとしての音楽劇ができました。

音楽と演劇の対等の立場での舞台芸術です。  
オペラやミュージカルは、音楽が中心となり、専門が歌手さんのセリフはどうしてもおろそかになる。そのぶん小手先のセリフとなって良しとしていたが、今回はセリフは役者にまかせた。これによって、セリフの良さが聴衆に感動のある理解をもたらした。  
音楽と演劇。  
大きなホールから、数十人の会議室でも同じ環境で出来るようになったことは、チバリヨの公演には福音となるでしょう。

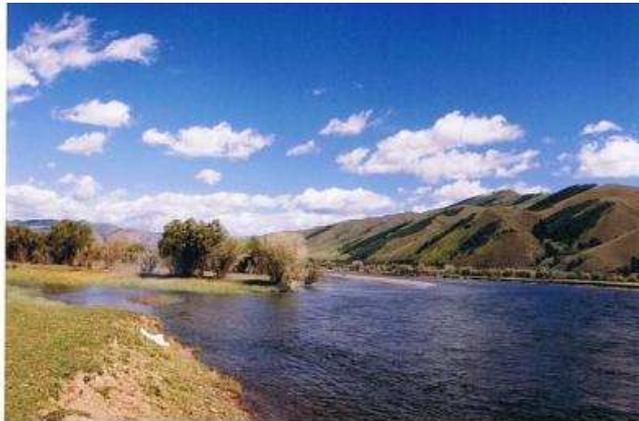
写真ありがとうございました。  
芸術劇場の入り口から、スタッフの様子、練習風景・・・あれだけ撮るにはさぞかし飛び走ったのですね。  
ガラクタ箱さんでないとできない写真でした  
如安

P s. 夏真っ最中。こちらは、いまが忙しさ真っ最中。子供たちが「アバ音楽の森」に沢山きます。森の中にキャアキャアと声がこだまします。カワセミが小魚を狙い、タナゴが群れをなして虹色の体を光らせています。夜は、キャンプファイヤーの光が真っ暗闇の中で光り輝きます。チバリヨのビデオができれば子どもたちに見せたいと思っています。  
そんな小さなアクションから偏見やいじめを語りたくです。

**昼顔の写真** 投稿者：昭子 投稿日：2005年 7月28日(木)14時34分37秒

[返信](#)・[引用](#)

ガラクタ箱さん。ありがとうございます。  
この写真がとっても好きなのです。  
ご多忙とのこと、どうぞおからだをたいせつになさってください。  
暑気払いにどうぞ。6年ほど前の8月のモンゴルのトール川です。



**七月の画帳 「昼顔」** 投稿者：文枝 投稿日：2005年 7月28日(木)20時00分11秒

[返信](#)・[引用](#)

昼顔や一人秘密の園にをり 文枝  
昼顔の健気に自治会掲示板 文枝  
何とか、まとめました。

**白蓮の花に寄せて** 投稿者：田中 裕 投稿日：2005年 7月29日(金)22時47分27秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

今朝ほど、束の間の白き輝きを見せて姿を消した白蓮の写真に寄せて

眉揚ぐる時の間 (はざま) や飛舞蓮 (ひまいれん)

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**昼顔 5句** 投稿者：しゅう 投稿日：2005年 7月29日(金)23時57分7秒

[返信](#)・[引用](#)

昼顔や美白の人へ影折れて  
昼顔や発熱過ぎてほじそわか

昼顔や口跡を聴く女子生徒  
 昼顔の漂泊めいて駐車場  
 昼顔のささめきしゃくるタトゥーの娘

私も暑さで頭が働きませんが・・・、うろうろしながら、5句まとめてみました。

**百首歌集を刊行しました** 投稿者：[田中裕](#) 投稿日：2005年 8月 6日(土)08時57分36秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

桃李歌壇の和歌連作の作品集です。

青海を 6601-6700  
[html](#)  
[pdf\(縦\)](#)  
 春雪の富士 6501-6600  
[html](#)  
[pdf\(縦\)](#)  
 セピア色した 6401-6500  
[html](#)  
[pdf\(縦\)](#)  
 空の綾取り 6301-6400  
[html](#)  
[pdf\(縦\)](#)  
 百舌鳥 6201-6300  
[html](#)  
[pdf\(縦\)](#)

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**れんさんの蓮の歌** 投稿者：[文枝](#) 投稿日：2005年 8月10日(水)15時24分39秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

れんさん 今日  
 れんさんは、蓮の歌に拘っていますね。

- ・哀しみの何処までゆくや蓮葉の下より青き空と夏雲 れん  
 画像がとても生きています。ただ、5・7・5・7・7の調べで読むと、「蓮葉の・・・」が字足らなくなるので、「蓮の葉の・・・」と、変えたらどうでしょう。
- ・大きな蓮のひと葉文月を錆色見せてひどく痛かり れん  
 この蓮の葉の画像は印象的です。  
 これも、「ひと葉・・・」でなく「一葉・・・」とすると調べがよくなります。

私は短歌の学びは、義務教育で習っただけですので、詳しいことは説明できませんが、俳句は、有季定型（5・7・5）が基本ですので、短歌も定型にだけ拘っています。しかし、れんさんは、画像と歌がみごとにマッチしているの、感心するばかりです。失礼しました。

**Re: れんさんの蓮の歌** 投稿者：[田中裕](#) 投稿日：2005年 8月10日(水)20時39分42秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

- > ・哀しみの何処までゆくや蓮葉の下より青き空と夏雲 れん
- > 画像がとても生きています。ただ、5・7・5・7・7の調べで読むと、
- > 「蓮葉の・・・」が字足らなくなるので、「蓮の葉の・・・」と、
- > 変えたらどうでしょう。

現在の読者のためには「蓮の葉の」と書いたほうが判りやすいのですが、伝統的には「蓮葉」は「はちすば」と読みますので、字足らざるはなりません。（「蓮のひと葉」も「はちすのひとは」と読みます）

古今集と後撰集から「蓮葉」の歌を二首引照します。

蓮葉（はちすば）の濁りに染まぬ心もて何かは露を珠と欺むく 古今集 僧正遍昭

蓮葉（はちすば）のはひにぞ人は思ふらん世にはこひぢの中に生ひつゝ 後撰集 詠み人知らず

(はひ=蓮根、こひぢ=「恋路」と「泥」を掛ける)

> しかし、れんさんは、画像と歌がみごとにマッチしているので、感心するばかりです。

同感です。この掲示板を画像と歌で満たして下さることを希望します。  
私達も、その画像に、歌をつけてみてはどうでしょうか。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**失礼しました** 投稿者：文枝 投稿日：2005年 8月11日(木)09時36分23秒

[返信](#)・[引用](#)

れんさん、田中さん 昨日の書き込みでは失礼しました。その通りです。  
手元の歳時記がないので、確認しないまま投稿してしまい、お粗末さまでした。

れんさんの

>人間はなんでこんなになんなくなったり、明るく希望にみちたり――

私の日常を語ってくださっているようで、身にしみました。

昨日読んだ

「夕暮れになっても光はある」(特養寮母の看護絵日記)  
え 土田セイ 文 林富美子

移行より

老いるとは脱皮することです。

苦悩を通り抜けて成長することです。

物質的な世界、自己中心的な世界から抜け出して、宇宙の中に移行することなのです。

待ってられる神さまのところに飛び立つことなのです。

そこでは死は終わりではなく、新しい出発なのです。

「野に咲くペロイカ」林富美子 も合わせて読みましたが、先達の淡々とした生き様に感動しました。

**お星様はだれの?** 投稿者：文枝 投稿日：2005年 8月11日(木)20時32分9秒

[返信](#)・[引用](#)

れんさんの記憶をたどり、抜粋します。

「お星さまはだれの?」

昼食をゆっくりすませて帰りますと、  
ひる当番の寮母が四つんばいになって  
立ちまわっていました。廊下中に散っ  
たお星さまを見つけているのです。雑  
巾を両手にもって、

「あら、ここにも、あそこにも・・・  
お星さまをおとした人はだれですか」

熱いおしほりをもって、ひとりひとり  
のお尻のよごれをたずねて回るわけ  
にもゆかず、おトイレ通いのひんぱん  
な者をさがすほかありません。

この「夕暮れになっても光はある」を、老人施設で働く方たちに読んでもらいたいです。

**ふれあいコンサート** 投稿者：アリス 投稿日：2005年 8月14日(日)22時50分34秒

[返信](#)・[引用](#)

この場をお借りして、一言お礼を言わせてください。

12日の「第三回 縦楓舎ふれあいコンサート」では、沢山の  
方々に心強い応援とご協力をいただきましたこと、心よりお礼  
と感謝を申し上げます。本当にありがとうございました!

田中さん、車椅子の方の誘導補助、有難うございました。

しゅうさん、受付、裏方、たくさんありがとう!

真奈さん、お忙しい中、ありがとうね!

文枝さん、お友達を誘ってくださってありがとうね!

れんさんの応援、とても心強かったです!

皆様、どうもありがとうございました!

今年の入場者数は、約200名でした!感謝です!

**Re: ふれあいコンサート** 投稿者：田中裕 投稿日：2005年 8月15日(月)11時53分16秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

> 皆様、どうもありがとうございました！  
> 今年の入場者数は、約200名でした！感謝です！

アリスさん、エミさん、トラ千代さん、皆さん

ふれあいコンサート、昨年に続いて聴かせていただき有り難うございました。  
水色のワルツ、五木の子守歌、宵待草など聴衆の皆様も口ずさまれ、弦楽器の演奏と一つにな  
った印象深い演奏会でした。

昨年に引き続き、今年もしゅうさんと共に東條耿一の著作集の補遺の編集を継続しています  
が、これは時間をかけて完全なものを作りたいと思っています。しゅうさんが例の如く、また  
またインスピレーションを授けられたらしく、戦前の婦人解放運動で著名な生田花世さんの姪  
が東條耿一の妻であったのではないかという仮説を出されました。全生詩話会の成立にとっ  
て、生田花世さんは関係が深いことがわかっていますので、彼女のことを調べるのは意味があ  
るでしょう。

9月4日にはとくに企画はしないことにしましたが、この日は日曜日なので、ミサの中で東條  
さんのお名前が読み上げられると思います。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

---

**8月の画帳「百合」** 投稿者：[田中 裕](#) 投稿日：2005年 8月15日(月)14時01分20秒

[返信・引用](#)

[8月の画帳](#)は、「百合」です。リアルタイムで更新しますので、どうかよろしくお願いま  
す。

なお、ガラクタ箱さんの撮られたこの百合の写真は、今月の「多磨」誌の表紙にも使われてい  
ました。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

---

**暑さも和らいで・・・** 投稿者：[真奈](#) 投稿日：2005年 8月16日(火)22時41分26秒

[返信・引用](#)

こんばんは

12日のふれあいコンサート・・・とてもよかったですね。親しみやすいポピュラーな曲で皆さ  
ん喜んで口ずさんでおられました。私もすっかりノッておりました。

エミさん、アリスさん、しゅうさん、トラ千代さん、ミラクルさん  
ひとつの集りを組織するのはとても大変・・・ほんとお世話さまでした。また来年が楽しみで  
すね！

柿の木さんとしゅうさんの共同作業での東條耿一の詩集第二部も順調に進んでいらっしゃると  
のことで、これも刊行を期待しております。

文子さんが生田花世の姪ではないか・・・という説も、瓢箪から駒といった偶然ではなく、日頃  
の熱心な探究心の結果から出てきた推理ですから、きつときちんと証明する資料が見つかる  
と思います。ただ、生田春月の自殺が、生田長江がら、或は文子が花世の姪だとして彼女がら  
いということが原因かどうか、はもう少し検討が要るようには思いますが・・・このあたりの  
ことはやっと生田長江の名前を知っているくらいで、彼が『青鞥』の出版に当たって助力・指  
導をしたことも初めて知りました。女性解放運動とも接点があったとは驚きです。北條や東條  
のニーチェへの傾倒も長江らの影響と考えられるでしょうか。

---

**松本馨さんの手記のことなど** 投稿者：[田中 裕](#) 投稿日：2005年 8月17日(水)19時00分27秒

[返信・引用](#) [編集済](#)

昨日、松本進さんにおめにかかり、松本馨さんのことについてお話を伺いました。そのさい、  
「小さき声」や多磨誌に発表された、松本馨さんの手記を電子化してWEB上で公開すること  
についておはなししましたところ、おおいに兄の文を多くの人に紹介して欲しいと、転載を快  
諾して頂きました。

掲示板やブログに転載しても、あとで閲覧するのに不便ですので、別個に「[松本馨さんからの  
メッセージ](#)」というWEBページを造り、そこに掲載することに致します。先ほど、「小さき  
声」の第二号を電子化して掲載しました。また、エミさん始め、閲覧したいという希望の多か  
った松本馨さんの「いのちの重み」は全文を電子化しましたのでご覧下さい。

>真奈さん、しゅうさん

松本進さんにおめにかかったあとで、国本衛さんのお宅にもお邪魔して、「全生詩話会」にかんすることなどもお聞きしました。国本さんによると、生田花世さんに関する記述は、大江満雄さんから聞いたとのことでした。「新潮」に該当記事がなかったのは残念ですね。明日は、上智の図書館が利用できるので、私の方も調べてみましょう。

誰が誰の姪であったかどうかということは、文学の鑑賞にとっては二次的なことと私は考えますが、東條耿一が生きていた時代の詩人であり青鞞の同人であった生田花世が、全生園を訪問して、ハンセン病という病に対してどういう認識を持ったかは、その文献が（実在するならば）教えてくれるように思います。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**Re: 松本馨さんの手記のことなど** 投稿者：しゅう 投稿日：2005年 8月18日(木)07時00分36秒

[返信・引用](#)

> 昨日、松本進さんにおめにかかり、松本馨さんのことについてお話を伺いました。そのさい、「小さき声」や多磨誌に発表された、松本馨さんの手記を電子化してWEB上で公開することについておはなしましたところ、おおいに兄の文を多くの人に紹介して欲しいと、転載を快諾して頂きました。

松本進さんにお会いになることができよかったですね。

>

> 掲示板やブログに転載しても、あとで閲覧するのに不便ですので、別個に「[松本馨さんからのメッセージ](#)」というWEBページを造り、そこに掲載することに致します。先ほど、「小さき声」の第二号を電子化して掲載しました。また、エミさん始め、閲覧したいという希望の多かった松本馨さんの「いのちの重み」は全文を電子化しましたのでご覧下さい。

拝見しました。

WEBですと読みたいときに自由に読むことが出来ます。テキスト化は大変神経を使う仕事で、ご苦労されたとおもいます。感謝して折々読ませて頂きます。

>

> >真奈さん、しゅうさん

>

> 松本進さんにおめにかかったあとで、国本衛さんのお宅にもお邪魔して、「全生詩話会」にかんすることなどもお聞きしました。国本さんによると、生田花世さんに関する記述は、大江満雄さんから聞いたとのことでした。「新潮」に該当記事がなかったのは残念ですね。明日は、上智の図書館が利用できるので、私の方も調べてみましょう。

生田花世の全生園訪問は、全生園の歴史の中では、俱会一処にも載る大きな出来事ですが、生田花世の年譜、花世の著作の中にはまるでその形跡をみる事ができません。「詩と人生」は大正12. 5—大正13. 10で終刊していますが、生田花世と佐藤信重が中心になって、昭和7. 1（創刊）—昭和8. 6（終刊）まで、復活されているようです。これを読んでみたいのですが、神奈川近代文学館にも、国会図書館にもありません。どこか、それを蔵しているところがないのでしょうか。

>

> 誰が誰の姪であったかどうかということは、文学の鑑賞にとっては二次的なことと私は考えますが、東條耿一が生きていた時代の詩人であり青鞞の同人であった生田花世が、全生園を訪問して、ハンセン病という病に対してどういう認識を持ったかは、その文献が（実在するならば）教えてくれるように思います。

生田花世は、昭和45年まで生きています、「新しい女性」であった花世の、戦後を追うのもまた、大変興味深いものがあります。そのなかで、文子さんのことが分かれば、それに越したことはないと思っています。

**(無題)** 投稿者：田中 裕 投稿日：2005年 8月19日(金)00時18分20秒

[返信・引用](#) [編集済](#)

>しゅうさん

今日は上智の図書館で、「生田花世の生涯」という伝記を見つけましたが、残念ながら、全生

園を訪問したという種類の記事はありません。現在、図書館では雑誌書庫を移動中のため、「新潮」その他のバックナンバーは9月にならないと調べられません。「詩と人生」も見つからなかった。そんなわけで、あまり成果はありませんでしたが、生田花世、平塚らいてう、生田春月の書いたものから、当時の詩壇や、女性解放運動の一端を垣間見た感じですね。

ところで、昨日、ブログで靖国神社のことを書きましたが、今日は上智から帰る途中で靖国神社に行ってきました。参拝は一切せずに、遊就館の展示の視察です。そこでは、日露戦争の記録を通じて愛国心を鼓舞する展示がありました。若い人達がたくさんきており、彼等を洗脳するような歴史映画が上映されていました。その内容は、東京裁判は誤っており日本には戦犯などは存在しないこと、日本は日露戦争以来、アジアの開放の旗手であったこと、中国大陸での戦争犯罪などは歴史の偽造であること、等々を主張する映画が上映されていました。そのナレーションは一種独特なもので、北朝鮮の国営放送と同じような調子です。一種のタイムカプセルに入ったというのが実感でした。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**田中先生**、投稿者：[旅人](#) 投稿日：2005年 8月19日(金)10時10分41秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

松本馨さんに関するメールでのお知らせありがとうございました。「松本馨さんからのメッセージ」というWEBページこれから読ませていただきます。  
なお、私事ではありますが、来週土曜日(27日)に、初めて全生園を訪問する予定です。

**旅人さんへ** 投稿者：[田中裕](#) 投稿日：2005年 8月19日(金)16時04分40秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

> 松本馨さんに関するメールでのお知らせありがとうございました。「松本馨さんからのメッセージ」というWEBページこれから読ませていただきます。  
> なお、私事ではありますが、来週土曜日(27日)に、初めて全生園を訪問する予定です。

投稿有り難うございます。27日の土曜日、全生園にいらっしゃる時間をお教え下さい。都合が合えば、お目にかかることが出来るかも知れませんね。

**田中先生へ** 投稿者：[旅人](#) 投稿日：2005年 8月19日(金)21時22分24秒

[返信](#)・[引用](#)

全生園訪問のスケジュールの件ですが、メールをお送りしましたので御覧下さい。

**松本馨さんの「小さき声 No.1」** 投稿者：[旅人](#) 投稿日：2005年 8月20日(土)18時55分49秒

[返信](#)・[引用](#)

標記の文と詩を読ませていただきました。コンピュータへの入力ご苦労様です。  
私は、松本馨さんの文章を読むのは、初めてです。この後、どのように物語が展開するのか、非常に興味(語弊があるかも知れませんが)を持っています。  
無教会の場合、 sacramentがありませんので、聖霊による洗礼を重視するわけですが、自分が救われたという確信を持つことは、かなり難しいと思います。内村鑑三は、救われた人は、人を愛せるようになると思いますが、私の経験からすれば、敵はおろか、信仰における兄弟姉妹をさえ愛することは難しく、最後には十字架を仰ぎ見るのみです。  
内村の場合、十字架教とさえ本人が言っていますが、贖罪の帰結としての再臨待望も重視しています。松本馨さんの場合、この再臨待望がどのくらい色濃く表れているのか興味があります。  
田中先生がお招きくださったことに対して、改めて感謝いたします。

**Re: 松本馨さんの「小さき声 No.1」** 投稿者：[田中裕](#) 投稿日：2005年 8月20日(土)22時28

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

分5秒

旅人さん

来週の土曜日は、全生園のハンセン病図書館へ行って松本馨さんの「小さき声」をコピーする予定です。ですから、時程が定まれば、お目にかかることが出来ますね。  
(このハンセン病図書館というのは、高松宮ハンセン病資料館とは別の建物で、宗教地区にあります)

> 内村の場合、十字架教とさえ本人が言っていますが、贖罪の帰結としての再臨待望も重視しています。松本馨さんの場合、この再臨待望がどのくらい色濃く表れているのか興味があります。

「小さき声」の270号(1985年8月1日)に、[終末と言うこと](#)というメッセージがありますので、それをお読み下さい。20年前というと松本さんは67歳ですね。私は、次の箇所

に松本さんの終末理解がよく現れているように思います。

「終末への希望が大きくなるに従って、この世への愛も大きくなっていく」

「キリスト者が内村先生が信じたような終末を信じたならば、イエスの歩まれた十字架を負って歩むであろう。十字架は世の罪を贖う神の愛であり、そこでは人間が人間を信じ切ることなのである。そしてそれが終末の意味ではなからうか。十字架を離れて終末はないし、終末を離れて十字架はないからである。」

松本さんは、内村鑑三や関根正雄の教えに従って「無教会は終末的エクレスシアである」と言っています。教会組織や聖なる典礼を持たない無教会が生き残るキリスト教であるのは、イエスや初代教会の信徒と同じく、恒に「終わりの時」を今此処で先取りしているからでしょう。松本さんが無教会について書かれている文章については、[無教会](#)というメッセージをご覧ください。

**武蔵野の画帳 8月 「百合」** 投稿者：[田中裕](#) 投稿日：2005年 8月21日(日)13時32分55秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

8月の武蔵野の画帳の題は、「[百合](#)」です。上の写真は、全生園の宗教地区にある聖公会の教会の前にある鹿子百合の写真です。いつもながらガラクタ箱さんの写真の構図の巧みさに感心します。

>れんさん

武蔵野の画帳に投稿有り難うございます。れんさんに続けて、私も一句

## 山百合の天に頭(かしら)を上げにけり

皆様もどうか自由に投稿して下さい。画帳はリアルタイムで更新しますので。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**全生園訪問の件** 投稿者：[旅人](#) 投稿日：2005年 8月22日(月)08時03分47秒

[返信](#)・[引用](#)

田中先生、お早うございます。27日(土)の夕方、はっきりした時刻は分かりませんが、3時から4時半の間に、一度ハンセン病図書館に顔を出させていただきます。  
「終末と言うこと」というメッセージ、読ませていただきました。再臨信仰を持った松本馨さんの晩年の心の平安を垣間見ることができたと思います。ありがとうございました。

**「百合」の歌** 投稿者：[真奈](#) 投稿日：2005年 8月22日(月)12時04分48秒

[返信](#)・[引用](#)

夏の陽に花卉を反らし山百合の謳ふがごとく斑(むら)の赤きよ  
ひしと抱くマドンナリリーの白きかなひたすらに野に咲きて祈れる  
処刑地の跡にユダヤの民の血か赤き野の百合群れて咲くらむ  
風に揺れ夏の炎(ひ)に揺れ百合の花いまだ知れえぬ恋の苦しき  
鬼百合よさわっちゃあだめ近づいて黒い花粉にさわっちゃあだめ

聖書にある「野の百合」は、原生の赤い小さいシクラメンの花のこととか、ホロコースト作家の友人がブラハからテレジンに行く道の途中の野原にこの小さな赤い花がいっぱい咲いているのを見た・・・という話を思い出したので。

17日～19日は連句漬けでした。教科書問題のさなかのオアシスでもありましたけど・・・。  
熱海で仕上げたのは短歌行で5巻。短歌行は岐阜の美濃派で盛んな形式で、2花2月、表4・裏8・名残表8・名残裏4の24句ですが、二十韻より4句多いだけでかなり窮屈さから解放される感じがしました。19日の夜は麻布十番の秋祭で、ここでは笠着世吉(44句)。なんとか捌き了えましたが、暑かった、熱かった4時間半でした。本来の笠着のように、道に縁台と文机でも置いて道行く人に句を連ねてもらえたらいいのになア・・・と思います。

27日の全生園には整理のお手伝いに伺います。(たいしてお役にはたちませんが・・・)。

教科書問題、朝日新聞の報道では、全国で1%程度の採択になるとのことで、「つくる会」の10%達成目標に歯止めがかけられ、少しほっとしてはいますが、この1%に4校が早々と7月中の採択で入ったと思うと口惜しいし、恥ずかしいことです。

**訂正願います。** 投稿者：[真奈](#) 投稿日：2005年 8月22日(月)12時31分46秒

[返信](#)・[引用](#)

鬼百合よさわっちゃあだめ近づいて黒い花粉にさわっちゃあだめ  
→鬼百合よさはっちゃあだめ近づいて黒い花粉にさはっちゃあだめ

でした。なにか連句っぽい調子でスミマセン・・・。

**多磨8月号のことなど** 投稿者：[田中裕](#) 投稿日：2005年 8月22日(月)23時00分18秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

>真奈さん

8月の画帳に投稿有り難うございます。  
短歌行と世吉ですか。どちらも、半歌仙や歌仙よりゆとりがありますね。世吉の捌き、季の配分はあらかじめ決めてなされたのですか？ 僕は、どちらかといえば、なにも決めずに巻く方が面白いのですが、しかしその場合は捌きが大変に難しいですね。

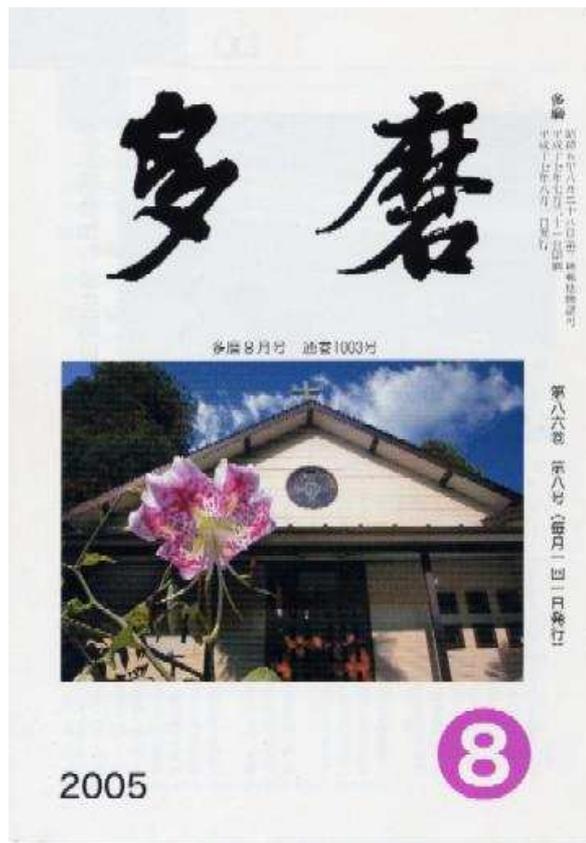
来週の土曜日は午後にも私も図書館に行く予定です。「旅人」さんとのオフ会にもなりますね。

ところで、多磨8月号の表紙に、ガラクタ箱さんの百合と聖公会教会の写真が使われています。武蔵野の画帳の兼題と似ていますが、すこしアングルが違うようですね。

ところで、この8月号（通算1003号）、なかなか内容がありました。自治会長の平沢さんと大谷藤郎さんの対談では、小笠原登の戦前の診療所の話が出ていて、内容的にはこれまで大谷さんが書かれてきたこととそれほど違いませんが、大谷さんが最初に小笠原さんのところで診察を手伝ったときのことが率直に綴られています。また、平沢さんの、「元自治会長松本馨さんを偲んで」という追悼文もある。資料館運営委員長の成田稔さんの「高松宮ハンセン病資料館の学芸員らに望む」は、図書館資料の将来を考える場合、必読でしょう。荒井裕樹さんが編集された真筆版北條民雄日記（昭和12年2月1日～2月7日）も転載されています。

ところで、歌壇と五行歌の欄には、この掲示板の投稿者の方々の作品や、伊藤赤人さんの作品もでています。連作に素晴らしい作品がある。赤人さんの五行歌連作は、全体が一つの詩のようですね。それから、短歌では、なんとと言っても牡丹の連作が印象に残りました。

馬場三郎さんは愛徳会で毎日曜日会うのですが、短歌を詠まれるとは知りませんでした！



<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**駒場の近代文学館にて** 投稿者：[田中裕](#) 投稿日：2005年 8月23日(火)23時12分31秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

今日は駒場の東大に用事があったので、帰りに、近くの近代文学館に立ち寄り、昭和7年と8年に再刊された「詩と人生」という詩誌を閲覧しました。これは、戦前の詩人、生田春月が入水自殺したあとで、夫人の生田花世が、佐藤信重らとともに再刊したものです。

生田花世という人のことは私自身は全く知りませんでした。今回、彼女や佐藤信重が、「詩と人生」を再刊した頃の心境を綴った文章を読み、戦前の詩人達の求道的な心に触れたような気が致します。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**感謝。 Re: 駒場の近代文学館にて** 投稿者：しゅう 投稿日：2005年 8月24日(水)09時48分26秒

[返信・引用](#)

>  
> 生田花世という人のことは私自身は全く知りませんでした。今回、彼女や佐藤信重が、「詩と人生」を再刊した頃の心境を綴った文章を読み、戦前の詩人達の求道的な心に触れたような気が致します。

昨日は、「詩と人生」を当たってみて頂きありがとうございました。  
「詩と人生」という雑誌名からも、如何にも「求道的」という感じがします。(笑)  
求道的といえ、何か、現代感覚ではないような、古い感じがしますが、私が、「海程」に投句し始めたころ、海程誌の皆さんにそんな印象を持ちました。  
今もそんな感じですか？と聞かれると、また、違うようにも思いますが・・・。  
だんだん、馴れて、違う面が見えてくるようになるということなのでしょう。

**やっと涼しくなりました** 投稿者：真奈 投稿日：2005年 8月24日(水)11時40分31秒

[返信・引用](#)

百合の短歌、さっそく8月の画帳に載せていただき有難うございます。ほんとうにガラクタ箱さんの写真のアングル、いつもステキですね！

さて、先日の笠着世吉ですが、参加者は総勢22名、限られた時間内なので、出勝ち、それも大鉦を振るって治定していかないと仕上がりに。大体の句座配置は歌仙にならって、季語の部分をつくらませ、冬のあたりでは歳末とか新年とかあまり使う機会のないものをと、お願いしました。44句はながいので、中だるみしないように、裏の折から名残に入るあたりに、恋をいれて3ヶ所にするなど変化をつけてみました。皆さんに愉しんで協力していただき、はじめての世吉、なんとか作品になり喜んでおります。

本来、世吉は連歌人に好まれ、悠々としていて連句人から見るとベタ付けね、という作品が多いのですが、歌のふるさと・・・という感じもして懐かしい趣があります。3吟か5吟でしたら句座配置なしでもきつとできるでしょう。

「多磨」に五行歌に連作の素晴らしい作品が載っているとのことで、ぜひ見たいと思っております。連作というのはひとつのテーマを独りで詠むのですね。五行歌は短歌よりもより自由律の詩に近い詩型と考えたほうがいいのでしょうか？

文子さんが生田花世の姪か・・・少しずつ状況が明らかになってきて、何かミステリーを読むようです。でも全生園訪問記の記事が、「詩と人生」誌に見つかってよかったですね。私は事態がよくわからないので、もう一度、「東條歌一・その生涯と作品」を読んできましたが、文子さんの姓、結婚前の姓名というのが全然出て来ない。また「鶯の歌」では義父が訪ねてきて「お母さんからの土産」などをあげているのですが、この義父の名も判らないのですね。

しゅうさんの書き込みによれば、西崎謙太郎さんのご子息が新宿で「西崎印刷」を経営しておられるそうですが、文子さんとは姉弟ということになるのでしょうか・・・戸籍簿が残っている限り、載っているようにも思うのですが、いや消されてしまったのでしょうか？

生田長江は、昭和8年には失明、10年1月鎌倉の長谷で亡くなっているようですが、「業病」というように書かれ、らいでありながら収容されることになかったのも何か理由があったことなのか、奇妙に思っています。

**Re: やっと涼しくなりました** 投稿者：しゅう 投稿日：2005年 8月24日(水)22時57分24秒

[返信・引用](#)

真奈さん、

一部レスさせていただきます。

> 文子さんが生田花世の姪か・・・少しずつ状況が明らかになってきて、何かミステリーを読むようです。でも全生園訪問記の記事が、「詩と人生」誌に見つかってよかったですね。私は事態がよくわからないので、もう一度、「東條歌一・その生涯と作品」を読んできましたが、文

子さんの姓、結婚前の姓名というのが全然出て来ない。また「鶯の歌」では義父が訪ねてきて「お母さんからのお土産」などをあげているのですが、この義父の名も判らないのですね。

北條民雄の最晩年の日記「柵の垣にかこまれて」の解説に、山下さんから、福祉課へ、入園者7、8名の調査依頼が出され、その回答には、東條文子は、出生も死亡も全く「不明」で戻ってきております。園の書類上ではそのようですが、渡辺立子さんがご存命だったら、そのあたりのことが聞くことができただろうと思います。残念です。

>

> しゅうさんの書き込みによれば、西崎謙太郎さんのご子息が新宿で「西崎印刷」を経営しておられるそうですが、文子さんとは姉弟ということになるのでしょうか・戸籍簿が残っている限り、載っているようにも思うのですが、いや消されてしまったのでしょうか？

>

この点については、もう少し、はっきり分かりましたらまた報告します。北風さんにも、いろいろ注意をされているので、慎重に運びたいと思っています。

> 生田長江は、昭和8年には失明、10年1月鎌倉の長谷で亡くなっているようですが、「業病」というように書かれ、らいでありながら収容されることのなかったのも何か理由があったことなのか、奇妙に思っています。

ハンセン病でも、療養所に入らなかった人は、戦前戦後通して、大勢居ます。長江は、昭和8年ですから、「祖国浄化」の嵐が起こる以前ですから、感染力の弱いのは昔から知られていたのではないかしら？ はげしい病気の恐怖感を持たれるのは、「小島の春」以降でしょう。風見治さんのご近所のかた、裕福だったらしく、ずっと、自宅で療養されました。風見さんは、はじめ菊池へ入られましたが、その方へは、菊池の園長！が、定期的に往診をして診ていたそうです。ハンセン病は、ほんとうに、いろんなケースがありますね。

---

**「小さき声」の復刻作業のことなど** 投稿者：[田中 裕](#) 投稿日：2005年 8月25日(木)11時34分46 [返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

秒

現在のところ、「[小さき声](#)」を創刊号から第5号までを電子テキストとして復刻しました。1962年9月から1963年1月までです。或る程度テキスト化が進んだので、フレーム頁にして閲覧しやすく編集したつもりです。

無教会についていうと、内村鑑三とその周辺の人々を第一世代、塚本虎二、三谷隆正、矢内原忠雄等の諸氏を第二世代、関根正雄、高橋三郎、量義治等の諸氏を第三世代と、仮に言うことが出来るとすれば、現在は第四世代ということになるのでしょうか。松本馨さんは、そういう分類でいうならば第三世代に属します。つまり、時代で言えば、戦中戦後の動乱期を直接に経験し、敗戦による日本人の価値観の転換を経験した世代です。

九月に無教会にゆかりのある[今井館](#)に行き、松本さんのことを直接ご存じの方にもお目にかかる予定です。

ところで、今井館では昨年、富岡幸一郎というひとがバルト神学について連続講演をしたらしい。ところが、この人は、「正論」の九月号に「キリスト信徒の靖国体験」というエッセイを書いている。それによると、彼は六月に靖国神社に参拝したとのこと。しかも「遊就館にきてよかった」などと書いている。「靖国応援団」を自称している論客の跋扈している雑誌に、こういうことを書くという事自体、非常に軽率であると思いました。それと同時に、富岡さんがバルトから何を学んだのか、きわめて疑問に思いました。バルトは、国家主義的な戦前のドイツのキリスト教会にたいして絶対的な「否」を投げつけた人です。

>真奈さん、しゅうさん

生田長江、佐藤信重、生田春月、生田花世という戦前の作家、詩人達の書いたものを通じて、昭和一桁の時代の日本が見えてくる—これは色々なことを考えさせます。残念ながら、僕には時間的余裕がないので、春月や花世のことにこれ以上立ち入ることは出来ませんが、誰かがさらに突っ込んで研究することを希望しています。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

---

**富岡幸一郎という人** 投稿者：[旅人](#) 投稿日：2005年 8月26日(金)13時11分19秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

この人がどういう人か分かりませんが、彼には「非戦論」という著作があり、その紹介文には、「内村鑑三とカール・バルト。キリスト者でありながらキリスト教を最も厳しく批判した二人の思想を継承し、聖書の終末論を徹底して読み解き、西欧近代主義、宗教原理主義を超えた21世紀の「非戦論」構築に挑む、俊英の根源的思索。」と書かれています。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fwww.ebookjapan.jp%2Fshop%2Ftitle.asp%3Ftitleid%3D4296%26genreid%3D14025>

この人の本が読むに値するのかわかりません。

田中先生、富岡氏が今井館でどのような講演をしたのか、ご存知でしたら教えていただけませんか。

なお、「季刊 無教会」という雑誌の第1号が今年の5月に発行されていますが、それに、富永国比古という人が、「富岡幸一郎氏の『非戦論』のきわどさ」という小論文を寄稿しています。そこには、次のようなことが、書かれています。

quote:

私は、今、衝撃的な雑誌の記事を読んでいる。「わしイズム」という、日頃あまり縁のない雑誌に掲載された「富岡幸一郎VS小林よしのり」というタイトルの対談である。異色の顔合わせであることもさることながら、その内容に、私は驚きを禁じえなかった。

(中略)

異色の対談といったが、よく調べてみると、この二人には、共通する「ある感情」がある。それは、戦後の平和論あるいは反戦運動に対する生理的嫌悪感である。

(中略)

二人は、「内村の非戦論は、<ひたすら命が大事>の非戦論とは大きく異なっている」という結論で一致する。

富岡氏は、自ら告白しているように、三島由紀夫の思想から深い影響を受けており、三島の死を記念し、讃美する「憂国忌」の発起人として名前を連ねている。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fwww.nippon-nn.net%2Fmishima%2Fhokkinin%2F>また、首相の靖国神社公式参拝にも、肯定的な発言をしている(諸君、2002年9月号、文芸春秋社)。

(中略)

小林勇次氏がインターネットで公開している以下の三島由紀夫論は、三島理解の本質に迫っていると思う。『「ニヒリスト」の三島は平時における自死を何とか神風特攻兵士のような「悲劇的」で「英雄的」な「美しい死」として美化し、栄化せしめんがために、「憂国の士」として自決したように見せかけたのであり、大いに「憂国」して死にたいのであって、それゆえ彼にとっては「憂国」の国難の状況は願ってもない絶好の状況なのであり、「至福の到来を招く状況」なのである。戦争のような国難や国家的破局を求める「憂国の士」とはふざけたものであり、「憂国」の状況を待ち望む「憂国の士」など悪い冗談以外の何ものでもないのだが、こんなふざけた「思想」も、晩年近くから三島が盛んに見せつけた明示的な「思想的」な看板や仮面に誑かされてしまう無邪気な人々には真に受けられてしまうのである』

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fwww5d.biglobe.ne.jp%2F%2FEugene%2F>

富岡氏ともあろう文芸評論家が、このような、三島の「病理」に気がつかないはずはないと思う。もし、気がつかないとしたら、氏の研究領域である「文芸評論」という世界が、いかに、根拠に基づいた(evidence based)議論から遠ざかっているか、という実例を示すことになる。内村は、根拠に基づいた信仰——「実験的信仰」——の重要性を強調した。…(中略)…

「十字架にすぎない幼児にすぎない」と言って、人々から崇め奉られることを拒否して逝った内村鑑三と、「憂国の士」を演じ「割腹」した三島由紀夫の思想に、全く接点はないと思う。内村によって、明確に指し示された「十字架の福音」によって、生かされている私としては、「割腹」という異様な方法によって、自ら国民と国家の救済者を演出した三島の思想と行動に対して、深い戦慄を覚えざるを得ないのである。

繰り返して言うが、文学方面に疎い私には、三島由紀夫と内村鑑三が共存しうる精神世界などというものを想像することができない。文学の世界では、そういうことが可能なのであろうか。富岡氏に聞きたいことはそのことである。

(中略)

小林氏や富岡氏が、三島の政治的メッセージの呪縛から解放され、日本人の道徳と宗教観を根底から蝕んでいる靖国の思想——擬似国家主義、ときっぱり決別されんことを心から願わずにはおれない。

unquote.

小泉首相にしても、自分を越えた国家に命を捧げるという美的イメージに心酔しているように思えます。このような国家主義は、内村の民族主義とは、無関係です。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fat-ease.m78.com%2Ftama%2Futimura4.htm> (内村鑑三の墓碑銘)

文学者とか文芸評論家の責任は重大だと思います。

Re: 富岡幸一郎という人 投稿者: 田中裕 投稿日: 2005年 8月26日(金)21時58分26秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

旅人さん:

>富岡氏が今井館でどのような講演をしたのか、ご存知でしたら教えていただけませんか。

五月書房から、「悦ばしき神学」 富岡幸一郎(2004年8月)という本が出ていて、それが今井館での富岡さんの講演の内容であるとのこと。彼の講演はまだ続けられるようです。

それから、富永さんの富岡さんへの批評をお教え下さり、有り難うございます。富岡さんの戦後問題に対処するときの「あやうさ」こそ、「正論」の発言を読んで私の受けた感じそのも

の。

いずれブログでバルト神学についても書く予定なので、そのとき富岡さんの本も必要があれば言及するつもりです。

ところで、10月1日午後2時より、故松本馨さんを偲ぶ講演会が全生園で開催される予定です。これは、「ハンセン病図書館友の会」という会の企画で、その講演会の準備のための打合せが、丁度、旅人さんがいらっしゃる明日27日の午後1時半からハンセン病図書館のなかで行われます。私も、その打合せには顔を出しますので、午後4時くらいまでは、図書館におります。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

---

**昨日は、ありがとうございました。** 投稿者： [旅人](#) 投稿日：2005年 8月28日(日)08時59分28秒 [返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

短い時間ではありましたが、田中先生を初め、大ぜいの方とお会いでき、楽しいひと時を過ごす事ができました。またお会いする機会がありましたら、宜しくお願いします。

バルト神学について、ブログお書きになるとの事、楽しみに期待しております。

とりあえず、お礼まで。

蛇足：全生園にて

青々と繁った樹々に  
囲まれて納骨堂に  
安らかに眠る人らと  
ひと時を過ごして思う。  
悲しみと苦悩に満ちた  
一生も今は過ぎ去り  
恨みなく憎しみもなく  
訪れる人に微笑み  
よく来たと囁き語る。  
夏の日の終りは近く  
風はなくトンボ飛び  
せみ時雨頭上に降り降る。

---

**富永国比古氏の著作について** 投稿者： [旅人](#) 投稿日：2005年 8月28日(日)10時08分31秒 [返信](#)・[引用](#)

今朝、「キリスト新聞」を見たら、ふと富永国比古氏の本の広告に目が留まりましたので、お知らせします。

「泣きながら夜を過ごす人にも」キリスト新聞社、¥1,500  
(紹介文)

近年、急速に変容した日本人の性行動は、個人のレベルにとどまらず社会的にさまざまなインパクトを与えている。婦人科医、カウンセリングを通じて感じる現代人のための新しい性教育論。10代の貴重な時期に、悲しみ苦し泣きながら悩む少女や、衝動的な青年たちと、目をそむけずに向き合うことを提唱。

著者：東京衛生病院婦人科医長を経て、米国ロマリダ大学大学院博士課程終了、現、ロマリダクリニック院長

---

**小さき声の編集のことなど** 投稿者： [田中裕](#) 投稿日：2005年 8月28日(日)17時59分54秒 [返信](#)・[引用](#)

今日は、前田先生から連絡があり、「小さき声」の5号と6号には編集に重複のミスがあったとのことでした。9月3日に、正しい6号を持参して下さるとのことです。そこで、6号をとり替えて、現在7号から10号までをアップしました。

>旅人さん、

昨日は、図書館友の会の会合、大勢の方が集まりましたので、オフ会にもなりましたね。富永国比古氏さんの御著書、ご紹介頂き有り難うございました。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

---

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

**至福のひと時** 投稿者：[旅人](#) 投稿日：2005年 8月30日(火)10時00分33秒

皆様、お早うございます。この数日、私の住んでいる春日井市では、朝夕かなり涼しくなってきました。朝食を終え、緑茶をすすむひと時は、心がスーッと軽くなります。そこで、一句ひねり、厚顔にも書き込ませて頂きました。

新涼や朝のひと時茶のかほり

なお、今私の掲示板では、内村鑑三の「聖書之研究」の短い文章を中心に、現代訳を試みて、掲載しています。内村に関心をお持ちの方がいらっしゃれば、是非お読み頂き、訳の改良についてご教示いただければ、幸いに存じます。URLは、  
<http://6304.teacup.com/mitubasanokageni/bbs>  
です。

**八月尽** 投稿者：[田中 裕](#) 投稿日：2005年 8月31日(水)11時08分42秒

[返信](#)・[引用](#)

昨日深夜、名古屋から帰京し、メールの整理などしました。図書館友の会、講演会の準備に向けて、自治会との折衝が進行中の方ですね。「山桜」のバックナンバーの目録の整理は大体、終わりました。「多磨」については、終戦後間もない部分はともかく、新しいものについては、同一号に多数のバックナンバーがありますので、これは欠本だけが判ればよいようです。

>旅人さん

「晴耕雨読」拝見しました。内村全集、英文のもので翻訳されていないものが多数あるので、連載をどうかつづけて下さいますように。私も読ませて頂きます。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2Ffeigenwille%2F>

**お礼** 投稿者：[旅人](#) 投稿日：2005年 8月31日(水)16時00分51秒

[返信](#)・[引用](#)

田中先生、私の掲示板を御覧頂き、ありがとうございました。何か気が付かれたことがあれば、お教えくださいますよう、宜しくお願いします。

私は、内村全集の方は、もっていないのですが、そのうちチャンスがあれば、入手したいと思っています。特に、英文のもので和訳されていないものが多数あると伺うと、やりたくなりますね。

それではまた。

**田中先生、お尋ねします。** 投稿者：[旅人](#) 投稿日：2005年 9月 1日(木)11時53分3秒

[返信](#)・[引用](#)

「松本馨さんからのメッセージ」 [http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fmembers2.icom.home.ne.jp%2Fyutaka\\_tanaka%2Fmatumoto%2Fmatumoto\\_index.htm](http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fmembers2.icom.home.ne.jp%2Fyutaka_tanaka%2Fmatumoto%2Fmatumoto_index.htm) は、公開されているのでしょうか。公開されているなら、私の掲示板に来る方にお勧めしようと思うのですが…。

**「小さき声」を聞く** 投稿者：[田中 裕](#) 投稿日：2005年 9月 1日(木)13時36分56秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

> 「松本馨さんからのメッセージ」 [http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fmembers2.icom.home.ne.jp%2Fyutaka\\_tanaka%2Fmatumoto%2Fmatumoto\\_index.htm](http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fmembers2.icom.home.ne.jp%2Fyutaka_tanaka%2Fmatumoto%2Fmatumoto_index.htm) は、公開されているのでしょうか。公開されているなら、私の掲示板に来る方にお勧めしようと思うのですが…。  
)

松本さん御自身が「小さき声」を校正復刻しようという意志を持っておられ、2003年5月より、以前出版したものをボランティアのかた（前田先生）に朗読して頂きながら、校正作業を続けられましたが、書籍として再刊されることを断念され、その代わりに、ゼロックスで原本を拡大コピーしたものを複数巻製本され、その一部をハンセン病図書館に納められました。それが2004年7月です。ハンセン病図書館では、この製本版は禁帯出なので、一般の方は、その存在をご存じでないことが多く、また自由に借り出し閲覧することもできません。そこで、このテキストを電子化して、WEB上で広く公開したいと思い、松本馨さんの弟さんの進さんに相談しましたところ、「兄の書いたものを出来る限り多くの人に読んで貰いたい」と、転載を許諾して頂きました。

そういう事情がありますので、広く一般の方に紹介して頂きたいと思います。

私としては、発刊当時の初期の「小さき声」と、松本さんの自治会活動の記録、らい予防法の改正・廃止の運動への呼びかけ、「俱会一処」の出版、関根正雄先生との出会いと無教会のキリスト教信仰について語られた部分等を抜粋し、一般性のあるものから先に電子化したいと思っています。

<http://111.teacup.com/mejoro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

---

**お答え、ありがとうございました。** 投稿者: [旅人](#) 投稿日: 2005年 9月 1日(木)14時27分54秒

[返信](#)・[引用](#)

それでは、早速ご紹介させていただきます。

---

**第三回 樅楓舎コンサートのスライド拝見** 投稿者: [田中 裕](#) 投稿日: 2005年 9月 3日(土)09時00

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

分32秒

ガラクタ箱さんの編集された[第三回 樅楓舎コンサート](#)の頁を拝見。コンサートの録音が流れるなかでの画面一杯のスライドショーが見事です。

今日は、松本馨さんの追悼講演会の打合せなどで、これから図書館に行きます。チラシについては、講演題目と司会者、自治会との共催関係が確定次第、作成に入ります。

山桜・多磨のバックナンバーの状況も更に調べます。先週、判明したバックナンバーの状況については

[ハンセン病図書館の山桜・多磨バックナンバー](#)をご覧ください。

<http://111.teacup.com/mejoro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

---

**東條歌一詩集第二版を作成しました** 投稿者: [田中 裕](#) 投稿日: 2005年 9月 4日(日)07時16分59秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

昨年の9月4日に[東條歌一詩集朗読会](#)を開催してから丁度一年が経過しました。この柿の木BBSは、その朗読会に参加して下さった皆様のために作りましたので、今日は、何か節目の日のような気がします。

東條歌一といっても、現在では、全生園のなかでも知っている人は少数です。私が東條歌一という名前を知ったのは、北條民雄の最期を看取った東條の手記を創元社の「北條民雄全集」で読んだことに始まります。その文章と彼の人柄に惹かれました。また、東條歌一の妹の津田せつこ（渡辺立子）さんの随筆には、昭和一七年になくなった兄の臨終の様子が描かれており、それは三十歳でなくなった兄に対する思いの溢れた者でした。とくに、病苦に苦しむ中で、東條が彼女に、「一篇の詩を詠み、私に代筆してくれと言った。あの緑の草原の上を素足で歩いてみたいそんなような意味の美しい詩だった。私は口述を書き留めながら、涙が流れた。いまはその詩の一節さえ憶えていないのが、悔やまれてならない」と書かれていた、その文が印象的であったので、彼の詩を読んでみたいと思いました。

しかし、東條歌一の詩を読むといっても、公刊された書籍に収録された彼の詩は微々たるものでした。1950年に出版された多磨全生園合同作品集「癩者の魂」の中の詩3篇（これは、皓星社の「ハンセン病文学全集」第6巻に再録されています）、「俱会一処」に光岡良二さんが紹介した詩2編、その程度が知られていただけでした。

その「東條歌一詩集」を、村井澄枝さんと私が、主として「山桜」から蒐集・編集してWEB出版（第一版）したのが昨年の6月8日でした。昨年の9月4日の朗読会開催後、昭和9年、10年代に東條歌一が、環真沙緒子というペンネームで、詩誌「蠟人形」「詩人時代」に投稿していた詩群が見つかり、また、カトリックの雑誌「聲」に昭和16年に投稿していた晩年の手記も発見しましたので、新しく見出された詩群を付加して

[東條歌一詩集第二版](#)（PDF）

を、今日刊行しました。

また、詩以外の小説・随筆・手記を集めて、

[東條歌一著作集](#)

というWEB頁を作りましたので、どうかご覧ください。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**東條歌一詩集第二版、うれし。** 投稿者：しゅう 投稿日：2005年 9月 4日(日)16時40分44秒

[返信](#)・[引用](#)

東條歌一へ  
青栗を抱いて逝きし詩人の忌

きょうは、東條歌一の忌日です。  
この日に、東條歌一詩集の第二版がアップすることができて、ほんとうに喜んでます。  
ありがとうございます。  
私の、HPでも、近々、更新をしたいとおもいます。

**東條歌一詩集第二版ありがとうございました！** 投稿者：真奈 投稿日：2005年 9月 4日(日)23時40分10秒

[返信](#)・[引用](#)

昨年の今日、はじめて全生園に行きました。小柄なマリア像がとても印象的だったことを覚えています。あれから一年、お蔭様でいろいろ勉強させていただきました。

今度の出版は128ページ、最後に「作品総目次」が付いていて完璧ですね。この若い青年詩人の9年間の短い軌跡は、病に生きる苦しみを詩作を通して、普遍的な愛へと純化していった歴史をよく物語っていると思います。

ほんとうに大変な作業でしたでしょう。感謝の気持でいっぱいです。

短くも燃え尽くされし歌一の詩的世界よ永久に栄光（はえ）あれ

**9月の画帳「露草」** 投稿者：田中裕 投稿日：2005年 9月10日(土)20時54分35秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

画像撮影 がらくた箱さん



武蔵野の画帳、9月の題は「露草」です。  
俳句、短歌、詩、五行歌、なんでも  
作品をお寄せ下さい。いつものように  
リアルタイムで更新します。  
この9月の画帳で、丁度、「武蔵野の画帳」も  
一年間を経過したことになりますね。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**ごらんよ 空の鳥** 投稿者：文枝 投稿日：2005年 9月11日(日)18時24分36秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

>「菅野淳」さんに会いました 投稿者：田中 投稿日：3月15日(火)18時28分50秒

何と不思議な出会い。今日秋津教会の帰り、清瀬駅前で、どなたかを待っているらしい、森本美代治さんに、ぱったりお会いしました。  
挨拶をしていましたら、向こうから、ニコニコしながら、渡ってくる方があり、森本さんの待ち人でした。

お昼を一緒にすることになり、紹介していただいたところ、なんと、「ごらんよ、空の鳥」の作詞者、古田泰人さんでした。

昨年9月4日に、友人から「ごらんよ、空の鳥」を教えていただき、そのことがきっかけで、この掲示板でも話題になりました。

田中さんにミサでお会いしたことおっしゃっていました。

あの「ごらんよ、空の鳥」教会の墓地で、友人と歌いました。  
そんなこと、あれこれ、楽しく、不思議な一時を過ごしました。

**Re: ごらんよ空の鳥** 投稿者：田中裕 投稿日：2005年 9月11日(日)20時57分33秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

今日は、愛徳会のミサで、森元さんにお会いしたので、10月1日の松本馨さんの追悼講演会のことを連絡し、ポスターとピラをお渡ししました。そのあと、渋谷経由で都立大前駅のちか

くにある今井館の無教会集会に出る予定があったので、森元さん、古田さんとゆっくりとお話する機会が無くて残念でしたが、でも、文枝さんがお会いになられたのは良かったですね。

今井館に行ったのは久しぶりでした。以前、お目に掛かった方がすっかり白髪になられていましたが、向こうもそう思っていたらよかったかも知れません。松本馨さんのことも、講演者の野上寛次さんのこともよくご存じの方が多く、司会の方が、「私達の教友、野上寛次さんがこの講演会で話されます」と紹介されました。

無教会の伝道集会というのは、讃美歌・黙祷・講義・黙祷・讃美歌という形で行われます。正養式（カトリックで云う聖体拝領）がありませんから、集会は聖書講義が中心です。したがって、献金と言わずに、「聴講料」を、参加者が支払います。9月11日の講義は、旧約聖書のテキスト批判の話で、なんだか大学の一般教養の聖書學を聞いているような気がしました。

ところで、これは、友の会の掲示板でも書いたのですが、10月1日の松本馨さんの追悼講演会、こちらからお願いした講師と司会の方に謝礼を支払わないと云うのは、再考した方がよいと思います。

参考までに、学会などが主催する講演の場合を云いますと、学会員が講演する場合は講演料は無料ですが、学会の外部からゲストをお招きして講演をして頂く場合は、必ず講演料を支払います。金額は、その学会の財政状況によりますが、無償で講演を依頼するなど云うことはありません。大体の目安を云うと、少ない場合は、2万円くらい、多いときは10万円位を支払います。ただし、講演者が学会の趣旨に賛同し、学会の財政状況に理解のあるときは、その講演料をそのまま学会に寄付されることもあります。（企業などがスポンサーになっている学会の場合は、金額が一桁違ってきますが、このケースは参考にならないでしょう）

資金が限られているボランティアの集まりであることを良く了解して頂いて、講演をお願いする先方に対して礼を尽くし、こちらの誠意を示すことが大切です。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**露草** 投稿者：あずき 投稿日：2005年 9月13日(火)23時38分37秒

[返信](#)・[引用](#)

ごぶさたいたしております。  
みなさまの活動は拝読させていただいております。  
なにも協力できなくて、申し訳ありません。  
心身共に、わたくしには無理なこと、どうぞお許しくださいませ。

夕闇に天のしずくよ露草咲く あずき

※ 画像は多摩川上流です。



**Re: 露草** 投稿者：田中 裕 投稿日：2005年 9月15日(木)21時06分28秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

すっかり秋めいてきました。もうすぐ仲秋の名月ですね。  
れんさん、あずきさん、露草の画帳に投稿有り難うございました。

> 暗き世に幽かなれども露草のあをき花びらしかとありたり れん

ガラクタ箱さんの写真、背景の闇を「暗き世」と象徴的に言語化、  
その中に咲く花びらを「しかとありたり」というところに惹かれます。

> 夕間に天のしづくよ露草咲く  
あずき  
月の出待たむ蒼き花びら  
丹仙

と短連歌風につけてみました。

季節の変わり目、お身体にお気を付け下さい。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**こんばんは。** 投稿者：あずき 投稿日：2005年 9月16日(金)23時27分9秒

[返信・引用](#)

田中さん。ありがとうございました。  
田中さんどうぞおからだを大切になさってくださいませ。

**9月の画帳「露草」** 投稿者：文枝 投稿日：2005年 9月19日(月)16時58分12秒

[返信・引用](#)

こんにちは

何とか一句 露草の朝ふくらむ夢ひとつ 文枝

ところで、今井館ですが、この三月まで、友人の息子さんが管理人をしていました。約十年がらんで、この四月より、北海道の大学に赴任して行きました。友人は、ふれあいコンサートや、チバチヨの観客となって協力して下さいました。「私は葡萄の木、あなたがたはその枝である」聖書の言葉がふと浮かんできます。

**(無題)** 投稿者：田中裕 投稿日：2005年 9月20日(火)21時42分41秒

[返信・引用](#) [編集済](#)

日曜日は、早朝出立で、義父の三回忌で群馬県太田市へ。夜帰京し、月曜と火曜日は、四谷で日本カトリック神学会。学会終了後、10月23日に行われる上智哲学会のシンポジウムの打合せをすませ、漸く帰宅しました。ややばて気味。神学会の参加者と、シンポジウムのパネリストにも松本馨さんの講演会のチラシをお渡ししましたが、関心は今ひとつでした。

帰ってから、メールの整理。「ハンセン病とキリスト教」の著者の荒井英子さんから連絡があって、10月1日にいらっしやるとのことです。同じ日に別の用事が重なってしまったが、なんとかやりくりして、講演の部分だけでも聴きたいとのことでした。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**「露草」に寄せて** 投稿者：真奈 投稿日：2005年 9月20日(火)22時15分45秒

[返信・引用](#)

こんばんは

文枝さん、昨日の図書館は作業で賑やかでしたよ。  
発送名簿など準備万端整えて下さってほんとうにありがとうございました。お三時に山下さんが薩摩芋をふかして下さいととても美味しかったです。

12日から16日まで北海道に行ってきました。

丹頂鶴が棲み、インディアンカーヌーが浮ぶ釧路湿原から沙流川（さるがわ）流域の平取（びらとり）にある友人のログハウスへの帰途のことでした。帯広から北上した清水町から然別湖（しかりべつ）へ向かう道の途中にあるオソウシという一軒宿の温泉に寄ったのですが、この山間一帯に新得とか鹿追とかいう地名が出てきてびっくり。行く前にしゅうさんから「読んで！」とドーンと渡された田中文雄の「失われた歳月」の最初の部分の章に、主人公の文雄が自殺の場を求めて北海道を苦悩の放浪の果て、ここ北の大地に生きるさまざまの人々のたくましい姿に触れて回心に至る感動的な場があるのですが、それが丁度この辺りだったのだ、と驚くやら感慨ひとしおでした。又、ぜひ行ってみたいと思います。

沙流川流域はアイヌの定住地だったところで、昔はたくさんの鮭が登ってきたそうですが、今はダムが無惨にも遮っているようです。周辺には図鑑で調べたところでは、エゾノコンギク、コゴメハギ、クサキョウチクトウなどの野花にまじり、露草もいっぱい咲き乱れていました。牧場では馬の親子が仲良くのんびり草を食み、澄んだ青空にとんぼが舞いほんとのんびりしています。

露草や路傍に小さき声のして  
こぼれさうな露ひとつの青さかな  
露草や優しき夜のものがたり

蛍火か鬼火か灯し逢ひに来よ夜のとぼりの露と濡れなむ  
ひとしきり泣いて天使の花の貌露ひと粒のいのち待宵

優しくて  
残酷な  
夜を凝らす  
露  
青の永劫

前にエミさんが五行歌のサイトを紹介して下さったのですが、やはり俳句とは違うようだしほとんど「詩」かな?と思い、ちょっと真似ごとをしてみました。

**Re: 「露草」に寄せて** 投稿者: 文枝 投稿日: 2005年 9月21日(水)20時50分46秒

[返信・引用](#)

真奈さんへ 19日のボランティア ご苦労様でした。  
それにしても、真奈さんはタフですね。北海道の目に見えるような紀行文、感心しました。  
思いがけない処で、思いがけない出会いがあり、例え文学を通じた出会いであっても、不思議な導きを感じます。北海道の地名はなかなか難しいですが味がありますね。  
露草の詩歌より、真奈さんの旅の一こまを拝見しました。

**露草** 投稿者: ガラクタ箱 投稿日: 2005年 9月22日(木)00時00分24秒

[返信・引用](#)

すっかり、涼しくなり心地よい気分なので、ひさしぶりに園内をデジカメ散歩してきました。  
百合舎の庭にはこの時期いつものように彼岸花が咲きはじめていて、その周辺をよくみると露草の群生を見かけました。



**Re: 露草** 投稿者: 田中 裕 投稿日: 2005年 9月22日(木)17時04分10秒

[返信・引用](#)

れんさん、文枝さん、真奈さん、あずきさんの短歌、俳句、五行歌、9月の画帳に掲載しました。

> すっかり、涼しくなり心地よい気分なので、ひさしぶりに  
> 園内をデジカメ散歩してきました。  
> 百合舎の庭にはこの時期いつものように彼岸花が咲きはじめていて、その周辺を  
> よくみると露草の群生を見かけました。

ガラクタ箱さん、露草の新しい画像有り難うございます。百合舎の庭ですか。仲秋の名月の頃の露草の画像、彼岸花とともにというのが貴重ですね。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**(無題)** 投稿者: **田中 裕** 投稿日: 2005年 9月29日(木)09時08分55秒

[返信](#)・[引用](#)

>れんさん

一輪の蕾にそそぐ朝の日や蓮のくれなひ喜びはらむ

今朝の蓮の写真、印象的です。(これはぜひ表示したままにしてください)

私は、これから、南山宗教文化研究所に出張です。一泊して明日、帰京します。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**展示室にて** 投稿者: **田中 裕** 投稿日: 2005年10月 4日(火)23時01分43秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

今日は図書館の展示室の当番でした。12時30分頃に到着、案内図と立て看板を外に出して、スリッパを並べ、来客待ち。平日の昼過ぎだから、なかなか来客あられず。

それでも、3人の方が展示を見にこられました。4人目の客と思いきや、それは講師謝礼の評論集を発送するために来られた藤巻さんでした。そうこうするうちに、松本進さんとガラクタ箱さんが見えられたので、山下さんを交えて、展示室で、先日の講演会のことなどで、しばし歓談しました。

ガラクタ箱さんの別館で、大谷藤郎さんの講演の録音が聞けます。流石の早業です！クイックタイムが必要ですが、Windowsでも鮮明に聞き取れました。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fwww.geocities.jp%2Fkazesasouhana%2Fkouen.html>

大谷さんが松本さんを単に同志とよぶのではなく「我が師」と呼んでいたのが印象的でした。

今井館の無教会の伝道集会で、チラシとパンフレットを渡した岡野さんもいらしていましたが、岡野さんは、「林文雄の生涯」の著者の「おかの ゆきお」と同一の人であることを私は知らなかったの、今井館に行ったのは正解だったと思っています。

野上さんは、関根正雄の無教会主義の思想をめぐって松本さんとは真っ向から対立し、40年前に袂を分かった人です。松本さんの亡くなる前に、見舞いに来られた野上さんに、松本さんは会おうとはされなかったとのこと。野上さんは、最晩年の内村鑑三の場合と同じく、なくなるまえに、かつて対立していた友人や弟子達と、互いに和解することを望まれたのでしようが、適わなかった。松本さんは、義の人ではあったが、愛の人ではなかった、と仰っていました。

お二人の關係に余人が口を挟むことは出来ませんが、野上さんと松本さんの關係を知るためには、無教会のキリスト教の理解が、お二人の間で決定的に違っていたことを知る必要があると思います。そうでないと、野上さんの話は、事情をよく知らない人にはミスリーディングです。

「崩壊」という言葉を野上さんは使われたが、もともと、松本さんの信仰は、既成の教会のキリスト教信仰が崩壊したという原体験がもたれている。プロテスタントの立場は、「律法ではなく信仰によって義とされる」というものだが、そういう信仰すら崩壊してしまったという体験が松本さんの信仰の原点です。だから、野上さんの立場から見れば、それはニヒリズム(これは、電話で野上さんと話したときに、彼が実際に使った言葉)に見える。松本さんにとっては、それはニヒリズムではなく、無教会主義キリスト教を徹底させることで有ったと思う。全ての人間に見捨てられ、そして最後は神からも見捨てられた無信仰の自己に、十字架にかけられたイエスの信仰が与えられ、自己に死してキリストに生きることができたということ—これが、松本さんが「小さき声」のなかで何度も繰り返されたことです。

追記(10月9日)

松本馨さんは、次のように回想しています

「1952年に、始めて（関根正雄）先生が全生園に見えられ、十字架を私に指し示して下さった。私にとって第二の回心ともいうべき出来事であった。私の長年求めていた師が、先生であることを知り、その時以来、先生の十字架信仰に集中した。（中略）私が、厳しい試練に立たされたのは、Nが先生と別れて独立すると言いだし、先生か、自分か、どちらかを選ぶように二者択一を迫ったときであった。私は独立するだけの勉強もしていないし、先生から十字架の信仰を学ぶためにNと別れた。Nと別れることは、私にとって自分に死ぬことであった。私のために聖書と雑誌を読んでもくれるものはN以外には居なかったからである。この問題の起こる前に、教会にとどまる事が良心を偽ることであり、神を試みる事であると知らされ、教会を出た。教会を出ることは聖書暗誦の奉仕者である二人の兄妹に別れることであり、聖書と訣別する事でもあった。このときも私は自己に死んだ。そして最後に残ったNとも別れたのである。」（預言と福音 三百号に寄せて）

<http://111.teacup.com/mejoro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**おくれませながら。** 投稿者：あずき 投稿日：2005年10月5日(水)13時05分46秒

[返信・引用](#)

田中さん、みなさん、松本馨さんの追悼会、友の会活動、本当にお疲れ様でした。そして、これからの活動も、お体に気をつけて。出来上がったものへの参加だけでは、大変申し訳なく思いますが、どうぞお許し下さい。

**このBBSの運営について** 投稿者：田中裕 投稿日：2005年10月9日(日)19時34分26秒

[返信・引用](#) [編集済](#)

柿の木BBSは、東條耿一詩集の朗読会に関心を持たれたかた、また協力して頂いた方のために設置した会員制のBBSでした。また、ガラクタ箱さんの写真集に感動し、それに俳句・詩・短歌・五行歌などをつけて、画像と詩歌との交響をめざす試みもおこないました。

設置して1年以上が経過し、御陰様で武蔵野の画帳も、春夏秋冬、すべての時節が出そろいましたし、東條耿一詩集も第二版を出すことが出来ました。

この掲示板の当初の目的は達せられましたが、ご承知の通り、全生園の図書館の閉鎖を防ぐために、「ハンセン病図書館友の会」が誕生しました。このBBSのメンバーの方の多くが、その会員となりましたので、これからは、この図書館関係の記事が多くなるだろうと思います。

「友の会」には、ここのメンバーでないかたもいらっしゃるので、ここで、いつまでも会員制の枠組みを保持しておくことは、公共性に欠くということに気づきました。

そこで、この際、会員制という枠組みをはずして、パスワードなしに、すべての人が閲覧できるように、この掲示板を公開したいと思いますが、如何でしょうか。どうか、皆様のご意見をお聴かせ下さい。

<http://111.teacup.com/mejoro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**画帳：武蔵野の四季** 投稿者：田中裕 投稿日：2005年10月10日(月)10時41分35秒

[返信・引用](#)

今まで柿の木BBSに投稿して頂いた詩歌を編集して、[画帳：武蔵野の四季](#)という頁を作りました。

[http://111.teacup.com/mejoro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fmembers2.jcom.home.ne.jp%2Fkaki\\_noki%2F](http://111.teacup.com/mejoro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fmembers2.jcom.home.ne.jp%2Fkaki_noki%2F)  
をご覧ください。

<http://111.teacup.com/mejoro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**申し訳ありません。** 投稿者：しゅう 投稿日：2005年10月10日(月)10時46分41秒

[返信・引用](#)

図書館友の会のメールに、BBSの運営についての、私見を書いてしまいました。まことに、申し訳ありません。

**「掲示板の公開」について** 投稿者：旅人 投稿日：2005年10月10日(月)14時43分35秒

[返信・引用](#)

当掲示板が公開されるということは望ましいことだと思います。ただ、書き込みについては、ある程度の制限がないと、收拾がつかなくなる恐れは、依然として残っていると思います。

いずれにしろ、この掲示板については、田中先生のお考えを全面的に支持いたします。

私としては、俳句や短歌がいつまでたっても初心者なので、その点は多少心苦しいのですが、お許しいただきますようお願いいたします。 m(\_ \_)m

**今日の展示会** 投稿者： **田中 裕** 投稿日：2005年10月10日(月)18時05分24秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

は、深野さん、真奈さん、そして私の三名が会場係となりましたが、お客様は、講演会の時に図書館存続についてコメントされた倉田さん一人でした。4人で、展示室のソファに腰を掛けて、講演会や松本さんのことなど、いろいろとお話ししました。そうこうするうちに藤巻さんもみえましたので、今、話題になっている、この掲示板の運営についても話しました。

展示室の入り口に、新しく、写真展と資料展のA3大のポスターを添付しました。これですこしは入り口らしくなったかも知れませんが、四時過ぎになったので、帰りにガラクタ箱さんの所に寄って、「武蔵野の四季」の頁をマックで見ました。

この掲示板の運営ですが、私は、すべてオープンにしようと思っていましたが、会員制のほうが望ましいという意見が多数でした。とくに、これまで、画像や詩歌を投稿して下さった方が、フリーの掲示板では投稿しにくいということでした。

そこで、しゅうさんが、友の会のMLに書かれたご意見に従うこととします。つまり、「友の会」の会員のかたには、すべてパスワードをお教えすることとして、当面の間は、このままの状態を続けることにします。

以前と同じように、武蔵野の四季の画帳の作製も、続けましょう。投稿は自由ですが、あたらしいテーマとして、「松本馨さんの<小さき声>を読む」を取り上げます。

前途遼遠なる企画と思われるかも知れませんが、私は、「小さき声」の完全復刻を目指しています。そのための第一のステップは、電子化してWEB上でまず出版すること。そうすれば、書籍での出版はいつでも容易かつ低廉な費用で出来るでしょう。

しかし、仕事を急ぐよりも、いまはまず、松本さんの著作を時間をかけて、ゆっくりと、皆さんと共に読みたいと思っています。松本さんから何を学ぶか—これのほうが優先します。

それでは皆様、今後とも如何かよろしくお願ひします。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2Ffeigenwille%2F>

**柿の木bbsのこと** 投稿者： **真奈** 投稿日：2005年10月10日(月)22時23分20秒

[返信](#)・[引用](#)

今日は前々からお願いしてあった、晩年の松本さんのことについて深野さんからいろいろ貴重なお話を聞くことができました。田中さん、倉田さん、藤巻さんとお見えになり、この掲示板のことについても意見を出し合いました。

この掲示板について、しゅうさんがお書きになったことに私も賛成です。「友の会」掲示板と「柿の木」掲示板とそれぞれ役割の違いがあっていると思います。ガラクタ箱さんの写真に句・歌をつけるのも一般公開画面ではちょっとたじろいでしまします。もともと東條耿一の詩についての感想やエッセイなどを書きこんでいたもので、文芸的なサークルのイメージをこの掲示板には抱いておりました。

ここで新しく取り上げる、<松本馨さんの「小さき声」を読む>もこの柿の木bbsらしい内容ですすめられるよう期待しております。「小さき協力」ということで電子化のための入力にも参加したいと思っておりますので、よろしくお願ひ致します。(校正をしっかりとですね！)

「画帳：武蔵野の四季」 見ました！画はなんといっても「屋顔と蝶」が斬新で素晴らしい・・・。次は柿紅葉、百合もいいですね。ガラクタさん有難う！そして柿の木さんに感謝します！

**講演会の感想** 投稿者： **田中 裕** 投稿日：2005年10月11日(火)16時10分24秒

[返信](#)・[引用](#)

アリスさんが纏められた講演会の感想を読みました。短い時間の中で、これ程多くの方が、このように適切な感想を残して下さいに感謝しています。私も、随分と遅くなりましたが、ブログに「講演会の感想 1 & 2」「ハンセン病図書館を残そう」という記事を書きましたので、↓をどうかご覧下さい。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

---

**「小さき声」の復刻** 投稿者：[田中 裕](#) 投稿日：2005年10月12日(水)13時12分55秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

は時間をかけて十分に校正したいと思います。とりあえず、[小さき声 No.1-No.12合本](#)をPDFで制作しました。これは印刷・校正用です。全部で52頁になります。WEB復刻版の編集者名は、とりあえず「松本馨記念文庫」としました。第1号からゆっくりと時間をかけて読書会兼校正作業をしますので、関心のある方はどうかよろしく。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

---

**復刻版のレイアウト考** 投稿者：[田中 裕](#) 投稿日：2005年10月13日(木)13時26分53秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

喘息の発作が出たために昨日より自宅で静養中です。大学の方は休講にしましたが、何かしている方が気が紛れるので、自宅で、「小さき声」の編集・校正に専念と言う次第です。

「小さき声」は、第一期（1962-1986）が276号、第二期（1987-1991）が35号ですから、全部で311号あります。それらを製本したものが、現在の所、二種類知られています。一つは前田先生が、一部ワープロで復刻したものと、原本をコピーしたものとを合わせて製本したもので、ハンセン病図書館に一式納められています。もうひとつは、無教会のキリスト教の今井資料館に、パンフレットそのものを合本製本したものです。

どちらを底本とするか。ハンセン病図書館のワープロで転写されたものと、今井館のものとはレイアウトが異なります。今井館にあった創刊号の原本を画像で表示してみました。（下図参照）また、創刊号を、出来る限り今井館の原本通りに復刻したものを作成してみました。

[小さき声Mo.1（原本の復刻）](#)をご覧ください。  
原本通り復刻するのは少々手数が掛かります。また、原本には、聖書引用などで正確でない箇所や誤植もありますので、そういうところは、前田靖幸先生の編集本を参考にしながら訂正しなければなりません。しかし、復刻本は、レイアウトが原本に近い方が望ましいので、時間は掛かっても、今井館に収蔵されているものを底本にしたいと思っています。



<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

円周寺のお墓参り 投稿者：田中 裕 投稿日：2005年10月15日(土)23時22分43秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

今日は朝から身体がだるく、今井館の無教会信徒のSさんに教えて頂いた指圧の先生（といっても若い人でしたが）に来て貰って、1時間ほどマッサージ。それが終わってから、次回の予約をするためにカレンダーを見たら何と今日は15日。桃李句会の兼題を通知するのをすっかり忘れていました。幸い、桃李句会の会員のHさんからメールで兼題の案が寄せられていたので、それを採用、急いで、「茸」「菊」「一三夜」を兼題として、連絡しました。俳句のことを忘れていたのでは、桃李の花守の資格がありませんね。すこし惚けも入っているようです。

9月30日朝、名古屋での懇話会の帰りに円周寺に寄って、小笠原登のお墓詣りをしたことを思い出しました。甚目寺という観音様で有名なお寺の門前町が、そのまま駅名になっています。電車を降りて、車の往来のない古びた参道を暫く歩きましたが、途中で花屋さんがあったので、秋の草花を一式買いました。こういうことは、まったく予定していませんでしたが、小笠原登のお墓に献花したいという気持ちがかきたのです。

甚目寺は真言宗の大きなお寺ですが、円周寺は浄土真宗で、目立たぬ場所にありました。幸い、ご住職（小笠原登さんの甥）の奥様がいらしたので、小笠原登の墓を教えて貰いました。実は、墓と云っても、小笠原家の墓碑があるわけではなく、多くの無縁の人と同じ場所に埋葬されることを望んだ故人の遺志で、お寺の墓地の一角のお地藏様の側が、いうならば合同の墓所。そこに、小笠原医師のことを思いながら、献花しました。

私は、大谷藤郎先生が語られたエピソードを思い出しました。それは、ある患者が、「先生、なんで私だけがこんな業病を背負わなければならんのでしょうか」と訊ねたのに対して、小笠原さんは、「今は、あなたは患者で、私は医者だけれども、死ねば皆同じ所に行くのです」と云われたとか。浄土真宗で云う「俱会一処」と言う言葉の意味がすこしだけ分かったような気がしました。

### 飄々として病なし草の花

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**松本馨と原田嘉悦** 投稿者： **田中 裕** 投稿日：2005年10月16日(日)13時13分18秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

大谷先生の講演の中に原田嘉悦さんのことが触れられていました。そこで、原田嘉悦さんが1986年になくなられたときに松本さんの書かれた「原田嘉悦さんを悼む」という文に原田さんとの交流を回想する箇所があります。

「一九三五年、原田さんは学園の先生であった原田フミさんと結婚するために寮父をやめもと居た桔梗舎の一号室に帰ってきた。その部室には七月に収容された十七歳の少年がいた。少年は一生隔離されることを嫌って自殺しようとしたが、死の一手手前で「俺はなんのために生まれてきたのだ?」という疑問がおこり、死ぬことはいつでもできるこの疑問をといてから死んでも遅くはないと自殺を思いとどまって、収容された。少年は辞典を片手に難解な哲学書を昼となく夜となく目を充血させて読んでいた。原田さんはこの変わった少年に興味をもち特別に目をかけるようになった。少年もまた丈が一八〇センチもあるような大男で目が鋭くほりの深い日本人ばなれした顔に魅かれた。

部屋には正方形の火ばちがあり、ニリットル入りの鉄瓶がかかっていた。原田さんはお湯がわくと日に何度でもお茶を飲んだ。お茶がそれほどあるわけでもなく一度入れるとお茶の色がなくなるまで飲んだ。そして、少年に哲学・宗教・文学多方面にわたって話した。

「ヨブの妻は夫に向かって神を呪って死んだ方がよい」といったために、世界の三大悪妻の一人になった、という話しや、もう一人の悪妻はソクラテスの妻であることや、ソクラテスは弟子に独房からの脱走を勧められるが、それをしりぞけて自ら作った法には従わなければならんといつて毒杯を飲んだことの話など少年は驚きと感嘆をもって聞いた。内村鑑三には多くの弟子がいたが、頭の良い弟子は内村に反抗し背教者になったこと、有島武郎、小山内薫のことなども話した。その他にキェルケゴールやニイチェ・ミルトン・ゲーテなど、逸話を交えてその人なりと思想を語った。日本人では、夏目漱石・芥川竜之介・西田幾多郎・道元・芭蕉など数えきれないほど次から次へと名前がでてきた。そして、そのような毎日が五年間続いたのであるが、少年は聞き飽きるということは一度もなかった。まるで原田さんの口からでるひとつひとつの言葉が少年には目の暗む宝石のように思えた。この少年が実は私である。

原田さんが帰ってきたことから、もうひとつ大きな変化がおこった。それまで部屋に出入りしていた人達はまったく姿を消し、代りに全生園を代表する文学青年が原田さんのところに来るようになった。「いのちの初夜」で有名になった北条民雄・詩人の東條耿一、歌人の光岡良二その他学園の教師をしていた者など、原田さんとの話題は宗教・文学・哲学であった。私は片隅でこの人達の話をしてひと言も洩らすまいとして聞いていた。また、原田さんに代ってお茶の接待などをしていたのである。

北条の言葉で今でも私が忘れることのできないのは、人間が不幸なのは恐怖の感情をもってゐるため、それを克服することによって不幸から解放されるという話しから、「北条はピストルの銃口を自分の脳天に突きつけて笑うことができれば、そのとき俺は自己を克服したのだ。」

私はこの突びな北条の言葉に仰天したが、後にドフトエフスキーの作品に親しむようになったとき、悪霊の中のキリーロフに影響された言葉であることを知った。北条は若かったのである。私は原田さんに誘われて北条の書齋に何度か行ったことがあるが長くは読かなかった。北条の命はあまりにも短かった。北条ひとりだけでなく、東條耿一と四～五年の間に次々と亡くなり、一九四一年にはそのグループは光岡良二ひとりになってしまった。」

松本馨さんの文藝修行がどのようなものであったか、また原田嘉悦さんとの深い交流の伺える文章です。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**10月15日 忘れていました** 投稿者： **文枝** 投稿日：2005年10月16日(日)21時12分5秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

田中様 さまざまご配慮ありがとうございます。  
ただいま、柿ノ木BBSを開けて、私も15日を忘れていました。  
今、気がついたところで、今週はホームヘルパーをしなければならぬし、展示会の当番も入っているの、投稿は無理かと存じます。年金はすっかり覚えていたのですが・・  
その上、急に腰痛で悩まされ、一つ故障が起こると、あちこち調子が悪くなりますね。  
田中さまも、どうぞご自愛くださいませ。今から惚けては困りますので・・

[返信](#)・[引用](#)

「小さき声」創刊号の印刷人として 投稿者：田中 裕 投稿日：2005年10月16日(日)21時47分10

秒

「藤田詩朗」さんのお名前がありました。今日、ガラクタ箱さんに伺いましたところ、中学でガラクタ箱さんも教わったことのある国語の先生でした。残念ながら十年ほど前にお亡くなりになったと言うことですが、おそらく、中学校の謄写版機器を使われて、松本馨さんの「小さき声」の印刷を引き受けられたようです。

>文枝さんへ

## けふもまた木瓜の實ありし雨と風

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

「小さき声」の復刻準備会のこと 投稿者：田中 裕 投稿日：2005年10月16日(日)23時02分48秒 [返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

「小さき声」の完全復刻は、出来る限り人の手だけをかけ、お金を掛けぬ事、つまり外部からの金銭的寄付に安易に依存しない、ということにしたいと思っています。

もし、松本さんが、國から賠償金を受け取ったとしたならば、「小さき声」も「零点状況」も簡単に自費出版できたでしょう。そういう安易な道は松本さんとはとられなかったのです。松本さんの個人伝道がそうであったように、たとえ少数であっても、人と人との心の繋がりの中で、「小さき声」を共に読みながら、そこから各自が学びつつ、復刻準備会の共同作業として、完全復刻を目指す一こんな事を理想として考えています。

全生園祭りが終わりましたら、志を同じくする方と相談して、定期的に（月に2回くらい）ハンセン病図書館に集合し、「図書館友の会」の作業日とバッティングしないように時間帯に配慮しつつ「小さき声」の復刻のための準備会を開催したいと思っています。

図書館での復刻準備会と並行して、皆様の「小さき声」の感想などを、この掲示板に書いて頂くと参考になります。つまり、準備会はハンセン病図書館で、読書会はこのBBSでということ。

また、復刻準備会には、これまで松本馨さんと深い関わりをもってこられた方々、無教会新宿集會の方々、荒井英子さんのような研究者の方々もお招きして、お話を聞くことも考えています。

まだ、青写真の段階ですが、「小さき声」復刻準備会については、今日（日曜日）、前田先生にもお話しし、ご協力して頂けることになりました。また、山下さんには、復刻準備会の会場として、展示室を使わせて頂くこともOKして頂きました。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

復刻版のレイアウト 投稿者：真奈 投稿日：2005年10月16日(日)23時16分46秒

[返信](#)・[引用](#)

こんばんは  
今日は大きな地震があつてびっくりしました。震源に近かつたようです！

下に載せて下さった「小さき声」のオリジナルは、ほんとに懐かしきガリ版印刷の時代を思い出させます。創刊1962年。タイトルの字などなかなか味がありますね。あの当時、ガリ切りというのは私は苦手でしたが、結構いいアルバイトでした。修正するのに蠟を塗って消したマッチのまだ熱い先でならしたり大変な苦勞をしたものでした。

今度の復刻版はこのオリジナルの味わいを残してとてもいいですね。当時、謄写版印刷はワラ半紙といっていたB4判でしたから、私もプリントをB5版の裏表2枚に印刷してみました。

原田嘉悦さんは松本さんが17歳のときの最初の師であつた方ということですが、いい方に巡り会えたのは幸せだつたと思います。北條らしいエピソードですね。

このところ連句で忙しくなかなか読めないのですが、少しずつでも・・・と思っています。

急に冷えこんできました・・・  
お互い健康には気をつけていきましょう！

**田中先生へ、松本馨さんの読書会の件** 投稿者：旅人 投稿日：2005年10月17日(月)20時39分24秒

[返信](#)・[引用](#)

了解しました。この掲示板でされるなら、読書会には私も参加させてください。

それではまた。

**関根正雄との出会い** 投稿者：田中裕 投稿日：2005年10月18日(火)17時37分58秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

松本馨文庫に「[預言と福音](#)」300号によせてをアップした。そのなかに次のようなくだりがある。

「私（松本馨）が「預言と福音」の購読者になったのは、一九五〇年の十月か十一月ではなかったかと記憶しているが、予め雑誌の内容を知って購読したわけではない。当時先生の名前さえ知らなかった私は、友人のNが先生の読者である事を知って、彼に依頼し取り寄せたのである。この年の春、私は一夜にして失明し、失意のどん底にあった。自分を打つ怒りの神が、同時に恵みの神である事が分らないで、地獄の苦しみを経験していた。暗い病棟の一隅で、この神が分らず幾度か呼吸難に陥り失神しかけた。そんな中で、藁にも縋る思いで闇雲に二、三の雑誌を取って見た。その中に「預言と福音」が入っていたのであるがこの様な状況の中で、雑誌を読んでも分る筈がなく、霧の中を彷徨う思いであった。然し、神は私を見捨て給わなかった。ロマ書三章二節以下を通し、御自身を啓示されたのである。そして、約二年後の一九五二年に、始めて先生が全生園に見えられ、十字架を私に指し示して下さった。私にとって第二の回心とも言うべき出来事であった。」

関根正雄が初めて全生園を訪れたのは、1952年6月20日。無教会千代田集会から、約10名位の信徒が同行したとのこと。（森田外雄氏作成の略年譜による）。これが第一回の聖書講義であった。第二回の聖書講義（9月10日）のテーマは「詩編40」。それ以後、1954年12月まで、毎月第二日曜の夜、全生園で集会が開かれ、詩編の講義が続けられた。1955年は年4回、1956年からは年に1、2回の訪問となるが、1970年頃まで続けられた。関根正雄が最後に松本馨を訪問したのは1995年11月29日とのことである。1955年7月、『預言と福音』第58号に、松本馨から関根正雄宛の書簡、「ヨブのごとく—ある癩盲の兄弟から—」が掲載されている。

再び松本馨さんの文を引用しよう。

「私（松本馨）が厳しい試練に立たされたのは、Nが先生と別れて独立する、と言い出し、先生か、自分か、どちらかを選ぶ様に二者択一を迫った時であった。私は独立するだけの勉強もしていないし、先生から十字架の信仰を学ぶ為にNと別れた。Nと別れる事は、私にとって自分に死ぬ事であった。私の為に聖書と雑誌を読んでもくれる者はN以外に居なかったからである。この問題の起る前に、教会にとどまる事が良心を偽る事であり、神を試みる事であると知らされ教会を出た。教会を出る事は聖書暗誦の奉仕者である二人の兄弟に別れる事であり、聖書と訣別する事でもあった。この時も私は自己に死んだ。そして最後に残ったNとも別れる事になったのである。その後、Nは、私が購読している雑誌だけは読んで上げる、と申し出、何ヶ月か続いたがある日、「預言と福音」を持って面会所の個室に行った時、今後「預言と福音」は読まない、と自分の用意して来た雑誌を読んだが、私の耳には何も聞えなかった。あまりにもその衝撃が大きかったからである。神は何故私だけをかく懲らしめ給うのか、私には分らなかつた。そして、暗黒の中で幾日も祈り続けた。然し、神は試みに耐え得ないほどの苦しみに合わせ給わない。私から総べてを奪った神は、私の為に、ある準備をされていて下さった。それは先生と、千代田集会の教友達が、私の為に目となるテープレコーダー購入の為の寄附を募っていて下さったのである。」

この文は前にも一部引用したが、松本さんが秋津教会を離籍したこと、聖書を暗誦してくれる人を失い、『預言と福音』を盲目的の自分に替わって読んでくれたN氏とも訣別したと云うところ、ある危機的状況に松本さんが居たことが判る。そして「暗黒の中で幾日も祈り続けた」。しかし、「私から総べてを奪った神は、私の為に、ある準備をされていて下さった」。絶望の極みから、一転した信頼への転調—松本さんのこの回想そのものが、旧約聖書詩編の中で我々がどう回心経験の叙述そのものではないだろうか。

松本馨さんのためにテープレコーダーの購入資金カンパが無教会千代田集会で1961年になされた。これによって、以後、テープによって、関根正雄の講義を聴講。1963年8月には『預言と福音』第149号の表紙裏に2頁に「小さき声」が掲載された。1967年11月26日、鷗友学園での『預言と福音』200号記念感謝会に松本馨さんも出席された。これが失明後の初めての外出であったという記事を読んで、あらためて松本さんの置かれていた状況に気づく。

私が今井館で関根正雄の旧約聖書講義を聴いたのは1980年代であったから、松本馨さんが関根正雄から決定的な影響を受けたときよりもしばらくあとになる。関根正雄氏から「信頼的絶望」とか、「無信仰の信仰」という言葉を聴いたとき、私の場合は、必ずしも氏の考え方に同調出来たわけではない。

しかし、「小さき声」に収録された松本馨さんの文章は、関根正雄の言葉に独特のリアリティを与えていることに気づいた。言葉の意味は、それを初めて述べたひとよりも、その言葉に動かされ影響された人によって、深まりを増していくと云うことがあると思う。「信頼的絶望」という言葉は、松本馨さんの回心経験という文脈に置かれたとき、私にとってかつて無かつた

ような實在感を獲得したのである。

N氏が関根正雄と袂を分かち、社会復帰していったあとでは、松本さんは、暗誦した聖書の言葉と、関根正雄の「預言と福音」の言葉によって生かされるようになる。そして、園外へは「小さき声」を刊行しつつ、園内では自治会活動という100%世俗的な活動に従事する。これもまた、100%世俗の中に生きることが、100%信仰の中に生きる事になると言う関根正雄の思想の実践であった。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**興味深いお話ありがとうございました。** 投稿者: [旅人](#) 投稿日: 2005年10月19日(水)08時14分59秒

[返信](#)・[引用](#)

「関根正雄との出会い」には、色々教えられるところ、考えさせられるところがあると思います。

松本馨さんは、どうして「然し、神は私を見捨て給わなかった。ロマ書三章二一節以下を通して、御自身を啓示されたのである。」とお感じになったのか、もう少しお教えいただければ幸いです。何しろ、聖書全体がこの個所に要約されているとされる所であり、この個所を自分のものとして受け入れられたということは、容易ならざるできごとだと思えるからです。関根先生御自身、松本馨さんの信仰生活から多くのことを学ばれているのではないのでしょうか。

私は、「関根正雄著作集」を読んでいます、あまりにも哲学的過ぎて、よく分かりませぬ。ただ、「無信仰の信仰」という一見矛盾した信仰の在り方は、内村鑑三の「信仰」に関する考え方に通じているように思えます。つまり、内村の「受動的な信仰」を哲学的に表現したものであろうと考えています。

以上

**「福音の再発見」について** 投稿者: [田中裕](#) 投稿日: 2005年10月19日(水)22時47分9秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

松本馨さんが、妻の死と失明というどん底から立ち直るきっかけを与えた関根正雄の「預言と福音」にはどのようなことが書かれていたのだろうか。ここで、1952年10月の『預言と福音』第27号に、「福音の再発見」と題した関根正雄の文を読んでみたい。

「十数年前私（関根正雄）が回心を経験した時、神は生ける御言を以て突如として私に迫り給うた。私はその時文字通り神の律法に殺され、キリストに蘇った。

この夏の終り、私は一切を御破算にしてもう一度新たに裸で神の前に立った。総てのものを投出して全く無前提に私の信仰の立場が最後のぎりぎりの所、何処にあるかを問うて見た、否そのような問いを問うべく迫られたのである。その時私は恐るべき発見をした。私が自分の信仰の前提として暗々裡に予想していた自己の罪の自覚、神の義に対する飢え渴きすら自分自身の裡に存在しないことを発見したのであった。それは自己が神の前に完全に失われているとどの底の発見であり、自己の人格性そのものが神の前に失われ、従って神をも人格として捕えていないことの暴露であった。自己は虫けらに過ぎず、人間ではなかったのである。

絶対の無力と不信の只中で私はもう一度十字架を仰いだ。私はそこにかつての回心の日の如く迫り来る神の義を見る事は出来なかった。私がそこに見出したものは不義の蔽いに隠された神の義であり、弱さの蔽いに隠された神の力であった。「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」を通して「我は虫にして人に非ず」（詩篇二二ノ一、六）という言葉の中に死んでいった神の子の姿であった。限りなく低くされた私は不義と無力と「虫」の姿を通してのみ、神の義と力と更に生けるキリスト御自身を再び見出したのである。

如何にして私はそのように隠された蔽いの下に一切を見出すことが出来たか。それこそは実にキリストの御霊の力であった。その事は又私にとって先の発見以上の大なる発見であった。私はそれによって十字架を通らざる聖霊の信仰に最終的に訣別することが出来たのである。

人間の罪は底知れず深く、彼はその人格そのものを神の前に失っているのである。人間の人格性の回復は霊によって直接的に果されることが出来ない。そこでは霊そのものが何らか非人格的自然的な力として受け取られて了うのである。愛ということすら何らか非人格的な感情になって了うのである。唯十字架を通してだけ人は真に罪の赦しを知りそれによって人格として回復されるのである。

宗教的人間は十字架の信仰を回避して、出来れば直ちに神の霊と力に溢れることを求める。然しそれこそはルッターが人間の罪の最深なるものとみた宗教的人間の自己追求の罪に他ならない。福音的信仰と他の一切の信仰乃至宗教の差はこの罪を知っているかどうかにかかっていると見えるのである。（第二十八号、一九五二年十月）」

関根正雄は、第二回目の回心（十字架のイエスによって、これまでの自己の宗教性が否定され、自己の不義と無力と無信仰に恐れ戦くことを通して、自己に由来しない信仰をイエスを通して与えられたという経験）を述べるにさいして、自己の人格性の完全なる喪失を、詩編の作者と同じく「我は虫にして人に非ず」と言い表す。

いふなれば、これまで自分が、自己の内にある信仰と信じてきたものが徹底的に崩壊したときに、そのような「無信仰」なる我のために、そのような無信仰の底の底に、十字架に付けられたイエス御自身が、私のために、低く降りたもうた、という事実が、如実に体験されたということ、それを「無信仰の信仰」と関根正雄は表現したのである。

松本馨さんの「小さき声」の第二号に掲載されている、「みみずの歌」という詩は、そのような人格を喪失した自己の姿、「虫けら」としての「私」を詠んだものであろうし、創刊号に掲載された「水先案内人」は、無信仰の「どん底」にあった自己を生き返らせたキリスト、自己自身よりも自己にとって根源的な「命の命」であるキリストを詠んだものである。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**「みみずの歌」は、どのように鑑賞・観照すべきなのでしょう。** 投稿者：[旅人](#) 投稿 [返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

日：2005年10月20日(木)10時40分19秒

この歌には、おけらも登場しますね。私は子供のとき、仲間たちと、よくおけらを掘り出して、遊びました。土を掘るのに適した手をしていますね。だから、みみずよりは、土の中を早く進めるのではないのでしょうか。しかし、いずれにしろ、この両者は、光の届かない土の中でしか生きていけない動物です。その動物たちは、直接的には、失明した松本馨とその仲間たちを比喩しているのだと思います。

土を味わえば、そこには何の味もなく、不快感が口の中に残るだけです。その土をどうして「こんべい糖のように甘く梅干のようにすっぱい」と感じられるのでしょうか。そもそも、この土は、何を表しているのでしょうか。もしかすると、その土とは、自分が進みつつある人生なのかと思います。すると、空洞であったのは、自分の過去ということになるのでしょうか。では、こんべい糖のように甘かったのは、周囲の人から示された愛なのかと思います。

みみずとしての生涯に、やがて外から危機が訪れ、それにより自分が死んだことを、「ああ天井はやぶれ矢で心臓を射ぬかれた」という言葉が語っているように思います。そして、「鳩」は聖霊であり、新しい命なのでしょうね。「降りてくる」と言わずに「落ちてくる」と表現したのは、それが自分の心に急激に入ってきたことを示しているように思います。それが松本馨の、第二の回心経験だったのでしょうか。

松本馨さんの場合には、社会的差別により、自分が無価値な存在であることを、意識せざるを得なかったのではないのでしょうか。また、常に死の問題が付きまとっていたと思います。その死の問題が、神の子の贖罪の死によって自分の心の中で解決した時の歓喜、それを「小さき声」で伝えていらっしやるのでしょうか。

ところで、関根先生の第二の回心経験に関するお話は、これまた随分哲学的というか、神学的というか、要するに難しいですね。そして、関根先生の場合、第二の回心の経験の前には、かなり神秘主義的であったことが、「福音の再発見」という文から読み取れると思います。この点が、わたしのように初めから一貫して世俗的である者とは差があるように思えます。

「自己の罪の自覚」これは、かなりロマ書の知識を前提として、自分を解剖してみるか、自分が過去にどのような考えで生きてきたかを振り返る必要があると思います。でも、それ以上に、神の義は、理解困難というか、理解不可能であり、ある程度の想像しかできないように思うのですが、いかがでしょうか。旧約の預言者たちが求めていた神の義の実現が、神の独子による十字架上の贖罪死であるということは、神の義が、いかに人間の思いを超えた聖なるものであるかを物語っているように思います。神の義に対する飢え渴きを感じることができるとは、ごく限られた人々にだけ許されているように思います。神の義の実現には、このような方法しかないのですか、という思いが常にあります。そのように問うのは傲慢なんではないでしょうか。

**Re: 「みみずの歌」** 投稿者：[田中 裕](#) 投稿日：2005年10月20日(木)22時41分27秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

>旅人さん

今日は、上智コミュニティカレッジがあったので、先ほど帰宅しました。コメント有り難うございました。「みみずの歌」の最終連の六行

風がその空洞を吹き抜ける。  
その度にお前は一管の笛となって泣く  
だからお前は土を喰う

ああ天井はやぶれ  
矢で心臓を射ぬかれた  
鳩が落ちてくる。

では、「空洞」という言葉が、一つの鍵となる言葉のように思いました。カール・バルトは、「ロマ書」のなかで、キリスト者にとってイエスは、我々の既知の平面を穿つ「弾孔ないし空洞」としてしか見えない、と述べています。関根先生のロマ書講義を通じて、松本さんは、そういうイエスの捉え方をご存知だったのかも知れません。

「土」は、目の見えぬ作者がそこにおいて生きていく世俗を表し、作者は、空洞として、自己を吹き抜けていく聖霊（聖書では風と同じ言葉）によって一個の「笛」となる。そのような笛の奏でる「みみずの歌」こそが、松本さんの「小さき声」のなかに置かれた詩なのです。

「みみずの歌」の最後の三行は、とくに、鮮烈な詩的印象を与えます。「矢で心臓を射抜かれた」は、「鳩」を形容するものと読むか、鳩が落ちてくる以前の作者の状態を形容するものと読むか、微妙なところですが、実際は二つの意味が重ね合わされているような感覚がある。作者にとっては、自己自身が矢（神の怒りの象徴）に致命傷を負ったと言う経験に、十字架のイエスと同じように致命傷を負って「落ちてくる鳩」というイメージが重ね合わされている。その「落ちてくる鳩」のイメージこそ、みみずの身体を突きぬけ、土の暗闇の中で呻吟している作者の生のただなかで、受難のイエスと一つである聖霊の通過した徴ではないでしょうか。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**「みみずの歌」はどこから聞こえてくるのでしょうか？** 投稿者：真奈 投稿日：2005年10月20

[返信](#)・[引用](#)

日(木)23時01分19秒

「みみずの歌」って妙な題だなと思いつつ私もこの詩を読みました。

季寄せを見ると、「蚯蚓」は夏の季語ですが、別に「蚯蚓鳴く」という季語もあってこちらは秋の季語。じつは蟻蛄が鳴くのだという。普通「オケラ」という場合は無一文のことをいうし、もっとも無力なるものの意味もあると思います。

この詩を読んでいちばん響き、感動したのは最後の三行でした。

失明し、いつもひとりの絶対的な孤独のなかで、生存するためには食べ物という「土」を口にしないでならない、舌でしか感ずることのできない「みみず（おけら）」の自分はまるで風が吹き抜けていく空洞だ・ただの虫ケラである自分のいるところは、最深の底の場である。しかし、ここからの「いのち」として出発していく自分を鮮明に自覚した・それは「鳩が落ちてくる」の章句に感動的に歌われたと思いました。「落ちてくる」という表現に身体の中にまで感触されたという衝撃が伝わってきます。

「水先案内人」の詩も素晴らしいのですが、この「みみずの歌」は松本馨さんしか歌えないような特殊な詩ではないでしょうか。「水先案内人」の詩を最底辺から血肉化し、自覚した詩ではないか、と思いました。

**今週と来週の予定など** 投稿者：田中裕 投稿日：2005年10月21日(金)23時54分14秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

明日の土曜日の「友の会」の会合には出ます。「小さき声」創刊号の復刻版を40部ほど持参します。全生園祭りの展示会のスペースにゆとりがあるようですから、松本馨さん関係の資料も多数展示できそうですね。「極限を生きた療友の記録」というテーマに相応しいものと思います。日曜日は、上智大学哲学会です。会場は7号館14階の大会議室。午後のシンポジウム、「西田哲学とキリスト教」の司会をする予定。10月28日から31日までは、岡山県のノートルダム聖心女子大でクザールス学会と中世哲学会に出ます。そのあと、もし体力に余裕があれば、長島愛生園に行って神谷美恵子文庫を見学したいと思っています。11月3日は、教え子の結婚式があり、スピーチを頼まれているので、ハンセン病図書館には行けません。

>真奈さん

「みみずの歌はどこから」という問を聞いて、菅野淳さんの「風はどこから」という詩を思い出しました。私にもすこしずつこの詩のモチーフが身に沁みてきました。私のブログ「[福音の再発見](#)」について「みみずの歌」の感想を改めて纏めてみました。

>旅人さん

私は、内村鑑三の書いたものをそれほどよく読んでいるわけではありませんが、「キリスト教は十字架教である」といったのがまさに内村でしたね。十字架を通らざる聖霊信仰は非キリスト教的であるという関根正雄の言葉も又、内村の精神をうけついでものと思いました。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**(無題)** 投稿者：田中裕 投稿日：2005年10月24日(月)08時59分33秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

上智哲学会というのは上智大学の教員、大学院生、卒業生からなる組織で、毎年二度大会を開催します。午前中は大学院生の研究発表、午後は教員の講演とシンポジウムですが、シンポジウムには上智大学以外の研究者を招待するのが通例です。今回は、シンポジウム「西田哲学とキリスト教」を企画しましたが、滝沢克己協会の前田保氏を招待しました。このシンポジウムの感想は、そのうちにブログに書くつもりです。

講演は同僚の長町裕司氏。昨年一年間ドイツで在外研究された報告も兼ねて、主題はハイデッガーの後期思想にかんするもの。予想外だったのは、講演を俳句で締めくくったこと。

秋晴れの天を仰ぐか百合の花

が長町氏の俳句。句の上手下手は別として（また季重なりなどという技法上のことも別として）長町氏がなぜこの句で講演を締めくくったかを考えてみた。

長町氏の講演は、天と地と神々と人間（死すべきもの＝死をよく為し能ふもの）のおりなす「四方界」において「住むこと」「世の内にあること」の意味を問うもの。ドイツから帰国されて、上智大学の学生寮（まもなく取り壊される予定で、現在は誰も住んでいない）の建物の近くを散策していると、人気のない学生寮に百合の花が咲いていたその情景に感動したようです。この古い建物には長町氏が学生寮の舎監を勤めていたときの思い出がつまっていたのでしょう。

長町氏によれば「世の内にある（世界内存在）」ということは、空間的に「内にある」という静的な意味ではなく、「存在に与りつつ生きる」と言うダイナミズムを表す。それは天を仰ぎ、地に足をつけて、神々を崇敬しつつ、人間という「死を免れぬもの」しかし、同時に「死をよく為し能ふ」ものとともに住むことを意味する。ハイデッガーの場合、それは古代ギリシャの生き方を理想化してイメージされたものですが、近代以前の日本の人々の生き方にも通じるところがあるでしょう。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

多磨誌「開園50周年特集号」（1959） 投稿者：田中 裕 投稿日：2005年10月26日(水) [返信](#)・[引用](#) [編集済](#)  
06時21分38秒

に、「戦前の武蔵野短歌会 久保田明堂」という興味深い記事がありました。そこから、文藝特集号で入選した短歌をいくつか転載します。

昭和十二年

病室にはや青蚊帳の吊られつゝ庭木の蝉の声衰へず  
灯消して今宵涼しも蚊帳ぬちに遠稲妻の時折り光る 直木 勁

仏法僧飛び立ちたるか鳴く声のたえたる寸時谷川の音 肥田雛夫

ねむごろに掃き清めして院長を待つ病室の白ばらの花  
盆の供物さはにあげれるみ暮べゆ小蟻の列の草叢に及べる 山田法月

昭和十三年

高原の出水流れし跡どころまたあたらしき草の芽が萌ゆ 鈴木庫治

昭和十四年

身じろげばのり濃さ敷布の鳴るはよろし朝は座りて新聞を読む 大津哲緒

豊かなる牛の乳房を搾りつつ搾乳夫吾れ屈託もなし 丘多藻都

また、この特集号には、東條耿一が描いた北條民雄の肖像が掲載されていました。画質がきわめて悪いのですが、資料館にある北條民雄の写真とは違って、文学に精進しているときの北條のイメージをよく捉えているようです。

北條民雄の肖像画（東條耿一作）

後ろの書棚には、文学界賞の賞金で北條が購入したフローベル全集、ドストエフスキー全集などがおかれています



<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

---

**花梨の實** 投稿者: [田中 裕](#) 投稿日: 2005年10月26日(水)09時57分24秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

を撮った素晴らしい写真がガラクタ箱さんのところにありましたので、柿の木BBSのタイトルの画像用にお借りしました。

### 天と地と逝くべきいのち花梨の實

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

---

**こんにちは** 投稿者: [エリカ](#) 投稿日: 2005年10月27日(木)10時16分3秒

[返信](#)・[引用](#)

田中様

わたしはある牧師と松本馨さんについて語っています。  
プロセス日誌の福音の再発見を牧師に紹介してもかまわないでしょうか。

---

**Re: こんにちは** 投稿者: [田中 裕](#) 投稿日: 2005年10月27日(木)13時11分59秒

[返信](#)・[引用](#)

- > 田中様
- >
- > わたしはある牧師と松本馨さんについて語っています。
- > プロセス日誌の福音の再発見を牧師に紹介してもかまわないでしょうか。

プロセス日誌は、その日その日に念頭に浮かんだことを書き留めたもので、十分に議論が尽くされていませんが、他の方に紹介して頂いてかまいません。コメントなど、直接メールにて送って頂ければ幸いです。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

---

**全生園祭の展示** 投稿者: [真奈](#) 投稿日: 2005年10月28日(金)22時12分11秒

[返信](#)・[引用](#)

こんばんは

今朝は濃霧で武蔵野線はストップ、40分ほど遅刻してやっと全生園に到着しました。

センターに行くと見ると、川島さんの臙脂と苔色を配した素晴らしいタイトル「極限に生きた療友の記録」を貼り付けているところでした。これなら遠くからでもOKです。

しゅうさんの「文芸特集号」は綿密な作表に審査員の写真を配し、さらに注目作品を色紙や画像にしてとても肌理細かい展示になっていて、さすがに！・・・です。平井さんのコーナーも図書館の作業の紹介や山下さんのスナップなど写真が多く楽しいです。

私のところは、25日にやったものをつくり直してパネル2枚にしましたので、今度はなんとか読み易くなったと思います。ちょっと急場しのぎの感じですが・・・急遽、原田嘉悦さんの紹介として「全生園みんなのお父っつあん～原田嘉悦さんをめぐる文学青年たち～」というタイトルで、このbbsにも載った松本馨さんの追悼文のコピーを貼り付けました。

これに、山下さんからお借りした原田嘉悦さんの写真が葉書大で載ります。さらに原田さんの「覚書一ヨブ記研究」第一・六・七を展示します。この第一は原稿用紙を裏返したものに丹念に手書きされた冊子で実に風格のあるものです。

お預かりした「小さき声」の創刊号は透明フィルムにいれ、復刻版は自由にお持ちくださいというシールをつけた透明な袋に入れて置いてあります。当時の謄写版印刷器やガリ版や鉄筆なども展示され、手作りの活字文化の時代に感慨深い思いをされる入所者さんも多いことでしょう。

30日から国民文化祭から旅行と続き、展示は残念ながら見ることはできませんが、あとでゆっくり写真でも拝見したいと思っています。

岡山にて 投稿者：田中 裕 投稿日：2005年11月 1日(火)12時03分46秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

>真奈さん

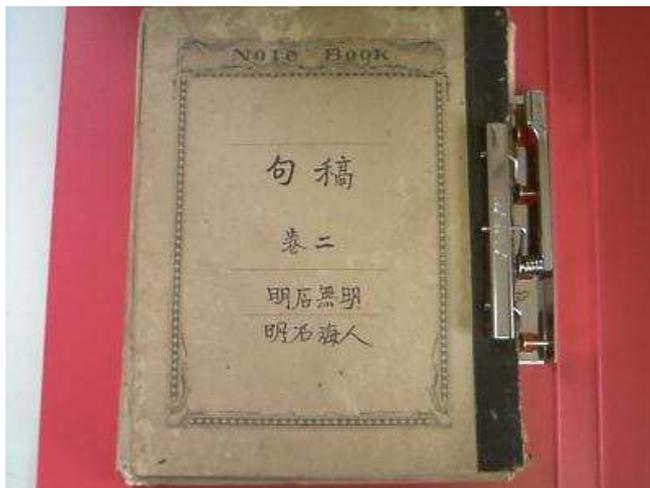
展示の準備、お疲れ様です。2日の当番の時に、ゆっくりと読ませて頂きます。原田嘉悦さんは、松本馨さん、山下道輔さんととくに親しかった方ですから、その展示があるのはよいですね。

私の方は、昨夜おそく帰京しました。中世哲学会第53回大会の開催されたノートルダム清心女子大というのは、京都にも同じような名前の大学があるので紛らわしいのですが、岡山市のは、ベルギーのカトリックの修道会が設立した大学でした。帰京する途中で、長島愛生園の神谷書庫に立ち寄り、愛生園入園前のものを含む明石海人の最初期の歌稿や、俳句ノート、226事件を詠った海人の歌が原因で、日本歌人が発禁になったときに、前川佐美雄から明石海人に宛てた書簡など、全集に未収録の諸資料を複写しました。

これらの資料については、整理したあとで、この掲示板で説明する予定です。

明石海人の俳句ノート

自由律の句に良いものがありますね



<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**本日。** 投稿者：紙魚 投稿日：2005年11月 2日(水)07時04分55秒

[返信・引用](#)

前田先生情報です。

今日2日、荒井英子さん（『ハンセン病とキリスト教』の著者。講演会でフロアから発言された方）が、展示会場にお見えになるそうです。  
学生を引接して、全生園にお見えになって、そのあと学生を帰してからハンセン病図書館にお見えになるということです。  
したがって、2時か3時ころになるのではないのでしょうか。  
この機会に、荒井さんとお話になりたい方は、図書館にどうぞ。

**Re: 本日。** 投稿者：田中裕 投稿日：2005年11月 2日(水)08時50分18秒

[返信・引用](#)

紙魚さん：

> 今日2日、荒井英子さん（『ハンセン病とキリスト教』の著者。講演会でフロアから発言された方）が、展示会場にお見えになるそうです。  
> 学生を引接して、全生園にお見えになって、そのあと学生を帰してからハンセン病図書館にお見えになるということです。  
> したがって、2時か3時ころになるのではないのでしょうか。  
> この機会に、荒井さんとお話になりたい方は、図書館にどうぞ。

昨日、前田先生から電話があつて、荒井英子さんのことは伺っております。  
私は、午前中が当番ですが、午後は図書館の展示室に行きますので、そこで荒井さんとお目に掛かる予定です。

ところで、10月31日に神谷書庫に行き、「灯泥」の創刊号を見つけました。山下さんにコピーしたものを寄贈するつもりです。また、明石海人の自筆の最初期の歌稿などもありますので、展示会場に置くかどうかは別にして、これもあわせて持参します。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**ご苦労様でした。** 投稿者：北風 投稿日：2005年11月 2日(水)09時03分13秒

[返信・引用](#)

双見さんや宇佐美さんにお会いになりましたか。

昔のことで忘れていましたが、前川の手紙も海人の全資料も、双見さんから借り出してコピーを取りましたので不足があればおっしゃってください。  
前川の手紙は、来信があるのだから海人の手紙もあるはずだ。そうすれば、往復書簡になると、前川をたづねたところ「気持ちが悪いので焼いた」という答えに腹を立てて、入れなかったのですが、若気の至りかなとも思っています。

**全生園祭にて** 投稿者：田中裕 投稿日：2005年11月 2日(水)19時14分20秒

[返信・引用](#) [編集済](#)



11月3日まで、全生園祭が開催されます。今日(2日)午前中は、コミュニティセンターのハンセン病図書館企画「極限を生きた療友達の記録」の会場係をしました。どのパネルも工夫があり、素晴らしいものでした。12時半に、橋本さんと交替して、昼食をとり、前田先生と合流。講演会の筆記原稿など拝見しました。その後、自治会長の平沢さんとかなり長い間、立ち話。松本馨さんの思い出など、伺いました。午後は図書館の展示室の「松本馨写真展」と田中文雄・神谷美恵子の「資料展」の展示係。こちらも盛会です。

写真左は、コミュニティ・センター会場、恵泉女子大の荒井英子先生が女子学生達とともにこられました。写真右は、図書館展示室。何時もと違って大勢の来館者で、スリッパの数が足りなくなるほどでした。朝日新聞の記事をご覧くださいになって見えたという方が多かったですね。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**おおぜいの人ですね！** 投稿者：しゅう 投稿日：2005年11月 2日(水)21時19分41秒

[返信](#)・[引用](#)

田中さん

きょうは会場係ご苦労様でした。  
そして、きょうの様子を画像で見せて頂きありがとうございます。  
おおぜいの方にご覧いただき、すこし恥ずかしいですけど、うれしいです。

真奈さんと、トラ千代さんと、森田さんと、コミュニティーホールに展示し終えたのは6時頃で、すっかり辺りは暗くて、空には一番星が輝いてました。  
4人とも、みんな、高校の文化祭を思い出していました。  
何十年も忘れていた昂ぶりを、この歳で経験させてもらいました。

来年も図書館の展示をしたいですね。

**明石海人の句稿ノート** 投稿者：真奈 投稿日：2005年11月 3日(木)08時16分22秒

[返信](#)・[引用](#)

おはようございます。  
今日は教え子さんの結婚式でお忙しいですね。

昨日の展示会の写真、早速載せて下さり臨場感があります。かなり大勢の方、また荒井英子先生と学生さんも見えて賑わったとのことで大変でしたね。私のところのパネルはなにか、よくご存知の方には物足らず、知らない方には不充分、と中途半端だったと反省しています。

明石海人については、愛生園から資料一初期の句稿なども展示に追加していただいたようで有難うございました。彼の写真を、とっていたら自画像が見つかったのでそれを展示してみたのですが、そのサインは確かにMAkashiとあって、明石無明に一致しています。

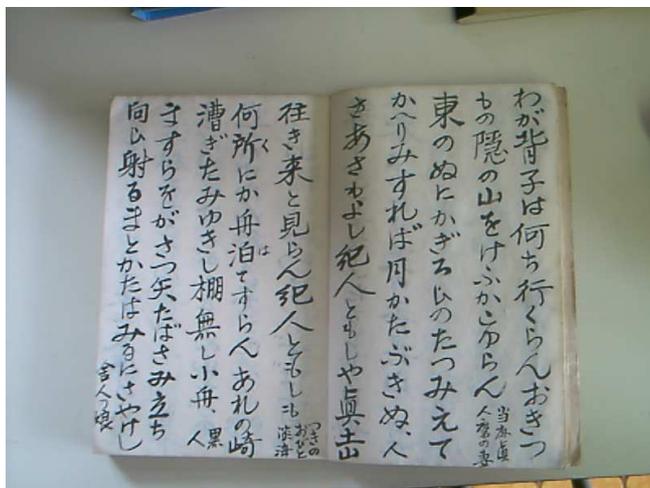
海人をどう取り上げるか、だけでもいろいろ問題があると思いますので、このbbsでの海人論考を楽しみにしております。

しゅうさん  
ほんとうに高校の文化祭のノリでした！遅くまで付き合って残って下さって有難う！  
今日からまた留守にしまして、展示が見られないのが残念です。お手伝いできなくてごめんなさ～い・・・。

**神谷書庫にて** 投稿者：田中 裕 投稿日：2005年11月 3日(木)22時57分57秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

明石海人の筆写した万葉集



神谷書庫には、日本各地の療養所で出版された園誌のバックナンバーがほぼ揃っていました。全生園祭の展示「極限を生きた療友達の記録」で、昭和25年に出た「灯泥」という詩誌の創刊号を捜していると聞いていたので、多磨全生園関連の書棚を見ましたら、そのすべてのバックナンバーがあったのには驚きました。この神谷書庫の文献を蒐集・管理された入園者の方々のご努力に頭が下がる思いがしました。とりあえず、灯泥の創刊号をコピーしたあとで、明石海人関連の資料を読ませて頂きました。

印象深かったのは、海人自身が筆写した万葉集。これは眼が見えなくなる前に、毛筆で大きな文字で丁寧に一首ずつ書き取ったもの。敬虔なる仏教徒が写経するのと同じように、

万葉集を書写することで海人は万葉人の心を学んだのでしよう。

また、愛生園入園前のものを含む明石海人の最初期の歌稿や、俳句ノートもありました。俳句ノートは自由律が主であり、一つの題をもとに連続して百句近く詠むなど、精進の様が偲ばれます。海人は、俳句連作のあとでこんな事を云っています。

「少し眼を使ったら、ぢき虹彩炎で真紅に充血して痛み、起きて居たら発熱するようなこの頃に、いろんなことをやらうとするのは多分無理だらう。日は暮れて道遠しの感に堪えない。もう十年生きたら、歌も句も相当な処まで進むだらうと思うが……。だが、六尺の病床を天地として、あれだけの仕事をなしとげた子規の事を思ふと、うかうかしては居られない気がする。生きる日の限り、日に新に日に日に新に成長してゆきたいものだ。晴れた六月の陽は美しい。金魚草花菱草小町桜が、青葉の中に紅、白、紫、黄、とりどりに輝いてゐる。庭先の崖際には松葉ボタンが開きスカートピーが匂つてゐる。人生の日暮れに近づいて、いよいよこの世の美しさが身にしみる。雀の声まできれいにきこえる。」

この文章を書いているとき、海人は「人生の日暮れ時」にいることを自覚していました。30歳代で「日暮れ時」と言わねばならぬ境遇をかこつことはなく、たんとその心境を述べている。「生きる日の限り、日に新に日に日に新に成長してゆきたいものだ」とは、おそらく海人自身を勇気づける言葉であったでしょうが、それを読む私自身をも勇気づける。自己の最期の時を自覚しながらも、それまでに許された限られた未来の時間において「日に日に新たに成長する」ことを希望しつつ、現在を平常心で生きること—こういう生きざまを示す言葉には滅多に出会えないからです。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**「小さき声」の校正のことなど** 投稿者：[田中 裕](#) 投稿日：2005年11月 4日(金)22時14分18秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

「小さき声」復刻版の校正作業は、時間をかけて行うつもりです。幸い、多くの方からメールで誤植や、編集ミスなどのご指摘を戴きましたので、それを参考にしながら、テキスト批判の作業を続けています。ところで、第8号の校正について、旅人さんから貴重なご指摘を戴きましたので、それをブログ・プロセス日誌に報告しました。[「小さき声」復刻版の校正](#)をご覧ください。

>真奈さん

海人は、一時期、一日に百句以上作句したりして、俳句に集中していた時期がありました。句稿ノートは大変な分量です。内容的には虚子の花鳥諷詠よりも、荻原井泉水の自由律俳句の方により多く共鳴していたようです。詩・俳句などのジャンルを遍歴したのちに、短歌の創作に収斂していったようです。

>しゅうさん

山桜の昭和14年文芸特集号、手持ちのコピーには、東條耿一の「一椀の大根おろし」と佐藤信重の選評はあるのですが、それ以外のものはありません。あいにく、多磨の資料館の蔵書はいま利用できませんので、愛生園の神谷書庫でバックナンバーを調べた次第です。他にも複写すべき資料が多く、時間にさほど猶予がなかったので、山桜の当該の號の目次はコピーできませんでした。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**Re: 神谷書庫にて** 投稿者：[しゅう](#) 投稿日：2005年11月 5日(土)15時17分15秒

[返信](#)・[引用](#)

神谷書庫には、日本各地の療養所で出版された園誌のバックナンバーがほぼ揃っていました。全生園祭の展示「極限を生きた療友達の記録」で、昭和25年に出た「灯泥」という詩誌の創刊号を捜していると聞いていたので、多磨全生園関連の書棚を見ましたら、そのすべてのバックナンバーがあったのには驚きました。この神谷書庫の文献を蒐集・管理された入園者の方々のご努力に頭が下がる思いがしました。とりあえず、灯泥の創刊号をコピーしたあとで、明石海人関連の資料を読ませて頂きました。

私は、残念なことに、愛生を訪ねたとき、神谷書庫は閉館で書庫を見ることが出来ませんでした。

しかし、神谷書庫はすごく充実して居るんですね。そこまでは……、

>

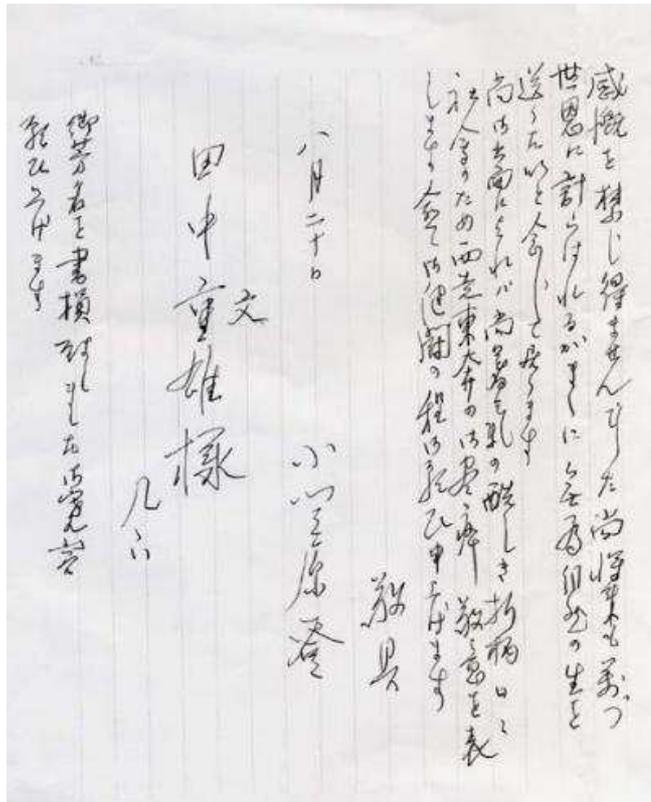
> 印象深かったのは、海人自身が筆写した万葉集。これは眼が見えなくなる前に、毛筆で大きな文字で丁寧に一首ずつ書き取ったもの。敬虔なる仏教徒が写経するのと同じように、万葉集を書写することで海人は万葉人の心を学んだのでしょうか。

ほんとうに一字一字丁寧に、お習字の字のようです。崩さないでしっかりと書かれています、海人の人柄が偲ばれますね。  
この海人の字を見て、田中文雄の展示に出ていた、小笠原登の字を思い出しました。  
コピーが取ってあるのでご覧下さい。

>  
> また、愛生園入園前のものを含む明石海人の最初期の歌稿や、俳句ノートもありました。俳句ノートは自由律が主であり、一つの題をもとに連続して百句近く詠むなど、精進の様が偲ばれます。海人は、俳句連作のあとでこんな事を云っています。

> 「少し眼を使ったら、ぢき虹彩炎で真紅に充血して痛み、起きて居たら発熱するようなこの頃に、いろんなことをやろうとするのは多分無理だらう。日は暮れて道遠しの感に堪えない。もう十年生きてら、歌も句も相当な処まで進むだろうと思うが……。  
> だが、六尺の病床を天地として、あれだけの仕事をなしとげた子規の事を思ふと、うかうかしては居られない気がする。生くる日の限り、日に新に日に日に新に成長してゆきたいものだ。晴れた六月の陽は美しい。金魚草花菱草小町桜が、青葉の中に紅、白、紫、黄、とりどりに輝いてゐる。庭先の崖際には松葉ボタンが開きスカートピーが匂つてゐる。人生の日暮れに近づいて、いよいよこの世の美しさが身にしみる。雀の声まできれいにきこえる。」

東條耿一もそうですが、海人も、病に朽ちることが、どんなにか、悔しい思いをしたことでしょう。  
東條耿一と奇しくも田中文雄は同い年でですが、戦後まで生きてプロミンで病が完治することが出来た人とそうならず亡くなった人とあり、無情なるかなと言う思いがします。  
海人も、東條耿一も哀れです。たとえ、東條の詩に、「天路讃仰」という詩があっても、その感を抱きます。



小笠原登の書簡を読んで 投稿者: [田中 裕](#) 投稿日: 2005年11月 5日(土)22時50分44秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

>しゅうさん

鈴木重雄宛の小笠原登の書簡、実に博士の人柄をあらわしていますね。この書簡の初めの方に書かれた詩も、なかなか味わいがある。

一 (もっぱら) ら世恩に委せて俗縁を離る  
吾が年八十 烟よりも淡し  
朝は来り夕は去って蹤跡なし  
光彩何ぞ期せん 地天に満ちんことを

(六月二十五日表彰牌を受く)

無願兼(ま)た無行  
 何によりてか徳功有らんや  
 頌詞今手に在り 漸汗南風に冷ややかなり

この詩を詠んだあとで彼は

「世恩に計らはれるがままに無為自然の生を送りたいと念じて居ります」

と、恬淡とした東洋的諦観を述べています。これは彼の詩の中の「無願兼無行」に応じる詞でしょう。こういう諦念は、博士の場合は、決して静寂主義に陥るのではなく、むしろ古希を迎える歳に奄美和光園に赴任したこと、そこで医療奉仕という世俗の活動的生の直後に言われていることに注意すべきでしょう。

無為自然といっても、博士の場合は、多数者の偏見に流されることはなく、むしろその偏見や迷信をズバリと指摘され、臨床医として首尾一貫した実践活動を貫かれたのです。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**芭蕉最晩年の「あらび」について** 投稿者：真奈 投稿日：2005年11月 7日(月)16時36分59秒

[返信・引用](#)

こんにちは

全生園祭りを無事終えて皆さまほっとされておられることでしょうか。1日にはじまりだんだん展示が充実して3日は素晴らしかったというメールを読むと、皆さまの興奮ぶりが見えるようです。

30～31日の国民文化祭、ここでの講演は信州大の宮坂静生先生の“芭蕉の求めたもの一芭蕉・去来・浪化三吟歌仙をめぐる「あらび」について”と題するものでしたが、なかなか面白いものでした。井波の浪化上人が蕉門に入門するのは元禄七年の五月、この年の十月に芭蕉は亡くなっているのが最晩年の弟子でしたが、元禄六年から去来との交流があり、この年の夏は落柿舎にあって、そこで芭蕉に入門を許されています。

「俳諧あらび可申候事は・・・、ただ心も言葉もねばりなく、さらりとあらび仕候事に御座候。」(元禄七年五月十三日、浪化宛去来書簡) 俳諧は「あらぶ」ことが大事、心も言葉もおもくれでなく、すぱっと切る、そして“さらり”と表現する、この表現の仕方が「あらび」である。「あらぶ」はやはり、「荒ぶ」でいいのだと思いますが、心の内ですっぱり切る、捨てる・・・この働きのことを指しているのではないかと思います。「軽み」に至る「あらぶ」。究極、芭蕉が求めたものは虚と実の一致、無用の用であった・・・と。

芭蕉の生涯の句としてよく

旅に病で夢は枯野をかけ廻る (病中吟)

が挙げられますが、宮坂先生は、

此秋は何で年よる雲に鳥 (病床吟)

こそが「あらび」の生涯句であると言われる。「此秋は何で年よる」とい軽い俗な表現に、「雲に鳥」という凄い措辞を置いた、この置き方こそが「あらび」であると・・・。「旅に病で」は説明の句であって、心の内部を一言で象徴している訳ではないということでしょうか。

標題の三吟は歌仙の前半17句までは去来と浪化との両吟、後半は入門後に芭蕉が加わって完成していますが、まるで前後の出来が違って、後半は言葉に何か乗り移ったように俄然光っています。俗語も多く現実を取り上げているのですが、それを貫いていく力というか永遠のものが息づいています。

明石海人の短歌に、

わが指の頂にきて金花虫(たまむし)のけはひはやがて羽根ひらきたり

という後期の歌があります。微小なる生がかすかに、しかし截然と虚空に羽をひろげていく・・・その刹那をとらえて詠った素晴らしい歌ですね。海人の象徴的な短歌はかなり難解なものも多いようですが、この歌は内なる自由を金花虫に仮託して美しい映像に詠われていると思います。

一日百句の俳句をつくったという初期の句稿や万葉集の筆写も、海人のあらぶる心、詩の原点をよく伝えてくれるようです。

また、愛生園の神谷文庫には「灯泥」の創刊号があったとのことで、このコピーには山下さん

がきっと喜ばれたことでしょう。私も、国本衛さんの詩『朝鮮人学徒兵に贈る』は是非読みたいです。また、創刊号ですから結成のアピールなども載っているのでしょうか？昭和26年発行という、丁度朝鮮戦争下でレッドパージの暗い谷間の時代でしたから、かなり睨まれたことと思います。

だいぶ長くなりましたので、この辺で・・・また書きます。

**Re: 芭蕉最晩年の「あらび」について** 投稿者: [田中 裕](#) 投稿日: 2005年11月 7日(月)23時37分

[返信・引用](#)

40秒

真奈さん

> 30～31日の国民文化祭、ここでの講演は信州大の宮坂静生先生の“芭蕉の求めたるもの一芭蕉・去来・浪化三吟歌仙をめぐる「あらび」について”と題するものでしたが、なかなか面白いものでした。

「あらび」という言葉の意味は難しいですね。意味は要するに「荒っぽい（洗練されていない）」こと、元来は悪い意味で言う言葉ではないか、と思います。

風雅の精神とは矛盾する句、素人のような句という意味があるにちがいない。それを敢えてプラスの意味に転じて使うところが、俳諧の俳諧たる所。蕉風俳諧が俳諧の初心である世俗にたちかえり、俗語のエネルギーを吸収しつつ、世俗に於ける「風雅」を目指そうとした、そこから「あらび」とか「かるみ」という言い方が出てくると思う。一見すると俗っぽい、荒々しい表現の中に、高雅な表現でも及びも付かないような詩情が表現されることがある。

たとえば、

につと朝日に迎ふよこ雲 芭蕉

は俗語の「につと」を冒頭に置く、文字通り「荒っぽい」句だと思う。あえていえば素人臭い措辞。この時期の芭蕉は、あえて格調のたかい句を避けることをモットーとしたと思う。能楽論で言う「閑位（たけたる位）」であって、一度高雅な表現を身につけたものが、それを否定して、世俗の世界に帰っていくという意味が込められる。

ご承知のように、「去来抄」の先師評でこの付句が引かれていて、最初去来は

につと朝日に迎ふよこ雲 芭蕉  
すつぺりと花見の客をしまいきり 去来

と付けたが、これでは、俗語が重なって煩わしい。つまり、「につと」に「すつぺりと」と続いて品のない句になってしまった。世俗に世俗を続けることは芭蕉の望むわけではないと直観した去来は、

につと朝日に迎ふよこ雲 芭蕉  
陰高き松より花の咲こぼれ 去来

とした。これは一転して連歌風の格調の高いつけである。俗な前句に高雅な景をつけ、しかも、定家の

春の夜の夢の浮橋とだえして峰にわかるるよこぐものそら

の面影付になっている。こういう付句は、たとえば「冬の日」の時代の蕉風俳諧を思わせるものである。しかし、晩年の芭蕉は、「陰高き」という連歌的な表現を嫌って、素人にも分かりやすい俗語を選び、去来の句をひと直して

につと朝日に迎ふよこ雲 芭蕉  
青みたる松より花の咲こぼれ 去来

これが、この時期の芭蕉の目指した付け方です。

> 芭蕉の生涯の句としてよく

> 旅に病で夢は枯野をかけ廻る (病中吟)

> が挙げられますが、宮坂先生は、

> 此秋は何で年よる雲に鳥 (病床吟)

> こそが「あらび」の生涯句であると言われます。「此秋は何で年よる」とい軽い俗な表現に、「雲に鳥」という凄い措辞を置いた、この置き方こそが「あらび」であると・・・。「旅に

病で」は説明の句であって、心の内部を一言で象徴している訳ではないということでしょうか。

此秋は何で年よる雲に鳥

は、確かに凄い句ですね。「此秋は何で年よる」と「雲に鳥」とのあいだの「切れ」のすさまじさは鬼気迫るのを感じます。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**吊し柿** 投稿者： **田中 裕** 投稿日：2005年11月 8日(火)23時34分25秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

photo by ガラクタ箱さん



この吊し柿の写真、懐かしさがあります。

### 武蔵野や去年(にぞ)見しままの柿簾

真奈さんのお話に触発されて、「あらび」についてブログにあらためて書いてみました。  
[芭蕉の晩年の俳風のことなど](#)をご覧ください。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**遅ればせながら** 投稿者： **はしもと** 投稿日：2005年11月 8日(火)23時42分53秒

[返信](#)・[引用](#)

先日は、お疲れ様でした。

全生祭も、無事に終わって良かったですね。  
会期前、会期中、会期後、と連日のお手伝い皆様お疲れ様でした。

11月2日は、一日当番をお引き受け頂いてありがとうございました。  
もっと早く交代にお邪魔すれば、ゆっくり見学して頂けたらと後で気がつきました。気が利かない輩で失礼しました。お写真ありがとうございます。  
せっかく、皆さんでお話をする機会があったのに翌日朝早く予定があったので残念ながら、失礼してしまいました。

コミュニティセンターに、展示中にお邪魔した際の様子は文芸特集号の年表は、園内の文芸活動に詳しい何名かの方達から良く出来ていると褒めて頂きました。図書館の山下さんはこれは写真に残して保存しておかねばとおっしゃってました。

機関誌に関しては、園内の方からは懐かしいとの声も聞かれました。外部から見学にいらして、初めてご覧になる方も多かった様でそういう方達は静かに眺めておられた様な印象でした。ガリ版印刷に関しては当時同様の印刷形態を使っていたという団体で見学にいらして方達が懐かしそうに当時の思い出話等をされながら見ていかれました。

また、園内の方達で他の機関誌に関しては、現物をご覧になった事の無い方達が、珍しそうに楽しそうに見ていかれたり、当時機関誌に掲載をされていた方達が、お知り合いの方にご自身の記載等を紹介方々一緒に、見学されている風景も楽しそうで微笑ましいものでした。

文芸作品の作者の方の紹介コーナーは、私にも判り易くて勉強になりました。初めて見学でご覧になった方達も熱心に見ておられました。見学にいらした方達は皆さん総じてどのコーナーも丁寧に内容を見ていかれる方達が多かったのが印象的でした。多くの方達が見学して下さったのは、有難い事ですね。

お騒がせするばかりでお役にたてませんすみませんでした。どうも、ありがとうございました。

当分、仕事でバタバタしているのでPCを覗いている暇が無さそうなのでしばらくはご無沙汰しそうですが、皆様どうぞご自愛くださいね。

では、お邪魔しました。

「小さき声」のことなど 投稿者： [田中 裕](#) 投稿日：2005年11月 9日(水)17時12分49秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

「小さき声」の13号を復刻しました。書くべきことはたくさんありますが、その最初の部分の感想を[プロセス日誌](#)に書きました。1号から12号までの校正については、旅人さんほか皆様のお世話になり、有り難うございました。これからどうかよろしくお願い致します。

>橋本さん

投稿有り難うございます。11月2日はコミュニティ・センターも図書館も多くの来館者がありましたね。私も、2日の日に展示を見て、その充実ぶりに驚きました。ところで、コミュニティ・センターでは五行歌の展示も見てきましたので、エミさん、アリスさん、橋本さんの作品も拝見しました。この掲示板では、ガラクタ箱さんの写真に寄せて「武蔵野の四季」という企画もやっていますので、気が向かれたら、作品をお寄せ下さい。たとえば、「柿」についての作品でしたら、リアルタイムで、[武蔵野の四季の柿の画帳](#)に掲載致します。

全生園祭 五行歌展  
写真のビントが今ひとつですが・・・



<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2Ffeigenwille%2F>

**補足** : [芭蕉最晩年の「あらび」について](#) 投稿者： [田中 裕](#) 投稿日：2005年11月12日(土)17時29分50秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

> 「あらび」という言葉の意味は難しいですね。意味は要するに「荒っぽい（洗練されていない）」こと、元来は悪い意味で言う言葉ではないか、と思います。

を補足します。北村季吟の言葉に

「（古今集の俳諧歌について）この俳諧歌はざれ歌といふ。利口したるやうの事なり。又、俳諧といふ事、世間には荒れたるやうなる詞をいふと思へり。この集の心さらにしからず。ただ思ひよらぬ風情をよめるを俳諧といふなりと申されし。されど、荒き事をもまじへたるなり」

この引用が示すように、「あらび」は、表現の素材と様式について、「洗練されていない」「粗略である」という世間的な用例のほか「表現の意外性（思ひよらぬ風情）」を指すという意味があるようです。

&gt;

> 蕉風俳諧が俳諧の初心である世俗にたちかえり、俗語のエネルギーを吸収しつつ、世俗に於ける「風雅」を目指そうとした、そこから「あらび」とか「かるみ」という言い方が出てくると思う。一見すると俗っぽい、荒々しい表現の中に、高雅な表現でも及びも付かないような詩情が表現されることがある。

この「あらび」を芭蕉没後の俳諧の道を指し示す「新風」をあらわすものとして「軽み」とともに強調したのが去来です。彼の浪化宛書簡の次の言葉がある。

「俳諧は『さるみの』『ひさご』の風、御考被成候而可被遊候（おかんがへなされてあそばさるべくさうらふ）。其内、『さるみの』三吟ハ、ちとしづミたる俳諧ニて、悪敷いたし候へば、古ビつき可申候まま、さらさらとあらびニてをかしく可被遊候（あそばさるべくさうらふ）。俳諧あらび可申候事（まうすべくさうらふこと）ハ、言葉あらく、道具下品の物取出し申候事ニてハ無御座（ござなく）、ただ心も言葉もねばりなく、さらりとあらびて仕候事ニ御座候。尤（もつとも）、あらき言葉、下品の器も用ヒこなし候が、作者の得分ニて御ざ候。嫌申にては無御ざ候（ござなくさうらふ）。」

去来は『猿蓑』と『ひさご』の俳風を学ぶようすすめているが、自分も加わった三吟歌仙を「沈んだ俳諧で出来が悪く古びている」と否定的な評価を述べ、「ひさご」は「はなやかな俳諧」であると評している。

「さらさらとあらび」て面白い句作りをすべきだと言う去来のことばが、「さるみの」と「ひさご」を対比して、前者を「しずんだ」悪しき古びた俳諧として、後者を「はなやかな」俳諧として評価する文脈で書かれていることに注意すべきでしょう。

ちなみに猿蓑の序を書いた其角が、雑談集でこの三吟歌仙をひいて

「この句の銚（サビ）やう作の外をはなれて日々の変にかけ、時の間の人情にうつりて、しかも翁の衰病につかれし境界にかなへる所、誠にをろそかならず」

とのべ、『猿蓑』を「さび」の俳諧の手本としつつ賞揚しながらも、『ひさご』にしめされる「軽み」の俳風には同意しなかったことが思い出されます。ここには其角と去来との間のライバル意識、俳風の違いという要素も考慮すべきでしょう。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

「あらび」とは・・・ 投稿者：真奈 投稿日：2005年11月13日(日)00時55分46秒

[返信・引用](#)

下の北村季吟の言葉の引用、面白く読みました。

> 「（古今集の俳諧歌について）この俳諧歌はざれ歌といふ。利口したるやうの事なり。又、俳諧といふ事、世間には荒れたるやうなる詞をいふと思へり。この集の心さらにしからず。ただ思ひよらぬ風情をよめるを俳諧といふなりと申されし。されど、荒き事をもまじへたるなり」

この引用が示すように、「あらび」は、表現の素材と様式について、「洗練されていない」「粗略である」という世間的な用例のほか「表現の意外性（思ひよらぬ風情）」を指すという意味があるようです。

&gt;

> 広辞苑を引いてみると、「荒」が「新」と同一の意味に使われている例があります。

【新木・荒木】新しい、強い木。また、切り出したままで加工していない木

【新墾・新開・荒開】あらき・・・新たに開墾したこと。

【荒小田・新小田】あらおだ・・・荒れた田。一説に、新しく開いた田

いまだ人工の加わっていない、素のままのものに新しみがあるという意味もあるということでしょうか。

もうひとつ、突飛かもしれませんが注目したいのは、「七部集」の「阿羅野」というタイトルなのです。元禄二年弥生に芭蕉桃青の名による「序」には

「・・・荷分子、集を編て名をあらのとていふ。何故に此名有事をしらず。げにや衣更着（きさらぎ）、やよひの空のけしき、柳櫻の錦を争ひてふ（蝶）鳥のを（お）のがさまざまなる風情につきて、いささが實をそのなふものもあればにや。いと（ゆ）ふのいとかすかなる心のはしの、有かなきかにたどりて、姫ゆりのなにともつかず、雲雀の大空にはなれて、無景のきはまりなき、道芝のみちするべせむと、此野の原の野守とはなれるべし。」

続いて、「荒野集目録」となり、この『標注』に、

「万葉ニ荒山荒野（アラノ）ト見エタリ、荒ハ生（アラ）ニテ人氣（ヒトケ）ニ疎キヲ云。巻

首に荒野と標シ、卷之一ヨリハ曠野（クワウヤ）ニ作ル。曠（クワウ）ハ空也。又疎曠也」

ここからは、「柳櫻をこきまぜて・・・」といった古今集の華美と技巧をこらした歌よりも

雲雀たつあら野におふる姫ゆりのなにつくともなき心かな（西行・山家集）

をしるべとしていこうという芭蕉の心性が感じられます。それにしても最終的にこの集に「阿羅野」の字を冠したのはどういう意味があったのでしょうか？これも広辞苑で引いてみると、

「阿」→「阿字」・・・梵語の第1字母。「阿」字は万物の根源である。  
「羅」・・・連なること。羅列・森羅万象

いろいろ考えるていくと、愉しいのですが、

「阿羅野」	元禄二年
「ひさご」	元禄三年
「猿蓑」	元禄四年
「炭俵」	元禄七年

貞享・「冬の日」からの芭蕉の変位を辿るうえで、「あらび」というキーワードはかなり重要なことのように思われます。

**興味深く。 Re: 「あらび」とは・・・** 投稿者：しゅう 投稿日：2005年11月13日(日)12時16分

[返信](#)・[引用](#)

58秒

> 下の北村季吟の言葉の引用、面白く読みました。

> > 「（古今集の俳諧歌について）この俳諧歌はざれ歌といふ。利口したるやうの事なり。又、俳諧といふ事、世間には荒れたるやうなる詞をいふと思へり。この集の心さらにしからず。ただ思ひよらぬ風情をよめるを俳諧といふなりと申されし。されど、荒き事もまじへたるなり」

> この引用が示すように、「あらび」は、表現の素材と様式について、「洗練されていない」「粗略である」という世間的な用例のほか「表現の意外性（思ひよらぬ風情）」を指すという意味があるようです。

田中さんと、真奈さんの「あらび」考たいへん興味深く読ませて頂きました。ありがとうございます。

宮坂静生さんは、いま、つぎつぎ俳句を活性化する評論を出しておられ、注目の人だと思います。

お二人の投稿を読ませて頂いて、「あらび」というのは、芭蕉は古くて新しい、俳句は、芭蕉から外れることが出来ないんだなあ、芭蕉に始まり、芭蕉に終わるという感じを強く持ちました。

この「あらび」から始まっているのだと思いますが、宮坂さんが、季語の見直しをしなくてはいけない、季語に存在感が稀薄になっている、そこで「地貌季語」という言葉を使っています。新しい時代にあった、風土のリアリティーのある季語に見直していくこと提唱されています。

和歌や連歌で培われてきた「京都中心の美意識」の季語に、あたらしい地貌の季語を補強しようというものです。

「新しい」と言うことは不安定なものですが、しかしそれがないと、活性化されません。俳句の活性化は、いま、もっとも求められていることではないでしょうか。

**和歌連作の部屋** 投稿者：田中 裕 投稿日：2005年11月14日(月)17時21分14秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

桃李歌壇の**和歌連作の部屋**に投稿頂いている蘇生さんから、もうすこしで投稿歌が千首になるという連絡を頂きました。おめでたいことなので、皆様も応援してあげてください。

十百韻（とひやくいん） 連ねて十歳（ととせ） 桃李（ももすもも） 千万（ちよろず） までも巡りたるべし

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**小さき声 第14号のことなど** 投稿者：田中 裕 投稿日：2005年11月15日(火)22時52分15秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

11月26日（土）ですが、この日は推薦入試と大学院の会議があるので、図書館「友の会」の集まりには出られません。また12月3日と10日は、それぞれシンポジウムと講演会がありますので、土曜日の友の会の作業には協力できそうにありません。しばらくのあいだは、松

本馨さんの「小さき声」の復刻の作業と読書会を地道に続けていくつもりです。

[小さき声第14号](#)を復刻しました。松本さんは、どういう聖書を暗誦されていたのか、以前、朽腐（くさり）という言葉を使っていたことから、ヨブ記を文語訳で暗記されていたことが判りましたが、この当時（1963年）は、文語訳聖書のほかに1954年に口語に改訳された聖書の二つをとともに暗記して居られたことが判ります。

聖書の祝福の言葉は、文語訳では「幸いなるかな」と文頭に来ますが、口語訳では、「・・・はさいわいである」と文末に来ます。文語訳の方が、原文のギリシャ語に忠実で覚えやすいのですが、松本さんは口語訳の方も記憶されていて、それぞれの訳文に独自の意味を見出しています。つまり、イエスの祝福を受けて、現在に於いてすでに幸福であるということ、将来において必ず幸福を受けるということの二つの意味を同時に受け入れるという文脈で引用されていました。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**「小さき声」復刻-第14号 校正ほか** 投稿者：[田中裕](#) 投稿日：2005年11月16日(水)21時07分33秒 [返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

#### 14号の校正

前田本 No 1  
p. 72 2行目 「長年瘦軀」→「長身瘦軀」

p. 74 27行目「イエスの祝福は御自身を与えることで、それをつくるものは十字架をつくるのである」の「つくる」は「うくる」の誤記。（今井館の原本によって確認）復刻版では「イエスの祝福は御自身を与えることで、それを受くるものは十字架を受くるのである」と改めました。

=====

[「小さき声」復刻-第14号について](#)をブログに書きました。

また、[「ハンセン病とカトリック」というシンポジウム](#)が12月3日に全生園の愛徳会聖堂で行われます。愛徳会会長の馬場さんもお話になられます。私は別のシンポジウムと日が重なって出られませんが、日曜日に直接お目に掛かって馬場さんからお話を伺いました。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**俳句のことなど** 投稿者：[田中裕](#) 投稿日：2005年11月17日(木)09時11分9秒 [返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

先日、ある学生から、

### この秋は何で年よる雲に鳥

という芭蕉の句のどこがよいのか判らないと言う質問を受けました。私には有無を言わせぬほど身に迫る句ですが、若い人には実感できないのだなと思いました。

実感できなくとも、句を理解するための手助けとして、下五の「雲に鳥」の鳥はどんな鳥だと思おうか、と聞いてみました。暫く考えたあとで、「やはり渡り鳥でしょうね、留鳥ではまずい」ということに気が付いたようです。何処から来て何処へゆくのか分からぬものの、雲の彼方に消えていく鳥の姿が、束の間、夢幻のごとく、この世に生存する作者自身の境涯の象徴になっていることを、今は実感できなくとも、いつかこの学生も自然に気づく時があるだろうと思いました。

ところで、ガラクタ箱さんの掲示板を先日見ましたら、けいさんの花梨の句がありました。昨年冬、ガラクタ箱さんのところで花梨酒を湯割りで頂いた記憶があります。この実が花梨酒に化けることはないでしょうが、私も花梨の實によせて拙い句をひとつ。

### 日の朝を微動だにせぬ花梨かな

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**聞くは一時の恥とやら** 投稿者: [旅人](#) 投稿日: 2005年11月17日(木)18時42分8秒

[返信](#)・[引用](#)

芭蕉の句のご解説ありがとうございます。先生のお話を聞いて、私にも鳥の飛び去る姿が目に見え、浮かびました。しかし、もう少しお話をお聴きしたいと思い、厚顔にも書き込みをする次第です。

始めにお尋ねしたいのは、芭蕉はこの句を旅先で詠んだのでしょうか。私には何となくこの句は自宅で詠んだような気がするのです。すると、旅に出たいと言う気持ちが、この句に現れているのかなという感じを受けます。

次に、秋の渡り鳥といえば、私は北方から飛来する鴨や雁、そして白鳥などを思い浮かべます。特に、私は金沢八景の一つ、平瀧の落雁を見たことがあり、雁が柱のようになって落ちてゆく様が非常に印象的だったので、特に雁を思い浮かべます。それはともかく、秋の渡り鳥というと、遠方から飛来してくるものという思いが強いのですが、東京からさらに西に飛んで行く雁の群を見たのでしょうか。先生のご解説をお聞きして、なんだか知れませんが、白い雲をバックにした大きな鳥の孤影が目に見え、浮かんで来たのです。江戸時代ですと、雁が空を覆うほどの数で、雁形を描きながら飛んで行く、その群に混じって飛んでゆきたいという思いを読み込めるようにも思います。いかがでしょうか。

**芭蕉の句 補足** 投稿者: [田中裕](#) 投稿日: 2005年11月17日(木)19時38分16秒

[返信](#)・[引用](#)

旅人さん:

> 始めにお尋ねしたいのは、芭蕉はこの句を旅先で詠んだのでしょうか。私には何となくこの句は自宅で詠んだような気がするのです。すると、旅に出たいと言う気持ちが、この句に現れているのかなという感じを受けます。

この句は、笈日記・追善之日記・三冊子などの俳書にあるのですが、いずれも「旅懐」の句として扱っています。旅に出たいというのではなく、旅先で病を得て、さらに旅を続けることができるかどうか不安を覚えたときの句でしょう。

旅に病で夢は枯野をかけ廻る

と近いものがあります。

「何で年よる」は「どうしてこんなに年老いたことを感じるのだろうか」という意味ですが、俗語的な表現であるだけに直接的な哀切の響きを感じられます。

笈日記や三冊子に

「下の五文字に寸々の腸（はらわた）をさかれるなり」

とあるように、この句の下五「雲に鳥」は、実際に眼前に見た光景を写生したものではなく、「この秋は何で年よる」で一端、句を「切った」あとで、もっともそれに相応しい附けを苦吟した挙句に、芭蕉の詩的構想力によって、象徴的に付けた句です。

したがって、この鳥に、私は、あくまでも芭蕉の「孤心」の反映として、雲の彼方に消えていく「孤影」を感じます。沢山の鳥が飛んでいる様子を叙したとは思いません。

俳句では、「鳥雲にいる」というのは春の季語で、春先に帰っていく雁などをあらわしますもので、これが春の麗かな時節に詠まれていたのであれば、これから「旅に出たい」という積極的な気持ちの反映ともとれますね、しかし、秋の句で、しかもとくに健康の衰えが実感され、来年の秋を再び迎えるかどうか覚束ないと感じた「この秋は」の句であれば、これから旅に出たいと言うよりは、芭蕉の門人達が解したように、旅先での身心のおぼつかなさを詠んだ「旅懐」の句ととる方が自然であると思いました。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**旅への熱い思い** 投稿者: [旅人](#) 投稿日: 2005年11月17日(木)20時54分42秒

[返信](#)・[引用](#)

ご丁寧な、ご解説ありがとうございました。非常に納得できるものでした。ここで話を終えるのが賢明だとは思いますが、先生のお話が面白いので、つい調子に乗って、もう少しお話が伺えればと思ひまして、自分が芭蕉のように旅先で病床についたときのことを想像してみました。

芭蕉も人の子ですから、旅先で病床に伏せば、やはり心細さとか不安を感じるんでしょうね。しかし、芭蕉の旅にける熱い思いを考えると、これくらいの病気に負けてたまるか、自分ももっともっと先まで進むぞと考えたとは、考えられないでしょうか。その思いが、夢で枯野を駆け廻らし、鳥となって天空を駆け巡らしたように思えるのです。

こう考えてくると、俳句を詠み、また鑑賞することは、私のようにひねくれた心を持って

る者には不向きかなとも思えます。俳句にはひねりが大切だと聞きますが、どうもそのひねりは、ひねくれた心とは関係なさそうですね。  
しかし、「雲に鳥」が「象徴的に」付けたものであれば、この鳥は鷺の方が相応しいように思えます。ただ、この雲は、秋晴れの時の高い雲ではなく、上空一千メートルぐらいのところ密集する雨雲のような気がします。

興を損ねてしまったかも知れません。どうぞ、お赦し下さい。  
それでは、おやすみなさい。

---

**旅する人間** 投稿者：[田中 裕](#) 投稿日：2005年11月19日(土)09時12分7秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

>「芭蕉も人の子ですから、旅先で病床に伏せば、やはり心細さとか不安を感じるんでしょうね。しかし、芭蕉の旅にける熱い思いを考えると、これくらいの病気に負けてたまるか、自分ももっともっと先まで進むぞと考えると、考えられないでしょうか。」

旅人さん、感想どうも有り難うございます。俳句の言葉は、それぞれの読者の世界の中に受肉するものですから、旅人さんの鑑賞は、旅人さんにとつての芭蕉です。私は、旅人さんの感想をお聞きして、旅人さん御自身の旅にける情熱、渡り鳥に寄せられた思いも感じた次第です。

芭蕉の情熱というものは病床にあっても少しも衰えるものではなかったと私も思います。ただし、それは「これくらいの病気に負けてたまるか、自分ももっともっと先まで進むぞ」というように更に旅を続けたいという情熱であったと言うよりは、むしろ、病床での心細さ、老衰に不安を感じている自己自身を句に詠もうとする芸術家（表現者）の情熱であると思いました。

言うなれば旅する芭蕉、生死の境にいる自己を詠むもう一人の芭蕉がいる。表現する者、創造するものとして、芭蕉は最後の最後まで句作にあくなき情熱をかけます。単に旅を続けることに情熱をかけたわけではなく、「旅する人間」「旅において生死する人間」を句に表現しようとする情熱、創作にける執念が死の直前まで旺盛であり、止むことがなかったといえるでしょう。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

---

**田中先生、お早うございます。** 投稿者：[旅人](#) 投稿日：2005年11月19日(土)10時14分47秒

[返信](#)・[引用](#)

自分の心を凝視し、それを表現しようとする情熱、そこに俳人芭蕉の姿が表れているというお話、深いものですね。ありがとうございました。また、私の稚拙な疑問を足蹴にすることなく、丁寧にお答えいただきありがとうございました。

---

**「小さき声」WEB復刻版第15号の校正** 投稿者：[田中 裕](#) 投稿日：2005年11月20日(日)12時

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

09分15秒

[小さき声 WEB復刻版第15号](#)を校正中です。

前田本 No.1(改訂版)の誤植  
P.76 第四段落1行目 立法→律法  
p.77 「予言と福音」→「預言と福音」

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

---

**桃李歌壇より** 投稿者：[田中 裕](#) 投稿日：2005年11月22日(火)14時54分54秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

新しい百首歌集「[秋晴は](#)」(PDF)を刊行しました。和歌連作の部屋は、年内に通算で7000首に達するでしょう。

蘇生さんが、昨日、[和歌連作の部屋](#)に通算で千首の短歌を投稿されましたので、[蘇生\(重陽\)千首歌集](#)(PDF)を刊行しました。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**武蔵野の四季 11月 : 散紅葉 (百合舎)** 投稿者: [田中 裕](#) 投稿日: 2005年11月23日(水) [返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

12時18分22秒

先ほど句会桃李の投句一覧を作成。締切りは過ぎていましたが、管理人の特権で、かけこみながら拙句も投稿しました。今月の題は、「散紅葉」「七五三」「時雨忌」。投稿句は九〇句を越えました。

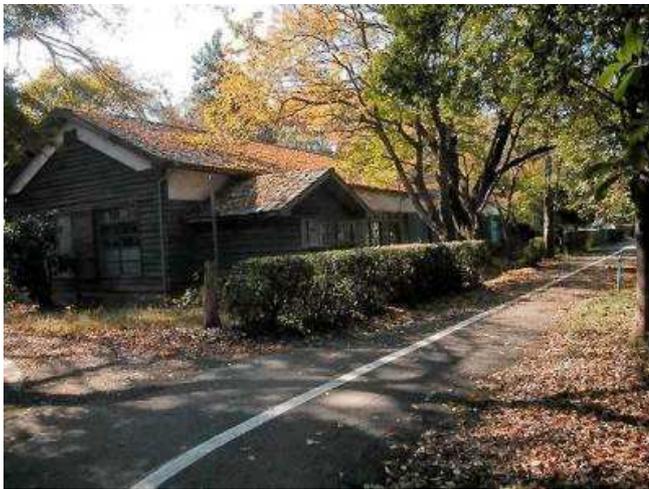
がらくた箱さんの写真のなかで、百合舎の屋根に散りしく紅葉を拝見。図書館の古書などを運んだことが、この間のことのようなですね。

[武蔵野の四季](#) 11月の画帳に、[散紅葉 \(百合舎\)](#) を追加しました。

よろしければ皆様も、俳句、短歌、五行歌、詩などお寄せ下さい。まず、隗より始めよで、拙句から。

廃屋につもりて遠き紅葉かな  
もみぢ舗く道や小さき鈴の聲  
どの古書も命の証し時雨の忌

photo by ガラクタ箱さん



<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**散紅葉 (百合舎) に寄せて** 投稿者: [真奈](#) 投稿日: 2005年11月24日(木)12時35分55秒

[返信](#)・[引用](#)

こんにちは

「小さき声」は順調に復刻が進んでおられる状況、また桃李歌壇も蘇生さまの千首達成など・・明るいニュースですね。

うらかな小春日和と紅葉黄葉の美しい季節に、下手な句と短歌では追いつきませんが・・

黄昏の午後の陽射しのやはらぎて忘れられたる壁を包めり  
森閑と予兆はらみし廃屋の屋根金色に光りはじむる

観音も  
修羅も坐すかや  
くれなゐの  
屋根の奥には  
黙の文塚

散紅葉縷々引き寄せしレクイエム  
掌の朽葉ふるへる命の炎

しゅうさん  
しばらくご無沙汰しました。

しゅうさんの書き込みによると、宮坂静生先生は現在、俳句の活性化に尽くされ、また「地貌

季語」という「季語の見直し」を提唱されておられるとのこと、やはり、連句大会でのあの熱のこもった講演もそのお志からのことと思いました。

宮坂先生は昭和36年の信大連句会発足時からの連衆として、戦後の連句の復興に若いエネルギーを注がれました。現在の連句界に対してもなにか新しい皮袋をつくらうという革新の意気込みを感じさせます。

---

**訂正を**・ ・ 投稿者：真奈 投稿日：2005年11月24日(木)23時52分11秒

[返信](#)・[引用](#)

すみませ〜ん。  
黄昏の午後はおかしいので・ ・

黄昏の冬の日差しのやはらぎて忘れられたる壁を包めり  
に訂正願います。

---

**小さき声 WEB復刻版16号** 投稿者：[田中裕](#) 投稿日：2005年11月28日(月)00時07分17秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

金曜日から今まで、推薦入試や会議で忙しく、更新が出来ませんでした。 [小さき声 16号 WEB復刻版](#) をアップしました。

16号には、12月29日午前10時より全生園福祉会館でおこなわれた関根正雄の聖書集会の案内が出ています。すでに「預言と福音」の中でも、松本さんの「小さき声」が取り上げられ、無教会の千代田集会のメンバーと松本さんとの間の交流を伺わせます。

この号の「神は生ける神でいたもう」という章で、松本さんは、1950年の12月におきた回心の経験を回想しています。

>真奈さん

画帳「武蔵野の四季」の11月 [散紅葉（百合舎）](#) に投稿頂き有り難うございました。早速、掲載しました。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

---

**(無題)** 投稿者：[エリカ](#) 投稿日：2005年11月30日(水)19時30分52秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

田中さん小さき声16号拝読しました。ありがとうございます。

---

**小さき声 WEB復刻版17号** 投稿者：[田中裕](#) 投稿日：2005年12月5日(月)11時45分43秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

土曜日は、東大（駒場）で「アインシュタインの相対性理論100年記念シンポジウム」がありました。三人のパネリストの一人であったので、ここ一週間くらい、その準備で忙しかったのですが、漸く、時間的に少し余裕が出来ました。

先ほど、 [「小さき声」のWEB復刻版第17号](#) をアップしました。

17号に登場するはS氏は、松本さんと同じく、盲目で手足の不自由な六十歳の老人ですが、（9号によると）四年がかりで、マタイ伝二十八章の暗誦を終え、次にロマ書の暗誦にとりかかったという記事があります。

一日に一章、あるいは一節づつ、太股に手で書きながら覚えていったけれども、頭の中がもう満杯になったので、マタイ伝を「故郷に移す」ことにしたという箇所が印象的でした。

わたし自身が相対性理論の話をしたせいでしょうか、時間というものの不思議さを改めて感じました。

Sさんは、東北の出身者です。故郷を追われて三十年、家族も離散していますが、その一度も帰ったことのない故郷を思い出しながら、Sさんは、「神の言葉」を記念碑のように建て始めるのです。故郷の山の入口にも、山道の要所要所にも、谷底にも、そして、遙か遠くから望んでいた故郷が眼前に展開しはじめると、記憶に甦る懐かしい光景の中にSさんは入っていき、そこに聖書の言葉を建てていくのです。

「Sさんの暗誦が続けば続くほど、故郷は神の言葉で埋められていく」

私は、この箇所を決して譬喩としては読まなかった。むしろまざまざとしたリアリティをもつ

出来事と思った。三十年前の故郷は、決して消えて無くなってしまったのではなく、不滅のものとして甦る、そしてSさんが聖書の言葉をひとつひとつ覚えて行くと、その都度の言葉の働きによって、Sさんの過去が新しい形をとるのです。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**写真集「神との旅路」** 投稿者：**田中 裕** 投稿日：2005年12月 6日(火)22時14分13秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

鈴木亜希子さんの撮られた写真集「神との旅路」－ハンセン病を生きた松本馨との9年間－が出版されました。

出版元は、[東銀座出版社](#)です。まだHPの新刊紹介にはでていませんが、このサイトからも注文できるようです。(定価は1500円)山下道輔さんと談笑している情景、「零点状況」出版の時の打合せ、宮古南静園を訪問したときの写真など、数多くの写真が収録されています。

小さき声のWEB復刻をしている身として、特に名状しがたい思いに襲われたのは、42－3頁の、最晩年の写真でした。「ご自分が動けなくなる前に伝えたいことを伝えなければと(テープレコーダーに向かって)必死に録音する」という説明文がありました。「1%の神」を執筆されている頃のものでしょうか。

この写真集には又、関根正雄著作集をテープ録音したものを納めた書棚の写真もありました。「マタイ福音書講義」「申命記講解」「ローマ人への手紙」「エレミヤ読解」等々、百巻近いテープです。松本さんがいかに精神を傾けて関根先生のものを読まれていたかを思わせませす。

この写真集、鈴木さんは9年かけられたとのこと。私のWEB復刻の作業はどれくらいかかるかわかりませんが、何か勇気づけられた思いが致します。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**「時」は旅人である** 投稿者：**田中 裕** 投稿日：2005年12月10日(土)09時48分3秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

上の方に広告が掲載され始めました。有料掲示板の使用期限が切れたので、料金を払えという督促かも。ただいまTCUPに問い合わせています。

今日は、埼玉県の北本市の市民会館で「連歌と俳句」という講演をする予定。

先週は、東大で相対性理論100年記念シンポジウムでアインシュタインについて講演をしたばかりなので、一体、講演者の頭の中はどうなっているのか、と言われそうですが、どちらの主題について話しても、私は私であると思っています。

結局のところ、私は、心敬とか芭蕉とか、あるいはアインシュタインとかボーアというような、個々の人間のほうに興味があって、非人格的なものには、あまり関心がないのだということに気づきました。個々の人が何をするにしても、その人が真に創造的である場合は、その人格的な活動には、何か共通のものがあります。科学も共同体で営まれるものは非人格的で、教科書的なものとなりますが、アインシュタインやボーアのように、物の見方に大転換を促した人の場合は、その思索は著しく個性的です。

俳諧と物理学のように一見すると何の繋がりもないようなものに間に、深いアナロジーを発見して驚くこともあります。たとえば、奥の細道の有名な言葉、

「月日は百代の過客にして、行かふ年もまた旅人なり」

を、私は、私自身の時間論の冒頭で引用したいと思っています。

私の考えでは、「時」そのものが生成します。存在するものがそのまま時であるということは、「時」が旅人であるということ。そして、現代の物理学で言うビッグバン宇宙論というもの、宇宙そのものが単に物質的に広がっていくなどと言う機械論的なイメージで考えるのではなく、宇宙の「時」そのものが生成していると考えべきでしょう。人間だけでなく、一切の生きとし生けるもの、そして無機質な物質とされているものも、すべては時であり、旅人なのです。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**わはははは。** 投稿者：陸王 投稿日：2005年12月10日(土)22時28分7秒

[返信](#)・[引用](#)

>俳諧と物理学のように一見すると何の繋がりもないようなものに間に、深いアナロジーを発見して驚くこともあります。

海人の短歌にもありますね。

**Re: わはははは。** 投稿者：陸王 投稿日：2005年12月10日(土)22時35分9秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

> >俳諧と物理学のように一見すると何の繋がりもないようなものに間に、深いアナロジーを発見して驚くこともあります。

>  
> 海人の短歌にもありますね。

いや、海人は「深いアナロジー」ではなくて、軽い皮肉ですね。

**宇宙に思いを馳せること** 投稿者：田中裕 投稿日：2005年12月10日(土)23時05分11秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

>陸王様

アインシュタインが、太陽周辺での光の彎曲を予言して、エディントンがそれを実証したとき、アインシュタインがユダヤ人であるというので、ドイツでは相対性理論を「ユダヤ的科学」として排斥する運動が起こりました。相対性理論は「真っ赤なウソ」というのは、残念ながら、そういう反ユダヤ主義の宣伝の産物なのです。あなたが引照している

引力にゆがむ光の理論など真赤な嘘なる地の上に住めり

という歌がどのような文脈で詠まれたのかは良く分かりませんが、その背後に、私は、当時のドイツの反ユダヤ主義の宣伝の餌を聞きました。アインシュタインが著名となるにつれて、彼に対する言われ無き誹謗中傷も起きたのです。そんなわけで、[相対性理論のもつ意味](#)を探究している私にとっては、この歌は、あまり感心しませんでした。

アインシュタインは、宇宙の空間はいつもユークリッド的であるとはかぎらないこと、質量の大きな天体の近傍では、時空の曲率が変化するために、平行線をいたるところで「まっすぐに」延長していても、それが交差することがあり得ることを主張しました。地上の常識ではあり得ないことが、宇宙では現実であるということ—そのことを天体観測によって実証したものが、太陽周辺での光の彎曲という現象です。それは、私達が宇宙を考える枠組みを根本的に改めました。

そういうことを考えることが地上で苦勞し呻吟する人にとってなんの意味があるのかというならば、それはあまりにも近視眼的な見方ではないでしょうか。悠久なる宇宙に思いを馳せるとき、人はすべて同じ被造物として対等なのです。先日、愛生園に行きましたときに、愛生園にも嘗て望遠鏡が寄贈され、夜空を眺めて天文に思いを馳せていたかたがおられたと聞くことができました。

四季の移りゆきを観察し、日本の自然を俳句に詠むときに、健常者も病者も、区別はありません。おなじことは夜空を見上げて宇宙の歴史に思いを馳せる人々についても言えるでしょう。ルー・ゲーリック病にかかり、身体が麻痺し、運動能力も会話能力も奪われても、相対性理論の開き示す宇宙を思索したホーキング博士のことが思われます。病氣や障害を持っているからといって、そのことばかりを問題にすることからは精神の自由は得られません。そういうものが二次的な意味しか持たぬ創造活動に従事することも、また、人を解放するものであると思います。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**足元を見ると** 投稿者：陸王 投稿日：2005年12月11日(日)03時29分18秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

>反ユダヤ主義の宣伝の産物なのです。

そうかなあ。相変わらず、論証抜き独断ですね。  
来日したアインシュタインを日本人は熱狂的に歓迎したし、アインシュタインも日本人に深い理解を示し終生親日家だった。  
しかもこの歌は、別に学説としての相対性理論を否定しているわけではなく、また、ホーキングやナチズムなんかを持ち出さんでも、唯の実感を歌ったに過ぎんでしょ。だから「真赤な嘘」が生きる。

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

**徹夜で過去帳。** 投稿者：陸王 投稿日：2005年12月11日(日)05時57分17秒

>  
> いや、海人は「深いアナロジー」ではなくて、軽い皮肉ですね。

あ、そうか。  
海人が皮肉を言ったのではなく、海人をつかっておいらが皮肉を言っているのに、矛先が海人にいったちったんですね。

**公開講座のことなど** 投稿者：田中裕 投稿日：2005年12月11日(日)12時26分45秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

昨日の北本市の公開講座は、市が計画している生涯学習講座の一環でした。120名くらいの受講者がありましたが、熱心に聞いて頂けました。

二年前から上智大学のコミュニティカレッジで、国文学の大輪先生、俳句結社「若葉」の主宰の鈴木貞雄先生と共に、「俳句と連歌」という連続講座を開いています。このコミュニティカレッジは、普通は四谷で行うのですが、時々、外部と連携して公開講座を開きます。

公開講座での私の話の内容は、その都度更新かつ追加して、PDFファイルにしています。最新版は、[場所の詩学一座の文藝に関する一考察](#)です。このファイルは、これからも追加改訂していく予定です。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**「小さき声」第18号** 投稿者：田中裕 投稿日：2005年12月11日(日)12時39分57秒

[返信](#)・[引用](#)

松本馨さんの「[小さき声](#)」第18号をアップしました。現在、校正作業をしています。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**寡婦の献金の説話：「小さき声」18号の聖書引用から** 投稿者：田中裕 投稿日：2005年12月11日(日)22時42分43秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

松本さんの聖書引用は、ほとんどが御自身が暗誦された本文の記憶に基づくものであるが、それはかなり多くの場合、文語訳聖書がベースになっているようである。以前にも、ヨブ記の引用の中で「朽腐（くさり）を父とし」という言葉があり、文語訳聖書からの引用であることが知られたが、今回、WEB復刻した「[小さき声](#)」18号のルカ傳21章の引用もそうである。これは、寡婦の献金というよく知られたエピソードであるが、その解釈は、口語訳聖書だけを読んでいるとよく分からないかも知れない。

松本さんは次のように書いている。

「レプタ二つは、やもめの命の代である。それがなければ生きることはできない。なんと貧しく、そして、小さな命だろう。やもめはレプタ二つで買い取られた肉の奴隷である。やもめと同じく、人はみなレプタ二つの奴隷である。たとえ巨万の富を持っていても、その人のレプタ二つに変更はない。詩人は次のように述べている。  
「たとい彼らはその地を自分の名をもって呼んでも、墓こそ彼らのとこしえのすまい、世々彼らのすみかである」(詩篇49・11)  
レプタ二つは死が人間につけた市価である。やもめはレプタ二つの自己に絶望しながら、同時にそれに仕えなければ生きることが出来ない。これは預言であるが、人間はこの預言の中に生きている。やもめはこの預言の自己、レプタ二つをさいせん箱に向かって投げ込むのである。

ここで「命の代」という言葉が使用されているが、これは多くの口語訳聖書では「生活費」と訳されている言葉である。参考までに、ルカ傳21章の該当箇所の共同訳を挙げておこう。

イエスは目を上げて、金持ちたちが賽銭箱に献金を入れるのを見ておられた。そして、ある貧しいやもめがレプトン銅貨二枚を入れるのを見て、言われた。「確かに言うておくが、この貧しいやもめは、だれよりもたくさん入れた。あの金持ちたちは皆、有り余る中から献金したが、この人は、乏しい中から持っている生活費を全部入れたからである。」

「生活費」という訳語は分かりやすいし、貧しい寡婦が、生活費を全部献金したと言うことをイエスが讃えたという話も周知の物語であるが、私は、この箇所を、松本さんのように、「いのちの代」と読む読み方のほうに、より深き意味を感じた。

参考までに、文語訳聖書の訳文を引用しよう。ルビが煩わしいが、暗誦することを考えると、こちらの方が鮮明に記憶に残るようだ。

イエスを挙げて、富める人々の納物(をさめもの)を、賽銭箱(さいせんぼこ)に投げ入るを見、また或る貧しき寡婦(やもめ)のレプタ二つを投げ入るを見て言ひ給ふ、「われ實(まこと)をもて汝らに告ぐ、この貧しき寡婦(やもめ)は、凡ての人よりも多く投げ入れたり。彼らは皆その豊なる内より納物(をさめもの)のなかに投げ入れ、この寡婦はその乏しき中より、己が有てる生命の料(しろ)をことごとく投げ入れたればなり」

さて、口語訳で単に「生活費」と訳されている言葉は、「己が有てる生命のいのちの料(しろ)」と訳されている。「小さき声」の筆記者は、おそらくこの「命の料」を「命の代」と書いたのであろう。この場合は、単に「生活費」という意味だけでなく、「生命の代価」というもう一つの意味が重ねられている。

ちなみに原語のギリシャ語を確認してみると、παντα τον βιον ον εχεινであって、直訳すると、「自分が持っている全生命」となる。つまり、ビオス(生命)という言葉が使われており、「生活費をすべて」、というよりももっと切実なニュアンスが籠められているようだ。

一人の人間の生命の代価とは幾らであろうか。寡婦の場合は、僅か、レプタ二つであったが、松本さんは、あらゆる人が、実際には、その程度の「市価」しかもたないと言っている。どれほど金持ちであっても、その財産を墓場を越えて持っていくことは出来ない。死はすべての人に平等に訪れ、最後の死から救出されるために幾ら金額を摘んでも、無益である。

松本さんは寡婦の献金の説話を、詩編49の詩人の言葉を背景にして読んでいる。関根正雄の詩編釈義(教文館、上、204)にある解説を引用しよう。

地上の裁判では死罪の場にも死一等を減ぜられ、賠償金を出して死を免れることもできるが、最後の死に対してはそうはいかない、死の力から免れるために死の支配者である神に賠償金を払うことは出来ない、と(詩人は8節で)いう。その理由として、9節で、魂の値は高すぎて人が神にそれを払うことは到底できないからだ、という。

寡婦の献金の説話は、日本では「貧者の一燈」という仏教説話と対比せられ、富めるものの「万燈」よりも貧しいものの「一燈」のほうが「功德」が大きいというように解釈される。

しかし、聖書の説話は、「功德」の大きいことを言っているのではけっしてない。

そうではなくて、寡婦のような貧しい人間の場合、「市(場)価(格)」ではレプタ二つにすぎぬものとして現に扱われているという事実と共に、富めるものが、どれほど大金を積んでも、結局の所、死から自己を救うことは出来ないという、もうひとつの冷酷な現実を目を覚ますべきであることを説いているのである。

「己が有てる生命(いのち)の料(しろ)」という言葉の持つ意味をあらためて考えさせられた。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

「小さき声」18号のご解説ありがとうございました。 投稿者: 旅人 投稿日: 2005年12月

[返信・引用](#)

12日(月)15時59分40秒

新約聖書の背景の時代には、労働者の一日の賃金が1デナリ(=1デナリオン=1ドラクメ)であり、1レプタ(=レプトン)は、その128分の1の価値と聞いています。そして、イスカリオテのユダがイエス様を売り渡した価格である銀貨三十枚は、当時の奴隷に付けられた値段だとも聞いています。すると、人間の「命の代価」が、2レプタだというお話をどのように解釈すべきか、疑問に感じます。また、その一方で、関根先生の詩篇釈義の中の「魂の値は高すぎて人が神にそれを払うことは到底できない」と矛盾するように思うのですが、いかがでしょうか。

私には、人間の命が2レプタの価値しかないと感じられた松本さんの置かれた立場が、どれほど悲惨なものであったかが伝わって来るように思えました。

ところで、「この病いは死に至らず 十八」の「一本の指」の中に、「その光の前には太陽も、昼の目のように暗いのです。」という文がありますが、「昼の目」というのは、松本さん御自身の目が、昼間には確か白い闇のようであったとどこかで書かれていた、そのような暗さを指しているのでしょうか。

18号では、「訓練」の部分、特に渥美さんに対して、「私は彼に向かって、心の中で叫びました。「叩け、もっと叩け、その音が道となって開かれるまで、叩け」。渥美が迷った同じ道で私も迷っているのです。しかし、渥美の背後には私が立っていましたが、私の背後に立ち、私を見守り助けてくれるものは誰か。」という個所が印象的というか、感動的でした。

OCR 投稿者: 大石内蔵助 投稿日: 2005年12月12日(月)18時56分19秒

[返信・引用](#)

のような気がするなあ。

**寡婦の献金－再考** 投稿者：田中裕 投稿日：2005年12月12日(月)23時54分26秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

旅人さん、

投稿どうも有り難うございます。御陰様で、もういちど「寡婦の献金」の説話の意味するところを考えることが出来ました。今後ともよろしくお願いします。

> 新約聖書の背景の時代には、労働者の一日の賃金が1デナリ(=1デナリオン=1ドラクメ)であり、1レプタ(=レプトン)は、その128分の1の価値と聞いています。そして、イスカリオテのユダがイエス様を売り渡した価格である銀貨三十枚は、当時の奴隷に付けられた値段だとも聞いています。すると、人間の「命の代価」が、2レプタだというお話をどのように解釈すべきか、疑問に感じます。また、その一方で、関根先生の詩篇釈義の中の「魂の値は高すぎて人が神にそれを払うことは到底できない」と矛盾するように思うのですが、いかがでしょうか。

「命の代価」つまり「命の値段」は、貧しいもの場合は僅かな金額、2レプタにすぎないかのごとく扱われます。こういう社会的不正義に満ちた現実が一方にある。他方において、ひとりひとりの「命の価値」あるいは「命の重み」は本来、値段の付けられないほど貴重なものである。もしあえて値段を付けるならば、無限大とでもいうほかない。――私は、そのように理解しましたので、とくに論理的な矛盾は感じませんでした。

ただし、言葉の上では矛盾でなくとも、その二つの現実の間には鋭い緊張関係、ないし対比があることは事実です。本来、値段を付けられぬほど貴重な命に、ひとはいつのまにか値段を付け、そして貧富の度合に応じて差別をするようになる。

旅人さんは、2レプタが一体どれくらいの金額であるかを認識することが、釈義にとって重要だということを指摘されました。これはたしかにその通りですね。

1レプタがどれくらいの貨幣価値なのか、諸説があるようですが、労働者の一日の賃金の128分の一というのは分かりやすいですね。日本円に直して大体の感触をつかむことが出来ます。かりに一日の賃金を6400円として、1レプタは僅かに50円です。そうすると寡婦の献金は100円となり、50円硬貨2枚を献金したということになります。

多分、彼女は一日100円で生活していたのでしょう。聖書のテキストによると、彼女は持っている硬貨を「全て」投げ入れたとありますから、乏しい家計をもちかえりみず、献金をしたこととなります。後に何も残っていない無一文になるわけですから、彼女こそもっとも多く献金したのだというのは、非常に良く分かります。毎日、一万円で生活している人にとって、100円の献金は、たいしたことではありませんが、毎日、100円で生活している人が、100円全部を献金するのは、たいへんなことですから。その日の貧しい食事ですら、とりえない危険がある。

イエスのこのときの発言には、乏しい中から命がけの献金をしている寡婦の信仰と犠牲的精神を賞賛するだけでなく、社会的な不正義の上にあぐらをかきながら、多額の献金をすることで宗教的な自己満足を得ている富者達、「寡婦の家を喰いつぶし、見せかけの長い祈りをする」律法学者やパリサイ人への批判もあると思います。ルカは、このような信仰深き「貧しきもの」こそ天国に入るというイエスの言葉をそのまま伝えています。

一日、レプタ二枚でギリギリの生活をしているこの寡婦にとって、それを全て献金することは、文字通り「命がけ」ということにならないでしょうか。明日は飢死するかも知れない。「命の代」という言葉が、なにかさらに一層切実に響きます。

> 私には、人間の命が2レプタの価値しかないと感じられた松本さんの置かれた立場が、どれほど悲惨なものであったかが伝わって来るように思えました。

全く同感です。「俱会一処」などの資料によりますと、昭和24年ころの園内の作業賃は、日給で10円程度。当時は牛乳一合が10円という事ですから、一日働いても、牛乳一本分にしかならなかった。入所者達は家郷を捨て肉親と絶縁するものが多かったので、彼等は、僅かな作業賃を蓄えて、自分たちが死んだときの葬式や供養にあてていたとのことです。松本さんの「小さき声」を改めて読んでみますと、彼が、自分を寡婦と同じ立場に置いていることが良く分かりました。

> ところで、「この病いは死に至らず 十八」の「一本の指」の中に、「その光の前には太陽も、昼の目のように暗いのです。」という文がありますが、「昼の目」というのは、松本さん御自身の目が、昼間には確か白い闇のようであったとどこかで書かれていた、そのような暗さを指しているのでしょうか。

「小さき声」のWEB復刻版の底本は、

A：ハンセン病図書館にある製本版（一部分だけワープロで復刻し、あとは原本をコピーして製本したもの）

B：今井館にある原本（謄写版刷）



ようなことを聞いたことがあります、現代の神学では靈魂というものをどう考えているのか、ご存知でしたら教えてください。

**Re: 「小さき声」 19号」について** 投稿者: [田中 裕](#) 投稿日: 2005年12月17日(土)23時51分50 秒 [返信](#)・[引用](#) [編集](#)

旅人さん、「小さき声」の感想をお寄せ下さり有り難うございました。旅人さんの御陰で、もういちど松本さんの書かれたテキストを考え直す機会が与えられました。

> さっそく読ませていただきました。松本さんが、Tの死に際して、自分のエゴに衝撃を受けて口も舌も動かなくなったという事実は、私には十分に実感できません。前に皇后美智子妃がストレスから声が出なくなったという話を聞いたときにも不思議な気がしました。松本さんは、随分感受性が強い人だったのではないかと思います。

たしかに感受性の強さと言うことはあると思いましたが、ここでは、「信仰」のなかにさえ内在する罪深さという恐るべき事実の発見があったのではないのでしょうか。

「私を生かすはずの信仰は律法となって、私の内に働き、私を死の俘虜としてしまったのです。罪は生き、私は死んでしまったのです。」(「小さき声」19号「唾」)とあります。

これは信仰の持つエゴイズムを自覚されたという箇所です。自分の信仰のことを第一に考え、Tさんが亡くなったときに「まずいときに死んだ」と一瞬思った、そのときの罪深さを自覚して、「口と舌が動かなくなり」、ザカリヤのように言葉を奪われてしまったという實体験を松本さんは書いています。

自分が「信仰」と思っていたものは、實は信仰ではなかった。なによりも聖書を重んじ他を全て犠牲にしてきたはずの自分の心の動きの中に、なおエゴイズムが隠れていたという発見を、松本さんは語っています。「信仰」が、あらたな律法となり、ひとから真の自由を奪ってしまうという恐るべき事態です。だから、もはや自分の力で祈ることも出来ない。かろうじて口にできたのは、旧約詩編の祈りの言葉であり、「信仰なき我を顧みたまへ」という叫びであったのですから。

> 「地の塩」に関する松本さんの解釈は、新鮮に感じました。実際のところ、塩気の無くなった塩を見たことはありませんので、それがどのような状態なのか見当が付きません。また、どうすれば塩気を保つ事ができるのかも分かりません。塩は、多分固まっていれば塩気が保てるのではないかと思います。腐食を防ぐために使われる塩は、自らが塩気を失う事で、役にたつのでしょうか。そして、役目を終えて捨てられる。それは、塩たるものは覚悟しておくべきものなのでしょう。一度死海沿岸あたりで、塩の柱を見てみたいものです。

私も塩気をうしなつた岩塩というものを嘗めたことはありませんが、精製された塩ではなく、天然のものは不純物が多いので、塩気が無くなって捨てられるという言葉には生活上の実感があつたのではないのでしょうか。「地の塩」のたとえは、身につまされます。

> イエス・キリストは、「神の子の栄光を放棄し、人の子となって地上にこられたお方である。彼は言と業をもって、世を救わんとこころみだ。しかし、これは失敗におわつた。世は彼に助けを求めたが、靈魂の救出でなく、肉による救いをもとめたからである。」と書かれていますが、「失敗」とは何か、誰が失敗したのか、その点に関しては、必ずしも松本さんの意見に拘ることなく、十分に考える必要があると思います。

仰るとおり、「小さき声」には、言葉の足りない箇所も沢山あります。それは晩年の松本さん御自身が痛感されていたとのこと。失敗」と「成功」という単純な二元論では語れませんね。私自身は、いわゆる敗者は敗者ではないこと、いわゆる勝者は勝者ではないこと、を福音書から教えられました。

> 松本さんも、内村鑑三と同様に、靈肉二元論の立場に立っており、両者共に靈魂の存在についてよく実感されていたのではないかと思います。ところが、私には、なかなか自分の靈魂を実感できません。田中先生はいかがですか。昔、靈とは神の御前における人間の存在だということ聞いたことがあります、現代の神学では靈魂というものをどう考えているのか、ご存知でしたら教えてください。

私は神学者ではありませんが、ヘブライ思想においては、ギリシャ思想と違って、靈魂と肉体という二元論は存在しないというのが、現代のキリスト教神学では常識になっていると思います。

肉体を穢れたものとする思想は、決して聖書的ではない。靈魂と肉体というふたつの異なるものがあるのではなく、人間は身心の統合体です。ただし、「靈的 (spiritual) なあり方」と「肉的 (carnal) なあり方」、というふた通りの全く異なる存在の様式がある。そこには妥協の余地がありません。

人間の理性は、ギリシャ思想では神的な「もの」として、身体とは独立の「もの」として尊ばれますが、ヘブライ思想では、「理性」も又、神の靈 (聖靈) によって生かされないかぎり「肉的な」あり方をします。

近代の科学技術のように、人間の理性の所産がいかにか「肉的」なありかたをしているか、それを考えるならば、ヘブライニズムに於ける理性の捉えの方が、現代に於いては重要な意味を持っていると私は考えています。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**ヘブライニズムには、霊肉二元論がないとすると、** 投稿者：[旅人](#) 投稿日：2005年12月18日(日)

[返信](#)・[引用](#)

13時53分13秒

非常に合理的であり、親近感を持ちます。  
しかし、聖書の次のような個所は、霊肉二元論といえないでしょうか。

1. サムエル記上 § 28:11~19(新共同訳)  
女は尋ねた。「誰を呼び起こしましょうか。」「サムエルを呼び起こしてもらいたい」と彼は頼んだ。その女は、サムエルを見ると、大声で叫び、サウルに言った。「なぜわたしを欺いたのですか。あなたはサウルさまではありませんか。」云々
2. ヨブ記 § 26:6  
亡者たち、陰府の淵に住む者たちは／水の底でのたうち回る。

また、新約聖書では、たとえば、

1. ローマの信徒への手紙 § 8:5~6  
肉に従って歩む者は、肉に属することを考え、霊に従って歩む者は、霊に属することを考えます。肉の思いは死であり、霊の思いは命と平和であります。
2. ガラテヤの信徒への手紙 § 5:16  
わたしが言いたいのは、こういうことです。霊の導きに従って歩みなさい。そうすれば、決して肉の欲望を満足させるようなことはありません。

上記のような個所は、私は霊肉二元論だと思うのですが、いかがでしょうか。  
なお、「霊的 (spiritual) なあり方」と「肉的 (carnal) なあり方」という区分は、霊と肉という対立する存在を前提としなければ、意味がないように思いますがいかがでしょうか。なお、私はドストエフスキーの「悪霊」を読んで、近代合理主義の内に潜む、まがまがしい存在を見せられたように感じました。松本馨さんは、大分ドストエフスキーを読んでいることが、「小さき声」から窺われ、興味が湧きました。

信仰が律法と化するの、信仰が教条的になっているか、あるいは偶像化したときではないかと思えます。

ただららと書いてしまいました事、お赦し下さい。  
親切なコメントを頂きました事を感謝いたします。

**Re: ヘブライニズムには、霊肉二元論がないとすると、** 投稿者：[田中 裕](#) 投稿日：2005年12

[返信](#)・[引用](#) [編集](#)

月18日(日)17時22分23秒

旅人さんのご質問：

> しかし、聖書の次のような個所は、霊肉二元論といえないでしょうか。

- >
- > 1. サムエル記上 § 28:11~19(新共同訳)  
> 女は尋ねた。「誰を呼び起こしましょうか。」「サムエルを呼び起こしてもらいたい」と彼は頼んだ。その女は、サムエルを見ると、大声で叫び、サウルに言った。「なぜわたしを欺いたのですか。あなたはサウルさまではありませんか。」云々

サムエル記は、関根正雄によれば、イスラエルの王制にたいする批判が内在する文書であり、「肉的」なる政治権力のありかたに対して、預言者の「霊的」な実存が対比されています。この文書で言う「霊」(ルーアハ)もまた、「魂」という「肉体」とは独立別個の実体ではなく、「風」や「息吹」(これらもルーアハといわれています)とおなじく、身心統合体である人間の「霊的 (spiritual) な」実存のあり方を指します。

たとえば、「ヨナタンの霊はダビデの霊に結びつき、ヨナタンは自分自身のようにダビデを愛した」(サムエル記上 18-18)

では、二つの魂が合体したという如き事を云っているのではなく、二人の独立の人格が、互いに「自分自身のように相手を愛した」という人間の実存のあり方を述べているのです。

- > 2. ヨブ記 § 26:6  
> 亡者たち、陰府の淵に住む者たちは／水の底でのたうち回る。

この「亡者」について関根正雄は、「ヨブ記注解」の中で、

「その原語はウガリット語のなかにでてくる神的存在であり、神の前で彼等がふるえる、といのは、ここでも神々の闘いの神話的表象が背後にある」

と云っています。要するに、イスラエルの周辺民族にも共通してみられる神話的存在、「黄泉の国を司る神々」です。

- > また、新約聖書では、たとえば、
- > 1. ローマの信徒への手紙 § 8:5~6
- > 肉に従って歩む者は、肉に属することを考え、霊に従って歩む者は、霊に属することを考えます。肉の思いは死であり、霊の思いは命と平和であります。
- > 2. ガラテヤの信徒への手紙 § 5:16
- > わたしが言いたいのは、こういうことです。霊の導きに従って歩みなさい。そうすれば、決して肉の欲望を満足させるようなことはありません。
- > 上記のような個所は、私は霊肉二元論だと思うのですが、いかがでしょうか。

「霊」と「肉」の対比は、人間の二つの異なる実存の様式、その「生き方」の対比であって、「魂」と「肉体」という「二つのもの」から人間が合成されていると云う「二元論」ではありません。それが、ヘブライニズムには霊肉二元論がないという事の意味です。

ヘブル語では、生きた人間を指し示すのに「魂」(nephes)と「肉」(basar)という言葉を用います。

すべての肉(kor-basar)＝すべての魂(kor-hannephes)

です。どちらも生きた人間の全体を指し示します。新約聖書のギリシャ語でも同様に

肉によって歩く(ロマ8・4)＝人間のように歩く(1コリ3・3)  
あなたがたは肉的不是か＝あなたがたは人間ではないか

という言い換えが可能です。

つまり、「肉」とは神ならざる人間のもつ本質的な脆さを示す言葉であって、身体だけでなく、精神的なものも含むと云うことがポイントです。そういう脆さを秘めた人間存在が、聖霊によって真に生かされる時に、「霊によって再び生まれる」といういい方が出てきます。新約聖書では基本的に「魂(心)＝プシュケー」と「霊＝ブネウマ」とは用法の上で区別されています。

- > なお、「霊的(spiritual)なあり方」と「肉的(carnal)なあり方」という区分は、霊と肉という対立する存在を前提としなければ、意味がないように思いますがいかがでしょうか。

「存在」という言葉を、もし「もの・実体」という意味にとるならば、それは聖書のメッセージの持つダイナミックな出来事としての性格を表すことが出来ません。聖霊を受けて我々のあり方が一新されるという経験、神と人とが、あるいは人と人とが、ものや人格としては異なる存在であるにもかかわらず、「働き」において一つとなることを表現することができなくなるでしょう。

これに対して、「存在」という言葉を、名詞ではなく、動詞として理解するならば、ヘブライ語では、「ハヤー」という動詞がそれにあたります。モーゼに対して啓示された神の名前は、そういうみでの動的な「存在する(ハヤーする)」であって、それは如何なる形でも客体化され得ません。一切の偶像を否定しつつ、全てのものを生かし、存在せしめる働きを、ヘブライ人は神の名前(エヒエ・アシェル・エヒエ(I am who am))に相応しいものとししました。

そういう「存在の働き」が、「風」や「息吹」のごとく、人々に内在し、「主の霊」となると、人間の存在の働きと「一つ」になるときに、旧約の詩人はそういう人間の実存を指して「霊の人(スピリチュアルな人)」という表現を用いています。その意味で、サムエルのような預言者は「霊の人」です。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

御解説ありがとうございました。 投稿者: 旅人 投稿日: 2005年12月18日(日)21時42分33秒

[返信・引用](#)

サムエル記の下となると、第11章のバト・シェバ事件以降理想的な王であるダビデについても強い批判があると思いますが、サムエル記の上では、サウル王に対する批判はあるとはいえず、王政そのものに対する批判はないんじゃないかと思っていますが、これは間違いでしょうか。そして、サムエル記上の § 28:11~19では、預言者とは言え死んだ後のサムエルが呼び出されているので、これを王政批判の立場から説明されても、納得しにくく感じます。

また、「身心統合体」といった場合、「身」と「心」には分けられないのでしょうか。「心」と魂とが同一かどうかは解りませんが、潜在意識とか臨死体験の話などを聞くと、何か魂と呼べるようなものの存在を感じます。さらに、もし魂がないとすると、「あなたは心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして、あな

たの神、主を愛しなさい。」という言葉は、単なる修辞に止まるのでしょうか。また、例えば詩篇第138篇の3節「呼び求めるわたしに答え、あなたは魂に力を与え、解き放ってくださいました。」とか、第139篇の14節「御業がどんなに驚くべきものか、わたしの魂はよく知っている。」などでは、「魂」は誤訳というべきなのでしょうか。この話は、信仰のあり方を左右する問題ですので、ついしつこくなってしまい、申し訳ありません。

**補足説明** 投稿者：田中 裕 投稿日：2005年12月18日(日)23時14分10秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

> サムエル記の下となると、第11章のバト・シェバ事件以降理想的な王であるダビデについても強い批判があると思いますが、サムエル記の上では、サウル王に対する批判はあるとはいえ、王政そのものに対する批判はないんじゃないかと思っていますが、これは間違いでしょうか。そして、サムエル記上の§28:11~19では、預言者とは言え死んだ後のサムエルが呼び出されているので、これを王政批判の立場から説明されても、納得しにくく感じます。

サムエル記には様々な民間伝承が複雑に織り込まれていますので、それらを一つの立場から矛盾なく説明することは難しい。歴史というのはそういうものだと思います。様々な立場から書かれたものが、統一されずに併記されているケースがあります。王制批判と思われる箇所もあれば、素朴に王を讃えているような箇所もありますね。

しかし、そういう細部の記述を貫いて、ペリシテ人の進出に対抗する部族連合による政治的結束の必要が王国を生んだ歴史のあゆみとともに、王を相対化してそれを批判する精神と思想が生まれ、やがて、それらが預言者の精神を生むに致る経緯が書かれています。その意味で、サムエルが、肉体的な制度と化した王制への批判を旨とする預言者運動の原点に位置していると、私は考えています。このへんは、旧約学者がさまざまに議論しています。サムエル記の読み方については、関根正雄「古代イスラエルの思想家」（講談社、昭和57年）の「王国形成とサムエル」以下の章が、私には参考になりました。

> さらに、もし魂がないとすると、「あなたは心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。」という言葉は、単なる修辞に止まるのでしょうか。

単なる修辞とは思いません。それは生き生きとした言葉で書かれ、読むものに直接訴えますので。魂がなければ、このような力強い文は書けませんね。

新約聖書、マタイ伝 22-37のギリシヤ語原文 *αγαπησεις κυριον τον θεον σου εν ολη τη καρδια σου και εν ολη τη ψυχη σου και εν ολη τη διανοια σου* を参照します。

私は、ここには、マタイ伝の編集者の人間観があらわれていると思います。それは、繰り返しになりますが、人間の単なる精神的解放ではなく、身体的なるものも精神的なるものも共に含む人間の全存在を「霊」によって再生させることを説く人間観が明確に出ていると思います。

ギリシヤ語で *καρδια* が人間の情緒の座を意味し、*ψυχη* が人間のいのちの活動力を意味し、*διανοια* が、精神とか理性という知的側面を言い表しています。つまり、人間の持つすべて、その知情意のすべてを尽くして神を愛せ、とっている箇所です。その場合、情緒も、意志も、理性も、人間の実存の様式上の区別であって、それらは一つのものとして働きます。知情意の三つの能力を統合して、「汝の神を愛せよ」といわれている。人間は、決して、情だけでも、意志だけでも、知だけでもない、一つの統合体です。そういう統合体が、「肉的なありかた」をするか「霊的なありかたをするか」が問われているのです。

> また、例えば詩篇第138篇の3節「呼び求めるわたしに答え、あなたは魂に力を与え、解き放ってくださいました。」とか、第139篇の14節「御業がどんなに驚くべきものか、わたしの魂はよく知っている。」などでは、「魂」は誤訳というべきなのでしょうか。この話は、信仰のあり方を左右する問題ですので、ついしつこくなってしまい、申し訳ありません。

こういう場合の「魂」という言葉の用法には、人間の根源にあって活力を与えている「生命的な原理」という意味があるようです。日本語で言う「大和魂」とか「作家魂」などというのと同じような用法ではないでしょうか。

「呼び求めるわたしに答え、あなたは魂に力を与え、解き放ってくださいました。」

は、決して「肉体から魂を解き放った」という意味ではなく、あなたが「私の存在のすべて」を解放して下さった、という意味だと思います。ヘブル語法の特徴の一つは、人間存在の一部をもって全体を表示するところにありますので。

「御業がどんなに驚くべきものか、わたしの魂はよく知っている。」

も同様に、「私の魂はよく知っている」とは、「私の身体は知らない」ということを全く含意せずに、むしろ私の身体を含む人格全体を「私の魂」という言葉で表現しているのです。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**お礼と、私の反省** 投稿者：旅人 投稿日：2005年12月19日(月)08時35分22秒

[返信](#)・[引用](#)

いろいろお教えいただきまして、ありがとうございました。一夜明けて今、田中先生のご議論を考えながら、私の議論の進め方に存する欠陥・問題点を反省しつつあります。どうも根本的な問題は、魂があるのかどうかという問題を、魂の存在を認めれば霊肉二元論であると短絡的に考えて発言してしまったことにあると思います。今現在の認識としては、霊肉二元論での魂は、肉体から独立しえる存在であって、身体の滅亡後も行き続ける存在であるのに対し、人間存在の一部であり、肉体の消滅と共に消滅する、人間存在の根源とでも呼ぶべきものを魂とする考え方もあるのだと思います。そのことを常に考慮して議論を進めないといけないのだと反省しています。

今後も、トンチンカンな質問をするかも知れませんが、その時はご容赦下さい。

今朝は、こちらは20センチくらい雪が積っています。

**クリスマスコンサートのお知らせ** 投稿者：田中裕 投稿日：2005年12月19日(月)21時58分39秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

## 感謝のクリスマスコンサート

**会場：カトリック秋津教会聖堂**

**日時：12月23日（祝・金）午後4時開演（3：30開場）**

## アンサンブルシャローム

典礼聖歌 「私は世の光」  
 スカルラッティ 「Exultate Deo」  
 ヴィクトリア 「Ave Maria」  
 プレトリウス 「Es ist ein Ros entsprungen」  
 オリジナル 「兄弟姉妹の中にあなたを」 他

## 秋津教会聖歌隊有志による合唱

バッハ 教会カンタータ147より「こころに主イエスを」

バイオリン クライスラー「前奏曲とアレグロ」十日谷悠  
 フルート お楽しみに 佐野健一郎

## 声楽アンサンブル「リーダーターフェル」

グノー 「聖チェチーリア・ミサ」

指揮 山下晋平 伴奏 中野田友子  
 ソプラノ 十日谷正子 テノール 高橋秀典 バス 柚木久忠

会場案内（全生園の図書館からは歩いて15分くらい）



アンサンブルシャロームは、典礼聖歌「ご覧よ空の鳥」の作詞者 菅野淳さんのコーラスグループです。当日は森元さんご夫妻もいらっしゃる予定です。

>旅人さん

「小さき声」の復刻は、時間を十分にかけて校訂しながら進めていきたいと思っています。今のペースだと5年くらいかかりそうですが、それでも良いと思っています。御陰様で、読書会もだんだんと軌道に乗ってきました。この掲示板のタイトルも「小さき声 掲示板」と改めました。これからもどうかよろしくお願いします。

>「図書館友の会」の皆様

12月23日の会合は、時間の都合がつけば、出席しますが、クリスマスコンサートがありませんので、おそらく、忘年会のほうは出られないだろうと思います。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**Re: クリスマスコンサートのお知らせ** 投稿者: 北風 投稿日: 2005年12月21日(水)19時50分30秒 [返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

>  
> 「小さき声」の復刻は、時間を十分にかけて校訂しながら進めていきたいと思っています。今のペースだと5年くらいかかりそうですが、それでも良いと思っています。御陰様で、読書会もだんだんと軌道に乗ってきました。この掲示板のタイトルも「小さき声 掲示板」と改めました。これからもどうかよろしくお願いします。

また掲示板の趣旨を途中で変えて、いままで参加していた人を切り捨てですか。東條から松本に宗旨替えするならばBBS変えたらいいのに。

>> 「図書館友の会」の皆様

>  
> 12月23日の会合は、時間の都合がつけば、出席しますが、クリスマスコンサートがありますので、おそらく、忘年会のほうは出られないだろうと思います。

まあ、「お時間の都合がいたら」出席してください。

**この掲示板のタイトルのことなど** 投稿者: 田中 裕 投稿日: 2005年12月21日(水)21時44分44秒 [返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

「柿の木BBS」というのが、この掲示板の、もとのタイトルでしたが、現在、私は「柿の木」というハンドルネームは使っていません。俳号を使う場合を除いて、個人的には、私は、今後は、どの場所においても、出来る限り、本名で投稿するつもりであります。

また、[東條耿一著作集](#)はすでに殆どの作品を編集し終わり、それをWEB上にアップしていますので、現在は、松本馨さんの「小さき声」の編集と読書会をこの掲示板の主要なテーマとしています。これから5年位をかけて、「小さき声」を共に読んでいきたいと考えております。

もちろん、タイトルが「小さき声」になったからといって、読書会だけに話題を限定するつもりはありません。掲示板の新しいタイトルには、静かな場所で落ち着いて対話を続けていきたいという願いも籠められています。皆様からの写真や、詩歌などの投稿は従来通り、自由にお願ひしたいと思っています。全生園の四季の風物を表現した[画帳: 武蔵野の四季](#)も続けていきたいと思っています。

この掲示板のタイトル変更について、北風さんから下のようなクレームが付きましたが、この件について、従来よりこの掲示板をご利用頂いた皆様のご意見をお聞きしたいと思います。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2Ffeigenwille%2F>

**名称変更に関する私の受け止め方** 投稿者: 旅人 投稿日: 2005年12月22日(木)08時45分51秒 [返信](#)・[引用](#)

この掲示板は、名称に関わらず、基本的には田中先生を中心とするものだと認識しています。それで、名称の変更については今日ここにアクセスした時にすぐには気づきませんでした。名称変更により多少話題の重点が変わるかも知れませんが、それほど気にする事はないんじゃないかと思います。「小さき声」といっても、別にそれは松本馨さんだけの声と考えなくても良いのではないのでしょうか。ここに集まる人たちが発する小さな声だと考えても宜しいのではないのでしょうか。私は、個人的にはれんさんの秀麗な短歌を、十分に鑑賞し切れないながらも、すばらしいと思っています。真奈さんほかのみなさんの作品も、十分に楽しませていただいています。そういう人たちの声が、この頃あまり聞けないのは残念なことです。「小さき声」を一つの中心点とし、参加者の「小さな声」をもう一つの中心点として楕円を描けば良いのではないのでしょうか。

**Re: この掲示板のタイトルのことなど** 投稿者: 北風 投稿日: 2005年12月22日(木)08時56分40秒 [返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

>  
> この掲示板のタイトル変更について、北風さんから下のようなクレームが付きましたが、この件について、従来よりこの掲示板をご利用頂いた皆様のご意見をお聞きしたいと思います。

クレームではなくて意見です。

まあ、従来から「インターネット時代の情報倫理と表現の自由」という掲示板が、「柿の木掲示板」になったり、「白描掲示板」が「東條耿一著作集」になって書き込みが出来なくなったり、「ハンセン病問題を考える」掲示板が「健病一如」となって過去ログが消滅したり、あまりに参加者を無視した掲示板運営が続いたので、「杞憂」を申し上げたまでです。まあ、「白描」(明石海人)→「東條耿一」→「松本馨」と関心の赴くままに正直な変遷とい

えば、正直ですが。

今回は違うのならそれで結構です。

**自由の問題** 投稿者：[田中 裕](#) 投稿日：2005年12月23日(金)09時08分58秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

松本さんが「小さき声」を発刊し始める頃に退所された野上寛次さんは、講演会の席で「松本馨さんは元来、政治的な人ではなかった」と云われたが、たしかに、1965年頃までの松本さんが書かれたものは、死別した妻のこと、失明の経験、そして、自己の信仰にかかわる事柄が中心となっている。関根正雄の無教会主義の信仰に触れ、教会的な信仰から、無教会の立場へとラジカルな回心を遂げられ、個人的な伝道の書「小さき声」を刊行することを始めてから約5年くらい経過してから、療養所の自治会再建のために向けられた松本さんの活動が始まる。それは文字通り「世俗の中の福音」の実践であり、無教会のキリスト教思想が、松本さんという一人の人格の中に血肉化していく。もともと「政治的な人間」ではなかった松本さんが、自治会の再建を呼びかけ、入所者の直面している生活上の具体的諸問題—それは結局の所、政治と切り離せない—に深く関わりを持っていく経緯を追っていくことにしたい。

松本さんの「多磨」誌への寄稿のなかから、[自由を奪うもの](#)（1967年4月）という評論をWEB復刻した。これは、隔離医療から解放医療へとむかう混乱期のなかで自治会が解散された頃に書かれたものであるが、キリスト教的な主題であると共に、入所者の生活と直結した政治上の問題でもある「自由」について論じたものである。

冒頭、松本さんは、バビロンの捕囚から解放されたユダヤ人の心情を吐露した旧約聖書の言葉を引用する。

「あなたがたの神は言われる。「慰めよ、わが民を慰めよ、ねんごろにエルサレムに語り、これに呼ばわれ、その服役の期は終り、そのとがはずでにゆるされ、そのもろもろの罪のために二倍の刑罰を主の手から受けた」

松本さんにとって、囚われ人に解放を告げるこの聖句が、そのまま、敗戦直後の日本へのメッセージとなる。米国も又、広島長崎への原爆投下という大量殺戮を犯した戦争犯罪の責任は決して免れるものではないが、米国の日本に果たした歴史的役割は、嘗て、キュロス王がユダヤ民族に果たした役割と類比的であって、結果的には、迫害され抑圧されたものに解放の福音をあたえることとなった。治癒薬がもたらされ、選挙権と人権を保障する憲法が制定されたことによって、療養所に隔離されたものに自由への希望が生まれた。しかしながら、閉鎖的な隔離医療から、解放医療への転換にともなう混乱状況の中で、療養者の「自由」を妨げているものが厳然としてある。それは何であるのか、というのが松本さんの問である。

このエッセイには、隔離政策を推進した光田健輔への松本さんの批判が述べられている。医師としての彼の業績、献身を松本さんは決して否定するわけではない。しかしながら、解放医療の思想に反対して光田の復権を叫ぶ一部の声に対して、松本さんは次のように明言する。

「彼のあやまちを指摘することは監房で首を縊って死んだものや、監督の下でうらみをのんで世を去っていった先輩に対して、残っている私たちの義務でもある。自由の行き過ぎと、光田の隔離政策を礼讃する反動的な人たちの動きに対して、私たちは警戒し、自由を守らねばならない」

文中に、シュワイツァーの名前が出てくるのは、おそらく、光田を「シュワイツァー以上の偉人」として顕彰した内田守のことを念頭においているのであろう。

また、閉鎖された嘗ての自治会のあり方に対しても松本さんは手厳しい批判の言葉を述べている。自治会活動が、かならずしも療養者の爲を思って為されたわけではなかったということを率直に認めて、その原因を徹底して明らかにした上で、見せかけの開放感に浸ることなく、療養者の真の自由がどのようにして得られるかを問いつつ、

青空は一時的なもので、台風の目の中なのである。こうした中で、われわれは、自由を奪うものは誰か、自己に問い続け、その答えを求めなければならない。

という言葉でこのエッセイは締めくくられている。  
=====

北風さん、友の会の皆様へ

友の会の会議は、午後1時からということなので、出席します。下に書きましたように、午後4時から始まる秋津教会のクリスマスコンサートにも行きますので、会議が長引く場合は、途中から失礼することになるかも知れません。このコンサートには、今年、お世話になった方が参加されますので。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2F2Feigenwille%2F>

**お願い** 投稿者: [E三](#) 投稿日: 2005年12月24日(土)01時08分39秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

○田中さんへお願い：  
以前「柿の木」掲示板のパスワードを、友の会の皆さん宛お知らせいただきましたが、今日(23日)お会いした友の会のメンバーで、「小さき声」掲示板で「小さき声」WEB復刻と読書会が行われていることをご存知ない方もおられました。以前のお知らせ以降に、友の会のメンバーとなられた方々もいらっしゃいますので、「小さき声」掲示板のご紹介とアクセス方法を、友の会の皆さん宛、再度お知らせしていただけますでしょうか。

よろしくお願いたします。

**Re: お願い** 投稿者: [田中 裕](#) 投稿日: 2005年12月24日(土)11時26分55秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

> ○田中さんへお願い：  
> 以前「柿の木」掲示板のパスワードを、友の会の皆さん宛お知らせいただきましたが、  
> 今日(23日)お会いした友の会のメンバーで、  
> 「小さき声」掲示板で「小さき声」WEB復刻と読書会が行われていることをご存知ない方もおられました。  
> 以前のお知らせ以降に、友の会のメンバーとなられた方々もいらっしゃいますので、  
> 「小さき声」掲示板のご紹介とアクセス方法を、  
> 友の会の皆さん宛、再度お知らせしていただけますでしょうか。  
>  
> よろしくお願いたします。

了解しました。23日の「友の会」の会合の報告が為されましたら、その後で、「友の会」会員の皆様に、メールにてパスワードを改めて連絡することに致します。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**ありがとうございます!** 投稿者: [E三](#) 投稿日: 2005年12月24日(土)22時33分44秒

[返信](#)・[引用](#)

田中裕さんへ：いろいろとご高配くださり、ありがとうございます。

**「小さき声」と評論の復刻** 投稿者: [田中 裕](#) 投稿日: 2005年12月25日(日)23時37分19秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

松本馨さんの「[小さき声](#)」第20号(1964年4月)と、多磨誌に寄稿された[最後の一人のために](#)(1968年11月)を復刻した。

「小さき声」第20号から、関根正雄先生との交流が詳しく書かれている。とくに、松本さんが、自己の無信仰の徹底的自覚から、二回目の回心を体験された経緯が語られる。

松本さんが聴いた関根正雄の講義では、「神の義が講じられイエスの十字架がさし示めされ信仰がもめられるかわりに、信仰がとりさられることが求められた」。その講義には多くの人が躓いたが、松本さんにとっては、それこそが救いをもたらすものであったという逆説的な、しかし厳然たる事実が語られている。

先生は次のようなことを言われました。「様々な試みをへて、最後に残るのは信仰であるが、それをもっている限りはだめである。それを取り去られて十字架のイエスの足もとに身を投げ出すときが来る。否、そうせねばならない。自己自身に絶望して彼に死ぬことである。このことがなされて、はじめて魂に十字架を刻印されるのである」と。

先生の口より出ずる十字架の言は、火よりも熱く私の魂に焼きつけられ、きざみつけられました。そして、このとき私の目からウロコが落ちたのです。私は一瞬にしてすべてを理解しました。死のベッドの妻に、なぜ罪を告白することができなかったか、霊安所の妻の遺体に、なぜ罪を告白することができなかったのか、このことがなされなかったために、私の目に神は隠れ、私は失明し、地獄の苦しみをうけたのですが、それは罪に沈んでいる私の上に、神の義があらわれるためでした。神は私のために、あらかじめ時をそなえておいて下さったのです。時とは何か、時いたって、魂に十字架を刻印されることでもあります。

関根正雄のいう「無信仰」の徹底的な自覚ということ、自己が信仰であると思っていたものを捨て去ったときに、始めてキリストの信仰が与えられ、「魂に十字架を刻印された」ということ—それが、松本さん自身の如実なる体験として語られている。

「小さき声」の20号以降の部分は、このように松本さんのキリスト教信仰の原点を伺わせるものである。そして、この原点が定位された後、松本さんは、自己の問題だけでなく、療友の

ための活動に邁進するようになる。強制隔離に対する補償要求、生活と医療の改善を求め、自治会活動に精魂を傾ける。それは、松本さんにとって、世俗に於ける福音の実践であったのだろう。彼は、既成のキリスト教の枠組みを超えて、共産党系の活動家を含む全患協のメンバー達と連帯して、独自の視点から自治会の再建を呼びかける。

評論「最後の一人のために」は、いまから、37年前に書かれたもので、当時の全患協の運動に呼応して、再建されるべき自治会の活動の基本について述べたものである。

冒頭に明記されているように、松本さんは

- 一、強制隔離政策による損失補償。
- 二、身体障害者一老令者をも含む一に、拠出年金に替る特別措置を考慮してもらうことと日用品費の増額。
- 三、作業賃の増額。
- 四、居住様式の改善。
- 五、治療棟と病棟の改築

という全患協多磨支部の主張を引用・支援しつつ、独自の論陣を張っている。とくに注目すべきは、1の強制隔離政策による損失補償の項目。松本さんは、損失補償に消極的な意見を

「強制隔離収容によって、私も家族も損失を受けたおぼえは無い、かえって助かったのだ。もし、隔離収容所が無かったならば、家族は私の一生の面倒を見なければならず、それによって受ける家族の犠牲は、金銭で量ることはできない。もし又、私の病気が世間に知れば私は家を出て、生命の尽きるまで、あてもなく地をさ迷わなければならなかったであろう。強制隔離は、私にとって救いだったのである。」

のように、要約し、それにたいして次のように反論する。

もし隔離収容所がなかったらと云う前提のもとに、強制隔離を肯定することは、強制隔離の是非とは無関係である。現実の悲惨を、それよりも更に重い悲惨を過去に想像して、美化することもありうるからである。私が問題にしているのは、半世紀の歴史を持つ隔離収容所で、何が行なわれ何が起ったかと云うことである。

そして、次に、米国のキング牧師の例を挙げ、

黒人指導者キングは兇弾に斃れて既にこの世には居ないが、黒人の抗議デモは今後も継続されるであろう。その止む時は死か、白人と平等の自由を獲得した時である。キングは私達にもまた、如何にして人間を回復するか、国民と平等の自由を確保するか、を教えている。それは諸要求に対する運動を通してのみ受取らされるのである。損失補償要求が出来るか出来ないかは、その人が人間性を回復しているか、回復していないか位、私にとっては重要なことに思われる。

と云っている。また、戦前から引き続いて行われていた軽症患者による重症患者の介護という制度を、患者自身の「相愛互助」の精神によるものと美化してきた考え方が、如何に実情とかけ離れたものであったか、その背後に患者が労働しなければ生活できない現実があり、患者の労働に頼らなければ運営できなかった療養所の実態を指摘している。

松本さんは、また、医療センターという独自の構想についても言及し、

一万人の内の二十分の一、三十分の一、或いは最後の一人のために医療センターは設立しておかねばならない。生活の諸要求の声に消されてしまっている病棟の奥深くに、医療センターの設立を望む人達が居るのである。死と闘っている人達のために、医療センターは設立させなければならぬし、その責任が療養所に関係する総ての人にある。その声は弱く細く、小さければ小さいほど、関係者は謙虚に耳を傾けなければならない。私達もまた謙虚に病友の細き声に聞かなければならない。人の生命は世界よりも重い、それはキリストの教えなのである。

と結んでいる。「小さき声」とは、御自身の伝道文書のタイトルであるだけでなく、病苦に悩む療友の「細き声」に聴こうという松本さんの願いでもあったようだ。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**松本さんの信仰体験をどう受け止めるべきか。** 投稿者：旅人 投稿日：2005年12月26日(月)21

[返信・引用](#)

時02分39秒

田中先生は、『松本さんが聴いた関根正雄の講義では、「神の義が講じられイエスの十字架がさし示めされ信仰がもとめられるかわりに、信仰がとりさられることが求められた」。その講義には多くの人が躓いたが、松本さんにとっては、それこそが救いをもたらすものであったという逆説的な、しかし厳然たる事実が語られている。』とされていますが、このような松

本さんの信仰体験は、どのように受け止めるべきなのでしょう。解る人にだけ解ってもらえば良いというものではないような気がします。

私は、この第二の回心を能動的信仰から受動的信仰への転換と考えています。そして、信仰が受動的になったために、気負いがなくなり、松本さんの気持ちは本当に楽になったのであると思います。そして、それと同時に自分以外のものに関心が向いて、自治会再建に取り組みることになったのだらうと推察しています。

しかし、この受動的信仰は、非常な危機を孕んでいると思います。つまり、信仰の弛緩という危機ですが、松本さんには、そのような危機が現実化することはなかったようですね。

松本さんの自治会再建への取り組みは、自分の属する集団の中で十字架を負うということではなかろうかとも思いますが、いかがでしょうか。

**絶対他力の信仰について** 投稿者：田中裕 投稿日：2005年12月27日(火)11時55分56秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

> 田中先生は、『松本さんが聴いた関根正雄の講義では、「神の義が講じられイエスの十字架がさし示めされ信仰がもめられるかわりに、信仰がとりさられることが求められた」。その講義には多くの人が躓いたが、松本さんにとっては、それこそが救いをもたらすものであったという逆説的な、しかし厳然たる事実が語られている。』と言われていますが、このような松本さんの信仰体験は、どのように受け止めるべきなのでしょう。解る人にだけ解ってもらえば良いというものではないような気がします。

私も又、旅人さんと同じく、「解る人にだけ解ってもらえば良いというものではない」と考えています。関根正雄は「無信仰の信仰」とか「絶望的信頼」という言葉を使って、「預言と福音」という伝道誌で十字架の信仰を語りました。それは当初、無教会の多くの信徒にとってさえ、あまりに逆説的であって、理解しがたいものであったようです。

しかし、文字を通してではなく、直接に、関根正雄の口からそれを聴かされたときに、松本さんは、自分自身のことが語られていると直観され、その言葉が二回目の回心をもたらした。松本さんは関根正雄ではないにもかかわらず、その言葉は、松本さんの経験の奥底までも照射した。同じ事は、すべての人にも言えないでしょうか。関根正雄でも松本馨でもない俗物にすぎぬ私の如きものですら、そこには自己自身の経験に通底することが書かれていると直接に感じます。

信仰というのは、決して「私の信仰」というように私物化し得ぬものであり、「頂くもの」、「恩寵によるもの」である、ということは、アウグスチヌスやトマス時代から強調されていたことですし、キリスト教以外でも、「信心は阿弥陀様から賜るもの」というように、浄土真宗の他力の信心の根本にある教えです。ですから、言葉に出して云うならば、それ自身は「新しい教え」ではありません。

しかし、それを各人が如実に経験するかどうかは別です。松本さんの場合は、その永遠不変の真実が、彼自身の特殊な境涯を通じて血肉化して、彼自身のうちにおいて、具体的に生起しました。私達が驚嘆するのはそういう信仰の事実です。

信仰の事実が、全く新しき事柄として生起する。永遠なものは常に新しい。それをもし言葉で表現する事が許されるとするならば、自己が信仰を持つのではなく、信仰が自己を突破して、新しき自己となり、その自己に於いて働く経験とでもいいたいでしょうか。松本さんが書き残された文書には、そういう普遍的な事柄が語られていると思いました。

旅人さんは「受動的信仰」ということを云われましたが、私は、ここでいう信仰は「受動と能動」「他力と自力」という二元的な区分が生じる以前の経験の根源に遡る出来事と理解しています。能動と区別された受動は、相対的な受動です。徹底した受動ではない。受動に徹底するとき、それはもはや、相対的な受動ではなくて、一切の能動的なものがそこから生まれる根源となる。浄土真宗で云う「他力本願」とは、決して我々が理解するような他力本願ではないでしょう。自己と区別された他者に依存するというのではなく、自己の能動性の根源にあるものに生かされるという経験です。キリスト教的でない方をすれば、絶対的な他者であった神が、「私自身よりも私に近い」存在として実感される。

> しかし、この受動的信仰は、非常な危機を孕んでいると思います。つまり、信仰の弛緩という危機ですが、松本さんには、そのような危機が現実化することはなかったようですね。

旅人さんが「非常な危機」ということで何を意味しておられるのかは、良く分かりませんが、「弛緩」するような信仰は、私の理解するところでは、相対的な信仰です。松本さんが、十字架のイエスの信仰によって語るものは、そういう「我々の側でいうところの信仰」ではない。その信仰は、「弛緩したり強められたりする」ようなものではなく、そういう相対的な信仰を絶対否定することによって恵まれた信仰です。

ただし、浄土真宗で云う「本願ばかり」のようなもの、すなわち自己の如何なる行為も、それが「他力」であるがゆえに責任を負う必要がなく、如何なる悪を為しても救済が保証されるはずだという思想があります。こういう思想が、どれほど異端的なものであっても、「他力の信仰」から出てくるのではないかという批判がある。これも、絶対他力の信仰に対して「危機的」な問題として提出されることがあります。これについては、信仰と社会的な倫理との関係性を問う問題として、さらに引き続き考察をする必要があるでしょう。

> 松本さんの自治会再建への取り組みは、自分の属する集団の中で十字架を負うということではなかろうかとも思いますが、いかがでしょうか。

政治というものは、本質的に相対的な事柄の中で動きます。これに対して、「十字架を負う」ということは、事柄の根源に遡って、ラジカルに発言して行動することを求めます。

この両者は明白に緊張関係に立つので、松本さんの自治会活動の労苦も又、そこにあったわけですが、松本さんは、入所者の生活条件の改善を目指す相対的な善の実現に奔走すると同時に、隔離政策という根源的な悪を悪として摘発することを忘れなかった。そういう場合は、預言者的な仕方、園内の自治活動に携わり、そのために、自治会の他のメンバーのあいだに縷々、緊張関係を生じました。しかし、松本さんと対立し、自治会から手を引かせた人の中にも、後になってみると、「結局、あのとき松本さんが云っていたことが正しかった」と回想する方が多い。

松本さんの政治的活動は、彼のキリスト教信仰と不可分であって、そこには聖書の預言者的な実存があります。それを具体的に知るためには、彼の自治会活動の記録を辿りながら、多磨誌にかかれた評論をあわせて読む必要があると思っています。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**神は細部に宿る** 投稿者： [ミース・ファン・デル・ローエ](#) 投稿日：2005年12月27日(火)17時08分2秒 [返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

> しかし、松本さんと対立し、自治会から手を引かせた人の中にも、後になってみると、「結局、あのとき松本さんが云っていたことが正しかった」と回想する方が多い。

こういうところをお座なりにすると全体の論拠が弱くなります。  
誰がどういう場面で言ったのか。多いというのは、どれくらいか。  
田中さんは、又聞きではなく本当に耳にしているのか。

**神は細部に宿る** 投稿者： [ミース・ファン・デル・ローエ](#) 投稿日：2005年12月27日(火)17時29分33秒 [返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

> しかし、松本さんと対立し、自治会から手を引かせた人の中にも、後になってみると、「結局、あのとき松本さんが云っていたことが正しかった」と回想する方が多い。

こういうところをお座なりにすると全体の論拠が弱くなります。  
誰がどういう場面で言ったのか。多いというのは、どれくらいか。  
田中さんは、又聞きでなく本当に耳にしているのか。  
「多いらしい」でもなく、「多いそうだ」でもなく「多い」と言い切る根拠は？

**Re: 神は細部に宿る** 投稿者： [田中 裕](#) 投稿日：2005年12月27日(火)17時58分20秒 [返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

>> しかし、松本さんと対立し、自治会から手を引かせた人の中にも、後になってみると、「結局、あのとき松本さんが云っていたことが正しかった」と回想する方が多い。

>  
> こういうところをお座なりにすると全体の論拠が弱くなります。  
> 誰がどういう場面で言ったのか。多いというのは、どれくらいか。  
> 田中さんは、又聞きでなく本当に耳にしているのか。

ミース・ファン・デル・ローエさんというのは、北風さんですね。以前にも、「陸王」とか「大石内蔵助」とかいうHNで投稿されていましたね。この掲示板でご発言される時は、どうかハンドルネームを統一して下さいようにお願い致します。

ところで、上のご質問ですが、実名をあげることは差し控えますが、自治会の立場があるので言えないこともあるが、個人的には、という前置きで私に直接にそう仰った方がいます。また、間接的にそういう発言をした人がいるということも聞いております。

ただし、「多い」というのは、仰るように、厳密さを欠きますね。

「と回想される方がいます。」に訂正します。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

**なりすましたり、キャラまで作っているわけでもない。** 投稿者：北風 投稿日：2005年12

月28日(水)15時21分3秒

かつては、いろんな名前が登場していた田中さんが、お宗旨を変えたとたん「ハンドルネームを統一せよ」ですか。

しかし、ローエは「神は細部に」といった建築家だし、昼行灯の大石内蔵助は「昼の月(目)」をご指摘するには、ちょっといい名前でしょう。そんなに目くじらたてなくても、「皆さん」おいらとわかっていますし。

厳密さを欠くのは「松本さんと対立し、自治会から手を引かせた人の中にも」というくだりのほうだとも思います。おいらには、まだ、誰が松本さんと対立し自治会から手を引かせたのか、正確に見えていない。

**聖書の靈魂観－内村鑑三の文を手引きとして** 投稿者：田中 裕 投稿日：2005年12月28日(水) [返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

18時32分43秒

この掲示板でなされた旅人さんとの対話をもとにして、「聖書の靈魂観」という文章を纏めてみました。晴読雨読から、内村鑑三の文を転載することを許諾して下さった旅人さんに感謝致します。

=====

内村鑑三は、「聖書の研究」のなかで、靈魂の不滅という教義は、聖書に於いて決して主張されていないという事実を指摘して、次のように云っています。(このテキストは、旅人さんのサイト[晴読雨読](#)で読むことができます)

靈魂は、元来不死のものであるかどうか、これは基督教が論じる所ではない。基督教は、ただ罪を犯した靈魂が死んだものであることを伝える。彼がもし元来不死の者であったとしても、彼は罪を犯したことにより死んだ者である。彼がもし生まれながらにして不朽の性を具(そな)えていない者であるとしても、彼は罪を避けることによって不死の者となる特権を有する者である。問題は、滅、不滅の問題ではない。滅びようと思うか、滅びないようにしたいと思うかの問題である。本然性の問題ではない。可能性の問題である。基督教が哲学と異なる点はここにある。哲学が人を究めようとするのに対して、基督教は人を救おうとする。哲学者にとっては研究の材料である人類は、基督教にとっては、「憐憫の器」(ローマ人への手紙 §9:23より)であるのである。基督教は、更に伝えて言う。不朽は、ただイエス・キリストにおいてだけあると。「唯ひとり不死を保つ者(1テモテ §6:16)」と。また、「御子を持つ者は生命を持ち、神の子を持たぬ者は生命を持たず(1ヨハネ §5:12)」と。また、「イエス言ひ給ふ、『我は復活なり、生命なり、我を信ずる者は死ぬとも生きん』(ヨハネ傳 §11:25)」と。  
(「聖書の研究」明治43年(1910年)9月10日号より)

現代の聖書學では、聖書にギリシャ的な靈魂不死の思想がないことは常識であるといっても良いが、そうであるからといって、聖書は「靈魂」の存在を否定したり、「不死」を否定したりするわけではありません。それどころか、「靈魂」への配慮を以て生きること、「永遠の生命」に生かされる事こそ聖書の核心の教えです。聖書は「身を殺して魂を殺し得ぬもの」を恐れるに足らぬものとし、「不滅」すなわち「永遠の生命」に生きることこそ人間にとって最も大切なことと教えています。

したがって、ギリシャ的な靈魂不死説(それは、輪廻転生する実体的靈魂を信じる諸宗教にも共通する教えです)との本質的な相違を明確にしておかねばなりません。

まず、聖書は、霊と肉を二つの異なる実体として理解することはないことに注意したい。

たとえば、旧約聖書では、生きた人間を指し示すのに「魂」(nephes)と「肉」(basar)という言葉を用いる場合が多い。すべての肉(kor-basar)=すべての魂(kor-hannephes)であって、どちらも生きた人間の全体を指し示します。新約聖書のギリシャ語でも同様に、肉によって歩く(ロマ8・4)=人間のように歩く(1コリ3・3)、あなたがたは肉的不是ではないか=あなたがたは人間ではないか、という言い換えが可能です。

つまり、「肉」とは神ならざる人間のもつ本質的な脆さを示す言葉であって、身体だけでなく、精神的なものも含むと云うことがポイントです。

そういう脆さを秘めた人間存在が、聖霊によって真に生かされるときに、「霊によって再び生まれる」といういい方が出てきます。新約聖書では基本的に「魂(心)=プシュケー」と「霊= Pneuma」とは用法の上で区別されています。

そして、「靈的(spiritual)なあり方」と「肉的(carnal)なあり方」という聖書的な区別は、決して、「霊」と「肉」という対立する「存在」を前提しているわけではありません。「存在」という言葉を、もし「もの・実体」という意味にとるならば、それは聖書のメッセージの持つダイナミックな「出来事」としての性格を表すことが出来ないからです。霊と肉を異なる「実体」とする見方は、聖霊を受けて我々のあり方が一新されるという根源的な経験、神と人とが、あるいは人と人とが、「もの」や人格としては異なる存在であるにもかかわらず、「働き」において一つとなることを表現することができなくなるでしょうから。

これに対して、「存在」という言葉を、名詞ではなく、動詞として理解するならば、ヘブライ語では、「ハヤー」という動詞がそれにあたります。

モーゼに対して啓示された神の名前は、そういう意味での動的な「存在する（ハヤーする）」であって、それは如何なる形でも客体化され得ません。一切の偶像を否定しつつ、全てのものを生かし、存在せしめる働きを、ヘブライ人は神の名前（エヒエ・アシェル・エヒエ（I am who am））に相応しいものとししました。

そういう「存在の働き」が、「風」や「息吹」のごとく、人々に内在し、「主の霊」となって、人間の存在の働きと「一つ」になるときに、旧約の詩人はそういう人間の実存を指して「霊の人（スピリチュアルな人）」という表現を用いています。その意味で、サムエルのような預言者は「霊の人」と呼ばれました。

聖書における霊と肉の捉え方は、存在を実体として捉えるギリシャ的な「存在論(ontology)」ではなく、存在を出来事としてとらえるヘブライ的な「現成論(hayathology)」の文脈で論じなければならぬ、というのが私自身の聖書の解釈の基礎にあります。

新約聖書、マタイ傳 22-37 の

「なんぢ心を盡し、精神を盡し、思ひを盡して主なる汝の神を愛すべし  
(αγαπησεις κυριον τον θεον σου εν ολη τη καρδια σου και εν ολη τη ψυχη σου και εν ολη τη διανοια σου)」

にもまた、聖書の人間観が良くあらわれています。それは、人間の単なる精神的解放ではなく、身体的なるものも精神的なるものも共に含む人間の全存在を「霊」によって再生させることを説く人間観です。靈魂を「本性的に不死なる者」とし、そういう靈魂を滅び行く肉体から解放することを説く教えではありません。

神は全身全霊をあげて愛すべき事を説くイエスの言葉でいえばκαρδιαが人間の情緒の座を意味し、ψυχηが人間のいのちの活動を意味し、διανοιαが、精神とか理性という知的側面を言い表しています。つまり、人間の持つすべて、その知情意のすべてを尽くして神を愛せ、といている。その場合、情緒も、意志も、理性も、人間の実存の様式上の区別であって、それらは一つのものとして働く。知情意の三つの能力を統合して、「汝の神を愛せよ」といわれています。人間は、決して、情だけでも、意志だけでも、知だけでもない、一つの統合体ですが、そういう統合体が、「肉肉的なありかた」をするか「霊的なありかたをするか」が問われているのです。

人間の理性は、ギリシャ思想では神的な「もの」として、身体とは独立の「もの」として尊ばれたが、ヘブライ思想においては、「理性」も又、神の霊（聖霊）によって生かされないかぎり「肉肉的」あり方をします。近代の科学技術のように、人間の理性の所産がいかに「肉肉的」なありかたをしているか、それを考えるならば、ヘブライニズムに於ける理性の捉え方の方が、現代に於いては重要な意味を持ってくるでしょう。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2Ffeigenwille%2F>

「相対的信仰」について 投稿者：旅人 投稿日：2005年12月29日(木)08時46分18秒

[返信・引用](#)

田中先生、お早うございます。

田中先生が、27日に書かれた「絶対他力の信仰について」の中に、「相対的な信仰を絶対否定することによって恵まれた信仰」という件がありますが、「相対的な」信仰を持っている人自らそれを「絶対否定」することはできないのではないのでしょうか。その信仰が、神によって否定されたことに気づくのだと思います。問題は、否定されただけでは、絶望に陥ると思いません。自分の罪が赦されていることも同時に知られることで、自らの救いを確認できるのではないのでしょうか。

また、「相対的信仰」なるものは、「絶対的信仰」の前で、何の価値もないものなのではないのでしょうか。私には、たとえ「相対的」なものであっても、「信仰」は実は神様から与えられたものなのだと覚ることにより、大きな喜びが与えられるのではなからうかと思っています。

「小さき声」20号には、  
『神は命の言をきく耳だけを私に残したのです。私はこれをよるこんでよいのか、かなしんでよいのかわかりません。なぜなら魂は死ぬほど神をしたったためにその結果、罪をおかすことになったからであります。「まずいときに死んだ」は、私の熱心が云わせた言葉であります。神を知らなかったら、口はかかる罪をおかさなかつたでありましょう。また、魂は飢えがかわくことなく、狼のようにむさぼることをしなかつたでしょう。神の言は、食えば食うほど、それに応じて空腹は一層はげしくなり、私は魂の飢餓を満たすためには、隣人を捨て、友人を食い物にし、愛するものを死に渡すことさえ辞さないでしょう。世界をほろびにわたすことも、あえて辞さなかつたでしょう。』  
と書かれていますが、幸か不幸か、私は神の言に対して、これほどの飢餓を感じたことはあり

ません。このような思いは、ハンセン病で視力を失い、更には皮膚の感覚さえも奪われていく人になら分るものなのではないでしょうか。

いずれにしろ、ここでは松本さんは自己本位になった熱心な信仰の恐ろしさを描いていると思います。そして、ここでは、自分の信仰が「絶対化」されてしまっていることが問題なのであり、それを否定・相対化される必要があったのだと思いますがいかがでしょうか。

Re: 「相対的信仰」について 投稿者: [田中 裕](#) 投稿日: 2005年12月29日(木)11時38分6秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

>27日に書かれた「絶対他力の信仰について」の中に、「相対的な信仰を絶対否定することによって恵まれた信仰」という件がありますが、「相対的な」信仰を持っている人自らそれを「絶対否定」することはできないのではないのでしょうか。その信仰が、神によって否定されたことに気づくのだと思います。問題は、否定されただけでは、絶望に陥ると思います。自分の罪が赦されていることも同時に知らされることで、自らの救いを確認できるのではないのでしょうか。

これは、旅人さんが「信仰の弛緩」ということを仰った文脈ですね。つまり、いわゆる他力本願（あなたまかせ）では、「信仰が弛緩する」ということを言われた、そのことに対して私の考えを述べた文脈でした。「弛緩したり強められたりする」のは、あくまでも「我々の側の主観的信仰」であって、その根源にある「十字架上のキリストの信仰」はそうではないということが私の趣旨でした。確かに、絶対否定は自力ではあり得ません。

十字架の信仰では、自己と疎遠なる他者、外部の超越者を信じているのではなく、「キリストとともに私が死に、キリストと共に私が復活する」ということ、つまり死・復活が不可分のものとして経験されます。死が先行しなければ復活はあり得ません。絶対否定が絶対肯定に先行するのは、死がなければ、復活があり得ないということと類比的です。

これまで自分が信仰と思っていたものが絶対否定されたからといって、その結果、絶望に陥るなどと言うことは決して無いでしょう。全く逆に、その死の直中から、再び生きる力を与えられるものであると思います。

> また、「相対的信仰」なるものは、「絶対的信仰」の前で、何の価値もないものなのではないでしょうか。私には、たとえ「相対的」なものであっても、「信仰」は実は神様から与えられたものなのだと覚ることにより、大きな喜びが与えられるのではなからうかと思っています。

「大きな喜び」については私もそう思います。信仰だと自分が思っていたものが、我も人も苦しめる律法と化してしまったら、それは實は十字架の信仰ではなかったということ—これが松本さんの言われていたことでした。いかにささやかなものであっても、信仰・希望・愛の三つの対神徳は、功利主義や世間的な道徳によっては得られない喜びを与えるものだと思います。

> 「小さき声」20号には、

> 『神は命の言をきく耳だけを私に残したのです。私はこれをよるこんでよいのか、かなしんでよいのかわかりません。なぜなら魂は死ぬほど神をしたったためにその結果、罪をおかすことになったからであります。「まずいときに死んだ」は、私の熱心が云わせた言葉であります。神を知らなかったら、口はかかると罪をおかさないで済みます。また、魂は飢えがかわくことなく、狼のようにむさぼることをしなかつたでしょう。神の言は、食べば食うほど、それに応じて空腹は一層はげしくなり、私は魂の飢餓を満たすためには、隣人を捨て、友人を食い物にし、愛するものを死に渡すことさえ辞さないでしょう。世界をほろびにわたすことも、あえて辞さなかつたでしょう。』

> と書かれています。幸か不幸か、私は神の言に対して、これほどの飢餓を感じたことはありません。このような思いは、ハンセン病で視力を失い、更には皮膚の感覚さえも奪われていく人になら分るものなのではないでしょうか。

聖書を読まなければ生きていくことが出来なかった、とは松本さん自身の言葉です。すべてを犠牲にしてただ聖書を読み続け、聖句を暗誦することによって、ただ信仰のみによって生きていこうとされた松本さんの生活を伺わせます。

しかし、そういう生活に於いて、真実の信仰というものが働いていたのだろうか、という反省を松本さんは繰り返しています。いうなれば、これまで自分がもっとも後生大事に抱えてきたものを手放すという経験、自分が信仰だと思っていたものを、徹底して「無信仰」と自覚させるような決定的な経験を松本さんがされた。それこそが、松本さんが、真に十字架の信仰に恵まれたという経験に他ならなかつたのでしょう。

「小さき声」に書かれているのは、そういう極限的な状況に於ける言葉です。

しかし、私は、そこにあらわれているものが、決して、特殊で異常な例外的な事態なのだとは思いません。我々の内にあっては、日常性の直中において気づかれない信仰の真実を松本さんが体験され、それを御自身の言葉で述べられた、その故に、それが私自身の事柄を照射する言葉にもなり得たのであると思います。

> いずれにしろ、ここでは松本さんは自己本位になった熱心な信仰の恐ろしさを描いていると思います。そして、ここでは、自分の信仰が「絶対化」されてしまっていることが問題なのであり、それを否定・相対化される必要があったのだと思いますがいかがでしょうか。

仰る通りです。自己の相対化ということこそ、真の「絶対」を自覚しなければあり得ぬことですから。絶対的信仰というのは、相対的信仰に「対立」して、それを最終的に無価値にするよ

うなものではなく、結局はそれを新に活かし完成させるものであると思います。

「恵み（絶対）は自然本性（相対）を破棄せずに、却ってこれを完成させる」というのが、トマス・アキナスに代表されるカトリック信仰の基本です。

無教会キリスト者の量義治さんは、これを更に一歩進めて

「恵み（絶対）は自然本性（相対）を破棄することによって、却ってこれを完成させる」といいました。

どちらが適切であるかは即断できませんが、私は、量義治さんの言葉の方が、「十字架の信仰」を良く表していると思います。

キリスト教というのは（そして原始仏教についてもそうと思いますが）いわゆる宗教的なものの否定という契機をもつと考えています。決して、相対的な信仰が連続的に深まり展開・発展して、十字架の信仰になるとは思えません。そこには翻りということ、ものの見方の大いなる転換があります。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

---

**水仙に寄せる俳句** 投稿者：田中 裕 投稿日：2005年12月29日(木)12時09分29秒

[返信](#)・[引用](#)

歳末になり、皆様もご多忙と思います。  
ガラクタ箱さんのHPに素晴らしい写真がありましたので、一句、投稿します。



水仙の御堂(みどう) の風は何処(いづこ) から

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

---

**謹賀新年** 投稿者：旅人 投稿日：2006年 1月 1日(日)09時31分51秒

[返信](#)・[引用](#)

本年もよろしく願いいたします。

初春に悦び踊らむ主の御前

---

**自由学園にて** 投稿者：田中 裕 投稿日：2006年 1月 2日(月)10時11分6秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

昨日は、ひばりヶ丘にある自由学園の講堂での新年礼拝にでました。私の家から自転車で30分位ですが、下の写真のように、校舎は木造平屋建てで、昭和30年頃の佇まいを残しています。どことなく、「武蔵野の四季」でおなじみの百合舎などおなじみ時代の学舎の雰囲気を漂わせています。

戦前の困難な時代に、「自由」ということを教育の基本方針としていた精神は、戦後も健在で、加熱した受験競争とは一線を画した独自の教育方針を貫いています。

元旦礼拝では、その独自の教育の内容に触れた来賓の卒業生の話が印象的でした。

## 自由なる旗に朝(あした)の淑気あり



<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**明けましておめでとうございます** 投稿者：しゅう 投稿日：2006年 1月 2日(月)23時21分0秒

[返信](#)・[引用](#)



良いお正月をお過ごしのことと思います。  
今年の、箱根駅伝は面白いですね。きょうの往路は、抜きつ、抜かれつの順位がめまぐるしく入れ替わって、面白く見てました。明日は復路、どこが優勝するのでしょうか？楽しみです。  
全く「小さき声」と関係ない話をしてすみません。  
本年も、よろしくお願い致します。

**「小さき声」第21号** 投稿者：[田中裕](#) 投稿日：2006年 1月 4日(水)20時10分4秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

[「小さき声」第21号](#)を復刻しました。

1952年より、全生園にて関根正雄の詩編講義を聞いたことが書かれています。同行してきた兄姉とともに受講したのであったが、社会人と同席したのは、隔離されて以来、はじめてで、十七年ぶりであったとのこと。その講義は難解であった。幸い、関根正雄は、新約聖書をはなれて詩編の講義をすることがなかったので、松本さんは、ただイエスキリストの名と十字架の出来事にのみ心を集中してその講義を聞いたという。

「同じ先生の口から繰り返し聞かされるその名と、その出来事は、一回よりも二回、二回よりも三回、と新しくいまはじめて聞く人の名の如く、その出来事は、今起こったニュースのごとく新しい」

と松本さんは詩編講義の感想を述べている。

また、「ことば」という欄に、「五百巻入るテープの書棚を作った」という記事がありました。この戸棚と、そこに収納されている関根正雄著作集などのテープの写真が、まえにここで紹介しました鈴木亜希子さんの写真集「神との旅路」の五頁にあります。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**明けましておめでとうございます** 投稿者：真奈 投稿日：2006年 1月 5日(木)14時08分31秒

[返信・引用](#)

本年もよろしくお願いたします。

水仙の画像からの句を・・

水仙やいまだ知られぬ風を待つ  
白きかな十字架もまた水仙も  
アカペラの聖歌充ちくる淑気かな

年末かなり忙しく、やっと落ち着いて先日の「松本馨さんの追悼記念講演会」のまとめを読みました。いろいろな問題が含まれたこのまとめに踏まえて、「小さき声」の読書会も今後実り多きものになっていくことを願っております。

「自由学園」の木造校舎・・いまや珍しいですね。この創立者である羽仁もと子さんは高校の先輩で第一回の卒業生と聞いております。ここでも戦時中、市川校長がリベラルな女子教育を続けた伝統があったのですが、今は残念ながら東京都の最初の中高一貫校として扶桑社の「歴史教科書」を、そして今年「公民教科書」が採用されるという状況になっています。この教科書の国家主義的偏向を多くの卒業生が憂慮しているのですが・・。

しゅうさん

ご実家が伊勢原市というのにびっくり。毎年伊勢原連句会が、洞昌院というお寺で、僧都心敬を記念しての連句会を催して毎年出かけてます。阿夫利神社にも正式俳諧で行きましたっけ。大山にはまだなのですが。

**小さき声 No.21 を読んで** 投稿者：旅人 投稿日：2006年 1月 5日(木)19時16分17秒

[返信・引用](#)

1. 「三つの手紙 (三) 所内伝道を志す友へ」について  
ここでは松本さんは、伝道とは神の国のための戦いであり、「ベッドで動くこともできない病人も、明日死ぬ病人も、天の万軍をひきいて地上に降り給うキリストを迎える日までは、一時として戦いを休むことはできません。」と言われてます。壮烈な戦士としての松本さんの姿を見るようです。また、「療養所の伝道」を特殊なものと考えないことは、卓見であると思います。

2. 「第七章」について  
ここでは、ロマ書の七章でも、特に七節以下の、新共同訳聖書では「内在する罪の問題」の部分に関する松本さんの「実験」が語られているものと解しました。松本さんは、特にご自分の「怒り」やすい性格に苦しまれ、そこに「罪」を感じられたんですね。ロマ書第七章では、「むさぼり」が例として挙げられていますが、人によって自分の罪として強く感じるものは異なるのだと思います。松本さんの場合、特に落葉掻きの時に、自分たちを見て逃げ出した農夫に対する怒りが松本さんにとって赦せないほどのものを感じられたからでしょうか、それは、すでに「コリントの信徒への手紙一の第十三章」や「コリントの信徒への手紙二の第十二章」その他のパウロ書簡を良く読んで親しんでいたからではないでしょうか。「怒り」そのものを禁じた律法は旧約聖書にはないように思います。ちなみに、パウロが例示した「むさぼるな」という規定は、「箴言」の第二十三章にあるだけであり、パウロの言う律法自体は、旧約聖書の律法というよりは、かなり一般的な道徳律のように思いますがいかがでしょうか。

**律法について** 投稿者：田中裕 投稿日：2006年 1月 8日(日)21時08分4秒

[返信・引用](#) [編集済](#)

旅人さん：

>「怒り」そのものを禁じた律法は旧約聖書にはないように思います。ちなみに、パウロが例示した「むさぼるな」という規定は、「箴言」の第二十三章にあるだけであり、パウロの言う律法自体は、旧約聖書の律法というよりは、かなり一般的な道徳律のように思いますがいかがでしょうか。

旧約聖書の神の姿は「聖なる怒り」を本質的な特徴として持ちますから、「怒り」そのものを禁止する律法は、旧約にはたしかにないですね。もっとも、肯定的な「怒り」は「義憤」と訳すべきかも知れませんが。

同時に、神ならざる人間の「怒り」を「嫉妬」と同じく人間性に内在する根源悪と見なす思想も、旧約聖書の中に既に存在します。たとえば、創世記4-5のカインの怒り、創世記27-41のエサウの怒りのように、嫉妬から殺人へと発展しかねない怒りは原罪によるものと解釈できるでしょう。松本さんが、「怒り」に駆られた御自身を罪深いものと思われたのも、そのような激情を自己の内に感じられたからではないでしょうか。

貪りについては、モーゼの十戒の最後（出エジプト記20-17）は「貪りを戒めたもの」と理解できないでしょうか。（箴言ではそれを、個人の内面的な道徳へと展開させているともとれるでしょう）

福音書の記者達やパウロが律法によって何を意味していたかというのは大きな問題ですが、律法に当たるヘブライ語トーラーはギリシャ語のノモスや英語のLAWよりも意味が広い。「主の教え」（詩編第一）という根本的な意味から、モーゼの十戒のような、「ユダヤ教の根本的な戒め」を指す場合もあるし、レビ記に定められているような「煩瑣な宗教的禁忌」まで、広狭様々な意味で使われます。

新約聖書で、たとえば「キリストの律法」（1コリ9-21）という言葉が出てきますが、これは「キリストの教え」という意味でしょう。それはユダヤ教の律法（トーラー）の根源にまで遡ってそれを刷新しました。その教えは「霊」によるものであり、「文字は殺すが、霊は活かす」と言われ、キリストの教えは、律法を破棄するのではなく完成させるとも言われました。

異邦人の使徒でもあったパウロが、キリストの教えについて語る場合、異邦人がそれまでに従ってきた宗教や倫理道徳は、ユダヤ人の律法と同じく「古き教え」となります。ロマ書の課題の一つは、ユダヤ人と異邦人の双方に対して、そういう「古き教え」から「新しき教え」への転換を促すことにあったといえるでしょう。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**市民学会のシンポジウム** 投稿者：[田中 裕](#) 投稿日：2006年 1月 8日(日)22時06分19秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

2006年1月21日（土） 13：00～17：00に東村山市の多磨全生園公会堂（東京都東村山市）にて、[ハンセン病市民学会シンポジウム](#)が開かれます。このシンポジウムに「図書館友の会」も協力するというので、昨日、午後一時より、自治会の集会所で開かれた準備委員会に、私も「友の会」の他のメンバーの方々と共に参加しました。国本さんがこの準備委員会の中心で、他に森元さんや、川邊さんなど退所者の方々、様々なボランティアの活動をなさっている方もいらしていました。

シンポジウムのテーマは台湾楽生院と小鹿島更生園の裁判の判決とその後の経過を受けて、旧植民地・占領地でのハンセン病政策の問題点を問うものです。

私は、昨年10月にブログで、[小鹿島裁判の不当なる判決](#)という記事を書きましたが、21日のシンポジウムで、旧植民地の療養所の歴史に関する認識が深められることを希望しています。この問題については、「朝鮮ハンセン病史－日本植民地化の小鹿島」（滝尾英二著 未来社、2001）に詳細な歴史的記述がありますが、それを読むと、小鹿島の療養所が、全く日本の国立療養所と同じ思想に基づいて運営されていたこと、日本国内と同じ問題点を抱えていたことが解ります。異民族支配の政策の一環として行われただけに、日本以上にその内的な矛盾が甚だしかったと言えるでしょう。

WEBでは、[小鹿島の半世紀](#)という「韓国のハンセン病啓発刊行誌「セピッ」（新しい光・vision）《1979年廃刊》の1971年1月号から掲載された記事」を読むことができます。これは小鹿島の療養者だった沈田黄氏の書かれたもので、日本語訳は山口進一郎氏によります。なお、山口さんは、21日のシンポジウムに出席されるとのこと、メールにて連絡をいただきました。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**Re:律法について** 投稿者：[旅人](#) 投稿日：2006年 1月 9日(月)09時11分43秒

[返信](#)・[引用](#)

丁寧なご解説ありがとうございました。

「怒り」については、どういうものがまたはどこまでが「義憤」として赦されるのかは判断

が難しいように思います。

人権侵害問題に取り組む場合の原動力は、一般的には、「怒り」であるように思います。不正に対する「怒り」というのは、一般的に共感されやすいとも思います。では、松本さんは、何をエネルギーとして自治会活動に携われたのか、この点についてこれから学んで行きたいと思います。

実は、今朝妻が、「こんな本があったよ」と言って、松本馨著「十字架のもとに」(キリスト教図書出版社)を出してきました。その中に、「神の怒り」という章があります。そこには次のよう書かれています。

quote:

「この病は死に至らず」を読んだ読者から、本書に書かれている神の怒りがわからないという感想を頂いた。妻の死と失明を前に神の怒りに震撼した私の告白が理解できないということなのである。怒りの神は旧約の神であり、新約の神は愛の神ということであろうか。私は旧約の神も新約の神も同一であり、本質において変わっているとは思わない。…(中略)…。

…新約の神が私を裁く怒りの神だと、それまで一度も考えたことはなかったし、思ったこともない。それ故に私は最後まで、つまり、回心の瞬間まで私を裁く怒りの神を拒否し続けた。…回心によって私を裁く神が同時に赦しの神であることを十字架のイエスによって知らされた。回心は私にとって生けるキリストとの出会いであった。より具体的に言えば、ローマ人への手紙三章21節以下がそれまで難しいパウロ神学の教義として読んでいたのに、突如として生ける神の言キリストが私に語りかけてきたのである。そのときの驚きは言葉に言い尽せない。天地がひっくり返ったほどの驚きであった。

…こうした怒りの神を知らず、罪に泣くこともなく、神の愛に幸せな人生を送っている者は幸いなのかも知れないが、人はそれぞれの個性があり、信仰的体質がある。それ故に画一的に考えることは信仰的でない。最後のところ、人はその人なりの生き方の中で神を知り、福音にとらえられていくのであろう。

unquote.

なかなか味わいのある言葉だと思いました。私(たち)は、松本さんの著作から何をどう学ぶべきか、常に反省する必要があるように思います。そして、松本さんを読む場合、政治と、「人間の根源に横たわる罪」との関連付けに注意するべきだと思っています。

「怒り」と「義憤」 投稿者：田中裕 投稿日：2006年 1月 9日(月)17時44分17秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

旅人さん：

「怒り」については、どういうものがまたどこまでが「義憤」として赦されるのかは判断が難しいように思います。

その「怒り」が、受動的な人間的情念ではなく、神の義が何であるかを知り、それを求める能動的な意志と結合した熱意である限り、聖書はそれを「聖なる怒り＝義憤」として肯定しています。

ヨハネ福音書はイエスの「宮きよめ」の出来事を伝えるときに、「弟子達はくあなたの家を思う熱意は私を喰いつくす」と書き記されているのを思い出した」と詩編69-10を引用しています。(ヨハネ2-17)

この「熱意」という言葉は、ヘブライ語の quin'ah ギリシャ語の ζηλος の翻訳です。どちらも、人間の持つ強い情意を表現しますが、意味が広く、文脈に応じて訳し分ける必要があります。

出エジプト記の「あなたの神は妬む神である」というよく知られた翻訳は、やはり間違いなのであって、ここで訳されている「妬み」の原語も、「熱意」という言葉に由来し、神と人との間の強固な結びつきを表現する言葉です。「妬む」という人間的な(肉的な)情念を神に投影したものであるかぎり、不適切な翻訳というべきでしょう。神が嫉妬を感じるような対象は何処にも存在しないのですから。

> 人権侵害問題に取り組む場合の原動力は、一般的には、「怒り」であるように思います。不正に対する「怒り」というのは、一般的に共感されやすいとも思います。では、松本さんは、何をエネルギーとして自治会活動に携われたのか、この点についてこれから学んで行きたいと思います。

「小さき声」の復刻版、いまのところはまだ自治会再建以前の時期に書かれたものですが、しばらくすると自治会活動や人権運動に深く関わっていた時期の記事が出てきます。その場合、松本さんが「多磨」誌に寄稿された評論をも同時に復刻していくつもりです。

松本馨さんの「十字架のもとに」からの引用、有り難うございました。これは、「小さき声」の1980年9月号からの抜粋です。今、復刻しているのが、1964年度ですから、まだまだ先になります。松本さんは、御自身にとって旧約の神も新約の神も同一の神であって、「愛の神」が「怒りの神」を体験することと不可分であったということを様々な文脈で回想されています。「十字架のもとに」もこれから、適宜引用していきたいと思っています。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**公現の主日に** 投稿者: [田中 裕](#) 投稿日: 2006年 1月 9日(月)18時23分40秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

昨日は、愛徳会の新年ミサに出席しました。カトリック教会では、新年のミサは普通は「公現の主日」といいます。私は、以前ブログで、「[「キリストは今何処におられますか」](#)というエッセイの中で、1456年の公現の主日にニコラス・クザーヌスが行った説教を引用したこともあって、550年前の彼の説教の言葉を、改めて思いだしました。公現の主日を単に祝うだけではなく、イスラエルの王の所在を問う東方の博士達の間を、歴史的な事実の単なる報告ではなく、いつでも何処でもキリスト者に対して問われる、「キリストは今、何処におられますか」という実存的な問に変えて、クザーヌスは、「道であり真理であり命である」キリストを証言していました。

昨年のクリスマスには、愛徳会のBさんから拙宅に電話を頂き、クリスマスパーティに招待されました。パーティには秋津教会のかたも多く来られ、楽しい交わりの時を過ごさせて頂きました。この教会に来るようになってから一年半になりますが、これからも、戦前と戦後のもっとも困難な時代に信徒の方々の書かれたものを蒐集・編集して散逸ないように保存しておきたいと思っています。

昨日の新年礼拝では、ミサの終わりの故人への祈りのなかで、昭和17年の1月13日になくなられた東條文子さんのお名前が、「今週の永眠者」の一人として読み上げられました。ご本名で呼ばれたので、直ぐには気づきませんでした。後になってから確認した次第です。帰宅してから、愛徳会からガリ版刷りで出された冊子「いづみ」に掲載された渡辺立子さんのエッセイや、東條耿一の遺稿（書簡）などを改めて読みました。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2Ffeigenwille%2F>

**Re: 「怒り」と「義憤」 及び「むさぼり」** 投稿者: [旅人](#) 投稿日: 2006年 1月 9日(月)21時01

[返信](#)・[引用](#)

分16秒

先生が引き合いに出されている「宮きよめ」は、それを行った主体がイエス様なので、そのこと自体には反論の余地はありません。問題は、人を主体とした場合です。これは、人間の立場で、「義戦」とか「聖戦」というものが本当にあり得るのであるかということに繋がるように思います。

第十戒が「むさぼり」を戒めたものというのは、部分的には当たっていると思いますが、両者は、同心円ではないように思います。当たっていると思われるのは、何とんでもダビデ王によるバテ・シェバ事件だと思います。しかし、ダビデが欲したのは、隣人の妻だけではなく、隣人を含めた隣りに含まれるのは、イスラエルの同胞とせいぜい在留異国人であって、敵は含まれていないと思います。そして、旧約聖書では、敵の捕虜である女性を妻にすることが許される場合もあったと思います。「むさぼり」は、どちらかと言うと、偶像崇拜を禁じる規定とか、安息日遵守の規定と関係が深いように思います。

しかし、上述の意見は、本題である「小さき声」からかなり外れてしまったように思います。

**蠟梅に寄せて** 投稿者: [田中 裕](#) 投稿日: 2006年 1月10日(火)19時34分52秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

この掲示板のタイトルの下の画像を、ガラクタ箱さんの撮影された緑化部の建物（昨年、管理室によって残念ながら取り壊されました）の側の蠟梅の写真に変えました。

汝<sup>(な)</sup>がもとに永遠<sup>(とわ)</sup>に咲くなり雪の花

>旅人さん

「まず神の國とその義を求めよ」というのが福音書の根本的なメッセージですが、「義」を求めることは、決して暴力や戦争の正当化には繋がらない。内村鑑三の非戦論の現代的な意味もそこにありますし、西欧のキリスト教会の主流が、聖戦論を肯定し、戦争そのものを否定せず、福音の非暴力・不服従の教えを無視してきたことを批判すべきでしょう。

1月21日に全生園で開催されるハンセン病市民学会のシンポジウムについて書きましたが、先日、その準備会が開かれ、「友の会」の皆様と共に私も出席しました。準備のための時間は限られていますが、市民学会のメンバーの一人として、このシンポジウムのポスターを作成しました。

[http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fmembers2.jcom.home.ne.jp%2Fyutaka\\_tanaka%2Fsymposium2006\\_1\\_21.pdf](http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fmembers2.jcom.home.ne.jp%2Fyutaka_tanaka%2Fsymposium2006_1_21.pdf)  
をご覧ください。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**お早うございます。** 投稿者：[旅人](#) 投稿日：2006年 1月11日(水)08時19分56秒

[返信](#)・[引用](#)

田中先生の、「『義』を求めることは、決して暴力や戦争の正当化には繋がらない。」というお考えには全く同感です。たとえ無力でも批判は続けるべきなのでしょうね。

蠟梅や光を当てる人いずこ

**Re: お早うございます。** 投稿者：[狼狽](#) 投稿日：2006年 1月11日(水)08時59分1秒

[返信](#)・[引用](#)

> たとえ無力でも批判は続けるべきなのでしょうね。

>

> 蠟梅や光を当てる人いずこ

わはははは。御意。

**狼狽さんへ** 投稿者：[旅人](#) 投稿日：2006年 1月11日(水)17時20分40秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

初笑ひわけがわからず出る吐息

しかし、「小さき声」の掲示板上の読書会では、色々なご意見を伺いたいものですね。

**(無題)** 投稿者：[田中 裕](#) 投稿日：2006年 1月13日(金)23時06分18秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

多磨誌2005年5月号－9月号に連載された大谷藤郎先生と平沢保治さんの対談が「柵の垣を越えた大谷藤郎先生と全生園自治会と・・・」というタイトルを付して小冊子になりました。本日、大谷先生から送って頂き、興味深く拝読しました。松本馨さんの「小さき声」のことも触れられています。

また、市民学会の年報で知った和泉眞藏先生の「医者 of 僕にハンセン病が教えてくれたこと」(CBR 2005年11月25日刊行)も書店から届きました。こちらも小冊子ですが、内容は充実しています。とくに第5章 ハンセン病の疫学的研究－流行地でのフィールドワーク 第6章 国家賠償請求訴訟－専門医たちの闘い 第7章 専門医の犯した過ちを検証する には、大いに啓発されました。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**「小さき声」第22号** 投稿者：[田中 裕](#) 投稿日：2006年 1月14日(土)11時51分58秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

「小さき声」第22号を復刻しました。

この号は「さすらい」がテーマ。神無き場所をさまよいつつ恵みを見出せない嘆きの詩編56－8の引用からはじまっています。旧約の詩人のいる場所が外国か自国内か分からないが、「たとえエルサレムの中心に住んでいても、神から切り離されるとき、そこが「外国」となり、魂が彷徨する砂漠となり荒野となる」と松本さんは言っています。

そして、「この病は死に至らず 22」では、御自身の「さすらい」について、とくに教会から敢えて離れて、無教会の信仰に徹していった時期の回想へと続きます。「信仰による決断」という、松本さんの以後の行動の鍵となる言葉が、はじめて登場するものこの号からです。

全生園のハンセン病図書館のコピー製本版には、22号に付属していた「来信」の部分が欠落していましたので、今井館に保管されていた原本から補足しました。これは、台南の皮膚科診療所の看護婦のAさんからの手紙です。

この手紙を読みますと、当時の台南のハンセン病医療の状況の一端を窺い知ることができます。台南では、外来診療を認めていた点は日本よりも進んでいたけれども、貧困のゆえに、患者の生活条件がいかに厳しいものであったかが分かります。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

(無題) 投稿者: 狼狽 投稿日: 2006年 1月15日(日)11時31分22秒

[返信・引用](#)

晴耕雨読

1. 不適切と思われる書き込みは削除します。 2. この掲示板から他の掲示板への無断コピーは禁止します。

Reload

エラーです。

D601: このホストアドレス [221x114x248x74. ap221. ftth. ucom. ne. jp (221. 114. 248. 74)] からの投稿は管理者によって制限されています。

内村を語りながら、内村の精神から最も遠い。

死んだ人間は気の毒だ。自らが批判してやまない輩に持ち上げられる。

「小さき声」第22号について 投稿者: 旅人 投稿日: 2006年 1月15日(日)12時45分0秒

[返信・引用](#)

「信仰による決断」という文章は、未だ良く分かりません。私は、松本さんが、教会に通っている時に周囲の人たちから受けた愛に感謝しつつも、自分の心が教会から離れてしまった苦悩を、関根先生に手紙で話したところ、先生からは、「信仰による決断」を求められたのであろうと想像しています。そして、その時の思いを、松本さんは語られているように思います。関根先生が「信仰による決断」を求めたことは、教会に残るにしろ去るにしろ、神に祈り、自分で主体的に決断せよということであったと思います。主体的に決断することは苦しいことであるけれども、自由意志を尊重する以上、これは不可避なのだと思えます。

松本さんは、ご自分を特赦を受けた死刑囚になぞらえていらっしゃいます。諦観としての信仰が誤りであることを知り、十字架を仰ぎ見ることで、新たな命を与えられた喜びに浸っている時に、自分の「信仰による決断」など、なぜする必要があるのかと思われたのでしょうか。

しかし、「あなたは、私を死の塵に伏させられる」では、「聖言を絶たれることを恐れる自己」を十字架に付けることができなかつたと書かれています。この思いは、関根先生から「信仰による決断」を求められて行った一連の内省の最後のものではなかつたのでしょうか。

私に分らないのは、松本さんは教会の友人たちに対する愛をどのように総括したかです。松本さんは、教会からの非難しか頭になかつたように思えます。その点について、それで良いのだろうか、教会に残る積極的な意味についての考慮が欠けていたのではなかつたかと思いません。

信仰による決断 投稿者: 田中 裕 投稿日: 2006年 1月15日(日)22時54分47秒

[返信・引用](#) [編集済](#)

旅人さん、「小さき声」22号にたいするコメント有り難うございました。

なぜ、既成教会を離脱しなければならなかつたか、その問題と、関根正雄先生から示唆された「信仰による決断」ということがどのようにかわるのかについては、松本さんは、10年ほど経過して、自治会活動に深く関わるようになってからも、何度も何度も「小さき声」のなかでとり上げています。つまり、「信仰による決断」によって既成の教会を離れたことの意味は、御自身にとってもすぐに理解されたわけではないのです。それは、様々な二律背反、ジレンマの中での苦しみに満ちた選択で、決断した当人にも、はたしてそれが「信仰による決断」であつたのかどうか、決して明瞭ではなかつたようです。けれども、そのときの決断の苦しみは決して無駄なものであつたのではなく、あとになってから、自分が失ったキリスト者との交わりを、主が何倍にもして返して下さつたのだ、と述べています。後になってからですが、松本さんは既成の教会を離れたことに、摂理的なものを感じられたようです。なぜならば、既成教会のメンバーとなつて、教会という聖域のなかで安心を獲得し、世俗の生活と教会生活の二つを使い分けるのではなく、自治会活動という100%世俗の中で生き抜くことが、そのまま福音を生きることであるということこそが、松本さんが関根正雄から学んだ教えだつたからです。

「信仰による決断」は、自由意志を前提します。自己に代わって誰かが決断するということではありません。ただし、多くの場合、なにが最善であるかは私達には見通せないし、対立する選択肢のどちらにも犠牲が伴うことがある。そういう場合、決断をせずに、だれか別のものに、あるいは、外的な権威に決断を委ねたくなるのが人情でしょう。教会では霊的な指導者に決断を委ねることが行われる。そういう信仰は、意志よりも感情に訴える部分が多く、困難な選択を回避しているように松本さんには見えた。関根正雄の教えは、信仰は、なによりも意志の問題であり、信仰により自己が決断することであるということでした。松本さんにとって、信仰は教会のなかで「習慣」として固定された典礼のなかで安心するのではなく、困難な二律背反的な状況の中で、十字架の前に死ぬことによって、そのつど恵みとして与えられるものであつたということでしょう。

ただし、旅人さんが前に引用された「十字架のもとに」のなかで松本さんが言われたことですが、松本さんが歩まれた道は、あくまでも「主」が松本さん御自身に示されたものであって、すべての人が松本さんと同じように決断すべきだとは、彼は決して言っていません。松本さんに聖書の言葉を教えられたかたが、無教会主義を捨てて既成教会に入ることについては、松本さんは、それがそのひとの「信仰による決断」ならば、決して反対していません。

追記（1月17日）

松本さんが秋津教会の教会籍を離脱した後の秋津教会の信徒の方との交流がどうなったのか、「小さき声」の第263号（1984年12月号）に次のような記事がありました。

「1951年より始まった小松（松本さんのこと）の聖書暗記は、秋津教会を退会したことから一時中断したが、教会の長老、小野宏、泉信夫、それに隣室の立川正一の協力を得て再び始められた。1960年までに共観福音書とヨハネによる福音書、使徒行伝、パウロ書簡、旧約聖書では詩編全編とヨブ記全章を暗記した」

これをみますと、秋津教会の籍を離れたとはいえ、秋津教会の長老をはじめ信徒の方が、教会に籍があるかないかにはこだわらずに、松本さんが聖書を暗記するのを手助けされた事が分かります。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**(無題)** 投稿者：田中裕 投稿日：2006年 1月17日(火)23時13分30秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

「[小さき声](#)」第23号を復刻しました。現在、校正作業中です。なにか気がついたことがありましたら教えてください。

ところで、先日紹介しました和泉真蔵先生の「医者への僕にハンセン病がおしえてくれたこと」は、読めば読むほど様々なことを教えられます。

たとえば、その第5章、ハンセン病の疫学的研究 には、インドネシアでのフィールドワークのことが言及されています。そこで言及されている和泉さんの学術論文「世界的濃厚流行地インドネシア北マルク県におけるハンセン病の現状」「ハンセン病濃厚流行地における生活用水からのらい菌遺伝子の検出」の二編が、日本ハンセン病医学会の学会誌1998年3月号にありました。ハンセン病がどのようにして感染するのかについては現在でも良く分かっていないようですが、和泉さんは、「ハンセン病の感染源は主として患者である」という通説に挑戦していました。非常に興味深いフィールドワークです。

ハンセン病医学の専門誌とはいえ、そのなかには、「ハンセン病という「病いの経験」」（蘭由岐子 九州女子大学）のような、「医療人間学」の論文も収録されています。A. クラインマンというひとの『病いの語り』1996という文献を参照していましたが、その内容にも興味を惹かれます。

とはいえ、私の職場では、これから2月末までは、期末試験、卒論審査、修論審査、入学試験と、まるで歳末のような修羅場を迎えますので、なかなかゆっくりとこういう文献を読む暇がありません。3月になりましたら、またあらためて、こういう基本的な文献にも眼を通してみたいと思っています。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**回心の記** 投稿者：田中裕 投稿日：2006年 1月19日(木)22時40分19秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

「小さき声」第24号を第23号に引き続き復刻しました。

第24号で、創刊号からの連載「この病いは死に至らず」が、ひとまず終了します。松本さん御自身が「回心の記」と呼んだこの連載は、次の言葉で結ばれています。

「最後に、私が少年の頃罹った病気について、らいに罹って死の前に立たされたとき、心の奥底から発した言葉「私は何の為に生まれて来たのか」の間に答えねばなりません。いままで書いて来た中に、すでに答えは出ていると思いますが、この章を閉ずるにあたり、一言述べさせていただきます。それは私自身が答えるのではなく、今日まで私を生かし、今も生かし、後を生かして下さるであろう、私たちの主イエス・キリストに答えて頂きます。

「この病気は死ぬほどのものでない。それは神の栄光のため、また、神の子がそれによって栄光を受けるためのものである」（ヨハネ11・4）。

私には社会的地位も、名誉も、目的もありません。私の心の病氣、私は何の為に生まれてきたのかは「神はこれらの石ころからアブラハムの子らをおこすことができる」の石になることでした。石をおこすのも、おこさないのも神です。おこすのは神の義、神のみ栄えのためであり、おこさないのも神の義、神のみ栄えのためです。私は石であることに絶望しません。主イエス・キリストご自身が、世に捨てられた隅の親石であるからです。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**何回も湧き上がる疑問** 投稿者： [旅人](#) 投稿日：2006年 1月22日(日)21時28分44秒

[返信](#)・[引用](#)

田中先生は、ご多忙中でしょうか、今すぐ先生のお考えを伺いたいとは申しません。この問題は、自分で考えてゆくべき問題だと思っています。

その問題というのは、松本馨さんがされたと言われている二つのことの関連性に関わることだと言えらると思います。

松本さんは、第二の回心をされたということですが、それは、田中先生のご説明によれば、相対的な信仰を捨て、絶対的な信仰を得るということであったと思います。そして、松本さんが教会を去るに当っては、信仰による決断をされたということだったと思います。

だから、理想的には、どのような信仰的決断を行うについても、絶対的な信仰に基づく決断がされていなければならないわけだと思えます。言葉を換えれば、能動的信仰の根源にあるものを知り、それに促される形での決断こそが、関根先生の言う信仰的決断ではなからうかと思うのです。そのような決断が果して、為され得るのでしょうか。松本さんは、自分の大切なものを一つ一つ十字架につけて行くという形で信仰的決断をされたわけであり、それはそれとして非常に頭が下がるものなのですが、その決断は、松本さんの第二の回心以前の相対的信仰による判断の域を出ていないように感じられるのです。もしかしたら、絶対的信仰に基づく決断など、人間にはできないことであり、人間にできるのは、あくまで相対的信仰に基づく決断であり、その結果責任を自分の身に引き受けることだけではなからうかと思うのです。これは、衝動的な決断をしてきた私には、理解困難な問題です。

**可謬的な存在** 投稿者： [田中裕](#) 投稿日：2006年 1月22日(日)23時31分56秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

旅人さん：

>松本さんは、第二の回心をされたということですが、それは、田中先生のご説明によれば、相対的な信仰を捨て、絶対的な信仰を得るということであったと思います。

「相対的な信仰を捨てて、絶対的な信仰を得る」などといういい方は、どうも感心しませんね。そういう風に受け取られたのは、多分、私の説明が稚拙なものだったからだと反省しています。私が言いたかったことは、単に、信仰そのものが「恵み」であるという端的な事実に過ぎないのですから。十字架のイエスの信仰というのは、人間的な努力や習慣によって獲得されるものではないということ、自分が信仰だと思っていたものは、無信仰であったと身に沁みて分かることだ、ということでした。

私は、「無教会」の「無」を「相対的な無」ではなく、いつも「絶対的な無」という意味に理解しています。「無教会」という名前の教会が有るわけではありません。そういう「対立的な無」の意味では使わずに、教会の壁の内側と外側という二元的対立を越えるという意味で「無教会」といいます。

「絶対」という言葉を「有的」につかうこと、言い換えれば、世界の中にある「有」を絶対化する意味で使うことは偶像崇拜であると思っています。絶対は常に絶対の無でなければなりません。信仰であれ、正義であれ、我々が「絶対的信仰」や「絶対的正義」を有つということは馬鹿げています。

松本さんは光田健輔の「絶対隔離」の思想を徹底的に糾弾しました。可謬的な人間がそのような政策を医療政策の根本に据えたことによって、取り返しのつかぬ過ちを犯したということこそ、ハンセン病医療の歴史の示したところでしょう。そういう松本さんが、「自分の信仰」を、絶対的信仰ということなどあり得ないでしょう。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**小さき声** 投稿者： [田中裕](#) 投稿日：2006年 1月22日(日)23時46分29秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

の復刻の順序について。第一期（福音伝道の始まり）の最初の24号が終わりましたが、これは松本さんが自治会活動に深く関わるようになる以前の時期に属します。その次は、松本さんが倶会一処を出版され、ハンセン病図書館を創設される時期を中心にして、復刻を進めたいと思っています。そのあとで、松本さんが、自治会長を辞任されたあとで、「小さき声」を再刊

された時期（第二シリーズの35号）を復刻する予定です。この第二シリーズは、ハンセン病図書館には収蔵されていないので、今井館の原本を底本とします。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

(無題) 投稿者: [田中 裕](#) 投稿日: 2006年 1月24日(火)22時21分26秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

「信仰による決断」によって、松本さんは、一度は閉鎖された全生園の自治会の再建に関わるようになり、ついに自治会長に選出されます。これから復刻する号は、松本さんが自治会長の時に出版された園史「俱会一処」（患者が綴る全生園の70年 多磨全生園患者自治会編 一光社 1979）と深い関係があります。

[小さき声 200号](#)と[小さき声 201号](#)を復刻しました。

復刻の順序は、以後、松本さんが自治会長を辞めるとき（第276号）まで続け、その後は、第二シリーズの再刊第1号から、終刊号までを復刻します。第24号から199号までは、その後に復刻することになりますが、内容的に興味深いものについては、「テーマ別」に編集して、別途に掲載する予定です。

>旅人さんへ

第201号では、キリスト教に於ける「絶対」の理解について、松本さん御自身の考えが書かれているのでご覧ください。

200号を口述筆記しているとき、松本さんは内村鑑三の「聖書の研究」を、無教会の千代田集会のかたが録音したテープで聴いていました。文中に内村についての言及があるのはそのためです。また、「小さき声」も無教会の少なからぬ信徒の方に読まれており、内村に関する松本さんの記憶違いを読者の方から訂正されたとの記述も、第201号にあります。

「愛による絶対隔離」という項目は、松本さんの光田イズム批判です。201号に書かれているエピソードは、物語形式になっていますが、「俱会一処」の32-34頁に記載されている史実に基づいています。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

(無題) 投稿者: [狼狽](#) 投稿日: 2006年 1月26日(木)11時45分56秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

5年がかりで、地道に「復刻」とっていたのに、地味なところは飛ばして、

>内容的に興味深いものについては、「テーマ別」に編集して、別途に掲載する予定です。

こういうことか。

**200号と201号を読ませていただきました。** 投稿者: [旅人](#) 投稿日: 2006年 1月26日(木)

[返信](#)・[引用](#)

17時28分18秒

「小さき声」の200号には、「信仰による自由とは、この世の如何なる仕事に関わっても、亦関わらなくてもよい。それは信仰によって決断することである。何故なら、イエス御自身が十字架の死によって、神なきところ世俗のただ中に立って居給うからである。」という文がありますが、これは私には理解しにくい考えですね。松本さんは、当初はご自分の信仰の立場から、自治会活動に参加することに否定的であったのでしょうか。それが、後に信仰を恵みとして受けることができ、同時に信仰は個人の決断を拘束するものではないと気づいて、自治会活動に携われたのだと思います。そのことに限定すれば、松本さんが言われていることは、正しいと思うのですが、この考えを普遍的な真理と考えることはできないように思います。ただ、このような事にあまりこだわっていると、松本さんの真価を見失う危険があるように思います。そこで私としては、救いの条件としては信仰があるだけで、行為は救いの条件とはならないのだと言われているものと解釈しておきたいと思います。

第201号では、「聖書は何処の節をとっても、そこに十字架を見るまで祈り極めることが必要である。」という文に、松本さんの聖書を読むときの気迫を感じました。見習うべきだとは思いますが、私にはなかなか難しいですね。

それではまた。

**信仰による自由** 投稿者： [田中 裕](#) 投稿日：2006年 1月29日(日)15時10分43秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

>旅人さん

200号と201号に感想をお寄せ下さり有り難うございました。

「小さき声」は口述筆記なので、省略的な文も多く、時に文意を把握しがたいこともあります。こういう場合、私は、松本さんの文章に触発されながら、そこで論じられていることについて、私ならばどう考えるのか、と自問自答するようにしています。

200号では「信仰による自由」という言葉がキーワードでした。「自由を与える信仰」がテーマになっている。信仰とは、世俗の直中であって、世俗に拘束されない自由を与えるものでなければならない。私は、「信仰」と「信念」とを区別しています。「信念」は自己を主張しますが、「信仰」は自己を越えるものに常に関わっている。「信念の人」は自信に満ちあふれ、時に、他者の意見に耳を傾けず、自己を絶対化するけれども、信仰の人は、常に自己と世界を相対化します。強い信念を持つことは、時に大きな弊害をもたらすことがある。その信念は、それを抱く人を呪縛し、客観的には虚偽であることが証明されていても、それを受け付けません。信念の人は、他者に自分の信念を強要しがちであるが、信仰の人は、他者の自由を尊重する。

不十分ない方ですが、「信仰による自由」とか「信仰による決断」という場合、そこでは、信念とは異なる信仰が問題なのだと思います。

=====「小さき声」の復刻の仕方について=====

「[小さき声](#)」は、第一シリーズが276号、第二シリーズが35号あり、一号が400字詰め原稿用紙に換算して25-30枚程度です。したがって、完全復刻すると、全部で8000枚くらいになるでしょう。

一号ずつ丁寧に校正しながら、一週間に1号くらいのペースで復刻していますから、5年では完成せず、場合によっては10年くらいかかるかも知れません。それくらいかかっても良いと思うくらいの気持ちですね。その気持ちは今も全く変わりません。

時系列にそった編集は、24号から200号に飛びましたが、これはその中間の号を復刻しないということではありません。最終的には完全復刻を目指していますので。

時系列による復刻を補う形で、主題別の復刻もWEB上から閲覧できるようにしたいと思っています。松本さん御自身が、小さき声の構成について、明確なテーマを持って連載しています。たとえば、「この病は死に至らず」（回心記）は24号に亘る連載です。これ以外にも、様々なテーマを立てて連載されているので、それらを項目別に纏めて編集することが必要です。時系列による復刻と、項目別の復刻は、二者択一ではなく、相補的なものと考えています。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2Ffeigenwille%2F>

**「信仰」と「信念」の区別について** 投稿者： [旅人](#) 投稿日：2006年 1月29日(日)17時25分22秒

[返信](#)・[引用](#)

田中先生の区別は、非常に参考になりました。ありがとうございます。

特に、『「信仰」は自己を越えるものに常に関わっている。』というご意見には、全く賛成です。私も往々にして、信念の人になりがちですので、そのような状態に気づかれましたら、率直にご指摘ください。多少は反省することもあると思います。

今後は、松本さんの自治会活動で、「信仰」と「信念」の差がどのように現われているかということに注目して、松本さんの著作を読んできたいと思います。

しかし、10年とはまた大変な時間ですね。果して私は最後まで読めるやら、ちょっと心配になりますね。私の掲示板への「聖書之研究」の書き込みは、あと半年ぐらいで終ると思います。その後なら、「小さき声」のインプットをお手伝いする余裕ができると思いますが、何かお役に立てますでしょうか。

**(無題)** 投稿者： [田中 裕](#) 投稿日：2006年 2月 1日(水)10時30分48秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

昨日、漸く、卒業論文の審査がおわりました。これから学部と大学院の入学試験の準備、修論の審査などしばらく学務が多忙になります。「小さき声」の復刻のペースが落ちてきました。が、3月になりましたら、ペースがあがるでしょう。

> しかし、10年とはまた大変な時間ですね。果して私は最後まで読めるやら、ちょっと心配になりますね。私の掲示板への「聖書之研究」の書き込みは、あと半年ぐらいで終ると思います。その後なら、「小さき声」のインプットをお手伝いする余裕ができると思いますが、何かお役に立てますでしょうか。

「聖書の研究」の連載、内村の文章が、現代仮名遣い、当用漢字に改められているので、若い世代の人にも読みやすくなっていますね。私も、内村に対する関心が深まりました。

旅人さんには、WEBに掲載したものを、通読して校正をして頂いているので非常に助かっています。今後どうか宜しくお願いします。一人だけだと、どうしても誤植や脱字を見落とししてしまいますので。また、原本そのものが口述筆記なので、筆記者自身による誤記も相当数あります。それを丁寧に校訂していきたいので、時間がかかるのはやむを得ないでしょう。

私一人でやれば10年かかる作業でも、協力して下さる方がいれば、復刻に要する時間も短縮されます。山下道輔さんをお願いして、全生園のハンセン病図書館の展示室の松本さんの写真の前に「小さき声」の第一シリーズの原本をおかせて頂きました。復刻を手伝って下さる方は、それをもとに、電子化することができます。原本を復刻する作業を手伝って下さる方がいらっしゃれば、是非、メールでお知らせ下さい。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**深く読み込んで編集したアンソロジー** 投稿者：北風 投稿日：2006年 2月 1日(水)18時41分57秒 [返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

野上寛次さんの編著になる『内村鑑三神学・思想選』が完成した。内村の「入門書」「再入門書」として最適。しばらく読むものが出来た。何年もかけて(十代で内村を読んで無教会になり、70から再び内村に帰って10年)深く読み込んで編んだアンソロジーで、解説が「簡にして要を得て」いいですね。立川のけやき書房刊ということになっています。

**医海時報** 投稿者：田中 裕 投稿日：2006年 2月 3日(金)19時44分57秒 [返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

このところ多忙で書き込みが出来ませんでしたが、今日は、帰宅の途中に、本郷の東大医学部図書館に行きました。先日、ここでも紹介しました和泉眞藏先生の近著の中で言及されていた青木大勇の論文を閲覧するためです。書庫の奥深く眠っている古雑誌「醫海時報」を捜しあてて複写しました。

1931年は、らい予防法が改正され、絶対的な終生隔離の医療政策が日本国家の基本政策として定められた年ですが、その前年に、隔離撲滅政策に異議を唱えた少数派の医師の一人が青木大勇です。

彼の論文「癩の豫防撲滅法に関する改善意見」(一)(二)(三)とそれに対する林文雄の反論「官立癩療養所の為に弁ず」(一)(二)は、小笠原登と早田皓が後に中外日報でおこなった論争を多くの点で髣髴させるものでした。

醫海時報には、国際連盟の「癩委員会幹事ビュルネ博士の報告」の日本語訳も連載されており、林文雄の反論と合わせ読みつつ、いろいろと考えさせられました。

>北風さん

新刊情報、有り難うございました。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**1931年にも** 投稿者：北風 投稿日：2006年 2月 5日(日)11時32分11秒 [返信](#)・[引用](#)

分類 0400 IV 予防 No. 54

種別 掲載

題名 癩の予防撲滅法に関する改善意見 追報

原著者 青木 大勇

訳者

掲載誌 医海時報第1924号・第1925号

発行 昭和6年7月(1931年)

発行所 医海時報社

所蔵者 岡山大学医学部図書館

内容抄録 絶対強制隔離制はかえつていんべい者を多くするから、多数の患者を有する国では不可能且つ逆効果をもたらす。ノルウェーのらい撲滅事業も重病患者、貧困者は療養所に收容しても、その他は家庭(私宅)隔離の模範的励行によると云われていることをはじめに述べて、混合隔離制を提唱し

1. らい患者の隔離法に改善を加えよ

2. 伝染の危険のない程度のもは解放せよ
  3. 早期診断及び早期治療所を開設せよ
  4. その他
- について具体策を述べている。  
抄録執筆者 岡野

Re: 1931年にも 投稿者: 田中裕 投稿日: 2006年 2月 5日(日)15時05分55秒

[返信・引用](#)

>北風さん

らい文献目録からの抄録、有り難うございます。これは、林文雄との論争のあとで書かれたものです。この論文も先日東大医学部図書館で複写済みですので、その内容を一部、ここに転載します。

1931年当時、国際連盟を中心として癩医療の情報の交換とともに研究者の国際的な協力が呼びかけられていた時期でした。青木大勇の「改善意見」は、日本がまさに採用しようとしていた隔離撲滅政策を、国際的な医学界の趨勢を踏まえた上で批判したものです。

青木大勇の「癩の予防撲滅法に関する改善意見 追報」（昭和6年7月4日）には次のような文があります。

「絶対強制隔離が人道上から観て非難の聲あることは兎も角とするも、この為隠蔽者を多からしめ、早期治療の機を誤らしむる外、前に高調したやうに、多数の癩患者を有する邦国では、言ふべくして実際に行ひ難いと云ふ事実事情の下にあることも打消すことが出来ないから、第一回の世界癩会議に於いては、隔離をもって對癩策の最上なるものと認めたにも拘らず、第二回第三回と回数を重ねるに従って、隔離を人道上の罪とするもの多く、又絶対の強制隔離を非とするものが漸次多きを加え、近く開かれた『ゼネバ』の国際連盟癩会議に於いても、癩の隔離は『餘り酷しくしないやうに』と論議せられ、又、昨冬『バンコック』に於て開かれた国際連盟主催の癩会議に於ても、『隔離は癩予防の為に必要事であるが、その唯一の法となすに足らぬ、その欠点をば他の法を以て緩和せねばならぬ、而して唯伝染の危険あるものに対してのみ行うべきである』と結論せられ、これに参会した太田博士自身も、『我邦の如きに於ては、伝染の危険あるものは隔離し、その危険少なきか又は無しと見なさるるものは、外来治療を施すといふ点に於て、その標準の樹立をきわめて嚴重にすることが出来る状態にあると思ふ』と云ふ意見を抱いて居らるることは、帰朝後、同博士が癩学会に於て報告された要旨（東京醫事新誌 2718号）に見るも明らかである」

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

青木大勇と林文雄 投稿者: 田中裕 投稿日: 2006年 2月 5日(日)17時06分23秒

[返信・引用](#) [編集済](#)

1930年、31年の醫海時報には、前日の青木大勇の論説のほかに、国際連盟の癩委員会幹事ビュルネ博士の報告「各国に於ける癩予防事業と国際協力」が連載されていました。これも基礎的文献となるでしょう。

先ほど、検証会議の最終報告書で検索してみましたが、ビュルネが1930年来日し、日本の療養所を視察し、大日本医学界で講演したことは記載されていますが、「青木大勇」の名前は全く見出されませんでした。

青木は、大正十三年の醫事公論誌上で（600号と601号）、「癩療養所を隔離一監禁本位より治療一研究本位へ」という評論を寄稿しています。医海時報の論文は、それを更に敷衍したもので、「我邦の官立の癩療養所の現況は、隔離一監禁本位であつて、一度収容せられたが最後、一生彼等は此怖れ慄くべき小天地から一歩も世間に出るを許されず、懐かしき友には愚か、慕はしき肉親の親兄弟や夫妻子女にさへ、一生所外では会ふことが出来ないといふ悲惨の境涯に置かれている」ことを指摘し、当時の療養所の政策を次の如く批判しています。

「一体、癩の予防と撲滅を期する療養所へ、仮令癩と診断されたからと云ふて、一も二もなくその伝染の危険程度と收容人員の關係とを考慮せず、唯だ浮浪者であるから病菌を散布する憂が多いと見なして入所を強いるのは、所謂素人考への譏りを免れない取り扱い方法であつて、行政官庁として甚だ好都合であらうが、伝染病としての癩の予防撲滅といふ点から科学的に考へると、全く本末輕重を誤つて居る拙劣なる手段方法であると断ぜねばならぬ。」

青木大勇の論文に対して、同じ醫海時報誌上で当時全生園に勤務していた林文雄が反論しています。林文雄の考え方については、いつか時間のあるときに再説しますが、次のような議論が含まれています。（尚、岡野さんの「林文雄の生涯 救癩使徒行伝」には、林文雄の論文「官立癩療養所のために弁ず」のことは記載されていません）

「数年前までの（全生園の）深い掘とトタン塀は姿を隠した。掘は埋められ、トタン塀は健康人の迷入を防ぐために見る目も美はしい生け垣に変へられた。我々が、その外を歩むとき、内

側を散歩している病友は「先生今晚は（ポーナンベスペロン）」と習ひ立てのエスベラント語で挨拶するであらう。しかく療養所は美しいものとなって来て居る。如何にして病院はかくも天国の如くなったか。その一原因は、

(三) (青木大勇) 先生の説とは反対に、**伝染の危険なき程度のもも解放しなかった事である。**療養所には作業がある。その健康に応じて彼等の作業は必要欠くべからざるもの二四種を越えて居る。例へば、大工がある。そして彼等の手で病棟、消毒室、何でも建設せられる。付添が居る。

彼等は重症者に日夜侍して大小便の世話から、食事の世話から親身も及ばぬ看護をする。そして千五十人の収容者中半数は相当重症でも何らか作業をし、人のため為す所あらんとして居る。これは一方彼等の疾病療法の一たり得るのである。そして、**そのなかには中枢として、印度、ハワイあたりでは、当然解放すべき軽症者が働いて居るのである。**当院の如きは作業が多くてする人が少ない。

この軽症者が重症者のために犠牲的に働くと言ふことが今の療養所をして監禁所に非ずして楽園としたのであって詳しくは「東雲のまぶた」に見ることが出来る。

全治者を退院せしめよの聲は古くから何回も叫ばれた言葉である。しかしもしこの軽症者を退院せしめる時は、この作業のために健康者を雇ひ入れねばならぬ。今日の日本、癩救済の貧弱な予算でどうしてそれを雇ひ得よう。

患者は一日三銭、多くて十銭で全力を注いで働くのである。しかも同病相憐れむ心から、癩患者自身が癩救済の第一線に働いてふ使命感からの愛の働きである。(中略)

痛みつつも猶鋤になふ作業、病友のために己を捧げて働く愛、それが療養所を潤し、實に掘りを埋め、トタン塀を除き、楽園を作らしめたのである。」

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2F2Feigenwille%2F>

**やはり善悪二元論** 投稿者：北風 投稿日：2006年 2月 7日(火)09時30分32秒

[返信・引用](#)

先日「議論」はBBSに馴染まないという話があった。  
では、BBSに何でも書いて、批判を拒否すればどうなるか。

その書いたことは、読者に認知されたものとして一人歩きする。  
特に、それが学者や評論家などの場合は、バイアスもかかる。

思えば、おいらがBBSに書き込むキッカケは、清水昶さんが、ハンセン病に関する間違った「事実」を書き散らすのを「訂正」することだった。

やはり、公開の場で何事も論じるならば、その同じ場で批判を受けることは、覚悟すべきではないでしょうかね。

それが、「自分のBBS」だというようなせこい見はもたないほうがいい。  
レンタルBBSそのものは、一つのビジネスモデルであるとしても、一方、誰でも簡単に無料でBBSが持てるという意味では、市民の共有の言論のインフラだともいえる。

で、申し上げれば↓相変わらずの、二元論ですね。  
結論が同じとしても、論証の過程が、単純に過ぎる。

自然科学の論証は与えられた条件の中で行えばすむし結論は一つかもしれないが、人文科学の論証は、条件や資料を博搜し吟味し如何に解釈するか、論証する人の人間性にまで関わるから面白い。

**無料でないものもあるか。** 投稿者：北風 投稿日：2006年 2月 7日(火)09時34分13秒

[返信・引用](#)

でも、只みたいな廉価で。

**北風氏へ** 投稿者：田中 裕 投稿日：2006年 2月 7日(火)09時42分13秒

[返信・引用](#)

私の「青木大勇」と「林文雄」にかんする2月5日の投稿のどこが善悪二元論だろうか。そこでは、私はまだ自分の考えを述べては居ない。性急な善悪の判断は留保して、読者のために考察の資料を提供しただけだ。青木大勇についても林文雄についてもまだまだ調べるべき事は多いだろう。1930年代の日本の医学界の状況がどんなものであるか、強制的な終生隔離推進者は如何なる議論を展開したか、それにたいする批判はいかなるものであったか、出来る限り当事者の言論を紹介していくのが目的である。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2F2Feigenwille%2F>

**「考察」の資料** 投稿者：北風 投稿日：2006年 2月 7日(火)09時46分33秒

[返信](#)・[引用](#)

実はこれが問題なんですね。

資料の紹介の仕方、出し方で「読者」を誘導できますから。

そういう意味では、BBSは「議論」より「資料紹介」に不向きかもしれませんね。

---

**小さき声 連絡** 投稿者：[田中 裕](#) 投稿日：2006年 2月 7日(火)11時24分47秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

[小さき声 202号](#)と[小さき声 203号](#)を復刻しました。誤植や誤記などがありましたらご連絡下さい。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

---

**校閲の方針** 投稿者：北風 投稿日：2006年 2月 7日(火)16時34分47秒

[返信](#)・[引用](#)

口述筆記である点を考えて、表記の誤りは正すのですか？  
原文に忠実にしているのですか？

はじめの数節のなかにも、

>着代えて、平然と授業を受けていたと言うことで、罪の意識を全くもっていないことであったが、これは最近のニュースで聞かれる殺人事件の特徴と言ってよい。

>大阪の銀行で起った事件も、犯人は警官2人と銀行員2人を射殺し、そのほかに、重症を負わせた銀行員の耳耳朶を、

着代え→着替え あるいは 着換え  
重症→重傷  
耳耳朶→耳朶

---

**Re: 校閲の方針** 投稿者：[田中 裕](#) 投稿日：2006年 2月 7日(火)18時16分5秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

> 口述筆記である点を考えて、表記の誤りは正すのですか？

表記の誤りであることが明白であるものは訂正するようにしています。

> 原文に忠実にしているのですか？

原文に忠実にすると、原文に含まれている表記の誤りを見過ごすので、これは直すようにしています。

「着代え」「重症」は原文の儘です。  
これは、ご指摘のように「着替え」「重傷」にかえましょう。  
「耳耳朶」は、私の方の入力ミスです。

外にもお気づきの点があればご指摘下さい。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

---

**原本の訂正箇所** 投稿者：[田中 裕](#) 投稿日：2006年 2月 7日(火)21時42分44秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

「小さき声」の原本には、口述筆記に由来する誤記があります。原文の儘にせず訂正した箇所について、以後、この掲示板で明示しておきたいと思います。（以下の訂正箇所については、旅人さんからご教示頂きました）

202号

3頁

違法伝道 → 異邦伝道  
教会からの開放 → 教会からの解放

祭祀長 → 祭司長

6 頁

有セズ且救護者ナキモノハ

↓

有セズ且救護者ナキモノハ

口述筆記者は「、」点を多用しすぎているので、次の箇所は、一部を「。」点に改めて文意を明確にしました。

義認の信仰が律法になっていないか、行ないがなくても、イエス・キリストを信ずれば救われるとして、あらたな神の戒めの許に立とうとしないだけでなく、立とうとする者を律法主義として非難していないか、このような信仰は、信仰による義を律法として受取っているのである。

↓

義認の信仰が律法になっていないか。行ないがなくても、イエス・キリストを信ずれば救われるとして、あらたな神の戒めの許に立とうとしないだけでなく、立とうとする者を律法主義として非難していないか。このような信仰は、信仰による義を律法として受取っているのである。

203号

8 頁

白髪 of 紳士 → 白髪 of 紳士

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**No.202 を読んで** 投稿者：[旅人](#) 投稿日：2006年 2月 8日(水)17時09分51秒

[返信・引用](#)

「聖霊による十字架」の書き出しを読んで、奇怪な殺人事件がすでに1979年に発生していたのかと、一種の驚きを感じました。振り返ってみると、1980年代以降にも時々忌まわしい事件が起りました。その件数は増えているように思います。そのような犯罪が起る理由は、やはり無神論にあると思います。そして今は、正に「弱肉強食の闘争」のただなかにいるという思いが強いのです。昨今の姉齒事件にしる東急イン問題にしる、良心の欠落が顕著であると思います。

「聖霊による十字架」の中では、「義認の信仰が律法になっていないか。行ないがなくても、イエス・キリストを信ずれば救われるとして、あらたな神の戒めの許に立とうとしないだけでなく、立とうとする者を律法主義として非難していないか。このような信仰は、信仰による義を律法として受取っているのである。」という箇所をどう受け止めるべきか、良く分りません。松本さんは、「あらたな神の戒め」を見出し、その許に立とうとして、「義認の信仰」の立場の人から非難されたのでしょうか。また、松本さんの世俗に徹する生き方は、社会的にはどのような意義を持つことができたのでしょうか。これは、あくまでも私なりの問題提起であり、松本さんの信仰的立場を否定するつもりは全くありません。

「愛による絶対隔離」の「第5章 病舎5」では、ハンセン病患者で収容の対象にならなかった人たちがいたことを知りました。「宮本」さんの「らい予防法の矛盾」批判は、正しいと思いますが、それでは、すべての患者を収容するようにすれば良かったのでしょうか。

なお、私はこの文を改めて読んでいて、一つ校正漏れに気づきました。最終行の「交明国」は、「文明国」とすべきですね。

**Re: No.202 を読んで** 投稿者：[田中 裕](#) 投稿日：2006年 2月 8日(水)22時01分17秒

[返信・引用](#) [編集済](#)

旅人さん

校正漏れのご指摘有り難うございました。

> 「聖霊による十字架」の中では、「義認の信仰が律法になっていないか。行ないがなくても、イエス・キリストを信ずれば救われるとして、あらたな神の戒めの許に立とうとしないだけでなく、立とうとする者を律法主義として非難していないか。このような信仰は、信仰による義を律法として受取っているのである。」という箇所をどう受け止めるべきか、良く分りません。松本さんは、「あらたな神の戒め」を見出し、その許に立とうとして、「義認の信仰」の立場の人から非難されたのでしょうか。また、松本さんの世俗に徹する生き方は、社会的にはどのような意義を持つことができたのでしょうか。これは、あくまでも私なりの問題提起であり、松本さんの信仰的立場を否定するつもりは全くありません。

「義認の信仰」が、再び「律法」になってしまった、自分は無信仰であったにも拘わらず、それを自覚せずに、信仰者であろうと必死の努力をしていた。そういう場合、回心前の松本さんにとって「信仰」は「良きキリスト者たるべし」という律法となっていたのではないのでしょうか。十字架のイエスによって、そういう自分の「無信仰」を徹底的に知らされ、イエスと共に

自己の罪性に死んだときに、イエスと共に復活する信仰に恵まれた。義務としての信仰から、恵みとしての信仰への回心です。その信仰は、もはや「行い」と対立する「信仰」などではなく、「新たな神の戒め（新約）」を見出し、そのもとに立つことを可能にした—そういう風に、私は上の文章を読みました。

> 「愛による絶対隔離」の「第5章 病舎5」では、ハンセン病患者で収容の対象にならなかった人たちがいたことを知りました。「宮本」さんの「らい予防法の矛盾」批判は、正しいと思いますが、それでは、すべての患者を収容するにすれば良かったのでしょうか。

「愛による絶対隔離」は、全生園が開園された1909年以来の歴史を振り返りつつ松本さん御自身が書かれたセミ・ドキュメンタリーです。登場人物が仮名ですし、松本さん御自身が造形したと思われる人物も登場します。「宮本」というのは、その登場人物の一人で、松本さん御自身の意見を代弁しているわけではありません。

ここでいう「癩予防法」は1907年のもので、絶対隔離ではなく相対隔離を規定したのですが、患者の財力による差別があったというわけです。行路病者は、たとえ、他人に感染させるおそれが少ない病型のものであっても、強制収容されましたが、比較的富裕なものは収容されなかった。

1931年に改訂された癩予防法では、相対隔離ではなく絶対隔離となり、この病気に罹ったものは原則として、すべて療養所に隔離することを目指すようになります。

松本さんが、「愛による絶対隔離」という記事を連載するようになった直接の動機は、当時の全生園にもまだ「光田健輔をカリスマ的指導者として評価していた人」が多数いたこと、「ある無教会主義者」が光田のしたことを「愛による絶対隔離」としてその正当性を認めたことがきっかけであったようです。（「小さき声」192号による）

松本さんの御自身の考えでは、「愛による絶対隔離」などはあり得ない。それは言葉としては美しく聞こえるが、愛と絶対隔離は相容れないのです。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2Ffeigenwille%2F>

---

**相対隔離、絶対隔離** 投稿者：[旅人](#) 投稿日：2006年 2月 9日(木)17時06分57秒

[返信](#)・[引用](#)

田中先生、今日は。

「癩予防法」には、それなりの進化があったんですね。そして、絶対隔離が患者をすべて収容するということであれば、予防医学という観点からは、理論的には矛盾がなくなるのだと思います。この後、松本さんの「絶対隔離」についてのお考えが詳しく述べられるのだと思います。さて、自分だったらどう考えたか。

それにしても、大切な情報をありがとうございました。不勉強なもので、どうも済みません。

---

**Re: 相対隔離、絶対隔離** 投稿者：[田中 裕](#) 投稿日：2006年 2月 9日(木)19時36分8秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

> 「癩予防法」には、それなりの進化があったんですね。そして、絶対隔離が患者をすべて収容するということであれば、予防医学という観点からは、理論的には矛盾がなくなるのだと思います。この後、松本さんの「絶対隔離」についてのお考えが詳しく述べられるのだと思います。さて、自分だったらどう考えたか。

「らい予防法」には退所規定がありませんので、一度収容された患者が退所するのは非常に難しく、「絶対隔離」は同時に「終生隔離」を意味するようになりました。官立らい療養所に納骨堂があることがそれを如実に示しています。

プロミンのような特効薬が開発される以前の段階においてさえ、日本政府が採用した「絶対・終生隔離政策」が、（手酷い人権侵害であったことは明らかですが）、純粹に疫学的な見地から見たとしても、果たして医学的な根拠があったといえたのかどうかは、きわめて疑問です。

引き続き、時間をかけて、私はこの問題を検証していきたいと思っています。1930年代の醫海時報誌上での青木大勇と林文雄の論争、中外日報誌上での小笠原登と早田皓の論争を取り上げたのも、その点を明らかにするという意味があります。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2Ffeigenwille%2F>

---

**お早うございます。** 投稿者：[旅人](#) 投稿日：2006年 2月10日(金)08時39分4秒

[返信](#)・[引用](#)

田中先生が「青木大勇と林文雄の論争、中外日報誌上での小笠原登と早田皓の論争を取り上げ」られたご趣旨、ご説明をお聞きして、なるほどと思います。医療行政のアセスメントは必要でしょうね。しかし、私としては技術問題など、専門家でなければ分らないようなことには、あまり首を突っ込むことは避けたいと思っています。そして、ひところ問題となった輸血によるHIV感染などの問題については、職務への忠実義務違反の観点から、物申すべきではないかと思っています。

それはともかく、当面の問題としては、「愛による絶対隔離」という問題に主たる関心を払い、昭和初頭の癩に関する論争は、主たる問題をより深く理解するための知識として、学ばせて頂くかと考えております。

**Re: 相対隔離、絶対隔離** 投稿者：北風 投稿日：2006年 2月10日(金)09時38分55秒

[返信・引用](#)

> 引き続き、時間をかけて、私はこの問題を検証していきたいと思っています。1930年代の醫海時報誌上での青木大勇と林文雄の論争、中外日報誌上での小笠原登と早田皓の論争を取り上げたのも、その点を明らかにするという意味があります。

田中さんの「学風」ですが、「検証」する前に先行研究のチェックを怠らんように願います。上記のことは、すでに言い古されています。裁判の証拠としても他の隔離批判者（学者・療養所の所長をふくめて）の言説は多々提出されています。また、井藤道子さんのように、現場の経験から隔離・断種をどうしても肯定できないと控えめに言う人もいます。（井藤さんは矢内原忠雄の葬儀で『嘉信』の読者代表として弔辞を読んだ星塚敬愛園の元・職員）

是非、田中さんの「検証」は、現在の到達点からさらにそれを深めるものであってほしいと思います。同じことを「時間をかけて」するのは頭脳の無駄ですから。

**Re: 相対隔離、絶対隔離** 投稿者：田中 裕 投稿日：2006年 2月10日(金)13時25分30秒

[返信・引用](#) [編集済](#)

>> 引き続き、時間をかけて、私はこの問題を検証していきたいと思っています。1930年代の醫海時報誌上での青木大勇と林文雄の論争、中外日報誌上での小笠原登と早田皓の論争を取り上げたのも、その点を明らかにするという意味があります。

> 田中さんの「学風」ですが、「検証」する前に先行研究のチェックを怠らんように願います。

いろいろとお気遣い頂き有り難う存じます。そういうことは、学生の修士論文の審査などで日頃、私自身が注意している事柄でもあります。

ハンセン病の医療の歴史や、生命倫理の諸問題、については、私は専門家ではありませんが、この種の問題については、いわゆる「専門家」に任せるというのではなく、（専門家を信用するな、とは和泉先生の警告でもあります）様々な分野の人が協力して研究すべき事柄です。

> 上記のことは、すでに言い古されています。裁判の証拠としても他の隔離批判者（学者・療養所の所長をふくめて）の言説は多々提出されています。

これは、旅人さんの投稿に対するコメントとして申し上げたまでです。新しい知見を述べたつもりはありません。

ただし、1930年代の論争についてはまだ明らかになっていないことが多い。検証会議の最終報告書には、青木大勇の名前はありません。青木大勇と林文雄の論争の詳細は、（和泉真蔵さんが言及した他は）まだ誰も詳しくは論じていないと思いますが、また、小笠原登と早田皓の論争のなかにもまだ十分に論じられていない事柄がたくさんあります。

> また、井藤道子さんのように、現場の経験から隔離・断種をどうしても肯定できないと控えめに言う人もいます。（井藤さんは矢内原忠雄の葬儀で『嘉信』の読者代表として弔辞を読んだ星塚敬愛園の元・職員）

井藤さんについては、昨年、私の友人の一人が論文を書かれたので、彼女の伝道パンフレットなど読んでおります。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**そうかな** 投稿者：北風 投稿日：2006年 2月10日(金)22時32分43秒

[返信・引用](#)

> ただし、1930年代の論争についてはまだ明らかになっていないことが多い。検証会議の最終報告書には、青木大勇の名前はありません。青木大勇と林文雄の論争の詳細は、（和泉真蔵さんが言及した他は）まだ誰も詳しくは論じていないと思いますが。

長島愛生園の宇佐美さんが検証会議で言及しているし、熊本裁判の原告「準備書面」でも詳細に論じられ、「判決文」も触れています。

---

**Re: そうかな** 投稿者: [田中 裕](#) 投稿日: 2006年 2月11日(土)00時00分26秒

[返信・引用](#)

>> ただし、1930年代の論争についてはまだ明らかになっていないことが多い。検証>>会議の最終報告書には、青木大勇の名前はありません。青木大勇と林文雄の論争の詳細は、(和泉真蔵さんが言及した他は) まだ誰も詳しくは論じていないと思いますが。

>  
>

> 長島愛生園の宇佐美さんが検証会議で言及しているし、熊本裁判の原告「準備書面」でも詳細に論じられ、「判決文」も触れています。

私が云っているのは、ただの「言及」ではなく、療養所学派と大学の医師との間で為された論争の詳細とその分析です。

原告団の「準備書面」というのは、私はまだ見ていませんが、そこには、林文雄の反論のこと、また、その反論を更に批判した原口一億の論文—これも重要な資料と思いますが—など、当時の専門家間の論争を詳しく論じていますか。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

---

**そういうことではない** 投稿者: [紙魚](#) 投稿日: 2006年 2月11日(土)01時49分38秒

[返信・引用](#)

先行の言説に敬意を払ってから何事か言うべきだということです。  
これは今回に限らず。

---

**私にとって田中先生とは** 投稿者: [旅人](#) 投稿日: 2006年 2月11日(土)07時40分0秒

[返信・引用](#)

お早うございます。朝早くから申し訳ありませんが、少しでも意見を述べさせていただきます。

私の認識では、田中先生は、研究者であると共に、教師であり、また掲示板での対話の相手でもあるわけです。ですから、私からの質問がたとえ愚問であっても、それに対して誠意を持ってお答えいただいていることは、非常にありがたいことです。質問を無視されて、研究の先端の話だけをされれば、こちらには不信が残ることになるでしょう。多分、田中先生としては、レベルの低い私の質問に対して、精一杯忍耐を示し、啓蒙に努めていらっしゃるものと推察しています。多分、私のような気持ちでいらっしゃる方も大ぜいこの掲示板をみておられると思いますので、今後とも宜しく願います。

敬意を払うべき相手は、「先行の言説」だけではないと思います。

---

**それならそれ** 投稿者: [紙魚](#) 投稿日: 2006年 2月11日(土)09時17分8秒

[返信・引用](#)

質問のレベルのいかんにかかわらず、質問に誠実に答えることは「当然」でしょう。その問題と、小生の田中さんの言動への疑問は、いささか趣をことにいたします。

先行研究者を「利用」せず、先行者と自分の言説を明確に区別して発言することは、決して旅人さんのおっしゃることとは、矛盾しません。  
逆に言えば、田中さんは旅人さんへの「啓蒙者」であると同時に、研究者でありますから、そういう見方で読む人も当然います。「先行研究」や「発言」に「敬意」を払うことは、研者として論理と倫理双方の大事な問題です。

---

**(無題)** 投稿者: [田中 裕](#) 投稿日: 2006年 2月11日(土)10時09分55秒

[返信・引用](#)

私が先行研究に敬意を払わないということは全く事実と反します。ブログを見て頂ければ分かりますが、和泉真蔵先生の書かれたものから多くを学んだわけですから。そもそも、小笠原登の論文と著書、青木大勇、原口一億の1930年代の論文こそ、先行研究の名に値するのではないのでしょうか。そうであるからこそ、それらを詳細に検討する必要があるのです。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

---

**出かけなくっちゃ。** 投稿者：北風 投稿日：2006年 2月11日(土)10時46分47秒

[返信・引用](#)

>それらを詳細に検討する必要があるのです。

そのとおりですが、「詳細に検討」する前に「結論」がある。

---

**「小さき声」復刻** 投稿者：田中裕 投稿日：2006年 2月11日(土)20時45分41秒

[返信・引用](#)

[小さき声 204号](#)と[小さき声 205号](#)を復刻しました。校正などで、お気づきの点があればご連絡下さい。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

---

**単純な復刻ならいいのですが。** 投稿者：北風 投稿日：2006年 2月12日(日)12時35分0秒

[返信・引用](#)

きちんと校正し、校閲するという方針でしたから、こういうのが気になります。

立穴→縦穴  
弘善社→好善社

散見されるこういう誤植は愛嬌として。

手紙の日付は、1914年4月2日ですが、秋津教会の創立は、1919年でこれはいい。  
ところが、この時期好善社の宣教師は、1911年から1930年まで在籍したオルトマンで、ハナフォードは、1928年の入社で辻褄が合わない。

こうしたことを、どうするか。一応、商業主義の出版屋はこういうこともチェックします。

---

**Re: 単純な復刻ならいいのですが。** 投稿者：北風 投稿日：2006年 2月12日(日)12時45分8秒

[返信・引用](#)

> きちんと校正し、校閲するという方針でしたから、こういうのが気になります。

>  
> 立穴→縦穴  
> 弘善社→好善社  
>

> 散見されるこういう誤植は愛嬌として。

> 手紙の日付は、1914年4月2日ですが、秋津教会の創立は、1919年でこれはいい。  
> ところが、この時期好善社の宣教師は、1911年から1930年まで在籍したオルトマンで、ハナフォードは、1928年の入社で辻褄が合わない。

>  
> こうしたことを、どうするか。一応、商業主義の出版屋はこういうこともチェックします。

一部「創作」もありとして、逃げる手もありますが、実在の人物、実名の場合はまずいかな。  
最も「弘善社」は誤植ではなく、「好善社」をモデルにしたフィクションだという手も。

---

**原文の儘か校正か** 投稿者：田中裕 投稿日：2006年 2月12日(日)14時42分50秒

[返信・引用](#) [編集済](#)

「弘善社」は原文の儘ですが、これは口述筆記者の書き間違いの可能性が高いですね。「小さき声」の口述筆記は大勢の人が関わっていますが、なかにはキリスト教とは無縁のかたもいらっしやう。したがって、目黒慰廢園から全生園に移られた信徒の方、プロテスタントの秋津教会のかたならば、ありえない誤植が所々見受けられます。そこで、

弘善社 → 好善社

と校正しましょう。

「ハナフォード」の場合は、微妙です。ハナフォードが好善社に入社したのが、秋津教会設立後だとすると、松本さんの記憶違いの可能性がありますが、しかし、松本馨さんが師と仰いだ原田嘉悦さんは慰廢園で「オルトマン」より洗礼を受けたということを別の場所で松本さんは書かれています。松本さんの書かれた記事そのものが、奥様を初めとして周辺にいた慰廢園からの信徒の聴いた話がもとになっているので、松本さんの書かれたとおり、ハナフォードが関係していたのかもしれない。そうだとすると、ハナフォードが好善社に入社したのが1928年だという別の資料との整合性が問題になります。

これは、松本さんが、はっきりと「ハナフォード」と書いているので、とりあえず、原文の儘としておきましょう。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

---

**Re: 原文の儘か校正か** 投稿者：紙魚 投稿日：2006年 2月13日(月)00時17分55秒

[返信](#)・[引用](#)

> しかし、松本馨さんが師と仰いだ原田嘉悦さんは慰廢園で「オルトマン」より洗礼を受けた  
ということを別の場所で松本さんは書かれています。

これは、ぜんぜん矛盾しない。なぜ「しかし」かわからない。

---

**Re: 原文の儘か校正か** 投稿者：田中 裕 投稿日：2006年 2月13日(月)07時53分20秒

[返信](#)・[引用](#)

>> しかし、松本馨さんが師と仰いだ原田嘉悦さんは慰廢園で「オルトマン」より洗礼を受け  
たということを別の場所で松本さんは書かれています。

>  
> これは、ぜんぜん矛盾しない。なぜ「しかし」かわからない。

奥様や原田嘉悦さんから好善社について詳しい情報を得ていた松本さんが、オルトマンとハナ  
フォードを混同したとは考えにくい、ということですよ。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

---

**Re: 原文の儘か校正か** 投稿者：北風 投稿日：2006年 2月13日(月)08時28分18秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

>>> しかし、松本馨さんが師と仰いだ原田嘉悦さんは慰廢園で「オルトマン」より洗礼を受  
けたということを別の場所で松本さんは書かれています。

>>  
>> これは、ぜんぜん矛盾しない。なぜ「しかし」かわからない。

>  
> 奥様や原田嘉悦さんから好善社について詳しい情報を得ていた松本さんが、オルトマンとハ  
ナフォードを混同したとは考えにくい、ということですよ。

では何故、こういう錯簡めいたことが起きるのか？  
松本さんが生きていたら何うことだし、現時点で「校閲」を言うならば「とりあえず」と放置  
しないで、「編註」をつけるべきです。  
それが地道に「校閲」をするということ。

---

**Re: 原文の儘か校正か** 投稿者：田中 裕 投稿日：2006年 2月13日(月)11時11分17秒

[返信](#)・[引用](#)

> 松本さんが生きていたら何うことだし、現時点で「校閲」を言うならば「とりあえず」と放置  
しないで、「編註」をつけるべきです。

校正を依頼している方々からの連絡を待って、それらすべてを総合した上で、適切な時点で  
「編集者の脚注」を作成する予定です。北風さんが提起された点以外にも、言及すべき事柄は  
たくさんありますので。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

---

**Re: 原文の儘か校正か** 投稿者：北風 投稿日：2006年 2月13日(月)11時12分57秒

[返信](#)・[引用](#)

>  
> 奥様や原田嘉悦さんから好善社について詳しい情報を得ていた松本さんが、オルトマンとハ  
ナフォードを混同したとは考えにくい、ということですよ。

65年前の伝聞ですから、混同したり錯覚したりすることは、逆に大いにありうることで  
すよ。そこでテキストクリティークが必要になるのでは？

**Re: 原文の儘か校正か** 投稿者: [北風](#) 投稿日: 2006年 2月13日(月)11時14分45秒

[返信](#)・[引用](#)

>> 松本さんが生きていたら伺うことだし、現時点で「校閲」を言うならば「とりあえず」と放置しないで、「編註」をつけるべきです。  
>  
> 校正を依頼している方々からの連絡を待って、それらすべてを総合した上で、適切な時点で「編集者の脚注」を作成する予定です。北風さんが提起された点以外にも、言及すべき事柄はたくさんありますので。

当然でしょう。  
いくらWEB上といえど、それを施した上で発表すべきですね。

**「小さき声」No.205について** 投稿者: [旅人](#) 投稿日: 2006年 2月13日(月)19時07分17秒

[返信](#)・[引用](#)

この号では、「ハンセン病と偏見とのたたかい」というテーマが取り上げられていますが、一般民衆の偏見、行政と医療関係者の偏見、ハンセン病患者と家族及び近親者の偏見について要領よくまとめられていると思います。松本さんは、目がご不自由であったのに、良く勉強(?)されたものだと思います。一般の患者さんもまた偏見を持たれていた中で、松本さんがどうして、このように事実を客観的に見る事ができたのか、驚いています。  
特に「行政と医療関係者の偏見」については、良く観察されていると思うのですが、彼らの偏見として挙げられていることに、何かつけ加えるべきことはあるのでしょうか。また、専門家である人たちが、偏見を持ってしまったのは、どこに原因があったのでしょうか。田中先生は、「専門家を信用するな」とは和泉先生の警告でもあります」と言われていますが、彼らの懐いた偏見は、研究の方法論に問題があったせいでしょうか。それとも、先入観が研究成果を客観的に評価できないようにしたのでしょいか。  
私からすれば、「専門家を信用するな」とは、研究に携わる人は単なる人間であるから、誤謬もあれば虚偽もあると言うことを言っているのだと思いますが、専門家に対する懐疑が過剰になって、健全性を失うことにも警戒する必要があるのではないかとも思っています。また、「専門家」とは、別に学問の分野に限らず、社会人一般に言えることではないかと思えます。  
私が専門家に対して何か意見を言うとしたら、専門家は、自分の専門分野の成果や問題を過大に評価する傾向があるということと、問題等を別の角度から見る事がなかなかできていないということかなと思います。それでは足りないでしょうか。

**(無題)** 投稿者: [田中裕](#) 投稿日: 2006年 2月13日(月)23時04分40秒

[返信](#)・[引用](#)

明日は、入学試験の面接日で学務多忙のため、「小さき声」204号、205号についての私のコメントは、その後で、時間が出来ましたら掲載致します。

>旅人さん

205号への感想有り難うございました。「行政と医療関係者の偏見」についてはさらに云うべき事が多くあると思います。これについては小笠原登に「らいに関する三つの迷信」(1931年)という重要な論文がありますので、それについても言及しつつ、後でコメントしたいと思います。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2Ffeigenwille%2F>

**好善社のことなど** 投稿者: [田中裕](#) 投稿日: 2006年 2月15日(水)23時46分3秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

>> 手紙の日付は、1914年4月2日ですが、秋津教会の創立は、1919年でこれはいい。  
>> ところが、この時期好善社の宣教師は、1911年から1930年まで在籍したオルトマンで、ハナフォードは、1928年の入社で辻褄が合わない。

好善社から1978年に出た「ある群像—好善社100年の歩み」の諸資料と年表、松本さんが中心となって編集した「教会—処」の年表、1999年に出た「全国ハンセン病療養所内、キリスト教会沿革史」などで、次のことを確認しました。

プロテスタントの秋津教会の創立は、「教会—処」によれば1914年(大正3年)12月です。この年のクリスマスに初めて12名の洗礼式が行われた。松本馨さんの「小さき声」の「飯野重吉先生」宛ての手紙は、この記念すべき行事をふまえて書かれています。

(ただし、ここで云う教会の創立とは、信徒の集い(エクレシア)が成立したという意味で、戦前の全生園では、どのキリスト教の宗派も独立の教会堂を持つことは許可されていなかった)

オルトマンは、明治学院の神学部教授で、好善社の理事を兼務していたが、大正15年に72歳で明治学院を退職、昭和5年に引退し帰米。そののち再び来日、昭和14年に日本で遊

去。

好善社の「100年史」の年表によれば、ハナフォードが入社したのは昭和3年です。「俱会一処」の年表でも、1930年に「帰米したオルトマン博士に代りハナフォード師来院布教」とありますから、秋津教会の創立時に、「好善社から派遣された宣教師」として信徒の指導をしていたのは、ハナフォードではなくオルトマンであったというのが、(史実としては)蓋然性が高い。

昭和17年には、米英との国交断絶に伴って、好善社の理事であったハナフォード、ポット、ハミルトン、パンファインドなど宣教師は解任されました。しかし、戦後直ぐに、ハナフォードは再来日し、再び好善社の理事となり、積極的に活動。昭和23年には、ALMに働きかけて、全生園と愛生園の教会堂建設の資金を調達しています。

松本さんは、もと、プロテスタントの秋津教会に所属していましたから、この教会堂建設に際して、ハナフォード理事が尽力したことはよくご存知だったでしょう。そこで「愛による強制隔離」の「物語」の中で、オルトマンではなくハナフォードの名前が使われたのだと思います。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**ははははは。** 投稿者：北風 投稿日：2006年 2月16日(木)09時07分16秒

[返信](#)・[引用](#)

「史実としては蓋然性が高い」のに無理して「思っていたら」なくても、松本さんの思い違いでいいのでは？

いつかの「仮定演繹法」ちゃらいうのを思い出します。

**Re: 単純な復刻ならいいのですが。** 投稿者：北風 投稿日：2006年 2月16日(木)09時25分46秒

[返信](#)・[引用](#)

>> きちんと校正し、校閲するという方針でしたから、こういうのが気になります。  
>>  
>> 立穴→縦穴  
>> 弘善社→好善社  
>>  
>> 散見されるこういう誤植は愛嬌として。  
>>  
>> 手紙の日付は、1914年4月2日ですが、秋津教会の創立は、1919年でこれはいい。  
>> ところが、この時期好善社の宣教師は、1911年から1930年まで在籍したオルトマンで、ハナフォードは、1928年の入社で辻褄が合わない。  
>>  
>> こうしたことを、どうするか。一応、商業主義の出版屋はこういうこともチェックします。  
>  
> 一部「創作」もありとして、逃げる手もありますが、実在の人物、実名の場合はまずいかな。  
> 最も「弘善社」は誤植ではなく、「好善社」をモデルにしたフィクションだという手も。

「物語」か。  
この手も「援用」しましたね。

**「小さき声」 205号について** 投稿者：[田中 裕](#) 投稿日：2006年 2月16日(木)10時57分18秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

原本2頁右側、最初の段落

「ヨブという敬虔な信徒がらいに罹るが、ヨブの3友人、エリバズ、ビルダテ、ゾバルはヨブの悲惨な姿を見て、因果応報の立場からヨブがらいに罹ったのは隠れた罪を犯しているか、その子どもが罪を犯しているためであると、ヨブに悔い改めを迫った。これに対してヨブは、因果応報説を否定し神の義に迫るのである。」

に、「因果応報の立場からヨブがらいに罹ったのは隠れた罪を犯しているか、その子どもが罪を犯しているためであると、ヨブに悔い改めを迫った。」という文がありますが、「その子どもが」というのは正しいでしょうか、という質問がありました。

松本さんは、おそらく、ヨブ記8-4の

「あなたの子らが神に対して過ちを犯したらこそ、彼らをその罪の手にゆだねられたのだ」を念頭においてかかれたのでしょうか。(ヨブ記1-5参照)

正確に言えば、ここでの因果応報は、ヨブの子供達が事故でなくなったことを指すと云うべきでしょう。子供が罪を犯したので、親がらい病になったとは書いてありませんから。

伝統的に、ヨブの罹った皮膚病は、ラテン語で *lepra* と訳されており、日本でもらい病であると解釈されてきました。そして松本さんもそういう解釈に従ってヨブ記を読んでいました。

ただし、旧新約聖書で、伝統的にレブラとされてきた病気の症状は、現代医学で云うハンセン病の症状と必ずしも一致しません。スタンレー・ブラウンが1970年に出版した *Leprosy in the Bible* によると、「らい病（レブラ）と訳されている聖書の言葉（ヘブライ語のツアラート、ギリシャ語・ラテン語のレブラ）は、総称的、非科学的、包括的、かつ不正確である」とのこと。1994年に出た犀川一夫の「聖書のらい」（新教出版）にも詳細な疫学史的考察があります。

「聖書のらい」は医学上の概念であるよりは、象徴的・祭儀的な意味で使用されていたとみるべきでしょう。

<http://111.teacup.com/mejoro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

「小さき声」 205号について (続き) 投稿者: [田中 裕](#) 投稿日: 2006年 2月16日(木)11 返信・引用 編集済

時30分11秒

旅人さん

205号の感想、有り難うございました。

> この号では、「ハンセン病と偏見とのたたかい」というテーマが取り上げられています。一般民衆の偏見、行政と医療関係者の偏見、ハンセン病患者と家族及び近親者の偏見について要領よくまとめられていると思います。松本さんは、目のご不自由であったのに、良く勉強(?)されたものだと思います。一般の患者さんもまた偏見を持たれていた中で、松本さんがどうして、このように事実を客観的に見ることができたのか、驚いています。

自治会会長として多忙な活動をしながらも、「小さき声」の刊行を続けられたのは、やはりこの伝道誌が、松本さん御自身の信仰の証であるだけでなく、極限を生きた療友達の目から見た園の歴史がどんなものであったかを、園の外部へとありのままに伝えなければならないという使命感をもたれたのだらうと思います。

205号を書かれているところは「俱会一処」の刊行という大きな事業があり、入所者自身の手で療養所の歴史を検証するという事が行われていました。この仕事には松本さんだけでなく他にも多くの人に関わりました。205号の「ハンセン病と偏見とのたたかい」という記事は、そういう同志達との間で共有していた認識であったといつて良いでしょう。

> 特に「行政と医療関係者の偏見」については、良く観察されていると思うのですが、彼らの偏見として挙げられていることに、何かつけ加えるべきことはあるのでしょうか。

松本さんの要約された論点1を、小笠原登が1931年に書いた「らいに関する三つの迷信」(1931年(昭和6年)「診療と治療」第十八巻第十一号別冊)という論文の引用を以て補足したいと思います。

「其の第一は癩は不治の疾患であると云ふ迷信である。先年某大学に於て創立記念祝賀のため大衆に対して各教室を開放して機械や標本等を観覧せしめた事があった。其の際某教室に於て陳列せられてあった標本中に癩の標本があった。其の説明者が『癩は不治である。一度罹った人は嚴重に隔離して伝染を防がなければならぬ』と云って居たと云ふ事を聞いた。又或る医師が『癩患者に於ては速かに鞣丸刷出若くは精系の截断を行つて子孫を後に遺す事を避けなければならぬ』と云つたのを聞いた。この医師も癩は不治であると云ふ迷信を持って居た人であった。

尚此の如き迷信を持って居る医師が皮膚科の専門医中にも多々あるのに遭遇して居る。此の如き迷信が天下に瀰漫するに至つたには一つの理由がある。それは病変が一定の度を超える時は、仮令疾病は消失しても生体は最早や舊態に復歸するものではないと云ふ事に帰着する。即ち病氣は治癒してもその結果として起つた変化は必ずしも消失するものではない。例せば結核性疾患である所の狼瘡に於て、指が脱落したり、鼻や唇が腐蝕し去つた場合には、仮令病氣は治癒しても最早や指は発生せず、鼻や唇も再び形成せられて来らぬのである。癩の場合でも同様である。神経幹が一定の度を超えて破壊せられた場合には病氣は治癒しても最早や指の釣状や口の歪みなどが消失して発病前の状態には復歸せぬのである。こゝに永久病氣が治癒せざるが如き観を呈する。

癩不治の迷信はこゝに生れる。即ち病氣自体とそれから起つた結果との混同に基いて起るのである。予が経験によれば癩の治癒性は結核性の疾患に比べると遥かに大であるかに考へられ

る。癩も亦経済力の少い人達に多い疾患であるがために、費用の関係上充分な治療を加へる事が出来ない場合が屢々遭遇せられる。万一斯様な患者に十分の資力が供給せられるならば、尚一層其の治癒性を高め得ると信ずる。

近頃内務大臣の主唱の下に癩予防協会と云ふものが出来たと聞いて居る。予の聞いた所によると栃木県の草津に癩患者の合宿所を設けて娯楽機関を充実せしめ、こゝへ癩患者を集め一生を楽しくこの楽園に於て終らしめ、かくて隔離の実を挙げ、癩の伝播を予防せんとする計画の様である。甚だ結構な企てである事は云ふまでもない。然かしこれが主なる目的であるとするならばこれは明かに癩は不治であると云ふ迷信に立脚した企てであるかに考へられ甚だ物足りない感がある。どうかすると十分の効果を収める事が出来ないと云ふ事に帰するのではないかと恐れしめる。」

小笠原登は、このように、らいは不治であるという考え方を、1931年の時点において、行政と医療関係者の陥っている「迷信」として斥けています。

小笠原は「癩は遺伝病である」という第二の迷信を民衆の偏見としていますが、第三の「らいは怖ろしい伝染病である」という迷信を、第一の迷信と同じく、行政と医療関係者の囚われている迷信だと云っています。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**訳書も紹介してくださいな Re: 「小さき声」 205号について** 投稿者：北風 投稿日： [返信・引用](#) [編集済](#)

2006年 2月16日(木)17時43分11秒

> ただし、旧新約聖書で、伝統的にレブラとされてきた病気の症状は、現代医学で云うハンセン病の症状と必ずしも一致しません。スタンレー・ブラウンが1970年に出版したLeprosy in the Bibleによると、「らい病（レブラ）と訳されている聖書の言葉（ヘブライ語のツアラート、ギリシャ語・ラテン語のレブラ）は、総称的、非科学的、包括的、かつ不正確である」とのこと。1994年に出た犀川一夫の「聖書のらい」（新教出版）にも詳細な疫学史的考察があります。

あれ、スタンレー・ブラウンの『聖書の中の「らい」』は、石館守三の翻訳があつて、長島愛生園の宇佐美治さんに頼まれて、当時阿佐ヶ谷に住んでいた石館さんのところにわけてもらいにいったなあ。  
原書だけ書くのは、悪い癖だなあ。

また、ヘブライ語のツアラートと、ギリシャ語・ラテン語のレブラはべつであること。つまり、「らい病」という日本語訳が誤訳ではなく、ツアラートを「レブラ」と訳したのが誤訳ということですよ。

ハンセン病をこのようにイメージさせ、終生隔離政策の遠因を作ったのは、このような誤訳をした人、し続ける人にも責任がある。それを放置した基督者にも責任がある、スタンレー・ブラウンをこえて、長島愛生園の長島愛生園教会の大嶋得雄さんはいっている。「重い皮膚病」も「らい」を連想させ、他の皮膚病の人にもつらい思いをさせる点、適切な訳語ではないといっています。  
あつい裏打ちのある重い言葉ですね。

N D L

請求記号	HP13-116
タイトル	聖書の中の「らい」
責任表示	スタンレー・G. ブラウン著
責任表示	石館守三訳
出版地	東京
出版者	キリスト新聞社
出版年	1981.9
形態	78p ; 18cm
注記	著者の肖像あり
注記	原タイトル: Leprosy in the Bible.
注記	著者略歴: p75~76

**Re: 「小さき声」 205号について (続き)** 投稿者：旅人 投稿日：2006年 2月16日(木)18

[返信・引用](#)

時52分3秒

コメントありがとうございました。ところで、

>小笠原登は、このように、らいは不治であるという考え方を、1931年の時点において、行政と医療関係者の陥っている「迷信」として斥けています。

ということですが、この件については、小笠原登さんはその時点でどうして断言できたのか、不思議な気がします。未だプロミンも、開発されていなかったんじゃないでしょうか。ライ菌が陰性になった例はまれにはあったでしょうが、そのころは、一般的には病気は徐々に進行していったのではありませんか。

小笠原登さんの「万一斯様な患者に十分な資力が供給せられるならば、尚一層其の治癒性を高め得ると信ずる。」というお言葉は、ご尤もではあると思いますが、「癩は不治の疾患であると云ふ」のは「迷信である」と断定するには、根拠が薄弱であったと思います。

一般的には、人は他者を外見で判断するでしょうから、ハンセン病医療関係者が、外見に基づく偏見を持っていたことは、大いにありえると思いますが、治癒したかどうかの判定基準は無かったのでしょうか。ライ菌が発見された後であれば、当然ライ菌が陰性になっているかどうかで判断できると思いますが、いかがでしょうか。

『聖書の中の「らい」』 投稿者: [旅人](#) 投稿日: 2006年 2月16日(木)20時39分59秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

新約聖書では、マルコ伝の第1章42節に、 $\lambda \epsilon \pi \rho \alpha$  (レプラ) という単語が出てきますね。だから、翻訳上の問題は、ヘブル語からギリシャ語への誤訳だけが問題なのではないように思いますがいかがでしょうか。

意味がわからない 投稿者: [北風](#) 投稿日: 2006年 2月17日(金)09時12分20秒

[返信](#)・[引用](#)

つまり、新約聖書の記者の旧約理解に問題があったということではないのか？

重い皮膚病 投稿者: [旅人](#) 投稿日: 2006年 2月17日(金)15時29分27秒

[返信](#)・[引用](#)

新共同訳聖書には、「重い皮膚病」という語が使われている箇所が全部で14箇所あります。そのうち、ギリシャ語が得意と思われるルカの福音書では、§4:27、§5:12、§5:13、§7:22、§17:12、§17:14 の6箇所あります。したがって、元々ギリシャ語のレプラに該当する病気(事実)をイエス様が癒されたと、ルカは考えた方がよからうと思います。したがって、新約聖書がギリシャ語で書かれた時代における事実認識がレプラなんではないでしょうか。そして、その事実認識からすれば、当時のレプラ=ハンセン病+アルファ であって、この+アルファには、当時の医学知識によっては、ハンセン病と区別できない病気が含まれていたのだと思います。それは、時代の制約でしょうね。

ところで、田中先生にお尋ねしたいのですが、新約聖書の書かれた時代における、一般的な医学水準は、どんなものだったのでしょうか。当時の水準から見て、聖書の医学知識の水準が劣悪で、癩病に対する偏見を助長したとは思えないんですけれどね。それと、ヒンズー教では癩病はどのように扱われていたか、ご存知でしたら教えてください。

レビ記における「重い皮膚病」の治癒認定(第14章)からすると、「重い皮膚病」は、不治の病とは考えられていなかったように思いますが、いかがでしょうか。

面白い。 投稿者: [北風](#) 投稿日: 2006年 2月17日(金)16時17分37秒

[返信](#)・[引用](#)

「らいが不治であるというのは迷信」という小笠原の根拠が薄弱という旅人さんは、「らいが不治」という確たる根拠を持っているのだね。展開が楽しみだ。ははははは。

Re:面白い。 投稿者: [旅人](#) 投稿日: 2006年 2月17日(金)16時48分28秒

[返信](#)・[引用](#)

私は、『「迷信である」と断定するには、根拠が薄弱であったと思います。』と述べているのであり、1931年当時立って判断するとどうなるかについて推測しているだけです。したがって、その当時のハンセン病に関する医学知識に対する私の見方が間違っている可能性は大いにあります。その場合には、小笠原登さんに、非礼を心からお詫びします。小笠原登さんがされた断定の根拠をご存知でしたら教えてください。

間違っているというより 投稿者: [北風](#) 投稿日: 2006年 2月17日(金)17時44分11秒

[返信](#)・[引用](#)

旅人さんが間違っているというより、なぜらいは「不治」だと思い込んでいるのか、その認識はどこから来たのか、そこを自問してみるべきでしょう。

---

**現代医学から見れば** 投稿者：北風 投稿日：2006年 2月17日(金)18時03分4秒

[返信・引用](#)

>1931年当時立って判断するとどうなるかについて推測しているだけです。

旅人さんは「1931年当時にとって」推測しているのではなく、旅人さんの「推測」しているのは「1931年の医学水準」でしょう。  
なぜならば、あなたは「1931年当時の医学水準」をきちんと調べていっているのではなく、思い込みで言っているように見受けられる。ま、この辺のビヘイビアについていえばよく似ています。

あなた自身が「らいは不治だ」と思い込んでいるからこそ、小笠原の根拠が薄弱だという発言になる。では、その「らいは不治」だという認識は何によってもたらされたのか。

---

**らいは完治すると思っています。** 投稿者：旅人 投稿日：2006年 2月17日(金)18時11分51秒

[返信・引用](#)

私自身の認識としては、今現在「らいは完治する」と認識しています。

「1931年の医学水準」について調べもせずに推測しているという北風さんの認識は、正しいものです。だから、教えてくださいとお願いしているのです。お話の様子からすれば、北風さんは良く調査されているのでしょから、是非私の蒙を開いてください。

---

**わかっていますね。** 投稿者：北風 投稿日：2006年 2月17日(金)18時27分13秒

[返信・引用](#)

>お話の様子からすれば、北風さんは良く調査されているのでしょから、是非私の蒙を開いてください。

こんな風に拗ねちゃ。  
僕は、よく調査はしておりません。しかし、調べもしないで言っていることか、あつい裏づけのある言葉かはわかります。そういう重い言葉には敬意を払うのに吝かではありません。

らいは「今現在」完治するのではなく、大風子油の薬効も自然治癒も古くから報告されていたと思います。  
だから、何で旅人さんがア prioriに「らいは不治」だというのか、どこで刷り込まれたのか、そのことを自問すれば旅人さんにとっても新しい発見があると思います。

自分で考えないで「蒙を啓け」とか、しかも人を試すような言い方は、「キリスト教的」ではないよ。また「蒙」は「開く」ではなくて、「啓く」のほうがええですね。

---

**ご回答ありがとうございました。** 投稿者：旅人 投稿日：2006年 2月17日(金)20時22分37秒

[返信・引用](#)

北風さんの「僕は、よく調査はしておりません。しかし、調べもしないで言っていることか、あつい裏づけのある言葉かはわかります。そういう重い言葉には敬意を払うのに吝かではありません。」この言葉は、重いと思いますので、敬意を払います。  
後の部分は、軽いと思いますので、忘れさせていただきます。

---

**小笠原登の医療思想** 投稿者：田中裕 投稿日：2006年 2月17日(金)22時18分45秒

[返信・引用](#) [編集済](#)

今日は本務校で大学院の入試があり、先ほど帰宅しました。

>>小笠原登は、このように、らいは不治であるという考え方を、1931年の時点において、行政と医療関係者の陥っている「迷信」として斥けています。

>ということですが、この件については、小笠原登さんはその時点でどうして断言できたのか、不思議な気がします。未だプロミンも、開発されていなかったんじゃないでしょうか。

これについては、和泉眞藏医師が、ハンセン病の専門医として次のように述べています。

「今日でもプロミンという薬が登場する以前にはハンセン病は不治であったと考えている人がすくなくないが、これは明らかに誤っている。なぜならプロミン以前でも自然治癒する患者はすくなくなかったし、或る程度進行しても、そこで種々の程度の後遺症を残して病勢の進行が止まることがあり、また大風子油の注射で治癒する患者もいたからである。(中略)一般病院で治癒した患者は決して例外的な症例ではなく、ハンセン病の治癒について考察した論文も多いからである。」(「医者の僕にハンセン病が教えてくれたこと」2005年11月、CB R)

過日、伝染病研究所や、東大医学部の図書室で、学会誌「レプラ」の戦前のバックナンバーを閲覧しましたが、和泉医師が言われたとおり、そこには、確かに(プロミン以前の時期ですが)ハンセン病の治癒の事例が写真入りで報告されていました。

しかし、一度、症状が落ち着いて、治癒と判定された後で、病気が再発するというケースもあり、ハンセン病の治癒の基準は何か、ということについて、1930年当時では、専門家の意見は一致していなかったようです。

一般に療養所の医師達は、治癒の基準をきわめて厳しくとり、体内かららい菌が消滅しなければ治癒とは見なさないという立場であったのに対し、小笠原は、そういう基準では、ハンセン病に限らず、すべての感染症は「不治」となってしまうと警告しています。

小笠原は、晩年の著書「漢方医学に於ける癩の研究」のなかで、

「古來、「癩は不治である」という俗信が廣く行われているのであるが、しかし、漢方医書を開くに、古人は、癩をもって難治の疾患とは考えていたのであるが、強ち不治とは考えていなかったのである」

とのべたあとで、漢方に於ける疾病観を再評価しつつ、西洋医学とは異なる観点に立つライの治療法を紹介しています。

小笠原自身は西洋医学を学び、当時の海外のらい研究文献についても精通していましたが、西洋医学の考えだけでなく、それとは異なる医療の哲学をもつ漢方医学の立場をも統合する考え方をとっていた。このあたり、さらに彼の医療思想を検討したいと思っています。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**Re : 小笠原登の医療思想** 投稿者: [旅人](#) 投稿日: 2006年 2月18日(土)08時57分30秒

[返信・引用](#)

興味深いお話ありがとうございます。今後の展開に期待しています。

>ハンセン病の治癒の基準は何か、ということについて、1930年当時では、専門家の意見は一致していなかったようです。

多分こういうことだろうと思っていました。専門家にできることの限界を考える上で、参考になるような気がします。小笠原登さんが、何を持って治癒と考えたのかには特に興味を覚えません。

和泉眞藏著「医者への僕にハンセン病が教えてくれたこと」は、今注文しました。

日本で癩病とされていたものに、ハンセン病に外見上類似していた皮膚病もあったんじゃないでしょうか。

**わかってないね。** 投稿者: [北風](#) 投稿日: 2006年 2月18日(土)12時13分59秒

[返信・引用](#)

>後の部分は、軽いと思いますので、忘れさせていただきます

後の部分のほうがよほど大事なことだと思うが。

「聞く耳」がない人には何を申し上げても空念仏。なんまいだぶ。

**聖書とハンセン病** 投稿者: [田中裕](#) 投稿日: 2006年 2月18日(土)22時10分4秒

[返信・引用](#) [編集済](#)

旅人さんのご質問、現在の私の知識や能力を超えることも含まれているので、全部についてお答えできませんが、私が調べた範囲内の情報はお伝えしましょう。

> 新共同訳聖書には、「重い皮膚病」という語が使われている箇所が全部で14箇所あります。そのうち、ギリシャ語が得意と思われるルカの福音書では、§4:27、§5:12、§5:13、§7:22、§17:12、§17:14 の6箇所あります。したがって、元々ギリシャ語のレブラに該当する病気(事実)をイエス様が癒されたこと、ルカは考えた方がよかろうと思います。したがって、新約聖書がギリシャ語で書かれた時代における事実認識がレブラなんではないでしょうか。

ルカ5:12-15は、マタイ8:1-4やマルコ1:40-45と共通して、レビ記の祭司による清めの儀式に言及しています。これは共観福音書の記者達が「ツアルラト」を「レブラ」と同じものとみていたことを示すテキストです。したがって、共観福音書の「レブラ」は、旧約で「ツアルラト」とよばれた疾病がもっていた宗教的差別と浄穢についての祭儀的な意味を継承している。これには、新約聖書に先立つ70人ギリシャ語訳の旧約聖書の影響があったと思う。そこでは、ほぼ一貫して、「ツアルラト」は「レブラ」というギリシャ語に訳されています。したがってレブラは単なる疾病の名前ではなく、宗教的畏怖とスティグマ(刻印)を表す用語であった。そうであるが故に、ハンセン病が旧約時代のパレスチナには存在しなかったとしても、それが、西洋中世で蔓延したハンセン病と同一視されるようになった。大事なことは、単なる医学的な症例分析だけでなく、「穢れたもの」と見なされた病に対する社会的・宗教的な反応の共通性です。ハンセン病が姿を消したとしても、同じような病に対する差別は残るかも知れない。

スタンレー・ブラウンは、前掲書の中で、「ツアルアートを取り巻いた聖書の時代の社会人の怖れと刻印は、今日でも癩が存在する極東の社会で見ることが出来る。医学的には、ツアルアートはハンセン病を意味しないとしても、日本を含んだ極東の社会では、旧約聖書さながらのらい対策が現実に行われている」と指摘しています。もっとも、旅人さんが云われたように、レビ記は回復した患者が社会に復帰できる規定を含んでいる限りでは、ツアルアートを可治の病と見なしており、その点、退所規定のないらい予防法よりは人道的でした。

> ところで、田中先生にお尋ねしたいのですが、新約聖書の書かれた時代における、一般的な医学水準は、どんなものだったのでしょうか。

これは私には良く分かりません。しかし、それ以前と以後については、若干の情報があります。詳しくは、スタンレー・ブラウンや犀川一夫さんの著作にあります。紀元前三世紀頃、70人ギリシャ語訳を作成したアレクサンドリアのユダヤ人達は、同時期に出版された「ヒポクラテス大全」のことは知っていたでしょう。その時代のギリシャ語世界の医師は、ハンセン病を「象皮病」と呼んでいた。当時の医学文献に現れる「象皮病」の症状はハンセン病とよく似ています。したがって、70人ギリシャ語訳を作成したユダヤ人がそれとは違う「レプラ」という訳語を使ったときには、彼等は必ずしも今日我々が云うハンセン病を念頭にはいなかったと推測できます。ハンセン病をレプラとよぶようになったのは、2世紀のローマの医師ガレノスの時代以降とされます。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2Ffeigenwille%2F>

**Re : 聖書とハンセン病** 投稿者: [旅人](#) 投稿日: 2006年 2月19日(日)09時36分57秒

[返信](#)・[引用](#)

標記に関する情報をお教えいただきありがとうございました。

> これは共観福音書の記者達が「ツアルアート」を「レプラ」と同じものとみていたことを示すテキストです。したがって、共観福音書の「レプラ」は、旧約で「ツアルアート」とよばれた疾病がもっていた宗教的差別と浄穢についての祭儀的な意味を継承している。

この件に関しては異議ありません。祭儀なるものをどのように評価すべきかという問題が含まれているように思います。

> 「穢れたもの」と見なされた病に対する社会学的・宗教的な反応の共通性です。ハンセン病が姿を消したとしても、同じような病に対する差別は残るかも知れない。

多分、差別は残ると思います。それは、HIVでも分るし、現在の企業でも、肺結核になった人たちを採用することには、極めて「慎重」な態度にも現われています。しかし、その一方で世俗化が進み、社会制度としての宗教は力を弱めつつあるように思います。したがって、今現われてきているのは、むき出しな生存本能と生存競争に基づく差別であるように思います。逆に、エイズ患者を教会は受け入れているんじゃないでしょうか。

「医学的には、ツアルアートはハンセン病を意味しないとしても、日本を含んだ極東の社会では、旧約聖書さながらのらい対策が現実に行われている」というスタンレー・ブラウンの指摘は、比喩の使い方が多少気になります。旧約聖書になじみがなかったであろう極東の地における「らい対策」が旧約聖書さながらであるとしたら、それは諸文明に共通する社会的要因に起因するものであるか、極東の社会における独自の差別意識に基づくものだと思います。

> 当時の医学文献に現れる「象皮病」の症状はハンセン病とよく似ています。

この「象皮病」は、現在の「象皮病」とは異なるものですかね。  
<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fwww.med.kyushu-u.ac.jp%2Ffacul%2Fparasite%2Fboard%2F4-6.html> には「象皮病」患者さんの写真も載っていますが、フィラリアという虫によるものだとされています。「熱帯や亜熱帯に多く、世界中で1億2千万人が感染している。」と書かれていますが、これは大変な数ですね。そして、差別されているであろうと推定します。

いずれにしろ、いろいろお教えいただきありがとうございました。

**小さき声 の復刻状況** 投稿者: [田中裕](#) 投稿日: 2006年 2月25日(土)19時40分44秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

入試関連の学務が一段落して、これからというときにあいにく、風邪をこじらせてしまい、掲示板の方もしばらく休んでいました。

「小さき声」の復刻と校正の作業は、あたらしく真奈さんにご協力頂いた御陰で、私が休んでいる間も、順調に進捗しています。現在、私が電子化作業を進めている200号以降とは別

に、第126号から131号までの部分の電子テキストを送って頂いたので、それに基づいて次のように復刻致しました。

[126号](#) [127号](#) [128号](#) [129号](#) [130号](#) [131号](#)

これらの部分についても、どうか感想をお寄せ下さい。

私もきょうあたりから身体も回復しましたので、新しく、[206号](#) [207号](#) を復刻しWEBにアップしました。この二号については、現在、校正中です。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2Ffeigenwille%2F>

---

**世俗の中の福音** 投稿者：[田中 裕](#) 投稿日：2006年 2月28日(火)22時29分3秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

松本さんが自治会活動を始められた頃、政治的な活動に深入りせずに信仰一筋の道を歩むようにという忠告が、「小さき声」の読者から松本さんのもとに寄せられたようです。また、自治会で松本さんと共に活動していた人は、概ね、キリスト教信仰とは無縁の人達でしたから、松本さんが自治会活動をしなが、キリスト教の伝道誌の発行を続けていることに驚いていたようです。

自治会に次第に深くコミットしていった松本さんにとって、信仰と政治的活動の関係はどんなものであったのか、それに対する松本さんの当時の考え方が、「[小さき声](#)」85号にあります。もうしばらく後の号には、世俗に於ける福音についての松本さん独自の考え方も述べられています。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2Ffeigenwille%2F>

---

**永遠の生命 - 「小さき声」 86号から** 投稿者：[田中 裕](#) 投稿日：2006年 3月 1日(水)10時19分

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

48秒

小さき声85号に続けて、[小さき声](#) 86号を復刻しました。松本馨さんが、「信仰による決断」に従って、再建された自治会の活動に深く関わりを持たれるようになった頃の心境が綴られています。

86号では、とくにルカ伝の「放蕩息子の譬」が論ぜられ、松本さんはその説話の核心が「永遠の生命」の問題であることを確認しつつ、次のように述べています。

「永遠の生命をぬきにしては政治活動も平和運動も無意味であります。私は小学校五年生のとき、二階で首を縊っている兄を発見しました。そのとき以来、「人生とは何か、何のために自分は生きているのか」という一生のテーマを与えられました。癩の宣告を受けたときより、観念ではなく現実の問題として、一日としてこの問題から離れて生きることが許されませんでした。それほどに私にとっては切実な問題であります。現在、私は自治活動をし、毎日あわただしい日を送っていますが、この問題は私から離れません。そしてこの問題の解決を十字架に見ています。十字架は人生とは何かの問いであり、何のために自分は生きているかの問いであります。同じくまたその答えでもあります。十字架を仰ぐとき、終末の希みが迫ってきて私を圧倒します。終りの日にキリストに再び会えるということが最初のそして最後の希望であり、私の疑問に対する最初の問いであり、最後の答えでもあります。罪と死のどん底で魂に十字架を刻印されたとき以来、終末への希みは強くなるばかりです。その前には自治活動も、政治活動も平和運動も、もの数ではありません。資本主義国家がよいか、社会主義国家がよいかも数に足らぬ程の小さな問題であります。私が自治会活動をしているのも、肉には罪の法則に仕えるということであり、カイザルのものはカイザルにということでもあります。パウロ的にいえば私は総てのものに対して自由であるが、総てのものに仕えるということでもあります。自治会活動家に対しては自治会活動家の如く仕え、政治家に対しては政治家の如く、平和運動家に対しては平和運動家の如く仕えることでもあります。十字架にあって自由であり、永遠の生命を与えられているからであります。放蕩息子の譬の中で、中心的な問題は永遠の生命ということではないでしょうか。」

また、このころの「小さき声」では、「死の家覚書」というシリーズが連載されていますが、これは松本さん御自身が「創作」であって、「実話」ではないと断って書いています。おなじことは、200号以降で連載された「愛による絶対隔離」シリーズについても言えますが、たとえ、登場人物に関して、モデルとなった實在の人物を想定することが出来たとしても、「死の家覚書」という「物語」は、ドストエフスキーの小説と同じように、「創作」という形式を借りて真実を表現することが目的であり、松本さん御自身が、そういうものとして読者に読まれることを望んでいたという事実を心に留めておく必要があります。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**心に留めます Re: 永遠の生命－「小さき声」 86号から** 投稿者：北風 投稿日：2006

[返信](#)・[引用](#)

年 3月 1日(水)20時14分34秒

>登場人物に関して、モデルとなった實在の人物を想定することが出来たとしても、「死の家覚書」という「物語」は、ドストエフスキーの小説と同じように、「創作」という形式を借りて真実を表現することが目的であり、松本さん御自身が、そういうものとして読者に読まれることを望んでいたという事実を心に留めておく必要があります。

では「弘善社」もあわてて直す必要はありませんでしたね。

**小さき声の復刻** 投稿者：田中裕 投稿日：2006年 3月 2日(木)15時54分20秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

真奈さんより、電子化されたテキストを送って頂いたので、新しく、[小さき声 132号](#)及び[小さき声 133号](#)を復刻しました。

前回の投稿で、松本さん御自身は「死の家覚書」や「愛による絶対隔離」を創作として読まれることを望んでいたと言いましたが、光田健輔やハンナ・リデルのような著名な人物は、そのまま実名で出てきます。このあたりが微妙なところですが、「弘善社」の場合は、他の箇所では正しく「好善社」となっていたので、これは口述筆記者の書きまちがいの可能性の方が大きいですね。

また、「愛による絶対隔離」には、「飯野重吉」牧師に宛てた書簡というのが出てきますが、これは、実在した「飯野十造」牧師と紛らわしい。この書簡の日付は、1913年にまで遡りますが、このころはまだ飯野十造牧師は、全生園や慰廢園とは関係をもっていませんので、この書簡は創作と見たほうが良いでしょう。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**うーむ。** 投稿者：北風 投稿日：2006年 3月 2日(木)19時13分34秒

[返信](#)・[引用](#)

オルトマンやハナフォードは取るに足りない人物か。  
「偉大な人物」には矛盾が多い、ということですか。

**オルトマンとハナフォードについて** 投稿者：田中裕 投稿日：2006年 3月 4日(土)10時23分52秒

[返信](#)・[引用](#)

> オルトマンやハナフォードは取るに足りない人物か。  
> 「偉大な人物」には矛盾が多い、ということですか。

どうしてそんなことが言えますか？

とるに足りない人物など、そもそも、この世に存在しない。  
根本的な意味で、全ての個人は対等だと私は思う。

そういうこととは別に、オルトマンや、ハナフォードの名前は戦前戦後の、全生園の秋津教会では、よく知られていたと思う。

日本基督教歴史大辞典 教文館 に次のような記述があります。  
(これは、「好善社」の棟居氏にご教示頂いたものです)

オルトマン Oltmans, Albert (1854. 11. 14--1939. 6. 12)

アメリカ・オランダ改革派教会宣教師。オランダのフローニンゲン県に生れる。1873年アメリカに移住、ホープ大学、ニューブランズウィック神学校に学ぶ。1986年(明治19年)、宣教師として来日。直ちに長崎・東山学院の院長に就任して3年間在職後、九州で伝道。1902-25(大正14)年、明治学院神学部教授。1903年、神学博士号を贈られた。1911年、好善社に入社。社団法人認可後の初代理事長ワイコフ、M. N. の死去により理事長に就任。伝道委員となり14年以降、毎月第4日曜日に第一区府県立全生病院(現・国立療養所多磨全生園)の伝道に当たった。

また対英米両国のMission to Lepers (MTL) の通信委員として関係を緊密にし、1926年アメリカ

MTLの東洋主事となり、日本各地の療養所をはじめ台湾、朝鮮半島、中国を歴訪。葬儀は明治学院と日本基督教会の合同葬で執行された。

〔文献〕『明治学院50年史』1927:  
『ある群像好善社100年の歩み』1978:米沢三二『A. Oltmans』1930. (藤原偉作)

ハナフォード Hannaford, Howard Dunlop (1887-1973. 6. 27)

アメリカ長老教会宣教師。米国オハイオ州に生れる。オーバン大学を卒業、シリア・プロテスタント大学教授を経て、1915(大正4)年来日。初めは京都、三重地方で伝道。1935(昭和10)年上京して、明治学院教授となった。オルトマンズから好善社を紹介され、1928年入社、オルトマンズの死去により後任理事に推され、慰養園、第一区府県立全生病院(現・国立療養所多磨全生園)の伝道に当たった。太平洋戦争の勃発で強制送還され、日本人抑留所で奉仕。1946年再来日。妻と共に明治学院の教壇に立ち、また好善社理事として、American Leprosy Mission, Inc.との関係を回復させ、藤原鉤次郎を助けた。28-31年、51-54年日本基督教団讚美歌改訂委員を務めた。オルガン奏者でもあった。

〔文献〕『明治学院100年史』1977:『ある群像 好善社100年の歩み』1978(藤原偉作)

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**得意のすり替え Re: オルトマンズとハナフォードについて** 投稿者: 北風 投稿日: 2006

[返信](#)・[引用](#)

年 3月 4日(土)12時54分34秒

- >> オルトマンやハナフォードは取るに足らない人物か。
- >> 「偉大な人物」には矛盾が多い、ということですか。
- >
- > どうしてそんなことが言えますか？
- >
- > とるに足らない人物など、そもそも、この世に存在しない。
- > 根本的な意味で、全ての個人は対等だと私は思う。
- >

そんな話をしているのではない。

「物語性」と「実在の人物」と「校閲」あるいは「考証」についてでしょう。松本さんが、二人について勘違い、あるいは誤認した事実をごまかした以前の論旨と今回は矛盾しているといっている。

論理は一貫しないとほころびが出るという話。

- > とるに足らない人物など、そもそも、この世に存在しない。
- > 根本的な意味で、全ての個人は対等だと私は思う。

こんなことを持ち出す話題ではない。ふんまに。

**誰が議論をすり替えているのか** 投稿者: 田中裕 投稿日: 2006年 3月 4日(土)16時29分28秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

それは、読者に判定して貰いましょう。これ以上、かみ合わない議論を続けるつもりはありません。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**無理に思い至らなくても、間違いは間違い。 Re: 小さき声の復刻** 投稿者: 北風 投稿

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

日: 2006年 3月 4日(土)18時38分28秒

それを認めない、あるいは「検討」しなくて、無理なこじ付けをして「議論がかみ合わない」というのは、少しおかしくないですか？  
まあ、もうこの件はよしますが。

>

>1) 前回の投稿で、松本さん御自身は「死の家覚書」や「愛による絶対隔離」を創作として読まれることを望んでいたと言いましたが、光田健輔やハンナ・リデルのような著名な人物は、そのまま実名で出てきます。このあたりが微妙なところですが、「弘善社」の場合は、他の箇所では正しく「好善社」となっていたので、これは口述筆記者の書きまちがいの可能性の方が大きいですね。

2) 松本さんは、もと、プロテスタントの秋津教会に所属していましたから、この教会堂建設に際して、ハナフォード理事が尽力したことはよくご存知だったでしょう。そこで「愛による強制隔離」の「物語」の中で、オルトマンズではなくハナフォードの名前を使われたのだと思います。

**伊藤赤人さんのことなど** 投稿者：[田中裕](#) 投稿日：2006年 3月 4日(土)21時44分53秒

[返信・引用](#)

金曜日は久しぶりに全生園の図書館に行きました。帰りに入院中の伊藤赤人さんのお見舞いに伺い、昭和25年に伊藤さんが国本衛さん達と共に出版した詩誌「灯泥」の創刊号のコピーを差し上げました。国本さんはもう退院されましたが、伊藤さんは暖かくなるまで、病棟で静養されるとのことでした。

「灯泥」創刊号は、昨年、岡山の聖心女子大に出張した帰りに、全生園祭りの展示の為に、長島愛生園の神谷書庫で複写したものです。この創刊号、伊藤さんは、表紙の挿絵を描かれ、また白浜博史というお名前で、詩を投稿されています。（全生園の図書館にも一部寄贈してありますのでご覧下さい）

伊藤さんは、詩、俳句を多く書かれています。2001年（70歳の時）より五行歌の創作を始められ、2004年9月に、五行歌集「望郷の丘」（市井社）を出版されました。この本の後書きに

「十代から作り始めた詩と、途中からではあるが、今も作り続けている俳句を差し置いて、後から始めた五行歌を出すことになり、いささか心苦しさを感している」

と書かれています。

五行歌  
初めて識った  
ポエム  
思いを  
一息に詠む

という五行歌に思いをたくし、「70歳でなければできないものを、残り僅ない時間ではあるが、作り続けて、ゆきたいと思う」と書かれています。

ところで、いずみの「愛徳会60周年記念誌」に、光岡良二さんの短歌と伊藤赤人さんの俳句が出ていましたので、紹介しましょう。

解（ほど）きものする妻のかたえに手伝いてやさしく過ぎぬ春のくもり日	光岡良二
癩園にも引越しということありてそのはかなごと幾たびかしぬ	同
荷物みな運び終りし日の暮れを妻と二人し猫連れにゆく	同
ひとひらの雛嚙栗が風に揺るるにさえおどろく心ふかく疲れおり	同
見るかぎり枯木のみなる風景を心象として過ぎしながき時	同

#### 風の音

朝風に触れて野菫咲きにけり	伊藤赤人
何処よりきしや雪虫雪恋ひて	同
行き処なきごとく蝸牛) ででむし這へにけり	同
ふと人の真顔を見たり虎落笛	同
手の平に落ちて淡雪消えにけり	同
銃声に貫かれけり冬木立	同
枯草にかがめばかさど風の音	同
花ひいらぎ暮れ初む方へ人帰る	同
枯野ゆくざん悔の如く夕焼けて	同
煌々と聖夜をともし神と在り	同

(1991年5月)

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**「小さき声」復刻** 投稿者：田中裕 投稿日：2006年 3月 7日(火)21時33分30秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

[小さき声 134号](#) および[小さき声 135号](#)をアップしました。現在、校正作業中です。

134号では、キリスト者と政治との関わりについて次のような言葉があります。

「キリスト者の政治活動は否定的政治活動であり、政治そのものに直接の結果を求めるとすれば、それは信仰とはいえないでしょう。政治はあくまでも相対的のもので否定的結果を望む以外はないからです。否定的結果とは政治に於ても十字架を負う事であり、政治そのものに希望を持ってはならぬという事です。キリスト者の希望は終末論的希望であり、私達の期待している結果は、最終的には神の支配だからです。このような終末論的希望の無い自治活動は私にとって無意味です。自治活動は、あくまでもイエスの死と生をこの身に負うことであります。よりはっきり云えば「隣人を愛せよ」の戒めに服従することです。この世界が如何に破れ、不信と悪の世界であっても、神はこの世界に独り子の血を流し、根底から支えてい給う、この一事を直視する時、私達はまた、この不信と悪の世界のために血を流すまで十字架を負わねばなりません。そうではないでしょうか。」

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**そんなにせせらなくても。** 投稿者：北風 投稿日：2006年 3月 8日(水)10時34分38秒

[返信](#)・[引用](#)

普通、校正したり校閲を済ませてから公表するもんだが。

**(無題)** 投稿者：田中裕 投稿日：2006年 3月 8日(水)12時04分58秒

[返信](#)・[引用](#)

＞ 普通、校正したり校閲を済ませてから公表するもんだが。

よく「監視」していますね。(笑)

掲示板を利用して、同志の方と共に校正作業をやっているの、校正まえの電子テキストをアップしたという意味。

一通り校正した後で、一般に公開するようにしています。

ただし、公開した後で、さらに誤植が見つかることもありますが、WEBでは、それほど神経質にならずに、後から誤植が見つかったとしてもその都度、リアルタイムで訂正するようにしています。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**合理性を欠く。** 投稿者：北風 投稿日：2006年 3月 8日(水)13時18分29秒

[返信](#)・[引用](#)

うーん。  
アップしたのを「校正」したんでは、「修正」がききませんから「同志」もどうしようもない。  
先ずは、「添付ファイル」で同志に送って、校正を協力してもらいのが合理的です。  
ま、そのほかにも矛盾・撞着はありますが、きりがないので止めます。

**(無題)** 投稿者：田中裕 投稿日：2006年 3月 8日(水)13時33分8秒

[返信](#)・[引用](#)

どうも北風さんとは波長が合わないね。

いつでも修正が効くのがWEBページの特徴です。

校正をやって頂いている方から、メールで連絡を受け次第、リアルタイムでWEB上に私が反映しています。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**田中さんに欠落した視点。** 投稿者：北風 投稿日：2006年 3月 8日(水)15時57分23秒

[返信](#)・[引用](#)

自分の文章ならいいとして、他人の、しかもなくなって自ら訂正の出来ない人の文章を扱っているんだよ。誤読されたら、著者への責任が取れないでしょう。また、校正を経る以前に見た人への「責任」をどう考えるの？

校正をちゃんとしてから公表するのが、亡くなった著者と生きて読む読者への最低の礼儀じゃないかね。

**つまり** 投稿者：北風 投稿日：2006年 3月 8日(水)16時05分26秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

そうした配慮を欠いて、あるいは、それに優先して、何故アップを急ぐの？ということ。

著者のため？読者のため？または、誰のため？

**一字位の誤植** 投稿者：北風 投稿日：2006年 3月 8日(水)18時27分53秒

[返信](#)・[引用](#)

という勿れ。業界では「校正恐るべし」といわれ、有名な誤植に「ちょっと事情があつて」というのを、むにやむにや、もうお分かりですね。あはははは。

**(無題)** 投稿者：田中裕 投稿日：2006年 3月 8日(水)22時42分7秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

WEB上に「アップしました」というとき、一般の読者に「公開した」というのとは違う、とご理解下さい。目次のページにリンクしていなければ、一般の読者にはまだ非公開です。この掲示板を使って校正作業を進めながら、その内容について議論しつつ読書会をするというのが、これまでのやり方でした。そのやりかたは、今後も続けます。

北風さんの仰ることも傾聴に値すると思いました。この掲示板をご覧になっていない一般の読者に複製版を公開する（目次のページにリンクする）のは、WEBに電子テキストをアップしてから、十分に時間をかけて校正作業を行った後にした方がよいですね。とくに一般公開を急ぐつもりはないので。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**いのちの歌** 投稿者：田中裕 投稿日：2006年 3月13日(月)21時46分27秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

松本馨は、ルカ伝の「放蕩息子の譬」の核心が「永遠の生命」の問題であると述べていた。

「永遠の生命をぬきにしては政治活動も平和運動も無意味であります。私は小学校五年生のとき、二階で首を縊っている兄を発見しました。そのとき以来、「人生とは何か、何のために自分は生きているのか」という一生のテーマを与えられました。癡の宣告を受けたときより、観念ではなく現実の問題として、一日としてこの問題から離れて生きることが許されませんでした。それほどに私にとっては切実な問題であります。」（小さき声 86号より）

「永遠」という言葉を我々はどのように理解すべきであろうか。内村鑑三は、「聖書の研究」93号（明治40年11月10日）の「花巻座談」のなかで、聖書で云う永遠の生命とは、果たして「永い生命であるか？」という根本的な問を出している。もし、「永遠の生命」が、死することなくして無限に永く生きることという意味であるならば、そのような「永生」を説く教えは、「朝に道を聞かば夕べに死すとも可なり」と云った中国の道徳家にも劣るであろう、と明言して、次のように云っている。

「私一個人の経験に於きましても、私が神より新たな真理に接したときに、此真理に接したれば今此時に死んでしまってもよいと思ふた事があります。神の真理に一分時間接すれば人生の苦痛はすべて償はれるのであります、真理とはかくも貴いものであります。必ずしも生命の永きを要求しません。」（内村鑑三全集 15巻、259頁、旅人さんの「晴読雨読」にもこの文書の複製版があります。）

つまり、永生などは、決してキリスト教本来の教えではない。量的に「永い生命」ではなく、「一分時間（瞬間）」の内にも体験される「いのち」の根源こそが、聖書のいう「永遠のいのち」

ち」である。「永生」を願うことの中には、死すべき定めにある人間的現実の拒否がある。そういう「永生」ではなく、生死の現実の根源にあって、ひとを真に活かしている「いのち」に目覚めることこそ、内村が理解している永遠の生命であるようだ。

私も、内村と同じく、無限に永い生命を望むと云うことのうちには、神々の如くならうとする不死への願望が潜む点に於いて、非キリスト教的なものがあると思う。

アッシジの聖フランシスの「平和の祈り」には、

「我等は、与えるが故に受け、ゆるすが故にゆるされ、おのが身を捨てて死するが故に、永遠の生命を得る」

という言葉がある。これは、カトリック教会、とくにフランシスコ会の教会ではミサの後でよく唱える祈りであるが、「死するが故に永遠の生命を得る」とは、ヨハネ伝の「一粒の麥」の譬えとおなじく、新約聖書の核心にあるメッセージである。それは、無限に永く生きようとする人間的な願望を否定している点で、むしろ、「朝に道を聞かば夕べに死すとも可なり」という言葉と共鳴している。

私は、最近、東條耿一の作品を読みかえす機会に恵まれたが、最晩年の彼の作品が、聖書的な意味での「永遠のいのち」をテーマにしていることに改めて気づかされた。

例えば、昭和17年7月の「山桜」に掲載された「病床閑日」という詩。東條は同年9月4日に亡くなっているから、遺稿「訪問者」を別にすれば、これが東條の最後の詩であるといってもよいかも知れない。

## 病床閑日

東條耿一

私はけふ 晝のひと時を  
庭の芝生に下りてみた  
陽はさんさんとそゞぎ 近くの樹立に松蟬が鳴いてあた  
私は緑のやは草を踏みながら 踏みながら  
そのやはらかな感觸を愛しんだ  
不思議なほど 妖しいほど 私の心にときめくもの  
一体この驚きは何だらう  
思へ寝台の上にはやも幾句――  
もうふたたび踏むことはあるまいと思つてみた  
この草 この緑 この大地  
私の心は生まれたばかりの仔羊のやうに新しい耳を立てる  
新しい眼を瞪る そうして私は  
私の心に流れ入る一つの聲をはつきり聞いた  
それは私を超え 自然を超えた  
暖いもの 美しいもの  
ああそれは私のいのち いのちの歌  
(「山桜」昭和17年7月号)

私は、この詩の最後に出てくる、「いのちの歌」という言葉に撃たれた。これこそ、かつて北條民雄が「いのちの友」と呼んだ東條耿一の作品の精神をもっともよく表すものではないだろうか。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**東條歌一について** 投稿者：エリカ 投稿日：2006年 3月14日(火)15時59分6秒

3月だといってもまだまだ寒い日が続いています。東條の詩が掲載されているのをみておもしろく書き込みたくなりました。  
わたしのようものが田中さんのような人にコメントするのは恐れ多いのですが、自分なりに愚見を述べさせていただきます。東條歌一はわたしの好きな詩人です。前に田中さんは東條歌一に出会い、今まで教会から離れていたが、教会にいくようになり、後退した信仰の火が燃え上がったという趣旨のことをおっしゃったのを記憶しています。  
それは東條歌一の中に神が住んでおられるということが立証されることになると思います。なぜなら聖書に「わたしの父がひきよせてくださなければ、誰もわたしのもとに来ることはできない」とあります。神が東條を通して田中さんを主のもとに導いたんだなと思いました。ビリーグラハムや本田弘慈氏のように多くの人を主のもとに導く人もありますが、東條歌一は田中さん一人かもしれない。しかし一人が大切であって、天では歓喜の声があがり、東條歌一の、手記、作品に神は祝福の雨を注いでおられると思います。  
あくまでわたしの主観であって、間違っていたらご指摘ください。  
東條はほとんど無名の詩人です。ハンセン病にかかわっている人でも知らない人が多いと思います。しかししゅうさんや田中さんの尽力により少しづつ読まれるようになりました。  
東條は苦難の道を歩んできました。しかし彼はこのように思っているのではないのでしょうか。「主はわたしの作品を世に表すために、また一人の人を主のもとに導くために、わたしの身体を鞭打ち、わたしを裸にされた……。主のみなほほむべきかな。」

**「永遠の生命」とは。** 投稿者：[旅人](#) 投稿日：2006年 3月14日(火)22時11分46秒

[返信・引用](#)

論語読みの論語知らずという誇りを甘んじて受ける用意をした上で、申し上げるのですが、内村の永遠についての考え方は、かなり複雑だという気がします。

田中先生がご指摘された個所では、確かに永遠の一瞬ともいえるべき永遠について語られていると思います。そして、それは内村の実験に基づくものだと思います。田中先生がこの永遠に関する考え方に同調されるのは、ご自分が真理を見出したときの喜びを想起されているのではありませんか。私にしても、聖書の言葉の意味が示された時、そのような喜びを多少なりとも感じました。そして、その喜びは、ある時渥美半島の砂浜で海に向かって釣竿をびゅーっと振った時の開放感に通うものでありました。

しかし、内村がその愛嬢ルツ子さんを失った時に書かれた文章では、復活と再会の希望が語られています。そして、神の国における生命は、永遠の時間であることを示唆しているように思います。その考え方は、決して神学的な結論ではなく、愛嬢の死と共に受けた神からの啓示であるように思います。

私としては、真理を知る喜びは、永生を充実させる一瞬一瞬であり、それが時間なしに続くのではないかと思っていますが、永遠の時間などということは、実際のところ、私には想像不可能なことです。

ところで、ヨハネの黙示録第21章にある「見よ、神の幕屋が人の間にあって、神が人と共に住み、人は神の民となる。神は自ら人と共にいて、その神となり、彼らの目の涙をことごとくぬぐい取ってください。もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もない。最初の者は過ぎ去ったからである。」という聖句に触れて、多くの方が私同様に永遠を感じられているのではないのでしょうか。ヨハネ黙示録がどこまでキリスト教的かは知りませんが、永遠を求める気持ちは、貴いものではないのでしょうか。

**補足** 投稿者：[田中裕](#) 投稿日：2006年 3月15日(水)13時32分44秒

[返信・引用](#) [編集済](#)

エリカさん、投稿どうも有り難うございました。これからも、どうか遠慮無く書き込んで下さい。

全生園のなかにある愛徳会の聖堂でのミサに与るようになってから一年半以上が経過しました。私に可能な限り、戦前、戦後を通して信徒の皆様の手書かれたものを散逸しないように記録し編集したいと思っています。療養所の皆様との関わりは、これまで余りにも希薄でした。私は、聖書の言うような「よきサマリヤ人」では決してなかったので、一年半くらいの歳月で「隣人」になれるとは思っていません。私は、むしろ學者やパリサイ人のごとき存在でした。

しかし、最近、松本馨さんの「小さき声」を読んでいるうちに、よきサマリヤ人の譬えで、「隣人となったのは誰か」という問に対して、松本さんが関根正雄やバルトを引きながら、「ここで隣人となったのはイエス御自身だ」と書かれた箇所を読み、おおいに力づけられました。（近いうちにこの号も復刻します）

東條歌一さんや松本馨さんの語る「聲」を聞き、それらを記録・編集する作業を通じて、「よきサマリヤ人」では決してなかった私に対して、彼等の方が、そして彼等を通して、キリスト御自身が私の「隣人」になって下さったような気がしています。

旅人さん、内村鑑三の思想について私は詳しく知っているわけではありません。娘さんが亡くなられたときの内村の文章について教えて頂き有り難うございました。これからもご教示の程、宜しく願います。

キリスト教でいう「永遠」については、また稿をあらためて書いてみたいと思っています。ここでは、東條耿一の詩「病床閑日」の最後の聯を再度引用することで、前回の投稿の補足をいたします。

もうふたたび踏むことはあるまいと思つてみた  
 この草 この緑 この大地  
 私の心は生まれたばかりの仔羊のやうに新しい耳を立てる  
 新しい眼を睜る そうして私は  
 私の心に流れ入る一つの聲をはつきり聞いた  
 それは私を超え 自然を超えた  
 暖いもの 美しいもの  
 ああそれは私のいのち いのちの歌

東條はこの詩が発表されてから二ヶ月後に亡くなるのですが、結核性の腹膜炎を併発し、非常に体調が悪い時期であった。この詩は、そういう苦しい病床の中で、比較的、病が小康状態であったときに詠まれたものと思います。

この詩で、「新しい眼を睜る」という箇所注目したいと思いました。もはや「古い眼」でそとなる自然をみているのではない。そこで「私を超え、自然を超えた」声、鳥たちの囀りを聴いていると、それは、もはや「束の間の消えゆくもの」としてではなく、「永遠のいのち」として、そして同時に「私のいのち」として聴かれています。「この草 この緑 この大地」は、この世のものですが、そこにおいて、「永遠なるもの」が先取されているような、そういう響きがあります。

前回引用しました、アッシジのフランシスの祈りは、様々なバージョンがあってあるバージョンでは「永遠の生命を得る」ではなく「永遠の生命に目覚める」となっています。眠りから覚めて、新しい眼を睜るとき、どのような情景が見え、どのような聲がきこえるのか。それが病床の中にいた東條の、この世での経験として語られている—そういう印象を受けました。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**小さき声の復刻** 投稿者：田中裕 投稿日：2006年 3月16日(木)21時40分41秒

[返信・引用](#)

[小さき声 136号](#)および[小さき声 137号](#)の校正が終わりましたので、WEBの目次にリンクしました。この二つの号の内容に関する感想をどうかお寄せ下さい。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**「小さき声」137号に関してふと思ったこと。** 投稿者：旅人 投稿日：2006年 3月17日(金)

[返信・引用](#)

17時07分2秒

この号には西暦の話が出てきます。そこで、変な疑問が湧いてきました。それは、西暦の紀元元年がキリスト誕生の年だとして、何故生まれた日が1月1日とされなかったのだろうかというものです。どなたかその理由をご存知なら、教えてください。

それはともかく、日本の正月はかなり変わったという気がします。その一番は元日から営業している商店が増えたことです。その一方で、神社仏閣に初詣をされる方の人数は相変わらず多いと思いますが、風習として初詣をされている方が多いように思います。そのような社会状況で、「新年の祝い祭りをキリストによる祭りに」すること自体に、あまり意義があるようには思えません。しかし、「無教会の信仰は内村以来、個が強調され、聖書の共同体（エクレンシア）の自覚が欠けています。」という指摘を否定し去ることはできません。この指摘は、松本さん御自身の反省の上にも立っているようにも思われます。個の強さは、松本さんの信仰の体質であると思えるからです。

この号の最後の方に、『体制の外に立ち、戦争に反対し、日本の罪を自ら進んで負うもの、予言者的エリートでなければ、無教会者の系列に入ることができないのだろうか。「敗戦の神義論」を読み、自分の自治活動の経験から思いました。』と書かれています。この間は事実を少し見落としているような気がします。「日本の神学」（古屋安雄／大木英夫著、ヨルダン社）の219ページには、「あの戦時中の厳しい弾圧と迫害にもかかわらず、非戦主義に立ち天皇主義にも屈しなかったキリスト者は、知識人ならぬ民衆、あるいは民衆に近い人だった。灯台社の明石順三、無教会の信者で浴場経営者であった浅見仙作、さらに農民の本田作平たちである。」という記述があります。したがって、体制に対する抵抗を貫く者は、社会科学を修得した知識人である「予言者的エリート」に限らないと思います。

Re: 「小さき声」 137号に関してふと思ったこと。 投稿者: 田中裕 投稿日: 2006年 3月

[返信・引用](#)

18日(土)11時20分18秒

> この号には西暦の話が出てきます。そこで、変な疑問が湧いてきました。それは、西暦の紀元元年がキリスト誕生の年だとして、何故生まれた日が1月1日とされなかったのだろうというものです。どなたかその理由をご存知なら、教えてください。

もともとローマ歴（太陰太陽暦）では、マルティウスの月（March=3月）が年の始めであったようです。2月が閏月であるのはその名残のようです。年の初めをヤヌスの月（January=1月）とすることは、紀元前45年にシーザーがユリウス歴（太陽暦）を定めてからのこと。これは紀元元年をキリスト生誕におくことよりも先に決まっていたということでしょう。

> それはともかく、日本の正月はかなり変わったという気がします。その一番は元日から営業している商店が増えたことです。その一方で、神社仏閣に初詣をされる方の人数は相変わらず多いと思いますが、風習として初詣をされている方が多いように思います。そのような社会状況で、「新年の祝い祭りをキリストによる祭りに」すること自体に、あまり意義があるようには思えません。しかし、「無教会の信仰は内村以来、個が強調され、聖書の共同体（エクレシヤ）の自覚が欠けています。」という指摘を否定し去ることはできません。この指摘は、松本さん御自身の反省の上に立っているようにも思われます。個の強さは、松本さんの信仰の体質であると思えるからです。

カトリック教会では、1月6日を公現祭（epiphany）として、クリスマスに続いて祝いますね。公現祭というのはキリストが「世に現れた日」というので、その起源はクリスマスよりも古いようです。いずれにしても、こういう日付は聖書に書いているわけではありませんが、教会の伝承としてうけつがれてきたものでしょう。

>

> この号の最後の方に、『体制の外に立ち、戦争に反対し、日本の罪を自ら進んで負うもの、予言者的エリートでなければ、無教会者の系列に入ることができないのだろうか。「敗戦の神義論」を読み、自分の自治活動の経験から思いました。』と書かれています。この間は事実を少し見落としているような気がします。「日本の神学」（古屋安雄／大木英夫著、ヨルダン社）の219ページには、「あの戦時中の厳しい弾圧と迫害にもかかわらず、非戦主義に立ち天皇主義にも屈しなかったキリスト者は、知識人ならぬ民衆、あるいは民衆に近い人だった。灯台社の明石順三、無教会の信者で浴場経営者であった浅見仙作、さらに農民の本田作平たちである。」という記述があります。したがって、体制に対する抵抗を貫く者は、社会科学を修得した知識人である「予言者的エリート」に限らないと思います。

仰るとおりと思いました。松本さんは主として矢内原門下のクリスチャンを念頭においていたのでしょう。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

「小さき声」を聴くこと 投稿者: 田中裕 投稿日: 2006年 3月18日(土)22時45分50秒

[返信・引用](#) [編集済](#)

「聖書は読むものではなくて聴くものなのだ」ということを、私はあるベルギー人の神父から云われたことがある。読むことと書くことも大事ではあるが、生きた言葉というものは、聴く言葉、語る言葉なのだということである。日本の信徒が、「言葉の典礼」の時に、紙に書かれた聖書の文字を追いながら朗読を聴いているのが彼にとっては不思議でならなかったらしい。彼にとっては「活字」はすこしも生きていない言葉、言ってみれば記憶のための補助に過ぎないのであった。生きた言葉とは、聴く言葉であり、書物に頼らずに、自らが語る言葉なのであった。

松本馨さんの「小さき声」を復刻しながら、私はこの神父のことを思い出した。松本さんにとって聖書とは、何よりも聴くものであり、また、それについて語るものであり、そして何度も暗誦する内に、それを記憶し、いつでも必要に応じて、書物からではなく、自らの記憶の中からとりだして語ることのできるものだったのではなかったろうか。

松本さんの場合、聖書を朗読してくれる人がおり、また、自分のメッセージを口述筆記する人が常にいた。これは非常なハンディキャップであったように思う人が多いが、けっしてマイナスばかりであったとは言えない。松本さんと聖書との対話は、完全な孤独の中でおこなわれたのではなく、常に「汝」と呼びかけることの出来る隣人を前にして行われたのである。たしかに、自分自身で誤植をチェックしたり、資料にあたって正確を期すということはできなかったから、細々とした事実関係に関しては、思い違いや誤解が時々見受けられる。そのことを否定するつもりはない。しかし、松本さんのいっていることは、たとえどれほど極端に見えたとしても、大筋に於いて事柄の本質を突いていたという印象を与える。それは、彼の言葉が常に聖書に基づいた生きた「声」であったからだろう。

「小さき声」を復刻するに際しても、私はもとのテキストが持っていた対話性というものを見失わないようにしたいと思っている。復刻本を作るというプロセスの中で、松本さんの生きた言葉に触れることを大切にしていきたい。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

「小さき声」考 投稿者：旅人 投稿日：2006年 3月19日(日)08時23分29秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

田中先生の、『「小さき声」を復刻するに際しても、私はもとのテキストが持っていた対話性というものを見失わないようにしたいと思っている。復刻本を作るというプロセスの中で、松本さんの活きた言葉に触れることを大切にしていきたい。』というお言葉には、全く同感です。

ところで、「小さき声」自体は、松本馨さんご自分の声を指して言っておられるのだと思います。その声にたとえば、旧約聖書の「列王記上第19章でエリヤが聞いた「静かにささやく声」をダブらせて解釈するのは、ご本人の意図に合わない美化であるように思います。ただし、これは一般論として述べているのであり、特定の人のことを言っているではありません。

「小さき声」を今まで読んだ限りで言えば、松本さんが聞いて魂を揺さぶられた声は、何よりもイエス様が十字架上で大声で叫ばれた「エリ、エリ、レマ、サバクタニ。」(マタイによる福音書 27:46)という声であり、裏返せば神の沈黙であったと思います。

私の今の最も大きな関心は、松本さんが色々な場面で信仰による決断をされた時、どのような声を聞かれたのかということなのです。

エリヤの聴いた声 投稿者：田中裕 投稿日：2006年 3月19日(日)16時27分7秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

列王記の19:11-13の該当箇所は次のようなものです。(新共同訳による)

「エリヤは起きて食べ、飲んだ。その食べ物に力づけられた彼は、四十日四十夜歩き続け、ついに神の山ホレブに着いた。エリヤはそこにあった洞穴に入り、夜を過ごした。見よ、そのとき、主の言葉があった。「エリヤよ、ここで何をしているのか。」エリヤは答えた。「わたしは万軍の神、主に情熱を傾けて仕えてきました。ところが、イスラエルの人々はあなたとの契約を捨て、祭壇を破壊し、預言者たちを剣にかけて殺したのです。わたし一人だけが残り、彼らはこのわたしの命をも奪おうとねらっています。」主は、「そこを出て、山の中で主の前に立ちなさい」と言われた。見よ、そのとき主が通り過ぎて行かれた。主の御前には非常に激しい風が起り、山を裂き、岩を砕いた。しかし、風の中に主はおられなかった。風の後には地震が起こった。しかし、地震の中にも主はおられなかった。地震の後に火が起こった。しかし、火の中にも主はおられなかった。火の後に、静かにささやく声が聞こえた。それを聞くと、エリヤは外套で顔を覆い、出て来て、洞穴の入り口に立った。そのとき、声はエリヤにこう告げた。「エリヤよ、ここで何をしているのか。」

個人的な経験にここで言及するのを許して下さい。私が今から25年ほど前に今井館で、関根正雄の旧約聖書講義を聴いたとき、その主題は旧約聖書に於ける「沈黙の声」というものでした。旧約聖書では、言葉だけでなく沈黙も又主題となる。共同訳聖書で、「静かにささやく声」と訳されているヘブライ語を、関根正雄は「火の後で、かすかな沈黙の声があった」と訳しました。私は、関根正雄のこの旧約講義に、はじめて目を開かれる思いがしたものです。

講談社の「古代イスラエルの思想家達」275ページ以下で関根正雄は、上の該当箇所を次のように釈義しています。

「神の不在の確認の後の「声」は、テリエン(旧約学者)の考えるような神の現在の自覚の準備云々という程度のリアリティではなく、すでにそれ自身神の霊的現実であったと我々は解する。だからこそ、この声ならざる声を聞いてエリヤはその顔をマントで覆い、出て行って洞窟の口に立ったのではないか。(中略)沈黙の声すら霊的に聞けないものに、神はどのようにして語り得たであろう。肉の耳をもってではなく、霊の耳をもって神の声を聞いた経験のない人が、「神は語られる」といってもそれはテキストをなぞっているにすぎない。(中略)エリヤの聴いた「沈黙の声」についてデイヴィッドソンが1970年の論文で記していることは我々には示唆的である。風や地震や火を通してという今まで受け入れられてきた信仰のカテゴリーが死に絶えるときに、神は新しく見出される、という意味のことをデイヴィッドソンは言っているのである。」

私は、このエリヤの聴いた「沈黙の声」を、松本さんの「小さき声」に重ねて読んでいます。それが、私の松本さんに対する根本的な関わり方であるといつてよいでしょう。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

[返信](#)・[引用](#)

**田中先生、貴重な経験談をお教えいただきありがとうございました。** 投稿者：旅人 投稿

日：2006年 3月19日(日)20時38分7秒

ただし、私には関根正雄の釈義は、良く分かりません。宜しければ、さらに御解説いただけないでしょうか。また、「かすかな沈黙の声」という表現は、たとえかすかでも声があればそれは「沈黙」ではないわけですから、これは敢えて矛盾した表現を使うことにより、常人には理解しがたいことを言おうとされているのだと思います。そうだとすると、関根正雄は、どういふことを言いたかったのでしょうか。

エリヤのホレブ山におけるこの場面を通して考えれば、風あり、地震あり、火ありで、主は沈黙されていないと思います。また、列王記上第19章の15節～18節には、残りの者の思想を含む、主が語られた言葉が記されています。それを考慮すると、「静かにささやく声」は、自己への執着と沈潜(=洞穴)からの呼び出しの声であったと思います。このホレブ山上の物語は、出エジプト記第20章の18節から21節の情景を想起させると共に、民の不在を強く感じさせます。また、出エジプト記のその個所ではモーセが密雲に近づいてゆくわけですが、エリヤの場合には、暗い夜を過ごして朝日が洞窟内へ差し込んでくる明るい情景が想像されます。そのような情景が「静かにささやく声」として、エリヤの心に響いたように思えます。

**エリヤの聴いた声 補足** 投稿者：田中裕 投稿日：2006年 3月19日(日)22時16分13秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

> ただし、私には関根正雄の釈義は、良く分かりません。宜しければ、さらに御解説いただけないでしょうか。また、「かすかな沈黙の声」という表現は、たとえかすかでも声があればそれは「沈黙」ではないわけですから、これは敢えて矛盾した表現を使うことにより、常人には理解しがたいことを言おうとされているのだと思います。そうだとすると、関根正雄は、どういふことを言いたかったのでしょうか。

「沈黙の声」という表現は私にとっては自然です。そして聖書自体がそのような声に満ちているようにさえ思われるのです。

たとえば、神の創造された世界は「沈黙の声」を語ります。「話すこと」なく、「語ること」なく、その「声」も聞こえないのに、「天は神の栄光を語り、大空は御手の業を示し、昼は昼に語り伝え、夜は夜に知識を送る」(詩編19)

このような栄光に満ちた沈黙だけでなく、試練のなかでの沈黙もある。沈黙を破る言葉があるだけでなく、言葉を破る沈黙というものもある。聖書の中で示される「沈黙」を理解することによって、はじめて我々は聖書の言葉を理解できるということがあると思う。

やかましく響き渡る声よりもはるかに我々の心に響く沈黙というものがある。そして聖書自体、様々な箇所ですういふ「沈黙の声」を主題としています。

そういう「沈黙の声」を旧約聖書の様々なコンテキストの中で聴くということ私は関根正雄の旧約講義から教えられました。そして、それは決して関根正雄だけのことでなく、現代に生きるユダヤ教徒の(旧約)聖書釈義のなかにも見られるものであることを後から知りました。

たとえば、アンドレ・ネエルは『言葉の捕囚－聖書の沈黙からアウシュビッツの沈黙へ』(西村俊昭訳 創文社 昭和59年)のなかで、問題になっている列王記の箇所について次のように言っています。

「神は嵐の中にも、つむじ風のなかにも、火の中にも(カルメル火)おられない。かれはくささやくような小さき声>コル デママー ダッカー (19-12)のなかにおられるのだ。この表現もまた、きわめて皮肉な表現である。というのはそれは、神の唯一の声は「その沈黙」であることを、人間に教えているからである。こうして、二度の逆転がカルメルとホレブの継続場面の結合の中で同時に行われる。言葉の観念は価値を失い、沈黙の観念は積極的な価値に達する。神の言葉は自動的ではない。それは無価値であることを表明しうるし、失敗をももたらさうのである。また、沈黙はもはや神の怒りないし神の拒否のしるしではない。それは言葉と同様、またそれ以上に、神の「現在」を表現する。この二枚織りの絵を通して、神の沈黙は象徴を変える。不活動の水準から、生命の水準に達する。カルメルの場面の夕べ、民は声を揃えて、「言葉」と「応答」の神こそ、生ける神と叫んでいた。そして今、ホレブの場面の夕べ、預言者エリヤは孤独のなかで理解する。生ける神とは「沈黙」と「引退」の神であることを。(中略)聖書は、たといそれがか細くとも、「沈黙の声」を語る時、聖書自身が我々に聴くように招いているのではないだろうか」

かつては「言葉」と「応答」という雄弁なる対話の(政治的)世界にいた預言者も、孤独の中で、生ける神の「沈黙の声」に耳を澄ませます－「沈黙」と「引退」のただなかで、彼も又、自らの沈黙の言葉を語るでしょう。

<http://111.teacup.com/mejoro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**Re: エリヤの聴いた声** 投稿者: [文枝](#) 投稿日: 2006年 3月20日(月)19時47分4秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

今晩は 読書会になってより初めての投稿です。  
 > 列王記の19:11-13の該当箇所は次のようなものです。(新共同訳による)  
 ↑のテキスト、旅人さんも気付いておられるようですが、  
 列王記 上 19章8節~13節ですので、ご確認ください。

> 私は、このエリヤの聴いた「沈黙の声」を、松本さんの「小さき声」に重ねて読んでいます。それが、私の松本さんに対する根本的な関わり方であるといつてよいでしょう。同感です。  
 聖書の理解は、数学のようにきちっと答えが決まっているものではありません。己をむなしくして、神を仰ぐとき、自然と答えが示されるものです。話題になっている「沈黙の声」も物理的現象の声でなくとも、きちっと聴こえてきます。松本さんの「小さき声」は、キリスト教への文書伝道の一環として発行されたと認識していません。  
 神学ではなく、十字架に死に三日目に復活した、イエス・キリストの足跡を辿りつつ、生きるための、信仰入門書です。  
 この、読書会が発展しないのは、あまりに学術的すぎるからではないでしょうか。エリカさんのような素朴な投稿が続けば、松本さんも天国で喜んでくださるでしょう。失礼しました。

**いのちの歌によせて** 投稿者: [田中 裕](#) 投稿日: 2006年 3月20日(月)22時07分34秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

文枝様、投稿有り難うございました。いろいろと反省させられることばかりですが、これからもどうかよろしくお願い致します。

昨日の日曜日、愛徳会のミサに出た後、図書館に立ち寄りましたら、国本さんにお目にかかりました。先日差し上げた「灯泥」の創刊号を、読みたいという方がいるので、御自身でコピーしておられました。国本さんは「灯泥」の創刊号以外の他の号も捜しておられましたが、図書館には見あたらなかったようです。どなたか、ハンセン病図書館で「灯泥」のバックナンバーをご覧になった方はいらっしゃいますか。(創刊号だけは私が寄贈しましたが)

ところで、私は、現在、東條耿一の作品一詩・小説・戯曲・随筆・手記などを著作集に纏める作業を3月初めより、しゅうさんと共に進めています。これは、全生園のハンセン病図書館に印刷された製本版を二部納めるためです。

一昨年の朗読会以後、多くの作品を発見しましたので、[東條耿一著作集](#)もほぼ全集に近い形になりました。そのおかげで、彼の作品をもういちど読み直す機会にも恵まれました。

私のもっとも好きな詩が、まえにここで紹介しました東條の「病床閑日」です。その最後にくる

私の心は生まれたばかりの仔羊のやうに新しい耳を立てる  
 新しい眼を睜る そうして私は  
 私の心に流れ入る一つの聲をはつきり聞いた  
 それは私を超え 自然を超えた  
 暖いもの 美しいもの  
 ああそれは私のいのち いのちの歌

という箇所にもっとも惹かれました。私は、もし東條耿一の作品集一かならずしも詩だけに限りませんが一を特徴づけるものは何かと問われるならば、個人的には「いのちの歌」だと答えるでしょう。

東條耿一の晩年の随筆にも私は惹かれます。聖三木図書館の書棚の奥に眠っていた昭和16年の雑誌「[聲](#)」に掲載された彼の[手記](#)との出会いは忘れることが出来ません。

「山桜」にも[草平庵雑筆](#)というエッセイがあり、彼の晩年の心境を伺うことが出来ます。東條の晩年の随筆や詩について、皆様のご感想などお聞かせ下されば幸甚です。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**「灯泥」について** 投稿者: [エミ](#) 投稿日: 2006年 3月21日(火)18時48分39秒

[返信](#)・[引用](#)

「灯泥」については、ハンセン病図書館では見たことがありませんでした。去年、全生園まつりのコミセンにおける図書館展示準備の時点で、欠号ありのセットを伊藤さんからお借りしました。それを展示に使用し、その後、(おそらく全号揃えて復刻等を考慮されてのことと思いますが、)

友の会代表のお手許にまわっています。  
アリスさんや私も、手にとってみたくて、去年から順番待ちの状態です。

「灯泥」について 投稿者：真奈 投稿日：2006年 3月21日(火)23時29分18秒

[返信・引用](#)

エミさん  
こんばんは

「灯泥」については、友の会掲示板に↓のような書き込みがありましたね。  
第7号の国本さんの詩「黎明・・・」が素晴らしいので、読売新聞に載った国本さんの写真をつけてあちこちに送りました。展示会のあとどうなっているのでしょうか？ぜひ読みたいと思っています。

=====

[482] 灯泥。 投稿者：紙魚 投稿日：2005/10/23 (Sun) 10:21

るるるるる。

はい。紙魚です。

紙魚さん急いできて。いま、伊藤さんのところにいるんだけど、『灯泥』が見つかったのよ。

はい。でも、今日は展示の当番だから、4時までここを動けない。

うーんじれったいわね。じゃ、四時過ぎたらすぐに来て！プツン。つー、つー。

はい。あももし、ももし・・・・・・。

・・・・・・・・・・・・・・・・

こんにちは。

『灯泥』の同人は、いま僕と国さんしか残っていない。苜さんは、栗生だし。昔は、そろっていたんだけど、光岡さんなんか借りに来てそのままになったりして、いまこれだけしか残っていない。国さんも苜さんも手元にはもうないといっているから、もう、あるとすれば当時の読者のところしかないだろうね。  
友園の読者が保存してくれていたかもしれない。

では、インターネットで公開して、保存している人がいないか呼びかけてみましょう。

『灯泥』

第二集（表紙に新年号とあり）昭和28（訂正・26年）年1月15日発行。

国本昭夫 右川斗思 奥隆治 船越稔美 苜雄二 白浜博史

第三集（表紙は二月号）昭和28（訂正・26年）年2月15日発行。

上記のほか、鹿島及里。

第四集（三月号）昭和28（訂正・26年）年2月15日（3月の誤記か？）発行。

三田遼 高橋利根二が加わる。

第五集 昭和26年4月15日発行。

比良田信吉参加。

第六集 昭和26年5月15日発行。

島根きよ志 飯田恒夫 双葉少武参加。

第七集 昭和26年6月15日発行。

関道雄さんか。

第11集 昭和27年4月15日発行。

ところで『灯泥』創刊号に国本衛さんの、「朝鮮人学徒兵に贈る」詩があって、創刊号が見つからないため、これが幻の詩といわれていた。ところが、見つかった『灯泥』をばらばらめくっていると、第7集に「黎明—第二次大戦に戦没した朝鮮兵にこの一編を贈る」という詩があって、ちょっと違うが、ご紹介。

黎明—第二次大戦に戦没した朝鮮兵にこの一編を贈る

銃声が鳴った——

脳髓を打抜かれた友は

片目を奪われた友は

片肺を破られた友は

——君等は

又 さまよはなければならないのだ。

鴉が頭上で騒々しい

鴉の奴めらが  
 又しても君等の兄弟が  
 草群に艶れるのをまってるのだ。  
 君等を  
 忠一であり、英一であると 云った奴めらだ。  
 今はどうだ。  
 白い流し目で 赤い舌を出して  
 盗っと犬の目をしてゐるではないか。  
 吹雪の谷間で  
 氷河の流れで  
 君等の血は  
 凍結してゐる。  
 ——春が来れば紅の花が咲きます——  
 軍靴をはいた歌人は  
 そんな空々しい事を つぶやいたものだ。

山のような屍の上に  
 帝国軍人の勲八等が  
 偉そうな顔をしていやがった  
 それで 誰が涙を垂らしたというんだ。  
 死ぬことが忠烈で名譽なら  
 生きて還った者はどうなんだ。

高粱畑で  
 愛に飢えた君等の  
 悲しい最後の叫び声を  
 新聞はテンノウヘイカ万歳と  
 報道されたではないか。  
 君等に帰る祖国がなかったから  
 地獄へ行けと  
 神の詔書があったと云うのか  
 最早。  
 銃口を夢想してはならぬ、  
 司令官をあがめてはならぬ  
 兄弟をふみ越えてはならぬ  
 幾千 幾万の声が  
 どよめいている 雲の彼方  
 祖国を遁れた  
 はらからの 血の叫びが  
 夢があったのは  
 地球上に人間が現れた頃  
 鴉めが生まれたのは  
 その夢を食うためだった  
 人間に肉を ついばむ鳥だった  
 人間の思想を奪うためだった  
 鴉はあく事を知らぬのだ。  
 鴉の臍物は無尽蔵に長かったのだ。  
 死後の悔恨よ。  
 おゝ 魂よ。  
 裸になった女の ガラス箱を見よ。  
 孔のあいた 街の風景を見よ。  
 火口地帯に蠢く 人間の腐肉を見よ。  
 もりあがり もりあがる 骨灰を見よ。  
 そして  
 どろどろの溶岩の流れに  
 声を失った 片目が  
 青白い光を放っているのを知るだろう  
 墓穴には  
 ぼろぼろの軍服が 永遠にさまようのを知るだろう  
 だが  
 すべてが終ったのではない  
 君等の頭上では  
 無数の旗が波のようにはためいている  
 無言の嵐となって  
 血の滴る頭をかかえた友らの……  
 義足を奪われた友らの……

遠く  
 遠く  
 砲声はとどろき  
 黎明の空を  
 君等の歌声が 肉色に染めていた——。

あ、それから『石器』もあるよ。  
え！ それは次のコマでご紹介。

**Re: 「灯泥」について** 投稿者：紙魚 投稿日：2006年 3月22日(水)06時59分5秒

[返信・引用](#)

- > 「灯泥」については、ハンセン病図書館では見たことがありませんでした。
- > 去年、全生園まつりのコミセンにおける図書館展示準備の時点で、
- > 欠号ありのセットを伊藤さんからお借りしました。
- > それを展示に使用し、その後、
- > (おそらく全号揃えて複製等を考慮されてのことと思いますが、)
- > 友の会代表のお手許にまわっています。
- > アリスさんや私も、手にとってみたくて、去年から順番待ちの状態です。

全冊そろえて複製を作る準備をしています。  
ただし、ハンセン病図書館にもかなりあります。  
書庫に入ってすぐの棚に、透明ファイルに入れて整理してあります。

全集の作業が大詰めで、出来上がるのはもう少しお待ちください。

**灯泥** 投稿者：田中裕 投稿日：2006年 3月22日(水)08時02分24秒

[返信・引用](#) [編集済](#)



エミさん、真奈さん、紙魚さん、  
灯泥に関する情報をお教え下さり、  
有り難うございました。  
そういえば、先日、国本さんは、ハンセン病図書館で  
「黎明」の掲載されている号を捜しておられました。  
昭和25年12月15日発行の「灯泥」創刊号の表紙  
をアップしました。  
挿絵は、白浜博史（伊藤赤人）さんの描かれたもので  
す。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**「小さき声」より** 投稿者：田中裕 投稿日：2006年 3月23日(木)22時27分41秒

[返信・引用](#) [編集済](#)

[小さき声 87号](#)および[小さき声 88号](#)を複製しました。(まだ目次からはリンクしていません)

87号は開園60周年の記念行事のことが出ていますが、

「六十周年記念事業としては、癩文献の蒐集と図書館の設立を計画しています。現在の図書館には北條民雄の蔵書をもとにした北條文庫がありますが、残っているのは書棚だけということです。癩文献も散在して余りありません。時機を失した感がありますが、癩文献を集めておかねばと考えています。そして将来は全生園の歴史編纂と自治会の患者運動史を編纂しておかねばと考えています。」

のように、入所者の視点から編纂されるべき全生園の歴史（倶会一処）、患者運動史、および「ハンセン病図書館」設立についての松本さんの構想が語られています。

88号では、1969年当時の学生運動、新左翼運動にかんする松本さんの次のようなコメントがあります。

「こうした体制と反体制の中に在ってそのどちらかに立たされているのがキリスト者です。過激学生を支持するキリスト者は、体制内のキリスト者はキリスト者で無いかの如く極言します。体制内のキリスト者は反体制のキリスト者をキリスト者でないかの如く極言します。私は

信仰には保守も革新もないと思っています。保守革新は世俗内に生きるキリスト者のこの世の生でありましょう。信仰とは無縁のものです。信仰はこの世の支配を受けません。神の支配だけを受けます。私達はイエスキリストにより、この世を越えた神の支配を受けると同時に、肉だけはこの世の支配を受けます。キリストはこの世の支配を受けませんが、肉にてはこの世の支配を受けます。それが十字架であり、復活であります。私たちは彼の死と生を受けることにより、この世の世界からまぬがれていると同時に、この世の支配を受けます。つまり霊にてはこの世の支配から解放され、肉にてはこの世の支配を受けます。保守か革新かは、肉なる私が一時的に身を寄せる場所に過ぎません。それ以上に意味は無いでしょう。肉にてこの世の支配を受けた十字架の義を仰ぎつつ、肉の支配から解放されるのを待ち望んでいます。それが終末への期待であります。この終末への期待に生かされるが故に、この世に対してもそれが絶望的であればある程、勇気を持って改革につとめることができます。それは十字架の義と生が立つ方向でなければなりません。悪や不正や暴力が排除される改革でなければならないでしょう。義と公平とあわれみが立つ改革でなければならないでしょう。」

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**ビデオ拝見** 投稿者：田中 裕 投稿日：2006年 3月24日(金)09時47分56秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

ガラクタ箱さんのビデオ室で、先日の国本さんの出版記念会の時のビデオが見られますね。そのほかに、全生園の四季を映した「暦」、「春」と「秋」の風景（BG付）、「消えゆく並木」も見られます。「消えゆく並木」があるのはとても有り難い。全生園の樹木によせるTさんの思いが伝わります。「暦」は、以前、PDFで一枚ずつ作成されたものをビデオ映像にしたものでしょうか。インターネットでここまで編集できるのかと驚きました。「春」は新作ですね。今はもう見られなくなった第一緑化部の貴重な映像が冒頭にあります。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**(無題)** 投稿者：エリカ 投稿日：2006年 3月24日(金)13時32分28秒

[返信](#)・[引用](#)

ガラクタ箱さんのビデオ（出版記念会）見られませんでした。わたしのパソコンにせいかもしれません。

>もうふたたび踏むことはあるまいと思つてあた  
この草 この緑 この大地  
私の心は生まれたばかりの仔羊のやうに新しい耳を立てる  
新しい眼を睜る そうして私は  
私の心に流れ入る一つの聲をはつきり聞いた  
それは私を超え 自然を超えた  
暖いもの 美しいもの  
ああそれは私のいのち いのちの歌

東條はこの詩が発表されてから二ヶ月後に亡くなるのですが、結核性の腹膜炎を併発し、非常に体調が悪い時期であった。この詩は、そういう苦しい病床の中で、比較的、病が小康状態であったときに詠まれたものと思います。

この詩で、「新しい眼を睜る」という箇所注目したいと思いました。もはや「古い眼」でそとなる自然をみているのではない。そこで「私を超え、自然を超えた」声、鳥たちの囀りを聴いていると、それは、もはや「束の間の消えゆくもの」としてではなく、「永遠のいのち」として、そして同時に「私のいのち」として聴かれています。「この草 この緑 この大地」は、この世のものですが、そこにおいて、「永遠なるもの」が先取されているような、そういう響きがあります。

この箇所をわたしの掲示板に転載させていただいていいでしょうか。

**(無題)** 投稿者：田中 裕 投稿日：2006年 3月24日(金)15時55分50秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

>エリカさん

東條歌一についての拙文、十分な時間がないので、意を尽くしていないのですが、転載して頂いてかまいません。ガラクタ箱さんのところのビデオは、Windowsの場合は、Quick Time という無料ソフトをダウンロードすればみられます。<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fwww.apple.com%2Fip%2Fquicktime%2Fdownload%2Fwin.html>にアクセスしてみてください。（システム条件があるので、注意が必要です）

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**【無題】** 投稿者： **エリカ** 投稿日：2006年 3月24日(金)17時02分48秒

[返信](#)・[引用](#)

田中様

ありがとうございます。さっそく転載させていただきます。

**【無題】** 投稿者： **田中裕** 投稿日：2006年 3月26日(日)15時15分15秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

昨日の土曜日は、三年前に亡くなられた東條耿一の妹の渡辺立子さんの命日でした。先週の日曜日にミサの中で、司祭が「今週の永眠者」のための祈りのなかで、彼女の名前に触れられたので、なにか目に見えない機縁のようなものを感じました。ちょうど、東條耿一の詩、小説、戯曲、随筆、手記などをあつめて「著作集」として印刷したものを製本用にハンセン病図書館に納める予定にしていた日と同じだったからです。この製本版については、3月3日にハンセン病図書館から、製本したいという話がありましたので、しゅうさんと共に準備していたのですが、それは同時に、故渡辺立子さんに献げるというかたちにもなりました。最初から、そんなことを意図したわけではありませんが、結果としてそうになりました。

帰宅しましてから、あらためて、渡辺清二郎さんや立子さんの書かれた遺稿を読みました。とくにコッサール神父との関わりについて兄の東條耿一を回想している文章に感じるところがあり、個人的な感想をブログに書きました。

東條耿一著作集は、印刷すると全部で495頁です。厚紙で印刷したので、著作集は二冊になるかも知れません。図書館で製本するにはまだ時間がかかるようですが、いずれ閲覧できるようになるでしょう。開架閲覧用に一部、コピー用に一部納めてあります。

ハンセン病図書館に著作集を二部納めた後で、午後二時から、福祉会館で、ハンセン病市民学会の東京部会準備会に出席。全部で25名の方が参加され、国本さんを囲み、各人が自己紹介をしながら、今後の活動について話しました。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**【曼珠沙華】** 投稿者： **文枝** 投稿日：2006年 3月26日(日)19時30分28秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

今日、礼拝の帰り、リフォームして間もない、友人宅にお邪魔しました。なんとなく新鮮なりびングの書棚を眺めていたら、何と、津田せつ子の「曼珠沙華」があるではありませんか。他にも、ハンセン病関連の本が並んでおり、何事も不言実行の友人の姿勢に心打たれました。今、こちらを開きましたら、昨日がご命日だったことを知り、不思議が気持ちです。

**【無題】** 投稿者： **田中裕** 投稿日：2006年 3月28日(火)00時17分3秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

>文枝さん

「曼珠沙華」にでてくる「兄さん」という随筆は、全生園から外出許可を貰って郷里に帰るときを描いていますが、兄の東條耿一の在りし日の姿を髣髴させ、とくに印象深いものでした。津田せつ子というペンネームで随筆を出版される前、渡辺立子さんは、全生園のカトリック愛徳会の会誌「いづみ」に、多くのエッセイを書かれていますが、そこには、曼珠沙華に収録されなかった貴重な記録もありました。

この「いづみ」という雑誌のバックナンバーを図書館で整理しているときに、昭和28年の12月号に、東條耿一の**癩者の改心—友への便りにかえて**という手記を発見しました。それはおそらく兄の遺稿を立子さんが戦後になってから発表されたものと思いますが、今度、編集しました東條耿一著作集に収録してあります。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**光岡良二の「歌日記」から** 投稿者： **田中裕** 投稿日：2006年 3月29日(水)12時11分52秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

「いづみ」の1962年のバックナンバーを見ていましたら、光岡良二さんの「歌日記」が掲載されていました。前書きに「手帖の端々から書き抜いた短歌のいくつかを寄せた」とありますので、他の場所で発表した短歌と重複もあるかもしれません。戦後の療養所の学校の卒業式を詠んだ歌三首と、山桜で詩の選者をながくつとめ、シベリヤでの長い抑留生活の後、帰国して再び全生園を訪ねた佐藤信重を詠んだ歌七首が、なかでもとくに印象に残りました。

小学一人中学一人のみの癩園の卒業式にわれもつらなる

泪ぐみて吾はたたむ世界中で一番小さくうつしい卒業式

いかなる未来汝（な）を待つならむ姉弟のごと眼きよげにて並び立つ子よ

#### 還り来し人〈七首〉

ーとおい昔ぼくら癩園詩人グループをしたしく指導された佐藤信重先生が突然お訪ね下さった。

これの世にふたたび会ふ人にてそのひまに十八年は迅速に過ぐ

強制収容所（ラーゲル）九年帰還四年の時へだて君はおもひなし小さくなりて佇つ

その心に畳まれてあし人を問ふ誰も誰も今はあらぬに

癩園に詩を書き生きし若者のいとと小さき名をも君問ふ

スターリン・マレンコフ・フルシチョフと支配者替り増え来し黒パンの一日量をいふ

ラーゲルの苦難淡々と語る人の小さく光る眼に吸はれてあたり

つれだちて登りきし小丘に園外の芽麥のみどり眼に沁みにけり

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**心打たれるのは Re: 「晏珠沙華」** 投稿者：北風 投稿日：2006年 3月29日(水)13時44分45秒

[返信・引用](#)

>何事も不言実行の友人の姿勢に心打たれました。

ところで、『灯泥』は、以前から申し上げているとおり、わけあって小生が「復刻」いたしますので、ご協力のほどよろしく願います。

**感想 Re: 光岡良二の「歌日記」から** 投稿者：田中裕 投稿日：2006年 3月30日(木)20時58分2秒

[返信・引用](#) [編集済](#)

光岡良二の「歌日記」は、彼が評伝を書いた明石海人のものを模したのかもしれないが、そのなかでとくに、佐藤信重との再会の時に詠んだ

その心に畳まれてあし人を問ふ誰も誰も今はあらぬに

癩園に詩を書き生きし若者のいとと小さき名をも君問ふ

の二首は、万感胸に迫るものがあつた。「山桜」の文藝欄での佐藤信重の選評、彼とそこに寄稿した青年達の交友などが思い出された。

「詩を書き生きし若者」達は、園外にいる人には殆ど知られていない「小さき名」の詩人ではあつたろうが、彼等の詩の選評を毎月書いていた佐藤信重にとっては、「その心に畳まれてあつた」掛け替えのない大切な存在である。彼自身がソビエトの強制収容所に抑留され、長い間、祖国の地を踏むことが出来なかつた。

つれだちて登りきし小丘に園外の芽麥のみどり眼に沁みにけり

も、連作の中の一首としてみると、心に沁みる歌である。療養所の人々も入れ替わり、昔のことを記憶している人が少なくなつても、武蔵野の自然だけは変わらずに彼を迎えたことであろう。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**国本さんから** 投稿者：北風 投稿日：2006年 4月 3日(月)14時01分24秒

[返信・引用](#)

[708] 国本さんから。 投稿者：紙魚 投稿日：2006/04/03 (Mon) 13:34

12月に韓国へ行った記事が、「週刊金曜日」4月7日発売、4月7日号に掲載されます。機会があれば、お読みくださいませと思います。

**(無題)** 投稿者：田中裕 投稿日：2006年 4月 5日(水)18時39分40秒

[返信・引用](#) [編集済](#)

先の日曜日、ミサの後で、桜並木をゆっくりと歩いておられた愛徳会の長老Tさんにお目にかかったので、ご自宅にお邪魔して、昔の愛徳会のこと、コッサール神父やアヌイ神父のことなど、いろいろと教えて頂きました。図書館友の会の皆さんと共に花見をする前のことです。(Tさんは、信濃毎日の記者畑谷史代さんが書かれた「差別とハンセン病」(平凡社新書、2006年1月)に出てくる県人会の「会長さん」です。「良きサマリヤ人の警え」に寄せた記事を読んだとき、私は何となくそのような予感がありましたが、ご本人から、そのことを伺うまで気づきませんでした。帰宅後、あらためて畑谷さんの本を読み直した次第です。)

コッサール神父のことを記憶しておられる方は、今ではTさんだけになってしまったようです。コッサール神父が、入所者ですら恐れて近づかなかった結核患者の居る重病棟に、白衣もマスクも付けずにそのまま入り、床に跪いて、素手で直接に聖体拝領の儀式を行っていたことなどを伺いました。そういう行動は、戦前では特に、園当局から厳重に注意されていたのですが、彼は、事務員が居なくなると、白衣もマスクも片づけて、自分のやり方を貫いたそうです。Tさん御自身は、最初はキリスト教には大いに反感があったが、のちに、コッサール神父が不慮の事故で亡くなられた後、アヌイ神父のもとで受洗されたとのこと。

日本の隔離政策を批判したいいわゆるハンセン病に関するローマ会議に、全生園の林園長を出席させるように薦めたのはアヌイ神父であったようです。もっとも、この会議の決議は、その後の日本の医療政策には生かされませんでした。

アヌイ神父はグレゴリオ聖歌の専門家でもあったので、愛徳会のミサでは、信者はずっとラテン語でグレゴリオ聖歌を歌っていたため、戦後の教会の方針でミサが日本語になったときには、かえって抵抗があったとも話していました。

ところで、明日から、一泊二日で学生のオリエンテーション・キャンプに同行し、富士山麓の東山荘まで出かけます。あちらは桜が遅いので、天気の良いければ、学生達と共に花見が出来るかも知れません。土曜と日曜は、学会の仕事で大阪に出かけますので、しばらく忙しくなります。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**サマリヤ人はだれか** 投稿者：真奈 投稿日：2006年 4月11日(火)23時05分56秒

[返信・引用](#)

しゅうさんからお借りして畑谷史代さんの「差別とハンセン病」を読みました。とても誠実に書かれたいい本なので、他の方にも読んでいただこうと思い、別途購入しました。

畑谷さんは「私こそ「サマリヤ人」ではなかった」と胸を衝かれる思いから、ハンセン問題に関わり続けてこられたと思います。私もまた「知らなかった」ということは不作為の作為のような罪悪感を感じつつこのハンセン病問題に関わっています。

こうした思いのうちに読んだ松本馨さんの「小さき声」No140の冒頭に書かれた「隣人とは誰か」という文章、どういう意味なのかよく理解できずにおります。

“隣人とは誰か(ルカ10)の講義で、関根先生は、隣人となったのは、サマリヤ人でなく、強盗に襲われ、傷つき倒れている者「イエス」であると云うバルトの言葉を紹介しながら実に深い注解を行っている。

社会的実践に関心をもつキリスト者、既に政治活動や、組合運動をしている者にとって隣人となった者が、サマリヤ人か、強盗に襲われた者かは、信仰の本質に触れる大きな問題のように思われる。

しかし、バルトに依って始めて問題が提起され、それが日本でどれ程の重みをもって受け取られているかわからないが、私の知る限り政治活動や、組合活動あるいは平和運動をしている者で、百人のうち99人、否99.9人はサマリヤ人の位置に立って行動しているのではないだろうか。合理的でわかりやすく、自他に対して説得力があるからである。彼は信仰の名によって、自己に対して、隣人のために最大限の努力と、忍耐と服従と犠牲を命じるだろう。それに対して自己は喜んで隣人のために、自己を捧げ尽すのである。

強盗に襲われた者の位置に立つことは、不可能に近い、それは、人間的な努力や、熱心では到達出来ない絶望的なものだからである。それは奇跡として受取られるものだからであり、出来事として受取られるものだからである。

サマリア人の位置に立つ社会的実践は、その究極は律法である。社会的実践は信仰の決断であり、その意味では間違っていない。あくまでも信仰から出発したものだからである。しかし、その信仰は、自己の熱心や努力を通して表現されるために、長い年月の裡に信仰が律法に変質していくのである。政治活動や平和活動をしているキリスト者に、独善的、セクト的なもの、主義、主張を異にする者を裁く傾向があるのはそのためである。

**続きです**・ ・ 投稿者：真奈 投稿日：2006年 4月11日(火)23時31分26秒

[返信・引用](#)

“もう一つの方向は、信仰と実践が分裂し、二重人格的生き方を始めることである。この二重の生き方に耐えられない者は、活動をやめて信仰のみ（観念）の生き方をするか、信仰を捨てこの世的な活動家に転落するかである。人は本質において不信仰であり、自己中心的な罪人であり、隣人になることは出来ないからである。

これに反して強盗に襲われた者の位置に立つことは、自己に死ななければ出来ない。それはキリストに会わされて死ぬことだが、自己自身によって隣人となることは出来ない。相手が隣人となり始めてその隣人を愛することが可能となるのである。強盗に襲われた者、イエスによって、敵である私とその罪をゆるされ、隣人としての位置を与えられるのである。”

最後の「強盗に襲われた者、イエスによって、敵である私とその罪をゆるされ、隣人としての位置を与えられるのである。」という結論は、今までイメージしていた「良きサマリア人」から遠く離れた厳しい地点にあるように感じられます。

**善いサマリア人は誰か** 投稿者：旅人 投稿日：2006年 4月12日(水)11時53分56秒

[返信・引用](#)

ルカ伝の第10章36節のイエスの御言葉、「だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか。」という設問から考えれば、通常の解釈、すなわちその人を助けたサマリア人だというのが正しいと思います。そして、「善いサマリア人」のたとえ(新共同訳 §10:25~37)では、隣人の定義を議論するのではなく、苦境に立たされている人の隣人になること(行い)が大切なだと書かれているものと解釈しています。そして、そのような読み方だけでも、そこに大きな教訓があるように思います。

それに対し、バルト・関根正雄のこの個所の読み方は、隣人の定義に後戻りしているように思えます。ただし、非常に逆説的であると思います。自分が隣人になってやったと思っていたら、実は自分が隣人になってもらったのであり、精神的な利益を受けたということではないでしょうか。また、バルト・関根正雄の場合、「追いはぎに襲われた人」をイエス・キリストに重ね合わせて見ていると思います。十字架に付けられたイエス・キリストを仰ぎ見る時、いつの間にか見る者と見られる者とが逆転するように思います。隣人であることは、一方向的なものではなく、双方向のものであるということを教えられたものと理解しています。

しかし、正しい解釈は何かということについては自信がありませんし、もっと深い意味があるのではないかと考えています。

僭越ではありますが、私の考えを述べさせていただきました。皆様の解釈をぜひお伺いしたいと存じております。

**Re: 続きです**・ ・ 投稿者：文枝 投稿日：2006年 4月12日(水)21時52分42秒

[返信・引用](#) [編集済](#)

> “もう一つの方向は、信仰と実践が分裂し、二重人格的生き方を始めることである。この二重の生き方に耐えられない者は、活動をやめて信仰のみ（観念）の生き方をするか、信仰を捨てこの世的な活動家に転落するかである。人は本質において不信仰であり、自己中心的な罪人であり、隣人になることは出来ないからである。

>

> これに反して強盗に襲われた者の位置に立つことは、自己に死ななければ出来ない。それはキリストに会わされて死ぬことだが、自己自身によって隣人となることは出来ない。相手が隣人となり始めてその隣人を愛することが可能となるのである。強盗に襲われた者、イエスによって、敵である私とその罪をゆるされ、隣人としての位置を与えられるのである。”

>

> 最後の「強盗に襲われた者、イエスによって、敵である私とその罪をゆるされ、隣人としての位置を与えられるのである。」という結論は、今までイメージしていた「良きサマリア人」から遠く離れた厳しい地点にあるように感じられます。

真奈さん 問題提起をいただき、私なりに考えました。  
俗に聖書の最もよい参考書は聖書であるとも言われています。引照付聖書はそれだけで充分聖書を理解する役割を果たしていますので、一冊手元にあると便利です。  
この最後の箇所は、ルカ福音書6章の「敵を愛しなさい」のテキストを、お読みになると松本馨さんのキリスト信仰の立つところが理解できるのではないのでしょうか。  
私は、タイピングが苦手なのでテキストを表示できませんが、聖書を紐解いて是非お読みください。

マザー・テレザの言葉に

「もし貧しい人々が飢え死にするとしたら、それは神がその人たちを愛していなかったからではなく、あなたが、そして、わたしが、与えなかったからです。神の愛の手の道具となって、パンを、服を、その人たちに差し出さなかったからです。キリストが、飢えた人、寂しい人、家のない子、住まいを捜し求める人などのいたましい姿に身をやつして、もう一度こられたのに、わたしたちがキリストだと気づかなかったからなのです。」

神は飢えている人、病める人、裸の人、家のない人の中におられます。」

松本馨さんは、このことに気付かれたのではないのでしょうか。

多くのクリスチャンは、聖書の字面のまま理解し、「だから、私たちも、善きサマリヤ人に倣いましょう」と落ちがつくのが普通です。

そして、私自身も通行人の一人になっていたに違いありません。

哀れみの心は持ち合わせ、立ち止まることはしても、手を差し伸べなかったでしょう。

松本さんは、強盗に襲われ、助けを求めていた人に、手を差し伸べた行為の中で、実は和解のキリストに出会い、自己の罪に死に、罪からの解放と真の喜びを体験されたのではないのでしょうか。

答えになりますでしょうか。

**隣人は誰か** 投稿者：真奈 投稿日：2006年 4月13日(木)14時39分40秒

[返信・引用](#)

旅人さん  
文枝さん

書き込みをどうも有難うございました。

文枝さん、聖書がこれほど「自分で考えなさい」といった含蓄の多い書とは思っていませんでした。

>神は飢えている人、病める人、裸の人、家のない人の中におられます。」

松本馨さんは、このことに気付かれたのではないのでしょうか。

>松本さんは、強盗に襲われ、助けを求めていた人に、手を差し伸べた行為の中で、実は和解のキリストに出会い、自己の罪に死に、罪からの解放と真の喜びを体験されたのではないのでしょうか。

>それに対し、バルト・関根正雄のこの個所の読み方は、隣人の定義に後戻りしているように思えます。ただし、非常に逆説的であると思います。自分が隣人になってやったと思っていれば、実は自分が隣人になってもらったのであり、精神的な利益を受けたということではないのでしょうか。

ルカ伝10章からは通常の解釈でしか読み取れなかったのですが、隣人はサマリヤ人でなく“強盗に襲われ、傷つき倒れている者「イエス」である”と気づかされること、ここでの転位こそが信仰の核心的本義であるということでしょうか？逆説というややニュアンスが異なるようにも思えますが・・・。

10章の最後にマルタとマリヤのエピソードが出てきて、「マルタよ、あなたは多くのことに心を配って思いわずらっている。しかし、無くてはならぬものは多くはない。いや、一つだけある。マリヤはその良い方を選んだのだ。」と主が答えています。ここにこのエピソードが挿入されているのは、このマルタに先のサマリヤ人が投影され、関連づけられているのでしょうか？

**隣人になったのは誰かということ** 投稿者：[田中 裕](#) 投稿日：2006年 4月14日(金)06時25分7秒

[返信・引用](#) [編集済](#)

オリエンテーションキャンプの直後、学会の仕事で大阪に出張し、帰京してすぐに新学期となりましたので、暫く投稿が出来ませんでした。

真奈さん、小さき声140号の復刻、有り難うございました。松本馨さんが「隣人となったのは誰か」を論じている[小さき声第140号](#)をPDFに編集したものを、ここにアップ致します。

旅人さん、細かい校訂作業、有り難うございました。聞き書きの原文にあった、「山は海に映る」が「山は海に移る」の誤記であるなど、指摘された誤植は訂正しました。

文枝さん、真奈さんの問いかけに対して答えて下さり有り難うございました。マザーテレザの言葉を教えて下さったことを感謝します。「善きサマリヤ人の譬え」は、教会では何度も聞かされる周知の話ですが、そこで示されているような隣人愛とは無縁の生活をしている私自身が問われているように思いました。

私は、「よきサマリヤ人」では決してなかった。そういう自覚は、愛徳会のTさんを取材された信濃毎日の記者さんと同じです。聖書の基準から言えば、私は、むしろ律法学者やパリサイ人のごとき存在でしたし、いまも依然として、それを脱してはいません。Tさんはじめ、過去の困難な時代を経験されたかたのお話を聞くと、私が自分の力で、彼等の隣人となることなど、決して出来はしないと思いました。

しかし、そういう私であっても、松本馨さんの「小さき声」を読んでいるうちに、自分のごときものでも、彼等の隣人となる可能性が開かれるかも知れないと、勇気づけられることがあります。

たとえば、「よきサマリア人の警え」で、「隣人となったのは誰か」という問いに対して、松本さんが関根正雄やバルトを引きながら、「ここで隣人となったのはイエス御自身だ」と書かれた箇所。こういう言葉を聞くと、私は、おおいに力づけられるのです。

私と全生園との関わりは、数年前までは非常に希薄なものでした。全生園の教会のミサに参列し、昔の療養者の方々の書かれた古い資料を整理・復刻することをはじめから、僅かな歳月しかたっていません。それでも、そういう経験をすこしづつ重ねていくうちに、東條耿一や松本馨さんの「小さき声」に耳を傾けることによって、彼等の方が、そして彼等を通して、キリスト御自身が、私に先だって、私の「隣人」になって下さったような気がしています。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**Re: 隣人は誰か** 投稿者: [旅人](#) 投稿日: 2006年 4月17日(月)20時46分21秒

[返信・引用](#)

> >それに対し、バルト・関根正雄のこの個所の読み方は、隣人の定義に後戻りしているように思えます。ただし、非常に逆説的であると思います。自分が隣人になってやったと思っていたら、実は自分が隣人になってもらったのであり、精神的な利益を受けたということではないでしょうか。

>  
> ルカ伝 10章からは通常解釈でしか読み取れなかったのですが、隣人はサマリア人でなく「強盗に襲われ、傷つき倒れている者「イエス」である」と気づかされること、ここでの転位こそが信仰の核心的本義であるということでしょうか？逆説というややニュアンスが異なるようにも思えますが・・・。

真奈さん、私へのご質問を結果的にほったらかしにして、申し訳有りませんでした。ところで、「強盗に襲われ、傷つき倒れている者が『イエス』である」ということがこの物語の中心的テーマとは、私には思えないのです。そのようなテーマであれば、マタイによる福音書の第25章31節以下の話で充分だと思うのです。私が申し上げたかったのは、「自分が隣人になってやったと思っていたら、実は自分が隣人になってもらったのだ」という意外な思いについてなのです。このことは、救援活動をしているNGOの方が、被災地の救援活動に当って、自分たちは被災者から生きる力をもらったと語ることに通じていると思います。善いサマリア人のたとえには、人生の本当の意義が語られているように思います。

**(無題)** 投稿者: [E三](#) 投稿日: 2006年 4月18日(火)02時32分34秒

[返信・引用](#)

\*横レス失礼いたします。(たぶんズレレスですが。)

わたしたちはみずから望んで「強盗に襲われ、傷つき倒れている者」の立場に立つことはありえません。しかし、そういう人に“出会う”ことはありえます。そのとき、その傍を通りながら単なる通行人として通り過ぎるならば、わたしたちは“出会わなかった”のです。そして、出会わなければ、わたしたちは「隣人」となる機会さえも与えられることはないのではないのでしょうか。

マザー・テレサの言葉を引かれた文枝さんのご意見は、信仰をもたぬ私にもわかりやすいです。

いま読んでいる本のなかで、改めて気づいたことがあります。例えば、「主の祈り」；

御旨(みこころ)の天に成るごとく  
地にも成(な)せ給へ

(「御旨の天に成るごとく／地にも成し給へ」ではなく、)「地にも成せ給へ」です。  
“成(な)せ給へ”というのは、わたしたち一人ひとりを“成す”者たらしめさせてください、ということですね。(「主の祈り」を唱えたことのない者の勝手な解釈です、間違っていたらご指摘ください。)

我らに罪を犯す者を 我らが許すごとく  
我らの罪をも免(ゆる)し給へ

(「我らに罪を犯す者を 許し給へ」でもなく、「我らの罪を許し給へ」でもなく、)「我らに罪を犯す者を 我らが許すごとく／我らの罪をも免し給へ」です。  
この文言もまた、わたしたちが“罪を免れる”ためには、わたしたち一人ひとりが“わたしたちを犯す者”を“許す”者でなければならぬ、といっているように思えます。つまり、許す者であってはじめて免(ゆる)される者たらしめられる、わたしたちをそのような者であるようにさせてください、といった体の文言ですね。  
キリスト者の日々の祈りとはかくも厳しいものかと、たじろいでいるところです。

**エミさんの横レスに対する斜レス** 投稿者: [旅人](#) 投稿日: 2006年 4月19日(水)20時58分23秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

この掲示板での対話にエミさんが積極的に参加して下さることは、非常にありがたいことだと思います。今回のエミさんが話しかけられたのは、私よりは文枝さんにだと思ひます。だから、あまり私がレスするのは、気が退けますが、少し私の感想等を書かせていただきます。

エミさんが、「キリスト者の日々の祈りとはかくも厳しいものかと、たじろいでいるところですか。」と言われると、私はそれを聞いてたじろいでしまいます。エミさんは、この「主の祈り」を真剣に受け止めて、このように書かれたのだと思ひます。そして、そのような祈りしながら、人の罪を赦そうとしない者に対する叱責を感じています。その叱責は、エミさんを通しての神様からのものとして受け止めたいと思ひています。

なお、エミさんが引用された、「我らに罪を犯す者を 我らが許すごとく我らの罪をも免(ゆる)し給へ」という箇所は、新共同訳聖書のルカによる福音書第11章4節に該当すると思ひます。そしてそれは、「わたしたちの罪を赦してください、わたしたちも自分に負目のある人を皆赦しますから。」となっています。この祈りを唱える時には、普通は、自分の心に溜っている憎しみや恨みを取り除かなければならないという思いに駆られると思ひます。そして、赦すことができるようにしてくださいと祈るのではないのでしょうか。

この祈りが、エミさんにとって躓きにならないことを祈ります。

なお、他者を赦すべきことについては、マタイによる福音書の第18章21節から35節にも、もっと厳しいたとえ話が載っていますが、もうお読みになったでしょうか。

「小さき声」をお読みになったご感想などを、もっと多くの方からお聞きしたいと思ひています。

ご参考: ルカ伝福音書(文語訳聖書)による主の祈り(第11章2節~4節)

父よ、願はくは御名の崇(あが)められん事を。  
御国の来たらん事を。  
我らの日用の糧を日毎に與(あた)へ給へ。  
我らに負債(おひめ)ある凡(すべ)ての者を我ら免(ゆる)せば、  
我らの罪をも免(ゆる)し給へ。  
我らを嘗試(こころみ)にあはせ給ふな。

**主の祈りについて** 投稿者: [田中 裕](#) 投稿日: 2006年 4月21日(金)23時31分20秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

エミさんの「主の祈り」についての投稿を読みました。エミさんの引用されたものは、プロテスタントの文語訳聖書に基づく「主の祈り」です。この祈りを唱えてみて、私は、あらためて聖書協会の文語訳聖書の訳文の素晴らしさと言うことを実感しました。たんなる文体に於ける違いだけではなくて、内容的にも、現在使われている口語訳よりも良いと思ひたのです。

エミさんは、ご自分の読み方が「間違っているかも知れないが」と仰っています、それは私の場合も同じです。「主の祈り」を唱える回数は、たしかに多いけれども、私の場合、空念仏に終わっている危険もある。これはどういう意味なのかと問われても、習慣的に唱えている場合は、うまく答えられないことの方が多いのです。しかし、エミさんの投稿に触発されて、私も、主の祈りについて、率直に自分の考えを述べることにします。

最初に、今の日本のカトリック教会で唱えられている「主の祈り」(口語訳)を紹介します。(これは、日本聖公会と共通になっていますので、宗派を超えた集まりでは、これが唱えられます)

天におられるわたしたちの父よ、  
み名が聖とされますように。  
み国が来ますように。  
みこころが天に行われるとおり  
地にも行われますように。  
わたしたちの日ごとの糧を  
今日もお与えください  
わたしたちの罪をおゆるしください。  
わたしたちも人をゆるします。  
わたしたちを誘惑におちいらせず、  
悪からお救いください。

文語訳の「主の祈り」と比較すると、文言に若干の違いがあります。

- ①「御旨の天に成るごとく地にも成させたまへ」  
⇨「みこころが天に行われるとおり地にも行われますように」
- ②「われらに罪を犯す者を われらがゆるすごとく、われらの罪をもゆるしたまえ」  
⇨「わたしたちの罪をおゆるしください。わたしたちも人をゆるします」

となっています。ちなみにカトリック教会でも、典礼が刷新される前に唱えられていた「主の祈り」は、プロテスタントの文語訳に近いものでした。

文語訳と口語訳を比較すると、口語訳のほうが分かりやすいと仰るかたもいますが、古い世代の信徒のかたには、あたらしい口語の「主の祈り」はなじめないと仰るかたも多い。(私自身も、いまだに口語訳は記憶できないのです)

①の文語訳で「成させたまへ」と訳されている言葉(ギリシャ語のゲネーセートー)が口語訳では「行われますように」と訳されている。どちらが良いのか。私は断然、文語訳のほうが良いと思う。

プロテスタントの文語訳聖書の翻訳者は、日本語に対するセンスの非常に鋭い人だと思う。日本語では「なる」と「行う(なす)」は違う。「行う(なす)」は我々の能動的な意志の所産であるが、「なる」はそのような人間的意志だけでは支配できないものがあることを伺わせる。しかし、同時に、人間の倫理に関わる事柄では、「なる」は「なす」から切り離すことも出来ない。「なす」主体である個々の人の主体的行為を離れて、天意が自然現象のように、おのずから実現するわけではないからである。

「成させたまへ」という訳文には、天意にたいして開かれた受動性と、そのうえに成り立つ人間的な主体行為との関係が、適切に表現されている。古来、「人事を尽くして天命を待つ」とか「天は自ら助くるものを助くる」とかということが言われてきた所以だと思う。

英語の欽定訳では、マタイ6-10は

Thy will be done in earth as *it is* in heaven.

これを読むと、天上においては永遠の現在であり、すでに何一つ欠けることのない神意が、地上の世界において、過去・現在・未来という時間の連なりの中で、将来において実現すべき課題として与えられているように私は感じる。天と地との対比、その間の照応。(永遠)は(時間)とは区別されるけれども、時間的世界と不可分であって、そこに生きている人間の主体性の根拠となっている。

>(「我らに罪を犯す者を 許し給へ」でもなく、「我らの罪を許し給へ」でもなく、)「我らに罪を犯す者を 我らが許すごとく/我らの罪をも免し給へ」です。  
>この文言もまた、わたしたちが“罪を免れる”ためには、わたしたち一人ひとりが“わたしたちを犯す者”を“許す”者でなければならない、といっているように思えます。つまり、許す者であってはじめて免(ゆる)される者たらしめられる、わたしたちをそのような者であるようにさせてください、といった体の文言ですね。

エミさんの言われたように私もこの箇所を解釈していたことに気づきました。つまり、「わたし自身を天意にかなうものにして下さい」という祈りとして。

この祈りを、「私に対して罪を犯したものを赦しましたから、私の罪を赦して下さい」というように訳す人がいるが、それは、正しくないと私は思う。そういう言葉では、「祈り」は、結局の処、神と人間との間の「取引」になってしまうのではないか。そしてそのような取引こそ、マタイが、偽善者の祈りとして最も嫌ったものではないだろうか。

祈るときに「私は・・・しましたから、私に・・・して下さい」ということは私には出来ない。

だから、日本のカトリック教会の典礼委員会には申し訳ないけれども、私は、プロテスタントの伝統的な文語訳「われらに罪をおかすものをわれらのゆるすごとく、われらの罪をもゆるしたまえ」のほうを選びます。人間の間の赦しが前提となって神に赦しを願うのではなく、人間の中からでは赦しが不可能であることを自覚しつつ、神に赦しを祈るとするのが、主の祈りだと思うので。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**小さき声の復刻** 投稿者：[田中 裕](#) 投稿日：2006年 5月 2日(火)22時37分2秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

「小さき声」の復刻は、従来通りのHTML版の他に、印刷の便宜を考慮して、PDF版も編集しています。PDF版は、出来る限り、もとの文書のレイアウトに近づけた復刻版で、4分をひとまとめにしてあります。

[小さき声第1号一第4号\(PDF版\)](#) [小さき声第139号一第142号\(PDF版\)](#) をご覧下さい。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**主の祈り 再び** 投稿者：田中 裕 投稿日：2006年 5月 2日(火)23時34分35秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

「わたしたちの日毎の糧を今日もお与えください」（カトリック教会・聖公会共同口語訳）

この箇所、私ならば、原文のギリシャ語を

「私達のいのちのパンを今日お与え下さい」

と訳します。

「日毎の」「日毎の」「毎日の」と訳されている原文のギリシャ語「エピウーシオン」は、特殊な言葉で、マタイ伝とルカ伝の主の祈りに表れるだけで他の箇所には出てこない。新約聖書以外の文献にも殆どみられない語である。現代では、この箇所を「毎日食べるパンを今日も下さい」と訳すことが多い。しかし、昔から、そのように訳していたわけではない。

古代の教会では、現在では「毎日の」と訳されている「エピウーシオン」という言葉を、ラテン語に直訳して、「supersubstantialem（形あるものを超える）」と訳していた。例えば、ヒエロニモスのヴルガタ訳聖書では、おそらく古代の典礼の伝承を受けたと思われるが、そのように訳している。

「形あるものを超えるパン」とは何か。この言葉では直訳に過ぎて難しいので、私はそれをヨハネ伝の言葉を借りて「いのちのパン」と訳するのが良いと思う。

ヨハネ伝6-27には「朽ちる食べ物のためではなく、いつまでもなくならないで、永遠の命に至る食べ物のために働きなさい。これこそ、人の子があなたがたに与える食べ物である。」

つまり、マタイ伝の主の祈りで言われている「パン」は、第一義的には、ヨハネ伝6-27で言われている「永遠の命に至る食べ物」の事である。

また、マタイ伝の「主の祈り」のすぐ後に、次の言葉がある。（6-25）

「だから、言うておく。自分の命のことで何を食べようか何を飲もうかと、また自分の体のことで何を着ようかと思ひ悩むな。命は食べ物よりも大切であり、体は衣服よりも大切ではないか。」

「何を食べようか、何をのもうかと思ひ悩むな」と言うイエスの言葉を「主の祈り」の直後に置いているマタイが、「パンを下さい」というイエスの言葉を伝えたとき、はたして、彼は「形あるパン」のことだけを言っていたであろうか。「人はパンだけで生きるものではなく、神の口から出る一つ一つの言で生きるものである」という聖書の言葉もある。

カトリック教会では、聖体拝領の直前にこの祈りを唱えるが、それは、主の祈りのときに頂くパンを、神の言葉としてのキリストと同一視する古代教会の伝承に従っているからではないだろうか。

それゆえに、私は、主の祈りの正しい日本語訳は、

「私達のいのちのパンを今日お与え下さい」

だと思う。

「いのちのパン」という訳語ならば、意味の範囲が広く、文字どおり、私達が毎日食べているパン（これは通常の解釈）を意味することも出来るし、また、「私達を生かす神の言葉」という聖書的な意味も表すことができるし、また聖体拝領の時に頂くパン（キリストの体）を意味することも出来るからである。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**Re: 主の祈り 再び** 投稿者：文枝 投稿日：2006年 5月 4日(木)11時25分32秒

[返信](#)・[引用](#)

お早ようございます。  
このごろの、「小さき声」掲示板、興味深く読ませていただいています。  
ことに、エミさんの「主の祈り」の解釈を通して、田中さんとのやり取りは、ほとんどお題目のように唱えている私へのよき刺激となりました。  
「主の祈り」は、祈りの中心テーマですから私も改めて考えさせられております。

>エミさんの  
我らに罪を犯す者を 我らが許すごとく  
我らの罪をも免(ゆる)し給へ

(「我らに罪を犯す者を 許し給へ」でもなく、「我らの罪を許し給へ」でもなく、)「我らに罪を犯す者を 我らが許すごとく／我らの罪をも免し給へ」です。

この文言もまた、わたしたちが“罪を免れる”ためには、わたしたち一人ひとりが“わたしたちを犯す者”を“許す”者でなければならない、とっているように思えます。つまり、許す者であってはじめて免(ゆる)される者たらしめられる、わたしたちをそのような者であるようにさせてください、といった体の文言ですね。  
キリスト者の日々の祈りとはいかにも厳しいものかと、たじろいでいるところです。

このエミさんの己に厳しい読み方には、正直まいりました。  
なぜなら、田中さんもおっしゃっていましたが、礼拝のプログラムの進む中で、ほとんど情性で唱えているからです。  
しかし、「主の祈り」はそれだけで素晴らしい祈りで、悔い改めの心をもって、心の底から祈るとき、その日の礼拝は満たされたものになります。  
私の教会での「主の祈り」はNCC統一訳で、

天の父よ  
み名があがめられますように  
み国がきますように  
みこころが天で行われるように  
地上でも行われますように  
わたしたちに今日も この日のかてをお与えください。  
わたしたちに罪を犯した者をゆるしましたから、  
わたしたちの犯した罪をおゆるしください。  
わたしたちを誘惑から導き出して  
悪からお救いください。  
み国も力も栄光も  
とこしえにあなたのもものだからです。アーメン

#### 話題の

>我らに罪を犯す者を我らが許すごとく 我らの罪をも免(ゆる)し給へ  
ですが、「主の祈りに」のこの個所を「つまずきの祈り」と言う人もいますが、やはり自己の内面を鏡で映し出されるようで、とても苦しい祈りです。  
しかし、子育て真っ最中のころ、この個所をみんなで学びあったことを思い出しました。  
私は「天の父よ」よ呼んだとき、すでに神の赦しはその人の内に起こり、それ故に「我らに罪を犯す者を我らが許すごとく」と、隣人に対して罪を許さない罪人から、赦す罪人に変えられているのではないということです。  
しかし、厳然として、最後の審判の日まで罪人は罪人です。  
故に、今日も犯す「我らの罪をも免(ゆる)し給へ」と実に都合よく解釈しています。  
「主の祈り」が我らとか、わたしたちとか、複数の民、同朋の祈りであることを心しなければならぬとおもいます。

#### 田中さんの

>「わたしたちの日毎の糧を今日もお与えください」(カトリック教会・聖公会共同口語訳)  
>この箇所、私ならば、原文のギリシャ語を  
>「私達のいのちのパンを今日お与え下さい」  
中略

>「何を食べようか、何をのもうかと思ひ悩むな」と言うイエスの言葉を「主の祈り」の直後に置いているマタイが、「パンを下さい」というイエスの言葉を伝えたとき、はたして、彼は「形あるパン」のことだけを言っていたであろうか。「人はパンだけで生きるものではなく、神の口から出る一つ一つの言で生きるものである」という聖書の言葉もある。

>  
>カトリック教会では、聖体拝領の直前にこの祈りを唱えるが、それは、主の祈りのときに頂くパンを、神の言葉としてのキリストと同一視する古代教会の伝承に従っているからではないだろうか。

>  
>それゆえに、私は、主の祈りの正しい日本語訳は、

>  
>「私達のいのちのパンを今日お与え下さい」

>  
>だと思ふ。

>  
>「いのちのパン」という訳語ならば、意味の範囲が広く、文字どおり、私達が毎日食べているパン(これは通常の解釈)を意味することも出来るし、また、「私達を生かす神の言葉」という聖書的な意味も表すことができるし、また聖体拝領の時に頂くパン(キリストの体)を意味することも出来るからである。

田中さんの日本語訳は実に解りやすく、本当にそう思います。

「主の祈り」でこの個所は、誰も彼も心籠め、一心に祈れます。

やはり、しかし、「わたしたち」と祈るところに深い神の心が潜んでいる気がします。  
自己流で失礼しました。

**主の祈り 再び** 投稿者：[E3](#) 投稿日：2006年 5月 5日(金)20時35分20秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

\*旅人さん、田中さん、文枝さん、いろいろとご教示くださりありがとうございます。

私が前に挙げた「主の祈り」からの引用は、おそらく大正四年の米国聖書会社版によっている

と思われませんが、全文訳は次のようになっていました；

天に在(ましま)す我らの父よ  
願(ねがは)くは聖名(みな)を尊崇(あがめ)させ給へ  
爾国(みくに)を臨(きた)らせ給へ  
御旨(みこころ)の天に成るごとく  
地にも成(なさ)せ給へ  
我らの日用の糧(かて)を今日(けふ)も与え給へ  
我らに罪を犯す者を 我らが許すごとく  
我らの罪をも免(ゆる)し給へ  
我らを試探(こころみ)に遇(あは)せず  
悪より救(すくひ)出し給へ  
国と権(ちから)と栄(さかえ)とは  
窮(かぎり)なく汝のものなればなり アーメン

\*お聞きしたいのですが、  
旅人さんが挙げてくださったルカ伝福音書(文語訳聖書)の「主の祈り」と、  
田中さんが挙げてくださった口語訳「主の祈り」には、  
文枝さんが挙げてくださったNCC統一訳「主の祈り」や、私が引用したものにある、  
尾聯の2行がないのでしょうか。  
この2行は、私には、付け足されたものであるような気がするのですが、  
最も古い「主の祈り」では、どうなっているのでしょうか？

\*田中さん、また文枝さんも仰っておられるように、「いのちのパン」と訳したほうがずっといいと思いました。

\*口語訳はどれも表層的すぎる印象を受けます。(例示されたものを見ただけではなんともいえませんが、)一般的にこのように表層的な口語訳が汎用されているとしたら、それらの訳文を通して「神の言」を聴くのは困難なようにも思ったことでした。

例えば、「み国が来(き)ますように」の部分に関していえば；  
「爾国」「み国」は、どちらでもいいと思いますが、「来ますように」は、やはり「爾国(みくに)を臨(きた)らせ給へ」のほうがいいと思います。  
(パウロでしたっけ？ 「神の国」「み国」を「天の国」と換言した方は。紛らわしいこと！)  
「み国が来ますように」と、「来ますように」といってしまうと、ほとんど天から地への下向きの一方向性のベクトルしか示されないように思われます。これに対し、  
「臨(きた)らせ給へ」というふうに、「臨」の字を用いれば、わたしたちに、地上において神の国を「臨在」させるようにさせてくださいという、わたしたち一人ひとりの祈り(個の主体性)と、わたしたちを(その個[別]性)にかかわらず)そのような個を超えて「在る」ものとして在らしめている、いわば天意としての(神の側からの)ベクトル、の双方向性のベクトルが示されるように思われます。

\*文枝さんが指摘されておられるように、この祈りの文言が、「我ら/わたしたち」という複数形で表現されているのは、祈りが、優れて主体的/個的なものでありながら且つ個を超える「超個」的なものでありうるし、またそうでなければならぬからでしょう。

> 「わたしたち」と祈るところに深い神の心が潜んでいる気がします。  
ここに、個を超えるありようが示唆されているように思います。

誰か、アラム語ではこれこれ、ギリシャ語は…、ラテン語は…、その意味するところは…、てな具合に、訳文に語義注釈をつけた“素人向け聖書読本”書いてほしいです。(国語審議会に気兼ねなんぞしない表現で、ね。)

**歌唱について Re: 主の祈り 再び** 投稿者: [田中 裕](#) 投稿日: 2006年 5月 5日(金)23時58分6秒 [返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

エミさん、投稿有り難うございました。

> \*お聞きしたいのですが、  
> 旅人さんが挙げてくださったルカ伝福音書(文語訳聖書)の「主の祈り」と、  
> 田中さんが挙げてくださった口語訳「主の祈り」には、  
> 文枝さんが挙げてくださったNCC統一訳「主の祈り」や、私が引用したものにある、  
> 尾聯の2行がないのでしょうか。  
> この2行は、私には、付け足されたものであるような気がするのですが、  
> 最も古い「主の祈り」では、どうなっているのでしょうか？  
>

1975年に刊行された United Bible Societiesの『ギリシャ語新約聖書』(第三版)によると、マタイ福音書6-13の主の祈りの歌唱

国と権(ちから)と栄(さかえ)とは  
窮(かぎり)なく汝のものなればなり

は省略し、脚注で、それが付加されている写本群を挙げています。

つまり、現代の聖書学の文献批判からすると、この栄唱は、古代教会の典礼の言葉が反映されたものであって、あとから聖書本文に追加されたのだと言うことになるのでしょう。したがって、新共同訳聖書では、この栄唱は聖書本文からははずされています。

しかし、たとえ、現代の聖書学の基準から、栄唱を聖書本文に入れないのが妥当であるとしても、これまで多くのキリスト者が、この栄唱をつけて主の祈りを唱えてきたことは事実なので、この栄唱を省略せずにと考えたとき、どのような意味がそこに込められていたか、を考えることは、私には意味のあることに思います。

英語の欽定訳聖書、日本の文語訳聖書では、13節にこの栄唱を付加してありますが、そのことは、この栄唱を付け加えて主の祈りを唱えてきたキリスト者の伝統があることを意味しています。

また、内村鑑三も、この栄唱をつけて「主の祈り」を解釈しています。(旅人さんのサイトに、内村の「聖書の研究」の現代語訳があります)彼の指摘によると、この栄唱は、主の祈り全体にかかっているのではなく、その直前の祈りの言葉、にのみかかるとのことでした。これは、たしかに聖書原文ではそうなので、接続詞 ホティ(・・・なればなり)がそのことを示しています。すると、

我らを試探(こころみ)に遇(あは)せず  
悪より救(すくひ)出し給へ

の解釈はどうなるのか。

この「悪」というのは、ギリシャ語では中性名詞にも男性名詞にもとれるので、「悪」または「悪しき者」と訳されます。私は、この箇所「悪」という言葉に、御国の到来を脅かす「根源悪」が擬人化されて表現されているように感じます。

聖書では罪に対しては悔い改めることを求めますが、それよりも根の深い「根源悪」については、「然り」「否」を明らかにすることは求めますが、最終的な解決を神に委ねます。「悪しき者に刃向かうな」という聖書の言葉も、このような「悪」に立ち向かうことの困難さを教えたものでしょう。そして、「悪しき者」の誘惑に抵抗することの難しさが、「こころみにあわせず」という言葉に表現されている。

そうだとすれば、神を讃え信頼する「主の祈り」の末尾に置かれた栄唱は、地上に於ける「善」の挫折という事実を前にしつつも、力強い祈りの言葉となります。

それは、「悪」に対して人間的な「善」をもって闘うのではなく、すべてを「善」の源である神に委ねて、絶対的な非暴力・不服従の態度を守るキリスト者の祈りを表現するもののように思いました。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

私なりの考え 投稿者: [旅人](#) 投稿日: 2006年 5月 6日(土)12時22分21秒

[返信・引用](#)

エミさんは、主体的に独自の観点から聖書を読まれているように思われ、お話が面白いと思います。

実は、私がルカ伝から引用したのは、エミさんが当初問題とされた箇所が、「わたしたちに罪を赦してください、わたしたちも自分に負い目のある人を皆赦しますから。」というように赦すのが現在または未来であることを示しているからでした。これに対して、マタイ伝では、「わたしたちの負い目を赦してください、わたしたちも自分に負い目のある人を赦しましたように。」と、赦しが過去形になっているのです。原文でどうなっているかは調べていませんが、多分忠実に訳されているのだと思います。ちなみに、私の使用している英訳聖書 (THE NEW OXFORD ANNOTATED BIBLE) では、MATTHEW 6:12 は、And forgive us our debts, as we also have forgiven our debtors. と、現在完了形になっており、LUKE 11:4 は、And forgive us our sins, for we ourselves forgive everyone indebted to us. と、現在形が使われています。動詞の時制が異なっていますが、そのほかに、マタイ伝では「負い目」に対して「負い目」であるのに、ルカ伝では「罪」に対して「負い目」が置かれているなど、表現に差があります。この差をどう考えるべきなのかという問題もあると思うのです。特に、「赦す」時点については、問題が大きいように思います。赦すのが過去形であれば、それが神様との取引に該当するかどうかは別として、やはり赦していなければならぬのだと思います。また、実際にその祈りを唱えるときに、すべての人を赦す気持ちになれなければ、心に平安が臨まないと思います。また、この祈りは、私がどれほど大きな罪を赦されているかを考えさせるものであると思います。

「わたしたちに必要な糧を毎日与えてください。」という祈りは、私の場合、昭和50年代の不況の時には、切実な祈りでありました。現在でも、この祈りを切に唱え、今日与えられたパンを感謝している人は大ぜいいると思います。この祈りは、私たち(多分私だけではなく)が生きていく上で、本当に必要な物は何かを考えさせます。私を始め信仰の薄い(または無い)者は、将来の事を思い煩い、貯蓄しようと努力します。そして、貯金が少なくなると不安になります。しかし、たとえ貯金があったとしても、それで将来が安全だとは、私にはとても思えない

いのです。

私にとっては、テキストの正確性の追求も大切ですが、日々の経験をもとに聖書を読んでいくことの方が、より重要であるように思えます。

**ゆるしの生起るとき Re: 私なりの考え** 投稿者: [田中 裕](#) 投稿日: 2006年 5月 7日(日)15時 [返信](#) [引用](#) [編集済](#)

56分14秒

旅人さん、

投稿有り難うございました。旅人さんが指摘されたように、マタイ福音書では過去ないし、現在完了で訳されている我々の側での「ゆるし」が、ルカでは現在に、そして、現行のカトリック教会・聖公会の共通の「主の祈り」では、未来に訳されています。その違いが、どこから来るのか、という問題について、私も、私なりに、考えてみました。

> ちなみに、私の使用している英訳聖書 (THE NEW OXFORD ANNOTATED BIBLE) では、MATTHEW 6:12 は、And forgive us our debts, as we also have forgiven our debtors. と、現在完了形になっており、

>LUKE 11:4 は、And forgive us our sins, for we ourselves forgive everyone indebted to us. と、現在形が使われています。

>動詞の時制が異なっていますが、…………… 特に、「赦す」時点については、問題が大きいように思います。赦すのが過去形であれば、それが神様との取引に該当するかどうかは別として、やはり赦していなければならないのだと思います。

ヘブライ語の動詞の文法では、過去・現在・未来という時制上の区別ではなく、完了か未完了かという区別が基本的です。その点は英語やギリシャ語とは違っています。(日本語の文語文法や中国語とは近いところもある)ヘブライ語の動詞の完了形は、過去・現在・未来の三つの時制の何れにも訳せます。多くは、過去形に訳してかまわないのですが、現在のことにも未来のことにも使われます。とくに、預言の書では未来の出来事について使われます。たとえば、イザヤ書の有名な言葉に、

暗やみの中に歩んでいた民は大いなる光を見た。暗黒の地に住んでいた人々の上に光が照った。(9-2)

とあるのは原文では、完了形(「見た」、「照った」)が使われています。これは英語などの過去形とは違って、将来必ず起こるべき出来事を予言しているの、過去の出来事を叙述しているのではありません。

マタイ福音書の主の祈りで、「私達も又負い目あるものを赦したように」と過去形、もしくは現在完了形で英訳されている箇所が、ルカ福音書では「私達自身も、負い目あるすべてのひとを赦しますから」と現在形で訳されているのは、おそらく両福音書の共通資料が、アラム語(イエスの時代のヘブライ語)の完了形で書かれていたからでしょう。

マタイ福音書の通常の翻訳では

「すでに私達は相互に許し合いましたから、神様、あなたも私達を赦して下さい」

と解釈される事が多いと思います。しかし、上に述べたような文法上の理由から、私はこのような解釈には不満を感じます。また前に述べたように、これでは神と人との間の取引になってしまう。

この世の時間で、我々のほうの赦しが先行しているのなら、「私達もまた」の「も又」は、不自然であるように思います。つまり

「私達はゆるしましたから、神様、あなたも又、私達を赦して下さい」

とはマタイ福音書は決して書いていない。そうではなく、まずはじめに、

「私達の罪を赦して下さい」という祈りが先行し、

そして「私達も又」と続きます。この「もまた」という言葉が神の方ではなく、私達の側に於かれていることの意味は大きいと思います。したがって、私達の側の赦しが現在または過去に於いて完了したということを前提して、神に赦しを乞うているということには、ならないだろうと思います。

私は、マタイ福音書に書かれている「我々の側の赦し」をあらわす完了形は、預言書の用法と同じように、過去の事態をあらわすのではなく、時間的世界のなかでは将来に属するけれども、天意においては既に完了した事柄、それゆえにこの世に於いても必ず生起すべきことがらをあらわすのに使われていると解釈しています。

ゆるしが完了しているのは、我々の側、つまり地上に於いてではなく、天意においてです。それが「地にも」かならず実現するために、私達もまた、互いにゆるしあい、御国にふさわしき民となれるように、という祈りの言葉なのだと思います。

>実際にその祈りを唱えるときに、すべての人を赦す気持ちになれなければ、心に平安が臨まないと思います。また、この祈りは、私がどれほど大きな罪を赦されているかを考えさせるものであると思います。

旅人さんが言われたように、祈りを終えて「心に平安が望む」ということは、大切な点だと思いました。この点、全く共感します。

私の理解するところでは、キリスト教では、救いは神の御心においてすでに成就しています。救いを不確かな未来に置いては居ない。将来は、現在に於いて先取りされ、すでに完了している。

それゆえに、常に現在するみこころの内に生きるキリスト者は、私達の生きている不完全なる世界が、いかに苦しみに満ちていても、絶望という病に陥ることはない。この世から自由になりつつ、主の与えた平安のうちに生きる。そのような自由と平安をもたらすものが、祈りであると思います。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**(無題)** 投稿者: [田中 裕](#) 投稿日: 2006年 5月 7日(日)16時14分16秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)



#### いのちの詩五月の風は何処から

昨日、喜寿を迎えられた山下道輔さんを励ます会がありました。若い方が大勢来られたのが印象にのこりました。世代を超えて、療養所のありしままの歴史が記憶され、そこから学ぶことができるように祈ります。

小さき声の第143号を復刻しました。  
[HTML版](#) または [PDF版](#) をご覧ください。この号では、松本さんが御自身の自治会長としての経験をもとにして、「ゆるし」について語っています。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**削除** 投稿者: [北風](#) 投稿日: 2006年 5月 7日(日)18時42分52秒

[返信](#)・[引用](#)

「あれ」さんという人の投稿が削除になっていますね。別に問題のない投稿だと思うけれど、せっかく「お答え」を楽しみにしていたのに。勘違いか知らん。

**Re: 削除** 投稿者: [北風](#) 投稿日: 2006年 5月 7日(日)18時46分44秒

[返信](#)・[引用](#)

> 「あれ」さんという人の投稿が削除になっていますね。  
> 別に問題のない投稿だと思うけれど、せっかく「お答え」を楽しみにしていたのに。  
> 勘違いか知らん。

<http://6112.teacup.com/1212/bbs>

ここにも同じ人の投稿があったけれど「削除」されていますね。情報交換して同時削除ですか?

**(無題)** 投稿者: [田中 裕](#) 投稿日: 2006年 5月 7日(日)19時12分44秒

[返信](#)・[引用](#)

「あれ」さんがどなたかは私には分かりませんが、自己削除されたようです。ご本人が削除されたのには何か理由があつての事だと思いますので、私は特に穿鑿しません。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

---

**あちらで** 投稿者：北風 投稿日：2006年 5月 8日(月)10時50分39秒

[返信・引用](#)

「あれ」さんが自己削除だといっていました。  
早とちりで失礼しました。

---

**「小さき声」 144号から** 投稿者：田中裕 投稿日：2006年 5月30日(火)15時55分21秒

[返信・引用](#) [編集済](#)

4月以降、5月の連休を除き、仕事が忙しく、掲示板への投稿が出来ませんでした。

[小さき声第144号のHTML版](#)および[PDF版](#)です。

32年前に書かれたものですが、「義」にかんする次のような松本さんの発言がありました。

「聖書の義は、法的義でもある。義の神は審判官であり、人間は被告なのである。苦難や災禍に会った詩篇記者やヨブは、神に訴えている。「主よ、私を裁いて下さい」－現実に遭遇している苦難は、不当なものであり、審判の神に正しい裁きを要求する訴えなのである。一見、義の神は冷たい厳格な審判の神と思われ、キリスト教が非難されるのは、こうした神人関係なのである。私は初めて旧約の詩篇や、ヨブ記を読んだとき、一番奇異に感じ、そして驚いたのは「主よ、私を裁いて下さい」と自己の黒白を神に迫る祈りであった。しかし私自身が、生ける神、キリストに会わされ、回心したとき、詩篇記者やヨブの祈りが理解出来た。実に、旧約の神は、生ける義の神で居給う。そしてそこから、すべてが始まる。神は観念の神でも、哲学の神でもなく、現在の神で居給う。審判の神と旧約の人達との関係は、法治国家の日本の現代に似ている。私達は、不当に人権が侵害された場合、告訴することが出来る。そして、裁判によって自己の正しさを主張するのである。その結果がどうあろうと、裁判の結果に従わなければならない。このため裁判官は、公平無私な義の裁判官でなければならない。正しい裁判が行われて国の秩序が維持されるのである。」

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

---

**本日のメールから** 投稿者：北風 投稿日：2006年 7月 7日(金)16時10分36秒

[返信・引用](#)

小笠原関係のサイトを見ていたら、山田瑞恵なる方がいろいろ書いておられますが、私はお会いしたことがありますか。また、田中教授のHPの文章はこの瑞恵さんの文のパクリがたくさんありますが、これはありますか。

---

**Re: 本日のメールから** 投稿者：田中裕 投稿日：2006年 7月 9日(日)13時40分33秒

[返信・引用](#)

> 小笠原関係のサイトを見ていたら、山田瑞恵なる方がいろいろ書いておられますが、私はお会いしたことがありますか。

山田瑞恵というのは私のペンネームの一つです。パクリではなく、本人が以前書いたものを推敲して、あらためて、書き直したにすぎませんので、どうかよろしく、お伝え下さい。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

---

**そのようにご説明しましたら。** 投稿者：北風 投稿日：2006年 7月 9日(日)19時32分26秒

[返信・引用](#)

以下のお返事がありました。

>Subject: マイリマシタ

>そうですか、道理であるのパクリ具合は半端じゃないと思っていました。参りました。

---

**「小さき声」 145号から** 投稿者：田中裕 投稿日：2006年 7月12日(水)20時56分59秒

[返信・引用](#)

一週間の海外出張を終えて、帰国しましたが、これからまたさらに学会が二つあり、しばらくは投稿できません。8月になれば、少しは時間がとれそうですが。

[小さき声第145号のHTML版](#)および[PDF版](#)です。

この復刻は真奈さんにして頂きました。あらためて御礼申し上げます。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2F2Feigenwille%2F>

「小さき声」 146号から 投稿者：田中 裕 投稿日：2006年 7月19日(水)10時09分55秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

[小さき声第146号のHTML版](#)および[PDF版](#)です。

今から32年前に書かれたもので、原本は謄写版刷りです。謄写版刷りの字体ではOCRは全く使えませんので、この時期の原稿の電子テキスト化はすべて手入力によるものです。幸い、真奈さんに協力して頂いて大いに助かりました。

146号では、医療過誤の問題が取り上げられています。難しい問題ですが、松本さんが自治会長としてどのように対応されたかが記録されています。また、信仰の問題については次のような文がありました。

「『これ等小さき者の一人にしたことは、私にしたのである』（マタイ25：40）とイエスは言われました。これは、私の自治活動の基調をなすものですが、厳密な意味を言うならば、病んでいるもの、貧しいもの、苦しんでいるものにイエスを見るのではなく、十字架のイエスにこれ等小さき者を見ることなのです。十字架の中にこの世界はあるのです。十字架のイエスを知ること、病んでいるもの、貧しいもの、苦しんでいるものを知ることなのです。イエスはこれ等の人達に替って十字架の死にまで降って行かれたのです。十字架は、世俗の唯中にあるのではなく、十字架の唯中に世俗はあるのです。

『神は一人子を給う程に世を愛された』（ヨハネ3：16）とあります。世とは、私達の住んでいる現実の世界でありましょう。その中に住んでいる人間を指して言っていることでしょう。神の一人子は、この世界の不信と罪を負って、十字架の死にまで降って行かれました。このことは、この世の不信と罪を神の一人子が飲んだことを意味します。つまりこの世界は、イエスに飲まれ、彼の死と復活に依って、新世界と作り替えられたのです。新生の人とされたのです。唯人間はその不信の故に、十字架のイエスを拒否し、新世界を知ること拒んで拒んでいます。十字架のイエスを知っているものだけがそれを知っています。こういう訳で福音は、世俗の中の福音ではなく、世俗は福音の中の世俗なのです。それ故に、十字架を知るものは、病んでいるもの、貧しいもの、苦しんでいるものを知り、それに仕えるのです。』

「私がここで強調していることは、信仰のもつ不思議な業を言っているのです。『私は甦りであり、命である。私を信ずる者は死ぬとも生きん』（ヨハネ11：25）と言われた信仰の奇蹟をいうのです。パウロがロマ書で『信仰による義人は生きる』（ロマ書1：17）と言われた信仰について語っているのです。信仰はまた私に、大いなるものを与えています。それは全く自由にされていることです。ルターの「キリスト者の自由」を引き合いに出すまでもなく、あるいはパウロがロマ書、ガラテヤ書、コリント書簡で言っていることを指摘するまでもなく、現実生活の中で私は、完全に自由にされています。

第1には、失明と四肢の無感覚という廃人の不自由から解放されています。  
第2には、これが最も重要な根源的な出来事ですが、罪と死から解放されています。  
第3には、らいとその偏見から解放されています。  
第4には、私を隔離する隔離と、社会的閉鎖から解放されています。  
第5には、私を支配する権力から解放されています。

ではどこで解放されているのか。それは最も大切なことであるが、十字架の一点において解放されているのです。義である十字架のイエスに固着するとき、これらのものから解放されているのです。解放され、自由であるが故に、奇蹟が起るのです。それはイエスとともに万人の奴隷となることだからです。上に挙げたようなものからの解放は同時に、その奴隷となることだからです。それは、生来の奴隷ではなく、イエスとともにある奴隷であり、信仰にある奴隷です。私がかつて、生来の奴隷であったが、現在は、信仰の奴隷なのです。生来の奴隷は私に、絶望と発狂と死をもたらすが、信仰による奴隷は、喜びと希望と自由をもたらします。」

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2F2Feigenwille%2F>

齋藤劉について 投稿者：北風 投稿日：2006年 8月17日(木)18時14分9秒

[返信](#)・[引用](#)

熊本の回春病院〔ハンナ・リデルの病院〕の隅 青鳥という患者の歌に、

齋藤劉先生に  
なぐはしき実朝大人をこの世にみたる心地す歌人少将

という歌がありますから、回春病院とも交流があったようです。

**斎藤瀏について** 投稿者：真奈 投稿日：2006年 8月17日(木)23時13分40秒

[返信・引用](#)

斎藤瀏と『山櫻』との関係は、熊本師団時代の「熊本歌話会」で知り合った内田守人（恵風園勤務。医務官）との縁からということ、『山櫻』の表紙を昭和16～17年にわたって揮毫されたことなど、お聞きしましたことさっそく連句の大先輩（長野時代に短歌を斎藤史に師事）に葉書を今朝出しました。有難うございます。19日に現物を図書館で拝見したいと思っております。

↓のように斎藤瀏は鎌倉右大臣、実朝少将に倣って「歌人少将」の異名を持っていたのですね。斎藤史は大正末年頃から作歌を開始、前川佐美雄らと「短歌作品」を創刊。その後、父斎藤瀏の「短歌人」発刊に参加したとあります。

2・26事件に父が巻き込まれ、特設陸軍軍法会議の判決により、叛乱者を利する罪によって伍階勲功を剥奪、禁錮五年の刑に処せられた頃、長女を出産した史の歌に

暴力のかくうつくしき世に住みてひねもすうたふわが子守うた

道浦母都子は“まず、暴力が美しいというとらえ方に、作者である斎藤史の秘めた志を感じます。抵抗感といってもよいかもしれません。”という評を書いています。そして“斎藤史の歌人としての一生は、「もののふの父の子に生れ」、その父の悔しさや無念を一生かかって歌い続けること。そして、「2・26事件」を内側から、しかも女性の目を通して歌い続ける、そのことに賭けられているような気がします。”とも…。

2・26事件については、事件の表象を報道的に伝えられてはいるものの、その真実の本質的説明がされているとは言えません。史は歴史の語り部として歌い続けるのですが、その激しさに打たれるような歌の中から…

白きうさぎ雪の山より出でて来て殺されたれば眼を開き居り 『うたのゆくへ』  
いかにやさしき狂気持てば棲み慣るる水より躍びて魚は死ににき 『ひたくれなぬ』  
地球時間ときを刻めど死者達はそれより老いず瞳はりたるまま 『秋天瑠璃』

父の無念と悔しさという背景には、さかのぼって昭和3年の済南事件（山東出兵した日本軍と中国革命軍との局地戦）に出兵したことからの後の政変で責めを負い退役、予備役の身になっていたこともあるかと思えます。こうした軍人としての瀏の経歴と、そして『山櫻』に心を寄せる『心の花』同人としての歌人・瀏に、昭和初期という狂気の歴史を生きた一人の人間の内面を辿ることができれば…と思っています。

**瀏** 投稿者：北風 投稿日：2006年 8月18日(金)09時01分51秒

[返信・引用](#)

面倒くさいから「瀏」のままにしたけれど、一本とられた。ははははは。

**小さき声147号より** 投稿者：田中 裕 投稿日：2006年 9月 7日(木)06時56分7秒

[返信・引用](#)

9月2日に、東條耿一の著作集の出版に向けて、ハンセン病図書館で、打合せの会合がありました。松本馨さんの追悼講演会でお話し頂いた野上寛次さんが、東條の作品、とくにキリスト教に復帰した後に書かれた手記に感動され、皓星社の藤巻さんに出版を打診されたことがきっかけとなりました。

9月3日のミサでは、「今週の永眠者のための祈り」で、全生園でなくなられた多くのキリスト者の名前と共に読み上げられました。ミサの後の茶話会で、愛徳会の皆様にも報告しました。来年の命日までには出版されると思います。

9月4日から6日まで、京都に出張し、昨日帰京しました。今日は8時から清瀬の複十字病院に行き、人間ドックに入る予定です。人間ドックは、申込者が多いらしく、なかなか順番が回ってこなかったのが、慌ただしい日程になりました。

真奈さんのご協力のおかげで、[小さき声147号](#)を復刻しました。[PDF](#)でも閲覧できます。

147号には、原田嘉悦氏が起した「世界ハンセン病友の会」にかんする言及があります。その箇所を引用しましょう。

「この会は一〇〇円で、日本のハンセン氏病患者が会員です。賛助会員として、一般の人も参加していますが、会員は五百名で小さなグループと言えましょう。この会の主旨は、経済的に、あるいは医療面で恵まれた日本のハンセン氏病患者が、世界の幾百万といわれる病友に愛の手を差しのべるのが目的です。金額にしては誠に小さいものですが、施設に入ることも出来ず、地をさまよっている世界の病友に、祈りに似た気持で贈るものです。それがどんなに小さなしるしでも、世界の何処かで自分達の身を案じている病友のあることを知ったとき、幾許か

の精神的支えと神の証となることでしょう。私は原田氏の相談相手となり、印度に贈るためのお手伝いをしました。幸い千代田集会の大田成美氏が、日本赤十字社に勤務しておられたので、氏にお願ひし、贈ることが出来ました。印度赤十字社からは、感動に満ちた手紙を頂きましたが、その中に世界ハンセン氏病友の会がユニークな団体であること、18万円を受けることを名誉に思っている旨のことがしたためてありました。私は思うのです。世界ハンセン氏病友の会が贈った18万円と米国教会を通して贈った2百万円と、果してどちらを印度の病友は喜んでくれるだろうか。印度赤十字社のように、どちらを光栄と思い、名誉と思ひ受け取ってくれるだろうか。」

いろいろと考えさせられました。

「小さき声147号」読ませていただきました。投稿者：旅人 投稿日：2006年9月7日(木)

[返信・引用](#)

11時27分40秒

ご無沙汰しております。人間ドックに入られるのは、何か自覚症状でもおありなんですか。良い結果が出ますように。

147号を読ませていただきました。ありがとうございます。

「悪法であっても、それを用いる人によって悪法が悪法でない場合もある。隔離収容は、当時としては公共の面から致し方なかったが、所内における運営面で患者の人間性を尊重する政策がとれた筈である。何故、罪人として抑圧し、搾取したのか。」という考え方は、かなり日本的であるように思います。悪法も法であるという立場からは、どこまで運用で救えるものなのか、実際に運用した良心的な人々には辛い問題であったと思います。この問題は、杉原千畝の評価に通じるものがあるように思います。

「ヨハネに依る福音書八章の、罪の女を巡ってイエスとパリサイ人、律法学者との問答」については、日本の警察や検察の人が全くの善人でなかったら、法の執行はできないのかという問題は的外れなんではないでしょうか。思いつきですみません。

クレアモントから 投稿者：田中 裕 投稿日：2006年10月18日(水)01時40分38秒

[返信・引用](#) [編集済](#)

日本にいるときは様々な学務や学会関係の仕事に忙殺されて、なかなかこの掲示板の投稿も出来ませんでした。10月3日に渡米してから、二週間が経過し、漸く時間的にも余裕ができましたので、投稿を再開したいと思っています。

旅人さん：

>人間ドックに入られるのは、何か自覚症状でもおありなんですか。良い結果が出ますように

ここ数ヶ月の間、喘息の発作で不眠状態が続き、体重も激減したので、人間ドックを受けましたが、結果はあまり芳しいものではなかったですね。しかし、家に引きこもっていても解決にならないし、積極的に活動した方が、かえって気も紛れるので、思い切って渡米しました。

私の現在滞在しているクレアモントは、米国カリフォルニア州ロサンゼルス南にある大学町です。10月5日から8日まで [Cosmology and Process Philosophy](#) という学際的なシンポジウムがあり、その主催者から招待されたので、パネリストの一人として参加した次第です。

クレアモントは気候温暖な地ですので、11月3日まで、保養をかねて滞在する予定です。さいわい、喘息の発作が当地では起きませんし、いまのところ日本にいたときよりも体調は良いですね。

現在は、10月24日締め切りの原稿を書いています。テーマは「新渡戸稲造」で、これは「キリスト教と近代日本」という本に収録される予定です。当地の図書館のアジア研究センターには新渡戸の全集と、かれの英文著作の全てが収蔵されているので助かりました。新渡戸稲造の「武士道」も、彼が健康を害して、米国で保養しているときに書いたものなので、以前読んだときよりも、彼の心がなお一層身近に感じられます。新渡戸だけでなく、内村鑑三の自伝や「代表的日本人」なども関連が深いので読み直しています。11月に帰国するとすぐに奈良の天理大学でシンポジウムがあり、そこでもパネリストになっているので、その準備もしています。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

田中先生お早うございます。投稿者：旅人 投稿日：2006年10月18日(水)10時11分45秒

[返信・引用](#)

先生の書き込みが永らくなかったもので、少し心配していましたが、喘息の発作で眠れないというのは、非常に辛いことだとお察し申し上げます。主イエス・キリストが先生の霊肉を守ってくださいますように。

クレアモントには行ったことがありませんが、大学町ということであれば、落ち着いた雰囲気

気で、縁も深く住み易いところなのでしょうね。そちらの気候も、先生には良い効果を与えているようです。そちらのできごとやご感想など、ぜひ伺いたいです。

現在先生が書かれている「新渡戸稲造」は読んでみたいと思いますので、それが収録されている「キリスト教と近代日本」が出版されたら、ぜひお知らせください。

それではまた。

**お元気になられて何よりです** 投稿者：真奈 投稿日：2006年10月21日(土)22時41分1秒

[返信・引用](#)

そちらは、おはようございます、ですね。  
暫くぶりに開けてみると、クレアモントからの通信が載っていて、学会も終え、気候の良い環境で静養されておられるとのこと良かったですね。

学会報告は Modern Cosmology and Process Philosophy と載ってまして、宇宙論から武士道まで、と幅広いテーマにびっくりです。

PCでオリエンタ・セミナーの第5回『武士道とキリスト教』を読みましたが、内村と新渡戸の違いはどこから生れてきたのだろうか、生い立ちの特殊性もあるのでしょうか、やはり思想上の問題として捉えなくてはならない、と思いました。また、“日本という「旧約」”というのは各民族に固有の「古き物語」に即して言われるのですが、こういう用語に慣れていないせいかな、なぜかのように定義できるのがよくわかりません。  
新しい本が刊行されることで期待しております。最近、なぜかマスコミなどで、「武士道」がもてはやされるようで少し気になります。

そろそろ、全生園まつりも近づいてきましたが、この文化祭に向けて、「松本馨追悼記念講演会」の講演録が、「ハンセン病図書館友の会」の発行で出ます。1冊300円。旅人さま、いかがですか？

1. 松本馨の闘い—らい予防法に抗して (講師 大谷藤郎)
  2. 松本馨の信仰—信仰と受難 (講師 野上寛次)
  3. 質疑応答とトークセッション (司会 森田外雄)
- 60ページほどだそうです。

私は今、「花開く詩の時代—柘の垣根を越えて—」というパネル展示の準備をしているところです。田中先生は3日深夜に帰られるそうなので残念ながらお見せできませんね。

では又。  
お元気です！

**真奈さん、お早うございます。** 投稿者：旅人 投稿日：2006年10月22日(日)07時43分25秒

[返信・引用](#)

私は(も?)内村と新渡戸の双方には惹かれるものがあり、今後この掲示板でお話しを伺うことができれば、非常に嬉しく思います。

真奈さんは、“日本という「旧約」”という言葉に少し拘っておられるようですが、考えてみると、「旧約」という語が、厳密に定義されることなく、学術書に手軽に用いられているような気がしますね。イメージとしては、律法と預言というよりは、キリスト教受容前に懐かれていた思想というようなもののように思えますが、田中先生の御意見を伺いたいと思っています。少なくとも、キリスト教を受け入れていない人にとっては、この用語は、キリスト教徒の独善性を感じさせ、鼻につくものであるかも知れないと思います。

ただし、内村や新渡戸を始めとして、明治時代にキリスト教に改宗した人々がどのような思想の遍歴を辿ったのかとか、キリスト教の土着化という問題には、非常に興味をそそられます。

真奈さんがお勧めの講演録については、読まれた方がこの掲示板に読後感などを書いてくださることを期待しています。良い物だと分かれば、数冊購入して、聖書集会の仲間に配ることを考えたいと思います。

それではまた。

**武士道という「旧き契約」：「代表的日本人」から** 投稿者：田中 裕 投稿日：2006年10月

[返信・引用](#) [編集済](#)

23日(月)22時12分41秒

トムクルーズ主演のアメリカ映画に「ラストサムライ」というのがありましたが、武士道というものは、封建時代の日本のサムライの倫理であるにもかかわらず、現代アメリカの映画監督の筆線にさえも訴えるところがあったようです。何故でしょうね。

ところで、この「ラスト・サムライ」という言葉ですが、実は、内村鑑三の「代表的日本人」の西郷隆盛の章に、次のようなくだりがあります。

西郷を討った側の者もみなその死を悼んだ。涙ながらに彼の遺体は埋葬され、

今日に至るまで涙にくれて墓参する人はあとを絶たない。  
かくして最も偉大なる人物、おそらくは「最後のサムライ」ともいべき人物が  
この世から姿を消したのである。

映画の「ラストサムライ」の話は別にして、何故、基督者の内村鑑三が「最も偉大で、おそらく最後のサムライ」として西郷隆盛を論じたのか、それは説明を要します。西郷の言葉と行動のうちには、内村の心に深く訴えかけるものが有ったに違いないのです。

「代表的日本人」は英語で書かれましたが、西郷の人生観を要約する言葉-「敬天愛人」-と西郷の詩文を内村はいくつか翻訳して引用しています。

「天は人も我も同一に愛し給ふが故に、我を愛する心を以て人を愛するなり」  
(Heaven loveth all men alike; so we must love others with the love with which we love ourselves)

という西郷の言葉には、律法と預言者の思想が込められており、西郷がそのような壮大な教えをどこから得たのか興味深いところである。

内村は、西洋の宣教師によってキリスト教が明治の日本に伝えられる遙か以前から、万物の創造主である神が、日本人にそのころをつたえなかった訳ではないと考えています。言うなれば、神は、ユダヤ人に対してのみ「旧き契約」を結ばれただけでなく、世界の諸民族に対しても、その伝統と文化に応じた形で、その天意を伝え、キリストの教えにたいする準備をされていたはずだということです。

内村は、福音書のイエスの言葉に呼応する言葉が、「天にいます主」によって直接に、「代表的日本人」の一人である「聖人」西郷に啓示されていたと云っているようです。封建道徳という時代の制約の下にありながらも、その道徳（旧き契約）を突きぬけるような死生観が西郷の言葉と実践の中にある。それは「最も偉大なる、おそらく最後のサムライ」の死として過去のものになったとはいえ、完全に姿を消したわけではない。それは、基督者である内村自身の中に、明治という新しい時代の日本の基督者としての内村自身の中にも、その「最後のサムライ」の精神が、かたちを新たに生きていそという印象を受けました。

内村が引用している西郷の詩文に次のようなものがあります。(内村の英訳とともに)

一貫唯唯諾す	Only one way, "Yea and Nay";
従来鉄石の肝	Heart ever of steel and iron.
貧居傑士を生じ	Poverty makes great men;
勲業多難に顕わる	Deeds are born in distress,
雪に耐えて梅花麗しく	Through snow, plums are white,
霜を経て楓葉丹し	Through frosts, maples are red;
もしよく天意を識らば	If but Heaven's will be known,
あに敢えて自ら安きを謀らん	Who shall seek slothful ease!
地古く、山高く	Land high, recesses deep
夜よりも静かなり	Quietness is that of night
人語を聞かず	I hear not human voice,
ただ天を見るのみ	But look only at the skies

この詩文の最後の二節は、その前の詩文の、「もしよく天意を識らば、あに敢えて自ら安きを謀らん」と呼応しています。それは、単に山に籠もって自然に親しむと云うだけでなく、世俗の人の声を離れて、唯天を仰いで、神の声を聞くという意味に、内村は解釈していたと思う。それは、この著作を書いた当時の内村自身の心境でもあったでしょう。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**続きに期待しています。** 投稿者：旅人 投稿日：2006年10月25日(水)10時55分14秒

[返信・引用](#)

この後は、新渡戸稲造の場合についても論じられるものと期待しています。

一つ疑問を提出させていただきます。内村は西郷隆盛を最後のサムライだととらえたということ、最初のサムライのことも考えていたのでしょうか。たしか内村は、楠正成のことも大分お気に入りだったように記憶しています。

内村が西郷を「聖人」と考えていたとは、気がつきませんでした。内村がキリスト教を受け入れる前は、特に西郷を人生の手本とはしていなかったように思いますが、いかがでしょうか。どちらかという、後になって自分の信仰のルーツを探っていく中で出会ったのではないかと思います。その信仰のルーツには、実際には武士より仏教徒の方が多くいるのではないのでしょうか。

田中先生は、「封建道徳という時代の制約の下にありながらも、その道徳（旧き契約）を突きぬけるような死生観が西郷の言葉と実践の中にある。」と内村が考えていたとお考えのようですが、そうすると内村は、西郷が旧約を突き抜けて新約の死生観を懐いていた、と考えていたことになりましたか。

申し訳ありませんが、まだブログの方は読んでいません。

**補足** 投稿者: [田中 裕](#) 投稿日: 2006年10月25日(水)12時20分57秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

旅人さん 投稿有り難うございました。

> この後は、新渡戸稲造の場合についても論じられるものと期待しています。

新渡戸についての原稿は締め切りが24日でしたが、これはアメリカから送りました。いずれ書籍になると思います。

11月のはじめに奈良の天理大学でシンポジウムがあり、そこでは、「宗教・科学・人間—歷程哲学の意味」という講演をするので、その原稿を今書いているところです。新渡戸については、残念ながら更に詳しく論じる暇がありません。どちらかといえば、新渡戸よりも内村のほうに惹かれていますので。

> 一つ疑問を提出させていただきます。内村は西郷隆盛を最後のサムライだととらえたということは、最初のサムライのことも考えていたのでしょうか。たしか内村は、楠正成のことも大分お気に入りだったように記憶しています。

「最初のサムライ」といっても、どうも印象が希薄ですね。インパクトがない。

つまり、明治になって廃藩置県・廃刀令、そして西南戦争が有ったという歴史的状況を踏まえて内村は書いているので、それが読者に訴える。武士道の実践倫理が本質的に過去のものであるという認識に於いては、新渡戸も内村も同じです。その武士道を「旧き契約」として、新しい契約である「キリスト教」において完成させようとするのが内村のいわんとするところでしょう。

「余はまた基督者であると同時に日本人である。しかも旧式の日本人である。小身者なりと雖も武士の家に生まれ、日本武士の名を汚さざらんと今も猶努むるものである。もし基督教が日本武士の理想を実現する者であるとのことが解らなかつたならば余は決して基督者に成らなかつたであろう。」  
(聖書之研究、昭和2年8月号)

> 内村が西郷を「聖人」と考えていたとは、気がつきませんでした。

中江藤樹が「近江の聖人」といわれていたように「聖人」というのはもともと儒教の概念です。西郷も中江藤樹も陽明学に深く影響されていましたが、陽明学では、「聖人」を凡俗の及びも付かぬ偉人として奉るのではなく、凡俗の人の「心=良知」がすでに「聖人」の「心」と一つであることを自覚することが求められる。そういう意味で、聖人として論じていたと云うことです。

>どちらかという、後になって自分の信仰のルーツを探っていく中で出会ったのではないかと思います。その信仰のルーツには、実際には武士より仏教徒の方が多くいるのではないのでしょうか。

これは、数の問題ではないと思う。質の問題がある。仏教徒については、日蓮が「代表的日本人」としてあげられていますが、これは、日蓮が、日本の神々、幕府、皇室という権威よりも、法華経のほうを重んじた事に惹かれたのでしょう。日本仏教は、大体に於いて、皇室や幕府といった時の支配者と深く結んでいたもので、そういうものをトータルに批判する視点を欠いていた。ひとり日蓮のみが、そういう権威におくせず、自ら真とするところを語った—そこに惹かれたのでしょう。

> 田中先生は、「封建道徳という時代の制約の下にありながらも、その道徳（旧き契約）を突きぬけるような死生観が西郷の言葉と実践の中にある。」と内村が考えていたとお考えのようですが、そうすると内村は、西郷が旧約を突き抜けて新約の死生観を懐いていた、と考えていたことになりませんか。

直ちにキリスト教の死生観に行く筈はありません。西郷の死生観は陽明学という純一なる実践倫理に基づくものでしたが、その実践倫理の背後には素朴な性善説があり、宗教的な深さがありません。しかし、陽明学には、古い体制を打破する新しい精神の萌芽がある。封建道徳を支えていたのは朱子学という合理主義でしたが、旧体制を突きぬけるものが、西郷の言葉と行いの中にあつた、という意味です。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**額面どおりに受け取るべきか?** 投稿者: [旅人](#) 投稿日: 2006年10月26日(木)07時02分39秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

田中先生、お早うございます。いろいろお教えいただきありがとうございます。

一つ気になる個所があります。それは、田中先生が「聖書之研究」の昭和2年8月号から引用されている内村の思いについてです。この文によれば、内村は自らの意思で「日本武士の理想を実現する」ためにキリスト教徒となったように書かれていますが、これは、内村が書いた「余は如何にしてキリスト者となりしか」で語られているような改心体験とは異なっていると思います。晩年の内村の思想は、そのまま受け取ることができないように思うのですが、いかがでしょうか。

補足： 引用された文で内村が言いたかったことは、キリスト教は武士道を完成させるものであるという認識ではないでしょうか。

**キリスト者となる、ということ** 投稿者：[田中 裕](#) 投稿日：2006年10月26日(木)14時03分46秒

[返信・引用](#)

旅人さん：

> 一つ気になる個所があります。それは、田中先生が「聖書之研究」の昭和2年8月号から引用されている内村の思いについてです。この文によれば、内村は自らの意思で「日本武士の理想を実現する」ためにキリスト教徒となったように書かれていますが、これは、内村が書いた「余は如何にしてキリスト者となりしか」で語られているような改心体験とは異なっていると思います。晩年の内村の思想は、そのまま受け取ることができないように思うのですが、いかがでしょうか。

この昭和2年の記事は、「弟子を有つ不幸」という内村の思いが背後にあって、塚本など弟子の世代の「無教会信徒」と内村自身の考え方の相違が露わになってきたときの文です。その相違には様々な理由があったが、そのひとつは、内村自身の中に生きていた武士道という旧時代の精神を弟子達が共有していないことだと内村が云っている、そういう文脈で書かれたものです。

この点についてはブログに書いた「新しき契約—札幌農学校と内村鑑三」をお読み頂ければ幸甚です。そこで、私は、クラークの起草した「イエスを信じるものの契約」の最初の部分を原文から訳してみました。文字どおり、内村の信仰生活は、この契約から始まる。そして、一年余り後で受洗したときの日記を引用しました。それは、

ルビコン川はこうして永久に渡られた。われわれは新しい主人たるキリストに忠誠を誓い、  
われわれのひたいには十字架のしるしが刻まれた。  
いざこの後は、地上の主君のために教えられてきた忠誠の念を以てキリストに仕え、  
王国また王国と征服しながら進んでいこう。

という文が記されています。こういう少年時代の内村の思いは、晩年の回想「もし基督教が日本武士の理想を実現する者であるとのことが解らなかつたならば余は決して基督者に成らなかつたであろう」という文に対応しています。

言い換えれば、陽明学と呼応するような知行合一の実践倫理、その完全性への勧め、等々、文明開化の時代、商人的な功利主義が跋扈する明治の初期には反時代的となったようにみえる教えが、キリスト教倫理というより普遍的な精神として甦るという経験は、札幌農学校の生徒たちにも、また所謂「熊本バンド」の学生達にも共通するものです。

もともと内村は私意を捨てて公を第一に考える武士道ないし儒教倫理の中で育ちましたから、「自分一個の救い」よりも「日本を救済すること」の方に生き甲斐を見出すタイプだったと思う。だから受洗したのは、救国の情熱がそうさせたのであって、自分自身の内面的な苦悩とか、自分自身の罪性を深く自覚するということから為されたわけではないと云う印象を受けました。

内村がもっと個人的かつ実存的な回心を経験したのは、結婚に失敗して、単身渡米し、知的障害者の施設で働き、彷徨遍歴をかさねたあとでアマスト大学のシーリーのもとで勉強していたときでしょう。アマスト大学を卒業するときに、内村は次のような文を日記に書いています。

A（アマスト大学）における最後の日。一實に感激的な一日。  
過ぐる二年間にこの地で経験した多くの苦闘と誘惑を思った。同時に、神の助けによって自分の罪と弱さに勝った誇らしい勝利の数々と、神によって示された多くの輝かしい啓示を思った。まことにわが全生涯はここで新しい方向へと向き変えられたのである。

我々がキリスト教的な回心と普通に云うものは、むしろアマスト在学時代の内村の経験がそれに該当するでしょう。

内村の自伝のタイトルは「如何にしてキリスト者と成りしか」と過去形になっていますが、実際は、内村は常に、キリスト者に「なる」プロセスの内に自分がいたことを自覚していたとおもう。受洗したからといって、また教会の名簿に名前を記載されたからと云って、その人はキリスト者「である」訳ではない。「如何にしてキリスト者となるか」ということ、および、「いかにして、キリスト者として働くか（How I Worked a Christian）」ということが、内村にとっては第一義的であったと思う。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**難しいことになりました。** 投稿者：旅人 投稿日：2006年10月26日(木)16時05分55秒

[返信](#)・[引用](#)

内村は一方で、平民とか平信徒という立場を重視しています。農民、商人そして工場に働く労働者への思いやりは、かなりのものであると思います。そのような立場と「武士道」とは、どのような関係にあるのでしょうか。そもそも内村は、武士道をどのように考えていたのでしょうか。

多分武士的生き方は、生き方の中にもあまりにも深く根付いていて、あまり意識に上らなかったのではないのでしょうか。ごく当たり前の感性のようなものだから、弟子の教育に際しても、武士道の教育などはなかったでしょう。

実際のところ塚本との対立では、かなり感情的になっており、彼我の差を考えて、行き着いたところが「武士道」ということではないのでしょうか。塚本がその武士道の精神に欠けるといふことで、内村が一体何を言いたかったかと言えば、義を重んじよということだろうと思います。具体的には塚本が内村の集会の会員を大勢引き連れて、独立したことに対する憤慨だと思えます。沈着冷静な思索の結果とは思えません。

「武士は二君に仕えず、節婦は二夫にまみえず」というのが武士道の道徳であるとするれば、ルビコン川云々という文章の中の「新しい主人たるキリストに忠誠を誓い」という件はどう解釈すべきなのでしょう。藩主に対する忠誠という点で言えば、西郷隆盛も忠臣とは必ずしも言えないのではないのでしょうか。上杉鷹山を引き合いに出した方が良かったのではないかと思います。

このように考えてくると、内村の「代表的日本人」を西郷に絞り、それを武士道にだけ結びつけて考えるのは無理なように思います。もともと内村の「代表的日本人」は、日本にも優れた「人たちがいたのだ」ということを知らせることを目的としており、新渡戸稲造の「武士道」とは、観点を異にしていると思います。

田中先生が、「キリスト者となる、ということ」として内村の信仰を語られていることについては、異論はありません。その考えは、ロマ書講義、特に「信仰から信仰へ」というパウロの言葉への言及によく表れていると思います。

**内村鑑三の「代表的日本人」と新渡戸稲造の「武士道」とのちがいについて** 投稿者：[返信](#)・[引用](#) [編集](#)

[田中 裕](#) 投稿日：2006年10月26日(木)23時01分9秒

旅人さん：

> このように考えてくると、内村の「代表的日本人」を西郷に絞り、それを武士道にだけ結びつけて考えるのは無理なように思います。もともと内村の「代表的日本人」は、日本にも優れた「人たちがいたのだ」ということを知らせることを目的としており、新渡戸稲造の「武士道」とは、観点を異にしていると思います。

新渡戸稲造の「武士道」よりも先に出版された「代表的日本人」には、武士道のなかに「旧き契約」をみいだすという新渡戸と共通する発想がみられますが、内村が、「旧き契約」として考えていたものは、武士道だけではありません。そこには、新日本を建設した「最後のサムライ」だけでなく、封建領主として上杉鷹山、農民聖者としての二宮尊徳、村の教師としての中江藤樹、仏僧の日蓮が論ぜられていますね。武士道を含みつつも、それよりもさらに広い視野から日本人の精神的遺産を自覚しようと云う姿勢がみられます。

これらについては今は詳論する余裕がありませんが、西郷隆盛と同じく陽明学の影響を強く受けた中江藤樹に関する章で、内村が「謙譲の美德」について語っている点は注目に値します。内村は次のように云っています。

何ものも懼れずに独立不羈の人であった藤樹の倫理体系の中で、何よりも注目すべきは、彼が「謙譲の徳 (the virtue of humility)」を最高位に置いたことである。藤樹にとって「謙譲の徳」とはすべての源となる根源的な徳であり、謙譲の徳がない人間なら

ば、すべてを欠いているのとおなじであった。  
「學者はまず慢心を捨てて、謙譲の徳を求めないならば、どれほど学識や才能があっても、

凡庸な迷妄を越え出る資格がないのである」「充実は損失を招き、謙遜は天の法である。謙譲は虚である (Humility is emptiness)。

心が虚であるならば、善悪の判断は自ずから生じる」。藤樹は、虚という言葉の意味を説明して、次のように述べる。

「昔より真理を求めるものは、この言葉につまずく。靈的 (spiritual) なるがゆえに虚 (empty) であり、虚であるがゆえに靈的である。このことを良く考えよ。」

新渡戸稲造の「武士道」に出てくる倫理項目には、「謙譲の徳」(humility)というものはありません。そこでは「義」「勇」「仁」「礼」「誠」「名誉」などの儒教倫理が語られますが、「謙譲」という徳目はないのです。これに対して、内村は、中江藤樹がこの徳を最高位に置いたことに注目している。

西洋では、キリスト教倫理をギリシャ的な倫理から分かつものは、「謙譲の美德」に他ならぬとされます。ただし、そこでの謙譲とは世俗の徳ではなく、信仰・希望・愛という対神徳に人を導くものとして位置づけられます。アリストテレス的な「中庸」を重んじる世俗の道徳概念では、「謙譲」は「傲慢」と同じく、避けるべき極端であって、決して美德とはされなかったのです。謙譲は奴隷にこそ要求されるものであり、自由な市民に相応しくないというのがむしろギリシャ人やローマ人の考え方の主流でした。

「謙譲」がキリスト教倫理で美德とされるのは、イエス自身の「ケノーシス」(虚しくすること)の行為に倣うがゆえにである。この美德を中江藤樹の思想の中に見出した内村は、単なる武士道の倫理よりも更に一層キリスト教倫理に近づいたものを、日本人の精神文化の内に見出したとあって良いでしょう。

内村が、藤樹の和歌を、次のようにキリスト教的に翻訳しているのは興味深いものです。

上もなくまた外もなき道のために  
身をすつこそ身を思ふなれ  
He loves his life who his life forsakes  
For Ways that no like or higher know

「代表的日本人」は、内村自身にとっては過渡期の著作です。それは彼が聖書に基づいて非戦論を唱える前に書かれたものであり、内村自身によれば「キリスト者としての私とその上に接ぎ木されたところの台木を示している」と位置づけられました。しかしながら、内村はそれとともに次の言葉を付け加えることを忘れてはいません。

日蓮、法然、蓮如その他の敬虔な尊敬されるべき人々がすでに私の先輩であり、宗教の本質を私に教えてくれたのである。藤樹らがわが国の教師であり、鷹山らが藩主、尊徳らが篤農家、西郷らが政治家であったのは、私をして、かつて一ナザレの神の人の足もとにひれ伏すべく召し出される前に私があった通りのものにするためである。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**内村が西郷に見出したもの** 投稿者: 旅人 投稿日: 2006年10月27日(金)08時13分7秒

[返信・引用](#)

田中先生お早うございます。

謙譲の美德については、「聖書之研究」第六号(明治三十四年二月二十日)に田中先生が述べられていると同様なことが記載されています(「基督信徒の謙遜」)。

しかし、ここで西郷隆盛について、もう少し考えなければならぬと思います。それは、内村が西郷の中に何を見出したのか、そしてそれはどのような論理なのかということです。

内村が西郷の中に見たものは、国賊といわれるほどの愛国者であると思います。その内村の見方がどれだけ正しいものであるのかについては議論の余地があるでしょうが、同じく国賊と呼ばれた内村は、西郷の中に自分と同じ愛国心を見たのだと思います。そこにこそ、内村の魅力があるのだと思います。

そして、このような逆説的な見方というのは、十字架にかかれた救世主というキリスト教の信仰に基づくものであると思います。

また、キリスト教の道徳について言えば、山上の垂訓よりも、たとえばマタイによる福音書の第10章37節に、儒教を超える親孝行の核心を見出すところに、内村の体験に基づく論理があると思います。

**クレアモントという大学街にて** 投稿者: [田中 裕](#) 投稿日: 2006年10月27日(金)13時17分21秒

[返信・引用](#) [編集済](#)

新渡戸稲造については、2002年に、オリエンズ・セミナーと云うところで講演したときの原稿がWEBに掲載されています。簡単なものですが、[武士道とキリスト教](#)をご覧ください。

現在の日本は、憲法改悪、教育基本法の改悪など明確に「右傾化」の動きがあり、それとともに新渡戸の「武士道」にたいする関心も高まってきたように思いましたので、この講演原稿は、そういう動きに対する批判という意図をこめて書いたものです。私のこの原稿は旧稿で、意を尽くさぬ所も多いのですが、すでにWEBで掲載されているので、お読み頂ければ幸甚です。

ところで、私が現在滞在しているクレアモントというところは、ロスアンゼルス市の南にある閑

静な大学町です。内村鑑三の自伝を読むと、米国の大学の様子が活写されていますが、当地も、もともとメソジストの神学校を中心に発展してきた大学町なので、内村の時代とそれほどかわっていないなと思うことがあります。大学といっても、せいぜい二階建ての家が多数並んでいて、教授の自宅もその中にあり、学生は自由に教授の自宅を尋ねることが出来る—そういう教師と学生との間の親密な関係が今も続いています。

神学校にはAncient biblical manuscript center があって、新約聖書の古代写本が多数展示してありました。ここは、新約聖書学の文献が揃っていて、内村が札幌農学校で読んで大いに影響を受けたという Albert Barnesの新約注解やヨブ記注解なども読むことが出来ました。

ここは、また、戦後まもなく鈴木大拙が「禅と日本文化」を講じたところでもあり、図書館のアジア研究センターには、中国や韓国の文献と共に、日本語のものも相当揃っていました。最近の傾向として、中国大陸から当地に留学する大学院生が非常に増えたと云うことです。学生だけでなく在外研究のためにきた中国の哲学研究者にも多数会いました。クレアモントは米国に於ける「process philosophy」の中心地ですが、中国にはprocess philosophyの研究センターが24の大学にあるという話を聞いて驚きました。彼等の考えでは、中国哲学は本質的にホワイトヘッドの云う意味でのプロセス哲学（中国では歷程哲学といいます）であるとのこと。いってみれば、米国などとは比較にならぬほど長い歴史を有つ中国思想を、process philosophy of organism という観点から振り返ろうという意図を持っているようです。

当地で、ホワイトヘッドの「歷程哲学」にかんするテーマで博士号を取得した中国人の女子学生が、送別パーティに私を招待してくれましたが、なんと彼女は、私が以前、講談社から出版した「ホワイトヘッド」にかんする本の中国語訳を読んで、ホワイトヘッドに関心をもったとのこと。予想もしない場所で知己を得たという感じでした。

今年の7月にオーストリアのザルツブルグ大学で国際ホワイトヘッド会議がありましたが、そのときは300名の参加者が、世界各地から集まりました。2年後にインド、4年後は日本で国際会議をおこなう予定なので、今回の渡米はそのための下準備という意味もありました。

当地では私は自己紹介するときに「non-church catholic」（無教会のカトリック）ですと云うことにしています。内村の弟子達は、無教会をプロテスタントの宗教改革の延長線上に捉えています。私はそうではなく、「普通の教会」というときの「普通」と、そこに生きる「個」から「無教会」を考えようという立場です。私は、したがって内村とは違って、愛国心とキリスト教を結合していません。むしろ、私は、国家や教会組織を越える原理を、個々の人格と「無」の普遍にもとめるという立場です。

内村については、彼のいう二つの「J」のうちの一つであるJapanへの熱烈な愛の意味するものを、内村自身の文脈でまず理解したいと思っています。国家とキリスト教との関係という避けては通れない問題がそこにありますので。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2Ffeigenwille%2F>

**これからの進め方を教えてください。** 投稿者：旅人 投稿日：2006年10月28日(土)09時57分36秒

[返信](#)・[引用](#)

田中先生、お早うございます。

田中先生の「クレアモントという大学街にて」という文の中には、田中先生の問題意識が幾つか書かれていますが、今後田中先生がどのような道程を考えていらっしゃるのか教えていただけませんか。

日本社会の右傾化と共に新渡戸の「武士道」に対する関心が高まったということですが、新渡戸の「武士道」はこれから右傾化のいわば經典として重要性を増すということでしょうか。そして、「武士道」は、そのようなものとして利用されて当然な内容なのでしょうか。

現在の右翼陣営は、民族主義的右翼と、新米的右翼に分かれているようですが、「武士道」はそのどちらの思想に親和的と言えるのでしょうか。

私は、新渡戸稲造全集は買ったものの、ほとんど積んであるだけです。しかし、新渡戸稲造についてのイメージは、愛国者であると共にコスモポリタンであるというものです。それで、できれば、「武士道」の読書会をするという形で一步一步進めていただければ幸いです。

また、松本馨さんの読書会については、今後どのようになされるのですか。

**小さき声のことなど** 投稿者：田中 裕 投稿日：2006年10月28日(土)11時29分2秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

松本馨さんの「小さき声」の復刻作業は、帰国したら再開する予定です。以前と同じように、なにか感想がありましたらここに書いて下さると助かります。

また、東條耿一著作集の刊行という作業を野上寛次さん、村井澄枝さんとともにこなっているので、これも来年の9月4日の東條の命日までに仕上げたいと思っています。

東條耿一や松本馨さんとの遺作を通じての出会い、私にとっては偶然の出会いとも云えますが、この偶然の出会いを大切にしつつ内面化していくことを考えています。

旅人さんの「内村鑑三」の「聖書之研究」の復刻は、暇があれば読ませて頂いています、聖書之研究には共鳴するところが多いのです。また、野上寛次さんが内村神学思想に関する選集をだされましたが、これも私にとっては一つの出会いでしたね。内村鑑三という人を通じて近代日本のキリスト教がよく見えてきます。

私もあとすこしで停年を迎えますが、健康に問題があり、どこまで仕事を続けられるか自信がありませんでしたが、幸い、季候の良いカリフォルニアでいささか健康も回復したようなので、もし可能ならば、これまでに私がしてきた全ての仕事に、何らかの形で、形を与えておきたいと思っています。以下はわたし自身の「小さき声」ないし「繰り言」としてお聞き下さい。

私はもともとアインシュタインの物理学の革命がどんなものであるか知りたいと思い、大学では数学と理論物理学を学びました。云ってみれば「相対性理論」が初恋の相手のようなもので、彼女との関係がいまだに続いているのです。

私は、またアインシュタインとボーアとのあいだで為された量子力学の本性を廻る論争に関心をもち、次第に関心が哲学に向かいました。この宇宙に於いて人間は如何なる位置を占めるか、というコスモロジーないし形而上学の問題が根本であるという認識を持ち、とくにホワイトヘッドのプロセス哲学（歷程哲学）について研究しました。この分野の活動は現在も続いています。

私はイエズス会の設置した大学の哲学科で教えていますが、神学やトミズムのような所謂カトリック哲学を教えているわけではありません。そこでは自然哲学、科学基礎論というのが専門です。停年までに「歷程の自然学」ないし「歷程宇宙論」というテーマで、自分のこれまでのこの分野での仕事を概括することが出来ればと考えています。

しかし、上智大学を停年で辞めて、まだ私に健康が恵まれていたならば、「歷程の自然学」とどまらずに「歷程の形而上学」ないし「歷程の神学」を、わたし自身の信仰の立場である、「無教会のカトリック」の視点から書くつもりで居ます。もちろん、これは私が定年退職後も、元気に仕事が出来るという前提の話で、実現するかどうかは知りませんが。

もう一つの私の停年後の構想は、「歷程の詩学」を書くこと。これは1996年頃よりはじめた桃李歌壇での私の活動と関係があります。詩歌連歌俳諧という日本の文藝作品の伝統を通じて、哲学的美学の根本問題を論じることは、九鬼周造が試みましたが、現在ではそれを受け継ぐ人がいません。哲学は自然科学や宗教と関係するだけでなく文藝作品、とくに詩と深い関連があります。

以上は、私の個人的な抱負、あるいは夢想のごときものに過ぎませんが、ブログや掲示板に書いている私の発言の背後にあるものと理解して頂ければ幸甚です。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**マイノリティとカトリック** 投稿者：[田中 裕](#) 投稿日：2006年10月30日(月)05時47分45秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

クレアモント滞在の最後の日曜日。宿舎から歩いて30分ほどの所にある「聖母被昇天教会(Our Lady of the Assumption)」に行きました。

礼拝は午前7時半に始まるというので、早朝起床。腕時計で6時半に宿舎の三階にある私の部屋を出る。廊下は手探りで歩くような状況でしたが、階段を下りて外に出ると、東の空が漸く茜色に染まりはじめている。クレアモントは日中は摂氏30度近くになるので、Tシャツで過ごしているが、この時間では肌寒く、背広の下にセーターを着て丁度良いくらいの季候です。

7時すこし過ぎに教会に着いたが、なんと聖堂はまだ鍵が架かっている。ミサの前30分ならば普通は聖堂には入れるものであるが、どうも様子が違う。私と同じようにミサに与りにきた女性も頸をかしげている。どうしたものか、と思って、教会の近くを通ったヒスパニア系の婦人に事情を聞いてみたら、なんと丁度、昨夜から、サマータイムが終わって、冬時間になったとのこと。迂闊でした。早速、腕時計の時間を、一時間まえに戻さねばならなかったが、さいわい、その婦人は教会の信者だったので、私を集会室に案内してくれました。そこで彼女と珈琲を飲みながら、四方山話をしながらミサが始まるまでの時間を過ごした次第です。

聞いてみると、彼女はコロンビア出身の人で、クレアモントに親戚が居るとのこと。従兄弟が日本人と結婚したので、一度日本に行きたいなどと言っていました。

この「聖母被昇天教会」は、實に多国籍、多民族の人々からなる教会です。22年前に私がはじめてこの教会に来たとき、司祭はアイルランド人でしたが、現在の司祭は、アフリカ出身の

方です。信徒でもっとも多いのは米国在住のヒスパニック系の移民、つぎに中南米から米国に職を求めてきた人々、そして旧南ヴェトナムからの難民です。日本人には逢いませんでしたが、中国系、韓国系の人々もたくさん参列しています。こういう様々な人種の人々が「一つのミサ」に与る。それが、本来の「普通の」教会の姿ではないかという印象を持ちました。

ミサの式次第は日本と全く同じです。もちろんすべてが英語になっている点は違いましたが。教会暦年間第30番目の主日で、旧約聖書はエレミヤ記第31章、詩編126、使徒書はヘブル書5章、福音書はマルコ伝10章。聖書こそ典礼の基礎であるという点では、じつはローマン・カトリックもプロテスタントも変わりはない。

エレミアの朗読を聞きながら、ふと内村鑑三のことを思った。預言者の情熱、その祖国に対する愛、それはまさしく内村が共鳴したものではないだろうか。紀元前のユダヤ民族のシオンにたいする思い、捕囚より解放された喜びが、エレミヤや詩編の様々な説から、長い歴史の隔たりを越えて聞こえてくる。そして、古代のイスラエルの民の「愛国心」は、キリストによって浄化され、普遍化され、全人類の精神的な遺産となっている。

しかし、ユダヤ教からキリスト教への展開は、そのような民族の伝統と愛国心のもつ自己中心性、民族的エゴイズムを一度は徹底的に否定したあとで、再び、新しい精神の中でその民族の伝統を受容するというダイナミックな展開である。

内村鑑三は真の愛国者であった。日清戦争を正しき戦争として擁護した事への徹底した自己批判、日本中が「愛国心」の狂騒のなかで日露戦争を支持したまさにその時に、非戦論を国家の取るべき方策として提言したことこそ、キリスト者としての内村の真の愛国心のしからしめるところであった。自国が道を誤ったときに批判できるものこそが真の愛国者といえるのだから。

いわゆるWASPが多数派であるアメリカで、カトリックはマイノリティである。しかし、私は、真のカトリックは、国家の中に於いてマイノリティであるときこそ、云うならば「地の塩」としての役割を果たすことが出来ると思う。

当地の教会の会報には、メキシコからの「不法」移民を排斥する政府の動きに対して、移民の権利を守るために立ち上がるべき事が熱心に説かれていた。

Strangers No Longer  
Together on the Journey of Hope

ともに希望の旅の途上にある我等は  
もはや異邦人ではない

という見出しは、キリスト者の立場から、政府の移民政策に反対するという姿勢がよく出ている。それにしても

「ともに希望の旅の途上にある（我等）」

というのは良い言葉であると思った。

我々が継承する人類の歴史は、真に普遍的なものでなければならない。キリストの存在する場所は、特定の民族や国家に限定されない。様々な民族や人種や国家が、その違いを超えて一つになるところに、すなわち多なるものがその個性を失わずに一となるところに、世界宗教としてのキリスト教の成立する場所がある。

二千年以上も前から脈々と現代にまで人類の伝統、そして私達が生きている現在、さらに来るべき時にたいする、それぞれに固有のかつ本来的な関わり方—私のいう「歷程の哲学」もまた、宇宙史と人類史を貫通する歴史的な生を根源として成立するのである。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2Ffeigenwille%2F>

**USAにおけるカトリック** 投稿者：旅人 投稿日：2006年10月30日(月)13時55分35秒

[返信・引用](#)

田中先生こんにちは。

聖母被昇天教会に関するお話し、興味を持って読ませてくださいました。田中先生がお考えの「普遍教会」のイメージが多少は伝わってきたと思います。

ところで、アメリカにおけるカトリックの人口は、シカゴ大学の調査（<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fwww.uchicago.edu%2Fnews%2F04%2F040720.protestant.shtml>）によると、このところ全人口の25%で安定しているようですね。それに対して、プロテスタントの方は徐々に減少しているようですね。メキシコなどラテンアメリカからの人口流入はカトリックの割合を押し上げ、アジアからの人口流入はこれを引き下げているということのようですね。さらに一般教育の普及と共にプロテスタントの人たちが教会を離れていく姿が描き出されていると思います。

しかし、アメリカのカトリックは、かなり柔軟になって、信条にも変化があるとは言えないでしょうか。カトリックとは一体何か、エキュメニカル・ムーブメントでカトリックはどのように変わっていくのか、部外者には分かりにくいところではないでしょうか。カトリックが真に普遍的であろうとすると、 sacrament は障害になるような気がしますが、いかがでしょうか。

何はともかく、ご無事で帰国されますように。

P S : 真奈さん、お元気ですか。

**やや風邪気味** 投稿者: [田中 裕](#) 投稿日: 2006年11月 1日(水)07時28分28秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

昨夜から、クレアモントは急激に冷え込み、あまりの寒さに夜中に目を覚ましました。大陸性の気候というのでしょうか、昨日までは日中は三〇度近い残暑でしたが、きょうはすっかり秋めいた気候です。

季節感が日本とは違いますが、それでも夜は蟋蟀のすだく声がきこえますし、澄みわたる月や星空の美しさは、いささか旅愁を誘います。

今日は、そんなわけでやや風邪気味なので、図書館から何冊か本を借りて部屋で静養することにしました。

旅人さん:

> しかし、アメリカのカトリックは、かなり柔軟になって、信条にも変化があるとは言えないでしょうか。カトリックとは一体何か、エキュメニカル・ムーブメントでカトリックはどのように変わっていくのか、部外者には分かりにくいところではないでしょうか。カトリックが真に普遍的であろうとすると、 sacrament は障害になるような気がしますが、いかがでしょうか。

私は不勉強でアメリカ人の何パーセントがローマンカトリックなのか知りませんでしたので、興味深い資料をお教え頂き有り難うございました。

「無教会こそ真のカトリック」という私の立場から見ると、ローマン・カトリックにせよアングリカン・カトリックにせよ、形のある教会は、すべて相対化されます。相対化した上で、はじめて、それぞれの価値は認めることが出来るのです。

sacrament についても同じですね。状況次第で、それが有効に働く場合も有れば、形骸化するばあいもある。それらは「普遍の信仰 (catholic faith)」そのものではなくて、特殊な歴史的条件の下で、教会が具体的な形を取るときに選択した特殊な信仰の「かたち」なのです。

内村鑑三の「無教会主義を捨てず」という文に次のような一節がある。

「もし万一私が教会に入るべく余儀なくせられますならば、私は羅馬天主教会に入りませぬ、

私の知ります所では、是が地上唯一の矛盾なき教会であります。(中略)

唯其教義に多くの解し難いところがあります故に私は今日之に入ることが出来ないのであります。

しかしながら、制度完全の点より言ひまして、之に優るの教会は地上、他に無いと思ひます。」

「羅馬天主教会」は数ある地上の「相対的な」教会の中では最も優れたものの一つである、ことは私は内村と同意見です。しかしながら、相対的なものの絶対化には大きな陥穽がある。歴史的に見て、マルチン・ルターが登場しなければならなかった必然性がそこにあります。要するに、羅馬天主教会にせよ、プロテスタント教会にせよ、およそ制度的教会に属するかいなかは、本質的な問題ではなく、二次的な問題であるというのが私の考えです。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**パソコン故障・・・でした。** 投稿者: 真奈 投稿日: 2006年11月 1日(水)15時09分35秒

[返信](#)・[引用](#)

田中先生  
旅人さま

先週は、四国旅行で出る直前にパソコンが接続しなくなりショックでした。30日、午前さまで帰りまして、5時起きで外しておいたケーブルを全部繋いで祈る思いで再接続したら、なんと無事開通! どうしてうまくいったのかわかりませんが、全生園祭りのパネル3枚を仕上げることになっていたもので、やれやれと胸をなでおろしました。

2日間ほとんど眠らず、「はじめに」という今年の展示のテーマパネルと、“「花開く詩の時

代」～柗の垣根を越えて～」の2枚パネル、なんとか仕上げ、昨日飾りつけてきました。

「いのちの芽」から  
 厚木毅（光岡良二）の「伝説」  
 盾木汎（盾木弘）の「主語」  
 「灯泥」第7号から  
 国本衛の「黎明—第二次大戦に戦没した朝鮮兵にこの一編を贈る」

の三篇をパネルに紹介、それぞれ写真も載せました。

### 主 語

れぶらだけが俺たちの天地  
 どうして  
 美しい詩など生れるだろう

春の花も 風に散る柳の緑も  
 青葉の光りも 時鳥の音も  
 それはれぶらの助詞にすぎない

天恵と 天刑は  
 れぶらの形容詞  
 宿命と 悲惨は永遠の副詞

山の暮れ 野の黄昏れは  
 れぶらの動詞  
 一葉落ちるのもその類だろう

自暴自棄（やけ）と自殺は接続詞  
 信頼と敬虔も同様だ  
 天国と 地獄はそれに続く

新薬出現 全治癒は未然形  
 咽喉切開が終止形  
 これらの活用はみんな暗い

だが たったひとつ  
 地にしがみつき根を張って  
 生きてゆくいのちしづかな感動詞がある

こんな俺たちの主語 れぶらに  
 天地のどんなしめりが  
 美しい詩をうたわせよう。

あとの2篇もとてもいい詩です。

それと、「松本馨追悼講演会の記録」も出来上がってきました。鈴木亜希子さん撮影の松本さんの写真が表紙にあり、48ページ、とても感じのいい小冊子です。大谷先生の講演がページ数の半分の分量で、松本さんの本質「キリストによる自由」に迫るいい内容の講演であったと思います。

では又！

日中は温度が上がりますが、夜分はかなり冷え込んできました。  
 風邪には要注意の気候です…なにとぞご自愛のほどを。

**今晚は** 投稿者：旅人 投稿日：2006年11月 1日(水)21時01分6秒

[返信](#)・[引用](#)

田中先生の「歷程哲学」には、どのような特徴があるのか、興味があります。その哲学自体はどのように相対化されているのでしょうか。

真奈さんのお話では、「松本馨追悼講演会の記録」は良さそうな感じですね。しかし、他の方はどのような感想をお持ちなのでしょう。

「主語」という詩は、非常に暗いですね。その暗さの中で、時々光を見ているようですが、結局はまた絶望に陥ってしまうという感じですね。

**歷程の哲学のことなど** 投稿者：田中 裕 投稿日：2006年11月 1日(水)23時59分50秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

>旅人さん  
 > 田中先生の「歷程哲学」には、どのような特徴があるのか、興味があります。その哲学自体はどのように相対化されているのでしょうか。

これについては、[ブログ](#)に「自然と歴史—歷程の哲学の意味するもの」という記事を投稿しました。11月10日に奈良の天理大学で開催されるホワイトヘッド学会のシンポジウム提題の冒頭の部分です。長くなるので、三つに分割して掲載しました。

> 真奈さんのお話しでは、「松本馨追悼講演会の記録」は良さそうな感じですね。しかし、他の方はどのような感想をお持ちなのでしょう。

昨年の講演会の記録、帰国しましたら私も早速、購入しましょう。この講演会、私は総合司会者で壇上にいたために、マイクの関係で実は良く聴き取れない部分もあったのですが、後日、ガラクタ箱さんの録音したテープを聞き直しました。第一部の大谷藤郎さんの講演はとくに非常に印象深いものがありました。

>真奈さん

「朋」第5号の編集、また、全生園祭りの展示のご準備、お疲れ様でした。私は今回は何のお手伝いも出来ませんで、申し訳ありません。帰国しましたら、また、愛徳会の「いずみ」の古い記録などを調べながら、東條耿一著作集の校訂作業を続けます。松本馨さんの「小さき声」の復刻作業も再開する予定です。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**良く分かりませんでした。** 投稿者：旅人 投稿日：2006年11月 5日(日)08時33分58秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

申し訳ありません。私はホワイトヘッドについては何も知らないものですから、なぜ田中先生が**ホワイトヘッドの哲学**を批判的に継受しようとしたのか、良く分からないんです。もっとも、私は哲学についてはそもそもあまり勉強をしていないもので、ずぶの素人だとお考えください。ましてや宇宙物理学など、とても理解不能です。  
どうもホワイトヘッドの哲学というのは、サルトルなどの実存主義とはかなり関心の対象が違うように感じます。どうやら「プロセス」なるものを取り扱っているように思いますが、すべてをプロセスに還元して考えているのでしょうか。また「関係」についてはどのように取り扱われているのでしょうか。

**「武士道に戻れ」という話** 投稿者：旅人 投稿日：2006年11月 5日(日)09時00分30秒

[返信](#)・[引用](#)

日本の右翼の人たちが「武士道」に強い関心を示しているというお話があったと思います。内橋克人著「悪夢のサイクル」に次のような記載がありましたのでご参考になればと思います。転記いたします。なお、「ネオリベラリズム」の人たちを、私は「親米右翼」と考えています。

quote:

ネオリベラリズム批判の声は、…、いわゆるナショナリストの人たちの側からも出ています。

彼らは「市場というのは民間だけが儲ける制度である。かつての国家至上主義、そこに戻れ」と言う人たちが戦前讚美型ではないでしょうか。彼らは「人々を自由にしすぎるから、みんな不安になって犯罪が多発する。礼儀も礼節も知らない若いものが出てくるのだ」ということで、「**武士道に戻れ**」という話になってしまう。

それは私のネオリベラリズム批判とはまたちょっと違ってきます。アメリカ的価値観に染まってしまうと、いろいろな文化的伝統が壊れていくわけで、現在多くの論者がネオリベラリズム批判を言い出しているのは、そこどころがナショナリストとして許せないという面があるのかもしれませんが。

私も日本的なるものはできるだけ守らなければならないと思う人間ですが、それと「国家」至上主義とはまた違うとも考えています。

なにより復古調で、「市場重視、グローバリズムの時代と言うけれども、アメリカの言いなりになっていいのか」という人たちは、市場の代わりに国家を第一に考えるという方向にいつてしまいがちです。しかしそれでは、フリードマンの言う「統制する国家」になってしまうでしょう。

……(中略)……

私自身も、再び戦前のような国家統制の社会に戻れと言うなら、あるいは、かつてのソ連や東欧諸国そして現在の北朝鮮のような国家が市場を支配する体制に戻れというなら反対です。国家が何をしてきたかということ、私たちの世代はよく知っているわけですから。

P226~228より

unquote.

新渡戸稲造の「武士道」にしても、「批判的継受」が必要なのではないのでしょうか。

**東條耿一著作集の更新** 投稿者：[田中 裕](#) 投稿日：2006年11月 7日(火)08時22分12秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

クレアモントからロスアンゼルスまでは車で80分くらいです。帰国便は朝でしたので、早朝起床です。Supershuttle という乗合タクシーを予約したら、午前6時半に迎えに来るといふ返事でした。米国は出入国チェックが厳しくなり時間がかかるとのこと。

朝の4時頃に起床。メールのチェックをしたら、しゅうさんから連絡があり、過日、帰天されたTさんの遺品のなかに愛徳会の「いずみ」のバックナンバーが数冊あったので、Kさんがそれを図書館に寄贈されたとのこと。そのなかに、東條耿一の遺稿「癡者の回心」が、完全な形で保存されていたことを知りました。この遺稿、図書館にあったバックナンバーでは、印刷に落丁があり、途中で途切れていたことが判明しました。それが完全な形で保存されていたことが解りました。帰国直前の慌ただしいときでしたが、乗合タクシーが来るまでの時間、東條の遺稿を繰り返し繰り返し読み直した次第です。

帰国後、早速、テキスト化し、東條耿一著作集を更新しました。  
[癡者の回心](#)をお読み下さい。

>旅人さん

内橋克人さんの「悪夢のサイクル」の転載、有り難うございました。新渡戸や内村のような明治の第一世代のキリスト者にあつて、その後の世代では次第に失われていったもののひとつは Loyalty (至誠心) というのではないかと考えています。新渡戸の言う武士道にも、内村の「代表的日本人」にもそれを感じます。封建時代の道徳にあつては「主・師・親」に向けられていた純一なる「至誠心」が、封建制の崩壊と共に、キリストに向けて集中されていった。それが、嘗ての幕臣の子弟であつた新渡戸や内村、そして「熊本バンド」を形成した明治時代のサムライの後裔達の入信したキリスト教に特徴的です。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**おはようございます** 投稿者：しゅう 投稿日：2006年11月 8日(水)07時17分45秒

[返信](#)・[引用](#)

今朝は、昨日とうって変わって冷えていますね。昨日が立冬なので、これから、寒くなる一方ですね。昨日国道246を走ってますと、善波峠を越えて、富士山が見えるのですが、きれいに雪を被って秀麗でした。

田中さん、時差ぼけももどらないうちに、「癡者の回心」をテキスト化していただきありがとうございます。この完全な稿が見つかって良かったですね。この稿で東條の生きた軌跡が、すごくいろいろと私の中で整合できつつあります。それを、とてもうれしく思っています。テキスト化お疲れさまでした、ありがとうございました。

**武士道とキリスト教の関係についての問題** 投稿者：旅人 投稿日：2006年11月 8日(水)08時28分29秒

[返信](#)・[引用](#)

どうもこの問題については、皆さんにはあまり関心がなさそうなので、この掲示板での発言は控えようと思います。  
東條耿一さん関係のお話しをお進め下さい。

**東條耿一の遺稿と内村鑑三の文** 投稿者：[田中 裕](#) 投稿日：2006年11月 9日(木)09時24分39秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

しゅうさん、投稿有り難うございます。

> 今朝は、昨日とうって変わって冷えていますね。昨日が立冬なので、これから、寒くなる一方ですね。昨日国道246を走ってますと、善波峠を越えて、富士山が見えるのですが、きれいに雪を被って秀麗でした。

雪を被った富士山が見えて良かったですね。富士山が見えるかどうかは、見る人の心がけの問題だそうです。私が4月にオリキャンで出かけたときには、早朝の僅かな時を除いては見る事が出来ませんでした。

>

> 田中さん、時差ぼけももどらないうちに、「癡者の回心」をテキスト化していただきありがとうございます。この完全な稿が見つかって良かったですね。この稿で東條の生きた軌跡が、すごくいろいろと私の中で整合できつつあります。それを、とてもうれしく思っています。

詩人としての東條耿一は、回心後の彼の中にも生きています。むしろ晩年の東條から遡って初期の東條の書いた幾つかの詩編の意味するところを読むと言うことも出来るのではないのでしょうか。たとえば、しゅうさんが以前に詳しいコメントを書かれた「槍」という初期の詩の最後のスタンザは何を象徴しているのだろうか。そこには、「己に苦しみは望みませんが、與えられる苦痛は神の愛として肯定し、喜んで力の限り愛したい」と書いた晩年の東條を予感させる

ようなものさえも読むことができると思う。

東條耿一著作集、[PDFファイル](#)の方も更新しました。

>旅人さん

武士道はともかくとして、内村鑑三についてはこの掲示板でさらに話を続けられれば幸甚です。旅人さんが現在復刻されている「聖書之研究」に次のような文がありましたね。

患難は、これを受けるときには、決して喜ばしいものではない。しかし、それが忍耐の実を結んで、より高い信仰を私たちに供するに至って、私たちは患難を我が姉妹である、我が兄弟であると呼ぶようになる。  
神が造られたもので、実は患難に優るものはないであろう。なぜなら他のものは私たちに神の力と知恵とを示すが、患難は私たちを導いて、直ちに神の心に触らせるからである。

東條が「癩者の回心」で書いたことと、この内村の文章は、鮮やかに対応しているのではないのでしょうか。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**再考をした方が良いかもしれません。** 投稿者：しゅう 投稿日：2006年11月 9日(木)20時51分50秒

[返信](#)・[引用](#)

「いずみ」では、「癩者の改心」でしたね。  
「改心」は「回心」ではないかと、誤植だろうと言うことで、編集会議でそのように何となくきまったように思います。  
川島さんから聞いていたのですが、「いずみ」をずっと長く、校正から、ガリ版印刷までしてこられた鈴木富治（とみじ、字まで聞いていないのですが）さんという人はすごい人だったと何回か聞いています。先日、集会の会場を取って頂きたく電話する用事の時、「改心」について、「回心」ではないかと思うのですが・・・と話をしてみました。  
川島さんは、「鈴木富治さんが誤植をしたのを聞いたことがない、まず、間違いのしない人だった」と言われるのです。  
特に、題名の大きな文字ですし、それほど間違いのない方ですと、東條の原稿が「癩者の改心」だったのではないかと思うのですが。  
「回心」とするには、内容も、そうした限定の内容ではないと思うのですが。「改心」とした方が、信仰上の話だけでなく、一般性を持ち、意味が深くなるように思うのですが。再考をしてみても如何でしょうか。

**「改心」と「回心」** 投稿者：田中 裕 投稿日：2006年11月 9日(木)21時26分2秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

これは難しい問題ですが、私は内容的に考えて「回心」とした方がよいと考えています。

「改心」は、もともと「犯罪者が罪を悔い改めて更生を誓う」という意味で、倫理的・道徳的な意味はあっても宗教的な意味は希薄だと思う。  
これにたいして、「回心」は浄土真宗でもキリスト教でも、決して倫理的・道徳的な意味で言われているのではない。そこには「物の見方の根本的な転回」ともなう宗教的な意味が含まれます。

ある人がハンセン病にかかったからと言って、別に彼自身や先祖が道徳的な意味で悪いことをした結果ではけっしてない。何一つその点に於いては、悔い改めることはないのです。だから倫理的な意味で「改心」する必要はありません。

むしろ「改心」すべきは、癩者を隔離したもの、あるいはその事実を認識せずに放置していた私たちのほうでしょう。東條は決して倫理的な「改心」ではなく、自己の宗教的な回心 (conversion) を語っているのです。

彼は、自分がこのような病に罹ったことを少しも不幸とは思わずに、「癩は私の心を清澄にし、私の人生に真の意義と価値を與えてくれた。癩によって私は始めて生き得たのだ。私を癩に選び給いし神は讃むべきかな。」とまで言っています。それは外部の人間の安易な同情などを寄せ付けません。むしろ、健康と病に関する常識の中に浸りきって、そこから物事を見ている我々のほうこそ反省させられる。このような発言は、宗教的な「回心」の結果であって、決して倫理的な意味での「改心」の結果ではありません。

問題は「いずみ」のテキストが「改心」となっていることです。私は、このテキストを書いている頃の晩年の東條の視力は相当に悪化していたことを考慮すべきであると思います。これは口述筆記であった可能性が非常に高い。松本馨さんのテキストを校訂しているときに類似し

た状況に数多く直面しましたが、口述筆記の場合は印刷されたものだからといって無条件で信賴してはいけないと思っています。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

---

**Re: 「改心」と「回心」** 投稿者：しゅう 投稿日：2006年11月10日(金)01時11分31秒

[返信](#)・[引用](#)

> 「改心」は、もともと「犯罪者が罪を悔い改めて更生を誓う」という意味で、倫理的・道徳的な意味はあっても宗教的な意味は希薄だと思う。

[  
「改心」は、「犯罪者が・・・」という限定の意味ばかりではないのではないのでしょうか。ただただ、「今までの行いを反省し、心を改めること。」、軽く使われる場合もあるように思います。

東條は、この稿で

> 彼は、自分がこのような病に罹ったことを少しも不幸とは思わずに、「癪は私の心を清澄にし、私の人生に真の意義と価値を與えてくれた。癪によって私は始めて生き得たのだ。私を癪に選び給いし神は讃むべきかな。」とまで言っています。

確かに東條の信仰の強さを説明していますが、もともと、この説明は、東條のはじめの手紙が相手の方に上手く伝わらなかったことに因るようです。この稿のはじまりは、

「あなたのお言葉は私を大変淋しくさせました。それはあなたが、私の日頃抱いている考えについてお判りにならなかったからではなく、あなたに判っていただけない私の信仰の弱さのためです。」

と書かれています。あくまでも通じなかったのは、「私の信仰の弱さのためです。」と悔いているのです。  
この信仰篤い稿は、もともと、東條の「悔い」から発していると思います。だから、東條は、「改心」としたのではないのでしょうか。

東條自身で書かれたものか、聞き取りなのか分かりませんが、もし、聞き取りでしたら、多分渡辺清二郎さんだろうと思います。この「いずみ」、昭和28年12月25日のクリスマス号の発行人は渡辺清二郎さんです。ですから、「改心」と「回心」を書き違えるという間違いは起きないのではないかと思うのですが。

---

**これから奈良に出張します** 投稿者：[田中 裕](#) 投稿日：2006年11月10日(金)06時52分33秒

[返信](#)・[引用](#) [編集](#)

日曜日の深夜に帰宅しますので、それまでPCにアクセスできません。

>しゅうさん

> 「改心」は、「犯罪者が・・・」という限定の意味ばかりではないのではないのでしょうか。ただただ、「今までの行いを反省し、心を改めること。」、軽く使われる場合もあるように思います。

「改心」のままでよいとは私は思いません。こころを「改める」という程度の軽い内容だというのであれば、どうして「癪者の」という形容詞が必要なのだろうか。

それに、「改心」では、このメッセージの根柢にある宗教的な内容が伝わらず、たんなる倫理的な反省という次元の話になってしまいますね。それで良いのだろうか。東條の「遺稿」に付ける題として「改心」は相応しくありません。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

---

**今日から国民文化祭で** 投稿者：真奈 投稿日：2006年11月10日(金)08時25分23秒

[返信](#)・[引用](#)

岩国に行き下関まで足を伸ばして、13日に帰ります。

今回、大賞に輝いた高校の大先輩が検査入院するので代わりに受け取ってとの電話にびっくり。突然晴れがましい席に座ることになり慌てています。連衆の一人としてやむを得ませんが。

ケータイで書き込みを読みながら旅してまいります。

では又！

**Re: これから奈良に出張します** 投稿者：しゅう 投稿日：2006年11月10日(金)13時51分33秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

>  
>>「改心」は、「犯罪者が・・・」という限定の意味ばかりではないのではないのでしょうか。ただただ、「今までの行いを反省し、心を改めること。」、軽く使われる場合もあるように思います。  
>  
>「改心」のままでよいとは私は思いません。ここを「改める」という程度の軽い内容だというのであれば、どうして「癡者の」という形容詞が必要なのだろうか。

東條が「癡者の改心」としたのには、東條の資質というか特徴、複雑で、皮肉なところがある、その特徴がよく出ています。  
東條が書いている「あなたに判っていただけない私の信仰の弱さのためです。」これは、東條らしい複雑さで、どこか皮肉も混じっていると思います。  
この一見やさしい言葉ですが、「癡者の改心」という題名にすることによって、東條の内心では、一層複雑さも皮肉も増幅させているように思います。  
「国旗」や「梅林中尉」のような作品も書く、東條のその複雑さがこの題名にも出ているのではないのでしょうか。

> それに、「改心」では、このメッセージの根柢にある宗教的な内容が伝わらず、たんなる倫理的な反省という次元の話になってしまいますね。それで良いのだろうか。東條の「遺稿」に付ける題として「改心」は相応しくありません。

「改心」には、「たんなる倫理的な反省」というのではなく、東條と言う人の特性が色濃く滲み出て、生々しい感触があります。それはそのまま尊重をして良いのではないかと思うのです。  
「回心」では信仰一辺倒の、高説を述べただけの文章になってしまいます。  
東條は、それと分からなく、「癡者の改心」などのように、さらりと、こういうことをする人ではないのでしょうか。深くそして複雑な方だったと思います。そこが面白いのではありませんか。

**回心と改心** 投稿者：北風 投稿日：2006年11月10日(金)16時07分23秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

当時も、今と同じように厳密に使い分けられていたのだろうか？

内村鑑三なんかは、晩年コンバージョンと発音して原語のままに使っていた。内村によれば conversion は、「改心」と訳すのではたらず適当な訳語がないから原語のままに使うというから、「回心」という言葉はその頃、定着していなかったとも考えられる。  
もともと「回心」は、浄土宗かなんかの言葉ですよね。その場合は「えしん」と発音するらしいけれど。conversion の訳語として「回心」が定着したのはいつなんだろうか？  
そこから検討すべきかもしれない。  
しかし、その場合でも「回心」の意味で「改心」を使っていたのだと思いますかね。

でも待てよ。松本馨さんも「回心」という言葉を使っている。  
しかし、その場合はあるきっかけによって、自分が劇的に生まれ変わる体験を指している。これはまさに conversion だ。  
しかし、東條の場合はそうした劇的な体験ではなく、非常な静謐な心境を語っている。

考えちゃうねえ。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fcluster.web.infoseek.co.jp%2FFjiken%2Findex.html>

**校閲の教訓** 投稿者：北風 投稿日：2006年11月10日(金)18時13分23秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

NDL の雑誌記事索引サイトで検索してみると。  
(このサイトは 1948 年から現在までの雑誌記事が検索できる)

「回心」は、

パウロの回心物語におけるイニシエーションの構造 1985年

というのが初出である。

これに対し「改心」は、

スクルージの改心 1968年  
 浦上切支丹重次郎の改心と改心戻し 1969年  
 聖書的対話の「追体験」—ダビデ王の愛欲物語と改心の心理 1969年  
 パウロの改心 1980年

とconversionの意味でも使われているが1980年以降conversionの意味では使われていない。上記のうち「ダビデ王」の著者は門脇佳吉。

これから見るかぎり（キリスト教専門データベースではないのでサンプルは乏しいが）、conversionの訳語は、かつて「改心」が使われていたが、「改心」から「回心」に変わったのは1980年代前半ということになる。

とすれば、しゅうさんとは違った意味ですが、書かれた時はもちろん1953年の発表時点でも「癩者の改心」で問題はなく、渡辺清二郎さんや鈴木富治さんの「名譽」も守られるわけだ。  
 現代の知識や思い込みでみだりに文献をいじってはいけないという「教訓」ですね。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fcluster.web.infoseek.co.jp%2FFjiken%2Findex.html>

**感謝です。** 投稿者：しゅう 投稿日：2006年11月10日(金)21時10分43秒

[返信・引用](#)

「改心」「回心」について丁寧に文献に当たって頂きありがとうございました。

「癩者の改心」は、私が東條を理解する上にとっても重要なものでしたので、私の説が正しいかどうかは別にしても、疑問が残らないで、すっきり「改心」だということが判明して良かったと思います。ありがとうございました。

**先ほど帰宅しました** 投稿者：田中 裕 投稿日：2006年11月13日(月)00時28分2秒

[返信・引用](#) [編集済](#)

留守中のメールが何と200通！ 殆どがスパムメールなので大事なメールを選り分けるのが大変でした。

ところで、回心と改心ですが、北風さんの

>これから見るかぎり（キリスト教専門データベースではないのでサンプルは乏しいが）、conversionの訳語は、かつて「改心」が使われていたが、「改心」から「回心」に変わったのは1980年代前半ということになる。

ですが、これは、間違った議論です。「回心」は1980年代などという時期ではなく、もつとずっと早い時期からカトリックの文献に登場します。たとえば1945年には

「告白録における聖アウグスチヌスの回心への道」 吉満義彦[著] 上智学院出版部  
 という書籍が出ています。

また、1947年にも、大澤章譯編で「回心」というタイトルの本が出版されています。

内容は、聖女テクラの伝説(シャルル・ビュエ) アルフォンス・ラティスボンヌの回心(ヨハネス・ヨエルゲンゼン)などの「回心物語」であって、これはconversionの訳語です。

「改心」も古くから使われていますが、この場合は、「罪を悔い改める」という倫理的意味が前面に出る。

たとえば、門脇さんの論文

聖書的対話の「追体験」—ダビデ王の愛欲物語と改心の心理 1969年

の場合は、ダビデ王は人倫に反する罪を侵した、それを率直に告白して赦しを乞うたので「改心」のほうが適切だと思う。

私が問題としたのは、単に誤植とか誤記の問題という話では決してなくて、東條の遺稿が、はたして自己の罪を悔い改めることに重点が置かれているのか、そうではなくて、それまで不幸中の不幸であったものを、恩恵として受けとめることができるという「心の転換ないし転回」のほうに重点が置かれているのか、ということでした。

また、東條の遺稿については、果たして、「癩者の回心(改心)」というタイトルが

(1) 東條自身が、そういうタイトルで発表することを意図して書いたのか

(2) 彼の遺稿（あるいは書簡）にそのような題を付けたのは、編集者のほうなのか

これも、良く分かりませんね。

改心と回心にかかわる問題は、慌てて結論を出さずに、野上さんの意見も聞きながらゆっくり再考しましょう。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**はやく結論を出しすぎましたねー すみません。Re: 先ほど帰宅しました** 投稿者：し

[返信](#)・[引用](#)

ゆう 投稿日：2006年11月13日(月)07時36分32秒

お帰りなさいませ。お疲れのところさっそくご意見を投稿下さってありがとうございます。

> また、東條の遺稿については、

「遺稿」というと何か特別なものというような印象が致します。  
東條が亡くなって11年経て「いずみ」に載っているの、これは渡辺清二郎が手元にもっていた東條の一文を出して載せたものだと思います。  
編集後記に「又私たち病める信者の先輩東條耿一氏の一文、是非ご一読願います。」と書かれています。

果たして、「癩者の回心（改心）」というタイトルが

>  
> (1) 東條自身が、そういうタイトルで発表することを意図して書いたのか  
> (2) 彼の遺稿（あるいは書簡）にそのような題を付けたのは、編集者のほうなのか

> これも、良く分かりませんね。

> 改心と回心にかかわる問題は、慌てて結論を出さずに、野上さんの意見も聞きながらゆっくり再考しましょう。

私もその方がよろしいと思います。編集会議でよく審議して決めた方が良いですね。  
ここのBBSの「癩者の改心」に関わる全文をコピーして野上さんへお送りしておきます。そうすると野上さんの方でも考えて来てくださると思いますので。  
編集会議を、寒くなる前に致したと思いますが、11月の月末から12月の始めに如何と思いますが、田中さんのご都合は如何でしょうか。

**はははは。お疲れ様。** 投稿者：北風 投稿日：2006年11月13日(月)09時14分11秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

ははははは。

>これは、間違った議論です。

ですか。  
要点は、少なくとも混在して使われていたことは事実ですから、間違いと決め付けることはできない。また「データ」で見ると注記してあります。それ以前にも「回心」が使われていたことは周知の事実ですが、しかし1980年の「改心」の使用例もある。

>改心と回心にかかわる問題は、慌てて結論を出さずに、野上さんの意見も聞きながらゆっくり再考しましょう。

↑これを言いたかったわけです。  
しかし、田中さんは、既に「東條の『遺稿』に付ける題として『改心』は相応しくありません」、このように断定している。「環」「耿一」の同定論議を髣髴させます（笑）。これに対し違う視点をご提供した。

別に難しいことではない。当時の使用例としては「改心」で間違いとはいえないが、現在の用法としては「回心」のほうが適切だろう。ではさてこうした文献の場合、現在の用法が適当だからといって、編集あるいは校訂者が勝手に直していいものだろうかということでしょう。単なる誤植、誤記とは違うのですね。  
したがって、田中さんの反論にもかかわらず、おいらの下記の結論は維持します。

>現代の知識や思い込みでみだりに文献をいじってはいけないという「教訓」ですね。

【追記】

自分に都合のいいデータを探し出していてもしょうがないのですが、ちょっと単行本を検索してみたら1981年には『パウロの改心』（伊藤高次）という本が聖公会から出ています。まあ、お宗旨が違うといえばそれまでですが。

**補足** 投稿者：[田中 裕](#) 投稿日：2006年11月13日(月)10時57分40秒

[返信](#)・[引用](#)

「改心」は、conversion（回心）ではなくて repentance（悔改め 改悛）の意味で使われてきたと思う。

だから、conversion の訳語が「改心」から「回心」に変わったかどうか、というような話ではない。現在でも両方使われています。この二つの言葉は、関連はあるけれども、使い分けるべき言葉だと思う。

たとえば、数重なる不幸に見舞われたヨブに対して、彼自身、なにか罪を犯したことはないかと「改心=改悛」を迫るものが描かれているが、ヨブは決して、そういう意味では「改心」はしていない。

また、福音書でも、ある人が業病に苦しむのは、本人が（倫理的・社会的な）罪を侵したからではなく、「主の栄光が現れるためである」とはっきりと述べている。そこでは、因果応報思想にもとづく罪悪観が否定されている。だから、ヨブ記は決してヨブの「改心」の物語ではないとおもうが、どうだろうか。

もちろん、言葉の使い方は人によって或る程度の揺らぎがあるけれども、東條の遺稿、もし英語に訳するならば、the repentance of a leper（癩者の改心=癩者の悔い改め）ではなくて、the conversion of a leper（癩者の回心）が内容に相応しいと思う。その主題は讃美です。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**しかし** 投稿者：[北風](#) 投稿日：2006年11月13日(月)11時31分46秒

[返信](#)・[引用](#)

面白いね。

ちょっと調べてみると「回心」はプロテスタントでも、渡辺善太あたりは戦前から使っている。内村は「改心」には不満だったが、しかし「回心」は使わず「コンボルション」と言っていた。「回心」の用例を知らなかったはずはないが、もともとは仏教用語ということにこだわりがあったのか？

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fcluster.web.infoseek.co.jp%2FFjiken%2Findex.html>

**まあ** 投稿者：[北風](#) 投稿日：2006年11月13日(月)11時35分38秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

自説にこだわらず、事実に基づいて論議するのがいいね。おっしゃることが、事実をもって証明されればおいらは、こだわりません。

> この二つの言葉は、関連はあるけれども、使い分けるべき言葉だと思う。

これは田中さんの主張であって、当時そうであったかとは関係がない。

また、英訳するならという話は、田中語に訳すならという話と同じでナンセンス。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fcluster.web.infoseek.co.jp%2FFjiken%2Findex.html>

**これも実証的にはどうか？** 投稿者：[北風](#) 投稿日：2006年11月13日(月)11時48分15秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

いやよく読むと考える材料はいっぱいだ。

> 「改心」は、conversion（回心）ではなくて repentance（悔改め 改悛）の意味で使われてきたと思う。

逆はないだろうか？つまり、「回心」が「repentance」や単なる「改宗（conversion）」の意味で使われたことは？ また本当に「改心」がrepentの訳語として普通に使われていたというよう例も調べる必要がありますね。  
 というよりも、当時、どれくらい自覚的に厳密に使い分けていたのだろうか？  
 さらに、そこまで厳密に言うならば、東條の遺稿は果たして「conversion」について語っているのかという見直しも必要になるのではないかな。（内村や松本馨さんの劇的・動的な回心の体験と比べて）

うーん、考えちゃうね。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fcluster.web.infoseek.co.jp%2Ffjiken%2Findex.html>

**編集会議の日程など** 投稿者： [田中 裕](#) 投稿日：2006年11月13日(月)21時26分16秒

[返信・引用](#)

しゅうさん：

> 東條が亡くなって11年経て「いずみ」に載っているの、これは渡辺清二郎が手元にもっていた東條の一文を出して載せたものだと思います。  
 > 編集後記に「又私たち病める信者の先輩東條耿一氏の一文、是非ご一読願います。」と書かれています。

Tさんの遺品の中にあつたこの雑誌は、現在はハンセン病図書館にあるのですか？  
 それもしゅうさんがお持ちですか？  
 全生園に有れば、できるだけ早い時期に編集後記も含めて読みたいと思っています。

> 私もその方がよろしいと思います。編集会議でよく審議して決めた方が良いでしょう。  
 > ここのBBSの「癩者の改心」に関わる全文をコピーして野上さんへお送りしておきます。そうすると野上さんの方でも考えて来てくださると思いますので。  
 > 編集会議を、寒くなる前に致したと思いますが、11月の月末から12月の始めに如何と思いますが、田中さんのご都合は如何でしょうか。

野上さんのご都合によると思いますが、私の方は、11月の最後の週の金曜日が、12月はじめの週の土曜日ならば大丈夫です。詳しくはメールでご連絡下さい。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**Re: 今日から国民文化祭で** 投稿者： [田中 裕](#) 投稿日：2006年11月13日(月)22時13分1秒

[返信・引用](#)

真奈さん：

> 岩国に行き下関まで足を伸ばして、13日に帰ります。  
 >  
 > 今回、大賞に輝いた高校の大先輩が検査入院するので代わりに受け取ってとの電話にびっくり。突然晴れがましい席に座ることになり慌てています。連衆の一人としてやむを得ませんが。

晴れがましい席というと、記念すべき俳諧興行の宗匠役ですか。  
 秋の俳諧興行、きっと素晴らしいものでしょう。

私の方は、奈良の天理大学にはじめて行ってきました。シンポジウムの前に天理大学の図書館に案内して貰ったのですが、ここには心敬の「ささめごと」の貴重な写本が保管されていました。その他、西鶴に関するものなど、江戸時代の俳諧に関する資料とか、蘭学や切支丹関係の資料など、江戸時代の興味深い資料が随分と蒐集されていました。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**Re: 編集会議の日程など** 投稿者： [しゅう](#) 投稿日：2006年11月13日(月)23時30分48秒

[返信・引用](#)

> Tさんの遺品の中にあつたこの雑誌は、現在はハンセン病図書館にあるのですか？  
 > それもしゅうさんがお持ちですか？  
 > 全生園に有れば、できるだけ早い時期に編集後記も含めて読みたいと思っています。  
 >

私は「いずみ」の本を持っていません。コピーを持っています。

その「いづみ」はクリスマス号ですので、濃紺に星の表紙です。図書館にあるか、川島さんがお持ちかどうかです。  
川島さんが、いま、「いづみ」のバックナンバーを調べておられ、目次だけでもファイルにしたいと仰っていました。ですから川島さんがお持ちかも知れません。

>> 私もその方がよろしいと思います。編集会議でよく審議して決めた方が良いですね。  
>> ここのBBSの「癩者の改心」に関わる全文をコピーして野上さんへお送りしておきます。そうすると野上さんの方でも考えて来てくださると思いますので。  
>> 編集会議を、寒くなる前に致したと思いますが、11月の月末から12月の始めに如何と思いましたが、田中さんのご都合は如何でしょうか。  
>  
> 野上さんのご都合によると思いますが、私の方は、11月の最後の週の金曜日が、12月のはじめの週の土曜日ならば大丈夫です。詳しくはメールでご連絡下さい。

ありがとうございます。  
またメールでご連絡致します。

**昔話** 投稿者：北風 投稿日：2006年11月14日(火)18時27分6秒

[返信・引用](#)

北風さんへ  
投稿日 2004年10月15日(金)00時00分 投稿者 丹仙 [61-23-170-161.rev.home.ne.jp] 削除

以下の北風さんの投稿を、この掲示板で見かけました。  
これは暗に私のことを指していると思いますので、お答えします。

>本来、インターネットに研究の過程や推敲中の論文を掲載するのは、  
>学問の発展、進歩にとって今までにない有効な手段だと思う。  
>それは、研究の過程から公開し、批判にさらされることによって、  
>さらに思索を深め論理を強化させより確かな成果が期待できるからである。  
>しかし、それには、欠くべからざる前提がある。それは批判を誠実に  
>受け止めそれに誠実の答えること、要は学問的に剛毅な精神がなくて  
>はならない。  
>あるいは欠けている情報や、思索へのヒントを与えてくれたハンドル  
>ネームの「無位の真人」への感謝、要は学問的フェアプレイの精神が  
>なくてはならない。また、研究上の「受益者」が匿名（  
>註・別名とは違いますが）であったり、書き手を欺いたりしてはならな  
>い、要は学問的に高い倫理観が要求される。  
>つまりインターネット上に、研究や調査の過程を公開することは、無  
>数の共同研究者、共同調査者を持つことであって、本来、その成果物  
>を独占してはならない。  
>（まあ、そういう意味ではどのような研究や業績だって、先行研究や  
>先人の学恩から無縁ではありませんから、あらゆるものは本質的に独  
>占しちゃあいかなのです）

一般論としてこの意見に賛成です。これを北風さんと私との間での議論の共通の前提としたいと思います。

ただし、誤解されないようにひとこと申し上げますが、東條耿一にかんする私の投稿は、決して「学問の発展、進歩」のためではありません。「一人の人間」としての個人的な立場からであって、それ以上のものではないのです。私が「山田瑞恵」というHNで投稿したものは、私が、なにか学問研究のためにおこなったというようなものではなく東條耿一の作品の電子テキスト化をおこなうというような地味な奉仕作業を匿名で行うためでした。このテキストは万人のものです。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fcluster.web.infoseek.co.jp%2FFjiken%2Findex.html>

**昔話** 投稿者：田中 裕 投稿日：2006年11月14日(火)19時26分37秒

[返信・引用](#)

北風さんがなぜこんな昔の投稿を再掲したのかよく分かりませんが、昔話というのであれば、もともと、「癩者の改心」はおかしい、「癩者の回心」ではないのかと、どこかの掲示板で強硬に主張されていたのは北風さんだったのではないですか。

私も、「癩者の改心」という表現には違和感があったけれども、「いづみ」のテキストにそうあったので、最初の時点では、テキストの儘を尊重して、あえて変更しなかったのです。

この掲示板の最初の方でも、

「これは難しい問題ですが、私は内容的に考えて「回心」とした方がよいと考えています。」

と書きましたが、そこで断ったように、この問題の困難さは良く承知しています。まず、一方に於いて編集者の守るべき分限というものがある。他方に於いて、僕が理解し識別している言葉の意味に関する限り、「癩者の改心」よりも、「回心」のほうが望ましい。

しかし、そうはいつでも、「いずみ」が刊行された通りの状態で復刻する方がよいという考え方も成立します。むしろ、そのことが、編集者としての節度でしょう。そういうことは十分に理解しているつもりです。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**初心** 投稿者：北風 投稿日：2006年11月15日(水)09時34分41秒

[返信](#)・[引用](#)

まあ、たまには昔の発言を読み直すのも必要です。

ところで今回の「回心」「改心」論議はおいらは大変勉強になった。

田中さんがおっしゃるように「回心」であるべきだろうとおいらが言ったのは事実です。個人的にもそのように伝えたこともあります。

しかし、この論議の過程で、

- 1) 回心と改心は、日本において歴史的にどのように使われていたのか。
- 2) 内村はなぜ、回心といわずコンボルションといったのか。
- 3) そもそも、「回心」はconversionの「訳語」という理解だけでいいのか。  
訳語としてだけ考えると、「訳語」を「英訳すれば」のような堂々巡りが起きる。
- 4) 内村や松本さんのような、霊的劇的な「回心」が、全ての人に与えられるのか。  
静かな連続的に深化する信仰のありようもあるのではないか。

というようなことをかんがえ、その上で東條に戻ると、

- 5) 東條の件の文章は、「回心」について語っているのか。東條は、上記の意味での回心体験を持つのか。
- 6) 東條の件の文章は「信仰告白」であって「改心記」でも「回心記」でもないのではないか。
- 7) このタイトルは、やはり田中さんが言うように、東條がつけたものではなく編者のものではないか。

というようなことを考えましたね。

そこでやはり「原稿のままとして、必要があれば解説で触れる」のが正しい態度だろうと思いました。

おいらは最初は「回心」を主張したけれど、東條の文章を「回心記」というにはためらいを生じ、上記1～4のような宿題を得た、ということで収穫大でした。

〔蛇足〕  
ダビデが「改心」なら、アウグスチヌスも「改心」ですか？と与太を振っておきましょう。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fcluster.web.infoseek.co.jp%2FFjiken%2Findex.html>

**参考までに** 投稿者：田中 裕 投稿日：2006年11月15日(水)09時59分2秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

「回心」と「改心」の意味の違いについて、小学館の「日本国語大辞典」（全20巻）にあたって見ましたが、次のような記述でした。

回心・廻心

キリスト教で宗教的思想や態度の明らかな変化を伴った信仰的成長。キリストによる罪のゆるしと洗礼によって起こる心の大きな転換

改心

悪い心を改めること。悪かったことを悟って心を入れ替えること。改悛・悔悛

この「日本国語大辞典」の説明は、私が念頭においていた「回心」と「改心」の意味の違いと一致します。

ただし、「日本国語大辞典」にこのように書いてあるからと言って、この二つの言葉が、すべての人によって、このように使い分けられてきたかという、決してそんなことは言えないと思う。用語の意味は流動的ですし、個人やグループによって変わり、すべての人が一致するような「定義」はありません。たとえば、「日本国語大辞典」の定義のなかの、「洗礼によって」という部分は、無教会の人は受け入れないでしょう。回心は、洗礼をうけなくとも起こりうるし、洗礼を受けた後でも起こり得るでしょうから。

次に、しゅうさんとのやりとりのなかで、私は次のことを教えられました。それは、クリスチャンでない人、キリスト教や浄土真宗になじみのない人には、「回心」という言葉が、何か身近に感じられない響きがあるのではないかと、ということです。これにたいして「改心」を「悔悛」という意味に取らずに、「こころを改める」と一般的に理解するならば、その意味は非クリスチャンにも理解できるものになる、ということです。しゅうさんが仰ったことは、そういう趣旨ではないかと思いました。パウロや松本馨さんのような劇的な体験は、だれもが経験するようなことではありませんから。

私は「回心」というのは、物の見方の転回ないし転換ということを第一に考えていますが、かならずしもそれが劇的なものであるとは限らないとおもいます。内村鑑三が自分の回心経験について語る場合も、それは「徐々に進行した」と書いていたと思う。

「回心」という言葉について、ウィリアム・ジェームズというアメリカの哲学者（心理学者でもあります）が、その著作「宗教的経験の諸相」のなかで、次のような定義をしています。彼の定義によれば、回心（conversion）とは

「それまでに分裂していて、自分は間違っていて下等であり不幸であると意識していた自己が、宗教的な実在をしっかりと捉えた結果、統一されて、自分は正しく優れており幸福であると意識するようになる緩急様々の過程」

です。この定義も絶対的なものではありませんが、「緩急様々の過程」というところに、回心体験の多様性を認めるジェームズの考え方がよく現れています。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**宗教用語** 投稿者：北風 投稿日：2006年11月15日(水)10時07分58秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

一般の国語辞典に当たっても駄目。  
それから、歴史的用法を調べる場合、「最新」の辞典に当たっても駄目。  
「回心」は、元来仏教用語ですから、いつからキリスト教のそのような意味を持つようになったのが問題。

また、普通の英和辞典だとconversionは「改宗」となっている。これでは困る。  
外国人のconversionの定義を「回心」に機械的に当てはめていいのかというのが、小生の問題意識の3です。そもそも日本人は日本語で考える。いちいち、回心はconversionの意味だなどと考えるわけではない。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fcluster.web.infoseek.co.jp%2FFjiken%2Findex.html>

**Re: 宗教用語** 投稿者：田中 裕 投稿日：2006年11月15日(水)15時44分44秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

> 一般の国語辞典に当たっても駄目。  
> それから、歴史的用法を調べる場合、「最新」の辞典に当たっても駄目。  
> 「回心」は、元来仏教用語ですから、いつからキリスト教のそのような意味を持つようになったのが問題。  
>

> また、普通の英和辞典だとconversionは「改宗」となっている。これでは困る。  
> 外国人のconversionの定義を「回心」に機械的に当てはめていいのかというのが、小生の問題意識の3です。そもそも日本人は日本語で考える。いちいち、回心はconversionの意味だなどと考えるわけではない。

「日本人は日本語で考える」ことを配慮して、「日本国語大辞典」に当たったわけです。この大辞典は「一般の国語辞典」とは違うので、ちょっと内容を紹介しておきましょう。

第一版（1972. 12-1976. 3）は全部で20巻です。各巻が広辞苑なみの分量ですから、分量的に言うと、広辞苑20冊分にあたる大辞典です。なぜそんなに大部であるかと言えば、日本語の意味の変遷を歴史的にたどっている「用例辞典」でもあるから。

第二版が200012-2002. 12 にでていますが、それを精選縮刷した「精選版日本国語大辞典」は

2006年に出ている。改訂版は新しいけれども、決して日本語の現在の用法を記録したものではなく、歴史的な意味の変遷を調べるときに必須の辞典です。

用例について言えば、「改心」は儒学からの引用があり、先哲叢談（1816）四 宗史紀事本末一巻109）より「遂皆改心自励云」と言う文が引用されている。

また回心（廻心）のほうは仏教用語で、たとえば平家物語から「十悪五逆廻心すれば往生をとく」という引用がある。

このことから、「改心」がより倫理的な意味がつよく、「回心」が宗教的、とくに浄土真宗で云う信心とふかく結びついていたことを伺わせます。

国語大辞典だけでなく、「キリスト教神学辞典」にもあたってみました、その内容は長くなるので、時間のあるときに紹介しましょう。これもなかなか興味深いものです。

しかし、大事なことは単に辞典で用例を確かめると言うことだけではなく、そういう言葉をふまえて、いまいちど東條耿一の遺稿を各自が自分の経験に照らして読むことでしょう。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**Re: 宗教用語** 投稿者：北風 投稿日：2006年11月15日(水)17時04分22秒

[返信](#)・[引用](#)

またまた「権威」に頼る。しかも『日国』程度の権威に。それに、現在における「回心」と「改心」の使い分けについて田中さんと別なことを誰も言っていない。日本の近代のキリスト教の世界では、かつて厳密な使い分けがされていたかどうか論点でしょう。

>  
> 用例について言えば、「改心」は儒学からの引用があり、先哲叢談（1816）四 宗史紀事本末一巻109）より「遂皆改心自励云」と言う文が引用されている。

>  
> また回心（廻心）のほうは仏教用語で、たとえば平家物語から「十悪五逆廻心すれば往生をとく」という引用がある。

キリスト教の「用語」としての、用例でなければこの場合意味はないでしょう。

> このことから、「改心」がより倫理的な意味がつよく、「回心」が宗教的、とくに浄土真宗で云う信心とふかく結びついていたことを伺わせます。

この「回心」は「えしん」と読んでキリスト教で言う「回心」とは厳密には別な概念でしょう。こういう意図的な混同を自説の補強のためにするのが悪い癖です。また、「改心」の用例を儒教から「回心」の用例を仏教から引いて比べても意味はないでしょう。儒教は倫理的、仏教は宗教的といったら当たり前すぎて言う意味がない。

最後の「お説教」へのコメントは省略。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fcluster.web.infoseek.co.jp%2Ffjiken%2Findex.html>

**Re: 宗教用語** 投稿者：田中 裕 投稿日：2006年11月15日(水)18時37分58秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

> またまた「権威」に頼る。しかも『日国』程度の権威に。

べつに権威として引用したわけではなく、あくまでもひとつの「参考資料」という程度ですね。それは、最初にこの資料を引用したときに断っているでしょう。現在利用しうるもっとも用例の豊富な国語辞典として調べてみただけです。

>> 用例について言えば、「改心」は儒学からの引用があり、先哲叢談（1816）四 宗史紀事本末一巻109）より「遂皆改心自励云」と言う文が引用されている。

>>  
>> また回心（廻心）のほうは仏教用語で、たとえば平家物語から「十悪五逆廻心すれば往生をとく」という引用がある。

>  
> キリスト教の「用語」としての、用例でなければこの場合意味はないでしょう。

国語大辞典には、明治以後のそういうキリスト教的用例は乏しかったですね。それについては、もっとよく調べてみないといけません。

ただし、明治時代のキリスト者が、キリスト教的用語をどのように翻訳するかという問題に直面したときに、「回心」や「改心」が、すでに日本で、どんな意味で使われていたか、という問題は大切だと思う。

> この「回心」は「えしん」と読んでキリスト教で言う「回心」とは厳密には別な概念でしょう。こういう意図的な混同を自説の補強のためにするのが悪い癖です。

自説の補強などしているつもりはない。また、誰かと論争しているつもりもないので、誤解のないように。

私は、浄土真宗に於ける「回心」の概念（自力作善から絶対他力ないし自然法爾への転換）は、単に「宗派的な転向」を意味する場合の改宗の概念よりも深いと思っています。實は英語のconversionも外的な意味（宗派を変えるとか、無宗教者が教会に入るという意味）と内的な意味（霊的な刷新）の両方がある。したがって、日本のキリスト者が、内的な意味を表現するのに「回心」という語を選んだのには理由があると思います。これについては、あとでまた論じます。

<http://111.teacup.com/mejoro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**既成概念の虜** 投稿者：北風 投稿日：2006年11月15日(水)19時02分0秒

[返信・引用](#)

> 明治時代のキリスト者が、キリスト教的用語をどのように翻訳するかという問題に直面したときに、「回心」や「改心」が、すでに日本で、どんな意味で使われていたか、という問題は大切だと思う。

何で明治で区切るんだらう。キリスト教は明治になってはじめて日本に入ってきたわけではないでしょう。明治以前を否定しないなら、キリスト教の用語も調べなくてはならない。

> 誰かと論争しているつもりもないので、誤解のないように。

ははははは。では「講義」のつもりですか？

> あとでまた論じます。

自明のことを無知なおいらたちに講義するのではなく、田中さんご自身の言説を開陳してください。期待しています。

<http://111.teacup.com/mejoro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fcluster.web.infoseek.co.jp%2FFjiken%2Findex.html>

**「癩者の改心」と「訪問者」** 投稿者：しゅう 投稿日：2006年11月15日(水)21時27分32秒

[返信・引用](#)

北風さん、「朋」の原稿がまだ届いていません。そちらを優先してください。今日中にお願いできますか？

東條が信仰に深く入っていったのは渡辺立子さんの書かれたものの中に、北條民雄の亡くなった後とありますから、昭和13年頃から徐々に信仰生活に入っていたのでしょうね。詩などの作品の数を年次で追ってみますと、

昭和13年 6作品（この年は北條の遺品の整理や、北條への批判で環境の変化があった）

昭和14年 11作品

昭和15年 12作品

昭和16年 3作品（聲を除く）

昭和17年 3作品（訪問者を除く）

こうしてみると、昭和16年に大きな変化があったことが想像できます。それは、身体的な目が悪化したことも大きいでしょうか？

意外と、信仰と文学は両立させて居たのかもしれないですね。野上さんからお聞きしたことがあるのですが、カトリックは文学を否定しないそうですね。

それが、遺稿の「訪問者」では、「怯懦の子」として神に許しを請うています。そこには、何かがあったのではないのでしょうか。それが、この「手紙」に原因があったという推測は成り立ちませんか？

「負け惜しみだ、心で泣いているくせに、たいそう悟りを啓きなすったわね」

この言葉に東條は正面から「神の恩恵」について向き直ったのではないのでしょうか。

そして、この「癩者の改心一友の便りにかえてー」これを書くと同時に、今までの作品すべてを焼いてしまったのではないかと推測するのですがどうでしょうか？

「癩者の改心」と「訪問者」は背景で深く繋がっているのではないかと、思うのですが。

このタイトル「癩者の改心」は渡辺清二郎さんが付けられた？ それも十分に考えられますね。

**Re: 「癩者の改心」と「訪問者」** 投稿者: [田中 裕](#) 投稿日: 2006年11月16日(木)09時15分17秒 [返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

しゅうさん、投稿有り難うございました。

> 東條が信仰に深く入っていったのは渡辺立子さんの書かれたものの中に、北條民雄の亡くなった後とありますから、昭和13年頃から徐々に信仰生活に入っていったのでしょうか。

私もそう思います。神山復生病院で東條は受洗したけれども、退院後、信仰を離れ、キリストに背を向けていた。北條民雄の葬儀までは、ミサには殆ど参列していなかったようです。

「いずみ」に寄稿された渡辺立子さんの回想によると、あるとき東條耿一は、全生園に布教に来たコッサル神父に向かって、「キリストが2000年前に十字架の上で死んだことが、この私に何の関係があるだろうか」と言ったそうです。のちに、信仰の道を再び歩み始めたとき、「おれはあの時、なんであんなことを神父に言ったのだろうか」と激しく後悔したとのことです。

> 詩などの作品の数を年次で追ってみますと、  
 > 昭和13年 6作品（この年は北條の遺品の整理や、北條への批判で環境の変化があった）  
 > 昭和14年 11作品  
 > 昭和15年 12作品  
 > 昭和16年 3作品（聲を除く）  
 > 昭和17年 3作品（訪問者を除く）  
 > こうしてみると、昭和16年に大きな変化があったことが想像できます。それは、身体的な目が悪化したことも大きいでしょうか？

身体的な目の悪化は北條民雄と日記を交換していた頃からのことなので、背景にある事実の一つではあっても、それが宗教的回心を促す原因であったとは思いません。北條民雄の死後、教会の集会に出席するようになりコッサル神父や復生病院から転院してきた信徒の方々とのおまじわりのなかで、東條自身の心境が徐々に変わっていったという印象を持っています。宗教的回心というと、なにか特別な一回的な事件のように思う人も多いのですが、東條の場合は、そうではないと思います。

たとえば、しゅうさんが発見された昭和14年の東條の詩「梅林中尉」の最後のスタンザ

十字架上のイエスの如  
 従容として悔もなし  
 壮烈無比にはあらねども  
 千古不滅の死ならねど  
 友は見事に召された  
 嗚呼どうか 凡夫煩惱の私も  
 臆に銘じて學びたい。

は、先輩の信徒の方の死を看取りつつ、その信徒の死をキリストの死に重ねながら、「凡夫煩惱の私も臆に命じて学びたい」といっています。

> 意外と、信仰と文学は両立させて居たのかもかもしれませんね。野上さんからお聞きしたことがあるのですが、カトリックは文学を否定しないそうですね。

遠藤周作がそういうことを書いていましたね。ただ、プロテスタントでもミルトンのようなピューリタンの信仰と文藝の創作を両立させた人がいますし、カトリックの伝統の中にも、ギリシャ・ローマの文学書をすべて放擲して、聖書のみ信仰を志し、のちに聖書のラテン語訳を完成させたヒエロニムスのような人がいますから、一概に言えません。

> それが、遺稿の「訪問者」では、「怯懦の子」として神に許しを請うています。  
 > そこには、何かがあったのではないのでしょうか。それが、この「手紙」に原因があったという推測は成り立ちませんか？

「訪問者」と「癩者の回心」のいずれがさきに書かれたかについては、確かなことは解りません。したがって、しゅうさんの仮説には何もいえませんが、だれかから手紙を貰ったというような外的な事件が原因で、「訪問者」を書いたとは思えません。そうではなくて「訪問者」は、東條自身の内面的な回心の経験を詩のテーマにしたものだと思います。

いままで父なる神に背を向けていた東條が、キリストによって、キリストと共に、父なる神を受け入れ、

われおん身を離し去らしめじ  
 わが貧しきを見そなはして  
 わが裡に住み給へば

われもまたおん身の裡に生きむ

と詠っている詩です。なお、この作品の中で、

われ、何をもておん身に謝せむ

わが偽善なる書も、怯懦の椅子も

凡て炉に投げ入れむ

わが父よ、いざ寛ぎて、暖を取りませ

という箇所が以前問題となりましたが、ここで、詩の語手が「わが偽善なる書」を炉に投げ入れたのは、いままで父なる神に背を向けて生きてきたことを激しく後悔するとともに、戸外の寒さの中で佇みながら、東條の側に常に居続けた「父なる神」に暖を取ってもらおうという文脈です。その後悔・懺悔は決してネガティブなものではなく、父なる神への感謝へと繋がるものであったと思う。

前にも書きましたが、私は、この詩から、最晩年の東條が文藝そのものを否定したなどという印象を受けませんでした。昭和16年、山桜の投稿がますます本来の文芸誌というよりは軍国主義的な風潮に染まっていく直中があったとき、東條は、「聲」という外部の宗教雑誌に投稿することによって、自分自身の信仰を言葉で表現しつつ確認していく道を選んだのです。それは東條の祈りでもあり、詩でもあり、懺悔でもあり讃美でもあったのです。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**小さき声 2 - 1 復刻** 投稿者：[田中 裕](#) 投稿日：2006年11月17日(金)15時43分44秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

小さき声の第二シリーズをPDFにしました。  
[小さき声 2 - 1](#)をご覧ください。PDFのほうが印刷に適しており、後でファイルの連結も可能なことがわかりましたので、今後はPDFで復刻することにします。（従来のもも既に一部はPDF化してあります）

また、第一シリーズの復刻も、従来通り続けますが、これもPDF版に切り替えます。

「小さき声」2 - 1では、松本さんは自治会を引退された後の心境を語っています。

1962年9月より『小さき声』（月刊誌）を発行し、85年3月までの23年間続いたわけであるが、  
聖書暗誦の中から生まれたものである。そして、69年より自治会活動へと、押し出されたが、  
これも聖書の暗誦の中から生まれたものである。自治会活動は私にとって異邦人の世界であり、  
奴隷となってこの世の民に仕える事であった。総務部長を5年、自治会長を13年、計18年間、  
この異邦の地で働いた。体力を消耗し尽くし、病に倒れ、そして本年1月、神は私を自治会から解放した。  
祖国への帰還が許されたのである。

松本さんは御自身を、バビロンに捕囚されたユダヤ人になぞらえています。御自身にとっての祖国とは、何處であったのだろうか。それは決して日本を意味していたのではないのです。

1950年、私は信仰が分らず、地獄の苦しみを経験した。その苦しみの中でロマ書3章21節以下が  
それまで全く理解できなかったのに、突如として、生ける神の言葉となって私に語りかけた。  
この時、私は旧き自己に死んで新しくされた。回心であった。そのように私に働きかけてくれる神の現在の場所、  
それが私の故郷である。

松本さんにとって、聖書の言葉のあるところが「祖国」であるので、そこで生きるために再び塚本訳の新約聖書マルコ伝を暗誦することを始めます。つまり、この暗誦という作業を反復することが、松本さんにとって祖国に復帰することだったといっています。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

荒井献氏の用例など 投稿者：田中 裕 投稿日：2006年11月17日(金)17時37分16秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

平凡社の世界大百科事典で、「回心」と「改心」がどのように使い分けられているかを検索してみました。幾つかのことに気づいたのでここに覚書として記します。

まず「回心」の現れる項目数は85。そのうち浄土真宗関連のものがいくつかありますが、大部分がキリスト教関係の記事に出ます。

これに対して「改心」の現れる項目数は35。その用例は、非キリスト教的、非宗教的文脈で使われるものが多い。(歌舞伎狂言や説話などで、悪人が「改心」というものが、結構ある)

キリスト教の文脈で「改心」を使っているすべてのケースに眼を通してみましたが、その場合も倫理的な意味での悔い改め、外面的な改宗の意味で使っているケースが多い。

もっとも、「サンタクロース」の項目で

良い子には背負った袋からほうびのプレゼント、悪い子は訓戒のあと、改心の実ありと認められて、やはりなにかもらえる。

などは、それほど深刻な意味ではありませんが、基本的には悪い行い、悪い思いを改めるという意味です。

悪人が「改心」して善人になるという意味につかう事例も多い。たとえば、「リード」という作家の項目で

監獄制度の改革を求めた《改心に手遅れなし》(1856)など、事実を克明に調査・集積し、それを小説に仕立てて社会の矛盾を改める世論を盛り上げようとした。

この場合、「改心に手遅れなし」の原語を別に調べましたが、Never Too Late to Mend でした。

悪人が前非を悔いて入信するという意味で、「改心する」を使う事例もある。たとえば、「エジプトのマリア」の項目で

5世紀、エジプト出身の伝説上の悔悟女で聖女。アレクサンドリアで17年間遊女として暮らしていたが、エルサレム巡礼に旅立ち改心。その後ヨルダン川を渡り、パレスティナの荒野で約50年間3個のパンのみで隠修生活を送ったという。

これは、遊女が「改心」して聖女となったという文脈です。こういう事例は「回心」と紛らわしいけれども、善人と悪人にかんする常識的・倫理的な差別を前提した上で、悪人が「改心」して善人となったというニュアンスがあると思う。

これに対して、「回心」の場合は、もっと深いレベルでの価値観の転換が伴うのではないだろうか。

たとえば、「イエス・キリスト」の項目にあった、荒井献氏の次の説明は非常に説得力があった。

ヨハネはヨルダン河畔の荒野で〈神の国〉の接近を宣(の)べ伝え、人々に悔い改めを迫って、罪のゆるしに至る洗礼を授けていた。われわれは〈悔い改めよ〉と言われると、何か道徳的な意味で改心を迫られているように感ずる。

しかし、ヨハネが求めた悔い改めは、むしろ人間の生活上の価値基準を180度転換すること、すなわち文字通りの〈回心〉にあった。当時ユダヤの支配者たち、とくに政治的・宗教的エリートたち(サドカイ派、とりわけパリサイ派の人々)は、彼らの生活の価値基準を、彼らが神から与えられたと信じていた律法に置いていた。彼らによれば、律法を守って倫理的に正しい生活をした人々がその功績によって終末のときに〈神の国〉に入れられ、律法を守らない人々は〈神の国〉から閉め出されると確信していたのである。しかしヨハネは、過去における律法の業を誇り、それを基準にして、律法を守らない人々、あるいはむしろ、貧しさのゆえにそれを守ろうとしても守りえない人々を差別する人間の心のありようそのものを〈罪〉と見た。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

[返信](#)・[引用](#)

**「回心」について** 投稿者：[旅人](#) 投稿日：2006年11月17日(金)21時01分8秒

「新共同訳聖書」、「新改訳聖書」および「口語訳聖書」の新約聖書のテキスト本文で、「回心」という言葉がどこで出てくるか見てみました。すると、新共同訳聖書、口語訳聖書共に一度も使われていません。ただ、新改訳聖書では、2回使用されています。その個所は、ヨハネ伝の第12章40節および、ヘブル書の第6章1節です。それらは、ギリシャ語ではどうなっているのでしょうか。

ただし「回心」という言葉は、新共同訳の場合、テキスト本文には出てきませんが、見出しでは使われています。それらは、使徒言行録の第9章1節から始まる部分、第22章6節から始まる部分、および第26章12節から始まる部分で、いずれもパウロの回心に関する部分です。

パウロ以外の使徒たちが「回心」していないとしたら、パウロの場合キリスト教を迫害する立場から宣教する立場に変わったことを指しているように思います。

「回心」は、仏教的響きが強いように思いますが、いかがでしょうか。そして、聖書では、元々「回心」という考え方は、信仰体験を表現する言葉としては、無かったのではなからうかという感じがします。

なお、「改心」という言葉は、上記三つの聖書のいずれにも使われていませんが、「悔い改め」という言葉は、「口語訳」では37箇所、「新改訳」では53箇所、「新共同訳」では52箇所に使われています。罪を悔いるのが基本なのでしょうね。

なお、東條さんの作品についてはノーコメントですが、彼が読んでいたであろうカトリック関係の書物の影響を受けていたであろうとは言えるように思います。

また、ロングマン英英辞典によると conversion の2番目の意味は、  
an act of changing from one religion or belief to a different one  
ということですから、「改宗」ということで、これがパウロに当てはまるのかなあと思いません。

**Re: 「回心」について** 投稿者：[田中 裕](#) 投稿日：2006年11月17日(金)21時58分8秒[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

旅人さん 投稿有り難うございました。

> 「新共同訳聖書」、「新改訳聖書」および「口語訳聖書」の新約聖書のテキスト本文で、「回心」という言葉がどこで出てくるか見てみました。すると、新共同訳聖書、口語訳聖書共に一度も使われていません。ただ、新改訳聖書では、2回使用されています。その個所は、ヨハネ伝の第12章40節および、ヘブル書の第6章1節です。それらは、ギリシャ語ではどうなっているのでしょうか。

ヨハネ12-40は、ストラポーション（向きを変える）  
ヘブル6-1は、メタノイア（悔い改める）ですね。

メタノイアという語は、イエスの最初の宣教の言葉に含まれます。The Dictionary of Biblical Theology (Xavier Leon-Dufour, The Seabury Press 1973) という事典を調べてみましたが、そこでは 回心 (Conversion) の項目で、ギリシャ語の聖書の「メタノイア」という言葉を参照しています。

つまり、聖書で言う「メタノイア」は、過去の罪業への「後悔」「悔恨」とどまるのではなく、人格の全体に及ぶ「回心」を意味するがゆえに、それは未来に向けての解放と再生をかならず伴うと言っています。この点では、洗礼者ヨハネとイエスの最初の宣教のなかの「メタノイア」を、「回心」を伴うものと捉えた荒井献さんの場合と同じです。

> ただし「回心」という言葉は、新共同訳の場合、テキスト本文には出てきませんが、見出しでは使われています。それらは、使徒言行録の第9章1節から始まる部分、第22章6節から始まる部分、および第26章12節から始まる部分で、いずれもパウロの回心に関する部分です。

> パウロ以外の使徒たちが「回心」していないとしたら、パウロの場合キリスト教を迫害する立場から宣教する立場に変わったことを指しているように思います。

それは、私にとっては、外的な意味でのConversion にすぎません。嘗ての敵が、今は味方になったというだけならば、まだ回心の内的な意味を捉えていないと思う。パウロの場合は、律法主義に基づいて神と人との関係を捉えていたものが、十字架につけられたイエスの信仰へと転換したことが、内的な意味での回心です。

> 「回心」は、仏教的響きが強いように思いますが、いかがでしょうか。

前にも述べましたが、浄土真宗の用語であった「回心」は、自力作善から絶対他力への転換、信心そのものを賜り物と考えます。こういうところは、キリスト教の信仰と共通していると思います。浄土真宗とキリスト教の「回心」が全く同じではなく、そこには違いもあります

が、その違いを認めた上でも、「回心」という語は、「メタノイア」という聖書のギリシャ語のもつ内的な意味を良く捉えていると思います。また、世界大百科事典の用語検索でも確認しましたが、現在では「回心」という言葉は、仏教よりもキリスト教の文脈で使われる事例の方がずっと多いと言うことも、この言葉がキリスト教の用語として定着したことを物語っているのではないのでしょうか。

>そして、聖書では、元々「回心」という考え方は、信仰体験を表現する言葉としては、無かつたのではなからうかという感じがします。

メタノイアという言葉が、内面的な意味で使われるようになり、さらに、個々の行為への倫理的反省ではなく、全人格的、全存在をあげた生き方の転回を促すことを考えれば、その言葉の意味に回心が含まれていたと言えるでしょう。

また、「何を罪と考えるか」「誰が救済されるのか」ということについての当時の通念を突破するようなものが含まれていたと思います。これについては、前に引用した荒井献氏が的確に指摘しています。

<http://111.teacup.com/mejoro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**「回心」について再度** 投稿者: [旅人](#) 投稿日: 2006年11月18日(土)09時14分6秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

ギリシャ語原文を教えてください、ありがとうございました。ストラポーシン(向きを変える)であれば、「回心」が適切であろうと思います。

しかし、田中先生のお考えからすると、新約聖書で「悔い改め」るように書かれているところは、すべてとは言わなくとも、かなりの部分が「回心」しなさいと書き改められるべきということにならないでしょうか。

もともと「回心」という言葉は、コペルニクスの転回の必要性を基礎にしている近・現代日本における造語(または仏教用語からの借用)のように思われますがいかがでしょうか。私には、自己中心的な生き方を改め、神を愛し敵をも愛せと言われる方が、生き方を180度変えよと言われるより、分かり易いと思いますけどね。また、私としては、「改心」に「回心」の意味を込めることは、十分に可能だと思います。もっとも、「回心」という用語が本当に定着しているのであれば、それをさらに変える必要は感じません。

ところで、明治期によく使われた漢語聖書ではどのような言葉が用いられていたか、ご存知でしたら教えてくださいませんか。

洗礼者ヨハネの宣教の内容を「ルカによる福音書」の第3章から読むと、普通の人にも分かるような悔い改めが説かれていると思います。十戒の精神が語られており、道徳的であると思います。

PS: ヨハネ伝の第12章40節は、塚本虎二訳では、

主は彼らの目を見えなくし、その心を頑なにされた。これは彼らが目で見、心で解り、心を入れかえて、わたし(主キリスト)に直されないようにするためである。

となっていることが分かりました。

**Re: 「回心」について再度** 投稿者: [田中 裕](#) 投稿日: 2006年11月18日(土)10時54分36秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

> ギリシャ語原文を教えてください、ありがとうございました。ストラポーシン(向きを変える)であれば、「回心」が適切であろうと思います。

そうですね。参考までに、旅人さんが引用されたヨハネ12-40の塚本虎二訳と比較する意味で、プロテスタントの文語訳を引用してみますと、

「彼等の眼を暗くし、心を頑固(かたくな)にし給へり。これ目にて見、心にて悟り、翻へりて我に醫(いや)さる事なからん為なり」

この「翻りて」は原語のニュアンスをよく伝えていると思います。

塚本虎二訳は解りやすいけれども「心を入れかえて」では、生ぬるい気がします。

>

> しかし、田中先生のお考えからすると、新約聖書で「悔い改め」るように書かれているところは、すべてとは言わなくとも、かなりの部分が「回心」しなさいと書き改められるべきということにならないでしょうか。

そこまでは主張しません。要は、聖書の「メタノイア」は「悔改め」と「回心」の両方の意味

を持っていると言うことです。繰り返しになりますが、荒井献氏の文を引用すれば

われわれは〈悔い改めよ〉と言われると、何か道徳的な意味で改心を迫られているように感ずる。

しかし、ヨハネが求めた悔い改めは、むしろ人間の生活上の価値基準を180度転換すること、すなわち文字通りの〈回心〉にあった。

というところが大事ではないでしょうか。何を罪と考えるか、誰が救われるかということについて、パリサイ人や律法学者とイエスに従ったものとは価値基準が全く違っていた。罪人や悪人が改心したという言い方では、そういう価値観の転換が表現されないと言うことです。

> もともと「回心」という言葉は、コペルニクスの転回の必要性を基礎にしている近・現代日本における造語(または仏教用語からの借用)のように思われますがいかがでしょうか。

すでに浄土真宗で使われていたのですから、近現代日本の造語ではありません。浄土真宗では、「善人ですら往生できるのだから、まして悪人が往生できないはずがあるか」という思想がありますね。浄土真宗は日本仏教の歴史の中では、一種の宗教改革といえるでしょう。その文脈で「回心」という用語が成立したと思います。

> 私には、自己中心的な生き方を改め、神を愛し敵をも愛せと言われる方が、生き方を180度変えよと言われるより、分かり易いと思いますけど。また、私としては、「改心」に「回心」の意味を込めることは、十分に可能だと思います。もっとも、「回心」という用語が本当に定着しているのであれば、それをさらに変える必要は感じません。

今回、いろいろなかたの意見をお聞きして、一つの言葉にたいする意味の理解がかなり違うと言うことも実感しました。私は、「癩者の改心」には、いまでも非常な違和感があります。そして、世界百科事典の項目検索で、「改心」の用例を調べて、なぜ自分が違和感を感じたか、その理由が良く分かりました。「改心」の多くの用例は「悪人の改心」「罪人の改心」という文脈です。一体、何が悪で、何が罪なのか—そういう価値基準に対する問いかけがない。

メタノイアの立場からすれば、むしろ「善人こそ改心すべきではないのか」と問いたいのです。私が「癩者の改心」という表現に違和感をもったのもそこに理由があります。改心すべきは癩者ではなく、私を含む多くの健常者のほうではなかったのか、と感じたのです。

> 洗礼者ヨハネの宣教の内容を「ルカによる福音書」の第3章から読むと、普通の人にも分かるような悔い改めが説かれていると思います。十戒の精神が語られており、道徳的であると思います。

たしかに洗礼者ヨハネの場合は、一般の民衆に対しては決して難しいことを要求しては居ません。しかし、為政者、権威者の律法違反についての非難は容赦のないものだったのではないのでしょうか。そういう峻厳さがヨハネにはあります。また、ヨハネの場合は、おそらく自分の弟子達には、自分と同じように世俗を離れた禁欲的生活を命じたのではないのでしょうか。

イエスの場合は、ヨハネやエッセネ派のように禁欲的な信者の共同体を形成するのではなく、積極的に民衆の中に入って神の国の告知をしています。イエスはヨハネのように断食を命ずることもなく、水による洗礼も授けなかった。こういうイエスの宣教の仕方とヨハネとの違いも見過ごせませんが、イエスの場合も、民衆に対しては決して難しい要求はしていない。金持ちやパリサイ人、律法学者には、徹底した改心を求めますが、差別に苦しむものたちには驚くほど寛容です。姦淫の罪の現場を押さえられた女に対して、イエスの言ったヨハネ伝の言葉は、そういうイエスの教えの特徴をよく表していると思います。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**問題のすり替えと方法的誤り。** 投稿者：北風 投稿日：2006年11月18日(土)11時01分29秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

問題の発端は、東條耿一の「癩者の改心」が、「回心」の誤りであるという断定がいがななのか、ということにあった。

したがって、現在の文献でどのように使われているかは、まったく意味がない。

当時あって、厳密に使い分けされていたかどうか問題となる。

「回心」の語釈についてお説にはまったく異議はないし、さほど新知見を含んでいるわけでもない。

しかし、話の発端からは問題のすり替えでなければ、方法的な誤り。

幕末に踏み絵を踏んで棄教したキリシタンが「改心戻し」をしたという用例(「回心戻し」という用例はない)や、内村鑑三が「改心では十分に意味が伝わらないから」とコンボリューションといったことなどから、少なくとも現在の「回心」の意味で「改心」が使われていた、あるいは渡辺善太等は戦前から「回心」といっていたことを考えれば混在して使われていたことは間違いない。

用例を調べれば、一層明らかになる。

もっとも、現在の用語としての「回心」について術学趣味を披瀝したいのなら別の話ですがね。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fcluster.web.infoseek.co.jp%2Ffjiken%2Findex.html>

**私の問うていること** 投稿者：田中 裕 投稿日：2006年11月18日(土)11時31分52秒

[返信・引用](#)

＞ 問題の発端は、東條耿一の「癩者の改心」が、「回心」の誤りであるという断定がいかげなものか、ということにあった。

「改心」が「回心」の誤りであると断定したのは、むしろ北風さんの方だったのではありませんか。

私の場合は、「癩者の改心」という表現に強い違和感を感じたけれども、最初は「いずみ」のテキストを尊重したのです。

私の問題は、はじめから、東條の遺稿は「癩者の改心」というタイトルではなくて「癩者の回心」というほうが、内容に即しているのではないか、という問いかけでした。

＞ したがって、現在の文献でどのように使われているかは、まったく意味がない。

現代の読者が「癩者がなぜ（道徳的な意味で）改心する必要があるのか」と感じる危険はないでしょうか。それも私が問題としていることの一つでした。たとえば、荒井献さんがこのタイトルを見てどう考えるだろうか。現代の文献での用法を知ることが全く意味がないとは思いません。

＞ 当時あって、厳密に使い分けされていたかが問題となる。  
＞ 話の発端からは問題のすり替えでなければ、方法的な誤り。

かりに、当時において、厳密に使い分けられていなかったとしても、私の問題は依然として残ります。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2Ffeigenwille%2F>

**北風さんへ** 投稿者：旅人 投稿日：2006年11月18日(土)11時54分43秒

[返信・引用](#)

北風さんと田中先生のお話しは、もう一応の決着が着いているものとして、私は田中先生のお考えを少し違った角度からお尋ねしただけのことです。  
私の質問が話をややこしくしたのであれば、陳謝いたします。ご議論をお続けください。

なお、私は、荒井献先生の「われわれは〈悔い改めよ〉と言われると、何か道徳的な意味で改心を迫られているように感ずる。しかし、ヨハネが求めた悔い改めは、むしろ人間の生活上の価値基準を180度転換すること、すなわち文字通りの〈回心〉にあった。」というお言葉が洗礼者ヨハネの宣教の精神を100%正しく表現できているとは今の所考えてはいません。却って問題を曖昧にしていないかと思っています。道徳的な意味での改心は、罪(神に対する反逆)と密接不離であると考えます。

仏教における「回心(えしん)」については、<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fwww.honshoji.or.jp%2Fbud%2Fbud0036.htm> を参考として考えれば、自力本願から他力本願への転換が要点のように思います。これと似た考え方は、パウロの信仰を恵みとして受け取るという考え方でしょね。

内村鑑三における三度の「回心」(宗教的転機)については、<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fwww.bun.kyoto-u.ac.jp%2Fchrist%2Fasia%2Fjournals%2F01iwano.pdf> が一つの参考になるように思います。

**「いずみ」を尊重したいけれど・・・** 投稿者：しゅう 投稿日：2006年11月19日(日)10時59分30秒

[返信・引用](#)

「癩者の改心(回心)」の「癩者」について考える時、

＞ また、東條の遺稿については、果たして、「癩者の回心(改心)」というタイトルが  
＞  
＞ (1) 東條自身が、そういうタイトルで発表することを意図して書いたのか

東條自身が、「癡者」としたのであれば、そこには、「わたしの」という意味で「癡者」としたのだと思います。「癡者になりきる」ことが東條の全生園の10年の歳月だったと思います。

「癡者の改心（回心）」には深い思いがあるように思います。

東條にとって、わたしの改心なのか？、回心なのか？ を考えてみるとどうなるでしょうか？ 東條の資質も考えて。

> (2) 彼の遺稿（あるいは書簡）にそのような題を付けたのは、編集者のほうなのか

編集者は渡辺清二郎さんですから、渡辺清二郎さんが、東條の遺した一文にこの文章に相応しいタイトルで付けたとすると、「癡者の改心（回心）」は良くできているとタイトルだと思います。

こちらの場合は、改心（回心）が、どちらでもそれほど悩まないで用法の曖昧さで片が付きますし、良いように思いますが・・・、東條が付けたとしますと、悩んでしまいますね。

私は、どちらにしても、「いずみ」を尊重したいです。

**如実** 投稿者：北風 投稿日：2006年11月19日(日)12時38分23秒

[返信・引用](#)

> 「改心」が「回心」の誤りであると断定したのは、むしろ北風さんの方だったのではありませんか。

こういうところに、自説に固執してその補強材料を探し回る先生の特徴が如実に現れている。既に、この問題については「最初そう思ったけれど再考するに」と「自己批判」している。はじめの立脚点からゴウも動かないなら議論や思索の意味はない。

> 現代の読者が「癡者がなぜ（道徳的な意味で）改心する必要があるのか」と感じる危険はないでしょうか。

（道徳的な意味で）と「改心」を補強せざるを得ないところに、既に無理がある。

依然として残る「私の問題」は、当時の用法がどうであれ「回心」のほうが「内容に即している」という、資料に対する「謙虚」な姿勢をかくならば、資料を扱う資質の問題として、おいらの問題意識には残る。

今回は旅人さんの意見のほうが客観性を持つと思う。サイトの紹介もありがとう。勉強になりました。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fcluster.web.infoseek.co.jp%2Ffjiken%2Findex.html>

**「小さき声」再刊第1号を読ませていただきました。** 投稿者：[旅人](#) 投稿日：2006年11月19

[返信・引用](#)

日(日)14時31分16秒

ありがとうございました。別件で申し訳ありませんが、読ませていただいたことをお知らせしたく、書き込むものであります。

この号で、特に共感を覚えたのは、「信仰による決断」の最後の方に書かれている、「年をとり、この世に対する希望が薄らいできた為であろうか、霊的世界が見えてきた。若い時は、好き勝手な事をしておきながら、神の御意志であったと勝手な理屈をつけ、合法化してきた。しかし今では神の御手の外では生きられない事を知らされ、これから先何が起るか分からないが、『主よ、これ以上の試みにあわせないで下さい』というのが私の祈りの中心にある」という部分です。

ただ、「試み」の内容については、人それぞれであろうと思います。また、私の場合には、「信仰による決断」よりは、受動的な断念であり、福音を少しでも宣べ伝えることができれば幸いです。

**Re: 「小さき声」再刊第1号を読ませていただきました。** 投稿者：[田中 裕](#) 投稿日：

[返信・引用](#) [編集済](#)

2006年11月19日(日)15時34分25秒

旅人さん：

「小さき声」の感想をお寄せ頂き、有り難うございました。だれもお気づきにならなかったのではないかと心配していましたが、松本馨さんの「小さき声」の第二シリーズの復刻作業を、これからも続けていきますので、どうか宜しく願いしま

す。

實は、この前の旅人さんの投稿に関するレスを書いている最中でしたので、このあとに続けさせて頂きます。

> なお、私は、荒井献先生の「われわれは〈悔い改めよ〉と言われると、何か道徳的な意味で改心を迫られているように感ずる。しかし、ヨハネが求めた悔い改めは、むしろ人間の生活上の価値基準を180度転換すること、すなわち文字通りの〈回心〉にあった。」というお言葉が洗礼者ヨハネの宣教の精神を100%正しく表現できているとは今の所考えてはいません。却って問題を曖昧にしていないかと思っています。道徳的な意味での改心は、罪(神に対する反逆)と密接不離であると考えます。

この投稿、興味深く再読させて頂きました。ご指摘のルカ伝の該当記事を荒井献氏の立場からどう読むかという問題は残りますね。東條耿一の遺稿を契機として起きた問題と直接に関連はありませんが、洗礼者ヨハネのすすめたメタノア(悔い改め・回心)をどう捉えるのか、原始キリスト教はその宣教の何を受け継ぎ、また何を新たに付け加えたか、そういう問題は、私にとっては大切な問題です。

> 仏教における「回心(えしん)」については、<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fwww.honsho.ji.or.jp%2Fbud%2Fbud0036.htm> を参考として考えれば、自力本願から他力本願への転換が要点のように思います。これと似た考え方は、パウロの信仰を恵みとして受け取るという考え方でしょね。

現在の宗教学では、「回心」を様々な宗教に共通する心理的・人格的経験として扱うことが多くなってきました。また、その場合は英語の文献の conversion に対応するものとして扱われます。信仰の客体は各宗教で異なりますが、信仰の主体、その心の在り方には共通するものが多いからでしょう。

まへの私の投稿では、浄土真宗の回心とキリスト教の回心との共通点一価値観の転換、社会から疎外された人々、善を為そうとしてもなしえない境遇にあるものへのまなざし等一を指摘しましたが、両者の間には相違もあるので、それを補足したいと思います。

浄土真宗では、倫理道徳的な悔い改め(懺悔)と絶対他力への信心を厳密に区別するために「回心(えしん)」という言葉を使います。倫理を無視するのではないが、「不簡善悪」ということで、倫理道徳を越えた恵みとしての「回心」が強調されます。だから、倫理的な響きの強い「改心」という言葉には宗教的な意味を感じない—これは確かだ—と思います。そこから、「造悪無碍」という異端の生じる原因もありました。

キリスト教に於ける「回心」は、決して「不簡善悪(善悪の差別をしない)」ということを行わない。たしかに相対的な倫理道徳、社会の習慣として行われている倫理道徳は第一義的でないにしても、神との契約にもとづく倫理、すなわち「神の義」は常に第一に考えねばならない。このように「神の義」を第一義的に考えることが、浄土真宗との違いでしょう。

> 内村鑑三における三度の「回心」(宗教的転機)については、<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fwww.bun.kyoto-u.ac.jp%2Fchrist%2Fasia%2Fjournals%2F01iwano.pdf> が一つの参考になるように思います。

リンクを教えて頂き有り難うございました。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

Re: 「いずみ」を尊重したいけれど・・・ 投稿者: [田中 裕](#) 投稿日: 2006年11月19日(日)16 時19分40秒 [返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

しゅうさん

投稿有り難うございました。私は、東條耿一の遺稿のタイトル表記の件については12月に野上さんとともに編集会議で議論するまでは、最終的な判断を留保しています。慌てて結論を下す必要など全くありませんから。また、自分の立場に固執するつもりなどありません。それよりも、タイトルのことが契機となって見えてきた様々な問題について、いろいろな角度から考察を続けていきたいと思っています。

今日は、愛徳会のミサの後で病棟のKさんをお見舞いしました。食事が自由にとれないので点滴をされているのですが、ベッドにPCを持ち込まれてご自分の仕事を続けて居られました。「いずみ」のバックナンバーなど、愛徳会に残された貴重な資料などを電子化して後世に残したいと仰って居られましたので、私も出来る限りお手伝いするつもりです。

> 東條自身が、「癩者」としたのであれば、そこには、「わたしの」という意味で「癩者」としたのだと思います。「癩者になりきる」ことが東條の全生園の10年の歳月だったと思います。

「癩者の改心（回心）」には深い思いがあるように思います。

「聲」にでていた東條の手記に付けられたタイトルには「癩者の父」「癩者への布教」など、「癩者」という言葉が使われています。普通、この言葉は入園者の方は今も昔も使いませんし、戦後は特に差別語として、使ってはいけない言葉になったと思います。

この言葉を東條自身が使ったのか、編集者が付けたのか、それは良く分かりませんが、私は、東條が付けたとすれば、そこに何を読みとることが出来るだろうか、それを考えてみました。

東條の「癩者の改心（回心）」を読んだときに、まず私の心に浮かんだのは、「癩者に生まれたことを後悔しない」と詠い、「癩は天啓であった」と書いた明石海人でした。海人の場合も、こういう言葉の真意については、周囲から様々なことが言われてきました。これについては、軽々にコメントすることは出来ませんが、一つだけ言いたいのは、二人とも「癩者」という言葉で社会的な烙印を押されることを少しも恥じていないということです。

二人とも、根本の所で後悔なぞしていないと、はっきりと言っています。そういうように運命を摂理として肯定する力が何處から出てくるのだろうか。

もちろん、キリスト教の入信に際しては「悔い改め」に後悔は伴うでしょう。しかし、それは「癩者であること」に対してではなく、「訪問者」にあるように父なる神に背を向けていた自分に対する後悔です。そしてその後悔が、回心によって、戸外にいて自分の悔い改めを待っていた父なる神に対する感謝へと転じる。

キリストという生きた實在に触れた後では、世の人が不幸中の不幸として憐れむ業病を、むしろ摂理として肯定できるようになった、そういう心境を、穏やかな、日常的な語りの中で淡々と述べているのが「癩者の改心（回心）」であるように思いました。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

---

新しい資料による再考 投稿者：田中 裕 投稿日：2006年11月20日(月)23時49分45秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

全生園の愛徳会の図書室にある書籍で、東條が読んだ可能性のある幾つかの書籍（たとえば、岩下壮一の「信仰の遺産」）および、東條が読んでいたラゲ訳の新約聖書、などを借りて読んでみました。そこでいろいろなことが見えてきたので、それを報告しましょう。

まず、ラゲ訳の新約聖書は、プロテスタントの聖書が「悔い改めよ」とある箇所を、すべて「改心せよ」と訳していました。たとえば「悔改めて福音を信ぜよ」というところを「改心して福音を信ぜよ」という。使徒達は、ラゲ訳では「改心の洗礼」を授けます。

現代の日本語の用法では、前に様々な辞典で調べたように、「改心」という言葉に宗教的な含意は少ないし、教文館の「キリスト教神学辞典」などでは、「悔悛 (penance)」と「回心 (conversion)」の項目のみがあって、「改心」の項目はありません。

しかし、ラゲ訳の聖書では、「悔悛」という語のかわりに「改心」を使っていたことが分かりました。

ラゲ訳の新約聖書を東條がよく読んでいたことは、「訪問者」の冒頭にある黙示録からの引用が、ラゲ訳と一致することから分かります。

したがって、東條自身が、「癩者の改心」という表題を付けるのはむしろ自然なことに見えてきました。なぜならば、黙示録は、終末をまえにして、すべての人に「改心（悔改め）」を求める書であるからです。実際、「改心」という語はラゲ訳の黙示録に頻出します。

「訪問者」と「癩者の改心」とは執筆時期がほぼかさなると考えられますから、この二つの遺稿の背後に、黙示録的な世界の中で死を迎えようとしている作者の心を読みとるべきでしょう。

尚、ラゲは、「改心」という訳語の注釈で、聖書のラテン語訳では「悔悛」を意味する、と書いています。これは、poenitentia という語に対応しますが、聖書原語のギリシャ語ではメタノイアです。

旅人さんとのやりとりで明らかになったことですが、ラテン語の「poenitentia」や日本語の「悔悛」とはちがって、聖書原語の「メタノイア」は、単に倫理的・道徳的な意味の「悔い改め」だけではなく、神の生命に参与する「回心」の意味を持ちうる言葉ですので、東條自身の発言の文脈では、「改心」は「回心」を含むといつて良いでしょう。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**ふーん。** 投稿者：北風 投稿日：2006年11月21日(火)10時00分43秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

そうです。それが正しい態度だと思います。

僕は「ラゲ訳の新約聖書」は知らないけれど、明治初期のキリシタン禁制の高札撤廃後の「改心戻し」のような用語から、その可能性は指摘しておいた。  
現代の用法ではなく、東條の同時代の用法を調べなくては駄目だと。  
「ラゲ訳」は調べると、1910（明治43）ですね。

また、教文館の「キリスト教神学事典」は1960年代に出た翻訳書であって、その事典で、どういふ訳語を与えているかの話で、いささかも以前の論議に新知見を加えるものではないことですね。

でもまあ、限定付きでも、田中さんの知見に発展があったことは御慶。

最後の翻訳談義も蛇足ですね。「メタノイア」が「回心」の意味を持つ。したがって、メタノイアを「改心」と訳してある例があるから「改心」は「回心」を含意するというんじゃあ、田中さんの主張からすれば、「誤訳」でしょう。ただの堂々巡り。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fcluster.web.infoseek.co.jp%2FFjiken%2Findex.html>

**おおきな前進。** 投稿者：しゅう 投稿日：2006年11月21日(火)10時18分43秒

[返信](#)・[引用](#)

田中さん、  
「ラゲ訳の新約聖書」を解説頂きありがとうございました。とても腑に落ちて今までの疑問が解けて行くように思います。  
東條が、「メタノイア」の意味で「改心」を使ったであろうということですが、それについて無知なものですから検索してみましたら次のサイトで、良く理解できました。  
<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fwww.hi-ho.ne.jp%2Fluke852%2FmeIma%2Fvol6.txt>

「メタ」という言葉は、アフター（～の後で）という意味の語です。そしてノイアという部分はヌースから派生した語で英語のマインド、つまり「考え、思い」を表す言葉です。従って、メタノイアの純粋な意味は、「考えを後で変える、思い直す」という意味です。ですから、今まで良いことばかりしてきた人が正直者はバカを見ると考えを変えて「これからは、ずるがしこく悪いこともしよう」と思うときにもメタノイア、メタノエオを使用しても良いのです。もちろん後悔、反省し、道徳的に悪を退け、これからは善をするという決断をなす場合にもメタノエオを使用することはできませんが、その正反対の場合にも使用できるのです。その意味は文脈が決定するのです。メタノイア、メタノエオ自体には、道徳的な善をする決断や後悔、反省するといった意味は、直接含まれてはいません。」

これにたいへん納得するものがありました。

>東條自身の発言の文脈では、「改心」は「回心」を含むとって良いでしょう。

「回心」を含むでしょうけれど、あまり限定をしなくて、「改心」は「改心」のままで、後世の人に委ねたら良いのではないのでしょうか。

北風さんの書き込みは、なんという意地の悪さでしょうか。

**真面目に申しますが Re: おおきな前進。** 投稿者：北風 投稿日：2006年11月21日(火)10時42分1秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

>  
>北風さんの書き込みは、なんという意地の悪さでしょうか。

そういうほうにもって行きますかね。言うなら「辛辣」とでも言ってほしいわの。一つ一つ確認しながらステップを上るべきだと申し上げているだけ。

東條の名前の同定のときと同じ態度をしているに過ぎません。  
「学者」ならご理解いただけると思います。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fcluster.web.infoseek.co.jp%2FFjiken%2Findex.html>

Re: おおきな前進。 投稿者：田中 裕 投稿日：2006年11月21日(火)17時39分14秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

> 田中さん、  
> 「ラゲ訳の新約聖書」を解説頂きありがとうございました。とても腑に落ちて今までの疑問が解けて行くように思います。

こちらこそ。しゅうさんが問題を提起して下さらなかつたならば分からないままであった多くのことが、御陰様で理解できるようになりました。

ところで、次の「黙示録」の言葉を読んで下さい。「訪問者」の冒頭の引用がどんな文脈で出てくるかが分かるでしょう。（ラゲ訳「黙示録」3:15-20）

15 われ汝の業を知れり、すなわち汝は冷ややかなるにもあらず熱きにもあざざるなり。

16 むしろ冷やかに、あるいは熱くあらばや。  
されど汝は冷ややかに熱くもあらずして、ぬるきがゆえに、われは汝を口より吐き出さんとす。

17 けだし、汝自ら、われは富めり、豊かにして乏しきところなしと言ひつつ、その實は不幸にして、  
あわれむべく、かつ貧しく、かつ盲しひにして、かつ裸なることを知らざるなり。

19 われはわが愛する人々を責め、かつこらすなり。されば奮発して改心せよ。

20 見よ、我門前に立ちて敲（たた）く、わが声を聞いてわれに門を開く人あらば、われその内に入りて彼と晚餐（ばんさん）を共にし、彼も亦われと共にすべし。

第一九節は、新共同訳では「わたしは愛する者を皆、叱ったり、鍛えたりする。だから、熱心に努めよ。悔い改めよ。」となっています。この「悔い改め」が「メタノイア」で、ラゲ訳で「改心」と訳されている。これを見れば、東條が、「訪問者」と同じ時期に書かれたと思われる遺稿に、「癩者の改心」と題するのは自然です。

第二〇節が「訪問者」の第一部「怯懦の子」の冒頭で引用されています。「怯懦の子」という表現は、黙示録3-16に呼応するでしょう。そこでは、なまぬるい信仰（熱くも冷たくもない信仰）をもつものを戒める言葉が書かれています。また、この詩の語り手は、「われ、何をもておん身に謝せむ わが偽善なる書も、怯懦の椅子も 凡て炉に投げ入れむ わが父よ、いざ寛ぎて、暖を取りませ」といって父を迎えますが、「炉に投げ入れる」という決断は、黙示録の言葉に対する応答として読めるでしょう。

「訪問者」と「癩者の改心」という二つの遺稿が、ラゲ訳の「黙示録」を通して深く結ばれていることに気づいたこと、これが私にとっては大きな出来事でした。今では、私は、「訪問者」だけでなく、「聲」誌に寄せた東條の手記「子羊日記」「柿の木」等一もまた、「終末の時」を生きた東條歌一自身の「黙示」として読んでいます。それにしても、あれほどの肉体的苦痛に苦しんでいたにも拘わらず、東條は何と静謐な世界を伝えてくれたことでしょうか。そこにあるのは恐怖ではなく希望であり、「終末の時」を先取りしつつ、それを平常心で受けとめています。

ところで、先日「聲」の戦後のバックナンバーを整理しているときに、光岡良二さんが書いた「歸正記」を見出しました。これは、「いのちの火影」の最後に書かれた御自身の回想記と共に、貴重な文献だと思いました。しゅうさんはもうすでにお読みになったかも知れませんが、この文章は、敗戦後の日本社会の混乱の中で、御自身も「精神的な廃墟」のうちにあった光岡さんが、なぜカトリック教会に出逢って「歸正」したか、その間の事情が率直に書かれています。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp/2Feigenwille%2F>

大きな前進に拍手！ 投稿者：真奈 投稿日：2006年11月22日(水)16時12分52秒

[返信](#)・[引用](#)

お久しぶりです。  
しゅうさんの問題提起にはじまったこの間の議論、ケータイでなく大きな画面でやっと読み終わりとても勉強になりました。

まず、東條歌一のこの文章は、渡辺清二郎さんが「いずみ」に掲載されたのが、昭和28年の12月とのこと。この年は今回のコミセン展示のテーマでもあった予防法改悪に抗して「人間回復をめざして」立ち上がった闘いの年であり、渡辺清二郎さんは全患協の議長として中心的に関わってこられたけれども、新しい予防法が制定され施行という結果となりました。この闘いの敗北への思いからすると、この文章は東條の文章であるとともに、渡辺氏の当時の社会的現実への「黙示録」の提示としても意義があったのでは、と思いました。

心細い感想文みたいなものですが、読み終わっての疑問点がいくつか、初歩的で前提的なことなど書いてみます。

## ①「回心」と「改心」

最初、私はこれは全く次元の異なる語と思いました。

「回心」は松本馨さんと言われるような意味、旧き自己に死んで新しくされると捉え、そこには決定的な断絶と飛躍があると思ひ、それに比べ「改心」は日常の延長にあって日々の悔い改めというように考えておりました。

カトリックでの「改心」は「回心」を含むとして、改心（回心）とするというのでいいのだろうか…といま少し納得がいきません。

「改心戻し」の用語があることを初めて知りましたが、ザビエルなどキリシタン布教の初期から「改心」の語が用いられていたのでしょうか？「回心」の意味で「改心」がこの当時からあったのかどうか…

キリスト教における「回心」とは、無教会派キリスト者においてより強い体験として言えるものでしょうか？（内村の場合はコンボルション）そうであるならば、それは何故？

## ②東條耿一と北條民雄

東條が信仰に深く入っていったのは、北條の死後・昭和13年頃ということ、昭和13年の項に（この年は北條の遺品の整理や、北條への批判で環境の変化があった）とあります。

・東條は北條の何をどう批判しているのでしょうか？

・野上寛次さんが北條の絶望を救うものは信仰を於いて他になかっただろう、と仰ったとあります。その根拠は何でしょう？

・東條は「草平庵雑筆」のなかで「…唯物の念を棄たし、人は始めて神を知り、自己の無力を意識する時信仰が生れる」と書いています。

東條の文学活動は、昭和9～17年と10年足らずですが、北條との交流のあった時期を中期として初期詩篇の時代、と晩年の散文の時代というように区分されるかと思いますが、北條を通じてのマルキシズム理解の特異性といったものがあるのでしょうか？

この時代は昭和史のもっとも悲劇的な痛ましい時代、近代詩崩壊の過程でもあったと思ひます。らいとの闘いから見えるもの、この時代の現実に迫ることは私たちの今日的課題でもあると思ひます。

## 追伸

田中さん、天理大図書館にはじめていらしたとのこと。

私も一度行ってみたいと思っておりますが、紹介者なしでは駄目だそうですね。新宿に分室があると聞きました。

先日、埼玉の連句会での講演は「蕪村の謎解き」、蕉風復興運動における蕪村の評価をテーマとしていましたが、ここで、天理大発行の書誌「ビブリア」126号に掲載の「『安永三年蕪村春帖』の位置―挿絵の解釈をふまえて―」（田中道雄・佐賀大名誉教授）という面白い資料をいただけてきました。

これは孤本であったものを早稲田大の雲英（きら）末雄氏が平成6年に発見、表紙がなかったので『春興帖』と名付けたもので、蕪村一門の発句への付句の代わりに、蕪村が挿絵を書いたもの。その解釈のなかから、蕪村を発見した子規が「写生」を強調するのに対し、芭蕉初期の『虚栗』『冬の日』の俳風を支持し、趣向に重点を置いた上での景情一致と平明性の追求をめざした…といった要旨の講演でした。

Re: **大きな前進に拍手!** 投稿者: [田中 裕](#) 投稿日: 2006年11月22日(水)22時52分28秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

真奈さん 投稿有り難うございます。

## &gt; ①「回心」と「改心」

> 最初、私はこれは全く次元の異なる語と思いました。

> 「回心」は松本馨さんと言われるような意味、旧き自己に死んで新しくされると捉え、そこには決定的な断絶と飛躍があると思ひ、それに比べ「改心」は日常の延長にあって日々の悔い改めというように考えておりました。

私も全くそのように理解していましたが、私が自分の考えを述べるときには、やはりそういう形で用語を使い分けるつもりです。それが現代に於ける語の用法にも基本的に一致すると言うことがわかりましたので。「癡者の改心」という表現は、現在のそういう用法を基準にすれば異様な響きがあるので、その理由をこれまで探索してきたわけです。

しかし、用語の多義性にたいする配慮は大切ですね。今回は、そのことを教えられました。如何なる文脈で言葉が使用されているか、歴史的な様々な伝承の中で成立した言葉の重層的な意味の諸相を分析するという問題がありますので、これを機会に、そういう問題を、もういちど整理しておきたいと思ひます。

&gt;

> カトリックでの「改心」は「回心」を含むとして、改心（回心）とするというのでいいのだろうか…といま少し納得がいきません。

表記の問題と概念規定の問題は区別した方がよいですね。  
東條の遺稿の表題は、「癩者の改心」として、括弧なしで表記し、注釈や解釈などで、その独特な意味に触れるというのが妥当でしょう。

東條の遺稿に出てくる「改心」という用語は、ラゲ訳新約聖書の「メタノイア」の翻訳に由来するということ、東條耿一の場合は、それは独自の意味を持ち、黙示録の終末論的な意識の中で使われているということ、このことが今回、東條が読んだことが確実な文献を調べることによって、明らかになってきました。

メタノイアを「改心」と訳す事例は、ラゲ訳の特徴であって、現在のカトリック教会ではそのようには訳しません。（フランススコ会訳、バルバロ訳、典礼訳、みな「悔い改め」と訳しません）

> 「改心戻し」の用語があることを初めて知りましたが、ザビエルなどキリシタン布教の初期から「改心」の語が用いられていたのでしょうか？「回心」の意味で「改心」がこの当時からあったのかどうか…

「改心戻し」というのは、明治初めの「隠れ切支丹の詮議」という文脈で出てきますが、これは「邪宗に染まった心を入れ替えさせる」という意味ではないでしょうか。たとえば <http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fwww.mrr.jp%2F%7Ejif9hjs%2Fkiku.htm> に次のような用例がありますね。

真宗僧侶が隠れ切支丹を教諭改心させることで、  
当時排仏機運が高まりつつあるなか、  
真宗教団が仏教の失地回復に絶好の機会と考えたことと、  
富山藩の強力な改心方針が一致したからだろう。

改心の一例をあげれば、  
18名の僧侶が12歳の少女・ふさを取り囲み、説諭を試みたが、  
「仏様に参るくらいなら富山に来ません！」と断言された。

面子を潰した僧侶たちは、さらに人数を増やして、  
「改心しろ！」と責めたがふさは動じなかった。

教諭で効果がないとみた僧侶たちは、  
鉄棒を振るってふさの周りを激しく叩きながら改心を迫った。  
あまりの恐ろしさにふさは「改心します」といって慟哭したという。

この物語伝承では、「改心せよ」と迫っているのは隠れキリシタンを詮議している僧侶の方です。その意味は、「邪宗を捨てて、心を入れ替えさせる」ということ。「改心させて、（邪宗から）引き戻す」というのが「改心戻し」の意味でしょう。隠れ切支丹は、父祖の時代からの信仰を守っていたわけで、別に「改心」してキリスト者になったわけではないということを考えるべきです。つまり、改心した者をもとに戻すという意味ではない。

したがって、明治初期の隠れ切支丹弾圧の時に「改心戻し」という用語が使用されたからと言って、それは、キリシタン布教の頃に、宣教師が「改心」の語を用いたということの証拠にはなりません。切支丹時代の宣教の用語についてはさらによく当時の文献を調べる必要があるでしょう。

また、この用法と、ラゲ訳新約聖書の「改心」の用法とは内容において異なるということに注意すべきです。

切支丹を「ころばせる」という意味での「改心」は、「改宗」を意味しますが、ラゲ訳新約聖書の「改心」は、異教徒を改宗させると言うよりは、むしろユダヤ教徒ないしキリスト教徒への「悔い改め」の宣教です。黙示録の該当箇所では、むしろキリスト者こそ、名目上の信者にすぎないのではないのかどうか、自己の心を深く吟味し、「熱心に」「悔い改めよ」と言っているのであり、そういう文脈で東條は「改心」と言っているのです。

東條が使っている「改心」という言葉には、このような独自の意味があるので、あくまでもラゲ訳黙示録を背景に於いて、理解すべきものだと思います。

&gt;

> キリシタンにおける「回心」とは、無教会派キリスト者においてより強い体験として言えるものでしょうか？（内村の場合はコンボルション）そうであるならば、それは何故？

&gt;

これはまた機会を改めて書きたいと思いますが、「回心」がもともと浄土真宗の用語であったことを考えると、カトリックよりはプロテスタントで好まれた用語だと言うことは言えるのではないのでしょうか。そして、外部に現れた形や制度よりも「信仰のみ」の立場を強調すればするほど、信仰は、信じるものの心の問題であり、個人と絶対者との関係を転回させること、つ

まり「回心」の問題となるでしょう。

> ・東條は「草平庵雑筆」のなかで「…唯物の念を棄た時、人は始めて神を知り、自己の無力を意識する時信仰が生れる」と書いています。

> 東條の文学活動は、昭和9～17年と10年足らずですが、北條との交流のあった時期を中期として初期詩篇の時代、と晩年の散文の時代というように区分されるかと思いますが、北條を通じてのマルキシズム理解の特異性といったものがあるのでしょうか？

これについてはあまりよく分かりません。発病する前には、北條は当時の一青年としてデモに参加しましたが、結局のところ、北條が共感したのはマルクシズムのような集団主義ではなく、シュティルナーのようなニヒリストでありかつ個人を絶対視する思想家であったようです。東條の場合も、光岡良二によれば、北條とそういう心情を共有していたようです。しかし、そういう近代思想は、自己自身の死の問題を解決してくれない。北條の場合も、東條の場合も、やがて失明して病苦に苦しみながら死ぬことが運命づけられていた以上、そういうイデオロギーでは救われなかったということでしょう。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**真奈さんが提起された問題の一つについて** 投稿者：[旅人](#) 投稿日：2006年11月23日(木)12時48分

[返信](#)・[引用](#)

35秒

真奈さんが提起された、「キリスト教における「回心」とは、無教会派キリスト者においてより強い体験と言えるものでしょうか？（内村の場合はコンボルジョン）そうであるならば、それは何故？」という問題についての私の意見など：

「回心」の体験の「強さ」はかなり主観的なものであるし、言ってみれば、キリスト教を受け入れる前にどれほど強くキリスト教の受容に抵抗を示したかということを示しているように思います。

無教会が「回心」を強調するとしたら、それは儀式を取っ払ったことと表裏一体のことだと思えます。つまり水の洗礼をしない代わりに、自分に死ぬということを精神的に受け止めることだと思えます。換言すれば、患難を通して心に火の洗礼を受けるということですね。具体的には、私が影響を受けた藤田若雄先生からは、職業生活で出世を諦める事、職場を超えて誓約集団を作って話し合い、人権擁護のために戦うことなどを求められましたが、とても実践できず、自分の意志の弱さ、自分の信仰が取るに足りないものを知り、ただ十字架に示された神の愛に縋るのみということになりました。恥ずかしながら、こんなところです。

**教えてください。** 投稿者：[北風](#) 投稿日：2006年11月24日(金)09時28分23秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

おいらなりに整理しておきます。まず、現代において「改心」と「回心」の語義は既に定着しているのであって、はじめから、見解に相違はない。

しかし、歴史的に見ると「回心」と「改心」は明確に区別して使われていなかった。おいらは、NDLのデータベースの検索結果、内村が言った「改心では意を尽くさないからコンボルジョン」と「改心戻し」の例、渡辺善太の「回心」の用法を例に挙げた。（田中さんの「回心戻し」の解釈は間違い）

その結果、「癩者の改心」は、原文のままとし、解説などで触れるのがいいと、提案申し上げた。田中さんが、回り道の挙句、同じ結論に達したのは御慶であります。

で、その過程ででてきたいくつかの疑問についてお教をを請いたい。

1) 「隠れ切支丹は、父祖の時代からの信仰を守っていたわけで、別に「改心」してキリスト者になったわけではないということを考えるべきです」とおっしゃるが、改心あるいは回心は、信仰の発展・深化によって起こるものであるならば（内村は三回体験している）、父祖の代からのあるいはクリスチャンホームの信徒には起こりえないものなのか。

2) 門脇さんの論文を巡って、ダビデの改心は「倫理的な改心」であって、「信仰的な回心」と区別されるべきだとの説明があったが、今でも維持されるのか？ また、同じような放縦な生活からの「回心」をしたアウグスチヌスの場合も「改心」が適当なのか。違ふとすれば二人を分けるのものは何か？

3) 藤田若雄に示された三つの実践が不可能なので、「ただ十字架に示された神の愛に縋る」というが、信仰と倫理の関係では「ただ十字架に示された神の愛に縋る」信仰の結果、困難な実践が可能となると思うのですが。

また、このことと、田中さんの言う「無教会のカトリック」の関係如何？

4) 「東條が使っている「改心」という言葉には、このような独自の意味があるので、あくまでもラゲ黙示録を背景に於いて、理解すべきものだと思います」とおっしゃるが、東條のテキストからではなく、教会の書棚に「ラゲ訳聖書」があったことをもって、そこまで言うのは牽強附会の誇りを免れない。内容的には「信仰告白」なのであって、きわめて当時使われていた一般的な意味で「改心」でいいのではないか。

小生にとって大事な疑問です。ご見解を聞かせていただければ幸いです。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fcluster.web.infoseek.co.jp%2FFjiken%2Findex.html>

**Re: 教えてください。** 投稿者：田中 裕 投稿日：2006年11月24日(金)12時38分43秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

北風さんへ。

ご質問に答える前に、ひとつのことを確認しておきたいと思っています。

私が「回心」という言葉を使うときは、それは「改宗」とは異なる意味で使ってきました。もっとはっきり申し上げれば、

回心は改宗を含意しない

といった方が私の考えはストレートに伝わるでしょう。

英語のConversion という語もまた多義的です。その外面的・制度的な意味には、既成宗教Aから既成宗教Bへと「改宗する」という意味がたしかにある。しかし、前に引用したジェームズの定義

「Conversionとは、それまでに分裂して、自分は間違っていて下等であり不幸であると意識していた自己が、宗教的な実在をしっかりと捉えた結果、統一されて、自分は正しく優れており 幸福であると意識するようになる緩急様々の過程」

あるいは、カトリック大辞典にある定義

「神から離れて生きている人間が全人格をもって方向転換し、神に立ち返る行為」

には、そういう意味での「改宗」ということは含まれていません。これは Conversion を内面的・霊的な意味にとっています。

内村鑑三が「改心では意を尽くさないからコンボルションという」といったとき、彼は Conversion のもつ内面的・霊的な意味を念頭においていたと思う。「余はいかにしてキリスト信徒となりしか」という書物は、「異教徒である私が、いかに改宗したか」ということを述べているようにみえますが、実際はそうではなくて、「私はいかにして、キリストと神に向かって回心したか」を主題としていると思う。

たとえば内村は、受洗後8年目に米国のアマストにいたころ、1886年6月15日の日記で、「神の霊、わが心に直接触れたまわらずば、回心などはあり得ない」と書いています。

北風さんが引用された「改心戻し」については、隠れ切支丹関係の資料にあたってさらに詳しく調べる必要がありますが、少なくとも次のことは言えるのではないのでしょうか。

私の引用した物語伝承では、隠れ切支丹を弾圧した側が、「改心せよ！」と迫っている。その場合の「改心」の意味は、「切支丹をころぼせる」こと、つまり「改宗させる」という意味です。私のように、「回心は改宗を含意しない」という立場からすると、この意味での「改心」は「回心」とは異なります。

ただし、「回心戻し」の「戻し」が何を意味するかについて言えば、ここには、もう一つの解釈の可能性があることに気づきました。隠れ切支丹が、毎年恒例になっている「踏み絵」を踏んだ後で、告解（悔い改め）の秘蹟を（司祭抜きで）ひそかにおこなって、神にゆるしを乞うていたことが知られています。そういう場合に、「悔い改める」という意味で、隠れ切支丹のほうもまた、「改心」という語を使っていた可能性はありますね。そういうことを示す資料があれば教えて下さい。

その場合は、「改心戻し」は、隠れ切支丹に「改心の（悔い改めて神の赦しを乞う）儀式」があることを知っていた宗門改めの役人が、それを帳消しにしようとして改宗を迫ったという意味になるでしょう。

私は、「日本切支丹宗門史」（レオン・パジェス）などの文書を調べてみましたが、切支丹布教の時代には、「改心」という日本語が、「悔い改め」の意味で使われた形跡はありませんでした。したがって、「隠れ切支丹」側が「悔い改め」の意味で「改心」という語を使ったこと

が証拠立てられるならば、「改心」を「悔い改め」の意味に使ったラゲ譯新約聖書の先例になります。

> 1) 「隠れ切支丹は、父祖の時代からの信仰を守っていたわけで、別に「改心」してキリスト者になったわけではないということを考えるべきです」とおっしゃるが、改心あるいは回心は、信仰の発展・深化によって起こるものであるならば（内村は三回体験している）、父祖の代からあるいはクリスチャンホームの信徒には起こりえないものなのか。

私の文章は、幕末の隠れ切支丹は「改宗」して切支丹になったわけでは無いという、そういう意味です。これにたいして、「悔い改め」による「回心」は、父祖の代からのキリスト者であれ、成人洗礼でクリスチャンになった人であれ、起こりうるものであるし、むしろジェームズが言うように、全生涯にわたるプロセスという側面もあると思う。

> 2) 門脇さんの論文を巡って、ダビデの改心は、倫理的な改心であって、信仰的な回心と区別されるべきだとの説明があったが、今で維持されるのか？ また、同じような放縦な生活からの回心をしたアウグスチヌスの場合も「改心」が適当なのか。

前の私の投稿では用語の多義性に対する配慮をもっとすべきでした。ダビデの場合は、悔い改め（メタノイア）という意味で「改心」が使われていると思う。門脇さんも、ラゲ譯の意味を受け継いでいると思う。アウグスチヌスの場合も、基本はメタノイアです。

「メタノイアには、悔い改めと回心の両方の意味が含まれ、改宗の意味は含まれない」というのが私の立場です。

門脇さんは、メタノイアの意味で「改心」を使ったのだと思うので、それは信仰的な回心へと展開するものだと思います。アウグスチヌスの場合も根本の所では同じです。彼の場合は、マニ教から改宗したという側面もありますが、実際は、まことの信仰をもとめて、自己の魂と神との対話の中で「回心」した経緯を、告白録のなかで書いているわけですから。

>

> 3) 藤田若雄に示された三つの実践が不可能なので、「ただ十字架に示された神の愛に縋る」というが、信仰と倫理の関係では「ただ十字架に示された神の愛に縋る」信仰の結果、困難な実践が可能となると思うのですが。

> また、このことと、田中さんの言う「無教会のカトリック」の関係如何？

>

上の質問については、旅人さんにお答え願うとして、私の立場は、「無教会のカトリック」というよりは、むしろ「無教会こそ真のカトリックである」というものです。これについては、稿を改めてお話ししたいと思います。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**長すぎる** 投稿者：北風 投稿日：2006年11月24日(金)13時15分4秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

田中さんの「確認事項」は、田中さんに限らず「現在」においては字義として定着しています。したがって、小生もそのように理解しています。

「改心戻し」については、インターネットでは一次資料のチェックは難しいとしても、行政だか観光協会のサイトを引用しなくてももう少し（たとえばカソリック教会の）ましな例があります。また、小生は幕末から明治初年の「改心戻し」の語をもって、キリシタンの布教のはじめに其の語が使われたとは言っていない。しかし、キリシタン版などの辞書をチェックすればはっきりするでしょう。

3) は田中さんの言葉への質問ですから、旅人さんが応えるのは筋違いでしょう。

あと、一番大事なのは4) ですが、これへのお答えがないのが残念です。

というわけで、小生のお伺いしたかったことのお答えは得られませんでした。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fcluster.web.infoseek.co.jp%2FFjiken%2Findex.html>

**補足** 投稿者：田中 裕 投稿日：2006年11月24日(金)13時42分7秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

北風さんは、質問4を後から付け加えたのではありませんか。私がレスするときには無かったです。これから用事ででかけますので、質問3（これは旅人さんへの質問かと思いました）とと

もに、あとから詳しく答えましょう。長い投稿で恐縮ですが、私の投稿をよく読まれてから応答されることを希望します。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**わかっていない。** 投稿者：北風 投稿日：2006年11月24日(金)13時59分29秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

用語は、福音理解あるいはキリスト教理解の深化、発展とともにはじめは大雑把に、次第に厳密に使い分けられてきたと考えるべきでしょう。  
したがって、ある言葉の現在の理解や語釈と、過去のある言葉がまったく同じ意味を持つなどということはありえないし、対応させようとするのはナンセンス。  
また訳語も同じ。日本人は英語やギリシャ語で考えないし、信仰を理解するわけではない。

〉私の投稿をよく読まれてから応答されることを希望します。

これは小生の毒解力の不足のご指摘だと思うけれど、心配御無用です。  
詳しくなくていいですから、単刀直入・簡潔にご教示ください。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fcluster.web.infoseek.co.jp%2Ffjiken%2Findex.html>

**補足 Re: 教えてください。** 投稿者：田中 裕 投稿日：2006年11月24日(金)19時16分8秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

〉北風さんへ。

〉〉3) 藤田若雄に示された三つの実践が不可能なので、「ただ十字架に示された神の愛に絶える」というが、信仰と倫理の関係では「ただ十字架に示された神の愛に絶える」信仰の結果、困難な実践が可能となると思うのですが。

〉〉また、このことと、田中さんの言う「無教会のカトリック」の関係如何？

この文を書かれたのは旅人さんですので、答えは差し控えました。敢えて私の意見を申し上げれば、「信仰によって義とされる」というときの信仰そのものが自分の内から出てくるものではなく、賜るものだという点ではプロテスタントもカトリックも差別はないと思っています。ただ、私は、ヤコブ書の「霊無き肉体の死せるが如く、行い無き信仰もまた死せるなり」という言葉もまた真実であると思っています。そしてパウロとヤコブの発言は決して矛盾しない。「義人は信仰によって生きる」ので、「信即生」であり、その「生」からキリスト者としての「行」も出てくると思う。

〉〉4) 「東條が使っている「改心」という言葉には、このような独自の意味があるので、あくまでもラゲ訳黙示録を背景に於いて、理解すべきものだと思います」とおっしゃるが、東條のテキストからではなく、教会の書棚に「ラゲ訳聖書」があったことをもって、そこまで言うのは牽強附会の謗りを免れない。内容的には「信仰告白」なのであって、きわめて当時使われていた一般的な意味で「改心」でいいのではないか。

「訪問者」と「癩者の改心」という東條のテキストそのものが、黙示録の世界と深く関わりを持っているというのが私の解釈です。そして「熱心に努めよ、悔い改めよ」を「奮発して改心せよ」と訳すのはラゲ譯に独自のものです。(他の聖書にそのような譯あるのを私はまだ見出していません)

当時一般に使われていた「改心」の意味でよいというけれども、その意味は私には曖昧です。幕末や明治には、キリスト教徒を迫害するものが棄教ないし改宗を迫って「改心せよ！」といったけれども、東條のテキストには、「改宗」の含意はありません。

東條のテキストを私は黙示録の該当テキストに対する応答と読みました。

それは黙示録によって促されたキリスト者自身の内省であり、おまえは生ぬるい信仰に生きているのではないか、名目だけの信者ではないのか、という「激しい」「悔い改め」の表現なのです。そこを見ないと、なぜ東條が自己を「怯懦の子」と言ったのかが分からなくなりますね。「我が偽善の書を焼いて」過去を悔い改めると共に、父なる神に子として感謝を捧げるというモチーフがそこで生きていきます。これは、東條の「信仰による決断」と読めるのではないのでしょうか。

「簡潔は知恵の神髄」という域にはほど遠い内容ですが、まあ、こんなところでしょうか。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**横から済みません。** 投稿者: [旅人](#) 投稿日: 2006年11月24日(金)19時56分49秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

回心の定義は、田中先生によれば、①「Conversionとは、それまでに分裂していて、自分は間違っていて下等であり不幸であると意識していた自己が、宗教的な実在をしっかりと捉えた結果、統一されて、自分は正しく優れており、幸福であると意識するようになる緩急様々の過程」、②「神から離れて生きている人間が全人格をもって方向転換し、神に立ち返る行為」ということですが、これを基に自己批判するというのは、かなり難しいような気がします。

藤田先生がその弟子たちなどにぶつけられたことは、「職場で十字架を負え」ということでした。それは、自分に本当に死んでいればできるというようなことも言われていました。そういう考えからすれば、既に自己に死んで、キリストに生きる人なら藤田先生の言われた事を実行することは充分可能であり、それができないということは、真の意味で回心ができていなかったということになると思います。

藤田先生は笑いながら、半殺しになった状態で死にきっていない者が多いと言っていたらっしゃいました。正に私などもそのような死にきいていない者の一人であったし、今でもそのこと自体はそれほど変わりがないんじゃないだろうかと思っています。

ただ、自分の職業生活を通して分かった事は、自分もまた罪人の頭であり、主イエス・キリストの十字架は私のためであるということです。この上、復活の信仰と再臨の信仰が与えられなければならないわけですが、それらの信仰を本当に与えられた時に、それがどのような実践(行為)として現われるか、それについては皆様にお教えいただければ幸いです。

回心の「定義」をどのように考えるべきかと問われれば、やはり聖書に求めるべきであると思います。具体的には、パウロの回心とはどのようなものかを整理すべきだと思います。しかし、そこから唯一の普遍的「定義」が求められるかといえば、パウロに見られるのは、一つの類型とか理念型であり、通常人には到底到達できないものではなからうかと思っています。

今回はここまでにしておきたいと思います。

**Re: 横から済みません。** 投稿者: [田中 裕](#) 投稿日: 2006年11月24日(金)20時16分29秒

[返信](#)・[引用](#)

旅人さん

投稿有り難うございました。

> 回心の定義は、田中先生によれば、①「Conversionとは、それまでに分裂していて、自分は間違っていて下等であり不幸であると意識していた自己が、宗教的な実在をしっかりと捉えた結果、統一されて、自分は正しく優れており、幸福であると意識するようになる緩急様々の過程」、②「神から離れて生きている人間が全人格をもって方向転換し、神に立ち返る行為」ということですが、これを基に自己批判するというのは、かなり難しいような気がします。

①と②の定義は、私の定義ではなく、ジェームズとカトリック大辞典にあったものです。私は、この定義は、宗教一般に通じる定義ではあるけれども、キリスト教的な意味での「回心」にはまだ十分でないと思います。キリスト教では、さらに罪の「悔い改め」ということが前提となる。つまり、メタノイアは悔い改めと回心の両方を契機として有つと思います。まえに旅人さんが言われたように、自己批判の力は自己からは出てきませんので。

> 藤田先生がその弟子たちなどにぶつけられたことは、「職場で十字架を負え」ということでした。それは、自分に本当に死んでいればできるというようなことも言われていました。そういう考えからすれば、既に自己に死んで、キリストに生きる人なら藤田先生の言われた事を実行することは充分可能であり、それができないということは、真の意味で回心ができていなかったということになると思います。

藤田先生のことは個人的に全く存じ上げないので、ご発言の真意がよく分からないのですが、「回心」したかどうかを外側から判定するというのでは、信仰そのものが律法になってしまうのではないのでしょうか。そういう点では、私は松本さんのように、「無信仰」の徹底的な自覚の方が、恩寵としての信仰をよりよく表しているように思います。

> 回心の「定義」をどのように考えるべきかと問われれば、やはり聖書に求めるべきであると思います。具体的には、パウロの回心とはどのようなものかを整理すべきだと思います。しかし、そこから唯一の普遍的「定義」が求められるかといえば、パウロに見られるのは、一つの類型とか理念型であり、通常人には到底到達できないものではなからうかと思っています。

パウロも大切な類型、ないし理念型だと思いますが、私は、「回心」の経験は、多様であるとおもいます。また、それが特定の宗教的なエリートだけのものとは思いません。また、べつに劇的な側面だけとは限らない。この場合、経験の主観的な強さではなく、回心による信仰がむけられるもの、私の主観とは独立に現存しながらも、わたし自身の主観の成立そのものを可能にしてくれるものそのものが信仰を支えてくれると思っています。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

---

**ヤコブの言葉は律法的ではないでしょうか。** 投稿者：旅人 投稿日：2006年11月24日(金)21時

[返信・引用](#)

03分10秒

田中先生は、『私は、ヤコブ書の「靈無き肉体の死せるが如く、行い無き信仰もまた死せるなり」という言葉もまた真実であると思っています。』と言われていますが、ヤコブのこの言葉が律法的でないとするれば、弟子たちに「十字架を負え」ということも律法的ではないように思います。

現実には、出世を目標とするれば、職場では信仰をもつことで、いろいろな不都合が生じてくるとも思います。もっとも、不都合が生じるのは、単に生きることが下手なだけかも知れません。

---

**イエスの教えと律法** 投稿者：田中 裕 投稿日：2006年11月24日(金)23時00分21秒

[返信・引用](#)

> 田中先生は、『私は、ヤコブ書の「靈無き肉体の死せるが如く、行い無き信仰もまた死せるなり」という言葉もまた真実であると思っています。』と言われていますが、ヤコブのこの言葉が律法的でないとするれば、弟子たちに「十字架を負え」ということも律法的ではないように思います。

なるほど。その通りですね。私は「靈無き肉体の死せるが如く、行い無き信仰もまた死せるなり」は古き律法ではなくて、イエスに生かされた使徒の教えだと思っています。その意味でパウロの教えと矛盾しないと言うことに尽きます。

イエスの教えには、律法を完成するという意味があると思う。そして、律法を完成するもの、つまり十字架は、もはや律法的ではありません。そこには、倫理を越えた自由があると思う。藤田先生のご発言も、そう言う文脈で言われたのなら、根柢に於いては、律法的ではありませんね。イエスの言葉とイエスの信とひとつになって生きよと言う教えですから。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

---

**信仰と行為について** 投稿者：真奈 投稿日：2006年11月25日(土)00時47分5秒

[返信・引用](#)

旅人さん

「小さき声」137号の「或る友へ」で、無教会は二つの流れを持つこと、一つは信仰のみによる義を説く純福音主義者（塚本虎二ら）と、もう一つは信仰と行為の分離を考えない、実践を重視する社会科学者を中心とするグループ（矢内原忠雄ら）であり、こうした立場に立つ側から、「敗戦の神義論」として二代目無教会の先生の戦争責任追及と告発がされた、と述べられています。

旅人さんがこの137号の校正の際、興味深い内容のメール送られていたのを思い出したのですが、次のように言われています。

《藤田若雄の問題意識としては、一つは無教会の戦争責任の所在追及であると共に、弟子は師からどのように信仰をまなぶべきかということがあったと思います。つまり、師の信仰の時代的制約をそのまま引き継ぐのではなく、批判的精神を忘れずに、真に学ぶべき事を学べということをお教えされた次第です。この批判的精神は、松本馨のそして関根正雄の神以外のものを相対化する精神と通底していると思います。》

《藤田若雄は、矢内原忠雄の弟子として、職場で十字架を負う必要を説いていました。誓約集団形成の重要性についても指摘していました。関根先生が神学の必要性を説いていたのに対し、藤田若雄は「思想としての信仰」を強調していたと理解しています。ただ、藤田若雄の方が、行動の首尾一貫性に重きを置いていたと思います。》

《「敗戦の神義論」が出たときは、無教会の人々特に自分の先生と批判された人たちから強烈な反批判がありました。ここに、先生と言う人格を通して信仰を学ぶ場合の問題を感じた次第です。》

私には、「職場で十字架を負う」ということを、即「出世を求めない」こととして踏絵のように考え、ここに回心の契機があるというのはどうも理解できないのですが…

---

**真奈さんへ** 投稿者：旅人 投稿日：2006年11月25日(土)07時55分49秒

[返信・引用](#)

藤田先生の思想・信仰をどれだけ私が理解しているかについては、自信がありません。先ずそのことをお断りしておく必要があるように思います。

藤田若雄は、矢内原忠雄が日本の政治という大状況の中で十字架を負ったこと、すなわち非戦論を公にする(=信仰告白)ことにより政府等から弾圧を受ける(=十字架を負う)ことで、キ

リスト者としての責任を果したと見ていたと思います。そして、戦後一応平和が保たれている中で、また小さな器である自分としては、キリスト者としてどのように生きるべきかということを考えていたと思います。

そして、職場で十字架を負えと言われた者たちは、いわゆるエリートたちであったわけで、藤田にしてみれば、「回心」よりは社会思想史でいう「転向」を問題としていたと理解しています。つまり藤田は、学生時代にはキリスト教の信仰をもっている、職場問題、結婚問題で躓き、信仰を失ってしまう例を数多く知っていたので、そのようなことにならないように注意すると共に、自分の職業生活を通して信仰告白することにより福音を宣べ伝えることを、卒業して行く学生たちに、目標として与えたのだと思います。

しかし、私の場合には、いわば先生から示された言葉が律法として機能し、結果的に自分の罪を認める契機(=回心)となったわけです。

これは、今から考えれば、藤田若雄の場合、戦時中の学生時代に矢内原忠雄の家庭集会で信仰を叩き込まれて、卒業時には筋金入りの信仰の戦士になっていたわけですが、私の場合には、大学卒業時には、非常に観念的な信仰しかもっていなかったという大きな違いがあったと思います。

踏絵については、それが信仰告白の一つであるとは思いますが、しかし、聖像を認めないプロテスタントが江戸時代に踏絵を求められた場合、その踏絵をどう受け取って、行動するかは考えてみる価値があるでしょう。

ヤコブ書は、ルターはワラの書と言ったようですが、内村はそれを再評価しています。その点ではカトリックに近いのでしょうか。

**間違えました。** 投稿者：北風 投稿日：2006年11月25日(土)11時12分27秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

藤田若雄の話は、小生の誤読でした。というか書いたのが「旅人」というのを見落とししました。失礼を詫びます。

4)については、丁寧なお答えにもかかわらず(というより、丁寧に過ぎて)牽強付会の印象はぬぐえません。

一つ指摘しておけば。

> 当時一般に使われていた「改心」の意味でよいというけれども、その意味は私には曖昧です。幕末や明治には、キリスト教徒を迫害するものが棄教ないし改宗を迫って「改心せよ！」といったけれども、東條のテキストには、「改宗」の含意はありません。

こんなことは誰も言っていないのに、そのように「要約」して、それに反論するのは、昔、読売新聞の方がしばしばおやりになったことです。

用語はキリスト教の受容や理解の深化によって、次第に厳密なものになるということの、一例としてあげたものであって、誰も東條の「改心」の意味だなどと言っていない。しかも、観光サイトあたりの用例を間違って解釈している。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fcluster.web.infoseek.co.jp%2FFjiken%2Findex.html>

**Re: 間違えました。** 投稿者：田中 裕 投稿日：2006年11月25日(土)13時35分32秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

北風さん 投稿有り難うございました。

> 藤田若雄の話は、小生の誤読でした。というか書いたのが「旅人」というのを見落とししました。  
> 失礼を詫びます。

いえいえ、私の投稿が長すぎたせいもあります。今後は簡潔を旨としましょう。

>

> 4)については、丁寧なお答えにもかかわらず(というより、丁寧に過ぎて)牽強付会の印象はぬぐえません。

これは「訪問者」と「癩者の改心」という東條がほぼ同じ時期に書いた二つの遺稿をどう解釈するかという問題です。私にとって、この読み方が最も納得がいったと言うことです。

> 一つ指摘しておけば。

>

> > 当時一般に使われていた「改心」の意味でよいというけれども、その意味は私には曖昧です。幕末や明治には、キリスト教徒を迫害するものが棄教ないし改宗を迫って「改心せよ！」

といったけれども、東條のテキストには、「改宗」の含意はありません。

>  
> こんなことは誰も言っていないのに、そのように「要約」して、それに反論するのは、昔、読売新聞の方がしばしばおやりになったことです。

「読売新聞の方」... 古い話ですね（笑）

「回心」と「改心」という二つの語が区別されずに使われた事例として、北風さんは「改心戻し」の例をひかれたのでしょうか？ そのとき、北風さんは「回心」を「改宗」の意味に使っておられたと記憶しています。

私の指摘は、幕末の「改心戻し」の用例を見る限り、「改心」は確かに「改宗」の意味で使われていたが、「回心」はそうではない、ということです。したがって、「回心」と「改心」は区別して使われていたということです。なぜならば、切支丹を説諭改心させようとしていた浄土宗の僧侶達が、「回心」と「改心」を区別せずに使うと言うことは有り得ないと思ったのです。

しかし、こういう細かい論点を指摘するのは、何だか「読売新聞の方」みたいですね。

> 用語はキリスト教の受容や理解の深化によって、次第に厳密なものになるということの、一例としてあげたものであって、誰も東條の「改心」の意味だなどと言っていない。しかも、観光サイトあたりの用例を間違えて解釈している。

もっときちんとした文献に当たれというご指摘は有り難く拝聴しました。感謝しています。僕には、明治初めの切支丹弾圧が如何なるものであったかについて歴史的知識が欠けていました。おかげで蒙を開かれた気がします。

姉崎正治の「切支丹禁制の終末」（国書刊行会）に貴重な資料がありました。

それによると、改心戻し＝改宗戻し ですね。

当時の役人は、入牢した信徒が、ひとこと「改心します」といえば釈放するつもりだったらしい。ところが、安政の条約以後、浦上に来たフランス人司祭のもとに、公然と切支丹信仰を表明した信徒達は決して「改心します」と言わなかった。そのために、幕末の時以上にひどい迫害にあったということです。その場合の「改心」は、やはり弾圧する側の用語でした。

ただ、私も間違いを犯していました。一度、詮議の役人の命令通りに、「改心」し、棄教したと思われた信徒が、後で、「改心戻し」を申し出たという文献がありました。考えてみれば、それが、「改心戻し」の自然な読み方ですね。つまり、「改心戻し」とは信者が、棄教を取り消す発言だったわけ。

また、切支丹布教時代の文献も見てみましたが、「悔い改め」は「後悔」と訳されている例はありましたが「改心」という日本語は見あたらなかったことも付記しておきます。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**信仰について北條と議論していたのでは？** 投稿者：しゅう 投稿日：2006年11月25日(土)21時

[返信・引用](#)

55分32秒

#### 霧の夜の風景に詠める歌

向ひの山脈に霧が湧き それがこちらへ移つて来る  
 月は今中空 雲は一ひら風もない  
 足下に辛夷の一本 その白い花かげを透いて  
 寮舎は遠く山峡に眠つてゐる  
 激しい議論の後 友は去り 私は暫くをこの美しい風景に見入る  
 君は口の酸っぱくなるほど人間を説いた 偉いと思ふ しかし  
 君はあの病床の夥しい肉塊を知つて得よう さうして自己を  
 生き乍ら腐つて行く亡んで行く肉体に  
 何の精神 何の立派な統一性があらう  
 否定し給へ 否定する事だ 否定し去つた後にこそ  
 新しく生れる血の滾りを覚え  
 肉の孕むのを知るだらう ああしかし・・・  
 霧がこちらの山を登つて来る 寮の灯はもう見えない  
 夜は三更 この風景の斜面に佇つて  
 私は心にはげしく立ちすくむ

（昭和十二年「山桜」六月号）

北條の日記には東條と信仰について議論をしたと言うことは確か書かれていなかったと思いますが、この東條耿一の詩は、北條と信仰について議論をした詩ではないでしょうか？  
渡辺立子さんが、北條民雄の亡くなった後東條がカトリックに帰依したと書いているので、そのように、思ってきましたけれど、北條民雄との間で、かなり議論をしていたのではないかと思います。

君は口の酸つぱくなるほど人間を説いた 偉いと思ふ

何の精神 何の立派な統一性があらう  
否定し給へ 否定する事だ 否定し去つた後にこそ  
新しく生れる血の滾りを覚え

この詩は、ふたりの生々しいやり取りが聞こえてくるように思います。  
東條の日記が残っていれば、そのあたりの信仰の軌跡、「回心」を重ねる様子も知ることが出来たろうと思います。残念ですねー

**Re: 間違えました。** 投稿者：北風 投稿日：2006年11月26日(日)11時17分8秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

>  
> 「読売新聞の方」... 古い話ですね（笑）

僕が「批判」申し上げているのは、どちらかといえば「独断的」な田中さんの「ビヘイビア」の問題であって、人間の行動がそんなにすんなり変わらない以上、古くて新しい話になります。

> しかし、こういう細かい論点を指摘するのは、何だか「読売新聞の方」みたいですね。

神は細部に宿りますから。  
以下略。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fcluster.web.infoseek.co.jp%2FFjiken%2Findex.html>

**聞く耳がなければ言っても無駄かもしれませんが。** 投稿者：北風 投稿日：2006年11月26日

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

(日)14時01分47秒

「改心戻し」というのは、踏み絵を踏んで棄教したキリシタンが、再びキリスト教に立ち返ることを言います。

田中さんのおっしゃることを肯定するためには、誰かの特殊な用語ではな（渡辺善太が使っていたことを僕は指摘しています）、同時期に普通にキリスト教の世界で「改心」と「回心」が別な概念として使われていたという証明が要るのです。

僕のいっているのは、初期には現在言う「回心」も含め「改心」が使われていたが、キリスト教の受容・理解の進化によって「改心」では意を尽くさない（内村の例・渡辺は早くから「回心」を使っていた）ということで、仏教の「回心」を借りて独自の意味づけをしていった。しかし、一般に浸透するには一定の時間を要したのではないか。そして現在においては、二つは明確に使い分けされている、ということです。

現在使われている「回心」と「改心」の概念規定などいくらしても、上記の問題は片付かないのです。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fcluster.web.infoseek.co.jp%2FFjiken%2Findex.html>

**私の投稿をきちんと読まれましたか？ Re: 聞く耳がなければ言っても無駄かもしれ**

[返信](#)・[引用](#)

**ませんが。** 投稿者：田中 裕 投稿日：2006年11月26日(日)14時38分12秒

私はきちんと、姉崎正治氏の著書をしらべたうえで、以前の投稿を訂正して

「一度、詮議の役人の命令通りに、「改心」し、棄教したと思われた信徒が、後で、「改心戻し」を申し出たという文献がありました。考えてみれば、それが、「改心戻し」の自然な読み方ですね。つまり、「改心戻し」とは信者が、棄教を取り消す発言だったわけ。

と書きましたが、この部分を読まれましたか？

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**堂々巡りの議論は避けましょう** 投稿者：[田中 裕](#) 投稿日：2006年11月26日(日)14時48分13秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

> 田中さんのおっしゃることを肯定するためには、誰かの特殊な用語ではな（渡辺善太が使っていたことを僕は指摘しています）、同時期に普通にキリスト教の世界で「改心」と「回心」が別な概念として使われていたという証明が要るのです。現在使われている「回心」と「改心」の概念規定などいくらしても、上記の問題は片付かないのです。

これでは、なんのために私が昭和初期のカトリックの文献や、愛徳会の信徒が読んだことが確実な文献を精査したか、分からなくなるでしょう。

さらにいえば、同時期というだけでは不十分です。もっと限定して、東條耿一や愛徳会の信者達が読んでいた文献で、「改心」という言葉がどういう意味を持っていたかを調べる必要が要。それは「悔い改め」という聖書的な意味であったということです。

私は、ラゲ譯新約聖書、岩下壮一の「信仰の遺産」「公教要理注解」などの文献にあたって調べたので、決して現在使われている用語の意味規定だけをしているわけではありません。

私にとって、用語の問題は基本的に解決しています。堂々巡りの議論をするよりは、東條耿一の作品そのものに向かいたいですね。

追伸

「なんだか「読売新聞の方」みたいですね」といったのは自省の言葉です。北風さんがそういう細かい議論をしていると言ったではありません。念のため。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**姉崎正治を引いたそのあとで。** 投稿者：[北風](#) 投稿日：2006年11月26日(日)15時31分31秒

[返信](#)・[引用](#)

> 姉崎正治の「切支丹禁制の終末」（国書刊行会）に貴重な資料がありました。

> それによると、改心戻し=改宗戻し ですね。  
> その場合の「改心」は、やはり弾圧する側の用語でした。

小生は、キリシタンに触れたときには、必ず「改心戻し」といって、一回も「改心」と単独で言っていない。

「改心戻し」は、単純な手続き上の「改宗戻し」ではないでしょう。当時に会っては命がけの信仰告白だったケースもある。

こういう、小技を使って「改心」=「改宗」と議論を進め、かつ「改心」は「弾圧側の用語だった」とする話をかえる、田中さんの「ビヘイビア」が、環と耿一の同定のときの「仮定演繹法」思い起こさせるのです。

堂々巡りだろうが是は是非は否です。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fcluster.web.infoseek.co.jp%2FFjiken%2Findex.html>

**明治初期の資料から** 投稿者：[田中 裕](#) 投稿日：2006年11月26日(日)20時44分6秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

明治初期の切支丹迫害の時期の文献を調べると、次の如き用例がある。

慶応丁卯浦上耶蘇徒囚獄名簿（記録原本）（姉崎正治氏の前掲書に収録）

- (一) 六月二三日附 改心者十六人連名
- (二) 六月より八月にいたる改心者口上書六通
- (三) 改心者五十七人連名
- .....
- (七) 改心不致分（事件初発の分）
- (八) 村預となつて後も改心せずと云い張る者（六月二十三日届け出）
- (九) 六月二十三日より十月二十六日に亘つて改心せぬもの二十人の口上書

文中、「浦上耶蘇徒」とあるのは、逮捕され入牢したキリスト者を指す。当時は信者に「改心します」と宣言させる、あるいは「改心証文」を書かせるという手段が執られていた。そして、改心せぬものは、拷問された。

#### 異宗信仰のもの改心証文

という資料もある。この場合、「異宗」とは、政府公認の宗門以外の宗派を指し、法華宗の不受施派なども含むが、とくに切支丹は「邪宗門」として厳格な取り締まりの対象となった。

こういう時代背景のもとでは、信者の「改心します」という発言は改宗を意味していた。実際、切支丹迫害の直接の契機は、安政の条約以後、浦上の外国人神父のもとで、信仰を公に表明するようになった信徒達が、仏教の葬式を拒否したことに端を発している。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**明治初期の資料から** 2 投稿者: [田中 裕](#) 投稿日: 2006年11月26日(日)22時48分42秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

迫害に耐えていた明治初期の信者が読んでいた、あるいは聴き従っていた文書。それは、聖書の「メタノイア」による信仰告白が、どのように日本語として表現されていたかを示す資料でもある。

コンチリサンの略  
とかのそき規則（又はとがおり規則）  
ミサ礼拝式  
ロザリヨ記録

このうち、最も参考になるのは最初の文献である。コンチリサンとは（懺悔・讃美）の意味である。この書は、迫害時に読まれた書物であるが、次の一文がある。

人間の御扶手（おんたすけて）にてまします御身ゼズスの御金言に「いかに人偏界を掌に握るといふとも、その身のアニマを失わば、なんの益ぞ」と宣へり。またアニマのたすかりを、いかなる財寶にも豈替んやと宣へり。されば此アニマの助かりの為に勝れたる勤めといふはコンチリサンとて真実の後悔なり。

文中、アニマとあるは、「心」「靈魂」「精神」などとも訳しうる言葉であるが、ラテン語の儘にして訳しては居ない。ゼズスはイエスで、次の引用は、「人が全世界を得たとしても靈魂を失うならばなんの益になるだろうか」であり、「身を殺し得ても靈魂を殺し得ぬものを懼れるな」と云う文脈で出る言葉である。靈魂（アニマ）の救済を第一義とし、そのためには、コンチリサンという真実の後悔をすべきことを勧めている。

この「後悔」という語が、「コンチリサンの略」で使用されている、聖書の「メタノイア」の日本語訳である。

「真実の後悔」という表現が深く印象に残りました。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2FFeigenwille%2F>

**Re: 信仰について北條と議論していたのでは?** 投稿者: [田中 裕](#) 投稿日: 2006年11月26日(日)23時54分38秒

[返信](#)・[引用](#)

しゅうさん

投稿有り難うございました。

> 霧の夜の風景に詠める歌  
>  
> 向ひの山脈に霧が湧き それがこちらへ移つて来る  
> 月は今中空 雲は一ひら風もない  
> 足下に辛夷の一本 その白い花かげを透いて  
> 寮舎は遠く山峡に眠つてゐる  
> 激しい議論の後 友は去り 私は暫くをこの美しい風景に見入る  
> 君は口の酸つばくなるほど人間を説いた 偉いと思ふ しかし  
> 君はあの病床の夥しい肉塊を知つて得よう さうして自己を

ここの、「さうして自己を」の箇所、二行後の「否定し給へ」へ続く誤植の可能性もあるかと思いましたが、何度も読んでみると、山桜のテキストの儘にして、口ごもるような言い方のままにしたほうが良いという気がしてきました。  
この点、どう思われますか？

つまり、「自己を否定したまえ」と直接続くのでは、私にはインパクトは薄く、「否定したまえ」と、自己抜きで語るテキストのほうが良いと思いました。

つまり、「さうして自己を」のあとに断絶を置く。そのほうが、彼声を直接聞くような気がする。意味の上ではすっきりはしないけれども、「自己を滅び行く肉体に求めても空しい」というようなニュアンスを感じます。

> 北條の日記には東條と信仰について議論をしたと言うことは確か書かれていなかったと思いますが、この東條歌一の詩は、北條と信仰について議論をした詩ではないでしょうか？  
> 渡辺立子さんが、北條民雄の亡くなった後東條がカトリックに帰依したと書いているので、そのように、思ってきましたけれど、北條民雄との間で、かなり議論をしていたのではないかと思います。

私もそういう印象を持ちました。なぜなら、この詩は単独で発表されているのではなく、信仰をテーマとする詩とともに掲載されていますから。そうでなければ、北條がカトリック式で葬儀をしてくれと依頼するはずがないでしょう。

<http://111.teacup.com/mejiro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2Ffeigenwille%2F>

**Re: 信仰について北條と議論していたのでは？** 投稿者：しゅう 投稿日：2006年11月27日(月)

[返信・引用](#)

09時57分10秒

> ここの、「さうして自己を」の箇所、二行後の「否定し給へ」へ続く誤植の可能性もあるかと思いましたが、何度も読んでみると、山桜のテキストの儘にして、口ごもるような言い方のままにしたほうが良いという気がしてきました。  
> この点、どう思われますか？

私も、分かりやすいのは「否定し給え」のまえに持ってきた方が分かりやすいと思いますが、こうした「口ごもる」というか、直接的でないというか、それが東條の文体だと思います。東風で紹介した「別れた後で」にもそうしたところが見られます。ここに引用しますと

別れて後に

東條歌一

日が暮れる 雑(はや)林(し)も沈む ああ日が暮れる  
私達の眩きも もう済んだ 孤りになつた私のうしろで  
ツグミが啼く ああその歌も悲しい その生命も呪はしい  
影をます その暮藍の中へ  
私もまたあの雑居寮へ 遷(かへ)らねばならんのだ  
その共同の生活(しぐさ)と謂へ  
私にはもう堪らない 取残されたこの椅子(ベンチ)も  
思へば共有の物なのだ ああ堪らない 私は行かう  
日が暮れる 私は行かう 残り少ない 私の影 影よ  
その影のやうに 私は闇の中へ 沈んで行かう  
何處までも(ああそれは不幸だらうか)しかし  
私は構はない 私は私を信じよう

(昭和十二年「山桜」八月号)

8行目の

思へば共有の物なのだ ああ堪らない 私は行かう

「ああ堪らない」と「私は行かう」の間には一呼吸があるはずだと思いますが、言葉を続けています。ほんとうは、この行の「私は行かう」は削除した方が詩の読み取りには良いと思いますが、これも東條の文体かなあを苦慮します。

>  
> つまり、「自己を否定したまえ」と直接続くのでは、私にはインパクトは薄く、  
> 「否定したまえ」と、自己抜きで語るテキストのほうが良いと思いました。

同感です。「霧の夜の風景に詠める歌」はテキストのままでも良いのではないかと思います。

>  
> つまり、「さうして自己を」のあとに断絶を置く。そのほうが、彼の声を直接聞くような気がする。意味の上ではすっきりはしないけれども、「自己を滅び行く肉体に求めても空しい」というようなニュアンスを感じます。

>  
>  
>> 北條の日記には東條と信仰について議論をしたと言うことは確か書かれていなかったと思いますが、この東條耿一の詩は、北條と信仰について議論をした詩ではないでしょうか？  
>> 渡辺立子さんが、北條民雄の亡くなった後東條がカトリックに帰依したと書いているので、そのように、思ってきましたけれど、北條民雄との間で、かなり議論をしていたのではないかと思います。

>  
> 私もそういう印象を持ちました。なぜなら、この詩は単独で発表されているのではなく、  
> 信仰をテーマとする詩とともに掲載されていますから。そうでなければ、北條がカトリック式で葬儀をしてくれと依頼するはずがないでしょう。

そう言えばそうですね、もともと信仰嫌いな北條がカトリックで葬儀をしてくれと言いついては、  
そうとう東條と話し合ったのですね。  
「否定し給へ 否定する事だ」は、かなり核心的な論点だと思います。

**わかったこと** 投稿者：北風 投稿日：2006年11月27日(月)11時13分38秒

[返信](#)・[引用](#) [編集済](#)

三つ子の魂百まで。

【追記】

小生には、このためにチェックしている時間はありませんが、キリシタン史を言うなら姉崎ではなく、海老沢有道あたりが基本文献だと思います。  
ついでに、海老沢も調べてくれませんか？新知見があれば、お互いに有益。

<http://111.teacup.com/mejoro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fcluster.web.infoseek.co.jp%2Ffjiken%2Findex.html>

**Re: わかったこと** 投稿者：田中 裕 投稿日：2006年11月27日(月)16時49分36秒

[返信](#)・[引用](#)

> 三つ子の魂百まで。

不遷怒、不貳過  
(怒りを遷さず、過ちをふたたびせず)

> 【追記】

> 小生には、このためにチェックしている時間はありませんが、キリシタン史を言うなら姉崎ではなく、海老沢有道あたりが基本文献だと思います。  
> ついでに、海老沢も調べてくれませんか？新知見があれば、お互いに有益。

それほど暇ではないのでお約束はできませんが、何か共通の関心事となりうるものがあればここに紹介しましょう。

<http://111.teacup.com/mejoro/bbs?M=JU&JUR=http%3A%2F%2Fblog.goo.ne.jp%2Ffeigenwille%2F>

**Re: わかったこと** 投稿者：北風 投稿日：2006年11月27日(月)20時00分52秒

[返信](#)・[引用](#)

>> 三つ子の魂百まで。

>  
> 不遷怒、不貳過  
> (怒りを遷さず、過ちをふたたびせず)

はははは。脚下照顧でございます。

>> 【追記】

>> 小生には、このためにチェックしている時間はありませんが、キリシタン史を言うなら姉崎ではなく、海老沢有道あたりが基本文献だと思います。  
>> ついでに、海老沢も調べてくれませんか？新知見があれば、お互いに有益。

>  
> それほど暇ではないのでお約束はできませんが、何か共通の関心事となりうるものがあれば